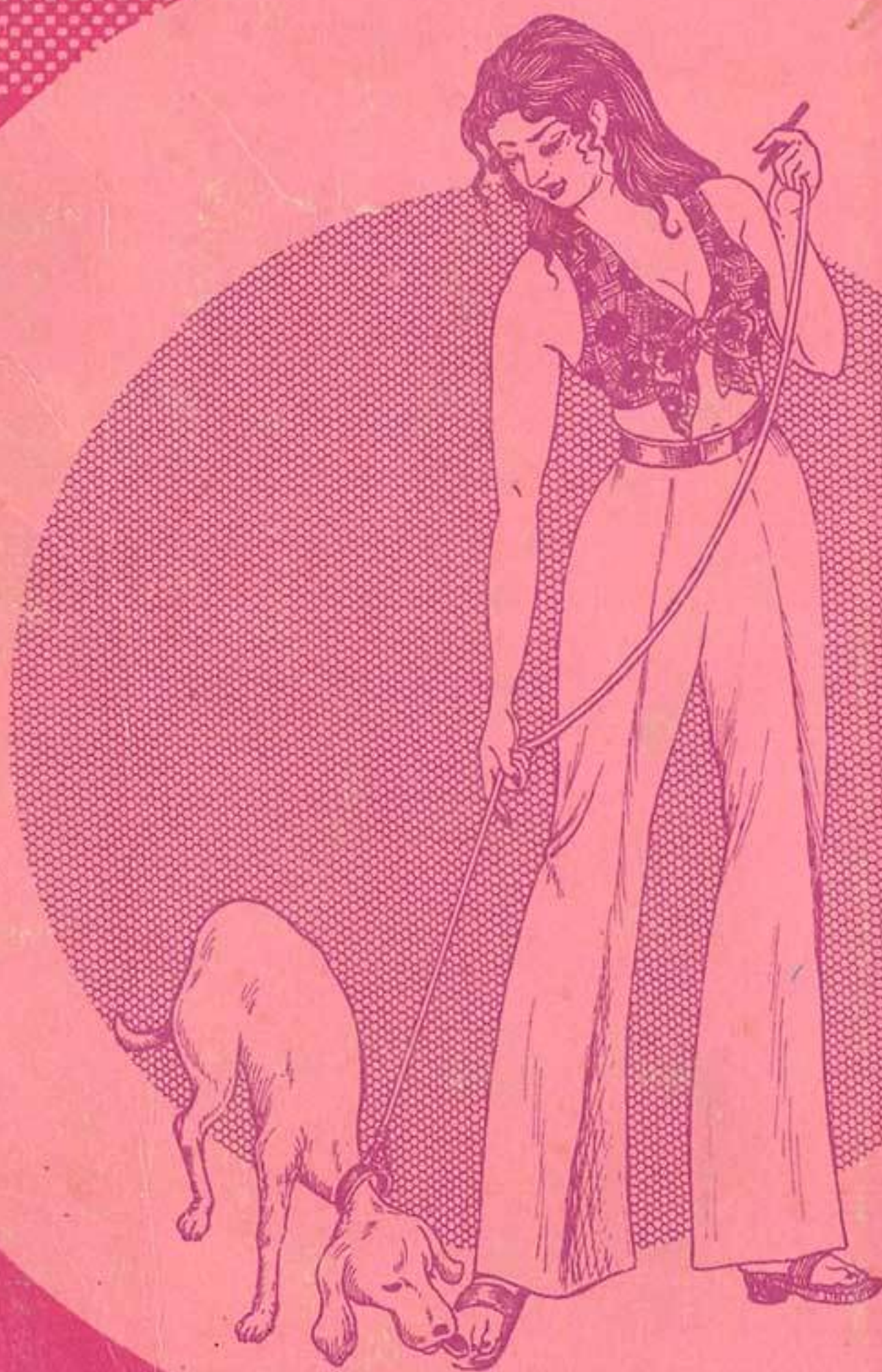


アラスカ譚奇

6



1972・6

※ 新しい風俗文献誌 ※

昭和四十七年五月二十日印刷 昭和四十七年六月一日発行 六月号（第二十六卷第号）毎月一回一日発行 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国書大印特別換水誌誌第二一〇号

奇譚クラブ 臨時増刊

女体緊縛写真集 定價一〇〇〇円(送50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と絨肌の明暗 前田真知子
厳しい縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ケイ
答打ちの態勢	関谷富佐子
鞭撻の痛苦	関谷富佐子
浣腸責の序曲	長井葉津子
亀甲縛りの美態	左近麻里子
麻縄と白肌の対照	中河恵子
陽を浴びた柔肌	左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の翳り	中河恵子
責め疲れの放心	梨花悠紀子
没我の心境	中河恵子
痛打の末の悦虐	関谷富佐子
沖縄美人の緊縛	座間富明子
剃玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路叢子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ケイ
海老責の狂態	川路叢子
ボリウムに挑戦	座間富明子
鞭打の下に挑	関谷富佐子
祭壇の人身御供	渡部好美子
稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影

編集部構成

両手挙げ棒責め	川路叢子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富佐子
ムチが痛い、許して	関谷富佐子
柱を挟んだ連縛	関谷富佐子
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	渡部好美子
二つ折りの女体	長井葉津子
猿ぐつわの哀飲	中河恵子
日本式縛りの白人	シラ・ケイ
マゾの女王に答	関谷富佐子
柱しばりの恥らう	金原加奈子
夫婦裸の艶姿	渡部好美子
長襦袢の艶姿	花坂道子
豊満ボインを誇る	愛川悦子
美女今縛られる	梨花悠紀子
受入態勢充分	関谷富佐子
折檻にも汚れず	前田真知子
責めてみた碧眼の女	佐々木真弓
日本式高小手縛	シラ・ケイ
猫の目のような女	絹川文代
足吊りの媚態	中河恵子
亀甲縛りの風景	中河恵子
M女二輪の花	渡部好美子
苛責に乱れた黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	前田真知子
愉悅のひととき	川路叢子
ハリツケ晒し	左近麻里子

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三

美しき吊り	長井葉津子
苦痛か悦楽か	前田真知子
一筋の縄の魔術	関谷富佐子
逆エビ縛りに入る	中河恵子
愛撫の責め	三浦純子
俯瞰撮影	渡部好美子
黒縄と白肌	前田真知子
身動きできぬ境地	中河恵子
ボリウムを縛る	座間富明子
浮上した女体	中河恵子
麗しき背面	中河恵子
汚辱の縄	金原加奈子
高手の手縛り	佐々木真弓
責めの陶酔	川路叢子
失神したマゾ女	関谷富佐子
前手縛り悶	関谷富佐子
柱の彼方の天国	中河恵子
荒縄の海老責	三浦純子
美と縛の女神	前田真知子
はげなれた猿轡	梨花悠紀子
可憐な置物	長井葉津子
酒の肴になる	佐々木真弓
妖蛇の洗礼	川路叢子
奔弄されるままに	前田真知子
海老縛りの妙味	川路叢子
柱につなかれた女	長井葉津子
痛さをこらえる異国	前田真知子
責の果の諦観	シラ・ケイ
痛打の一瞬	関谷富佐子
ホステス裸人生	佐々木真弓

女性モデル募集

選外佳作作品	佳作優秀作品	入選作品第五席	入選作品第四席	入選作品第三席	入選作品第二席	入選作品第一席
五	一	二	三	五	十	二十
千	萬	萬	萬	萬	萬	萬
円	円	円	円	円	円	円
10	15	10	5	3	1	1
篇	篇	篇	篇	篇	篇	篇

一、創刊以來二十数年、終始広く讀者の方々から原稿を募集し、幾多の傑作を以て誌上を飾つてまいりましたが、ここに再度皆様の力作を募り、八読む雑誌として、最近急速に発展してまいりました本誌をして、更に一層充実したものにしたと思ひます。

一、創刊以來、特異な風俗文獻誌を標榜して生長してまいりました本誌の前衛的な内容にふさわしい力作、読む雑誌として読者にアツピール出来る読みごたえのある新鮮で異色ある傑作を心からお待ちいたします。

一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば何でも結構ですが、サディズムに關連したもの、マソヒズムに關連したもの、始めとして、各種フェティッシュ一般、同性愛、腹嗜好、禪美、女相撲、女斗美、変装、生首、狂崇、妊婦嗜好、見世物性風俗、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、アブノーマル・テクニツクなど、古今東西を問わず特異風俗に關する題材を広く取り上げて下さい。

一、形式は小説、創作、読物などのフィクションで読切形式、連載形式いづれでも結構です。し、告白、体験、手記といったノンフィクショナル物でも結構です。更に見聞記、実見談やルポルタージュといったものから、論説、

意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。一、いづれも模倣や亜流を排して、あくまでも新分野の開拓に意欲的な野心作を求めております。この際我と思わん自信のお持ちの方は奮て御応募下さるようお待ち致します。

一、応募作品は編集部にて慎重銓衡の上、入選決定しました。入選作品は速かに筆者に通知致し、入選作品の著作権は当社に移行することを前にて御承知願います。未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。出処へ作者、書名などを明記して下さい。紙を一枚以上三百枚まで。数は四百字詰換算にて三十枚以上三百枚まで。三百枚以上に亘るときは締切日前にご照願します。入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載致します。区別するため第一頁に一般の原稿、読者原稿とい。連絡先氏名は必ずお書き願います。住所（連綴）氏名は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩らしたりなどは絶対致しません。原稿は原則として返戻は致しません。故、若しご入用でしたらコッピをとって置いて下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種郵便にて）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断り致します。

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先〓 大阪市住吉郵便局私書箱第41号

曉出版株式會社編集部宛

奇譚クラブ

昭和四十七年五月二十日印刷 昭和四十七年 六月一日発行 六月号（第二十六卷第六号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別取扱承認誌第二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



春愁のひとつき

深田 菊子



奇

譚

ク

ラ

ブ

六月号目次

△昭和四十七年▽

△第二十六卷Ⅱ第六号Ⅱ通刊第二九二号▽

巻頭緊縛美フォト

春愁のひとつき	深田菊子
猿ぐつわ二態	高村浩子
明眸皓齒の乙女	深田菊子
麻縄に彩られた白肌	前田真知子
黒髪と緊縛の交錯(二葉)	福井桃子
階段をのぼりつめて	深田菊子

本

文

フォト「赤い腰巻と白い足」△館典子▽	道場敏夫	(13)
四月号雑感『思っ様』の記	提崎昭人	(14)
懸賞入選告白「我がSM放浪の半生」	丸鬼怒佐渡	(22)
臨月妊婦の告白『出産予定日十二日前』	福井桃子	(30)
連載・S大河小説 パロディ「花と蛇」(七)	山光純	(42)
告白「和服の哀美を求めて」	山本五郎	(54)
日々に接するマゾの世界 “妄想と現実”	丸目忠	(60)
手紙から転がり出た女『ロープのない責め』	秋津新次郎	(64)
M女通信「浩子の近況のことなど」	高村浩子	(74)

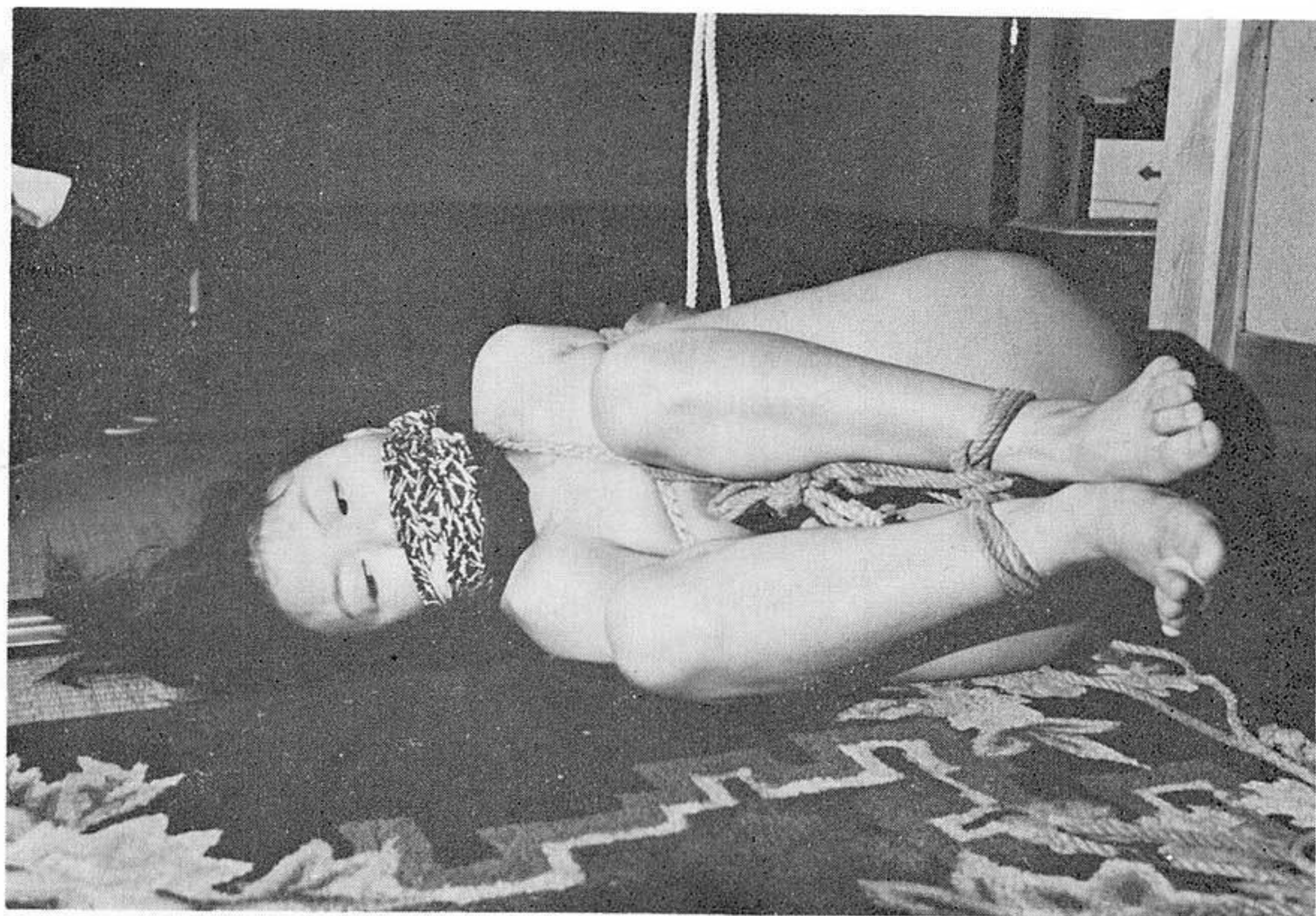
(234)

家内のフォトを誌上に見て……………早坂 信治
前田真知子さん僕のお嫁において……………飛鳥 二郎
「田原坂」の替歌『まるはだか』……………北川まりこ
みさ子のお便り “ 快楽の世界 ” ……………佐野みさ子
高村浩子様へ「僕のラブレター」……………久保 省一
サロン楽我記△第九十六回▽……………辻村 隆
フォト「やるせなき喘ぎ」……………江口 淑子
読者投稿 “ 私は誰でしょう ” ……………E・A子
福井桃子さんの「鼻責め」写真に期待……………齊藤香根雄
千鶴子よ跳べ……………長田 二郎
鈴木千鶴子さんのことetc……………提崎 昭人
短信往来 「柴利好さまへ」……………紀川 正信
“ “ 「四月号の二人の女性へ」……………一角 正人
“ “ 「北摂の石田様へ」……………小杉 千恵
編集部だより……………編 集 部
慶子の好きな拷問……………早木 夢二
福井桃子讃……………浜 松次郎
SMの世界に想う……………責苦与之助
イメージ画「白と黒と艶のバラード」……………黒田 縛
我が初撮影の記……………最上 卓也
五月号を読んで「私の読後感」……………霜月 一

連載小説／＼大噴火／＼（第四十五回）……………千葉 青鬼……………（84）
懸賞応募告白「盗飲」……………苅田 九四……………（92）
連載・時代S小説『紫蘭の門』(+)……………風流極道軒……………（98）
渡部好美さまへ「サディストが求める美」……………杉本 弘志……………（110）
二十六年の記憶「花の墓碑銘」……………中康 弘通……………（113）
SMカメラ・ハント……………
『快樂夢幻』△続・野村信子の巻△……………辻村 隆……………（116）
福井桃子さんに酔う「素晴らしい妊婦」……………高野 原美……………（146）
孤独者の告白「恥かしき愛」……………責苦与之助……………（149）
連載・アブ紳士行状記『M派交友録』(28)……………鬼山 絢策……………（152）
わが緊縛美感「四つのポイント」……………城 章夫……………（165）
小説「拷問クラブ」「復讐の序幕」……………鶴見 浩一……………（168）
シリーズⅡ6Ⅱ……………
釣針に掛かった僥倖「気の毒な娘」……………広島 一騎……………（184）
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△笠井奈保子の巻△……………
『春宵一刻値千金』……………塚本 鉄三……………（188）
絹ロープに／＼半年ぶりの縛り……………久留木 栄……………（214）
まつわる感傷……………
青春の陥穽△最終回△乱交パーティー……………芳野 眉美……………（222）
読者通信……………編集部選……………（258）
イメージギャラリ―Ⅱ「連座」志羽利也（45）・「無題」黒田縛（49）・
「女王蜂」岡たかし（63）・「檻の中の賛」岡たかし（102）・「プレイ開始」志羽利
川ナミオ（94）・「おいしいかえ」岡たかし（156）・「また後程にネ」春川ナミ
也（107）・「クレイン枷」三浦剛（172）・「高村浩子に想う」室井亜砂
路（177）・「視覚責め」須坂旭（181）・「カラス」岡たかし（218）
目次フォト「鑑賞用装飾物」……………左近麻里子

猿ぐつわ二態

高村浩子



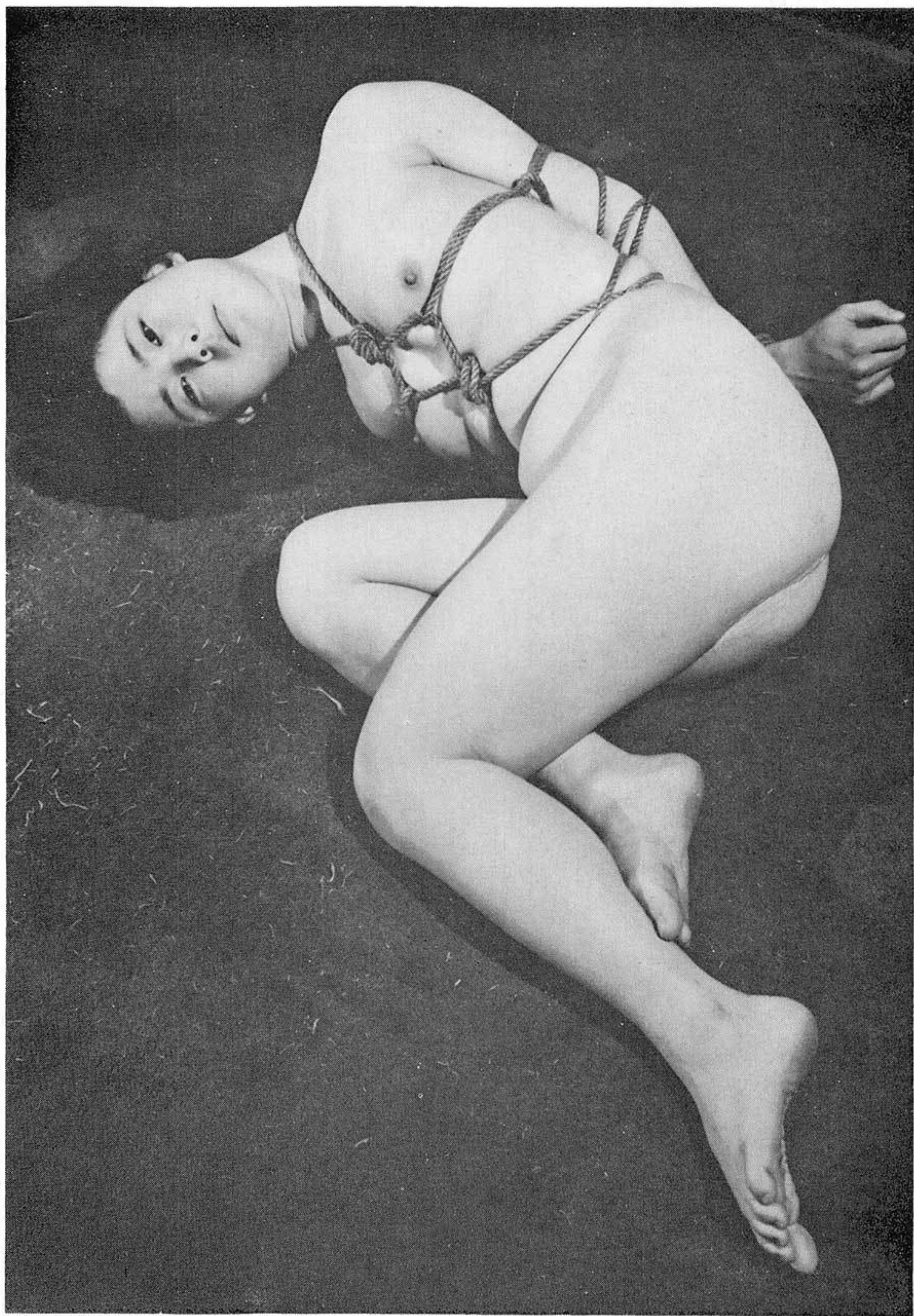
明眸皓齒の乙女

深田 菊子



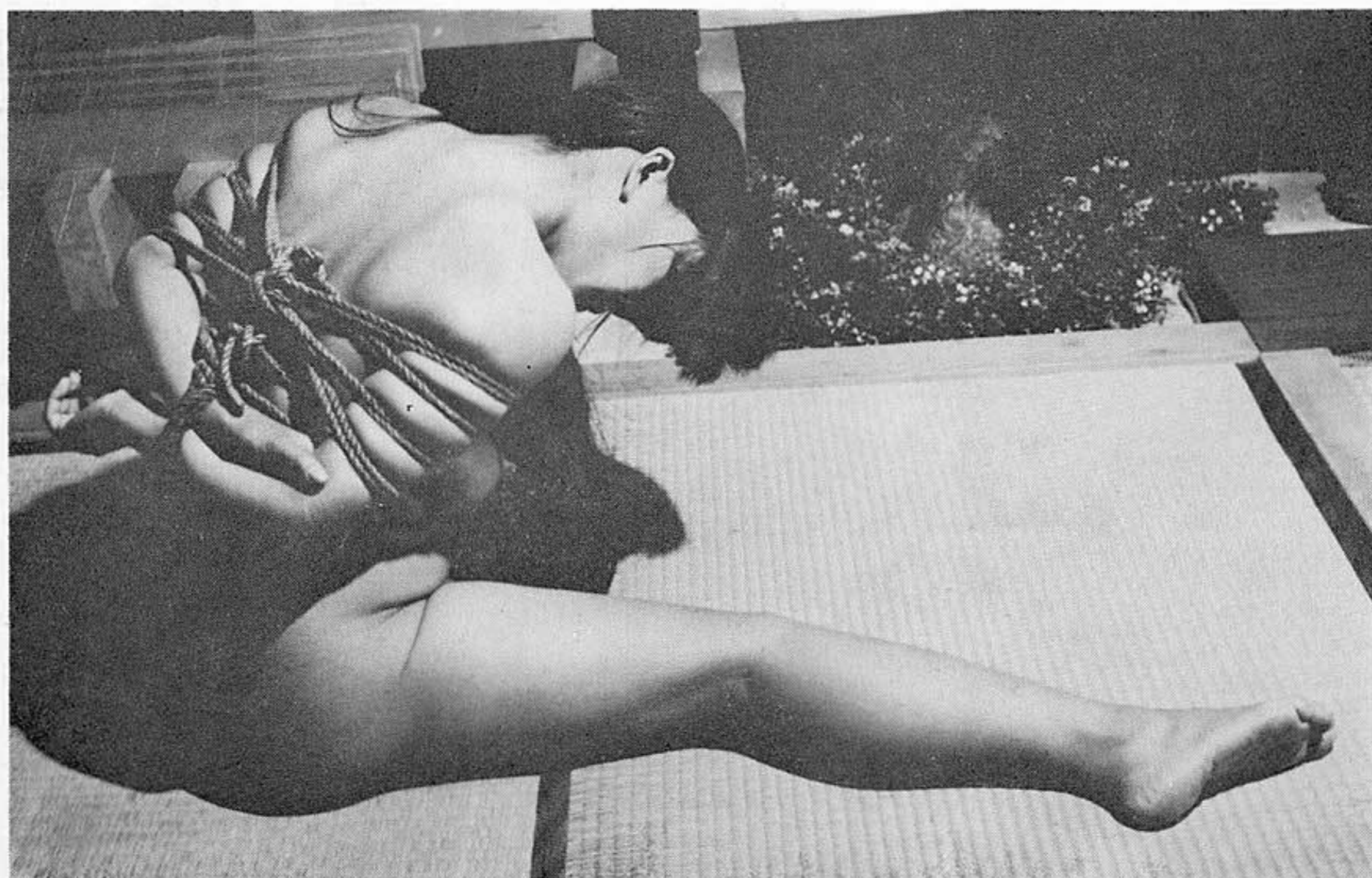
麻縄に彩られた白肌

前 田 真知子



黒髪と緊縛の交錯

福井桃子



階段をのぼりつめて

深 田 菊 子



奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年6月号

<第26巻第6号・通刊第292号>

赤い腰巻と白い足

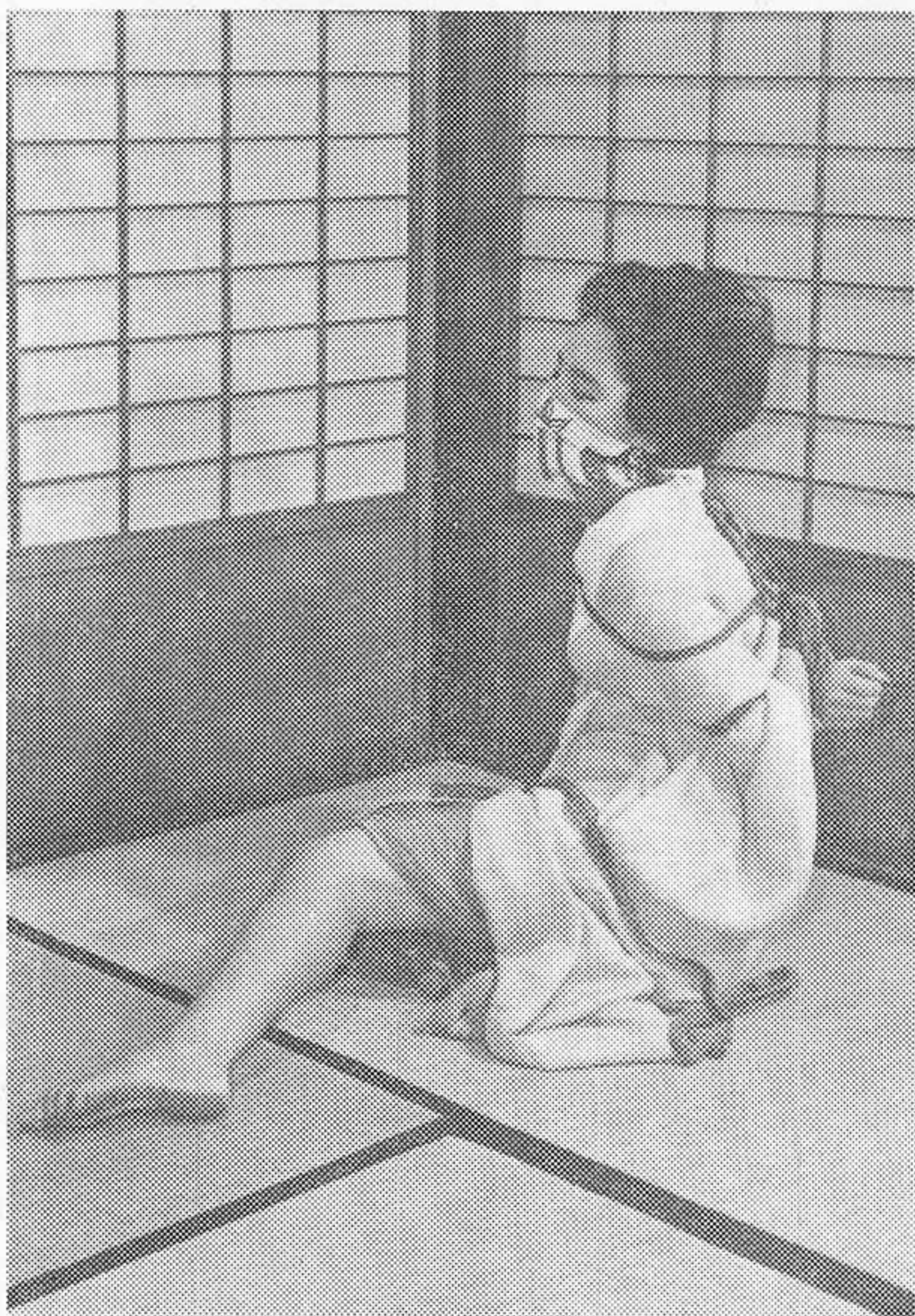
モデル・館

典子

白襟の長襦袢は、ピンクのなまめかしい色どりだが、その裾にこぼれる真紅の腰巻からは、真白い足がぐっと伸びて思わず生唾をのみ込むような目くらむ場面が展開した。茶と白と斑らの縄で高々と後手に縛られた乙女

は、その美貌を手拭でむっと息もつかせぬくらいきつく猿ぐつわを噛まされ、カラー写真で見せたい見事な色彩のコントラストが全面に押しだされている美しいフォトである。

(道場 敏夫・記)

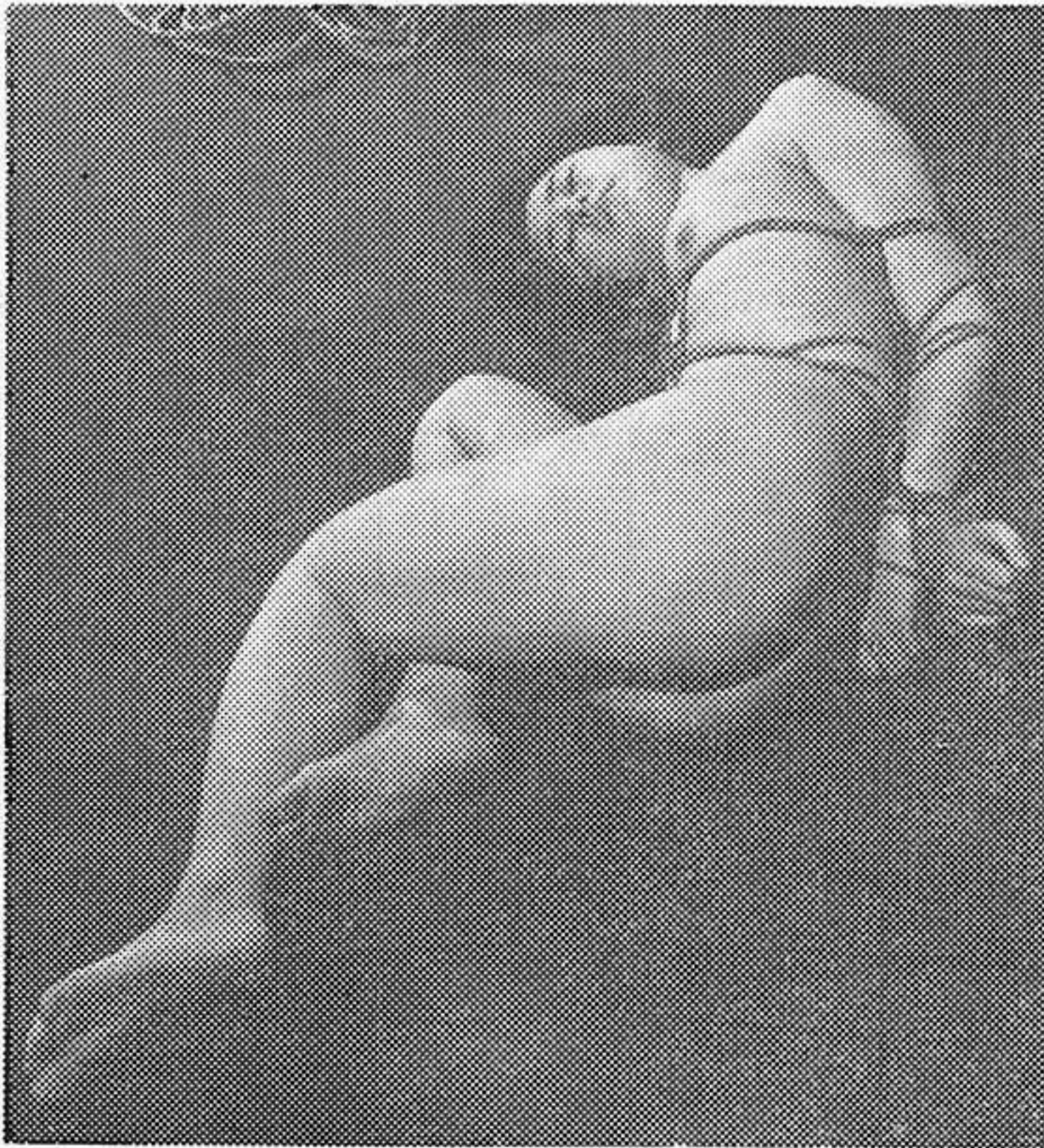


四月号 雑 感

「思 う 様」 の 記

提 崎 昭 人

写真 は 前田 真知子



毎月、二十五日が近づくとつれ、なんとはなしに胸ときめいて、指折り発行日を数えるというのが、ここ数年のならないところが、あいにくと今年の二月二十五日には、一週間ほど前から悪性の風邪を引いてしまって、ずっと寝込みっぱなし。勤めにも行けない。二十五日の勤め帰りには、なじみのおじさんのところで奇クを買ってきて、じっくり読み込むというのがキマリになっている。そうであらばこそ、寝床の中にいても二十五日であると思うと落ち着い

ていられない。熱があるのがシヤクである。明日でもいつでも、元気になったときでいいじゃないかという人があったら、それは愛読者の心理というものが分からない人である。一日でも早く読みたい。

少々の熱だったのでムリをして、とうとう起き出す。とはいっても、電車に乗って、なじみのおじさんの所へ行くことはできないので、近所の本屋へ行く。奇クを売っていることは前から知っていたが、店番が若い女店員でもあり、少々の顔なじみになっているとあっては、奇クという雑誌を買うのは、いささか、はばかられていた。しかし無理が通れば道理が引込むというのだろうか。相手に与える印象など無視して、目をつぶるような気持ちで買った。これで当分この本屋へはバツが悪くて来れそうもないと思いいながら、手にした奇クの手応えが、そんなことを忘れさせてくれるというものである。

○

予告によれば、奇クもいよいよ五月号から値上げとなるらしい。べつに、そのことを非難する気は毛頭ないし、逆に、値上げでよい内容になってくれれば、愛読者としても金の払いがあるというものである。このへんが、タクシー運賃値上げを始めとする公共料金の上昇たる値上げにユーウツになったのと違うところ。四月号は値上げ前のサービスというわけじゃないだろうが、風邪熱なんぞ吹っとばすような楽しさだ。もちろん全部が全部、スバライシイというのではなくて、創作部門のように——全部を、読んだのではないが——低調と思われるところもある。

巻頭一番、魅せられる。「緊縛フォト珠玉落穂抄」なる佐々木真弓の高手小手の姿である。たいへんに美しい。緊縛美学なるものがあるのなら、このフォトなどは、その基本として認識されるべきであろう。髪を乱し気味にして、諦念の顔。縄は、きつく体に喰い込み、菱縄をかけられた乳房はポクンと突き出ている。足の構えもなんとも云えず味わい深い。特に爪先立ちした足のピリツとしたラインなど。ここまでくれば芸術である。見とれてしまう。どなたが撮ったのか分からないけれども、こういう見事なものになると、モデル名ばかりではなく、カメラマンの名も併記すべきではないだろうか。緊縛の美を誇らかに

うたう意味でも……。この「緊縛フォト珠玉落穂抄」という詩的な名をつけられたページは三月号から登場したのだが、近い将来のグーリア復活を予想させる。

目次は、あとまわしにして、まず本文をパラパラと、めくってみる。写真の多いのが、やけに目につく。数年前には思いも及ばなかった壮観ぶり、こういうことは大歓迎。パッと見ただけで、あっ、これはあの人かなあなどと、名前が思い出されるのも親近感がある。もちろん新人の登場も嬉しい。こういう具合に思うと、奇クという雑誌は、たしかに商業雑誌ではあるけれども、その性格において同人雑誌という要素が濃い。仲間うちで楽しんでいよう感じがする。創刊号当時から、こうであったのかどうかは知らないけれども、こういう仲間うちの気安さみたいなものが、奇クの大きな魅力であるのかもしれない。これだけ種々様々な内容を持った雑誌というのは、同好者の熱い支持と投稿がなければ作れないものである。また、それだけの支持を集める歴史を、奇クは作ってきたのだ。

ここで他誌の悪口をいうのは、いささか仁義に、はずれている気がしないでもないが、少し喋らせていたきたい。雑誌「S」はあの「裏窓」廃刊のあとに出来たもので、例の数年前の悪書追放運動で追いこまれてしまった廃刊になっていた。それが当今のSMブー

ムを見るや否や復刊ということになり、最近復刊された。悪書追放運動におびえて廃刊し今度またSMブームで復刊したという、その時流におもねてばかりいる出版社の態度が気に入らない。

悪書追放運動当時は、奇クとしてもグラビア廃止を余儀なくされたなどして、苦しかった筈である。それをのりこえて、ここまでやって来た。それにくらべて「S」の編集部は態度というのは、いかにもヘッピー腰、SMに対する熱意を疑わざるをえない。単なる金儲けの手段としか考えていないのじゃあるまいか。その「S」の内容たるや、ほぼ小説だけ。しかも三流、四流の三文作家の書くつまらないSM作品が多くて、復刊二号あたりまでは、どうにかこうにか付き合ったが、とうとう音を上げて投げ出してしまった。読み終わったあとと殺伐たる思いにかられてしまう。時流にのっかうとして作った雑誌なんて、こんなものかと、その付け焼刃的な安直さにいささか軽蔑の念さえ感じられてならなかった。

こう思うと奇クは、よく頑張ったものだ。とにかく苦しい時期をのりこえて、現在のようないい内容を持つようになったのであるから。それには、あの苦しい最中に「花と蛇」という超目玉商品があったのが、さいわいしていたのかもしれない。それはそれとし

て、現在も喜んでばかりはいられない。ポルノ解禁近しなどと噂を信じて胸ときめかせていたら、三転してポルノ取締りとくる。いったい、どっちがホントなのかハッキリさせてくれともいいなくなるが、奇クなんぞは、要注意リストにのっけられてマークされていることはまちがいないし、用心が肝心。

○

本文をパラパラとめくったあと目次を見ると、というのが私の読み方である。もし投稿しているのならば、すぐさま目次を見て、オレのが載っていないだろうかと捜して、喜んだりガツカリすることもある。投稿者の心理としては、本を手にした当座は他のことなど眼中にはない。こんなことは私ばかりではなく他の人も同じだろうと思う。読者通信に投稿している人は、何よりも直ぐ読者通信欄を開くだろうし、あるいは自分への連絡が何かないかと捜す人もいるだろう。常連の方々なら、いざ知らず、時たま投稿する者にとっては、自分の原稿が採用されると嬉しいもので、自分の間は心が、はずむというものである。

四月号のハイライトは、私にとっては、なんととっても待望久しい前田真知子嬢の「京都慕情」であった。全然、期待していなかっただけに、その喜びは大きかったといわなければならぬ。

それはそれとして、すんでのところで大恥

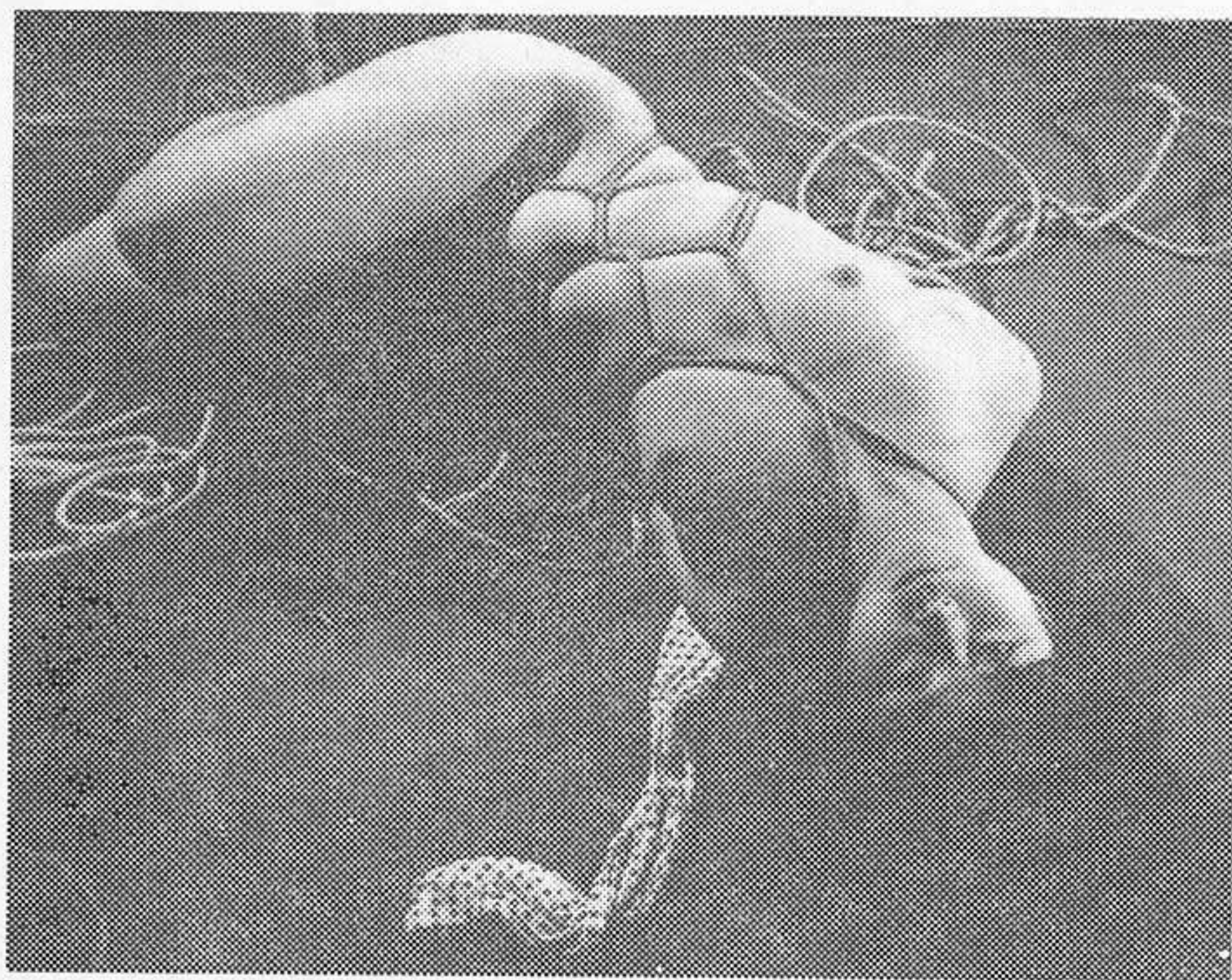
をかくところであった。実は、私は前田真知子論なるものをモノにして、もう大方できあがり、そろそろ仕上げをして送ろうかなどと思っていたら、あいにくの風邪。一週間ばかり予定が遅れて、奇クの発行日がやってきて「京都慕情」を読むことができたわけで、もし風邪を引かないでいて、すぐさま投稿していたら、とんでもないトンチンカンな前田真知子論を編集部が手にしていたわけで、そのことを思うと冷汗が出てくる。風邪を引いたのは天の助けと思わないわけには行かない。

三月号に、利根川五郎氏が慕情告白という切々たる想いをこめた文章を書いておられるけれど、かくいう私も前田真知子嬢の大ファンなのである。そうであらばこそ、音信のまったく途絶えた前田真知子嬢に懐旧の情をこめて、前田真知子論なる文章を書いていたのだった。彼女の年令も分かっているし、大学を卒業したあと、音信不通になっていることから、私の推測は、彼女は結婚したのだというところになった。結婚したとすれば、あのモデル志願は青春の記念を作る意味じゃなかったのかしらん。素直に結婚するのともつまらないし、小さなヴァンチュールのつもりじゃなかったのかしらん。などと私は考えた。結論として私は前田真知子嬢のマゾ性に疑問を持った。マゾではないように思えた。

トンチンカンもいいところで、ほとほと自

分の判断力に、いや気がさしてくる。何しろ前田真知子嬢は結婚してもいなかったし、彼女自身、マゾと自ら認めたのであるから。そういう彼女の告白を、この目で読んでおきながら、未だに信じられない気もするのである。彼女の知的な顔がマゾのイメージと合わない。マゾの顔なんてものがあるわけじゃないし、人は見かけによらないものというのが真実であるとしても、前田真知子は真性のマゾなるぞということをハッキリと承認することは、いまだに出来ないでいる。奇ク誌上で、こんな感じを抱かせられる女性には、めったにお目にかからないことであるし、それがまた前田真知子嬢の魅力で、ひととき高めてくれるのかもしれない。考えれば考えるほど、彼女が神秘的に見えてきて、女というものの奥深さを今さらながらに思い知らされる。

「京都慕情」を読んでみれば分かる通り、前田真知子嬢は、その顔つきに似て知性が、まさっている。分析力がある。無口のくせに相当に意地っぱりで、よく人に突っかかるタイプという気がする。そういう女性が私のそばにもいたことがあって、それでどうにかこうにか彼女の心持ちの、いくばくかを知る手掛かりみたいなのが得られた気がする。私の知っていた女性というのは、普段は無口でブスツとしていて、相手をじっと見つめる癖があり、知的で分析力過剰に悩んでいた。自分



自身の心理をすぐ分析してしまったからで、何か自分が固いヴェールで他人から隔離されたような妄想を感じていたようである。つまり、知的に潔癖であるが故に自分の殻にとじ

こもって、他人と親しくなれないと感じていたらしい。今ではその女性は結婚して母親になっていて、昔の悩みなんぞ、どこ吹く風と

性と同一視することはできないにしても、少しは重なる部分があるのじゃないかと思って、こんなことを書いた次第。もっとも、またまたトンチンカンな見方をしているかもしれない。自信がなくなった。

前田真知子嬢が、男の友人の家で、ちよいと見た奇クをキツカケにして、モデルに応募したというのは意外だった。前の告白では、そのへんが曖昧で、ずっと読んできたようにも感じられたので、モデル応募といえは奇クを長年愛読してきて、じつと我慢していたあげく、こらえきれなくなつて応募するのじゃないかと、漠然と考えてきたものだから、至極アッサリと前田真知子嬢が応募したのを知って予想外に感じたのである。

前田真知子嬢のフォト撮影は一月。「京都慕情」は、おそろく第一日目の撮影の終わったあ

と、宿舎で書いたものだろう。

今回は、どんなポーズのフォトがあるのか楽しみである。いずれ分譲フォトとして発売されたり、奇ク誌上で、おいしい発表されることになるのだろう。四月号の告白の合間に挿入された写真は、分譲フォトとして見覚えがあり、新しく撮影されたものではなくて、去年、撮影されたものらしい。それだけに新しい分の発表が、前田真知子ファンとしては待ち遠しいわけである。これから、どれくらいが分譲されるのか分からないけれど、なるべく多く発表してもらいたい。出来ることならば撮影された、すべてのフォトが欲しいところだが、それが許されないのが残念だ。ポルノ解禁の夢、シャボン玉の如く消えた今となつては、ただ警察をうらめしく思うばかりである。

それはさておき「京都慕情」のラストの告白は四月号の文章の中で、もっとも強く脳裡に灼きついたものとして、長く忘れることはないだろう。ちよいと引用させてもらう。

「私は自分では予想できないような行動に出してしまった。真正面からカメラを向けられているのに、足をすばめるどころか、もうこれ以上、ひろげられない程、両足を思いきり左右に開いていたのである。カメラのレンズが向けられていると、そう考えただけで、私は目くるめくルツボの中で狂ったように燃え上

がっていた。

私の裸身はクラゲのように柔らかくなり、麻縄で、どのように厳しく縛られても、痛さを感じるところか、身体のすみずみまでも力メラに晒す喜びに打ちふるえていた”

マゾ女の本懐ここにありといったところ。しかも彼女の知性が、めったやたらナルシズムにおちいるのを防いでいて、清潔感があって好ましい。

願わくば、前田真知子嬢自身の告白ばかりではなく、撮影した人のルポも知りたいものである。なぜなら彼女の告白からでは、撮影の様子や、どんなものであったのか全然、見当がつかない。彼女の態度やなんかでも、やはり撮る側からでは受け取り方が違う点もあるだろうし、ぜひ知りたい。撮影されたのがどなたかは知らないが、あるいは、塚本鉄三氏ではないかと思われる。ルポを書いて撮影の雰囲気や克明に伝えて欲しいものである。

○

毎度おなじみの辻村隆氏のカメラハントはすごい。私はカメラハントの熱心な読者とは申しかねる。その号によって、どんな女性が出てくるか分からないし、つまらないこともあるからだ。それに、なんとしても、辻村氏一流のタッチに、どうにもついて行けないと感じることも、しばしばあるからだ。私自身の好みとしては、もう一人のルポライター塚

本鉄三氏の方が合う。さほど強烈なことを書くわけではないので、安心して読んでいられる。責めなどは強烈ではなくても、女性のきれいな緊縛姿が美しく撮られていれば、それでもう満足なのである。以前に、どなたかが述べておられたように、辻村氏と塚本氏の相違は、辻村氏は責める方に重点があり、塚本氏は撮る方に重点があるということで、塚本氏の方が性に合うのである。

辻村氏のは、時によるとエゲツナさが過ぎて、ウンザリさせられることもある。私は生来、気の弱い方で特殊なケースかもしれないが、読み終わったあとフラフラしてしまう。かといって氏のカメラハントを嫌悪するかといえば、もちろん、そんなことはないのです。最初に本文をパラパラめくったとき見るのはカメラハントのページで、今月はどんな女性が登場するかと、興味津々なのである。

私にこんな感じをおこさせる人間が、もう一人いる。国籍も違えば、表現手段も違うがアメリカの映画監督のロバート・フロストである。偶然というのか、フロストのアニマルシリーズの粹を集めた「アニマル百年史」を見た感想を辻村氏が「サロン楽我記」で述べておられる。たいへんに面白かったと、ほめておられるが、さもありなんと思う。

フロストのアニマル・シリーズ第一作「アニマル」を見たときには、すさまじいという

のか嫌悪的というのか、そのあくどい表現に吐き気みたいなものを感じさせられて、もう金輪際、見るものか、という気になったのに「続・アニマル」が上映されたのを知ると、コワイもの見たさで出かけて行ったものである。そして、また「続・アニマル」のドギツサに閉口したのに、「ラヴ・キャンプ」にのこのこと出かけて行ったのだから、始末が悪い。「新・アニマル」のときには、とうとう丸の内までロード・ショーを見に出かけて行ってしまった。もちろん、その時でも、いささか閉口した気分になって、口なおしに純愛映画をやっている映画館に、入ったものである。

四月号に登場の喜多知子さんの場合、かなりドギツイ印象を受け、ロバート・フロストを思い出した。緊張の余り、不意の生理を見た喜多さんを責めるのだから、その緊縛道に打ち込む辻村氏の姿たるや、ソーレツの一語につきる。生理などを見たら、私だったら気分が悪くなるか卒倒するかは受け合いだが、辻村氏にかかっては、なんの障害ともなっていない様子。この辻村氏の激しさが有効に働くと、まことに、興味深い読み物ができあがる。ハントされる女性の人間性の追求みたいなものが、しつこく語られるのが興味を引くのである。ただ単にハントするばかりではなく、相手が何故ハントされたいのかを知ろう

と追求する。相手の女性が一面識もなかっただけに、そういう好奇心が強く働くのも道理があるのだろう。四月号においても、喜多知子さんの秘密を徐々に解明して行くあたり、まるで推理小説を読むような心持ちでタメになった。こう見ると、エンエンと続いてきたカメラハントは、一連の興味ある女性像を提供してくれていて、実に貴重な資料であることを再確認しないわけには行かない。

カメラハントを読んでいてロバート・フロストを直ぐ思い出す私としては、いつかこのカメラハントを英訳してフロストに送ったらどんなものかな、などと考えている。フロストが大いに興味を示すことは確実だろうし、行く行くは、辻村隆とロバート・フロストの国際対談なんかができないものかと、想像をめぐらすこともある。これは私の夢。

○
その他で目立つのは、なんといってもマダムこと福井桃子の告白である。妊娠しているのだからビックリした。しかも、かなり大きなお腹で、分譲フォートの広告によれば妊娠八カ月という。いつの間、そんなことになったのやら。加賀騒動以来、父親捜しが、はやっているから、犯人は誰だなどとヤボな詮索をしたくなる。いっぺんに大きくなっていくお腹を見て、あわてて三月号や二月号を開いたものの、構図の関係上、お腹のハッキリ

うつっているフォートというのは、ごく少ないなんて、これじゃ分らなかったのも無理はないと一安心。私の目だけがフシ穴だったというわけじゃなさそうだ。

マダムは、こんなことをいうと失礼かもしれないが、どちらかというと下腹部は垂れ気味であつたので、それこそ編集部の人のように、地腹じゃないかななどと、からかうこともできた。とにかく屈託のない女性であるらしく、読んでいて少々吹き出してしまう。どうもこれを読んでみると、編集部のどなたか、いささかショックを受けられた様子。そりゃ地腹だろうなどと、のん気にかまえていて、一カ月半ぶりに出かけたなら太鼓腹になっていたとあっては、いい気持のしようがない。その気持、わかるつもり。

○
早産の傾向があるらしいので、これを書いている三月のはじめには出産されているかもしれない。無事であってくれればいいと、祈っている。私は、あんまりラージ・ポンポン趣味はないので、どちらかといえば早く普通の格好になってもらいたい、思うものである。妊娠姿を好む人もいるが、私などには何やらテレくさくて、たとえば道で妊婦に出会うと、あわてて目をそらしてしまう。いつぞやは、電車の中で双児の妊婦に出会い、二人とも同じようなお腹をしているので、双児というのは妊娠する時間も同じなのかと、その

お腹を交互に見較べたのが、妊婦をマジマジと見つめた唯一の思い出である。大きなお腹は、いわば証拠物件をつきつけられたようでおもはゆい。マダムのお腹もまぶしかった。

○
その他、高村浩子さんを責めたロマン派生氏の「ピッコロ狂詩曲」とか、相変わらず清楚な姿を見せる那津子嬢を緊縛した城章夫氏の「白い露台」とか、じつに奇クならではの盛り沢山の告白やルポが誌上を飾っているがこのへんは割愛させてもらう。ひとつひとつにつき、何やかやといいたくなることがあるくらい、内容が豊富で心強い。

○
創作をみてみよう。この方は、いささか淋しい気がしないでもない。読み切りの創作が一つもなくて（鶴見浩一氏のは読み切りになっているが、シリーズ形式である）連載物ばかり。案外と今の奇クの盲点というと、このあたりにあるのかもしれない。試みに三月号や二月号を調べてみても創作部門は貧しい。いい作品が投稿されないというのが、なんといっても、こんな状態になった原因であろうけれども、何せフィーリング時代で、小説なんて、めんどくさいものを書くより、フォートを撮ってルポを書く方が、当世の好みに合っているのかもしれない。読む方としても同じで、小説などを読んでより、フォートつきのルポの方が、事実であるだけに、より直

接的に訴えるものを持っていると判断してしまふ。

だいたい奇クを読んでも、作者の名前を覚えることは、めったにない。それがルポライターともなると、辻村隆、塚本鉄三、かつての山本一章とハッキリと記憶しているのだから不思議である。作者の名前として憶えているのは、団鬼六ぐらいのもの。あとは目次を見て調べなくてはいけない。SM小説というのは、作者の名前よりも内容の方が肝心であるらしい。題材は、ごく限られているし、そうなる描写の質で勝負となるのだから、作者としても、つらからう。そのあげくが名前も憶えられないとあっては、作者は踏んだり蹴ったりだが、この種の作品は無名であることが、いいのかもしれない。

作者の名前を憶えていないのに反し、モデルの名前は、やけにハッキリと憶えている。一生懸命、書いて、あげくのはては名前も憶えられずにいるのにくらべると、女性の方は一日か二日、脱いだけで、かくもハッキリと記憶にきざみこまれるのを知ると、女っていうのは、トクだと思わないわけには行かない。たとえば美木乃々子という名前を見ただけで、数年前の撮影の雰囲気がい出されて時の流れを感じる次第。彼女は良家の子女だったな。今頃は、もう結婚していて、子供もいるだろうな。などと、なつかしくなる。同

じ時期に発表された小説などを讀んだとしても、なつかしく当時を回想するなんていうことはありえない。エッそんな小説あったのか、と首をかしげるのがセキの山であろう。というわけで、奇クでは創作は、なくてはならないし、しかも印象に残らないというワリの悪い地位にいると思う。こんなことを感じるのは私だけで、ほかの方々は違ふかもしれないので断定はできないが……。

四月号の創作では、失礼ながら、花影叢氏の「幻想帝国」と千葉青鬼氏の「大噴火」は讀まなかった。

四月号ばかりではなく、ずっと以前から、そうなのであって、それなら以前讀んだときに、つまらなかったから讀むのを、やめたのかという、そうでもなく、以前にも全然、讀んだことがない。以前「花と蛇」の連載中は、創作といえば「花と蛇」だけで、その他の創作は、めったに讀まなかったもので、そのクセが未だについているとしかいいようがない。

というわけで当然「パロディ花と蛇」を讀む段取りになる筈だが、これまた、讀んでいない。三月号の分も讀んでいない。まったくこのあたりの心理は我ながら複雑怪奇、どうなっているのか、他人に聞きたいくらいである。団鬼六氏が「花と蛇」を書き疲れたのに平行して、私も読み疲れてしまったのだろう

か。「花と蛇」のことを考えるのがオックウになったらしい。

「パロディ花と蛇」については、単発的に掲載された時から知っているし、独特のタッチがあつて、たいへんに面白く讀ませていただいた。それが、こんな具合に私自身の妙ちきりんな気持のおかげで、それこそ一目パツとみるだけで、素通りしなくてはならなかったことは残念である。ともかくにも、パロディとはいいいながら、あの傑作の後を継ぐというのは、むずかしいことで、これからが大変だろうと無責任に思っている。パロディのもりで気軽に書いていたら、今度は連載という重責を果たさなくてはならなくなり、作者の山光純氏の心中を察すると、いささか気が重くなる感じがする。無事に書き続けてほしい。

とつづきのヒロインに桂子を選んだというのも、作者の苦慮の策という気がしてならない。「花と蛇」において、もっとも活躍しなかったのは桂子であり、それだけに桂子のイメージができあがっておらず、自由気ままに書ける。ところが静子夫人や京子などについては、そういうわけには行かない。読者それぞれが各ヒロインのイメージを作りあげているとあっては、書く方も慎重にならざるを得ないだろうし、勇気を要することでもある。「パロディ花と蛇」の真価が問われるのは、

静子夫人を始めとする、なじみのヒロインが現われてきたときではないのだろうか。読んでもいなくて、あれこれいうのも、おこがましいが、そんな気がする。

というようにことで、四月号中の創作として読んだのは「紫蘭の門」と「果てしなき虐待」である。風流極道軒氏の「紫蘭の門」はどうも登場人物が多すぎて整理しかねているようだ。いろいろなヒロインが登場すれば、それだけ誌面がにぎやかになることは分かっているけれども、やはりヒロインの中のヒロインのような、柱になる登場人物は作っておくべきだろう。でないと、印象散漫、どこが頭やらシッポやら分からない、のっぺら坊な作品になってしまうのではないか。初めの方の印象で、私は、てっきり豊香あたりが中心人物ではないかと思っていたのだが、そうでもなさそうだ。

一つ一つの場面を、もっといねいに、じっくりと描いて行くべきだろう。映画監督でも若い時は一人のヒロインを、じっくり追求して濃厚なエロチシズムを感じさせたのに、年をとると、そういうものか、やたら沢山の女を裸にして、かえってエロチシズを拡散させるという。風流極道軒氏が、そうでなければよいと思う。三月号で、千登世を、なんと十五人の男で一晩に、かわるがわる犯させたが、こう多人数では、単なる行為にしか思え

ず、凌辱とも責めとも感じられない。十七才の処女をモノにするというゾクゾクするような快感など全然なかった。輪姦も悪くはないが、やはり限度があり節度が必要だろう。読者の印象を悪くしては損である。

一人で犯すよりは二人で犯す方が刺激的だが、だからといって、一人で犯すより十五人で犯す方が刺激的だとはいえないのが、人間の感覚である。書いている側としては次第に飽き足りなくなつて、人数がエスカレートしてくるのだろうが、このへんは読者に与える効果を計算してほしい。私は多人数による責めの場合、三人が限度だと思う。執筆する以上、次第にエスカレートしてくる感覚を引き締めるためにも、自分でカセを設けておくことが作家精神を保つためにも必要であろう。余りエラそうなことをいえる柄でもないが、昨今の小説の無味乾燥さを知るにつけ、一種の危機感のようなものを感じているので、あえていわせていただいた。

もっとも今の社会全般にわたって、そうだといえるのかもしれない。風俗雑誌ばかりではなく、中間雑誌のセックス描写も同様なもので、どれを読んでも小説^{ロマ}ンを読んでいるという気はしない。まるで報告書のような冷たさでこんな印象は私だけではないらしい。性情報の解放はセックスを即物的に見ることを教えすぎたようだ。年寄りの繰り言じみてきて我

ながらイヤな感じだが、要するに面白い小説がないという不満のあらわれと思って勘弁してほしい。

鶴見浩一氏の「拷問シリーズ」第四作「果てしなき虐待」にも感心しなかった。少なくとも私の趣味とは全然、合わない。もともと第一作からして、ヒロインが気狂いになるくらい拷問するような内容で、とてもついていけないと感じたものだ。こういう小説、なんというのか、拷問のための拷問という感じで終始する小説は、いくらかロマンチストの私の性に合わない。作者としても責めのアイデアを、いろいろと考えているらしく、今回も歯を責めるといふ新アイデアを見せる。私にしても歯の神経をとったこと、もう十本以上にもなるのだから、この道では、かなりのベテランだが、それだけに生々しすぎて、いい気持ちで読んではいられない。

こういうわけで私の氣にいらぬ創作には、めぐり逢えなかった。私の好みはヘンクツなのかもしれないが、最近の創作はカタすぎて情緒というものが感じられない。私の小説感からしても、読んだあと殺伐とした気分におそわれるようでは、その小説は失敗作なのである。

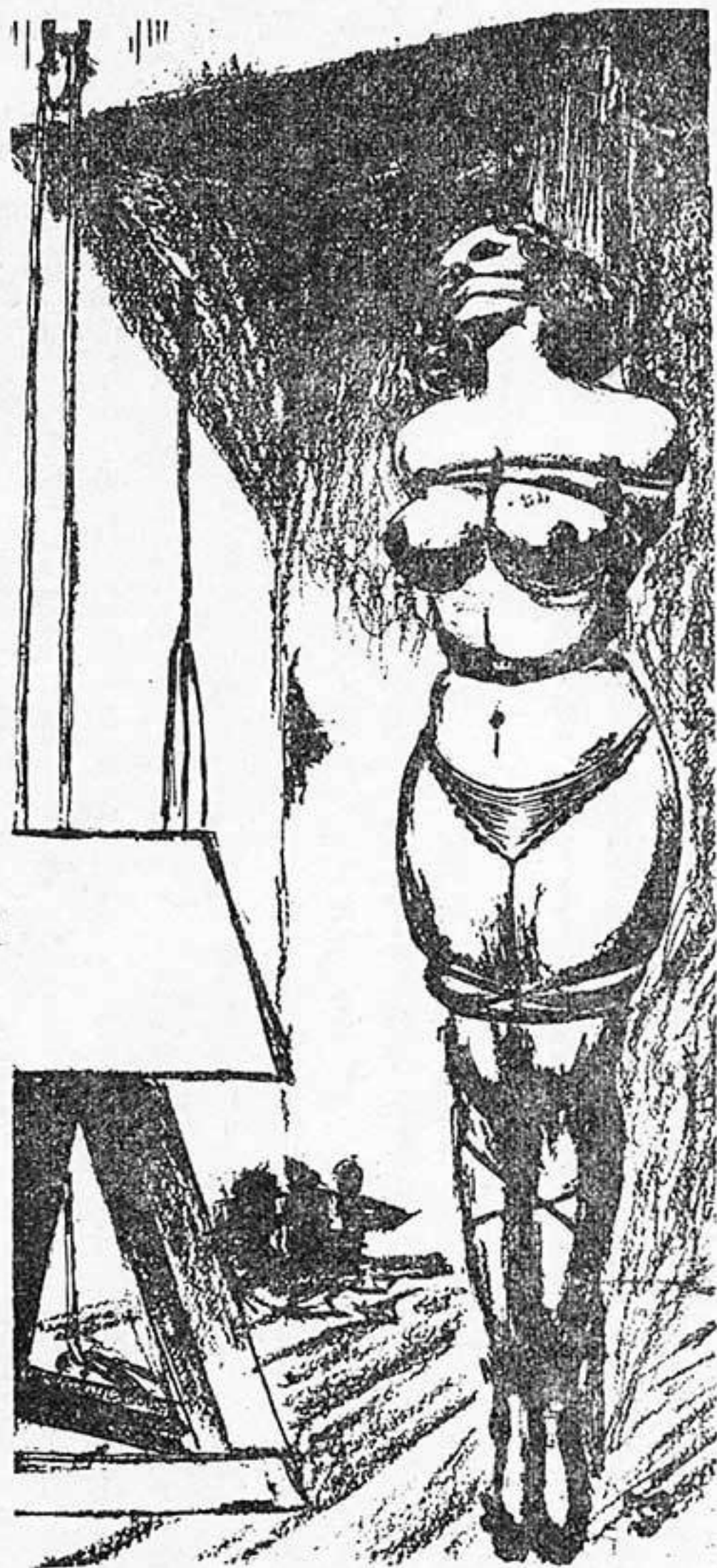
創作の低調をルポ・告白の好調でおぎなつて、全体としてみて、充実した印象を与えるのが現在の奇クの姿であるといっている。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

我がSM放浪の半生

(文と絵)

丸 鬼 怒 佐 渡



私には生来S性があつたようだが、年を経るにつれてその傾向が強くなり、同時にM性もおびる等変質して来たように思われる。しかし三十代になった現在でも、自分がS性をもつということが、人間として当然の事なのか、それとも、そういう人間は何千人に一人しかないという特殊なことで、かつ、それがたして悪に属することなのか、或はセックス行為と同じく皆がそういう性質をもっているが、タブーとして語られないだけのことなのか、「性倒錯の世界」でいうが如く、それは人生を個性的に生きる一形体にすぎないのか？ これらの疑問が解明されぬまま、自分を苦しみ悩ますことがある。

そういうとき、辻村氏のように縛りの人生がおくれたら、どんなにすばらしいことだろうか。団鬼六氏の如く、公然とSM評論家として通用し、SM論をぶち、SM小説を書き或はSM画をえがくことを自分の天職とできたら、何をなげうってもいいと思うことさえあり、晴雨翁の生涯は実にすばらしいものに見える。

しかし、妻子もあり、ある程度、世間体を気にする私には、SMの世界に徹したくても体質がそうはさせてくれない。こういう自己

規制状態の中にいるからこそ、身の破滅から守られているともいえるかも知れないが、私が、もし自分の衝動どおりに実行することができたら、晴雨翁以上のことだってできるかも知れない等と、自分のかけがえのない人生を、そういう欲求にじりじりしながら、どうしようもないやりきれなさ、時間のなさに、腹立たしくさえ思うときがある。

私のこのような性質が遺伝によるのか、それとも環境のせいなのか、以下の拙文、及びあなたが自身の歴史から考えあわせて、お教え願いたいと思う。即ち、悪というべき性質なのか、それとも人間として当然の事なのか、おうかがいしたい。

こういう議論めいたことはさておいて、私が疑問に悩みながらも心強く思っているのは、こういう性質をもった仲間が、世間には、かなりいるらしいという予想が成り立つからである。ある新聞（数年前、ローズ秋山を取材した記事）には、そういう性質をもった人は千人に一人とあったが、K・K誌からも分かるように、会社重役の方とか医師等インテリ層にも、かかる性質をもつ方が、おられるようだし、古本屋で入手した大分、昔のKK誌に挿入し忘れられていた書類。青木

順子、ローズ秋山夫妻、忍耐子、関五郎のSM劇を見に来ている人々。日本拷問刑罰史や徳川女刑罰史を見に来ている夫婦づれや、最近のSM雑誌の店頭での売れ行きを見ても、かなりの方が、こういうことに関心をもっておられるように思われ、私の推測では、百人に一人、少なくとも五百人に一人はいるのではないかと思われる。

私見では、この性質は、高橋鉄氏もいった如く、遺伝によるものであり、環境によって洗練されるのではないかと考える。

私は農村に生まれた。小・中・高等学校とも優等で、大学にも、いった。

小学校に入学する以前に、よく隣の女の子とお医者ごっこをして、ビー玉をねじ込んだり、麦ワラをさし込んだりしたものだし、小学校頃は、蛙を捕えて、尻から麦ワラで息を吹き込んで、ふくらませる遊びもやったが、これは、たいていの腕白連中がやったことだし、お医者ごっこにしても、好奇心のめざめのようなもので、SMとは直接、関係がないと思う。

小学校四年頃、叔父が映画につれていくてくれた。エンタツ等が出る「東海道……」という題の時代劇で、その中に、美しい旅の女

性二人が、一人の男に後手に縛られ、豆絞の猿轡を顔いっぱいにかまされ、洞窟の中にころがされて放置される場面があったが、猿轡をされてもがく女の姿に、強烈な印象を受けた。また、ターザン映画で縛られた女が出てくると、ぞくぞくしたし、そういう場面の絵や写真を好んで集めた。

その頃、田舎へもドサ廻り芝居がやって来たが、戦後間もないころでストリップまがいのショーもあり、その中に、デルタパットとブラジャーだけの女が、鎖つきの手錠で、蜘蛛男に鞭うたれて、のたうつ場面があった。小学生の自分には、これは、かなりのショックだったのだろう。未だに覚えている。

中学校に入ってから、小説や映画でSM場面に出くわすと何回も読みかえた。「少年」とか「少年画報」中で、姫が魔王におそわれ、拷問されたり、中には爪と指の間に細い尖った竹をさし込まれる場面もあった。

この時期に自虐というか、自分のアノスを手弄んだ覚えがある。シャープペンシルを、さし込み、それにポールズアンドバットを、がんにがらめに縛りつけたロープを連結したり、又、一メートル近くもある細く柔らかい電気のコードを、さし込んだりしていたとき

に、快感を伴った初めてのエジャキュレーションを経験した。アノススへの自虐願望は今も強くある。

また山に薪を取りにいったりしたとき、あの雑草の繁みに、女が縛られて猿轡をされていないかとか、自分の恋人が林の中の木に縛りつけられている図を想像したりもした。けれども、その恋人を自分が縛ってやろうとか他の女に猿轡をかましてころがしてやろう等ということは全然、考えなかった。

高校に入ってからのはがり勉になった。もともと勝気だったから、人におくれをとることは我慢ならなかった。しかし、目的のある程度、達したら、やはり思春期というか、様々の妄想が生まれた。

この時期に山田風太郎の「妖異金瓶梅」を読んだ。絵が入っていて、閻魔大王のような男が見守る前で、裸であおむけになった女の腹の上に蠟燭が立てられているのとか、文だけだが、雪に素裸で埋められて尻だけ雪上へ出し、蠟燭がさし込まれていた等の個所は、何回も頁を、めくった。この本は小遣で買ったのだが、家人に見つかるといけないと思って、本屋の女店員に頼んで安く買い戻してもらった。

図書館でヨーロッパ裏面史を借り、その中に、フランス革命時、敵対者をとらえて拷問する時、喉の奥深くガーゼを詰め込んで水をたらし込み、息が出来にくくした等の拷問法を読んだが、この本は先生にみつかった「このような、くだらない本は読むな」といわれた。私は、何も拷問法だけが、のっているわけではないのにと、釈然としなかった。

フックスの「風俗の歴史」は、すばらしかった。マグダレナのマリア、マリーアントワネットの乳房の写真、魔女裁判の拷問の図、浣腸の図、等々、これらは新版が出版され、今はこの全巻を、そろえた。

絵が得意だったので、妄想が、責絵をかくことに進んだ。その絵の多くは女が女を責める場面が多く、これが自分の好みに合った。乳房が責めの対象になった。婦人の秘部は、その時点では想像の域を出なかったからだ。全裸で縛り上げられ、猿轡をされた女の乳房に、他の女がナイフをグサリと、つき刺して血がしたたっている図を、よくかいた。それと同時に、いろいろ想像しながらエジャキュレーションに導いたものだ。勉強の間にフトやることなので、確かに能率面からみたら落ちたかも知れないが、それが成績に大きく影

響したとは思わない。

女が女を責めるとか、自分の肛門を自分で責めるということは、誰からも教わったものでないところからすると、やはり、これらの根源は自分自身の血の中にあるものであるうし、今でもそれらを一番好ましく感じることを考えれば、これはまさしく先天的なものであるらしく、辻村氏が、いみじくもいわれた「業^{ごう}」のような気がしてならない。

そういう状態であったある日、行きつけの本屋で「裏窓」という本を見つけた時は衝撃だった。翌日それを小遣いで買い、家に持ち帰って個室に入り、ひそかに読んだ。その中には「囚われの女三題」というのがあり、米国女性の縛られた写真と絵で、一つは猿轡をされた後手あぐら縛りの女の写真。二つは地下室の柱に縛りつけられた女。三つはX字型の礫台に二人の女に縛りつけられている女の絵であった。その他にも白人女性の縛り写真が数枚あった。十日位その本を保存していたが、家人に見つかり、まずいと思って焼いてしまった。その後、その本を古本屋で集め今、三冊、同じものがある。その後は、受験勉強でそれどころではなかったが、大学に入

ってホッとすると、またたく間に一年が過ぎた。

当時は前述の「裏窓」の他に「一〇〇万人のよる」が、よく売れたらしく、後者は、殆どの学生が愛読していたようで、いわば性教育誌だった。

ある日、県人の卒業者送別パーティがありその帰り、いとも小さな本屋に白い表紙の雑誌を、ちらと見かけた。それが、今まで見たこともない雑誌だったので、直観的に何か特殊なものと思った。県人と一緒だったので、その日は、そのまま帰ったが、翌日さっそく試してみた。そして、確かに今まで無意識に待ち望んでいた、まさにその本が、手に入っていたのだ。それが、KK誌との始めての出会いであった。

丁度、当時は大塚啓子さんが始めてモデルになった頃で、乳房を荒縄で、がんじがらめに縛られた写真が、六ページ位にわたって掲載されていた。次には特集号が出た。その表紙は白でなく、フランス風の娘がミンクのシヨールで裸体をつつんでいる色のついた絵で誰がかいておられるのか未だに続いている、あのエキゾチックな絵は印象的であった。

KK誌の他に「風俗奇譚」とか「風俗クラ

ブ」とか、いろいろ亜流のものもあり、「裏窓」には「ある美容体操」といって、外人女性に縛られ、いじめられている写真が、いくコマも載せられていて、後の雑誌にもくりかえし、この写真が載せられた。その一つに、米国の有名なストリップパーが、よく責めの対象にされていた。ストールに、おおむけにされ、四脚に両手両足を縛られ、精一杯、開脚縛りにされ、猿轡をされる図(説明では舌をはさんで、せり出しているとあった)があった。ブラジャー、デルタパットはつけているが、その股間が大写しにされていたので、発禁処分をおそれてか、前もってこのページだけ破られていたが、後日、そのページのある分を苦勞して手に入れた。

この頃、先輩から、その他に「風俗草紙」というのがあることを教えられたが、その時は既に廃刊になっていたと見えて、その雑誌に会ったのは学校を卒業後であった。

大塚さんは、どちらかというとドロクサイタイプで、本当に責めが好きでやっているように思えなかった。少し、ふとりすぎているようだが、乳房は日本人としては大きい方だった。しかし彼女は非常に長期にわたって誌面を飾った。次に出た絹川文代さんは当初

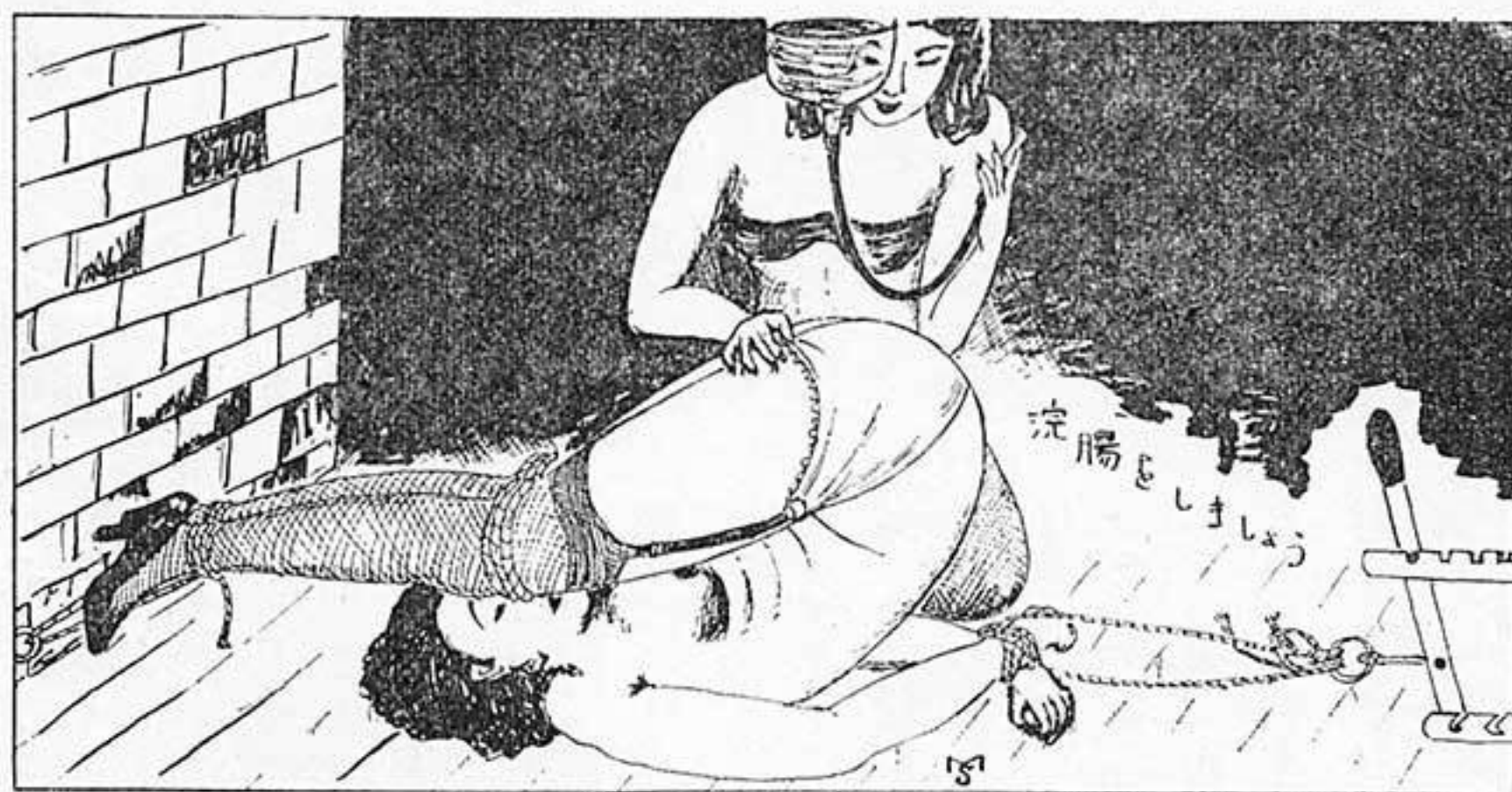
日本人ばなれした顔のように思えたが、どうも感情が出ないところがあった。縛られてニコニコしているところなんか、まるで駄目といえる。ウェストも大きかった。愛川嬢の乳房のボリュームは逸品だったが、鈍感な感じでもう一つ、物足りなかった。関知恵子さんとか花坂道子さんは、一つ前の段階で出た人のようで、その時にはグラビアページを飾ることはなかったが、四馬孝氏、杉原虹児氏の絵が誌面を飾り、乳房の非常に大きな桜井葉子さんが、よく出ていた。

その頃は写真ページがあり、グラビアのいいのがあれば必ず買った。今、読んでみるとマニア諸氏の貴重な文章に出くわすが、当時は文には目をくれなかったもので、辻村氏のハント記事も記憶がないが、「ヤプー」が、かなり長く続いていたのを覚えている。

KK誌が何冊もたまり、隠して置くところに困るようになったので、主要な絵や写真を切り抜いて、あとは他の雑誌とともに処分してしまった。その頃は、KK誌を読むことがいけないことと思っていたのだろう。しかし暇ができると、切りぬいた絵を見ながら、いろいろと想像をたくましくしては、よくエジヤキュレイトした。しかし終わってしまえば

悔恨となって自分をしめつけ、そういうときには、切り抜いた絵さえ、何の欲求をも起こさせず結局、これさえも焼いてしまい、大部分の絵が灰になってしまった。今にして思えば惜しいことをしたと思うが、その時は純真だったのだろう。

チャタレイ夫人の恋人等も読んだ。わいせつときめつけられた十一カ所だけは英文になっていてそこだけを辞書を片手に読みふけた。たしかにセックス描写としては迫真だが、誰もが当然やっていることだし、KK誌ほどは自分を満足させてはくれなかった。今ふりかえってみても、あれ位なことに目くじらをたてて裁判をするのは、狂気じみているとしか思えない。しかし日本人は、こういう文で刺激を受けるのだそう。外書主体の本屋のおじさんから聞いた。



たのだが、日本ではSM的なものは余り好まれず、セックス描写のものが、よく売れるとのことだ。

チャタレイも大学卒業の折に売ってしまった。だから学生時代に集めたもので残っているのは、ごく少数といえる。しかし市販されていた、この種の本は殆ど目をとおし、どの雑誌には、どういう写真や絵がのっているかということは大体、つかんでいたつもりだった。

しかし、これがために学習がおろそかになったとは思っていない。人間が陰気になったとも思っていない。今でも晴雨氏の如く、お人好しのところが多分にあり、金もうけが下手だと自認している。

当時は、クラブ活動も積極的にやったし、女性グループとも交流した。しかし自分が下宿でKK誌を読むということと、これらの女性と交わることとは全く別の世界のこと

だった。おかしいといえばおかしいことだがこれ等の女性を、こういう風に縛ったら等と想像したことは全くなかった。

就職をした当初の一年は、夢中の内に過ぎた。独身寮住いにも慣れ、ようやく仕事にも自信らしいものが出来て、ほっとしたとき、またもや古本屋通いが始まった。といっても軟派本だけを求めていた訳ではない。購入するのは専門書、研究書が大半を占めており、軟派本は主役にはならなかった。しかし、それを探して歩く楽しみは、専門書以上であった。中都市だった関係か、古本屋も少なかったが、小さな店に思わぬ拾いものが、ころがっていることがあった。

梨花さんが亀甲しぼりにされる連続写真にぶつかったのも、この頃だった。一年間、買わないでいるうちに、そういうのが出ていたのだが、知らなかったのだ。この亀甲縛りは結婚当初によくプレイとして用いたものだ。しかしこれは、見た目よりも緊縛度が強く、乳房の強調縛りの点で難点があると思う。「風俗草紙」を初めて手に入れたのも、この町であったが、そうこうするうちに本店勤務になった。

はじめて住む大都会。仕事第一だった。人から干渉されない自由さ。今までの楽しさが大規模にあるという期待。それだけに、滅びに至る大きな穴がポツカリあいているおそれも感じたものであった。

土曜日は街を何時間も歩いて、映画館や古本屋、その他の穴場をみつけないでいった。

地獄の炎、蒙古の嵐、白日夢、吸血鬼、リバイバルの肉体の門、等々。怪奇、惨酷映画を手当たり次第に見た。これは晴雨氏の芝居を見にいったのと変わりないと思う。

青木順子、ローズ秋山夫妻、関五郎忍耐子のサドショーも、のがさず見た。中でもローズ秋山夫妻のショーは今も強烈な印象として残っている。このショーも、有名になるにつれて官憲の目を意識したところが出て来たが当初のショーは、すさまじいばかりのものだった。小沢昭一氏も、このショーについてふれているが、彼が乳房の大きい忍耐子の責め場を見られたかどうか。

映画の「蒙古の嵐」の中で、全裸の両手、大の字で吊り上げられた女がアタエクバーグに乳房を鞭うたれる（この映画は一月十七日の深夜TVで放映された）場面「吸血鬼」の中では、せむし男に誘拐されて来て地下室

に鎖でつながれ、おびえている女達が手術台にのせられて、吸血鬼の医師に血をぬかれる場面。殺された女が蠟人形と一緒にならべられる場面。「髑髏峠の血闘」では、中世紀の拷問で、両手首を縛られた女が齒車がまわるにつれて、だんだんと床から離れて天井からぶら下がり、次には床に穴がパツクリ開いてそこには、串ざしの串が待ちかまえている場面。X字型の磔台に女が、はりつけられ、背中を、はだけられ鞭うたれる場面。その他、TVでも、北条キク子や、鳴門秘帖や半七捕物帖での扇千景の被縛図は、見ごたえがあると思った。

この頃は、縛り、拷問等の場面が無数にあった。洋画でもエルケ・ソマーが股間縛りにされる場面があり、「欲望の沼」「裸の鏡」等でも、こういう場面があった。

「日本拷問刑罰史」は、その頃に封切られたのだが、後にも先にも、これほどショッキングな映画を見たことはない。このあと石井監督、辻村氏の緊縛指導によるものも、かなり出た。また、谷ナオミ、三浦環などの縛りピンク映画も出たが、二番煎じにすぎない。「……刑罰史」を演じた人々は必死だったろうと思う。確かあの当時、ひたいに十字架の

焼ごてをあてられ、実際にそうやって焼跡が額に残る事故があったと聞いている。

大の字磔で、肛門から口へ槍が串刺しにされる城主。三角木馬責めにされて両足首に重りをつながれ、股から一筋の血を流しながら苦しむ女。海中の逆磔にされ、海水を飲んで苦しむ女。後手縛りで吊り上げられ、たたき責めに合う男女。駿河問いのシーンは当時の恐るべき光景を髣髴させるもので、感激させられたものだった。名和統一氏の本からとったものだそうだが、ピンク映画の中では最高のできではなからうか。小森白監督になるものには、その後も「極秘女拷問」のように、谷ナオミの逆さ吊りで水責め等あり、その他にも、いろいろ惨酷場面が見られたが、刑罰史ほど見ごたえのあるものはなかったし、これから、おそらく出て来ないと思われる。

結局この映画は十回ぐらい見た。あるときは場末の映画館で隠しカメラにおさめたこともあったが、満足なものとは二、三枚だった。しかしネガをみれば、やきつけに手間をかければ出ると思われるものもあり、その中に駿河問いシーンもある。はっきり出ているのは女が乳房もあらわに、そろばん責めにされ、石だたき責めに遭うシーン。女が十字架には

りつけられ、心臓に、矢を射込まれるシーンだ。

ある時は天王寺で、ある時は十三で、それを見たが、女性がこの映画を見に来たのを見かけたことは極く稀で、封切当時、あべの名画座で、たった一人、男につれられた女性が来ていた。中は男性で超満員だった。この人はおそらくKK愛読者だと思う。「白日夢」の場合は、三三五五、夫婦連れがあった。

その後、石井監督の惨酷ものに、女性になり来ているのには時代が感じられた。「徳川女刑罰史」のときでも、夫婦連れや若いアベックがいたし、子供をつれた買ひもの帰らしい奥さんがいたのには驚いた。

今年二月に「日本拷問刑罰史」の再映を見た時には、女性客も、当然の如く見に来ていた。女性も、だんだん自分の興味に遠慮しなくなってきたのが最近の著しい傾向と思う。

実は「日本拷問刑罰史」で、そろばん責めにされて美しい悲鳴をあげていた女性が、現在活躍中の梓英子であることは、最近ある筋から知った。又、当時の芸名が森美紗であることは、KK誌によって知った。梓が、その美しい乳房に油汗をにじませ、もだえ苦しむシーンは素晴しかったが、今思い起こせば、

彼女が「ザ・ガードマン」で、のこぎり責めにかけられるシーンも、感情がのっけていて成程と思われる。

ストリップには、さすが女性客は見あたらないが、忍耐子さんが大きくゆらゆらする乳房をふるわせて逆さ吊り責めされるシーンは素晴らしいと思う。こういう寸劇がある時は劇場は超満員になっているが、これらの人々は責めに関心がある方々と思われる。

ローズ秋山夫妻のショーにも、よく行ったが、そこでは同じ人に、よく出くわしたものだ。これらの方々もKK誌愛読者だと思う。

結婚して、もう十年。妻の飼育も佳境に入ろうとしている。妻は、もともとノーマルな人間だが、今では、鞭、しぼり等、殆どの責めを受けつける。燃えた時には、妻からそれを要求してくることがあるようになった。

結婚後も本の買いあさりは続いた。土、日曜日には必ず本屋をあさった。SM本のある所は自分の憩いの場所となった。五年ぐらい前だと、まだこれ等の本は安く手に入った。一日に五冊を買い込むことが、よくあり、本屋の主人とも懇意になった。当時は、それだけ買っても千円前後だった。みかん箱は一つ

から、いつしか三つ五つと増え、十コになるうとしている。主義としては、その雑誌中の一つでも気に入った絵や文があれば、必ず買うということだった。しかし今のうちに良悪まぜた色々のSM物が出ると、余りに値が高いため、つい手を出しそびれてしまう。

今の傾向は、金持だけの趣味にしようとするものがあり、ベラボウな金額を要求するSM品やグラビアがある。しかもそれ等は、KK誌の足もとに及ばぬ下等な企画が多い。例えば、モデルはSMを本当に愛好しているものでなく、金をもらうからプレイするというような、サマにならぬものが多い。SM感情などは一向に解せぬ人間が、儲け主義に走っての企画にちがいない。私見としては、SMはあくまで大衆のものでなくてはならぬと思っているから、単なる金もうけ主義には反撥せざるを得ない。こんな調子だと、今、雨後の筍の如く出ている出版物の多くは、一年を待たずして廃刊せざるを得ない事態となると必定と思う。

古本にしても五年程前までは、一冊二百円内外で買えたものが、ここ二、三年前から千円が千五百円に値上がりした。これは悪書追放とかの、のろしがあがって、しばらくして

からの傾向であった。追放運動が却って価値を高めたといえる。今はポルノブームとかでグラビアの乱売があつて、やや値下がり傾向にあるようだ。

今、思い出されるのは「裏窓」が悪書追放のやり玉にあがつた時のことである。府下の書店は、この本を取扱わないことに決定し、当時KK誌とともに愛読していたので、これを手に入れるのに京都まで出かけたことである。それは最終刊の二―三カ月前の「裏窓」で、それには、猿轡をされた外人女性が、柱を背に、床に膝立てのかたちで後手、及び両足首を柱に連続され悶えている図があつた。

もう一つは、伊藤晴雨氏の非売図書二冊を買いそびれたことである。四十五年正月、道頓堀の本屋に、氏の「責めの話」と「……」

(書名を忘れた)が、三千円と四千円で売りに出されていた。その日は金がなかったので帰り、城市郎氏の発禁本から、この「責めの話」は発禁版でなく、二度目の改正発行のものであることが分かった。一方には体験談。例えば妊婦のつるし、雪責め、その他、責めの種類が羅列されてあつた。もう一方の本には、責め対象の女をものにする方法等が出ていた。買おうと思ひながら、初版本でないこ

とや、高価である等からの迷ひもあつて、金の工面のついた時には既になく、ついに買いそびれてしまった。この本屋の、おかみの話では、これより先、それについていた写真集が四千円で売れたとのことだったが、おそらく雪責めの場面等が入っていたのではないかと思われる。雪責めの数葉は他の雑誌にも複製印刷されたものを手に入れたし、妊婦の逆吊りにしても、白表紙時代のKK誌に出たのもっているが、今にして思えば、おいしいことをしたと思う。

この他、一見それと分かるシミのついた本加筆された本。唄の会の名前を、はさんだ本下絵用に、うつし途中の本。等々がありこれ等に何か親しみを覚えたものであつた。

SM用具も集めている。五〇cc浣腸器、腸カテーテル、エネマ、五〇〇ccイルリ、一〇〇cc及び二〇〇cc浣腸器。これ等の多くは出張時に東京で買った。マルゴのものは、いいものがあるが、値が張る。A上野店は安い物がある。二〇〇cc浣腸器は大阪T商会で、わけてもらった。A商会へもよくいった。A上野店には、神戸のF氏、徳島のF氏等も、よく来られるとのこと、この方々は、ものすごい皮革製品、例えば、口に押し込む部分の

非常に大きな猿轡。くもの巣のように、はりめぐらされたゴムひもつきの皮製品を注文されるそう。これらの皮革製品や責め具を使って責められる女性は相当のマゾだと思う。こうなると、責める方も責められる方も死にものぐるいに違ひない。これらの方々の光景を想像するとき、何か「業^{ごう}」というものを感ずると同時に、これらの人々に、ぜひ一度お会いしてみたいとも思う昨今である。

――〇――

「追記」Ⅱ「性倒錯の世界」の谷山、渡部さんと辻村氏のプレイはすばらしく、延べ五回見せてもらった。あの映画は、この部分だけが光っており、他は非常に退屈だ。真実以上に迫力のあるものがないという感じがした。外国物の「女体責め地獄」も、かなり、よかった。両手を別々につられ、宙に浮いた全裸美人に容赦なく鞭の雨を降らす場面が迫真だった。府下に、一万円出せばプレイ用女性を紹介してくれる組織があるそうであるが、多額の金を出してまで女を責めようとは思われない。SMは、あくまで趣味であり、もし、その点をよく理解したM女性があれば、前記の責め具を持って馳せ参じようと思う。どなたか、おられません。――(以上)――

臨 月 妊 婦 の 告 白

出 産 予 定 日 十 二 日 前

福 井 桃 子

今日は三月十日。

空はあくまでも青く澄みきって、遠くの山々が手にとるように近くに見えています。風はまだまだ耳を切るように冷たいですね。

私もいよいよ出産予定日に、あと十何日という、ほんとうに文字通り臨月になってしまいい、これが最後ですよーってお電話して、来ていただきましたの。わざわざ足を運んでいただきまして何とも申し訳ありません。

さすがの私も、もうあっちゃこっちゃへ、うろろ外出することも出来ませんので、今では神妙に入院する日を待っていますの。

ええ、おかげさまで、身体の方は、この通り至極、元気ですよ。お医者さまは、もうこれ以上、お腹は大きくならない——とおっしゃっていたけど、自分ではこの前お逢いした九カ月のときよりは一段と大きくなったという気がしますのよ。そりゃ、外観は目に見えて大きくなったって感じはないかもしれないけど、自分のお腹である私にとっては、こう、なんて言いますかしら、うんと内味が充実したって感じなの。

どう？ ちょっと触ってごらんさい。ホラ堅いでしょ。赤ちゃんの足が突っぱってるんだっていうの。まあ、そんなことないでし

よ。赤ちゃんって、袋の中に入ってるんじゃないの。産まれるときは、その袋が破れて羊水が出るっていうのと違うんですか。

大分、お腹が下へ垂れてきたでしょう。お臍がこんなに蛙腹になってしまっって、自分でも、もういつ産まれてもいいって、思ってますのよ。そうなの、準備もすべて出来上がって今はもう、産まれるのを待つばかり。

だから、今日この大きなお腹を写してもらうのも最後だと思うわ。明日か明後日には、入院するつもりなの。私は健康だし、胎児の発育も順調だから、そうあわてなくてもいいって言われるんだけど、なにしろ一人住居でしょ。部屋も予約してあけてもらってるし、それに、家政婦の方も頼んでるので、あなたに来てもらったら、それをきっかけに、入院することにしてんの。

ええ、そりゃ、あんたが撮りたいって言われるんだったら、電話下さりゃ、私しゃ、こんな大きなお腹をかかえてでもよけりゃ、出かけてゆきますよ。でも、臨月腹の女と一緒に歩くのは、余りミットモ良クナイでしょ。もう、なんといっても、マタニティ・ドレスだけじゃ、かくしきれませんものね。

それはそうと、加賀まりこの赤ちゃんは死



んでしまったんですってね。彼女の予定日は四月だから、私よりは一カ月もおそいののに、きつと早産ですわね。私なんかと違って、写真を見ていても痩せていて痛々しいくらい。赤ちゃんを産むのは、ちょっと無理だったんじゃないかしら。

私しゃこの通り、志摩の荒海できたえただ

けあって、叩いても蹴ってもビクともしない身体ですからね。きつと丈夫な赤ちゃんが産まれると思うわ。そうなんですのよ。ツワリなんて全然、知らないの。なんでもかんでももりもり食べてしまいうんですから、お腹の赤ちゃんもびっくりしてるでしょうね。

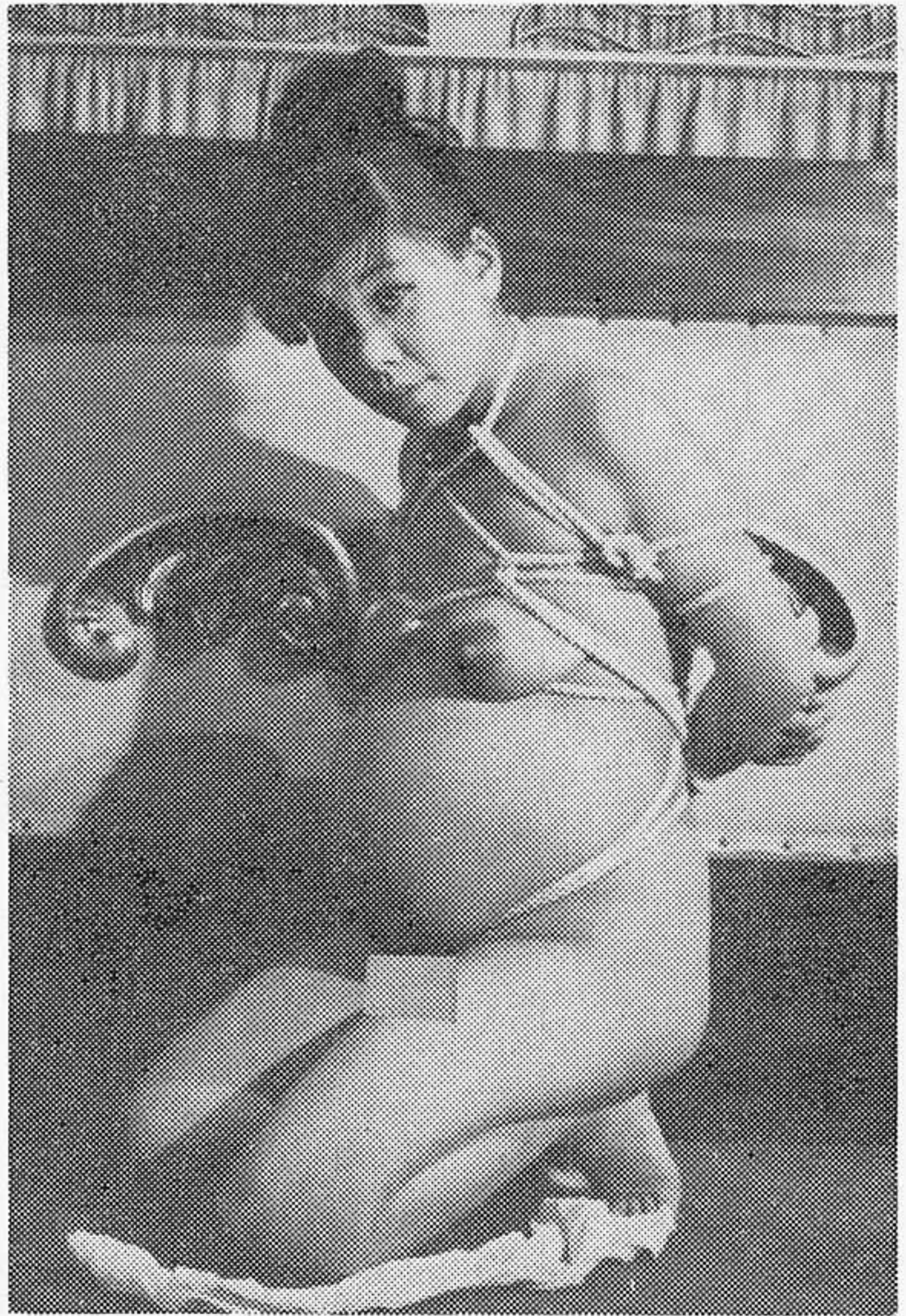
さて、今日は最後の日ですから、いつもの

ようにヌード、それ臨月腹の女——っていう題の写真をお撮りになるんでしょう。いい記念になりますわ。八カ月、九カ月も撮っていただきましたわね。こんなだったたら、最初の子供を孕んだときも、月毎に撮っていたきたかったわ。

この前は、あんたが写された、いろいろの方の妊娠姿の写真をを見せていただいて、大変興味があったわ。私って、同性のあんな写真を見るのが大好きなの。自分の写真はってですか。そりゃ大ありよ。見たいワ。だから私の写真も少し大きく伸ばして頂戴できないかしら。ぜひ、お願いしますわ。記念に置いておこうと思うの。そうですの。縛らないで、お風呂に入っているところや鏡の前で髪をすいてるところなど、どうですかしら？

ああ、髪っていいますとね、私、こんなに黒髪を長くしてるでしょ。この前、地下鉄の電車の中で、変な男に会ったのよ。

お昼だったんで、電車の中はそんなに混んでなかったのね。私のすぐうしろに中年の男が、ぴったりと寄り添うように立っているんじゃないの。私は別に気にしてなかったんだけど、そのうち、私の髪の毛のところで、ちりちりと髪の毛のすれあう音がするのよ。変だと



思って顔をねじって横目で見ると、驚くじゃないの。その男がね、私の髪の毛を自分の指でいじってるのよ。そのとき、私は思わず、「なにしてんのよ」って、大きな声を出したのよ。そしたら、その男は無言で、すごすごと私から離れて、バツの悪るそうな顔で次に停まった駅で電車を降りたわ。

髪フェチっていうんですか。そんな話をきいてはいましたが、自分が身近かに会ったのは始めてですわ。思わず大きな声を出してしまっ、私、一寸気の毒みたいな気がしたんだけど。もしかしたら、奇クの読者の方ではなかったかと思ったりしてネ。最初から、そう断わって下さったら、一時間でも二時間で

も好きなだけ触らせてあげたのに。

とって、私、別に髪を弄ばれるのって、好きだってわけじゃないのよ。髪をこんなに伸ばしてるのは好きだけでもね。でも、もしファンの方の中で、長い黒髪が好きだって方がおられたら、一緒にプレイしてみたいって気がするわ。どんなにして、この私の髪の毛を愛撫するかと思うと、ぞくぞくしてくるわよ。あんたは、髪の毛が邪魔になって、縛りにくいなんて言って、時々アップにしなさい——って言ったりするけどもね。

あら？ 長い髪にも興味があるの。だったら、折角こんなに長く伸ばしてるんだから、何か責めに使って下さったらいいのに。

私のお喋りも、これで奇クに載せてもらったの、何回になるかしら。たしか、初めたのが、十一月号でしたわね。あの頃は自分でもなにを喋ったのか、さっぱりわかりませんでしたけど、あれからずっと続けて、十二月号一月号、二月号、それに三月号から四月号、五月号と七回にわたって載せてもらったんですもの、早いものですわね。私自身でも驚いてますのよ。

毎月、送ってもらった雑誌を、こうして並べてみますと、中々、見事ですわね。あら、

一寸、待って下さいネ。三月号は居間に置いてきましたから持ってきますわ。

お待ち遠うさま。こうして眺めてみますとやはり最初の十一月号のヘマダム英美代の告白」というのが一番なつかしいですわね。

『編集部へ便りを寄せた』という副題がついていますけど、筆不精の私が下手な字ながらお便りを書いたのがよかったのですわね。いろいろと大変、楽しませていただいて、本当に充実した生活が出来ましたわ。

十二月号の「へ縄にまつわる私の体験」は、今だったら、もっともっと詳しくお喋り出来たんですけど、あの頃は私、まだまだ経験も不足で、今から考えてみましたら不十分だったですわ。

一月号の「へ縄腸って、素敵ネ」これは私、本当に気にいっていますの。やはり、へ縄って面白かったですわ。縛りも大好きだけど、へ縄って責めとしても目先が変わっていて、刺激的でしたわ。変わった趣向の好きな私には向いていたのかもしれないわね。ググーっと冷たいへ縄液が、お腹の中へ無理に入ってくる気持って、とてもSM的よ。便意を辛抱するのって、私、余り好きじゃないけど、自分の排泄したものが男の人に目の前で見ら

れるのって、恥かしい中にも、ある種の期待があるものなのね。それが、なんだって言うんですか。それは私には答えられませんわ。せいぜい、ご想像におまかせしますわ。

それとネ、私、あのへ縄されるときのポーズって、とても素晴らしいと思うの。ええ、普通のへ縄するポーズじゃなくても、じゃん

じゃん変わったのを撮ればいいのに――。

二月号のヘムチ打ちは大好き」これも印象に残ってるわ。実際に肌の至るところに黒ずんだムチのあとが残っていたものね。あんたに送ってもらった写真、あれに肩口のムチのあとが、はっきりしてたもの。今も、あのときの写真は大事に残してあるのよ。



縛られて逃げられないようにされて、ムチでしばかれるのって、やられてるときは、たまらないけど、後から考えるといいわね。ムチのあとの感じも悪くないわ。ええ、鈍い痛みが皮膚に残っていて、なんとも言えないSMに溺れてしまったって感じ。

あの頃から、私、少しお腹が大きかったのよ。裸の写真を見て気づいた方もいらっしまったかと思うけど、私って、もともとお腹は大きい方だったから目立たなかったかもね。

三月号の「SMの好きなお姐さん」のときは、もう本格的な妊娠だったのよ。本格的って言ったらおかしいけど、お医者さま公認とった方がいいかしら。

それで、四月号の「妊娠したって、嘘じゃないでしょ」で、とうとう、妊娠八カ月の大きなお腹を羞かしげもなく晒したってわけですわね。まあ、昭和四十七年になってから、ベールをぬいだってわけよ。ええ、そりゃ、それまでも、うまくドレスを自分で仕立ててゴマ化してはいましたけど、あのときも私が言わなかったら、喫茶店で逢って話してたときは信用しなかったでしょ。私が妊娠してるって言ったときでも――。

私が裸になって大きなお腹を見せたとき、



びっくりしたわね。青い顔して、俺の子供じゃないかって？ あのをあてようは面白かったわ。それが今では、こんな大きな臨月腹。

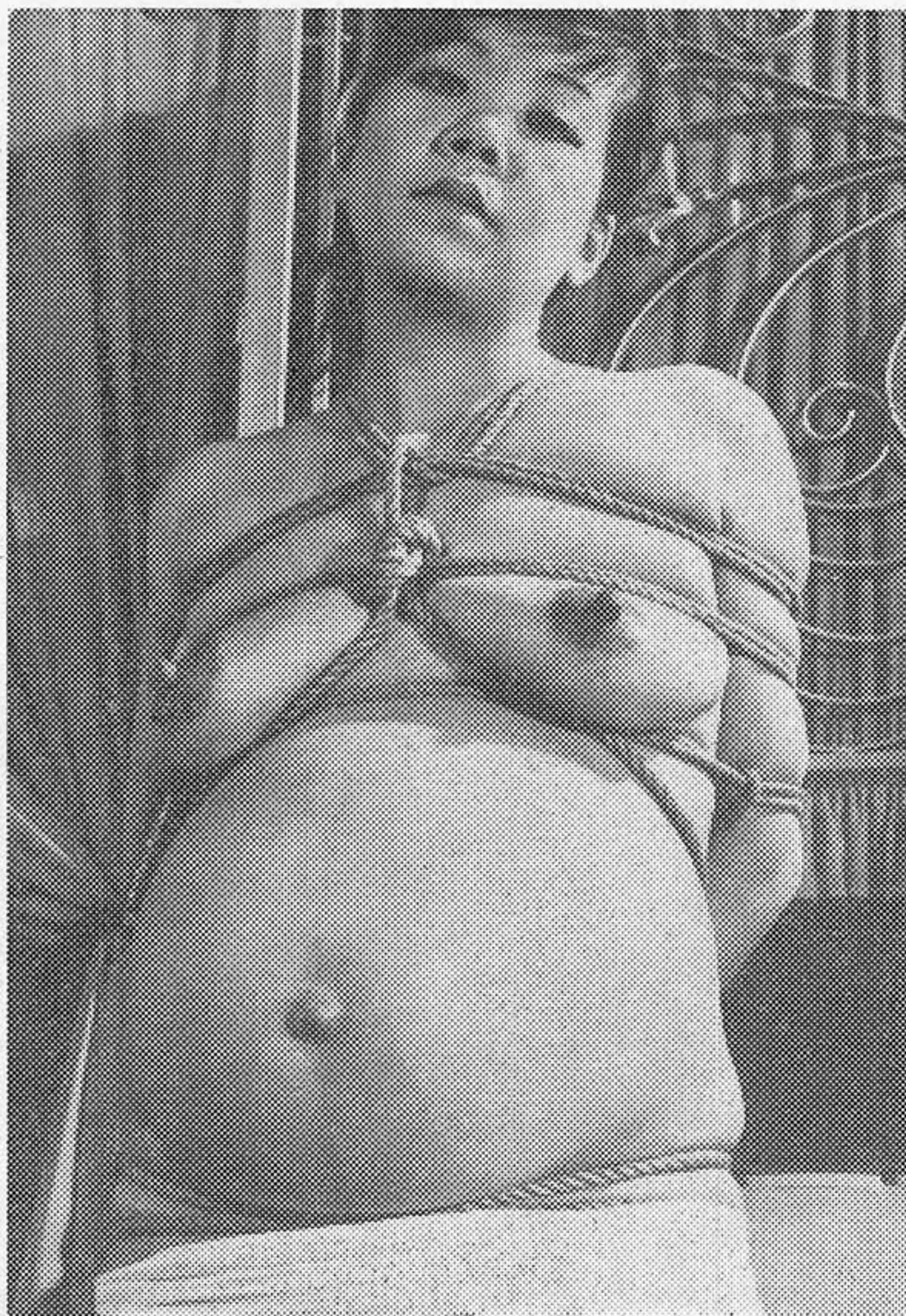
五月号では、どんな題で出ますの。この前にお喋りしておきましたから、雑誌が出るのを楽しみにしておりますんですけど、五月号の奇クが出る頃は、私は身体が二つになって

いるでしょうね。きっと――。

五月号は「私の蛙腹を責めてみて」って題で載っていますの。早く見たいものですわ。

そりゃ、九カ月の妊娠腹ですもの、ほんとうに蛙腹っていう感じですよわね。

それじゃ、ぼつぼつ、この臨月の妊婦を責めて頂きましょうか。あら、自分で責めて下



さいって言ったら、いけませんの。いやだ、いやだって許しを乞うのを責める方が、殿方は興味を持たれるんでしたわね。じゃあ、こちらで一つ、臨月の妊婦が抵抗して乱暴に責められてみましようかしらね。

あら、いやだ。そんな羞恥責めは、臨月の妊婦には無理ですわよ。なんですって？ 無

茶苦茶な責めが出来ないから、お情けで羞恥責めにしてやるんだって？ そんなの、ずるいですわよ。お腹がこんなに大きくなかったら、この前にやったように、組んずほぐれつの取っ組み合いをやって——。そうなのよ。

あれこそ、ほんとうのSMプレイなのよ。あんた、噛むのと引っかくのだけは反則だ

から、やめとけって言ったわね。でも、噛むのと引っ掻くのは女の武器だものね。心配しなくたって、私のようなサービス精神の旺盛な女は、めったなことでは、男の方の気にそわないことはしないわよ。

でも、相手がMの人だったら、徹底的にやっちまうかもしれないわよ。そのときも、SMプレイ、SMプレイ。まあ、遊びってことは忘れないわよ。

だから、この前も、結局、私が負けて縛られたじゃないの。時々くすぐってあげたのもサービスの一つよ。お前には、かなわないっていったって、ほんとうのところよ。私とSMプレイしてたら、そりゃ面白いんだから。お前と逢うのは楽しみだって、言ってたでしょ。あれ、お世辞なの？ 私の馬鹿ばなしをテープにとってたら、肩がこらないと思うけど、どうかしら？

赤ちゃんが死んでしまった加賀まりこの出産予定日が四月中旬だったんだそうですが、二月十四日に赤ちゃんがなくなっちゃったっていうんですから二カ月も早く産まれたってわけですね。三月下旬に予定日の私が、こんな大きな蛙腹をかかえて、まだうろうろしてるんですから、妙なぐあいですわ。

大体、加賀まりこって、ガリガリに痩せてお尻なんかも細っそりしてて、どちらかといえど難産型ですわね。それにひきかえ、私のお尻、見てごらんなさい。こんなに引き臼のように、でっかいのは、安産型といってよいでしょう。もう、こんなに大きくなってしまったら、ほら、ごらんになって、お腹の上に物でも、のるくらいよ。まあ、健康優良児が産まれるのは間違いないわね。

折角、子供を産もうと思っていたのに、加賀まりこは可哀そうネ。同性として彼女の氣持、よくわかるわ。これで子供の父親が布施明らしいって噂されていたのも、なんだか、お流れみたいね。ちょっと待っててね、おトイレへ行ってくるわ。これだけ、お腹が大きくなってくると、あの方も近いのよ。

お待ちどおさま。

さあ、この蛙腹のどこからでも縛ってちょうだい。お腹があんまり大きくなって、縛れないって？ だったら、他のとこ、縛ってよ。お乳も、こんなに凄く大きいでしょ。ホラ、見てごらんなさい。触ってもいいわよ。

その白いロープ、はじめてネ。なんだか堅くて痛そうだわ。あら、今、買ってきたばかりのおニューなの。道理で白くて、きれいだ



と思ったわ。

いいのよ。少しぐらい痛くっても。今までに私、痛いからゆるめてって言ったことあった？ なかったでしょ。臨月の妊婦だからって、手加減することなんかありやしないわ。じゃんじゃん、縛って頂戴。

手首や二の腕、お乳の上と下だったら、い

くら締めつけたって、かまいませんわ。あんたらしくもない。遠慮しないで縛って下さいな。その方が私も、うれしいの。折角、SMプレイのために、妊娠したっていうのに、手加減されちゃ、悲しくなるわよ。そりゃ、もう十日かそこらで出産するって女を責めるんだから、私の身体のことを心配してくれるの



は有難いけど、少々のことだったら、辛抱するわ。もし、私の体重が耐えられるようだったら吊りでも何でもしてほしいんだけど、こんな大きなお腹とおヒップじゃね、どうにもならないでしょう。

いやーだわ。相変わらず、そんなこと言ってるの。それは、あとのお楽しみ。あんたの

気のすむまで、ゆっくり見せてあげるわよ。ええ、そりゃ、写真もいいわ。カラーだって何だって。リバーサルだって？ それ、なんのことなの？ なんだか知らないけど、私はかまいませんわよ。

お腹の大きくないときは、後手首を縛られても、うんと肩口近くまで上がったのに、こ

うお腹が大きくなると皮膚がつっぱって、気ままに上がりませんわね。そうなんですよ。身体中の皮膚が、もうお腹の方へたぐり寄せられてるみたいで自由がききませんのよ。

わあーッ、凄い。お乳がこんなに大きくなってしまつて。やはり縄を掛けると、締めつけられて、むくつと出てくるみたいな感じ。

二の腕は、どんなにきつく縛って下さってもいいことよ。こんなにされたら、もう身動き出来ませんわね。一旦ころんだら、お腹がつかえてしまつて、起き上がれっこありませんわよ。まるで亀が仰向けに、ひっくり返ったみたいネ。

あら、立つんですか。それだったら、手をかして下さいよ。あら、私を踏んづけるんですか。お腹の赤ちゃんさえ、無事にして下さるんだったら、私はどんなにいじめられてもかまいませんわ。お腹以外のところだったら、蹴って下さっても構いませんわ。ぎゅうぎゅうの目にあわして下さいな。

ひゃーッ、ひどい脂足なこと。足の裏が、べとべとじゃない。この足の裏を舐めろっていうの。むーう、うーう。

ひどいことするじゃないの。でも、足の裏って、塩辛いのね。

次は私の鼻をいじめるっていうの。私の鼻が、つんと上向いて、高慢チキだからって？ そりゃ、鼻だったら、お腹に関係ありませんから、かまいませんけど、こんな臨月のときに、なにも鼻を責めなくなっちゃって。

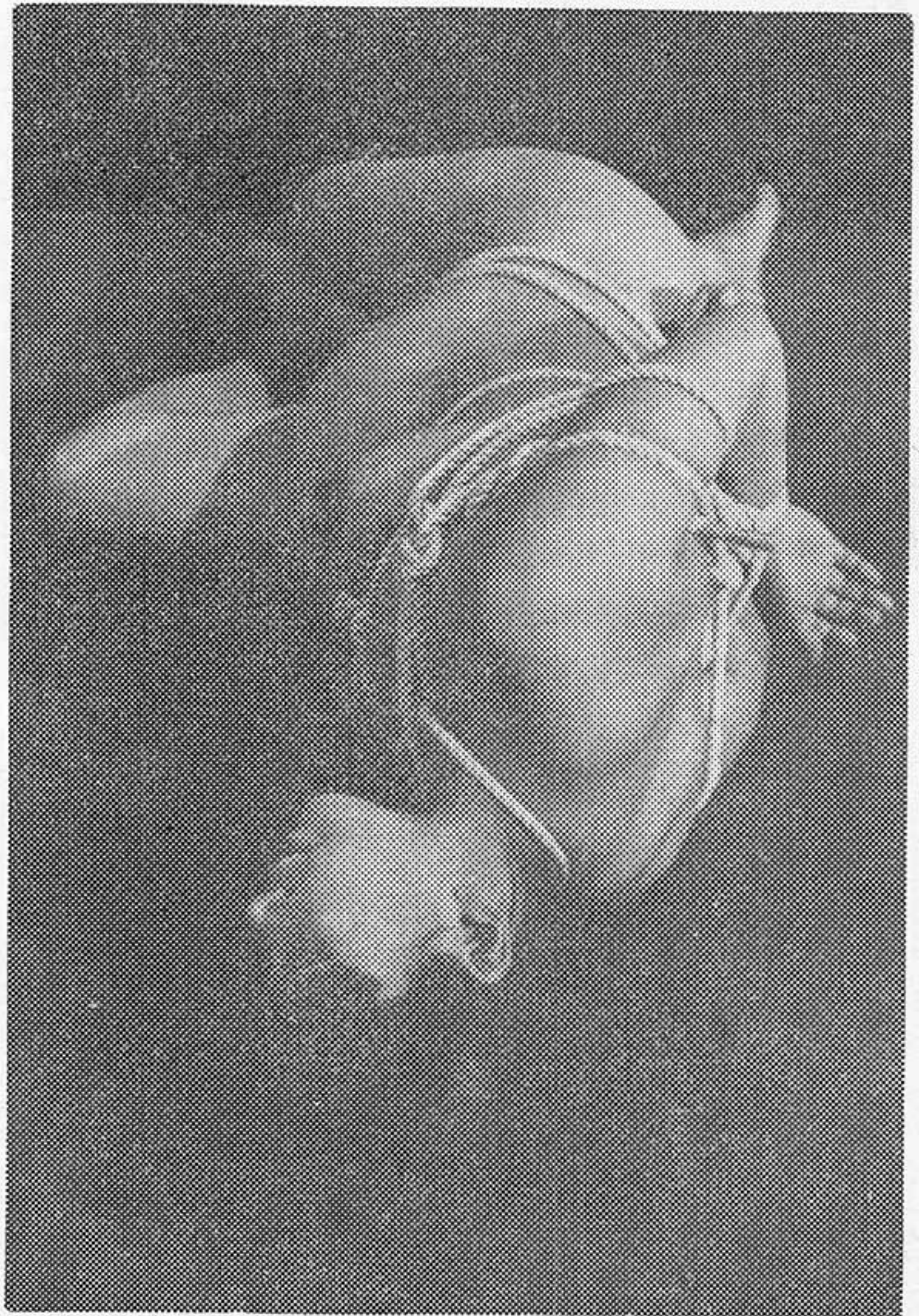
はい、はい、はい。ききます、ききます。こうすりゃいいんですよ。あんたも、だんだん暴君になってきたわね。ひょっとしたら私のお腹が大きくなってきたのに、嫉いてるんじゃないの。そんなんじゃないって？

お前は顔がきれいで、お喋りだけだったいの。そりゃネ、私は今度の赤ちゃんで二人の子持になるんだから身体に自信はないわ。でも、叩いても死なないくらい、健康には自信があるのよ。だから、次に責められるときは、私の良さというものを十分に見せてあげるわ。だんだんとSMプレイにも磨きがかかってくるというものよ。

あら、ごめんなさい。おトイレへ行きたくなったのよ。縄ほどうて下さない？

なんですって、後手に縛られたこのままの姿でトイレへ行けてですか。いやですわ、いくらなんでも、そんなことって。

こちらを向いてしゃがんだとこから写すっていうの？ 悪趣味ネ。私はいいけど、後始



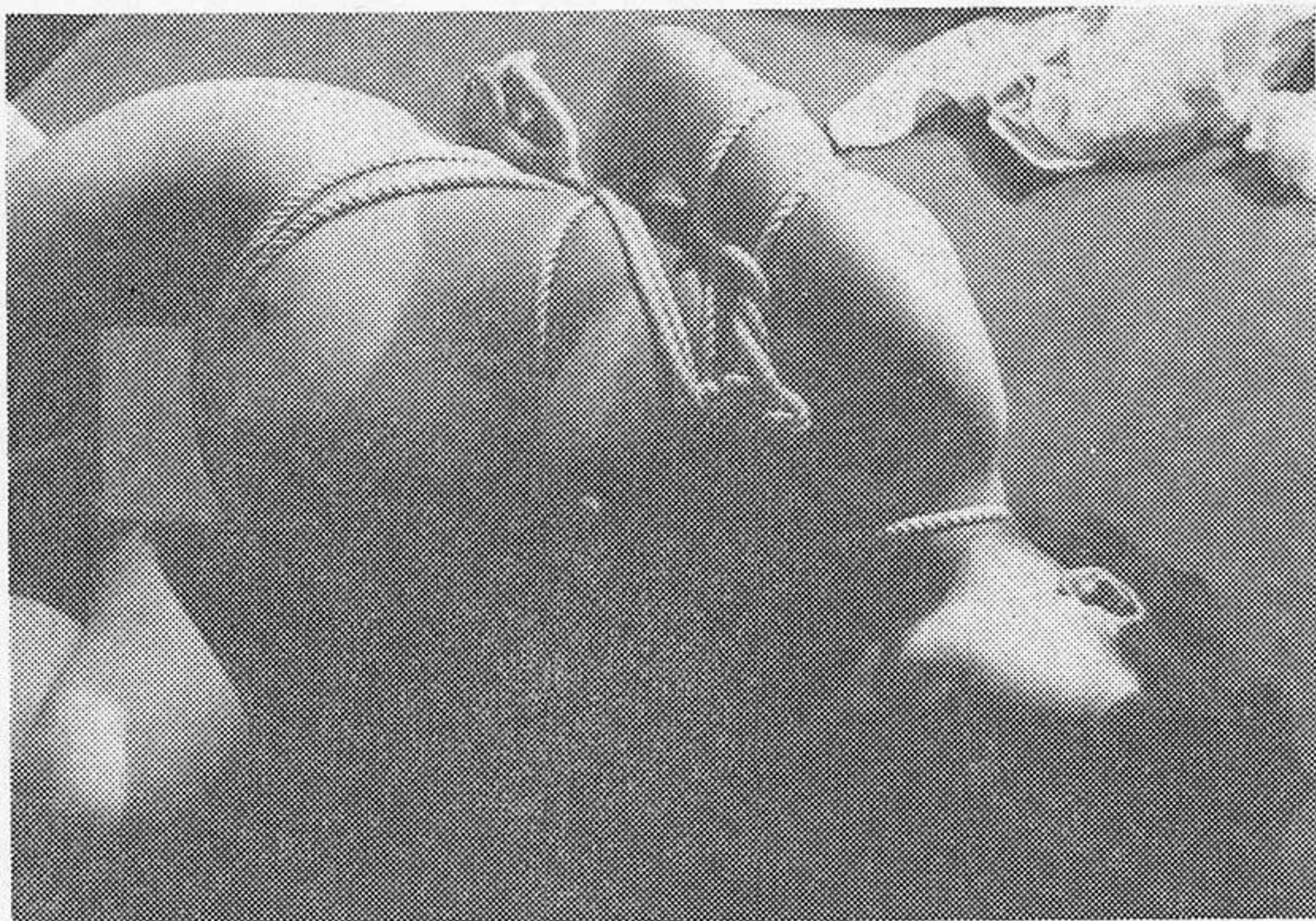
末をするあなたは大変よ。行けっていうの。そう、お尻を蹴らなくなっちゃって、行きますわよ。行けばいいんですよ。ちょっと待ってよ。そうせかさないで——。

縄尻をしっかり持ってて下さいな。ころばないようにネ。

ああ、いいお湯だったワ。すっかり洗ってきましたの。お待たせしましたけど次は、どんな趣向の責めなの？

ええッ、私に孕み犬になれっていうの。あら、首輪やくさりまで準備してきているの。くさりじゃなくなって、曳き綱ですか、それ。

たとえ、臨月のお腹かかえていたって、ど



んなことでもしますわよ。私の生まれた志摩の海女^{あま}といえは出産予定日の間ぎわまで海に潜って獲物をとっていますからネ。ええ、なかには、職場の浜辺で出産したって例だってあるんですよ。出産予定日のぎりぎりまでお腹に晒しを巻いて海にもぐってゆくっていう私たちに、怖いものなしですよ。

ええ、私は早くから都会へ出てきてしまいましたから、中学を出てから十五年も二十年も、ずっと潜ってるエライ人のようにはいりませんけどもネ。それでも海女の経験がありますから、臨月だからって、案外平気なんですよ。

臨月の犬を飼育するんですって？　こうして四つ這いになるんですか。お腹がつかえますわ。お尻だったら、いくらぶって下さってもかまいませんわ。皮下脂肪が厚くなっ

ていますから、力いっぱいなぐったって、こたえませんわ。

ムチ打つ方は手ごたえがあって面白いでしょう。這い這いますから、それ、どんどんぶって。ねえ、もっとよ。力いっぱい、思いきり殴りつけて――。

お尻は痛いどころか、気持よくって。もっともっと、ぶってほしいわ。私って、とても刺激を求めているんですよ。

あら、お尻を叩かれてるのに、ずんとお腹の方にひびいてくるわ。折檻されるのネ。私が悪かったんだから、お仕置に思いきり折檻して下さいね。お尻をぶって、ぶって、ぶちまくって、飼犬に飼育されるんだから、ご主人のお好きなようになさって。

どう？　もっと飼育されましょうか。それともベッドの方へまいりましょうか。こんな大きなお腹の女で、おいやでしょうけど、牝犬の方は、こんなに燃えていますのよ。お尻がこんなに赤くほてってしまっただわ。もうくたくた。手足の力も抜けてしまったわ。

あらあら、牝犬の訓練は、もうこれでおしまいですの？　命ぜられたら、どんなポーズでもとりましたのに。私、こんな犬の格好をするの、好きなの。なんですって、今にも産

まれそうなお腹をかかえて、犬の真似をするのは可哀そうだって？ そんなに同情して下さるの、有難いけど、私にはそんな心づかいは一切、不用よ。臨月の大きなお腹をかかえて、みじめにされる方が、いいの。同情や、あわれみをかけて下さらなくなったって、みじめで、みじめ過ぎる方が好みに合ってるわ。

じゃあ、今度も、その古い縄で縛るっていうの。縛るの、大好きなのね。縛った方が写真になるっていうんですか。そりゃ、緊縛美っていうくらいですから、もうこれ以上、大きくならないっていう太鼓腹のヌードより、縄でムザンに縛られた妊婦の方が、惨酷味はありますわね。私はいいんですのよ。もともと縛られることが大好きなんですから。

妊婦の開股縛りや股間縛りって、やはり珍しいでしょうね。第一、臨月の妊婦のモデルなんて、私のように好きで志願してこない限り雇おうたって雇えるもんじゃないでしょ。ねえ見てごらんさいよ、この大きなお腹。もう十日か、そこらしたら、この大きなお腹も、ペしゃんこに、なってしまうんですからね。ほんとうに、臨月腹の妊婦を責める機会なんて、そうザラにはない筈よ。

だから私、奇クにとっても、文献的に貴重

になるんじゃないかしらって思うのよ。昨年の夏ごろ、初めてお逢いしたとき、私もこんな太鼓腹を晒して縛られることになるなんて、夢にも思っていないでしたわ。でも私の身体が奇クのお役に立ってうれしいの。

お世話頂いた甲斐があったっていうものだわ。もともと私ってSMは好きだったけど、SMプレイをしたり、縛られたポーズを写真にとられたりしているうちに、凄く好きになってしまったものね。それと、私のお喋りをテープにとって雑誌に載せて下さったでしょ。あの記事と写真を見るのが、とても楽しみで、すっかり奇クに惚れ込んでしまいましたわ。

ええ、そりゃ、私に出来ることだったら、いくらでも協力してヨ。赤ン坊が私の手から離れるようになったら、ま





たSMプレイをやりたいワ。子供を二人ぐらい生んだ女って、アノ方も凄いついていうじゃない?

Mモデルの方を責めるってお話ネ、あれは私の妊娠でおあずけになってしまったけど、今度こそ、思いきり責めてみたいわ。それまでに志願者を募っておいて下さいね。

勤めに出るかってですか? そりゃね、いつまで遊んでるわけにはゆきませんから、またスナックでもやってみようかと思ってますが、SMプレイ出来るくらいの時間はありますわよ。その方は、まかしといて——。

M男には、どんな責め方をしようか、入院してから、私も考えておくわ。

それとネ、私って、若い女の子が好きでしょ。一寸、心当りがあるのよ。私が十九か二十才ぐらいのマゾの女の子を責めるとこんな写真にならないかしら? いや、レズっていうんじゃないのよ。そんなんじゃないかって純粹の責めですわね。女性同士のSMプレイっていうところじゃない。

まあ、この方は私が出産を終わって退院してきてからの話ですけどもね。女性にとって出産といえば、生死を賭けた大事なもの。ひょっとしたら、もう二度とお逢いできないかもしれないわね。

長らく奇ク誌上でお目を汚しましたけど、出産予定日をあと十日ばかりに控えて、これで当分、お別れいたします。

九回にわたる福井桃子のSM生活の記録をどうか、末長く保存しておいて下さいませ。

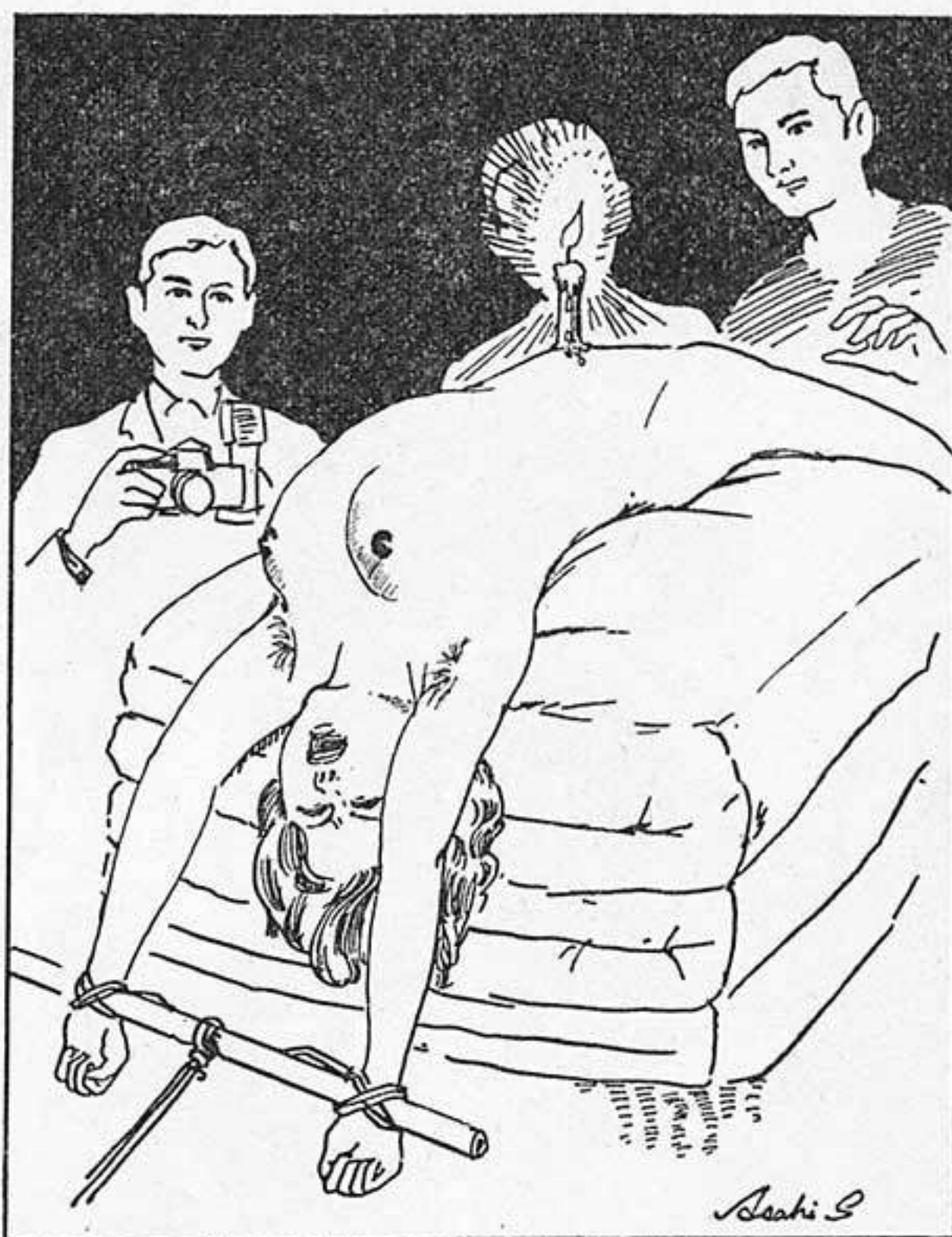
また、誌上でお逢いできる日まで、さようなら。どうか皆様、お元気で——。

さすがの私も、こうお腹が、つつ張ってしまふと疲れやすくて、いつもの調子が出ず、得意のお喋りも短くなってしまって、ごめんなさいネ。それでは。

それでは、もう一度、さようなら。

(おわり)

カット・須坂 旭



禁断のハンカチ

煌々と照らされたライトの下で、京子の痴態をあますところなくフィルムに収めようとする準備が進行中である。

レンズは大型カメラなど二台で、加虐者は三人だが、このフィルムが数限りなく焼増しされ、好事家の手から手へと渡ってゆくことを考えてみると、いま京子のとらされている

噴飯ものの淫乱きわまる姿態の前には、それこそ数え切れぬ見物人がつめかけているのと同じことになる。

彼女は、手首と足首を一對にして左右に繋がれ、しかも、ぐいとばかり両方に拡げられた太腿開きのポーズにされている。細紐の両端は天井にとりつけた滑車にかかっているから、悶える女体は、むきだしの尻でようやくグラマラスな裸身を支えるのみである。

邸に備えつけの細紐はしなやかで強靱なも

☆連載S大河小説☆

パロディ

花

と

蛇

山光

純

のが選ばれている。両手足を縛しめるのにゴテゴテとした縄かけは、必要としないのだ。清次は、しつこい性質をむきだしにして、

ライトの工合や小道具の配置などに、いろいろと凝って次々と注文を出す。

撮影に入るまでの間、京子の一文字に開いた両足の間は、ふわっとしたレースの薄いハンカチで覆ってある――

レースのハンカチはライトの中でまっ白く反射する。京子のスポーツで鍛えた小麦色の

見事な肉体の、ごく一部分を覆うだけだが、ただこれだけのものが、京子にたまらない羞恥の悶えと、苦しみを与えつつけるのだ。

女を電流で責めるときのことを考えてみよう。加虐者の、もっとも避けるべきことは、電流を女体に流しっぱなしにすることだと思ふ。電極をいつまでも押しつけたままでは、最初のショックの後、女はそれにつづく時間は、ただ苦しみのみでしかなくなり、ひいては強力な電流でなければ、その刺戟に慣れてしまうことだってあり得るのだ。

大切なことは、女に予想できないバラエティをつけて、今くるか今くるか、という絶えざる緊張を保ちつづけさせることではあるまいか。女は脂汗を流し、懲罰が今にも下りそうな予感に恐れおののきながら、命じられるどんな卑戯にも必死で取り組んでしまうことになるはずである。

京子の場合、電極ではない。ただ一枚のハンカチであった。

どうしようもないヤクザの吉沢を始めとする下等な手合いに、その香ぐわしい体のすべてを捧げつくしてきた京子ではあるが、最愛の美津子への色責めをはじめとする不断の緊張感と屈辱感、そして彼女が生まれながらに

して持っているピリピリ慄えるような羞恥心に残忍なまでに喰いいてくるこの加虐に、か弱い女の身がどうして慣れることができるだろう。

「どうでい京子。電灯の下で全部むきだしにされるのは、消えちまいたいくらい恥かしいだろう？　だからよ、武士の情けだ。ほら、こうやってハンカチを、乗っけてやってるんだぜ。お礼の言葉が、ききてえな」

京子は濡れた瞳をあげ、懊悩の果てをさまよいむせぶような、かきくどくような、哀願のこもった声で答える。すこしでも血の凍る瞬間を、先に延ばしたい乙女の必死の媚態である。

「わ、わかったわ——清次さん、心から感謝します……で、でもこんな恰好、あまりにひどい。堪忍して、お願い。こんな様子を写真にとられると、京子、死んでしまう」

「おい、お前たち、今の言い草をきいたか。こいつの十八番の、シヌシヌが、また始まったぜ。お色気たっぷりだな。フフフ」

声を合わせての三人の下卑た嗤いに、京子は齒がみして、うつむく。

「……でも」

「でも何だ？　俺達と他人でなくなった記念

すべき夜の、結婚写真じゃねえな——閨房写真をとるのは悪くないと思うだろう」

「こ、こんなポーズは嫌。はづかしいわ！

あたしは女なのよ。こんな風にしぼりつけて面白半分の写真をとるなんて、ひどすぎる」

「すると何か。俺たち三人の面にドロを塗ったお詫びは、できねえというのか？　写真はイヤ、お詫びもイヤ、というわけか」

あの時、舗道に叩きつけられたチンピラ三人の顔には、文字通り泥がついたのだ。清次は、いまいまいげな顔付きになり、高々と両肢を吊られた京子の傍に寄る。

「ち、ちがいます。だって、だって、心からのお詫びを、さっき、あなたたちに……」

「なんだって？　たった一回ずつ寝ただけでメンツを潰した詫びを入れたつもりでいるのかよ？　ふざけるんじゃないやねえ。俺たちはな、男を売することに命をかけてるんだ。はばかりながら手前みたいな女に、男をすたらせるような振舞いをされちゃ、世間さまに顔向けができねえのよ。普通なら、バツサリ殺^やっちゃ

うところなんだが、お前が心から反省して、詫びを入れるというから、きいてやってもいいって気になってるだけだぜ」

まったく理屈にならない理屈を、得々とし

て、まくしたてる清次の、ふてぶてしい顔をすぐ近くにみながら、京子は空しいと知りつつ、足搔かざるをえない。

「……ごめんなさい、そうだったわね。あたし、こんな恰好でいると、しどろもどろになっちゃって……あ、あの時のことは、どうかどうか許してちょうだい。あの時は、あなたたちが、よくわからなかったのですもの、ただ怖かったの。そのお詫びはしますから、こんな浅ましいスタイルの写真を、とることだけは、やめて。縄を、はずしてちょうだい……」

浅ましいといえば、正にその通りである。手足を一對に縛り、吊るし上げた足首は、京子の顔より高いところにあるのだ。しかも一二〇度くらいも左右に押し拡げられているため、豊満な胸の隆起もあますところなく正視でき、内腿を撫でさすることも、自由である。京子の美貌をたっぷりと観賞しながら、次第に視線を下に移してゆくと、斜め上にむけて受けるようなかたちで、問題のレースのハンカチが、ふんわりと置かれているのだ。ごく薄いハンカチは、扇風機にも吹きとばされそうな風情でフルフルと打ち震えている。その様は、そのまま虐げられる女の消えもい

りたい心根を表わすようだ。ライトは真向から照りつけている。三脚も据えられ、撮影の準備も、ととのった。

今度は、いちばん年若の五郎が、「兄貴イ、四の五の言わせないで、そんなハンカチは吹きとばしちゃって撮影しようぜ。正直のところ、俺やたらにカッコしちまってるんだ、早いとこ撮して、またこいつを抱きてえんだよ。ああ……たまらねえな、こいつを搔きまわすつてのは。だいいち、俺はそれをライトの下で、とっくりと、拝ませて貰いたいのよ」

狼狽の極にある京子は、吊るされた手足をモジモジと、ゆする。うっかり身動きするとごく軽いレースは、ひとたまりもなく落下してしまふだろう。

「五郎さん、お願いだから待って。何でも言うとおりにすれば、いいんでしょう。そんな酷いことだけはしないで」

近々と、すぐ目の前にある大口径のレンズと、年少のチンピラを半々に見て、勝気な娘は、つい平静を失って口走ってしまった。得たりやとばかりに清次と三郎が、ずっと近づく。清次はドスをきかせて、「何でも言うとおりにするといったんだな。

まさか嘘をついてるんじゃない？」

「たった一人の女の子を三人がかりで、いじめるなんて、あなたたち任侠の人のすることじゃないって、そんな意味のことをいったのよ。けれど、いいわ、縛ったままを写真を撮しても。でも、ブラジャーとパンティは絶対につけさせてちょうだいね」

「お前、俺たちが下手に出てると思ってなめてんだな。——おい三郎、構うこたあない。そのハンカチをとっぱらっちゃまって、パッチリのエロ写真を写そうぜ」

「や、やめて！」

男たちの術中に、すっかりはまりこんだ京子は必死の嬌声をあげた。

三郎のアカじみた掌は、ぺったりと、うすいハンカチを押さえている。じっとりとした生温い体温が、ムダ毛を剃りおとされた素肌に、つたわってくるのだ。

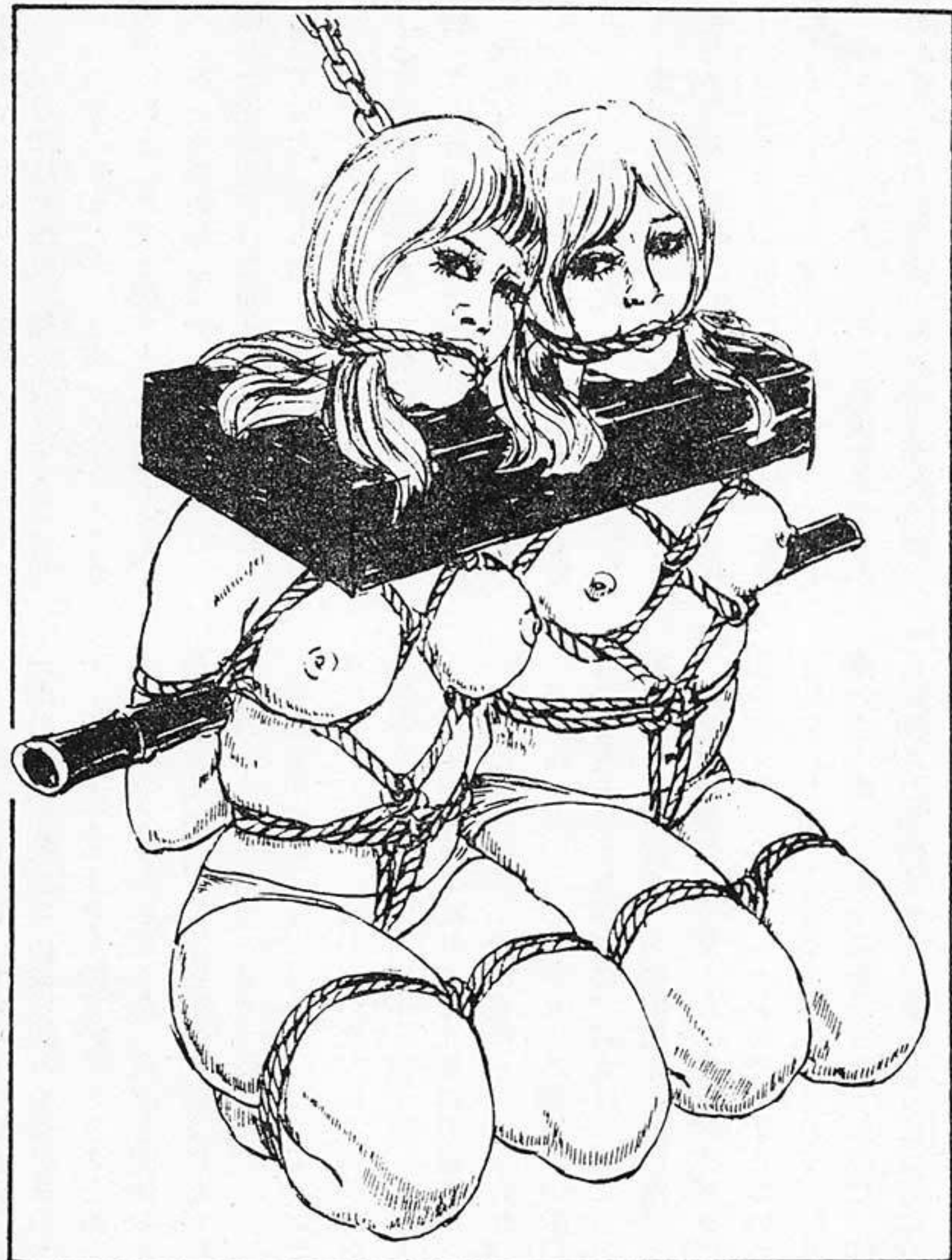
京子は照り映える肌に脂汗を流して身もだえる。蜘蛛の網にかかった、美しい蝶、そのままである。

「では、もう一度だけ、きいてやらあ。断わっておくが、これが最後だぜ。——さっき、俺たちの言うことは何でもきくっていったのは本当だな？」

三郎の指がユルユルとうごめきはじめる。
ハンカチごしにそのうごめきは京子に、はっ
きりと屈辱を与えてくるのだ。

京子はそれでも負けまいとし、皓い歯を強

くかみしめる。手足の緊縛は巧みで、ゆるめ
ることは完全に不可能である。アブチックな
美女の脚上げ開股縛りは、こよなく男の目を
楽しませるのだ。



……イメージギャラリー……

『連

座』

……志羽利也……

三郎はバサバサの髪をかきあげ、それが合
図のように、まさにレースのハンカチを僅か
に、たぐりよせた。

「まって！……わかったわ……あなたたちの
いう通りにするわ……京子、もう、ふらふら
もう許して……」

たった一枚の布切れをのせたきりの、身動
きできない裸女にできる抵抗は、このあたり
が限度だった。

「じゃ、俺たち三人がさっきのようにちよっ
ぱり楽しむが、それでも文句はないな？ そ
の代り、このハンカチをむしり取ることだけ
は、勘弁してやってもいい」

「……」

豊かな黒髪をがっくりと伏せて、肩で息を
する抜群の体つきをしている美女は、絨毯に
落とした双臀を、もじもじさせる。

「じっさい問題としてだな。こんなエロ写真
をあちこちにバラまかれてみる。お前は金輪
際おてんと様の下を歩けなくなっちまうんだ
ぜ。その方が、俺たちにとっちゃ金になって
いいんだが、魚心あれば水心よ。今夜一晩、
せいぜい二晩くらい俺たち三人の言いなり
になるだけで、事が済んじまうんだ。誰も、
お前のスカートをまくって見ようという奴は

いるめえし、俺達もその何ともいえないヌードに傷ひとつつける気はないんだ。用意してあるカメラには高感度の舶来カラー・フィルムが入れてあるんだが、まあいいや、どこか景色のいいところでも撮すとするか。さあ、どっちをとるか返事しな」

濡れた明眸をあげた京子は、妖艶な美しさにみちていた。喉もとからせり上がり始めている九〇センチはあるバスト、触れるとコリコリとすぐに硬直するうす桃いろの乳首、朱い唇、なだらかにライトをうけて光った肩の線。酸鼻な、あまりに理不尽な縛られ方をしているにもかかわらず、京子は息も詰まるほどコケティッシュだった。

「……あなたたちの、よろしいように……」
「俺たちは順ぐりに、一休みしては、お前にサービスさせるが、お前には休みはやれねえぜ。しかし、もし気を抜いたようなそぶりをみせやがったら、たちまち写真撮影をやるからな。ちっとばかり強烈なクスリを使うが、精限り根限り、一生に一度のサービスと思っ
てテクニクのありったけを使いな。なあにこれだけポリウムたっぷり体をしてるんだ、一晩や二晩徹夜したって、足が立たねえってこともあるめえ。そしてだ——」

京子は夢中で、ガクガクうなずいていた。ハンカチのあたりに、たわむれていた無言の三郎の指先が敏感な内腿の辺りを這いまわって、ぞっとするような触覚をウズウズとあたえつづけてくるからだだった。自然と肉体の底から湧きあがってくる痙攣が、いまにも、ごく薄いレースを落下させそうにする。

強烈な照明の下で、ほんの一ひらのハンカチで覆われているきりなのだ。三人の男には透し見えるにちがいない……京子は、ふわりと浮き上がりそうになった布切れの感覚に、一瞬、目も眩む羞恥の稲妻にとらえられた。

それは、このうら若い女の本能的がい何ものでもありえなかった。彼女は、男たちの射すような視線を、刃物の切先と感じた。

鼓動は早鐘のようだった。身をズタズタに引き裂く羞恥心は、「ハンカチを取らない」と約束した清次の言葉に誘い出されて、いま潮のように京子の全身を浸しきったのだ。抑えに抑えた恋情を一気に迸らせる乙女のように、京子の全身は、みるみる恥かしさの紅にそまりつくすのである。

チンピラたちは、むしろ啞然として慄え戦く裸女を見おろした。ただ一枚のハンカチでこの鉄火娘をこれほどにまで責めたてること

ができるとは、思わなかったのだ。「犯される」ことと「見られる」ことは、素人娘にあっては、まったく違った次元のものなのか。

笑止なチンピラたちは、このように本質的に純な女性とは、これまで深く話しあったことさえなかったのである。交渉のあったすれっからしどもは「売る」ことと「見せる」ことを、まったく同じ平面に分かちがたく並べていたのである。すれっからし達は、金さえ貰えば平気で何でもやった。

狡猾な清次は、たちどころに、こんな京子の心根を掴んだ。

「じゃ、これで決まったぜ。——手はじめて乳房を楽しませて貰おうか。ふふ……」

「ああ。でも清次さん……灯りをけして……おねがい……」

ききとれないくらい、かすかに京子は、さしうつむいたまま、答える。

羞恥の炎にあぶられ、前後を忘れてレースの布を守ろうと決心したのである。

「そんな約束をした覚えはないぜ。つけたままだ。さあ、もうすこし胸を張るようにしなよ。お前の大きいオッパイを、とっくり、いじめてやりてえんだ」

清次の情欲にゆがんだ唇が近づくと、京子

はもはやさからえず、慄える睫毛を閉ざして長い長い息詰まる接吻に応じるのだった。

散々に、弾力のある丘の感触と、ディープ・キスを楽しんだ清次が、待ちかねた三郎と替わる。三郎は耳元で絶えず脅迫しながら、たつぷりと塗り薬を使い、ツルツルにされた腋の下を舌先で責める。やがて五郎が三郎の肩をどやしつけて、ようやく替わらせる。

五郎は、それでなくとも高く吊られた手足を、さらに引き上げたのだ。

そのために京子の四肢は、七、八〇度も傾き、尾骶骨のあたりで全身が支えられる姿態になってしまふ。五郎のねらいは内腿のきわどいところと、アヌスだった。

一たび燃えあがった羞恥の紅焰は、これらのペッティングにも耐え、ハンカチを守り通そうとする緊張感はいま、極限に達したようであった。

その時だった——清次は五郎に目くばせした。

ごくうすいヒラヒラのハンカチのすぐ横に口をつけていた五郎は、大きく一と息ついたかと思うと、弄られるままの美女を驚愕させる、大きなクシャミをしてみせたのだ！

ねらいは正確だった。布切れは、一たまり

もなく吹っ飛ぶ。

「ひいっ——」

京子の喉から、笛のような悲鳴が、ほとばしった。

京子 哀れ

一瞬、すべての時刻が死に絶えたかのようだった。

三つのランプから発する金箭は、情容赦なく、死ぬ思いで秘匿してきた、美女の総てをぎらりと射た。愕きと怖れのショックで彼女は少女のような表情を化石させ、焦点の合わない瞳をあげたままだ。

惨劇をたくらんだ三人の暴行者にも、ショックは同じように、訪れた。面白半分に責めさいなんていた京子が、これまで洩らしたことのないたまぎる悲鳴をあげたからだ。

顔を見合わせるまでもなく、三人のこの無法者たちの心の中に、等しく△やりすぎたかな？▽という思いがギリギリとつき上げたのかもしれない。なぜなら、女の生々しい叫び声は、二年前、他ならないこの素っ裸の女によって舗道に叩きつけられた彼等があげた悲鳴と、酷似していたからである。

最初に立ち直ったのは、やはり兄貴の清次であった。彼は余裕があるように、ちよっと引きつったような笑顔をみせ、すばやくセツトされてあるカメラの後ろに立ち、リリースを押した。

ガシャリ！

大口径の長焦点レンズは、開股縛り真正面からの全身と、濡れた明眸をあげている美貌の、誇りたかい京子の姿を、のちのちまで残すであろう。

ガシャリ——

極粒子・高感度のフィルムは、最高のカラー・バランスをもっており、等身大、いや、その二倍の大きさに引伸ばすことも可能である。京子を女主人公にした官能美にみちた組写真は、「鬼源モノ」の闇値を、さらに高騰させるであろう。

立て続けにシャッターを押しつづけた清次は我に返り、あらためてスポット・ランプの下に照り映える全裸体を凝視した。

巨大な衝撃に打ちひしがれた京子は、深々とうつむき、周章し、困惑しきった啜り泣きで、ブルブルと全身を震わせていた。

五郎が戯れる際に、一段と高く縛った手足を吊りあげたのは、ふかい魂胆があつてのこ

とだった。

いま、京子が身に替えてでも守り通そうとした、禁忌^{タブー}のうすいハンカチはないのだ。

屈辱以外の何ものでもない京子の姿態からは、しかしどんな種類のものにこそみつからなかつた。そこには、ただ光り、ただ青春、ただ香りがあるばかりだった。めくるめく眩しさの、信じられないほど豪華な肉体が、まさにそこに置かれてあつた。もはやポーズは問うところではなかつた。このうら若い女の裸身は、みずから磨きあげてきた由緒ただしい教養のつつしみをありつけたけふりまきながらただひたすらに紅潮しつづけるのである。

白衣をオリーブの風になびかせた古代のギリシャ人たちは、この裸身を「至上にうつくしいもの」にみて、そのありさまを石にきざみつけ永遠たらしめようところみた。石をきざむのに卓抜した才能をもったギリシャ人たちではあつたが、賢明な彼らにはわかつていた。オリンポスの山にしずむ夕陽が、どれだけうつくしく石にうつしとった裸身をくれないに染めあげても、生ける女人の頬にさす含羞の紅にくらべるべくもないことを。

いま二千年のちの、この極東の邦^{くに}の、黒衣

をまとった法曹人たちは、おなじ生ける女人の、そのすがたのなかに、あろうことか「凶^{まが}々^{まが}しく、いかがわしいもの」をみた。にわか信じがたいにせよ、それはまぎれもない事実である。皺だらけで、うすよぐれ、異臭をはなっていたのは、彼らの黒衣だけではなかつた。

ここに同じような手合いが三人いる。彼らは、京子の優美にそりかえり、見事に成熟した体を、卑猥な興味をふくれあがらせながらねめ廻すようにし、さて、次のポーズを取らせるべく、スラリと伸びきった脚に手をかけた。いずれも淫虐な笑みを浮かべている。

その途端だった。

一方的に責め廻られ、男たちのはなはだし欺瞞に身も心も消耗しつくしたかに思われた京子は、凄絶にまなじりを上げ、憤りにみちみちて、こう叫んだのである。

「あなたたちは豚よ。いいえ、畜生よ。人間の皮をかむった鬼よ！……ピッグ！」

怒りに我を忘れた、勝気^{いけにえ}な犠牲の反撃であつた。

京子は、紅潮した美貌をひきつらせ、キラキラと双眸を輝かせながら、吊られた四肢を

ふりほどこうと必死に足掻いた。

天井のフックに引っ掛けられたロープは、今にもはずれそうにユサユサする。しかし、鬼源の手ほどきを受け、充分にツボを心得てかけられた縛めは、やはりビクともしない。はじめは、少しばかり不安げだった男二人はロープが裸女をがちりと掴んで放さないのをみてとると、余裕が出はじめたようだ。

「この女、あれほど言っかけてきかせたのに、まだ参りやがらねえ。こうなったら、もう頭へきた。徹底的に責めまくってやる！」

しかし一番若い五郎は手前勝手な理屈とも気づかない位、頭に血がのぼったらしく、いきなり狂ったように身悶えして縄目をとこうとする京子の髪を掴むのだ。

あわてて制止したのは清次である。手ひどく肩を、どやしつけるようにし、ビンタを張ろうとするのを、やめさせる。そして、殊更おちついた風に、小声でいうのだ。

「おちつくんだ、馬鹿野郎。一寸だめし五分きざみにするってえのを忘れたのか。この女^{すけ}が金輪際、逃げられっこねえのが、わからねえのか。ゆっくり料理するんだ。いまに、くたばっちまうさ」

獵師の仕掛けたワナに、はまった白兎その

ままた京子は発達した胸の隆起を振り、双臀を床にこすりつけて、尚も空しい努力を重ねるが、それも、先程来からの連続した責めの疲労のため、次第に動きも、にぶってくる。「ああ、ダメ。……口惜しい、くやしい！」

あんたたちは豚よ。ブタ！……鬼よ！」紅潮しきった肌は、しとど流れる汗に濡れそぼっている。その身体を左右に揺する度にムンと鼻をつく女の微かな匂い。激しいライトの反射をうけて滑稽なスタイルから逃がれ



イメージギャラリー

『無題』

黒田 縛

ることのできない、造化の妙の傑作。触れれば灼けるように熱く、掴めば、たちまち激しい恍惚感に、ひたることができ、この剥き身の女——京子。皓い歯を、ぱりぱりと噛んでいるが、しだいに力つきたらしく、諦めの気配が表情に、みえだした。

清次はタイミングを、はずさなかった。たった今し方へやりすぎたかな？Vなどと思っってしまったことを、おくびにも出さない。無機質のレンズと同じように冷酷な視線を両脚の間にある京子の美貌にむける。

「五郎は、ただクシャミが出ちまっただけなんだ。誰にもあることじゃねえか。おれたちは仏様じゃない。そりゃ、ちっとばかり失礼に当たったかもしれねえが、どうってことはねえ。そのクシャミが、つい出ちまっただけで俺たちを鬼よばわりするのは、言いすぎだぜ。それに何だ、豚だとも言ったっけな——」

「そうとも、俺たちは豚でも、けっこうさ。じゃ、手前は何だ？俺たち三人の前で、こうやって、すっかり、おっぴろげ。替わる替わる慰み者になろうというお前は、いったい、何だっていうんでえ？いいから、答えてみな。怒りゃしねえぜ。ふふ……」

精魂つきはてた体で、ついにガックリと顔

をおとししてしまった京子は、かきにかかって責めたてる男たちの蔑めに、かろうじて反撥するように、イヤイヤをする。

何という気の強い女だ、と思わず顔を見合わすと、芝居気をつけて、

「さっきは、お前が本^{めえ}当に心の底から詫びをいれたのかと思ってしまったところだったぜ。いや、俺たちが甘かったんだが、こうなったからには、お前も覚悟はできてるんだろう。ごらんの通り三対一だ、体のつづく限り逆らってみな。俺たちも、その方が張り合いがあつて面白いんだ」

言いながら、若僧二人に目くばせする。二人とも、「こりゃ、楽しみだぜ」といい、別に二本の細引きをもってきて、京子の右足首と左手首を別々につなぐ。

石のように押しだまった鉄火娘の心中は察するにあまりあるが、拘束の縄を何とできよう。

開股縛りがはずされる前に、又してもシャッター音が響く。

「どうも気にいらねえな。こちらを向いてニコリ、とさせねえと気分が出ねえや」

「いいとも、まあまかしておきな。手はいくらだつてあるさ」

もつれさせもせず、それぞれ手分けして二本のロープを縛り、それまでの手足を一つにしたロープを解きにかかる。京子に姿勢を立てなおすひまは、まったく与えない。

新しいロープは、左手と右脚にかけられ、先のロープが、はずされる。極端に上げ高くさしあげていた縛めを解かれても、被虐の裸女はフリーになった方の手足をあげる元氣もなく、パタリと床におとししてしまう。

その時である。

存分に京子の豊満な肌を、よだれを垂らさんばかりにねめまわしていた三郎が、ふと床に目を落としたかと思うと、

「ありゃ、やってやがる！」

と、すっとん狂な声をあげた。

滑車を引いて、右脚を吊りあげる作業をしていた清次は、どれどれ？ とのぞきこむ。

「ほほう、何て女だ。洩らしっちゃいやがった……はっはっは……」

くたびれ果て、ふてくされたように深々と白い項をみせてさしうつむいていた京子に、その言い草は再び強烈な火を点じたのだ。

「……ああ、許して、許して、お願い。笑わないで、笑わないで……お願いですから笑ったりしないでちょうだい！」

その口ぶりには、すでに男に蹂躪^{じゅうりん}される女の哀願、いがいの何もなかった。

腋窩をすっかり見せて、左手をさしあげ、右脚を一メートルばかり吊られた淫らな姿勢の京子は、眼元まで赫くなって、気弱わに男たちの気配を、うかがう。

フリーの左脚は、のぼしたままで大きく開かれてゐるのだ。

ガシャリと落ちた大型カメラのシャッターの音と、ただ一つの孤塁だったレースのハンカチが吹き飛んだ瞬間のショックに、ごく脆い女の生理が耐えきれなかったのだろう。キリのようにもみこまれてきた強烈なライトの熱線を、じかに感じた、あの戦慄……
「こいつ、とんでもねえ女^{あま}だぜ……俺達の前で……」

困惑に浸されきった京子には、もはや男の言葉も耳に入らない。つい今しがたまでの捨身の反撃は消えうせてしまい、ただこの場をどうして逃がれるか、だけに心が、せく。

紅灯の巷に巢喰っている、すれっからしの淫売なら、こうした場合でも平氣の平左、居直った態度で、せせら笑うのだが、三人のやぐざにとって肉体の秘めごとに関わりなく純情

な反応を示す京子は、たまらないほど魅力的であった。

おどおどと長い睫毛を慄わせ、下等な三下どものご機嫌を、どうとり結べばいいのかと形のいい唇を半開きにしたこの鉄火娘の様子は、哀れである。

熟れたムッチリとした乳房、やわらかく羞恥に波打っている臍のあたり、^{くれない}紅に染まっている首筋、しっとりとした脂肪ののったシミ一つないクネクネした肌の微妙さ。女の一メートルちかい双臀は、まるで男の暴力を、凌辱を待っているかのようにムクムクと、あまりにもエロチックだった。艶やかな髪を乱し、あの勝気な、キラキラする光りにあふれていた明眸には、いま別種の男たちの同情を乞う色がチラチラと浮かんでいる。

これが、あの時の颯爽としたミニにブーツの近代女性と同じだというのか？——（註——前月号参照）

まさしく、同じの京子であった。しかし、いつ又、男たちの気嫌をとることをやめて、強烈無比な反撃に出るかも知れない。あの空手で立ち向かってきた時の山猫のようにしなやかな身のこなしで。

三人のチンピラは、ふたたびいまいまして

がこみあげ、この女を徹底的にしゃぶりつくさずにはおかない斗志のようなものをかき立てられる。この女が、自分が女であることをしみじみ後悔するような目に合わせてやるのだ。こちらには打つべき手は無限にあり、京子には、それに立ち向かえる手段として、その豊富な肉体があるだけなのだ。

じつくりと腰を据えて、日頃自分たちが女に対してやってみたいと想像している、あらゆることをこの女にさせてやるのだ。手を変え品をかえ、京子の心と体を使って存分に楽しんでやる。その結果、京子がどうなってしまうおうとも、成りゆきまかせである。

「そうかい。つい取り乱して、小便をもらしちゃったって訳だ。まあ、いいさ、女によくあることよ。ついでにというのは何だが、ずい分、溜まっちゃってるんだらう？ この際恥かしいだろうが、一気にやっちゃってもいいぜ。ははは……」

図星であった。

どこまで続くのか、はかり知れない嵩にかかった男どもの攻勢の前で、次々と女の生理の弱さを暴露してきた京子は、誘いかけをしおに、もろくも全面的な崩壊が迫ってくるのを感じるのである。こうして口に出して言わ

れてみると、はじめの頃は小さな鼓動だった尿意が、もうどうしようもなく大きなものにふくらんでいるのを自覚するのである。

「さあ、次のポーズを写す前に、やっちゃいな。遠慮するなよ。さっき洩らしたときは見損なっちゃったから、今度は、ゆっくり拝見するぜ」

清次は、わざと気づかないふりで言い、ポーツと紅潮したまま、うすく目をとじている京子の頬を、ピタピタと叩くのだ。

「じゃ、いいんだな？ おい五郎、そのアンヨをぐっと上に引きあげな。今までみたいにダラダラせず、ぶっ続けで写そうぜ」

「ま、まって、清次さん……」

京子は赤らんだままの美貌をあげ、男のほうに媚びるように、

「だって、だって、このままなら、絨毯を汚してしまいわ。それに、こんな恰好で、なんて、いやよ。ね、おトイレへ連れて行ってください……お願い、清次さん」

「冗談じゃねえぜ、兄貴」と気短かな五郎。「少しくらい辛抱させときゃ、いいんだ。ツベコベと文句ばかりつけやがってさ、うるせえぞ。さあ、吊りあげるぜ」

心理的にも明らかに切迫してきたらしい京

子は、精一杯の頬笑みをつくり、もっぱら、裸体の観賞とタッチでニタニタしている三郎に、

「さ、三郎さん。わかってちょうだい……京子をおトイレへつれて……早く」

三郎はバサバサに伸ばした髪をした不健康な顔色の三下で、陰気くさい口のきき方をする。京子の哀願にも少しもあわてない風で、なんだか暑くなってきやがった、などと一言をいい、肌じかに着たTシャツを脱ぎ捨て、くしゃくしゃのズボンも脱ぐ。

「させてやらねえとはいわんが、皆がどういうかな……」

うす汚れた不潔なパンツだけの姿になり、泪を浮かべている京子の、こきざみに慄える乳房を下から上へ撫であげる。ブルンと一揺れする様が、いたく氣にいったようだ。

「俺たちと遊ぶようになってから、又一周り大きくなったようだな」

とボソボソした低い声で言い、又しても右手で、しっとりと汗ばんでいる大きな胸の隆起を上へ押しあげる。そして、ぐんにやりと潰れてくる熟した果物のような球体を、可能なかぎり押しあげて放す。それはタプリと揺れる。

「イカすオッパイだぜ、じっさい——」

「……三郎さん、もう勘弁して……ひ、ひどいわ……皆さんも、きつといいっておっしゃるわ」

自由になった左脚をぴたりと右にくっつける、そんな状態にある女がすべてする仕草を、京子も必然的にしていた。湯上がりのときのように、ぼおっと輪郭のにじんだ彼女の顔付きに三郎は、阿呆のように見惚れる。

「ねえ、三郎さん、三郎さんったら……ああ……清次さん、もう許して……」

この緊迫した時でも、まるで取りあつてくれない救い船を、清次にもとめなくてはならないとは——

「ははは。三郎の奴、すっかりお前にいかれちまってるぜ。ところで、何だったっけ、お前のおのぞみは？」

「おトイレ、おトイレに、行かせてちょうだい！　お願い」

「俺はいいんだが、五郎が何というかな。何しろ、お前がすっかりあいつを怒らせちまったからな。どうでい、五郎」

「こっちの言うことを少しもききやがらねえで、お願いもねえもんだ。ほつといて、仕事にかかろうぜ、兄貴」

「京子、五郎はあの通りだ。まるで頭にきちまってる。お前が悪いのよ。あいつの言う通り、お前は嘘ばかりついてるじゃねえか。確かに、こっちの言ってることを、はねつけてばかり、いやがる」

「わ、わかったわ。あたしが、悪かったワ。……何でも、おっしゃる通りにします……だから……だから……」

「だから、何だい？」

「あなたたちの、……いう通りにします……何でも約束、するわ。だから、おトイレ」

しどろもどろで、答える京子は、きつくきつく内股をしめつけ、冷汗をかいている。モジモジと双臀が、ゆれているのだ。

「ほんとうだな？　何でもすると、約束するんだな」

それから清次は、京子の髪を、やにわにワシ掴みにし、精一杯ドスをきかせて、

「お前が、言う通りにすると約束するのは、これが二回目だぜ。おい、ハダカ牝^{めす}。三度目は絶対にねえことを、覚えときやがれ！」

それから先は一瀉千里に、次のような受け答えが、おこなわれたのだ。男たちは、ムズムズする劣情を抑えず、ギラつく眼をすえて口々に言いたてた。

「俺たち三人がかりで、ゲップが出るまでお前を、なぶり抜くんだ。めっちゃうちゃんにするんだぜ。覚悟はいいな」

「気がすむまで、あたしをなぶってもいいわ……あなたたちのお好きなように……」

「三人で四回ずつとして、十二回。その間に例の道具を使い、浣腸をはさむ」

「……ええ……お相手させていただくわ」

「写真や8ミリのことを忘れちゃ困るぜ。買

手がヒイヒイ言って喜ぶのを撮ろうな」

「……あたくしに、つとまるかしら……」

「なあに、それだけの女ぶりだ。その道の第一人者としてのし上がった静子夫人に負けねえように、ニッコリし、思いきり尻を振ればいいのよ。腹が減るだろうから、お情けで俺様の残飯くらい喰わせてやってもいいぜ。要するに、性奴隷として奉仕し、サービスのありったけをつくすんだ」

「……あなたたちに、心からお仕えますわ……もう——ああ」

「お前には想像もできねえ、奥の手があるんだが、あんまりイヤらしいんで、ちょっと口では、いえねえ。実際に始まるまでのお楽しみってえことにしておこう。どうだい、嬉しいだろう、京子？」

「ええ、京子うれしいわ。思いきりお楽しみになって。……だから、どうか、いまは京子を許して！」

彼女は終わりのほうを、ほとんど叫ぶように言った。充滿しきった小水は溢れかかり、下腹部に疼痛をすら与えているのだ。タラタラと冷汗が流れ、鞭打たれるように、むごい苦痛であるが、もしこの絨毯の上にと考えると恐ろしさに鳥肌が立つ。

「ねえ、おねがい、おねがい。おトイレ……もうダメなの！」

とうとう、清次が

「三郎、トイレへ連れてってやるか。こんなところへ洪水をぶちまけられると、それこそ艶消しだぜ」

ニタリと陰気な笑みを片頬に浮かべた三郎は、京子を斜めに見詰めていた。

——(つづく)——

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千円

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するたと「告白懸賞」とお書き下さい。

△ 告

白▽

和服の哀美を求めて

山 本 五 郎

一年半の予約購読が切れて以後、書店にて購入する事にしたけれど、田舎に住む身の悲しさ、発売日に合わせて上落するわけにはいかず、毎月二十日前後になると気もそぞろの思いにかられて落着かない。

古いヤツ程古い物をほしがるもので、右を見ても浣腸、左を見てもムチ打ち。裸、又、ハダカの連続で、最後はそこに落ち込む事は分かっていても、その味気なさに反撥を感じ、一旦は奇クと絶縁して十余年。ひたすら我が道を歩いて来たものを、帯揚げに開眼されて奇クと復縁。再び、どっぴりと潰かり込んで抜き差しならぬ今日この頃。地味な装幀

で二百余頁の小柄な造本に盛られた執筆者、投稿者、読者の情念は、鬼気せまるものさを感じ、なんとやらの深情けにも似て、もう離れる事の出来ない我が運命とさえ想う。

心躍る思いで上落した日は発売日をすぎること二十日余り。所用もそこそこに長雨降る街を濡れそぼりながらの小走り、コートのを立てお目当ての書店へとびこむ。

心せわしく目が走る。無い。見当たらない。売切れ? “すでに心は空ろである。

次の書店に急ぐ。目につくものは、今出来の毒々しいばかりの表紙のSM誌ばかり。その陰にかくれた奇クを見付けた時の安堵と喜

び。久しく会わなかった肉親にめぐり会った思いさえする。しかし、その安堵の一瞬後に感じるわびしさ。

この喜びも、我が身に宿る淫靡で悪魔的な暗い肉の悦びなのだ。心の一隅で叫ぶ異分子にせき立てられ、矢の楯もたまらずに同意書を求めて、本屋から本屋へとさまよう気持は振り返ってみるとみじめなのである。今日のように、雨にしょぼ濡ればなお辛く、晴れば晴れたでまた、日蔭を歩いている自分が哀れに思えてならないのだ。街は活気に満ちた人であふれている。その人波にもまれながら私も歩いている。肩を接する人に、声を大にしては云い得ない目的の為に……。

その気持は日常生活にも現われてか、口数の少ない陰気な性格を形造っている。それが外から見れば、真面目で重厚と映るらしい。もちろん、自分で云うのもおかしいけれど、人との交際も仕事も、誠意を以てし、信義をつくし、口数の少ないのを聞き上手で補い、先ずは、日常生活は難をつけられる事もないと自負し、又、人も言う。しかしその我が心の一面を思う時、気持は沈む。そういった時人と話をしている、又、仕事の合間に、ふっと遠い昔を追い求めて、空ろな目をしてい

るな、と自らに思う。

私にも訪れた春のめざめ。そしてSにしろMにしろ、たしかに芽生えたそれは、春のめざめと同時にあったか先であったか、又、後であったかは、おぼろである。

子供の頃、幾つの時であったかは確とせぬが、兄にたわむれのフトン蒸しにされた。生暖かい綿の匂いと真暗ヤミ。我が泣く声もくもって兄の笑う声が遠く聞こえ、息苦しい恐怖感があったものの、奇妙に我が心をそそるものがあったと思う。

又、巻ズシだとフトンで巻かれ、腰ひもでくぐられて放置された事もあるが、泣きながらごろごろと転がり廻ったものの、その束縛感を楽しんだのだろうか、この遊びが私の心に喰い込み、家人の留守を見ては何度も試みた事を思えば、その頃すでにその気があったものらしい。その時は必ず、色あざやかな友禅



の座ぶとんを二ツに折って我が顔面をおおい腰ひもで、ぐるぐると巻き締めて、その息苦しさに恍惚をおぼえた。それが「猿ぐつわ」とも知らずに……。

我が家は貧乏だった。何も知らぬ子供の世帯なら力の強い者の天下だけれど、物心つけばおのずと他の子供達と比較をし始める。顔の美醜も気になって来る。貧乏を意識すればその卑屈さが顔に出るのか、女の子の前に出

ても話も出来ない。いたずらに顔が赤くなるばかりで、遠くはなれてあこがれるばかり。そのかなわぬものへの復讐心が、Sの芽をうちかうのだろうか？

その頃の学制は、小学校六年生から旧制の中学校へ。私達貧乏人は二年制の高等科へと別れる。あこがれの可愛い女の子は、セーラー服のよく似合う女学生となって遠くの町へ汽車通学。ここで、は

っきりと住む世界が違って来るのだ。

このみじめさを救うのか、ごまかすのか。夢に見始めたその可愛い女の子はお姫様で、さまざまな姿態で縛られている情景。そして悪者に責められているお姫様を救うのは何時も私なのだ。その頃は私も責め役ではなかったらしい。しかし、その女の子を、なぜお姫様にしてしまったのだろうか？ 子供のワリに妄想力、豊かであったようだ。

私は読書が好きだった。良書をふんだんに買ってもらえる身分ではなし、借りたり、出先で読んだりするのがセイ一杯だったが、それだけに手当たり次第だった。その結果、少年雑誌よりも、講談本や立川文庫、大人の雑誌の方が好みにあうことを知った。その頃、婦人倶楽部のカラーグラビアに、歌舞伎名舞台名場面集というのがあり、たまたま見た金閣寺の雪姫を美しいと



思った。あの髪形を吹き輪と云って、ピンから垂らす胸元までの細長い髪をいたずらと云うそうだが、それらはずっと後で知ったこと。その時にはただ、ピラピラかんざしも華やかに、豪華な衣裳、錦の帯をだらりに結び、裾引きの身を荒縄で縛られ、今は盛りの桜の幹につながれて身もだえる雪姫の姿に、強いショックを受けたのだった。悪い物を見てしま

ったようで、あわてて頁を繰ってから誰も居ないのを確かめて改めてしげしげと眺めたものだ。さだかではないが身内を走るただならぬものを感じ取り、舞台上の所作事とはいえ女の哀感を見たように思う。

私の父は道楽者であったそうなの、と云っても父の名誉をきずつけるつもりはない。まだ父と名の付かない若い頃の話だから……。母

と一緒にってから次々と生まれた七人の子供を育てるのを一生の苦勞として来た父だ。私達にはきびしく、家庭を大事にして、母にはいい夫であり、子供にはいい父だったと思う。道楽者と云ったのは酷なようだがその時代の観念として、好きだというだけで一座を組み、歌舞伎芝居を打って廻ったとすれば先ず常人ではなさそうだ。父の若い頃の写真を見れば優形で男前である。役廻りも女形で、十八番芸は鎌倉三代記の時姫であったそうなの。一座の花形として浮いた話もあったと思う。

そんな父であったから、母と世帯を持っても芝居と離れる事が出来なかったのか、となりの町にあった芝居小屋の道具方としての内職も、今でいう趣味と実益のサイド・ビジネスというところだ。従って、小さい頃から私も木戸御免だった。父の血を引いてか、私も芝居が好きで、きびしい学校の禁令にも拘らず、友達や先生の目を盗んで小屋に入りびたりだった。

芝居の筋なんか分かるべくもないが、きらびやかな衣裳のお姫様が特に好きだった。結綿髪も初々しい小町娘、清楚な屋敷娘。子供の頃から好みの条件が出来ていたようだ。私の好みの美女達が、舞台上で繰りひろげる責め場から、現在の私の一面が形成されて来たものと思う。

極彩色の妖しい舞台は子供心に強烈な残像を灼きつけた。白一色の雪景色の中、緋の長襦袢姿の三千歳の責め場。やぐらのお七だってそうだ。降りしきる雪の中、つややかな結綿髪を乱し、緋の長襦袢を残しての片はだ脱ぎ。黒衣のあやつるままのはげしい動き。裾の乱れ、振袖のゆらめき。美しいと思う左甚五郎の京人形。精根こめて作り上げた意志なき人形が、黒衣の舞台廻しのあやつるままに踊り狂う。サジスチックな想いにかられる。

この道に迷う者なら、知ぬ人はないであろうと思うが、伊藤晴雨の生涯を的確にえがいた南条範夫が、小説現代七一年六月

号「奇人伊藤晴雨」百二〇頁に

「すべてこれらの活動の根源は、少年時代同級の女生徒に対して感じた毛髪フェチズムと、吉田御殿の責め場を見て恍惚としたサジズムとにあるのだ。しかも彼のサジズムの特徴は、それが同時にマゾヒズムにつながっていることである。彼の責め絵を見るものは、加虐者としての悦びと同時に被虐者としての悦びも、痛酷に表現されているのを感じるで

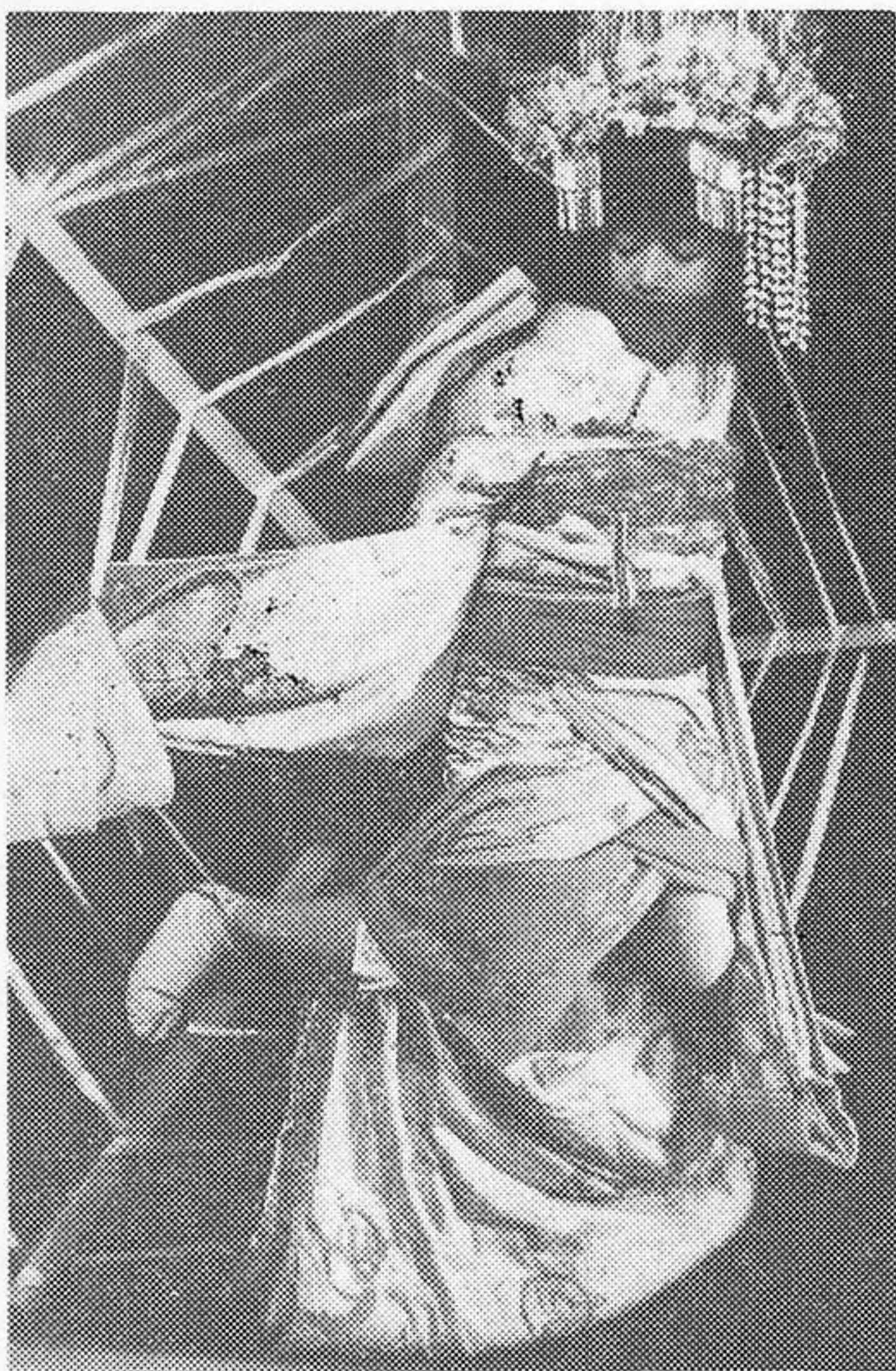
あろう」

と指摘し、更に、「春画であるが」として『祇園祭例信仰記金閣寺』の説明に

「座敷でカミシモの若侍と長髪の男が碁を打っている傍に、もう一人、若い男がそれを見ている。目を愕かす奇抜さは、その碁盤の下に美しい姫君が、仰向けになっているところだ。しかも、その姫の両脚は胸まで折り曲げられて縛られており、衣裳を巻き上げられた

雪白の下腹に碁盤がのせられている。座敷の前に満開の桜の木があり、姫を縛った縄はその幹にしっかりと結びつけられている……。爛漫と桜花開く白昼の座敷に展開されるこの秘画の情景は、加虐の極をつくしながら、見る者を陶然たる夢幻の世界に、誘うような美しさを持っている」

と、紹介されてい



る。願わくばこの傑作を見たいものだ。見せていただくだけで、万金を投じてでも惜しいと思わない。

戦争目的完遂という強大な軍部の圧力から解放されたのは、私の二十才の時であった。自由と平等と権利が氾濫し始めた。戦時下では考えられもなかった男女の交際も、白日の下、堂々と、繰りひろげられるようになった。私にもチャンスはあったけれど、内面の何かがブレーキとなり、話すことすら、しどろもどろ。まったく手も足も口も出ずの状態であった。

貧乏は相変わらずで長男の責任上、家計を助けるのに一生懸命であったのも理由の一つだったようだが、それが私を一層みじめな気持ちにさせた。それに反比例して、美しいものに対するあこがれは益々昇華してゆき、いよいよ近寄り難くしていった。その美しいものとは、私の美の標準による横暴なる男権下の従順を美德とした頃の姫であり、小町娘であり、屋敷娘だった。それは、内面的にも外形的にも完成された美と思う。誰しも持ち合わせているであろう破壊本能が、私の場合、この標準に限定されて来たのだ。

下賤育ちの上好みと笑うがいい。空しく満

たされない青年期の私は、雑誌の挿絵に時たま見られる縛り絵に、映画の縛りシーンに、救いを求めていたのであった。

その頃だった、花嫁の責め写真を見たのは……。女の幸福を象徴する最高の衣裳で身を包んだ、輝くような花嫁姿の美しさは、誰にも否定出来ないだろう。その美しさが縄と暴力に落花みじんに破壊された時、喜びが一転絶望に変わって苦悶する時、私の想い描くところの女の哀美が現出していた。

こんな表現法があったのかと気付いた時が奇クに出会った最初であった。この出会が決定的な開眼であった。それまでは、ばくぜんとるものを身内にかかえながら、SとかMとかの意味も知らなかったのだから……。

人の感覚とは不思議なもので、正に千差万別。美の観点もそれぞれ違うように、何を見て美しいと見、どれをもって快感とするかの相違は大きい。従って我れを持って良しとする人もあるまい。人それぞれが、個々のほんのうを抱えて一生を送ってゆくのだろう。

こんな私でも（一見真面目そう）三十になって初めての見合をした。宗教心の厚い家庭に育った良家の子女である。顔形も私の好みで心根も優しいであった。会話の苦手な私に

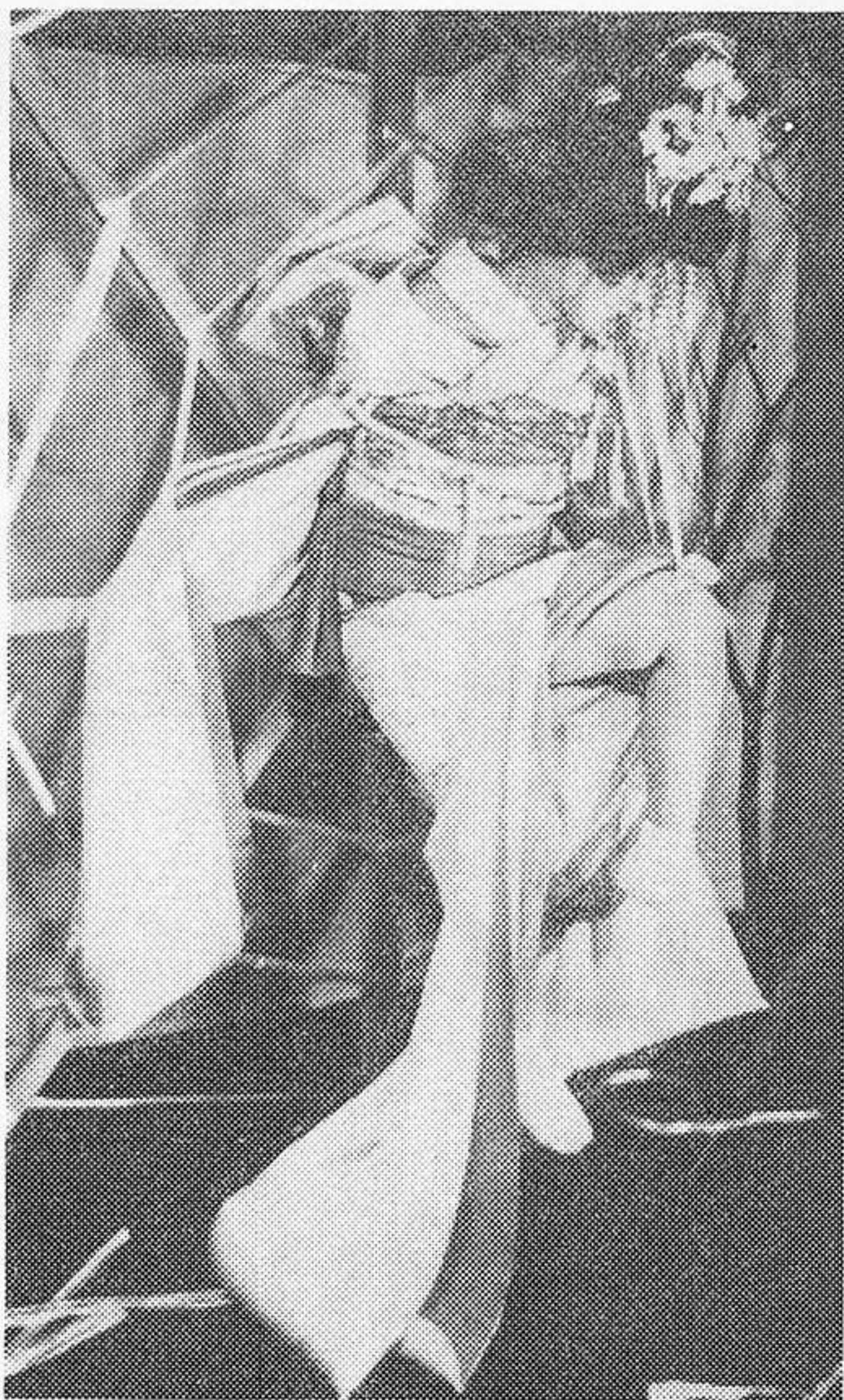
とって、見合の席とは辛いものであった。しかし、その時の相手が、キンシツ相和して十六年、現在の妻である。

結婚前、相当量のコレクションを全部、燃やしてしまった。今になって惜しい事をしたと思う。しかしその当時は、私のかくし持つところの性癖を、その炎を上げて燃えてゆくコレクションの煙と共に、大空に消してゆく決心だったのだ。

その決心に偽りはなかつた。だがささやかな挙式の宴果てた後の新床に、無意識の内に花嫁の長襦袢姿を期待していた。そして、いよいよ現われた彼女の、新しくはあがるが浴衣の寝巻には軽い失望をおぼえたものだが、初めての経験である私にとって、子供が持ちつけない高価なおもちゃをもらってあつかいかねていたといった、困惑の初夜となった。

新婚一、二年は夢のようであった。当時はごく普通の二人だったが、三年目の結婚記念日の夜、私の希望を入れてくれた緋の長襦袢姿の妻は、妙に大人びた感じがしたものだ。

嫁ぎ来て三年。少しも変わらぬ世間知らずの幼な気のあった妻だけに、その緋リンズの色鮮やかな色鮮かさも、さる事ながら、真白な



衿が見違える艶かしさを、帯びて印象的だった。その時だ。忘れていた事を、いや、思い出す度毎に無理に忘れようとして来た過去の慾望が、むらむらと炎を上げて燃え上がって来たのは……。

気が付いた時は、後手に縛られて私の胸の中でもがいている妻を、しっかりと抱き締めていたのだった。

「貴方、なぜこんな事をするの？」と不思議

そうに問いかける妻に、月並みの言葉だけれど「君が可愛いからさ」としかいいようがなく、照れ笑いの自分が恥かしい想いだった。

それからの事は、とても私には書けない。悪魔の所業というべきか、無垢な妻を私好みの女に仕立ててしまった事を……。しかし、夫婦の条件としての愛の交換を、味付けし作為する事によってより効果あらしめ、夫婦の情愛を、いよいよ深めてゆく事に役立つなら

ば、妙味ある事と思う。そして、それも一〇〇%を極める事なく、あと五%一〇%の可能性を残してこそと思うのである。人間、恐れを知るべきであろうという、私の信条とでもいふべきか。

ここまで書いてホッとした。まだまだ書きたい気がするが、文章を綴ることが、こんなにもむづかしく、苦痛なものと改めて思い知った。一生懸命になればなるほど、舌ッ足らずの表現しか出来ない。じれったい気持ちでイッパイである。毎号奇クをかざる執筆者の筆のさを想起して、くやしい思いすらする。

七二年二月号は、三月号より後で入手したのだが、浦紗登子さんの「夕陽よ止まれ」に打たれた。近來まれに見る傑出した作品だと思うし、女性でなければ書けない作品だと思う。才媛とは彼女の為にある言葉とさえ思える。

私のこのつたない一文は「夕陽よ止まれ」に感銘を受けたばかりに書けたと思う。

御不快かも知れないが、私も一緒に祈らせてほしい。

「夕陽よ止まれ、しばしとまれ」……と。

——（おわり）——

カット・春川ナミオ



思いきって送稿してみた私の告白「マゾヒストへの復活」が、三月号に掲載されているのを見た時の感激。もちろん内心では淡い期待を掛けてはいましたが「まさか」という気持ちも強かっただけに、目次に自分のネームを

~~~~~ 日々に接するマゾの世界 ~~~~~

## 妄想と現実

~~~~~ 丸 目 忠 ~~~~~

発見した一瞬の、恥ずかしさを超越したその嬉しさを、お判り頂けますかどうか。とくに毎月、MでありながらS的な発言をして私に一抹の欲びを与えてくれる「福井桃子」女史の横に、私のネームが載っていたのですから大変に感動的でした。

あの告白の中に書きました二度の体験後、年も明けた一月二十一日に、三度目のプレーを、同じマンションで体験することになってその幸運を感謝したのですが、いよいよとなると、どうも隣室から誰かが、こちらの様子を窺っているような気配を感じ、まったくの味気ないものになってしまいました。この

時のことは、機会をみて、ご報告したいと思っています。

さて、ここに再び我をもかえりみずペンをとる気になりましたのは、三月三日付の読売新聞「海外短波」欄の記事にショックを受けたのが原因です。

すでにご承知の方も多いとは思いますが、『パートで、死刑執行人？ 19才のOLが応募』という見出しの小記事を、あえて抜萃させて頂きます。

○

『死刑執行人を募集。ただし男性に限る』という、シンガポール刑務局の新聞広告に

19才のOLが応募した。「なぜ女じゃいけないの。絞首刑の仕事は、レバーを引っぱるだけでいいんでしょう」とおっしゃるこの冷静なミスはクアラルンプールに住むマレー中国系混血のアニタ・チュアンさん。死刑の執行は朝と決まっているので刑務所で半日パート・タイム。あとの半日はマレーシアに戻ってOL勤めをすると割り切っている。「貴女のような若いお嬢さんが死刑執行人に応募するなんて、宣伝くさいと言う人もいますよ」と取材記者に言われたアニタさんは、足を組み直しておもむろに言った。「そんな男、絞め殺してやるわ」……(UPI共同)』

○
この記事を読んでも、全然その気のない人々なら「なんだ、気の強い鬼娘め」とでも、おっしゃることでしょう。

ですが、私にとっては、近来これほどに強烈な興味を抱かせてくれたニュースは他に無いほどのショックだったのです。短い、この文面を、私は幾度繰り返して読んだことだったでしょう。

相手が、いかに死刑囚とはいえ、死の恐怖におびえている人間を朝のアルバイトに絞首

して、午後からOL勤務をしようと割り切って考えるこの若い女性に、特別の興味を抱くのは私だけではなく、きっと世のM族諸氏もそうだろうと思います。

この、中国系マレーシアの若きドミナについて、私は、私の好みを合わせて想像しています。すなわち「小麦色の肌。やや陰のある眸。背はさほど高くなく、体重は55kg前後。たくましい太腿と豊かな臀部を持つ良家の子女」という風に……。

この「海外短波」欄では、この他にも度々ドキリとさせられるような記事やスナップにぶつかることが出事、私は楽しみにしているのですが、新聞紙上ばかりではなく、日常の私の周囲でも、その時の自分のあらゆる立場を忘れて傍観せざるを得ないような光景に出くわし、私のM性をくすぐられることも少なくありません。

「その一ツ」私は、私の家の附近で、犬の散歩をさせていられる三十過ぎと思われる美しいご婦人をよく見掛けます。このご婦人はいつも、左手に犬の首輪をつないだ鎖を持ち右手には、きまって長い竹の棒を握っておられるのです。

その飼犬を打つ為ではなく、野良犬等が

近づく事を防ぐ為の物である事は常識でも判りますが、上品な美しい顔立と、肉づき豊かな身体をスラックスにピッタリと包み、竹鞭を持って犬を歩ませている光景は、裸女を抱くこと等とは比較にならない程の興奮を、私に与えてくれるのです。

又、時として言う事をきかぬ飼犬の背にも、その棒鞭が打ち降ろされる事がなきにしもあらず、等と妄想したる時には、さらにその興奮が倍加されてしまいます。

先の「マゾヒストへの復活」の中で、マゾヒストは特に想像力が逞しいと言う事にふれましたが、想像力がMの快楽の大半を助長していると言っても過言ではないと私は思います。しかしその想像力も、健康な体力を維持している時にこそ充分な威力を発揮するものだと言う事を、私は、最近痛切に感じるのです。十代、二十代の元氣盛りの時には考えもしなかった事です。近頃は仕事等のオーバーワークで疲労度の夥しい時は、たとえこれらの様な素晴らしい光景に巡りあわせても少しの感動も味わぬ凡人同様の状態になる時もしばしばあり、情ない限りだと悲しくなってしまうのです。

「その二ツ」これは昨年の暮の、話になり

ますが、大阪駅地下道の、靴磨屋でのことです。

たまたま汚れた足元が気になって先客の並び列に加わった私は、一番奥の靴置台に黒い婦人用ブーツを見てドキリとなりました。そして、当然そのブーツの主を追った私の目に悠然と坐り、懸命に磨いている貧相な老女を傲慢に見降ろしている三十過ぎの女性の姿がとびこんできました。ポツテリと肉づき豊かな女性である事が余計に私の気をひきつけて思わずポーツと見惚れてしまったのでした。

普通の人にはなんでもないことだろうと思いますが、Mをよく理解されている方々ならその時の私の心情たるや充分に判って頂けると思います。女性専用の靴磨屋を自分でやってみたい等と、あさましい考えを抱くのも、あながち私一人ではない筈だと、考えています。

もちろん、M族といえど、お互いにそれぞれ求める事もいろいろ異なると思いますが、私は特に女性が女性を辱かしめ、或は虐待するシーンに、より強く魅せられます。十数年前、本誌のグラビヤで春日ルミ様が、同性にあらゆる責めを加えていたのが、未だに強く私の印象に残っています。その頃に掲載され

た「ダイアナ夫人」乗杉喜代子作も、今もって忘れる事ができません。さらに古い話になりますが、私の中学生の頃、田村泰次郎原作の「肉体の門」が映画化され、京マチ子扮する踊り子が先輩ストリッパーと喧嘩をして、その豊かなボリリュームで相手を圧倒したシーンも強烈な印象として、今なお私の脳裏に鮮明に残っています。

現在では奇譚が正譚に変わっているのではないかとさえ思える程SMが世に氾濫していますがその先駆者は、本誌をおいて他にないでしょう。SM映画だけでも、この一年間に、洋画邦画をとわず、どれだけの本数が上映されたことでしょうか。性倒錯の世界は別格として、三流映画館で見た「異常集団」の中で、女サディスチンが同性の美人探偵を罠におとしられて馬にして乗りまわすシーンがありました。が、私は五体が膠着状態になる程の興奮を覚えませんでした。

私の若かりし頃の思い出の中に、職場の同僚女性達から残虐性を含んだ言葉を聞こうとして、誘導質問をしかけたことがあります。それは、農家出身の女性に「鶏をツブス」とか、「家鴨を料理する」とか、「牛や馬をしばいて追いたてる」とかいう言葉を使わすよ

うに仕向けるのですが、可愛い顔をした女性が、ごく自然にそれらを口に出したとたん、私は背すじがゾクツとするような気分が味わえて、ひそやかな楽しみに浸れたものです。こんな楽しみを与えてくれるのは、都会育ちの女性より農家出身女性の方が格段に多かったのは当然のことでしょう。

「その三ツ」前記の、犬を散歩させるご婦人のことが影響しているのかも知れませんが、そのご婦人ばかりでなく、私の家の近くに、私がこの種の連想を抱かざるを得ないような奥様がおられる関係か、私は近頃、時として見る夢に、こんなのがあります。

私はべつに犬になっっている訳ではないのですが、散歩していると突然、首に針金の輪がひっかけられるのです。私が動けずにその輪を外そうとしていると、「そのままで見ているらっしゃい。犬はこうして捕えるのよ」といって現われた犬取りは、なんと、その憧れの奥様で、美しい笑顔を私に見せたかと思うと通りかかった野良犬の首を、私が掛けられているのと同じ針金の輪でサッと捕え、ぐいぐい絞り上げてブラ下げるのです。そして「殺すのは、こうするのよ」といったかと思うと観念した様子の犬の脳天を、右手に持ったハ

ンマーで、容赦もなく叩き割るのです。「どう、こんなもの簡単でしょう」と、なんとも言えぬ妖艶な笑いを私に投げかけた奥様は、頭を砕かれた犬をひきずり、平然として去って行かれるのです……。

この奥様とは、常日頃よく顔を合わせて話しますが、その夢のことが重なって、いつも苦しくも甘い気持ちにさせられます。

私だけではないと思いますが、マゾヒストは、残虐性を持つ、又は感じさせる女性に異



イメージギャラリー

『女王蜂』

岡

たかし

常な憧れと崇拜心を持っているということが立証されるような気がします。少なくとも私は、ナチスの冷酷な女看守とか、ベトナムで有名なゴジンヌー夫人などに強く魅せられるということは否定出来ません。

しかし、ここでハッキリ言えることは、それら残虐な情景も、あくまでも第三者的立場での想像であるから、快楽に結びつくということです。いかにマゾ願望一〇〇%のM人間であっても、実際に苦痛を与える拷問にかけられたり、殺害されるという段階になれば、それこそ「Mの快楽」などは味わうべくもないのは当然です。

かといって、まるで遊びごとでいいかという、そうはゆかないのです。私も、都合三度の実際プレーを体験したのですが、真実味が無ければ、とても恍惚感を得られないのですから、ことは厄介なのです。

遊びごとまる出しでは駄目、実際では尚更駄目となると、私など、どうしたら良いのかウロウロしてしまいましたが、結局は、これらの欲びを想像によって求め、程度の範囲を越えないことが一番賢明、ということに落着いてしまうのでしょうか。

手紙から転がり出たM女

ロープのない責め

秋津新次郎



カット・岩波大介・画

私の読者通信への投稿が誌上に掲載されて今日で二カ月目になる。その間、私の呼びかけにに応じて、寄せられた手紙（手記）は七通にのぼった。その中には女性名でありながら明らかに男性のものと思われる筆蹟や文章が二通あり、残りのうち三通は男女いずれとも判別しがたく、確実に女性から寄せられたと思われるものは、二通だけであ

った。

そのうちの一通は、なかなかの達筆で、洒落た花模様の便箋に数行「（前略）あなたは小説を書くなんてウソでしょう。プレーの相手をさがしていらっしやるんでしょう。おあいにくさま。M子（後略）」完全に私の負けである。

もちろん、この種の手紙が寄せられるのは覚悟の上で出した投稿であるが、一方的に住所も氏名もなしに寄せられた手紙には、弁解の機会すら与えられない。何とも腹の立つことだが、ただ一つの救いは、K子（本人の希望で匿名）から寄せられた手紙であった。

便箋十六枚に綴られた、たどたどしい文章

は、K子の教養のまずしさと生い立ちの悲惨さが、にじみ出ていた。その最後の方の一文を引用するならば、

「(前略)ほんとにあつかましい女だと思うでしょうが、私はお金がほしいのです。私がもう少し若ければ、奇クモデルにでもなりたいたいのですが、顔にも自信がありません。けどこんな手紙でも役に立つのでしたらつかって下さい。私の住所は死んでも言えません。名前も仮名です。K郵便局にはひたしい(したい)の誤りであろう)友だちに取りに行ってもらいますので、手紙やお金はK郵便局どめでおくって下さい。(後略)」

誤字や当て字はもとより、表現力の稚拙さは、何度か読み返さなければ理解できず、仮に少しくらい手を加えてみたところで、どうにもならない露骨な描写があったりして、残念ながら使いものにならない。私が求めているのは、こんな手記ではなかった。

もし、強いて使おうとするなら、K子がヤクザものの亭主に売春まで強要されながら、少しづつ被虐性に目覚めていったシチュエーションぐらいだろう。年令は文章から推察して四十才か、それより二、三才上かも知れない。旧かなづかいや送りがな、それに旧漢字

などの使い方から学歴も高等小学校どまりであろう。

私に寄せられた手紙のうち、住所が書いてあるものには全部、簡単な礼状を出した。しかし驚いたことに、そのうち、私書箱あてに出した一通と、K子に出したものの以外は宛先人不明で符箋がついて舞い戻ってきた。一通や二通は、そんなこともあろうかと覚悟はしていたが、今更のようにこの種の手紙の、いい加減さを知らされた思いだった。

K子には、次のような手紙に五千円札一枚を同封して送った。

「お手紙ありがとうございました。随分ご苦労なさったご様子。心から同情いたします。同封しましたお金は、お子様のために何か買ってあげて下さい。甚だ残念ですが、あなたのお手紙では小説になりかねます。せめてお逢いしてお話でも伺えればいいのですが、これは小生の欲というものでしょう。せめて電話でもお声が聞ければ、また手紙を生かして使うことも出来るのですが……。電話は市外のことでもあり高くつきますので、こちらから、させて頂きます。どこかの喫茶店のピシク電話の番号と日時を指定していただければ、あなたにお逢いせずにお話出来るので

はないでしょうか……(後略)」

K子の返事は大きくて期待していなかったと言えはウソになるであろう。だが私は半ば、あきらめ気味であった。早ければ四、五日で遅くとも一週間くらいで返事がある筈なのに二週間たっても、何の返事も来なかった。五千円の金は大した金額ではない。私にとっては、競馬に使う二回分を失ったにすぎないのだが、そのまま礼状一本、寄こさないK子に対して何か裏切られたような気がして、自分のお人よき加減に、舌うちの出る思いがしていた。

それだけに、私書箱にK子の手紙が入っていたのを知ったときは、家に帰るのも、もどかしく、郵便局の薄暗い螢光灯の下で封を切った。手紙には、送られた五千円で子供のために何と何を買っていくらしたと、まるで家計簿報告よろしくつづったあと、実家の方へ子供をつれて金の無心に行っていたため手紙をみるのが遅れて返事が今になったことなどが記されていた。そして手紙の最後に電話番号が書かれていて、×月△日×時から三十分間、待っているで今村君子と呼び出してくれと書いてあった。更に電話の先は、たまに自分が通りがかりに入った店で、もし、

店の名前を調べて自分のことを聞かれても店の人は知らないし、そんなことをなされれば電話にも出ないと念をおしてあった。

当然のことであろう。たまたま奇クにのっていた私にあてて手紙を出したのも、よほど金に困ったことであろうことは文面からも窺い知れるし、その自分の手紙が小説の材料として使いものにならないとわかれれば、今更のように、あからさまな手紙を書き送ったことが恥かしくなってきたのだ。出来ればそのまま、ほおかぶりをしておきたいところだが同封された五千円の重味は、律気なK子の性格から到底そのままには出来ず、せめて電話ぐらいならという気持ちが手紙を書かせたに相違なかった。

それからの私は大変、忙しくなった。しなければならぬことが、いろいろある。まずK子の知らせてきた電話番号から、その店の名前を割り出さなければならぬ。一〇四番では電話番号から、持主の名前は教えてくれない。それは、ある必要から過去に調べて知っていた。おかしい話である。住所氏名を言えば番号を教えてくれるのに、その逆の場合は規則によって教えられないとは、どう考えてみても不思議だった。しかし、今更そんな愚

痴を言ってみたところで始まらない。一番、手っ取り早い方法は、そのダイヤルを回して相手の名前を知ることなのだが、もしK子の家の電話であつたり、K子と親しい人の電話であれば、私の軽率な態度で、K子は私から手のとどかない存在になってしまう。

正直に言おう。M子という正体不明の手紙にあった通り私は、いやしい下心があつたことを告白しなければならぬ。だが、弁解めくようだが読者通信欄によって、SMプレーの女を得られるなどという甘い考えは、そのとき、それほど強いものではなかったのだ。投書のとおり、資料として出来るだけ、たくさん集めておきたいと、作家特有の欲張った気持ちが純粋な動機なのだ。だが投書が掲載されて、手紙が舞い込み始めると私の純粋さはいつのまにかSMプレーを望むM女からの手紙の来る期待に胸を、ふくらませていったのである。その矢先に舞い込んだK子の手紙だった。それは、お世辞にも上手とはいかぬ字の上、表現力が稚拙で、どきっとさせられるほど露骨な言葉が並べられていた。それだけにリアルで、なまなましく、私は、まだ見ぬK子を頭の中で描きながら、K子を素っ裸に剥き羞恥責めを楽しんでいたのだった。

私の頭の中におこり始めた妄想は、それだけでは、とどまらず、何とかK子に会って心ゆくまで頭の中に描いたK子とのプレーを実行したい衝動にまで、高まってきていた。

私は、O市の電話帳を手に入れると、まず手始めに人名別の電話帳の「ア」の欄から調べはじめた。上下二巻に別れた電話帳から、たった一つの電話番号を、さぐり出そうという大それた試みは、ものの十ページも調べると目がチカチカしてきた。私は、ふと思いついて職業別の電話帳と取り替えると、喫茶店をさがしてみることにした。私が出した手紙に喫茶店のピンク電話の番号でも知らせてくれと書いたことを思い出したからである。小さな七号活字で、ぎっしりつまった電話番号は、さしづめ活字の洪水である。私は、その中から同じ局番を見つけると、一つ一つK子の知らせてきた番号と照合を始めた。

「あつた！」

私の胸は大きな鼓動を、たてはじめた。間違いなかった。O市××町〇〇番地の、喫茶「V」。私はその町名と店名を脳裏に、たたき込むように見つめた。

喫茶店Vは、余り大きな店ではなかった。

ときおりO市には仕事で来ることがあるが、たった一軒の喫茶店をさがすために、わざわざO市まで出かけたのは初めてである。

K子の手紙に書いてある時間に、十五分の余裕をもってVに入った私は、前日にあらかじめ確かめてあったピンク電話のよく見える隅のボックスに身をおろすと、ゆっくりと店内をみまわした。テーブルの数は約二十、そのうち七割は、ふさがっている。殆どがアベックか二人以上の客ばかりで、私の求めているK子らしい一人で坐っている女の姿は見当たらなかった。

私は一息つくくと、急に不安になってきた。もしひょっとして、K子がこの店に現われなかったら私のたてた計画は水泡に帰すのだ。私はピンク電話と入口のドアを交互に見ながら、私がたてた計画通りに、ことが運ぶのを祈った。

約束の時間の二分前。入口のドアに人の気配を感じて、どきっとしながら振り向いたが二人づれの男の客が、入ってきただけであった。私の視線は、あわててピンク電話に戻った。長い長い二分間だった。極度に緊張した私は、つよい尿意をおぼえた。それは、高校受験のときに答案用紙をくばられた時を思い

出させた。

突然はげしい電話のベルが鳴りはじめた。それは途方もなく、けたたましい音に感じられた。受話器を取りあげたウエイトレスは簡単うけこたえをしたあと、店内の客に向かって声を、はり上げた。

「今村さん。今村さん……。いらっしゃいますか」

まちがいはなかった。私が頼んでおいた友人のかけてくれた電話である。反射的に腕時計をのぞく。約束の時間きっかりである。私は舌うちをした。やはり少し早かったようである。K子は三十分の時間巾をおいて、約束の時間を指定してきているのだ。また十分たったらかけてくれることになっている友人にすまないと思う気持ちよりも、約束通りキツチリと時間を守ってかけてきた友人を、うらみがましく思った。

と、電話の前に向かい合って坐っていた女性客の二人のうち、向こう側をむいていた女性が、立ち上がってウエイトレスから受話器をうけ取ったではないか。

「あっ、あれが……」

私の視線は受話器をうけとった女性に吸いついた。年令は三十歳くらいにしか見えなかつた。店内に入ったとき、ひよっとすると

思った。店内に入るとき、ひよっとすると思わぬでもなかったが、年令のちがいと、まさか二人づれで来ていようとは思ってもみなかった。まだ来ていないものと思い込んでしまった。受話器を持った女性の低い声に全神経を集中させた私は、その女性がK子であることを確信した。

私の友人は私に頼まれた通り話しているらしい。私に急用が出来て、どうしても電話が出来ないから明日もう一度、同じ時間に電話をするから来てくれるように。もし都合がわるかったら、もう一度、時間と電話番号をあとで手紙でも知らせてくれるように……と「あのう、それじゃまた手紙で知らせます」K子は受話器をおくと、ほっとした表情でもとの席へ戻った。

考えていたほど、みにくい女でなかった。

私は手紙から、世帯やつれのした、四十歳を過ぎた中年女を想像していたが、私の想像はみごとにはずれた。それもうれしいことに、予想外に年が若かった。私の席からは三十歳をすぎたばかりにしか見えない。

もっと近くで、よく確かめたい衝動をおさえながら、私はK子が店から出るのを根気よく待っていた。約二十分くらいか、K子と向

き合って、こちらに顔を見せているK子の友人らしい女は大きなゼスチュア入りで、くったくなく話している。早口なのでK子のうけこたえがよく聞きとれなかったが、話の内容は誰か同僚らしい女性の噂話のようだった。話の途切れめにK子が時間をきいたらしい。女は腕時計を眺めると、あわてて立ち上がった。K子と女は私の前を通りレジで勘定をしますと、ドアの外に姿を消した。それを待っていた私は伝票をつかんでレジに百二十円を支払い、あわててあとを追った。

前を歩いて行く二人のあとを気づかれないうようにつけた私は、早くK子が一人にならないかと、いらだててきた。交叉点まで並んで歩いていた二人は、そこで左右に別れた。急いでK子のあとを追った私は、五メートルほどの間隔を保って、あとをつけた。K子は何か考えごとをしているような恰好で、うつむき加減に前に行く。

私は何度か近づいて声をかけようとしたがすれちがう人達がいたりしてチャンスがなかった。私は決心すると足早にK子を追いつく。うしろから歩いてくるK子の足音を確かめながら、くると振り返った。

一瞬、戸惑ったように立ち止まったK子は

ちらっと私を見ると、怪訝そうな顔をみせて私と、すれ違おうと、足を進めた。

「今村さん。ぼく、〇〇です。私書箱××番の」

「ああ!」とK子の口が声にならずに半開きになった。あまりのことに次の言葉が出てこないといった様子である。

「お会いしたかったんです。どうしても一度ぼくの話をきいて下さい」

「ど、どうして私のことを……」

「それは、いずれゆっくりお話します。随分苦労しましたよ。〇市の電話帳を片っぱしから調べて、あのVをさがし出したのです」

「〇市の電話帳を?」

一瞬、怪訝な顔をみせたが、電話帳を片っぱしから調べたという言葉の持つ意味をさとしたのか、K子の目は大きく見開かれた。

十五分後、私とK子は近くの喫茶店に向かい合っていた。

初対面のぎこちなさは、もう幾分うすれてはいたものの、それでも面はゆそうに顔をふせながら私の話しかけにうなづくK子は、あの大胆な手紙をよこした本人とは思えない初々しさに、あふれていた。

私は本名の名刺を出し、今している仕事を説明したり、私が以前に書いた作品の載っている雑誌を示しながら、一人でしゃべりまくった。

「この本、貸してもらえませんか?」

K子は私の書いた作品に興味を持ったらしく、はじめてといてよいほど自分の方から話しかけた。

「どうぞ、どうぞ。よかったら、その本、もらって下さい。家には、もう一冊、とってありますから」

「それじゃ、いただきます」

K子は雑誌をおし頂くように持ちあげた。好ましかった。惚れた欲目かその動作の一つ一つが、想像していたよりも若々しく、思わず顔が、ゆるんでくる。

「お手紙では、お子さんとお二人で暮らしていらっしゃるとありましたが、今日は?」

「はい、すぐ近くに姉がいるんです。今日は姉のところにおいでしてきました」

「そうですか」

「〇〇さんは」

「えっ! ぼくですか。……子供は一人あります。別れた女房が連れて行きましたがね。」

今更十才になります」

「それで、今……」

「おふくろと二人きりです。一度、うちに遊びに来てください」

取りとめのない話が続いた。会えば、なんとかなる、そんな安易な気持が心の片隅にあ

って、K子に会ってから、どのように話を進めるかは考えてきていなかった。

「手紙、たくさん来ました？」

「えっ！ 手紙……ああ、投書のですか」

話が、ようやく核心にふれてきた。私は救

われた思いで、奇クに投稿してからおこった、いきさつを話した。

「あのう、何時でしようか。今……」

私は、今にもK子が帰らなければと言いつづけるのではないかと、不安にかられながら話をつづけていただけに、来るべき時が来たことを、さくらずにはおれなかった。

「ええと、×時すこし前です」

私は腕時計をのぞきながら、答え

た。

「帰り、お急ぎですか？」

「いえ、別にそういうわけじゃないんですけど……」

「そうですか、安心しました。もう帰らなけりゃと言われたら、どうしようかと思ってたんです」

私は、ほっと一息つく思いだった。だが、いつまでもこんなところで、取りとめもない話をしていても仕方がなかった。しかも、この明るい喫茶店では何とも面はゆく、どこか場所を変えたかった。店は若い男女の集まるところらしくビートの効いたエレキが、やかましい。私は思い切って誘ってみることにした。

「もっと静かなところへ行きませんか。……どうも落着かなくて」

K子は一瞬、ちゅうちょする様子を見せながらも無言で、うなずいた。

△△ダンスホールは超満員であった。私はフロアーのまん中で、しっかりとK子を抱きしめながら身体を、ゆすっていた。曲がタンゴになろうが、ジルバになろうが、私たちの踊りは変わらなかった。

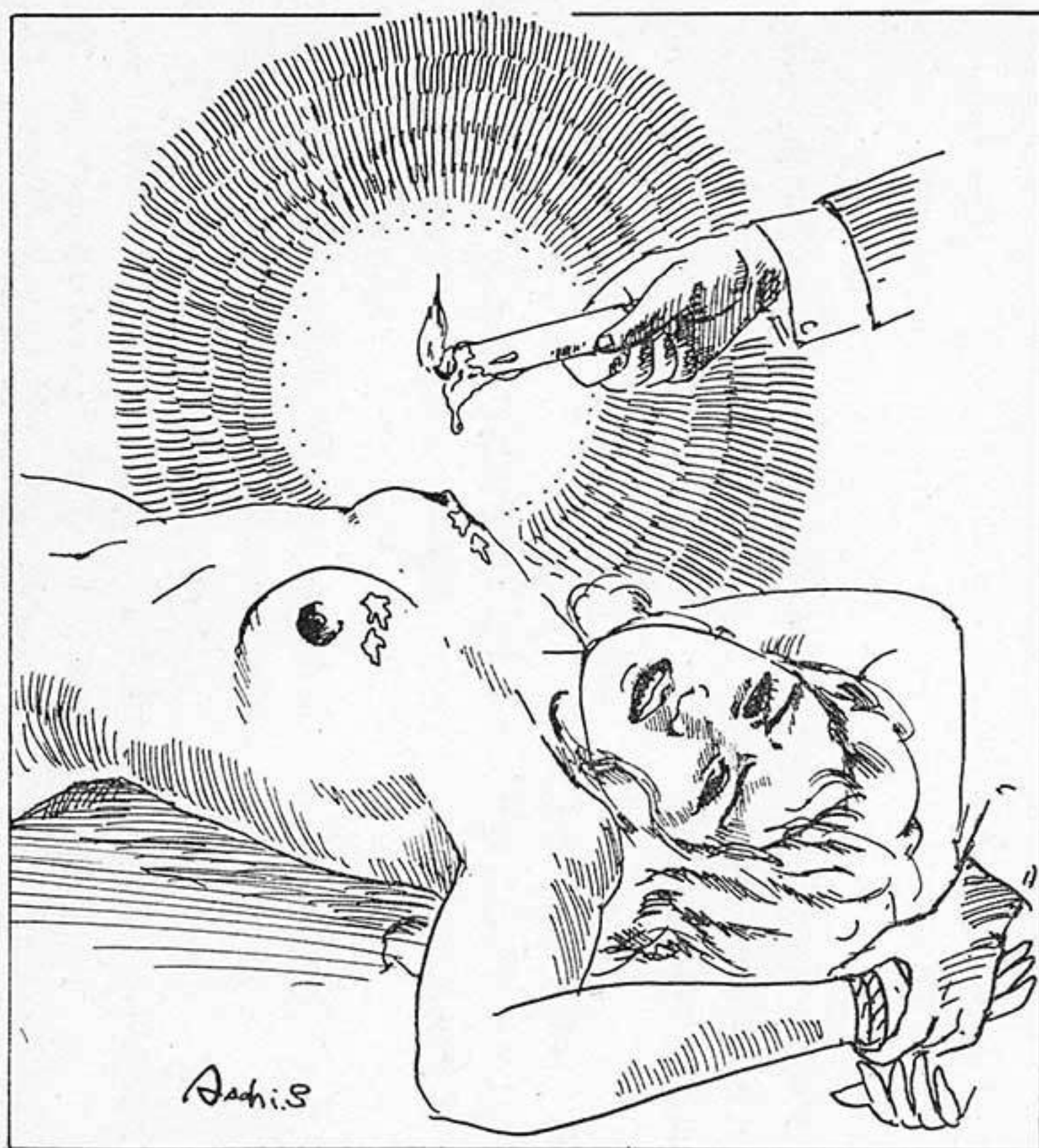
イメージギャラリー

『熱

涙』

須坂

旭



「あなた、ダンスは？」

喫茶店を出てすぐに問いかけた私にK子は怪訝そうに私を見つめたが、一瞬、視線をふせた。私の思い過ごしでなければ、それはK子が、これからおこることへの期待に、羞恥のあまり視線を合わせておれなかったのだ。

曲は、ゆるやかなブルースに変わった。私たちの周囲は踊っているというよりも、身体を密着させて腰をゆすっている人たちばかりである。人前もかまわずピッタリと唇を合わせている人や、女の両腿に膝頭を割り込ませているものもあった。

私は唇を、そっとK子の耳朶によせて熱い息をふきかけながら、囁いた。

「ぼくとプレーしてくれるね」

K子は無言だった。私はK子と組んでいた左手を背中の方へまわすと、高手小手になるように、しぼりあげた。

「ううう……」

K子の口から、聞きとれないほどの低い、うめきが洩れた。

私は高手小手にしぼりあげたK子の片手をそのままに、K子の耳たぶに齒をたてた。

「ああっ」

ぎくつと身を慄わせたK子は、羞恥のため

か私の胸につよく顔をおしつけた。

「どう、付き合ってくれるね」

「……………」

「返事は？」

私はもう一度、高手小手を強くしぼりあげた。

「はい……」

殆ど聞きとれないくらいの低い声だった。

ホテルの従業員は、マホービンとコップをお盆にのせてテーブルの上においた。

「お帰りのときは、電話でフロントまでお知らせ下さい」

事務的な冷やかな口調で従業員が立ち去ると、K子と向き合って坐っていた私は立ち上がり、ドアをロックした。

K子は、しばらく無言でうつむいていた。

その姿は、とても三十をすぎた女にみえなかった。まるで生まれて始めて連れ込みホテルへきた処女のように、かたくなっている。私は壁にある部屋のスイッチを切ると、テレビをつけチャンネルをまわした。いい具合に歌の番組があり、見なれた歌い手が声を張りあげていた。灯りを消した部屋はカラーテレビの明かりだけで薄暗かった。

私はK子の手をとると立ち上がらせ、曲に合わせてステップをふみ始めた。もう誰に遠慮もいらなかった。私はK子の両手を彼女の背中で交錯させ、高手小手の要領で引きしぼると、K子のミニスカートの膝を割って自分の膝頭を、こじ入れた。

「ああっ、はあ……」

K子のくぐもった声は、私の嗜虐性を呼びさました。私は、はやる心をおさえながらK子に言った。

「お風呂へ入りなさい」

「……………」

「ぼくの言うことがきけないのかい。返事をするんだ」

私は、交錯したK子の手を力いっぱい吊り上げた。

「は、はい」

私は手をはなすと、K子を、そこに残してベッドのある次の間へ向かった。

浴室からは、K子の使うシャワーの音が響いてくる。私はホテルの浴衣に着かえ、ベッドに腹ばいになった。たばこをふかしながら責め具を持ってこなかったことを心の隅で悔いていた。出がけに責め具を用意して行こう

と思わぬでもなかったが、K子と会えるとはきまっていなかったし、また仮に会ったところで、はたしてK子がある場で、すぐに私とのプレーを承諾してくれるかどうか心もなかった。その上、K子が私の好みに合う女性か否かも心配だった。

だが、現実にはこうして二人だけの時間を持てた今、何の責め具も持っていなかったことは残念でならなかった。せめてK子が和服でも着ていれば何とかなるのだ。女の着物は多くの紐が使っており、絶好の責め具になる筈である。私は今すぐ使えそうなものを考えてみた。ホテル用の浴衣の短い紐が二本、それと私のベルト。これだけが、すべてである。私は、この少ない小道具を如何に有効に使うべきか智恵を、しばった。

K子が浴室から出た気配を察すると、私は無言で、K子と入れちがいにシャワーを浴びた。たんに念に身体をぬぐいバスタオルを腰にまくと、私はK子の待っているベッドへむかっ

た。K子はベッドの上で毛布を顎まで、すっぽりと包み、向こうむきになってふせていた。私は、そっとテレビを消した。部屋の中が真暗になると、今まで気がつかなかったが窓の外でネオンの点滅する光が、ぼうと一条の光

になってベッドを照らした。私は思い切って部屋の入口にあるスイッチをおした。闇になれかけた目に室内は、まぶしいくらいに明るく感じられた。K子は、あわてたように毛布で、すっぽりと頭を隠す。私はその横にすべりこむようにして、思い切り毛布をはいだ。

「あっ……いや！」

K子は、くくりざるのように身を丸くして四肢を縮めた。純白のシュミーズが少しまくれ加減で太股が露わだった。向こう向きになって、こんもりと盛り上がったヒップはシュミーズを通してパンティの線が、くっきりと見える。私は短い浴衣のひもを持ち、素早くK子の両腕を後ろ手に、ひもをまきつけた。K子は、あらがうような仕草を見せたが、すぐに、おとなしくなった。

私は、うしろ手に縛ったK子をベッドからおろすと、床に正座させた。K子は私と視線を合わすことが恥かしいのだろう。うしろ手で正座したまま、少しうつむき加減で顔をふせていた。

「いいか。これから君がしなければならぬことは、ぼくの命令に絶対服従することだ。そして言われたことには必ず、『はい！』と

答えるんだ。わかったね」

「……………」

「返事は？」

「……………」

私は、やにわにK子の髪の毛をつかむと顔をおこした。

「ううう……」

「返事は！」

「は、はい」

「よろしい」

私は手をはなすと、K子の前に立ちただかった。

「顔を上げなさい。私の方を見るんだ！」

K子は強い私の口調に、ひくつと肩をふるわせたが、おずおずと顔をあげた。一瞬、うす目をひらいて私を見たが、はっとしたように、かたく目をとじてしまった。

私は腰にまいたバスタオルをとくと、ばらりと床に落とした。

「目をあけなさい」

「……………」

「返事はどうした！」

「は、はい」

K子は目の前に男性を見て、あわてたように顔をふせた。

「さあ、オシャブリをするんだ」

私はK子の髪の毛をつかむと引きよせた。

「ううっ……」

私の背筋を、するどい快感が走った。意外だった。ひょっとしたら拒否するのではないかと思っていたのだが、K子は幼児が母親の乳房に、むしゃぶりつくように口に含んだ。初めてではないのだろう。それほど巧みとはいえないが、懸命に奉仕しているのが、よくわかった。技巧そのものは必ずしも私を満足させるものではなかった。だが私は、金で買った女の巧みな技巧よりも、K子のM性による男性への奉仕が、いじらしいほど、いとしく、背筋がぞくぞくするほどの快感に酔っていた。

私は一たんK子の手をほどき、シユミーズもパンティも取り去って全裸にした。K子はまるで意志のない人形のように私のなすがままになっていた。ともすれば、その場にくずれ落ちそうになるK子を立たせたまま、私はもう一度、K子をうしろ手にしばった。更衣室からズボンのベルトをはずしてくると、K子のウエストをしめあげた。少し肥満体の私のバンドの穴はK子のウエストに合うわけもなく、私はバンドを二回ほど、よじってK子

の腰で、とめた。前へ回った私は、もう一本の浴衣のひもをバンドにゆわえると、K子の股をくぐらせた。浴衣のひもは、こんもりと盛り上がった双丘を割って後ろのバンドをくぐり、思い切り締めあげる。

「ひいっ……いたい！」

K子の熱い悲鳴があがった。私は思わずK子の顔をみた。眉をよせ、苦痛をこらえているK子の顔は、M女だけが持つ特有の美しさがあった。

K子は無意識のうちに少しでも苦痛をやわらげようとするのか、少し股を開き加減に腰をかがめる。

私はK子をタテなわのままベッドの方へ追いたてた。うしろ手にくぐられ、恥かしいひもに締めあげられたまま、羞恥にもだえるように、よちよちとベッドへ向かう。私はK子をベッドの上に、つき倒すように横にするとK子の肌を、まさぐった。乳房から始まって耳たぶからうなじへ、私の口唇はK子のもっとも感じそうなところへと這いまわる。K子はそのたびに、うめきをあげて身をもんだ。

「うう……ねえ、ねえ……」

K子は息もたえだえに声をあげた。K子は恥も外聞もなく、とうとう私の軍門に下った

のだ。私はこのときを待っていた。たてひもを解き、ベルトをはずし、手を自由にすると、K子はむしゃぶりつくように私に抱きついてきた。

外はもう、とっぷりと暮れていた。K子をアパートまで送り私は次の再会を約束した。来月、K子の勤め先のレクリエーションがあるという。二泊三日のこの旅行をやめて、私の住むK市で過ごすことを、約束してくれた。レクリエーションへ行くために子供は姉があずかってくれることになっているというのだ。

こうして私は、ロープのない責めを経験した。この次は、私の愛用の責め具を持つてのぞむことを伝えと、K子はあの狂態がウソのように、恥かしそうにうなずいた。この次は忘れずにカメラも用意して行こう。

辻村氏や塚本氏のように行かないだろうが、私は、私なりに撮ってみるつもりだ。そして、その結果は又、本誌に投稿したいと思う。

私は今、K子との逢瀬を指折りかぞえて待っている。それは、小学生の頃、遠足を心待ちにしていた気持と、とてもよく似ている。

花蛇

● ● 堂目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

|| 番号 || 『花決定版』 || 定価 || 一、〇〇〇円 (送200円) ||

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中であります。過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となった訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

△内容主要見出し一覧▽

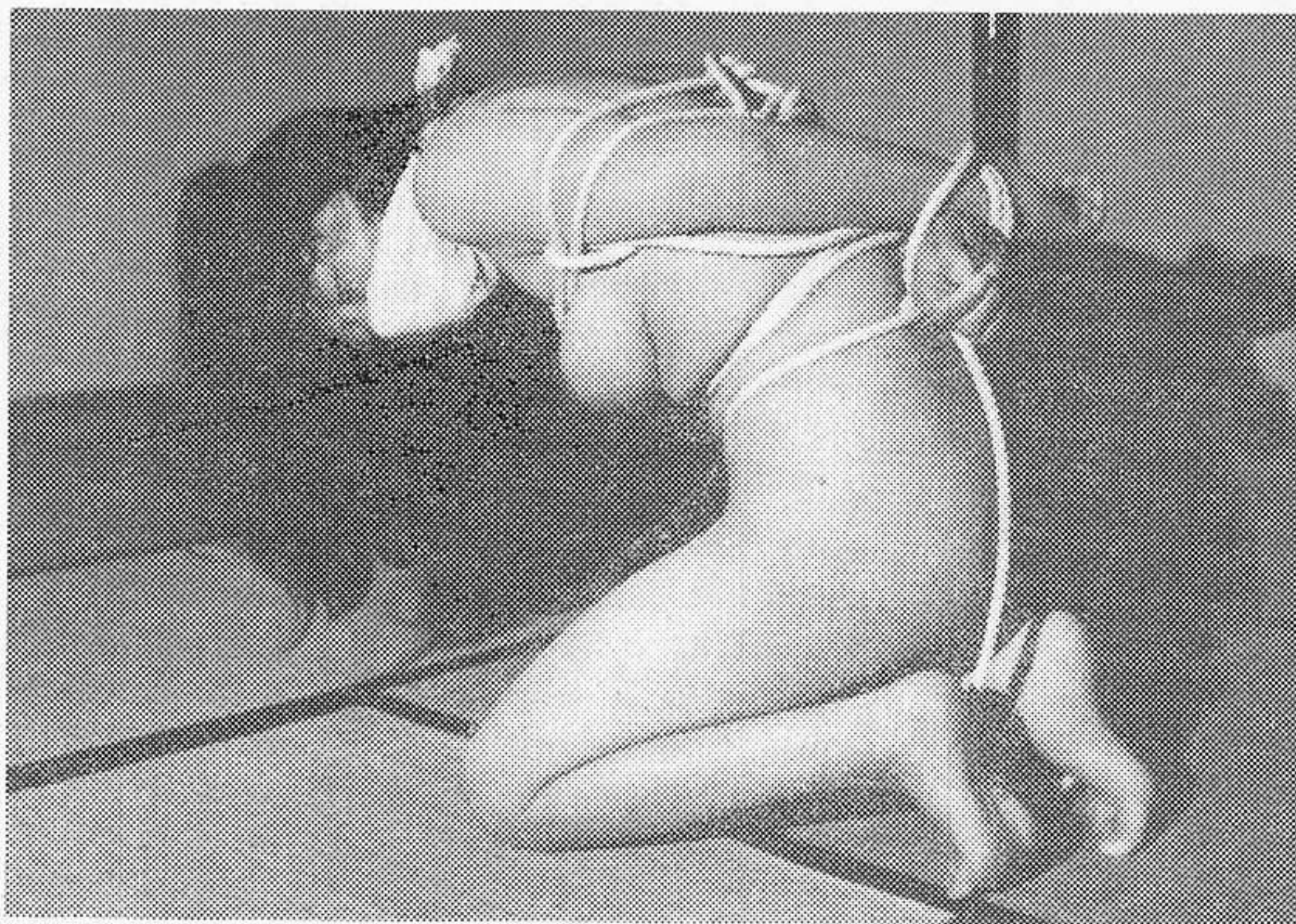
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----------|-------|-------|-------|------|------|-------|---------|-------|-------|------|-------|------|---------|-------|--------|---------|-----------|------|----------|
| 第一 | 第二 | 第三 | 第四 | 第五 | 第六 | 第七 | 第八 | 第九 | 第十 | 第十一 | 第十二 | 第十三 | 第十四 | 第十五 | 第十六 | 第十七 | 第十八 | 第十九 | 第二十 | 第二十一 |
| 第一章 | 第二章 | 第三章 | 第四章 | 第五章 | 第六章 | 第七章 | 第八章 | 第九章 | 第十章 | 第十一章 | 第十二章 | 第十三章 | 第十四章 | 第十五章 | 第十六章 | 第十七章 | 第十八章 | 第十九章 | 第二十章 | 第二十一章 |
| 発端 | 恐ろしい探偵小説 | 美人の恋愛 | 華麗な来客 | 救援者の失 | 狼への好 | 魔物の哄 | 怖れる地下 | 翻弄される美女 | 淫蛇の執念 | 美姉妹の危 | 色事調教 | 美津子受難 | 落花微塵 | 密室の秘密シヨ | 脱走の失敗 | 華やかな饗宴 | 地獄屋敷へ新顔 | 翻弄されるカップル | | 一千万円の身代金 |

| | |
|-------|-------------|
| 第二十二章 | 身代金奪取の失敗 |
| 第二十三章 | 涙の宣誓文 |
| 第二十四章 | 連命の逆転劇 |
| 第二十五章 | 奇妙な三々九度 |
| 第二十六章 | 飼育される白い動物 |
| 第二十七章 | 悪魔と悪女の悪業 |
| 第二十八章 | 屈辱の地獄図絵 |
| 第二十九章 | 逃走の恐怖と失敗の結末 |
| 第三十章 | 悪鬼達の残忍な所業 |
| 第三十一章 | 落花無残の修羅場 |
| 第三十二章 | 淫らな美女の調教 |
| 第三十三章 | すさまじいショーの展開 |
| 第三十四章 | 汚水にまみれた宝石 |
| 第三十五章 | 華々しき美女の屈伏 |
| 第三十六章 | 対峙する美女と美女 |
| 第三十七章 | あくどい陥穽 |
| 第三十八章 | 羞恥図絵の展開 |
| 第三十九章 | 清纯な令嬢の屈服 |
| 第四十章 | 人身御供の令夫人 |
| 第四十一章 | 深窓の美少女とズベ公 |
| 第四十二章 | 小夜子への執拗な調教 |
| 第四十三章 | 変性色事師の登場 |

第四十四章 生れかわるスター京子
第四十五章 激しいスターへの訓練
第四十六章 低脳男と令夫人の結婚
第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人
第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十九章 悪魔たちの哄笑
第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一章 珍芸を開陳する令夫人
第五十二章 淫靡な時代劇ショー
第五十三章 華々しきショーの展開
第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり
第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め
第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七章 悪党の執拗ないたぶり
第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九章 勝ち誇る悪党一味
第六十章 中国伝来の秘法
第六十一章 緊縛された美女の涕泣
第六十二章 新しい餌食への触手
第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄
第六十四章 恐怖の責め続く
第六十五章 結末なき責めの結末
第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人
第六十七章 新しい犠牲の到来と静子の狂態
第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女
第六十九章 ニューフェイスに飼育開始
第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演
第七十二章 女盛りの妖美な肉体
第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号
〒5.58 暁出版株式会社宛

〒5.58 大阪住吉郵便局私書函第41号
 出版株式会社宛



— M 女通信 V —

浩子の・・・

近況のことなど

高 村 浩 子

今月もまた拙いお便りを書

きました。読みづらいところ
がありましたら、どうか、い
かようにもお書き改めて下さ
いませ。

「暑さ寒さも彼岸まで」と、
よく申しますが三月も末近く
なりますと、朝晩つかいませ
水道の水も、なんとなく「水
ぬるむ」といった感じがいた

します。

このアパートに移ってまいりましてからの
浩子は、毎日平凡な暮らしをつづけています。

管理人のオジサンが時々、私の部屋へ入っ
てきては無駄話をしてゆくのが、私の日常の
変化といえはいえます。といひましても、私
の方は殆ど喋りませんので、いつも彼が一人
で、このアパートに住んでいる人達の噂話な
どを、べらべらと、とりとめもなく喋ってゆ
くのです。

新聞にのっていたニュース、テレビやラジオで放送したことなどを面白オカシク、いかにも感心したように話した上で、自分の考えをつけ加え、私の意見もきくのですが、多くは私が、ただ相槌を打つだけです。

世界状況だとか、日本の政治や経済のことなどが彼の話題にのぼったタメシはありません。一家心中だとか、自動車強盗だとか、保険金目当ての放火だとか、そんな新聞でいえば社会面にのるような事柄が彼の興味の中心でした。ですから、ニクソンの訪中よりも、赤軍派の、あさま山荘での、泰子さん人質事件の方が彼には、たまらなく興味があるのです。

それに彼はプロレスが大好きのようです。私はプロレスなんか一度も見たことはないし少しも関心もないので、どんなものか知りませんのに、そんな私をつかまえて、彼はいかにも面白そうに、試合の模様を、話してきかせるのです。日本や外国の選手の名前もよく知っていて、名前をあげて私に説明してくれますが、私にはチンプンカンプンです。

先日のことです。

夕食も入浴も終わって、私が編物でもしうかと編棒をとりあげたとき管理人のオジサ

ンが入ってきました。例のように私の前に膝をつき合わすように坐って他愛のない世間話を始めたのです。私の手元や横顔をのぞきこむように、自分の話に一々念を押すのです。私が生返事していると、同じ話をくりかえしくりかえしします。

そのときです。ノックもしないで管理人の

奥さんが大変な権幕でドアを開けて入ってきたかと思うと、両足を開いて仁王立ちになったままで早口に、まくしたてました。
「あんた、また、こんなところで油売ってるんだね。この忙しいのに、なにさ。早く帰っておいでよ」

私の方はジロリと、にらんだままで、それ





だけ言うと、畳をけって出てゆきました。

管理人のオジサンは「じゃ、また後で」とバツの悪そうな顔を無理に笑うように、つくろって出てゆきました。そして、そんなことがあってからは彼も私の部屋へ、あまり姿を見せなくなりました。

読者の方からの私に対するお手紙、小包で送っていただくほど沢山いただきました。

この前、電柱のかげや廊下で私を待ち伏せて、結局私の部屋と一緒に住まわせてほしいと一方的に頼みこむ青年があらわれたのに、こりごりして、このアパートに移ってからはこの住所はお知らせしないことにしております。郵便物を勤め先宛にしてもらっていましたが、そこへも訪ねてくる人があります。私の勤め先は喫茶店ですから、お客さんとし

て来られるのは結構なのですが、そんな用件で見えられると、私にとっては職場なのでから、いやなのです。

第一、私がこの方なら是非お逢いしたいと願う相手じゃなくて、お返事を差し上げるのも、ためらった上で、お断わりの意味で書いた手紙を見て突然、訪ねてこられるのには、私も困ってしまいます。

そんなわけで、今では私はお友達の敏子のところで郵便物を受けとって貰うよう、お願いしております。彼女だったらボーイフレンドも沢山いて、男ずれがしているので若し訪ねてきても、うまく応待してくれると思うのです。でも敏子の口ぶりでは男から逃げてばかりいないで、もっと男を見る目を養うため男に接しなければダメだということです。そんなことって、私にとっては苦手なんですけどやはり今までの私って温室育ちだったんでしようか。奇クのモデルとして使っていたいたときも甘やかされていたかもしれせん。

この間、一人の青年とお逢いしました。

お手紙の文面からして真面目そうな人だったし、横書きの、しっかりした細い文字が気に入って、とうとうお逢いしたいというお返事を書いてしまいました。それまでに、ラブ

レターのようなお手紙を三度ばかり交換した上でしたが、その方と手紙のやりとりをしている間は、他の方には一切お返事を書く気がしなくなったのは自分でも不思議でした。これが女心というものか、と思います。敏子なんかは同時に何人ものボーイフレンドとつきあっている、なんの抵抗も感じないらしいので、こんな気持は私だけかもしれません。敏子は男の子にとっては、とても魅力的なもので、いつも彼女のまわりには、カッコイイ男性が、うろうろしているのです。

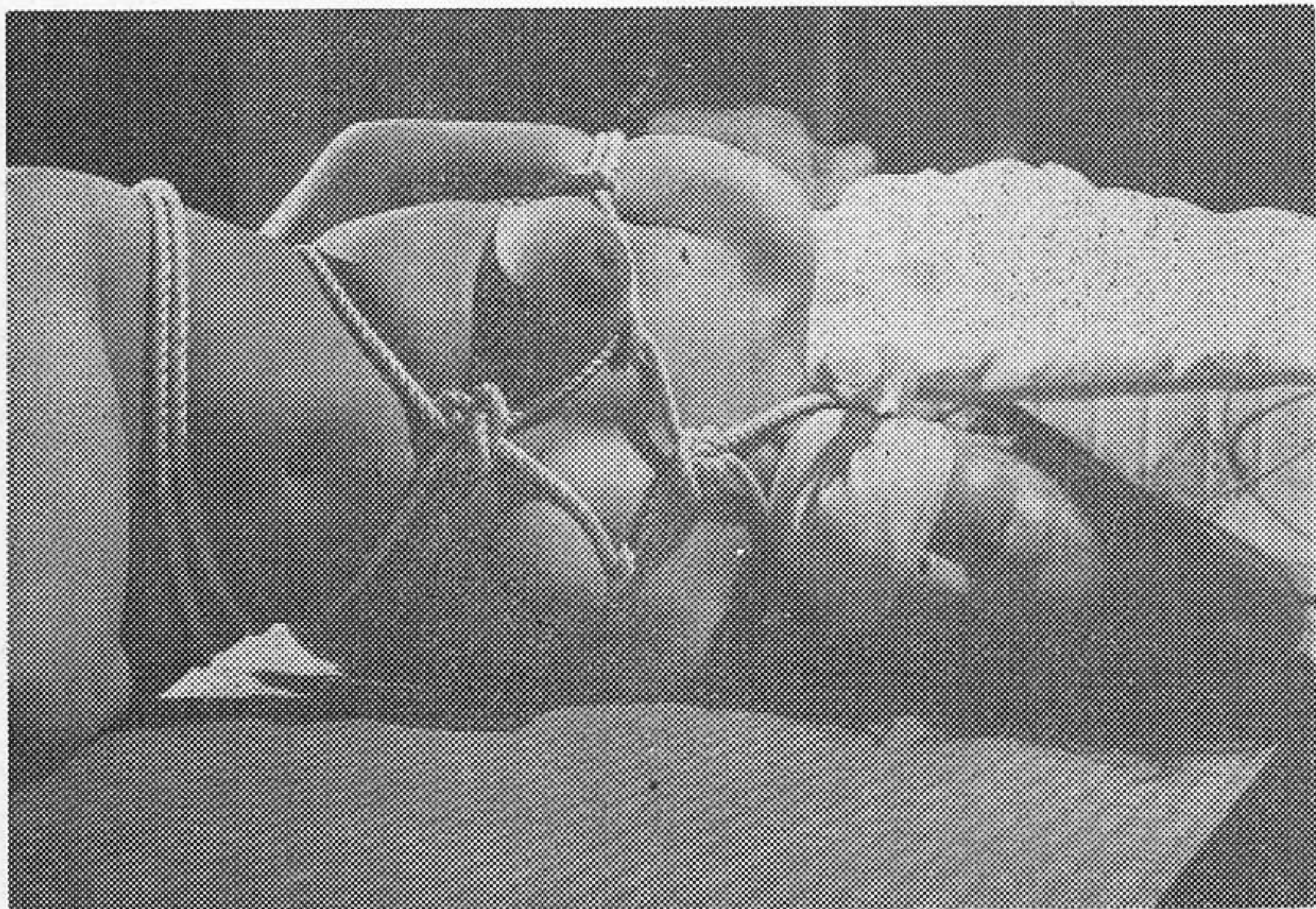
さて、彼と初めてデートした日。薄ぐもりで今にも雨がぼろつきそうな日和でしたので私は携帯用の傘を持ってこなかったのを悔んだくらいでした。表通りからはずれた場末の食べ物店の片隅で私達は向きあって腰かけていました。

彼はコーヒを注文しましたのに、ないというのでコーラを、私はミックスジュースを注文したのにバイヤリスのオレンジジュースしかなくて、最初から何だかチグハグな感じでした。私が想像した通り、彼は真面目で几帳面で、言葉つきも丁寧でした。この方がお手紙に書いていたように熱烈的なSMファンなのかと疑いたくなるほどでした。

二人で少し話をしました。といっても、私は、ただ「はい」とか「いいえ」とか、返事をしているだけなので、彼の方で話題が乏しいと、自然に二人とも黙って向きあっていることになってしまいうのです。そんな彼に私は心の中でほのかな好感を抱いていました。

でも、彼にしたら、私が奇ク誌上に発表した文章や或はとり交わした手紙の内容のよきにマゾにもだえる行動的な女性のようにカン違いしていたらしいのですが、一旦、平常の私に戻っていますと、無口で内向的な一人の娘に過ぎないのです。普通一般の若い女性よりも控え目で大人しすぎるくらいなのです。

ですから、その日は折角、逢って楽しいデートを夢みていた浩子でしたが、三十分ばかり、とりとめもないことを



少しばかり話し合っただけで、お別れしました。きっと彼も、こんな浩子に大きな失望を感じたことでしょう。

空想の中での浩子は、力強い男性の手で思いのままに翻弄され、縛られたり責められたり、その挙句の果ては、凌辱のかぎりをつくされるというようなことを夢みているのですが、現実の私は決して自分から口に出して相手の方に求めるような性質ではないのです。

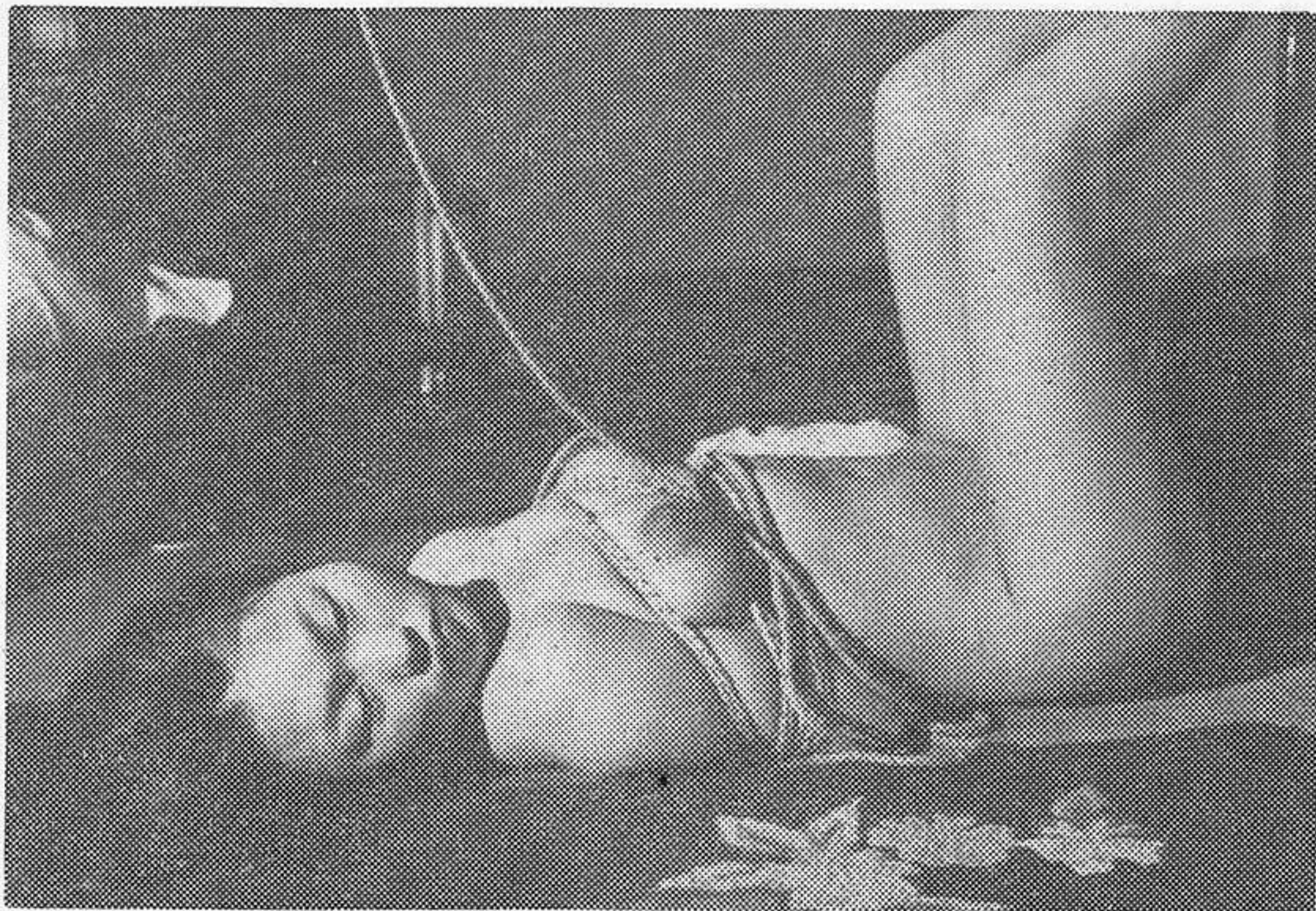
そればかりではなく、私の我ままから起こることかもしれませんが、相手の方の態度に遠慮とか逡巡とか、或は危惧とかいうものが少しでも見えたら、それが敏感に私の心に反映してSMに溺れようとする気持が湧き上がってこないのです。

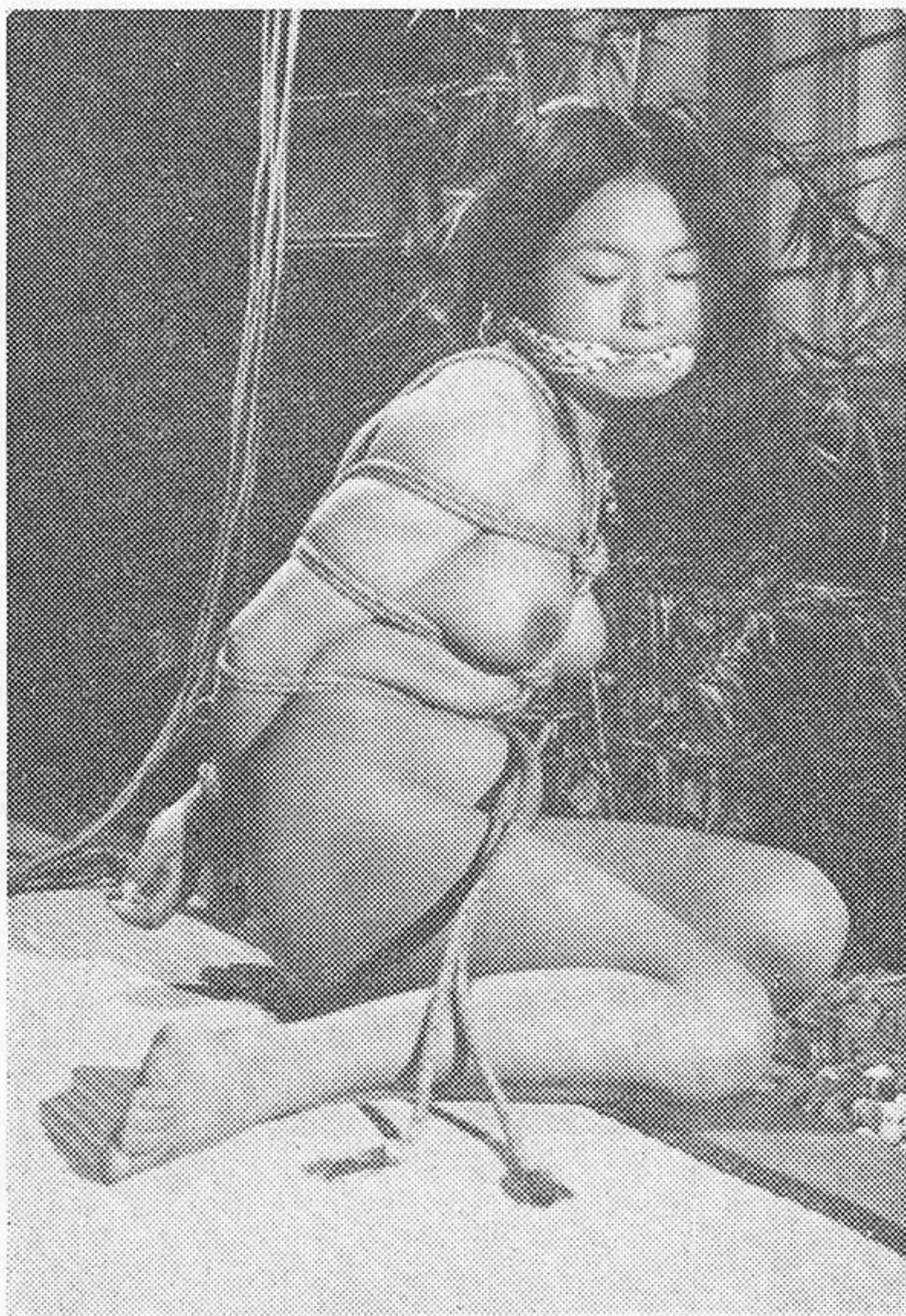
それが当然であるかのように、私の身体を全裸にして縛り上げ、責めつけ、カメラの前に立たせることが当たり前といったぐあいに何の躊躇することなく、強引に私を導いて下されば、私はスムーズにSMの甘美な世界へ入ってゆけるのです。「私がいやだと言うのに、あなたが無理にしまっただけですわ」という、責任を相手の方に全面的に押しつけてしまうズルイ考えがあるのかもしれませんが私は何も、そんなことは意識しておりませ

ん。でも、心の中では、「いや、いや」と言っているのに無理矢理にしまわれたという言いわけが、ほしいのです。

奇クのモデルになったときも、お写真をとるのは嫌とお願ひしていたのですが、塚本さまは、カメラを向けるのが当然であるかのように、どんどんと進めてゆかれて、私の心をぐっと攪んで引きつけ、それから、もう御自身のペースで、思いのままに、どんどんと筋書きを進めてゆかれたのです。ですから、浩子はいつの間にか、カメラを向けられるのが、いかにも当然のようになり、そして、やがてはカメラのレンズで狙われることが好きになってしまいました。

その点、彼は、私に対して何ら積極的な態度を示しませんでした。あとから来た彼の





手紙によりますと、私が書いております文章のように、もっと自分から縛られたい、責められたいという態度を示すものかと思っていたということです、相手の方が、そんな雰囲気にして、きっかけを作って下さらないことには、どうして女の私の方から、先にそんなことをお願い出来るでしょうか。

彼ったら、SMには少しも関係のないことばかり言葉少なに話すだけで、私の目から見れば真面目人間のように思えたのです。なんとなく肩がこったようで、二度と彼に逢いたいという気は起こらなくなっていました。

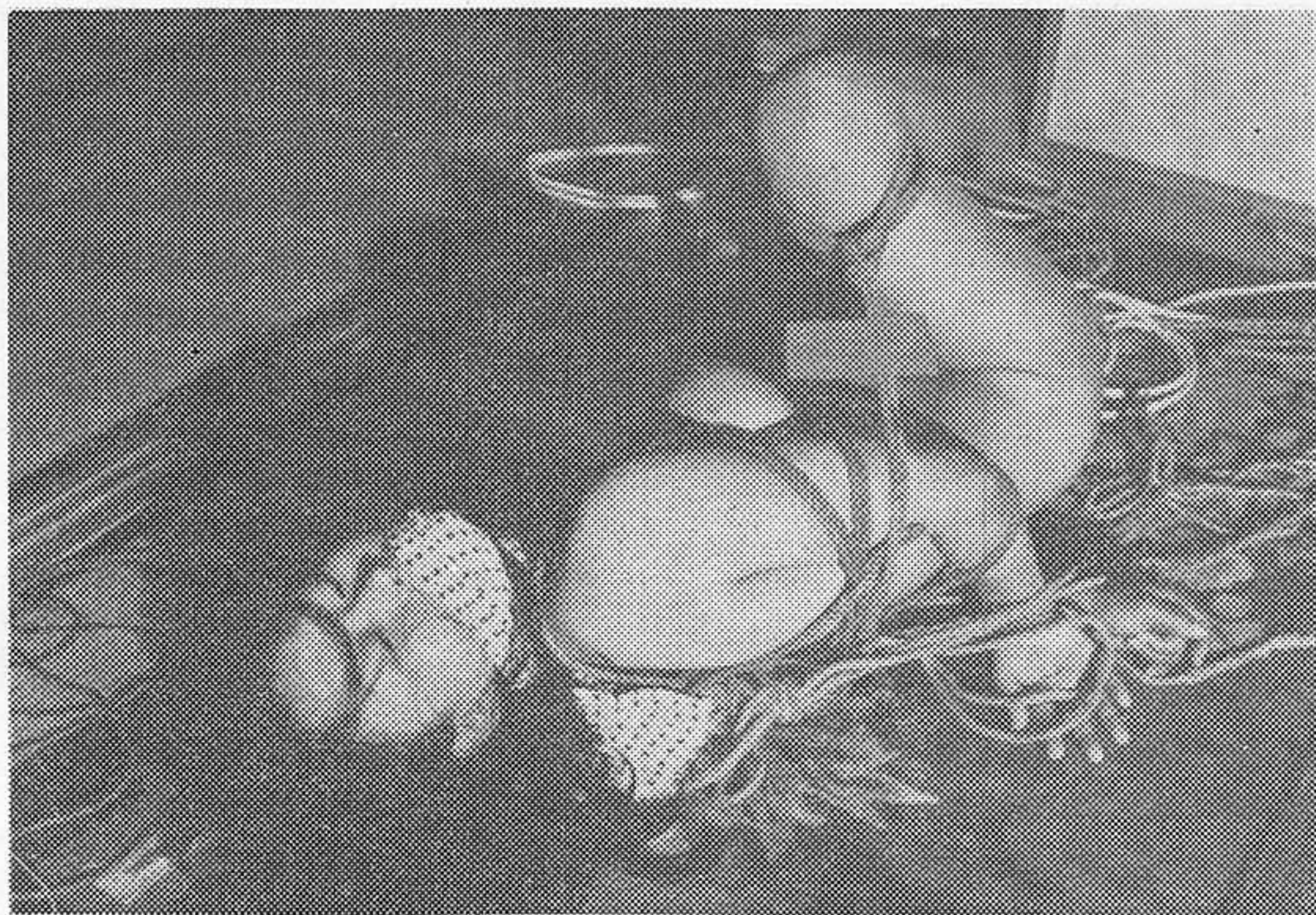
私が我侘なのかもしれません。でも、私は現実には自分の気が向かないことには、SM

の気持が起こってこないばかりか、むしろ急に冷えきってしまうのです。ですから、あの甘美で華麗な空想の世界に遊んでいるときの私は、現実の浩子とは、すっかり違う別人格の人間なのです。こんなのを二重人格というのでしょうか。

浩子は夜ひとりで蒲団の中で被虐の空想の中に浸っているときは、ほんとうに天国に住んでいるようで幸福です。この幸福を現実の世界でも味わってみたいくなるのは人情というものでしょう。私は沢山の方々から、お便りをいただいて、いろいろとSMについて勉強させてもらったように思います。

昼は淑女のように、控え目な娘ですが、夜は娼婦のように、あくことのない責め地獄の中に身を委ねているのが浩子という娘なのです。羞恥責めとか浣腸責め、股間縛りとか剃毛責めとかいった、いろいろのSMに関する言葉も、いつとはなしに覚えました。けれども、もし平常の浩子に、それを求めたとしても、きっと失望されることと思います。

コーヒーを運んだりケーキを運んだりしている私の中からは、SMらしいものは匂いがかぐほどもないからです。完全に二重人格の浩子なのです。ですから、平常の浩子をいつ



も空想のなかで活躍している
浩子に引きもどすための努力
をしてほしいのです。

そうしたら、私はSの方の
思う通りになる、可愛いマ
ゾの女に変貌することでは
う。

でも、私がマゾの女だから
といって、お手紙なんかで殊
更、命令口調の言葉を使って
乱暴な文章を書きなぐったり
されると、いやなのです。字
なんかも判読しにくいような
走り書きだったりすると、い
かにも馬鹿にされたようで、
相手の方を尊敬する念が起こ
らないのです。S男性の方の
奴隷になりたいと願っている
私なのに、これはまた、なん
という矛盾なのでしょう。か。
はじめのうちは、私も、こ
の矛盾に心の整理が出来なく
て苦しみました。この頃にな
って、なんととはなしに自分
の心がわかってきたように思

えてきました。

たとえマゾの女性だとしても、どんな相手
の人にも、マゾになれるのかといいますと
それは違うということなのです。Aという人
の手によって、縛られ、責められ、浣腸責め
や羞恥責めにあつて悦虐の園を、さまよい歩
いたとしても、Bという人の手によって、同
じような境地になるとは限らないのです。

空想の世界だけで自分をいじめられる薄倅
のヒロインに仕立てあげているときは、自分
の身体が凄く燃え上がって、官能の炎に酔っ
てしまっていたので、そんな相手の方の区別
など考えてもみなかったのです。といいます
より、いつも空想の中に出てくる相手の男性
は、私の理想像だったわけです。

私のような空想癖の強い女性は、SMプレ
イの対象としては取扱い方によっては、夢さ
え与えれば、どこどこまでも燃え上がって、
とどまることを知らない面白い女かもしれま
せん。でも、またやり方によっては、箸にも
棒にもかからない厄介な女かもしれませ

抱いている悦虐の夢を、いつもいつも、ふ
くらませて下さらないと、浩子の折角の期待
が空しくなって失望させられてしまいます。

どうか、こんな浩子を、ひとりぼっちで放

っておかないで、力強い男性の手で、がっちりと掴んで身も心も、くたくたになるまで、もみくちゃにして下さいませんか。

文章を書きなれていませんので、自分の今の気持を、はっきり皆さまにわかって頂けるよう、よう書きあらわすことの出来ない歯がゆさを凄く感じます。

責められたい、いじめられたいという気持が、いつも私の心の中で、やるせない、ほのかな遠い思い出の彼方に、甘美な余韻として尾をひいているのは、決して憎しみや或は報復や刑罰として、それを受けたいと願っているのではないのです。誰かがおっしゃったSMプレイという言葉が、私の今の願いに、ぴったりなのかもしれません。

私はSMプレイをして下さいと、お願いしたらよいのかもしれませんが、いや、この私の気持はSMプレイというような文字から受ける砂を噛むような感じとは、また大きく違うのです。もっと甘美で、せつなく官能的な響きを持った文句がほしいと思います。でも、無学な私には、いくら辞書をめくってみても今の自分の気持を、ぴったり表現する言葉を見出すことはできません。

空想の中で羽をのばす、その美の女神は、

いつも私をしびれるような恍惚の世界へ、お導き下さいます。そして、その夢幻の境地をうっとりとして、さまよっている私が、ほのかに、そして、かすかに尾を引く残り火を求めているときこそ、甘酸っぱい味を口いっぱいにした心境なのです。匂いと言いますと、何かこう、気の遠くなるような、強くもなし弱くもない法悦境なのです。身体全体が、雲のような、ふわふわした真綿に包まれて浮かんでいるような気持なのです。

黒ずんだ麻縄で厳しく縛り上げられた、みじめな姿の私でありながら、何故そのような気持にさせられてしまうのでしょうか。

現実に縛られたり、責められたりした私を感じたことは空想していたときよりも、もっともっと、刺戟が強烈だったということ。熱くもな





し冷たくもないという、ぬるま湯に浸っていたのが、身体中がぴりぴりするような熱い湯に入ったり、冷水に入ったりしたときと同じような強い刺激だったのです。

余りのことに、そのときは途まどいさえ感じたのですがあとで家に帰って、そのときのことを願って回想してみますと、楽しかったことばかりが頭の中に残っていて、悦虐プレイを次も次もしてほしいと願うようになりました。でも、現実には、自分が空想していたようには、いつもならないということを知って、びっくりしました。

自分の部屋で、ひとりで自分の身体に縄を掛けて鏡にうつしたりしているときは、力強い逞しい男性の手で無理矢理に自分がいじめられているのだと空想して甘美な思いにうっとりとするのですが、空

想はあくまでも空想なのであって、さめてしまえば空しさだけが残ってしまうのです。

せめて、現実にやさしくて親切的な男性が自分の前にあらわれて、荒々しくいじめてくれるといった虫のよいことを考えるのですが、実際には、そうしたナイトは私の前には現われてきません。

浩子を可愛いと言って下さる方もありました。まだマゾの性質を持っていることを珍重して賞味してやろうとおっしゃる方もありました。それなのに、私はその方たちの胸の中へ飛び込んでゆけないものを乙女心の敏感な臭覚で感じとっていたのです。マゾ女のくせに、相手を選び好みするなんて、もっての外だとおっしゃるのも、もっともです。

でも、こうしたSMプレイの相手選びは理屈では割り切れない感じ方の問題なので、私としては、こんな自分の心の我儘を、どうすることも出来ないのです。

自分が実際に縛られ責められてみて、私の空想も大分、変わってきました。あの女木島に住んでいた頃、私の抱いていました夢は、大阪へ出てきて都会の空気を吸うことによって、次第に現実味を帯びてきました。自分の夢がひょっとしたら実現できるのではないか

という淡い期待が胸を高鳴らせたのです。

私が奇クという、自分の気持ちにぴったりの雑誌にめぐり会ったことは、長いトンネルの出口に、さしかかったようなものでした。

たどたどしい文章でしたが、奇クの編集部でSMプレイだけのモデルにしてもらえませんか、というお願いの手紙を書いたことが、私が初めてSMの花園へ足を踏み入れる、きっかけとなりました。

羞恥責めや浣腸責めを実際に体験して、私は空想していたときとは違った、もっともって生々しい刺戟を受けたのでした。その強烈な刺戟によって、自分の身体が大きく変化してゆくことに、私自身、驚いているくらいでした。それにも増して心の揺れ動きも、決して小さくはありませんでした。

先輩のM女性の方々が辿られた足跡を、私もまた同じように歩いてゆかねばならないのでしょうか。最近になって、私はむしろ奇クの古い号を読みたくなってきました。創刊されてから、もう相当、長い間、経っているようですが、マゾ女性の方々の告白のっている雑誌を是非読みたいと思っています。

ひとり静かに自分の部屋に落ち着いていますと、いろいろのことが頭の中に浮かんでき

て仕方がないのです。そうした事柄を自分でまとめて文章にするという力は、今の私には持ち合わせておりません。どなたか、こんな私の兄となり父となつて、お導き下さる方って、いらっしゃるのでしょうか。

この前のお休みの日、私は一人で神戸へ遊びに行ってきました。三宮駅で電車を降りてフラワーロードを海岸の方へ歩いてゆきました。噴水の出ている公園から山手の方を眺めるのが私は大好きです。まるで外国へでも来たような気持ちにさせられるからです。

そこから私はポーターミナルの方へ歩いてゆきました。岸壁にはノールウエーの船とかいう真白い船体の大きな船が横づけになっていました。この海の向こうに、故郷の女木島があるのだと思うと、お正月に帰ったばかりなのに、なんとなく懐かしく、海沿いに、ぶらぶらと歩いてみました。

ポーターミナルを出た交差点を摩耶大橋の方へ歩いてゆきますと、広々とした道なのに殆ど車も通りません。まして人影なんて見ることも出来ません。第5突堤、第6突堤、第7突堤と立札の立っているところを過ぎ第8突堤のところまで来ますと、摩耶大橋が目の前に見えております。倉庫ばかり建ち並ん

でいて人一人通らない淋しい海岸通りを一人で歩いていて、空想癖の私は、あらぬ妄想に耽っております。

突然、数人の暴漢が私の前に現われて、手とり足とりして無人の倉庫に連れ込まれるのではないかという恐怖心と、それにも増してそうあってほしいという娘らしからぬ期待を夢に描いていたのです。でも、現実私のそんな期待にもかかわらず、時々タクシーが凄いいスピードで走り過ぎるだけで人っ子一人通らない淋しい道には何事も起こりそうにありませんでした。大都会の真中に、こんな人気がない淋しいところがあるのかと私には不思議に思えてなりません。きっと夜なんかは街灯もなく真暗に違いありません。つまらないひとりよがりの文章を思わず長々と書いてしまいました。人恋しさに独り寝の佗びしさを噛みしめながら、それでいて人見知りのする私の心が、こんな繰り言を書かせてしまいました。私の心を、ぐっと握んで放さないようなお手紙を下さる方の温かい胸の中に、私は飛び込んでゆきたいのです。

口下手でつきあいのうまい私ですが、お便りでは、心のたけを書き綴って、きっとお届けできることと思います。

悲しい再会

あまりにも変わり果てたジュリー。赤裸の素肌には、一毛も残っていない。だが、あれほど美しかったブロンドの長髪を、あと形もなくムシリとられたというような外観上の変化は、まだしものことというべきかもしれない。その内面に加えられた暴力は、もっともっと激しく、もっともっと悲惨だった。彼女の才智も教養も、ここでは、全く役に立たない。言葉を奪われた彼女には、かつて誰の耳にも快く響いた弁説を駆使して、自らの窮状

を訴えるすべもなかった。ただ一向きに馳け、その能力だけが彼女を評価する、すべでだった。

こうした境涯で懐かしい望月レイ子に再会したのである。半ば諦めかけていたジュリーに爆発するような里心が、甦ってきた。わが身のブザマな姿を恥じる余裕もなかった。又望月レイ子とて、肢体の自由こそ与えられてはいても、一兵卒の身では所詮は同じ籠の鳥であることを見抜くゆとりもなかった。ただ一つ、自分がこんなにヒドイ目にあっていて、ということを手相に認めて貰いたかったのである。助けて下さいといっても、それだけの



第四十五回

前号まで「独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集した数千の美女に畜従隷従を強制している。彼女等は五段七階級に厳然と分類され、巧妙に管理される。カンヌ映画祭の出席者で一挙に捕獲された五十七名のうち、日本女優の望月レイ子は、それでも辛うじてアマゾン女兵として更生しようとしている。しかし、白人であるが故にジュリー・シェリバンに課せられた運命は余りに悲惨だった。彼女は畜獣として激しい調教に責められることになった。そして、ある日、この二人の美女は数奇な再会をすることになった。

力がないということは無意識に覚っていたにちがいないのだが、それ以上に、どうしようもない感情の昂まりに駆られて、憑かれたように裸身を寄せて行ったのである。

その美畜がジュリーだと知ったときの望月レイ子の驚きは、もっと激しかったといってよからう。何故なら、畜女が女兵を見れば天国にいる人のように見える。その反対に、望月の目から見たジュリーの姿は、あまりにも哀れであった。胸を突かれたようなショックであった。

曳かれて行く美畜のあとを、われを忘れて追おうとしたのも無理からぬことであろう。彼女はスラヴ女の屍体を切り刻んでいる最中だった。勝手に仕事を放棄すれば懲罰は免れない。もし、小林見習士官（ジャンヌ）が声をかけなかったら、彼女はジュリーを追ったであろうし、必然的に酷い仕置きを受けることになったにちがいない。これが望月をしてジャンヌを認識せしめた、最初の出来事だった。指揮官の要諦は部下の心を掌握することにあるという。この限りにおいて、ジャンヌが部下である望月レイ子の心を捉えたという事実は、彼女の持ち前の親分肌を例証する恰

好のエピソードになったのである。

何故、エピソードと記したかというところ、小林敏子と望月レイ子の二人しか知らない筈の出来事が、次の朝になると、もう有明たちの話題にされていたからである。

前にも述べたように、この国は完全な警察国家である。どんなに秘めやかな会話も、どんなに個人的な行動であっても、悉く見張られていた。コンピューターのシステムが一寸した出来事でも、たちまちキャッチし、分析して、必要なものをレポートする。監察部の退役職員が、それを整理して有明の執務室へ送る。そこには、サラがいて決済し、必要なものは有明に伝える。

したがって、ジャンヌのことを言い出したのはサラであった。

いつもの通り有明は、貴和を左に、エミー司令とサラとをテーブルの反対側に、夫々が第四種（六人組み）の女体椅子にユッタリとくつろぎながら坐っていた。朝食のステーキをおいしそうに平らげる有明に向かって、三人の美女たちが、こもごも所管事項を報告する。

懲罰を受けそうな望月レイ子の行動を、ジ

ャンヌが、たしなめたという報告を、サラがしたとき、有明は、ちょっとフォークをとめた。

「余計なことをしたものだ。膿（ウミ）はフツ切れるまで放っておく方がよいのに」
だれにいうともなく有明が呟いた。

「伊藤大佐に命じて戒告させましょうか」
エミー司令が、たずねた。アマゾン女兵たちの不始末は彼女の責任になるのだ。

「いや、それには及ぶまい」
血の、したたるような牛肉を口に近づけながら、有明がいった。三人は、有明がその肉片を喰べ終わってしまうまで、静かに返事を待つ他はなかった。

しばらくして、やっと彼は口を開いた。

「F—〇二七号（ジュリー）の調教を、F—〇一八号（レイ子）にやらせてはどうか」

「グッド・アイデアです」

サラが言下に賛成した。

「逆療法ですわね」

貴和が微笑む。

「それでは、ご命令通り伝達いたします」
エミー司令が一礼して答えた。

訓練B中隊、甲小隊長は、小川晶子だった

——といえば、うなずかれる方もあろう。つい先頃の航海まで、ネプチューン号乗組の特科N第四分隊長、上席の少佐だった。それが例の杉本美和子、脱走事件（彼女は、この訓練連隊内で〇号生存刑を執行されつつある）の責任によって少尉に降等されたばかりか、実施部隊勤務を免ぜられて、訓練B中隊、甲小隊長に左遷されてしまったのである。ここで、断わっておきたいことは、こうした処罰（全く当人の罪ではなく単に責任上の引責）によって自暴自棄になったり、失望自失したりする余裕が、この国では全く与えられていないということである。そうでなければ、もっと酷い罰、もっと急激な降等を覚悟しなければならぬ。例えて見れば、これは落第のようなものだ。落第も二回、三回となると、学校を出されてしまうだろう。この国での放校とは、折角、勝ち得た銀のクラスを奪われて、奴婢である銅のクラス、あるいは畜位、

物位など、鉄のクラスに蹴落とされてしまうことを意味する。

で、小川少尉は自分の部下からゼロ号生存刑などという極刑に処せられた犯罪人を出した責任を深く反省し、それを埋め合わせる以上の働きをしなければならぬ。いや、必ずしてみせる——と、堅く心に誓っていた。

一度、このようなミスをした。そして、二度とそれを繰り返すまいとする。そのような

場合、極度に神経質になり、又、臆病になるのは止むを得ないことであろう。

連隊長の伊藤大佐に呼ばれ「実は、おまえの部下のことだが——」と話を切り出されたとき、全身から血がひいて行くように感じたのである。

——今度、不始末な部下を出したら、それこそ、お終まいだわ。

それが、伊藤香織にも、わかったのであるうか。

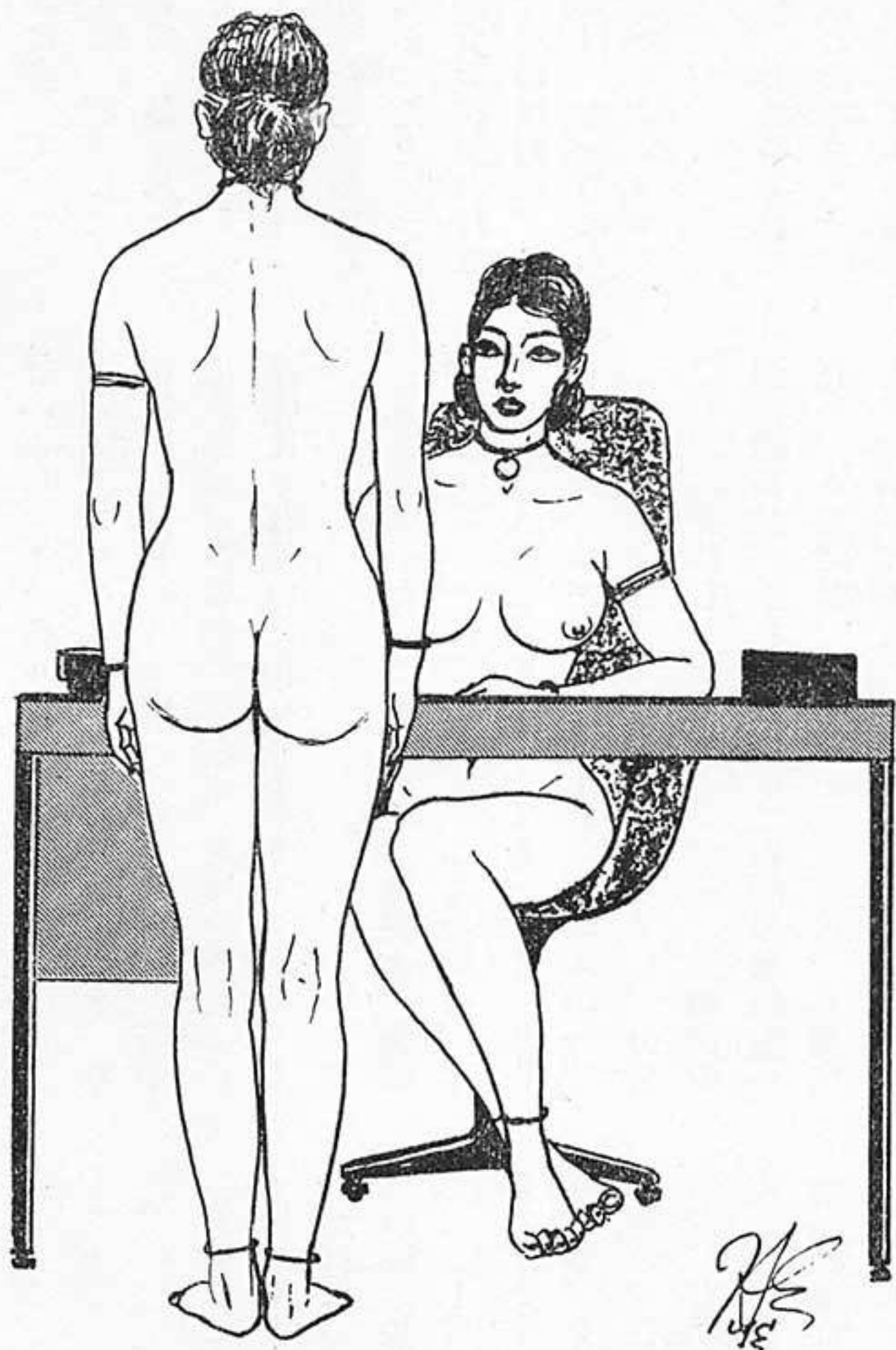
「どうしたの、どこか悪いんじゃないくて」

小川晶子は恰好のよい乳房をブルンと揺らせて、いっそう胸をはった。

「ハ、いいえ。何でもございません。お話を承ります」

「そう。じゃあ、おはなししますけど、只今エミーさま（準后星恵美子は、部下からこうした愛称で呼ばれていた）から、じきじきのお電話を、いただきましてね」

——これは大変だ。ただごとではない。



と一層、眉をくもらせる小川小隊長。

「あなたの小隊のF―〇一八号、名簿によると第二分隊の新兵ですね。俗名を望月レイ子という、もと映画女優なのですが、ご存知ですか。わたくしも、あなたも、この国の、ご厄介になってから、もう足かけ五年なんですから、地上のことにはウトいんですがね。なんでも、最近めきめき売り出してきたひとだったそうです」

——じれったいわ。そんなことは、私もカプセルのマイクロフィルムを読んで知っているのに。それより、望月レイ子が何をしたいのか、早くおっしゃって下さい。

心の中で地団駄を踏むような気持ちでいる小川小隊長の焦燥を見抜いているような伊藤大佐だった。

「監察部がチェックしたところによると、その望月新兵は、若紫の局さまの親授式に捧げられたイケニエを運んでたF―〇二七号という、たしかイギリス人でジュリー・シェリバンといいましたが、その家畜女に妙なシグサをしたのだそうです」

——ああ、困ったわ。これが又、何か懲罰の対象になるのかしら。そうしたら、自分にま

で責任が及ぶのじゃないだろうか。

暗澹とした心で、伊藤連隊長の唇を見つめる小川晶子だった。

「あぶなく任務放棄の罪を犯しそうになったのですが、例のお手付き見習士官、F―七五三号（ジャンヌのこと）の機転で救われたのだそうです」

——ジャンヌの奴め。どうしてそれを私に報告しなかったの。

苦々しく思う小隊長。それが自分を、とび越えて監察部から報告され、何か王宮での話題になったことは間違いないのである。果たして吉か凶か。

「それで、エミーさまがおっしゃるには、現段階では注意する必要もない。また罰すべき罪にも相当しない……」

——ああ、よかった。これで自分も連坐させられることもあるまい。

小川少尉は、その心を隠すことが出来なかった。途端に血色がなくなったからである。

「おや、おや、現金なものですね。あなたも嬉しそうな顔をなさって。ホホホ……」

笑いながら言葉をつづける伊藤大佐。賢明な彼女には小川晶子の心理状態など、手にと

るように判っているのだ。

「ただ、教育という見地に立つと、必要以上に上官が部下をかばうのは必ずしも良いこととは、いえません。小林見習士官のしたこととは、ストレスの限界です。F―〇一八号は、任務放棄の罪を自覚し、反省しているでしょうから、小林見習士官に助けられたことを感謝しているでしょう。それは、それでよいのですが、反面、厳格さが失われ、苟合（こうごう）の危険が生まれてきます。それを小隊長として注意していただきたいと思います」

「ハイ、よく注意いたします」

不動の姿勢で小川晶子が答えた。

「もう一つ。五段階の身分差が絶対的なものであることをF―〇一八号に徹底させて下さい。彼女が、家畜女F―〇二七号と同じとき同じ場所で捕獲されたことは、あなたがネプチューン号乗組だったのですから、わたくしより、よくご存知の筈です。その上、二人は仲好しだったと記録されています。だからといって、そうした地上の関係を、この国に通わせることは許されません。そこで、エミーさまのお話によりますと、マスターのお考えは、F―〇二七号の調教をF―〇一八号にやらせよとのことだそうです」

「と、おっしゃいますと、F―〇二七号を軍用畜に転籍することをごいまいしょうか」

「そうです。勿論、軍用畜に移します。丁度あなたの小隊を中心にして、若紫騎兵小隊を編成する必要がありますから、F―〇一八号を、その中に組み入れたら、よろしいでしょう。編成について、あなたの原案を今日中に提出して下さい。以上です。もう退って、よろしい」

「ハイッ」

挙手の礼をした小川晶子は、廻れ右をして出て行く。肉づきのよい裸身を支えている豊満な臀部を左右に揺すりながら遠ざかった。

軍 用 畜

数日して訓練B中隊のなかに、若紫騎兵小隊が設置され、その編成が発表された。

小川小隊長の下に三コ分隊がある。第一分隊長には見習士官小林敏子、すなわちジャンヌが任命された。そして、有明のアイデアを受けて新兵F―〇一八号、望月レイ子も第一分隊に編入されていたのである。

かくしてジャンヌは早くも望月との約束を果たすことが出来た。たとえば、それが彼女の

力によるものでなくとも、すくなくとも望月の心を掴む要因には、なったといえよう。

さらに数日して、調教畜舎から軍馬仕様に改装された美畜六十頭が受領されてきた。その中に、F―〇一八号と組み合わせられるF―〇二七号が、含まれていたことは勿論である。

「軍馬仕様」これは、美畜に新しく装着された機械を意味する。今までは畜舎で休息するときだけ強制されていたアノ上体を90度、前傾する姿勢を、今度は四六時中、とっていなければならなくなる。

人間の適応力は、えらいもので、これ程、苛酷な、これ程、屈辱的な調教を強いられながら、漸く家畜としての生活に、辛いながらも安定した生活を見出そうと、悲しい努力を始めた矢先なのである。

突然、鼻綱を曳かれたF―〇二七号は細い声で吼えながら装具室に連れ込まれた。

そこには既に、若紫中隊に配属すべく集結させられた美畜が、美事な裸身を惜しげもなく曝して、呻いていた。鼻綱を背一ぱいに、天井から下がったフックに吊るされるから、今度は腰をかがめることさえ出来なくなっ

しまうのである。せい一ぱいシャンと立って上を向き、爪先立ちになる――これで漸く鼻が曳かれるのが楽になるのだ。逆をいえば、ちよっとでもフラフラしたり、踵をおろそうとすると、たちまち激痛が鼻を襲うことになる。いつも美畜たちは、このような待機姿勢をとらされるのであるが、この七十頭は、こうして苦吟するのも、これが最後になるのだということを知る由もなかった。

辛抱しきれなくなった頃、ようやくF―〇二七号の番がきた。今はもう、鼻綱をはずして貰えるだけでも千金に替え難いと思う美畜は定まらない足もとをフラつかせながら、あらかじめ用意された装具の上に、うつぶせに固定されてしまった。

まず、細腰に巾広のステンレスベルトを巻かれ、水平に乳の間を通っているステンレス・パイプに鉤づけされてしまうのである。

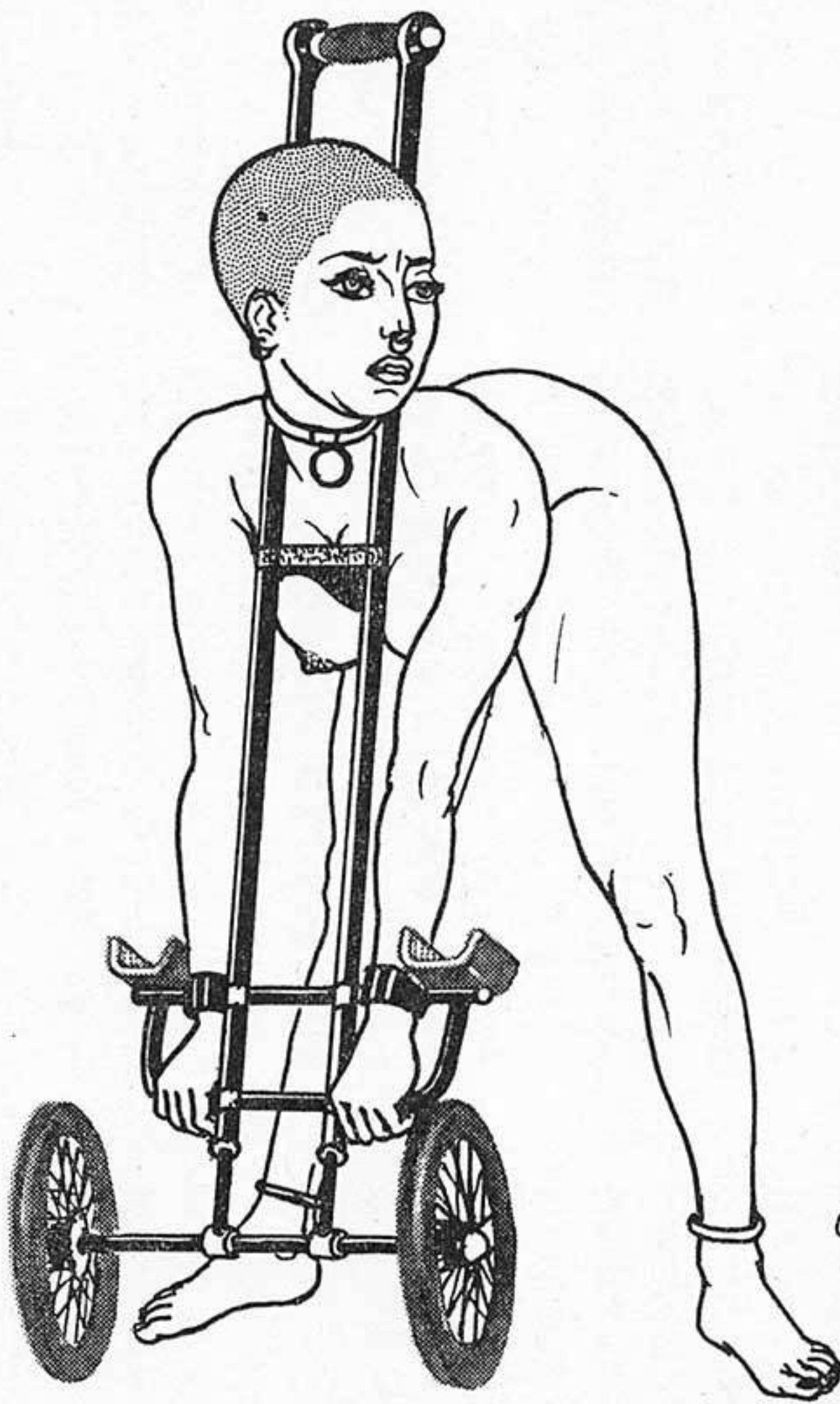
タ、タ、タ、タ……

という鉤打ち機の連続音が臍のあたりに響いて、美畜を総毛立たせる。いや、一本も毛のない美畜には「総毛立つ」なものもなかった。ただ、全身の皮膚が恐怖で鳥肌だったというべきであろう。

首をはさむようにして垂直にのびている二本のパイプと直角に、さきの水平パイプが熔接してあった。

上半身を水平に前傾すると、手と床との距離は手と足の長さの差に等しくなる。垂直のパイプはその距離を補い、二個の車輪で床に接している。直径二十センチほどのゴムタイヤなのだが、ゲージは五十センチもあり、やや前方に曲っているので、安定性はきわめてよい。

永久ロックされていた家畜用後手錠がタガネでこわされると、美畜は自由になった両手のやり場に戸惑うのだった。それほど、後手ロックは彼女たちにとって日常のものとなっていたのである。しかし、それもホンの束の間のこと、まっすぐ下へ垂らした位置で、今度は垂直パイプの左右にとりつけてある手錠に穿め込まれ、これもリベットで永久ロック



若紫騎兵小隊全員が整列して迎えた。

中隊副官から一括して六十頭を受領した小川小隊長は、あらかじめ軍用畜、畜籍簿によって検討してあった組み合わせを読みあげて女兵一人に一頭ずつの美畜をあたえて行った。これから、美畜の管理は、それぞれの女兵の責任となるのである。

つぎつぎ女兵の肉体番号が呼ばれ、それぞれが、これから自分達が苦楽を共にするであろう梓車枷の裸女を受け取る。

何人かのあとでF―〇一八号、つまり望月

レイ子の番になった。

「F―〇一八号」

と呼ぶ小川小隊長の目がキラリと光った。

「ハイッ」

と、力一ぱい答えて数歩前に出る。もちろん不動の姿勢だった。

「おまえに、軍用畜F―〇二七号を与える」

されてしまう。ピカピカ光るパイプ製の梓車を、美畜どもは、これからは肉体の一部としなければならぬのである。

あたらしく装着された梓車に馴れていない六十頭の美畜群が、ヨタヨタしながら騎兵厩舎に到着したとき、青木小隊長以下、新設の

小隊長の声は特に力がこもっていた。望月レイ子も大声で複唱する。

「F—〇一八号、軍用畜F—〇二七号を、お預りいたします」

「よしッ」

小林分隊長（ジャンヌ）が鼻綱を取って曳き出してきた美畜を一目、見ると、望月レイ子はアッと息を呑むのだった。

カンヌ以来のアミ（仲間）ジュリー・シェリバンだったからである。

一瞬、望月は感謝の眼差しをジャンヌに向けた。つい数日前、イケニエの屍体を運んできたジュリーに、この国へ来て始めて会ったばかりである。その時、われを忘れてジュリーを追おうとした望月を、必ず又、会わしてやるからといって、やさしく、たしなめてくれたのはジャンヌだったではないか。

一兵卒である望月には、彼女とジュリーとの組み合わせを決めた背後に、大きな意思がかくされているのを窺う由もなかった。ただ一途に、ジャンヌが運動してくれた結果だと信じ込んでしまったのである。

「小一隊—乗—馬ッ！」

小川小隊長の号令が響いた。そして自分も

六〇頭の中から選りすぐった美畜の背中に、ヒラリと、またがるのだった。

大柄な北欧娘はビクリともしないで小川晶子の体重を支えた。小川少尉の肉体番号はB—一六八号、つまり四年前の捕獲になるが、新兵で訓練連隊にいた頃、ずっと騎兵小隊勤務だったので、乗馬術には熟達していたのである。

他の連中は、そうはゆかなかった。馬とはいっても女体のことである。それ程、高くない。それなのに存外むずかしいのである。美畜の首をハサんでいるパイプは、二十センチばかり上で木製のグリップになっている。そのグリップを握んで、跳馬の要領でとび乗れば、何のことはないのである。しかし、何の予備知識もなく、只今、受領したばかりの女兵たちでは、要領も何もなかった。それに、美畜たちに対して、地上的な意味での遠慮があるのが、かえって美畜たちを苦しめる結果になってしまう。

「おそいッ。そんな乗り方じゃあ、すぐ落馬してしまうよ。まあいい。これからミッチリ教えてやるから」

嗤いながら小川小隊長が言う。だが、すぐに形を、あらためると、

「よく聞け。只今、諸士が受領した軍用畜は兵器である。畏くもマスターからお預りしているのだ。大切に管理しなければならぬ。自己の失策によって、病気にかからせたり、ケガをさせたりしないように。さもないと軍法会議にかけられるよ」

「もう一つ。だからといって、中途半端な温情主義は絶対にかけては、いけない。地上でこそ、おまえたちと同じ人間として扱われてきた。けれども、この国では厳然とした差別がある。家畜は、あくまで家畜でしかない。人間としてじゃなくて、立派な軍用畜に仕立てあげることこそおまえたちの義務ですよ。それが又、おまえたちの成績をあげることになる」

小川小隊長の訓示が、望月レイ子の耳に突きささるようであった。

友達のジュリーが、哀れにも一頭の牝馬としてしか、扱われていない現実。それだけでも胸がしめつけられるような気持がするの。今はその背中に跨がっている自分の姿。想像を絶する浅ましさではあるまいか。

滑らかでスベスベした背中なのに、望月レイ子には針のムシロのような感じさえする。

その上、ジュリーの細いウエストを、さらに細めるように喰い込んだ幅広のステンレスベルトが、氷よりも冷たく、望月の内股に触れる。

「それから装具のことだが」

小隊長の訓示は、まだ続いている。

「装具は軍用畜の身体にリベットで永久にロックされている。着脱がないだけに特に、その部分を清潔に保つことが大切です。炎傷を起こしたり皮膚病にかからせたりした者は、軍法により処罰される」

——可哀そうなジュリー。でも、私は一生懸命、あなたを、いたわってあげるわ。こんな酷いところで、どこまで助けられるかはわからないけど、二人で助け合えば、お互いの苦しみを少しでも、へらすことにはなるでしょう——

ジッとみつめるジュリーの背中。グリップ越しに、クリクリ坊主が悲しそうに揺れていた。

「下—馬ッ」

ふたたび、号命がかかった。アマゾン女兵たちは争って美畜の背中から降りる。正式には右から乗り降りするのだが、まだ訓練前な

のでテンデンバラバラなものも止むを得ない。

「F—〇一八号」

と声がかかる。

「ハイッ」

と不動の姿勢をとる。押しかぶせるように

「五歩、前へ」

と号令が続く。

無意識に自分だけ歩調を取って出ようとする鼻を、

「バカ。馬を連れて出るんだ。鼻綱をとれ、鼻綱を！」

と叱咤される。美畜は正式には軍用畜と称するが、俗に「馬」と言いならされている。

躊躇することは許されなかった。

——ジュリー、ごめんね。あなたは日本語がわからないんだから、私が通訳してあげなくっちゃ——

と、心に思っ、小声で、ささやいた。

「ジュリー、ナウ、レッツ、ゴー」

途端に小川少尉が駆け寄って、

「バカッ」

力一ぱいビンタを張られたから、たまらない。望月は、もんどり打って床に叩きつけられてしまった。

「家畜に言葉をかける馬鹿があるかッ。鼻綱

を曳け。それが合図だ。ホラ、こうしろ。こうするんだ」

息をきらせながら小川少尉は、ジュリーの鼻綱を力一ぱい曳く。美畜は凄まじい悲鳴とともに、ズルズルと進んだ。

ハネ起きた望月レイ子が、あわてて、鼻綱をとり戻した。

「モ、申し訳ありません。以後、気をつけます」

「よし、今日のところは許してやる。これから注意するのよ」

小隊長は、やっと顔を柔らげてくれた。そして、

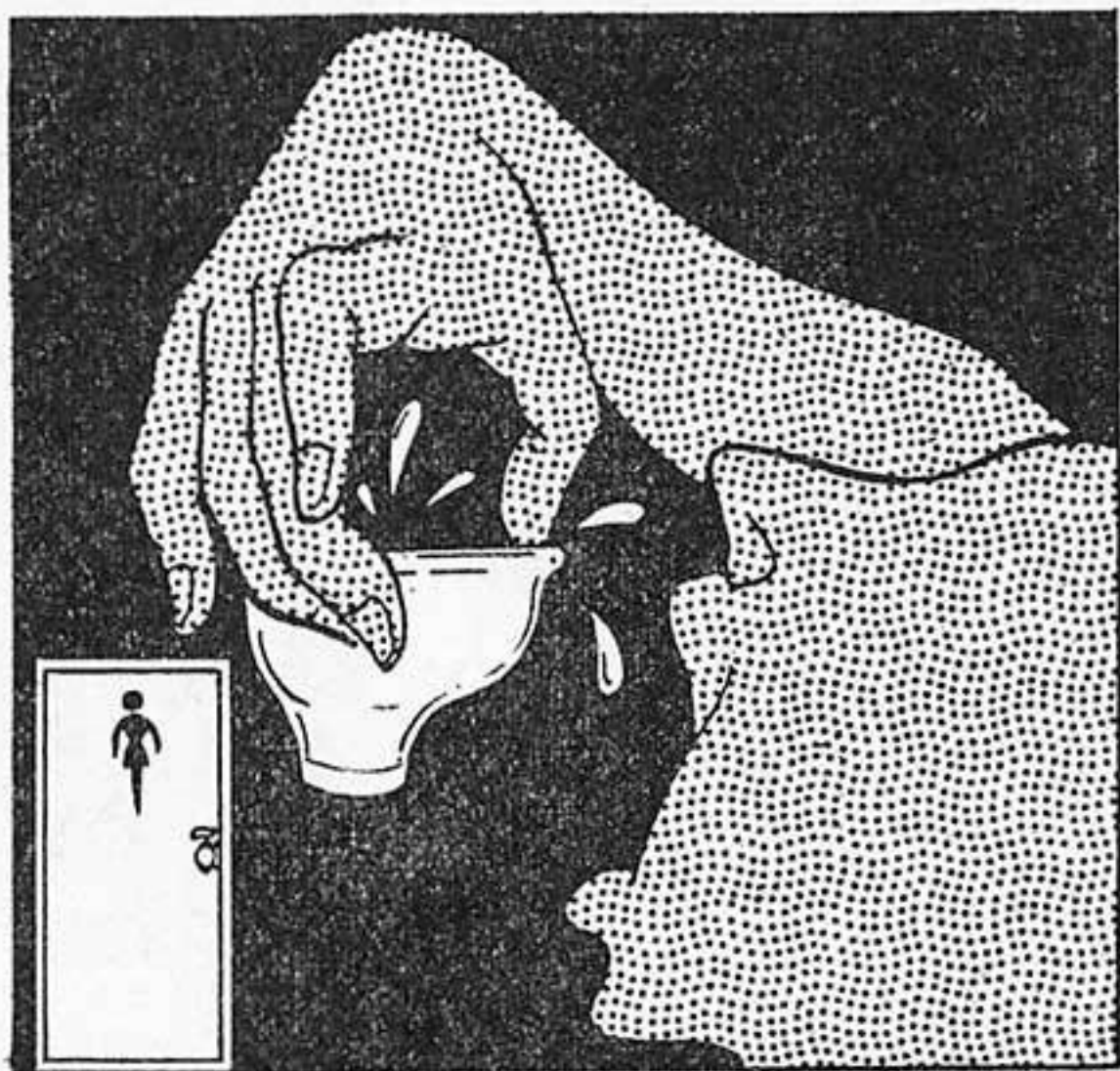
「みんな、自分の馬は隅から隅まで知ってなくっちゃいけない。F—〇一八号、馬の尻に回れ。そして肉体番号を確認せよ」

しばらくして、泣きそうな声で望月が言った。

「F—〇二七号、間違いございません」

「よし。みんな、これから畜体検査の要領を教える」

小川小隊長の手にペリカンの嘴のような腔拡大器が握られているのを見て、望月レイ子は蒼白になった。



弾力のありそうな太い円柱の間を、一直線に降り落ちる生あたたかい滝のしぶきを、顔に受けた瞬間の、あの、めくるめくような悦びと感激。

あの甘酢っぱい、鼻にツンとくる臭氣に魅せられて、もう十年にもなりましょうか。

私の職業（建築物塗装）柄、トイレなども塗装することがよくあるのですが、床下の排水パイプの錆止めなど、地味で、しかも自分が汚れる塗装作業は、当時やっと年期が明けただばかりの私が、先輩の職人たちから当然のように押しつけられたものでした。

「懸賞応募告白」

盗

（とういん）

飲

菊田九四

初めの内は、いくら仕事とはいえ、暗い

じめじめした狭い排水溝に入るのが、とてもイヤなものでしたが、その気持を一変させられたのが、ある有名な私立女子高校の、トイレの排水パイプを塗装した時のことでした。

持った投光器をたよりに、マンホールから床下にもぐりこみ、便器から直接、続いている排水パイプを塗り始めてしばらく経つと、校舎の方で鳴るベルの音と同時に、大勢の足音が響いてきて、ボタンボタンと派手にドアの閉じる音がし、続いて、私の塗っているパイプに、水の流れる気配が感じられました。

私としては、イヤな仕事でも仕事は仕事。

初めてというわけでもなかった関係で、さして気にもせずに塗り続けていたのですが、無意識のうちに、そのドッドドウドウという激しい水音と、静かな川のせせらぎに似た水音の交錯に耳を傾け、調子を合わせて作業の手を動かしていたようでした。

そうこうしているうちに、ふと、そこが女子高校のトイレであったことを思い出しました。とすると、この水音を立てているのは、若さ溢れる女子高校生たち！ そう思ったとたん、私の若い血がカッと燃えたち、俄然、

胸が高鳴り始めたのでした。

頭の中一杯に、まだ見たこともないのに、甘美な花園に咲く魅惑の世界がパッと現われて、奇妙に現実感のある幻想が、次から次へと浮かび上がってきたのでした。そしてその瞬間から、その排水管を流れてゆく水音に魅せられるようになってしまったのでした。

仕事の捗りは、ぐんと落ちました。あれこれと想像し、幻想を楽しみながらのことですから能率の上がるわけはありませんが、わずか数十メートルの排水管塗装に、丸三日間を要してしまったのでした。

先輩の職人たちは、二日目に私にやらせる他の仕事を段取りしていたようでしたが、私の仕事の遅さに文句をつけたものの自分達がイヤな仕事であるだけに替わろうとは言い出さず、マンホールに潜りこむ私を睨みつけるだけでした。私は何やかやと理由をつけてゴマカシてはいたものの、心は、床下のパイプに走っていたわけです。

恥ずかしそうに少しずつ流れる音。健康そうな滝の音。そして時折、それとわかる重量物落下の気配。

それらが、確実に聞き分けられるようになると、今度は、彼女たちのその様子を、なん

とかして見てみたいものだと思いはじめたのですが、いかんせん、床の厚さは十センチ以上もあるコンクリート、排水パイプは鋼鉄なのです。いくら望んでも、そのみなもとをたずねることは不可能で、やるせない気持ちを抱えたまま、遂にその高校での仕事は終わってしまったのでした。

イヤだと思っている時には、よく廻ってくるトイレの仕事ですが、期待していると遠退くものらしく、残念ながら、次の現場も、又その次の現場も憧れの職場とはなりませんでした。私はただ、寢床に入ってから、女子高校の床下に想いを駆せ、悶々の日を過ごす以外はなかったのです。

そして二カ月ほど過ぎ、K市の貯金局の仕事をやるようになって、先輩から、排水管塗装を割り当てられた時には、ようやくという思いで私の胸は弾んだものでした。

四階建てのその局舎には、各階に女子用トイレがあり、職員の数も優に二百人を越しているように思えました。

早速に潜りこんだ床下で、じっと耳をすませますと、あれ以来、夢にまで聞き、見た、懐かしの水音が、まぎれもなく聞こえます。私は思わず、セセラギ音を伝えてくれる排水

パイプに頬ずりしてしまったのでした。

久しぶりに楽しい仕事が出来るのです。あの憧れの水音に囲まれながら……。

わくわくしながらパイプから離れ、ふと気付くと、管に触れていた頬が冷たく濡れているのです。不審に思って、投光器を当ててみますと、明らかに水条が鉄管の下辺を這っているのが見えました。

漏水です。ちよっぴり職業意識を取り戻した私は、その水条を辿ってゆきましたが、それが、一番奥の便器についたヒビ割れからのものだと言った時、躍り上がりたいほどの気持ちになったのでした。

あの女子高校で、なんとかして一目見たいと思いながら果せなかった願いが、うまくゆけば実現するかも知れないという期待が湧き上がったのです。

ただ、もうそれだけで、ふと気付いたときには、タイル工が使う、片方が丸く、もう片方がピッケル様になったハンマーで、その便器の亀裂を大きくするべく削り始めていたのです。もちろん、上で使用していない頃合を見計らって、注意しながら……。

それは難しい作業でした。ほんの直径五ミリぐらいの穴が、ようやくにしてあき、わず

……ナミオ M 画廊……『野外トイレ』……春川 ナミオ……



かに上の灯りが洩れてきたときには、大きなトンネルを貫通させたような気分になったものでした。

その小さな穴に目をあてがって上を覗き、上の個室全体がシネマスコープのように見渡せた時の嬉しさ……。

そのことが、どれほどハレンチで不逞な行

為であるかなどという罪悪感とは、ずっと後で気付いたことで、その時にはただ嬉しさいっぱいの中でシネ・スコ見物に気をとられていますと、サッと戸が開かれる気配と共に、その画面に巨大とも見える二本の下肢が現われ、一動作のあとには、せつなく幻にまで見た願望が、あっけないほど簡単に果たされた

上、堂々と飛ぶシブキを、私は顔面に受けていたのです。

その、甘酢っぱい、香りのわりには塩っぱい奔流……。私は、素速く目と口を交替したのですが、同時に私自身も、アツイ噴水を上げてしまいました。

そのあと、休憩時に入ったのでしょうか、次から次に新しい奔流が、その小さな穴に降りかかり、自身に戻ったときには、私の作業服は胸一面が、あの特有の香りを含み、濡れた雑布のようになっていました。

××××××××××

二日目に、その現場に着き、作業着をつけ終わるまでの時間の長さは、今までに感じたこともないほどの長さでした。ペンキを持って小走りに排水溝に向かう私を、他の職人たちは呆れ顔で見えていたようでした。

昨日は流石に興奮してしまい、あとで何が何だったか想い出せずに終わってしまったので、今日は気を鎮めて落着いていようとしたつもりでしたが、昨日の帰りに、覗いていた穴にパテをつめて洩水を防いで置いたのを取り去るのと殆ど同時に戸が開き、花柄のパンティがスーッと落ちるのにぶつかった途端、またもやカッカとしてしまった自分を意識せ

ざるを得ませんでした。

私は穴から目はずし、すぐにくるであろう奔流に備えて口と交替したのですが、期待したような奔流ではなく川のセセラギ程度で終わったので、また目と交替しました。

すると、どうでしょう。私のその目を狙ってでもいるように、健康そのものの太い柱がジワジワと下りてきつつあるではありませんか。

驚喜。正に驚喜といっている感激で、私は全身がすくみ上がり、ガタガタ慄えるのを覚えしました。その光景の何と美しく見えたことでしょうか。

呆然としたように見つめているうちに、出来るものならば手を出してその柱を受けとめ口一杯に頬張りたくなりました。

床下の広さは高さが精々一米ほどで、そのあまり広くない処に配管が縦横にあり、姿勢を変えるのが難かしいのですが、無理して体の方向を少し変え、なんとかその美柱の主の顔を拝見すべく努力しました。

やや、うつむきがちの瓜実顔の可愛いその主は、いつも玄関にいて、私達にも愛想の良^{たち}い受付けの案内嬢でした。

着痩せをする性^{たち}なのでしょいか、穴から見

える両太股はハチ切れんばかりで、私に、その丸まっちい臀部を浣腸で責め、その奔流を頭から浴びてみたいものだ^とと憧れさせてくる魅力に溢れていました。

その様子を想像するだけでも胸がカッカッと熱くなり思わず大きく目をあけた時、突然のように降り出した奔流のしぶきに襲われました。眼を拭って改めて見ようとしたとたんに、再び水流の襲撃でした。彼女は排水コックを踏んだようでした。

昨日は、はじめて見る滝壺の様々にカーツとしてしまい、用便後の排水コックのことをすっかり忘れていて、眼の中に相当の圧力で流れ出る水を受けてしまったので、残念ながら彼女の花柄のパンティの色を目に残し、急いで一旦、パテで穴を塞ぎました。

××××××××××

酒や茶に銘柄があり、それぞれに味が違うように、女性の奔流も、みな味が異なることも二日目に知りました。

便器の穴が小さいため、欲しくてたまらなかつた太い美味しそうな柱も口に出来ず、ちよつと、がっかりしていますと、上でロックの音が聞こえたので、急いで穴に目を向けました。(女性の排泄態勢の素早さを知つ

たのも、このときでした)

先程の受付嬢とは異なり、痩せぎすの女性でしたが、その奔流は、凄まじいばかりでした。あまりの激しさに放物線は長く、しかも四方に飛び散り、私が待機する穴には、ほとんど飛んできてくれな^いいです。その上に、まだ四散するだけではなく、彼女のお尻一面にハネ返るのには驚きました。その奔流の一部に私がありつけましたのは、殆ど終了間際でした。

その味は、洋酒で云えばロックの氷が解けて薄くなったようなものと、たとえば、わかつて頂けるような味でした。

受付嬢のように、まろやかな味は、年代物のブランドーといえ^ば良いでしょうか。

その彼女が出ますと、待っていたかのように、次の女性が入って来^ましました。

すぐに全開か^と見えていますと、やおらパンティの中に手を入れ何かを取り出し、少し臭いをかいてから横の汚物入れに入れたところを見ますと普通ではありません。どうもメンスらしいと私は直感しました。

これは私の、もっとも望むところだったのです。

若い女性の、多少は色付くであろうそのジ

ユースには、とても普通ではお目にかかれるものではありませんまい。

それをひそかに、当の女性すら知らないうちに、ただけそうな気配なのです。私は嬉しさをゾクゾクとしたものでした。

例の調子で苦勞して覗きますと、ソツと、ずらせたパンティの中を、気掛かりそうに見つめている彼女の可愛い顔に、まだ社会人になって間のなさそうな、幼さの抜けきらない初々しさがあるのも、嬉しいことの一つでした。

早く欲しい。

早く、この穴に流しこんでおくれ。

私は、言葉にならない言葉を、つぶやいていました。

××××××××××

量が多いのでしょうか。

はじまったばかりなのでしょうか。

パンティの取り去られた後にも、歴然たる彩りが明らかでした。

便器から伝わり落ちてくれる水流の有難味は、私にとって、何ものにも勝ると思えました。

先程も申しましたが、酒にも茶にもそれぞれの味があるものですが、若い女性の噴流に

は、朱いジュースもあれば、濃いポタージュスープや、薄いコンソメ・スープもあることを一通り、味わって実感したのは、貯金局の仕事を四日目ぐらいたったと思います。

あまりにも仕事の捗りかたが遅いので、まともや先輩達から文句を言われました。そこで、午前中に大急ぎで一日分の仕事を済ましてしまうようにしました。もちろん完全には行かないのですが、一通り済むと、やればやれると思ったものでした。これも、早く便器の下に潜りこみたいという目的があつてのことでしょうが、われながら驚くほどの仕事ぶりでした。

なんといっても小さな穴から覗くことですから、顔を見るのも、ひと苦勞ですが、四日目ともないますと、履いている靴や、服装でああ、この女性は何課にいた娘だと、わかるようになりました。

その時も、入って来た女性はキーパンチャーの一人であることが、すぐにわかり、どのような味付けをしているであろうかと待つ間もなく、しぶきがかかりましたので、あわて口と交替したのでしたが、すぐに普通ではない、いがらっぽさと渋さを感じ、流れが止まったのを汐に、再び口を目に変えて見ます

と、白いツララ状のものがドロリとした感じで下がっていたのです。

そのツララが何であるかは知りませんが、それが普通より一段、濃い味付けをして、ポタージュになったのだらうと、私は一人合点をしていました。

××××××××××

一対一で、納得づくで飲ませてもらえぬ淋しさはあっても、私はこれまでに百を越す若い女性の激流や噴水を味わってきました。

これから先も、おそらくこの御馳走を求め続けることだらうと思います。

時々、もうそろそろ止めなければと思うこともあるのですが、少し間が空くと、いららとして、いても立っても、いらなくなるのです。

もちろん、こんなことをしていて、とり返しつかない病氣にとりつかれたりはいらないかと、真剣になって考えたこともあるのですが、幸か不幸か、まだ、それが原因だと、はっきり思い当たるような病氣にかかったことはありません。

いくら若い女性だからといって、皆が皆、健康な肉体の持主だとはいえないだらうと思うのですが……。

ひよっとすると、こんな特殊な願望に身を焦がす私のような人間には、何か常人の持ちあわさない、特殊な浄化装置のような器管が発達しているのかも知れない、なんて思った

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

| | | |
|-----|-----|-------------|
| 一月分 | 1冊 | 四〇〇〇円(送32円) |
| 三月分 | 3冊 | 一二〇〇〇円(送共) |
| 半年分 | 6冊 | 二四〇〇〇円(送共) |
| 一年分 | 12冊 | 四八〇〇〇円(送共) |

郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

りもします。

こんな趣味のない人は、聞いただけでもきつと吐き気を覚えるだろうと思いますが、私には、世の中のどんな高価な飲物よりも魅力

(大阪四二七八番)『のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

的に感じられるのですから、不思議といえばこんな不思議なことはありません。しかし、自分では単に嗜好の問題だと割りきっています。

べつに自分のこの性癖? を正当化しようとも思いませんが、世間には、魚のハラワタやサザエのフンを美味だといって賞味する人が多いのですから……。

ただこんな獲得方法については、これが犯罪になるものかどうかは別としても、満足しているわけではありません。けれど、こんな方法でもとらない限り、あの魅惑のスープには、ありつけないのです。

今、このように告白の拙いペンを持っても、若いふくよかな双柱の間を、堂々とほとばしり落ちる、あの魅惑の激流のさまが、目の前に浮かんでくるのです。

女性のスूपや、ジュースに憑かれてしまった私は、年期を入れた塗装技術を捨て、現在K市の貯金局の雑役夫として、御馳走を頂いた女性職員の汚物の処理をしたり、便所掃除をしています。

勿論。仕事上、排水溝には、おおっぴらに出入りしています。

(おわり)

連載・時代S小説

(十)

紫

蘭

の

門

美女なればこそその縄目なり
責めらるるは女の名誉
縄打たれざるは醜女(しこめ)ぞ

カット・岡 たかし

風 流 極 道 軒



にされた裸身が、舞台で、な
まめかしく揺れていた。

右膝に朱色の縄をからめら
れただけ——。

一糸もまもってはいない。

——ポトツ

と床をぬらしたのは、唇か
ら頬へとながれ額につたわっ

た唾液であろうか、それとも、紅真珠のよう
に燦く乳首から、したたる玉のような汗であ
ろうか。七尺ちかい黒髪が、舞台の上手へと
ながれ、白蘭の花びらを思わせる肌が、五百
匁蠟燭の光をあびてかがやく。

その貴子の、無残なればこそ尚更に美しい
肢体に、ちらちらと細い目をやりながら為永
種彦が
「二番籤の笠倉屋さんには、さきほど「秘中
の秘」と申しあげておきましたが、貴子姫を
存分に、小半刻のあいだ賜る権利が与えられ
ます」

云いおわるやいなや、(ほおっ!)という
ため息が、あちこちから、あがった。

素っ裸にむきあげられた高貴の女体を誰よ
りも早く自由にできる——これにまさる男冥
利はあるまい。

羨望の視線をあびて舞台にあがった笠倉屋

全裸の逆立ち

ちみもうちよう
魑魅魍魎

——つまり、この世のものでない
悪鬼羅刹にかこまれて、菊亭貴子の逆さ吊り

は、逆海老のかたちになって、両手で舞台の床を支え、全体重が右膝だけにかかるのをやつの思いでいる貴子の顔のまんまに、どつかとばかり、あぐらを組んだ。

「奥方さま、ご気分は、いかがかな」

第一に太い指が攻撃したのは淡雪を思わせる白い二の腕のつけねに、くろぐろと生えそろっている腋毛であった。柔らかい白肌を彩るそれは、むしろ男心をそそるものなのであろう。

「いや、いやでござりまする。アッ、アッ」

右、左と腋をくすぐられるまま、貴子は、しみひとつない白い背肌を客たちに見せて悶え、豊満な双臀をくねくねとうごめかせた。「よいにおいじゃ、さすがは中納言高明の正室であっただけのことはある。蘭麝の香りが肌にしみついておるわ」

前号まで——豊太閤の莫大な埋蔵金の謎を秘める五夜のロザリオをめぐる老中領田下野や元禄屋一味と、十一代将軍家斉の御落胤を自称する怪盗徳夜叉が対立。渦中にまきこまれた前右大臣菊亭政房の娘貴子や侍女久我雅子の裸身に元禄屋たちの嗜虐の魔手がのびる。

右手を背骨づたいに、左手は客席からは見えない貴子の胸から腹へと、せわしく這わせながら、次第に、ななめ上へと、ずらせていき、それに応じて自分も膝立てから中腰へと移行する。

「ヒイイッ！ お、おやめになって！」

鎌首をもたげた青大将に狙われては、貴子もたまったものではない。思わず悲鳴をあげたが、そんなことには、おかまいもなく、「ほれさ！」

と掛声して、そのまま左手を尚更にうごめかす笠倉屋であった。

正面の老中、領田下野を主賓とする客たちの眼には、今にもV字型に裂けそうな貴子の双臀のかげから、笠倉屋の左手が肘のあたりまで、ニユウツと、こちらにつきでているのが、ありありと見える。

「笠倉屋さん。儼と代ってくださらんかの」

盃をあげながらこの別邸の主人・利倉屋が羨ましそうに云った。

いくら二番鑑の幸運を得たとは云うものの笠倉屋の果報は、羨望に値する。

「それ！ もうすこし。くるっと一回転させてくださらんか。そうすりゃあ文句なしだよ笠倉屋の旦那！」

鞭兵衛までが、けしかけた。だが、もしそうすれば、舞台の中央で菊亭貴子の裸身は、逆さに吊られたままの前面が、十人をこえる客たちの前に、あからさまにさらけ出されることになる。

「どうなさる、奥方さま。客人たちは、ああ云っておられる。ご希望をかなえて、御一覽に供しては、いかがかな」

この女体を思う存分に扱えるのは自分一人という優越感に浸りながら笠倉屋は、激しい抵抗を樂しむように、吊られている右脚に貴子が必死でからませている左の足首を驚づかみにすると、ニタツと淫らな笑いをうかべて裂いていく。

「いや、いや！ いやですったらア！」

悲鳴が何度か、ほとばしったが、意に介する風もなく笠倉屋は、むっちり凝脂ののつた太腿を左右に割ると、そのあいだから客席を見廻し、ニタツニタツと笑う。

それはちょうど獄門首に似ていた。

貴子のV字型にひらかれた双臀を厚さ二寸巾八寸の母材の台座にみたてて、その上に、生首が曝されている！

ただ、笠倉屋のながい顎の下にあるのが、はかならぬ貴子の無残な裸身であってみれば

曝されているのは、はたしてどちらのほうであらうか。

「もう、ほんとうに、お許しを！」

貴子は、懸命になって逆さ吊りの裸身を、わずかに両手で支えながら訴えたが、笠倉屋は、いっこうにやめようとはしない。

やめるどころか、淫らに膨らんだ顔をいっそう突き出し、ときおり、長い舌をぺろりとだしてみせるのであった。

五百匁蠟燭が、ジ、ジィと音をたてて消えた。ため息とも、羨望ともつかぬざわめきのなかで、やっと貴子から離れた笠倉屋は、左手で、顎のあたりを撫でて、あとは、もうあたりはばかり相好を崩して笑い、

「ハッハッハハ……従三位押小路中納言の奥方様の柔肌をこの顎が、くまなく探索した！ この手が、この顎がな！」

札差業を営み巨富を擁するとは云え、無位無官の商人にとってこれは確かに何ものにもまさる栄耀であるに相違ない。優美なうちに官能味をたっぷりとうかべた双つの内腿を撫でた太い指を分厚い自分の唇にあてて舐めていた笠倉屋は突如、床を辛うじて支えている貴子の手を、足で払った。

「い！ 痛！ 痛うございまする！」

全体重が、ただ一カ所吊りあげられている右膝にかかり思わず悲鳴をあげる貴子を半回転させた笠倉屋は、客席に向かってニタツと笑ってみせる。

いままで、背を見せていた貴子の裸身が、クルッと半回転して、客たちの眼にとびこんできた！

右膝を吊られ、舞台の奥にむかって雙手をつき左脚を空中でばたかせているその姿は、逆立ちの稽古をしているのに似ていた。

ただ、全裸で、逆立ちの稽古をする女がいるかどうか――。

「稀にみる女体よ」

うっとりと老中の領田が呟く。

興奮しているのは老中だけではなかった。笠倉屋のこれでもかこれでもかと云う攻撃のなかで、小半刻は、またたく間に過ぎる。

三 つ 黒 髪

なきじゃくる貴子の耳に、種彦のおどけた口上が、夢うつつのように、きこえてきた。

「では、いよいよ、一番籤。ぴたりと、女谷流菱衆縄細菱の菱形の数をおあてになった逆剝の美女衛門さま。逆剝の異名は、生馬の尻

尾をつかみ、バリバリと皮を逆さに剥いていったからでござりまするが、はたして、本日はどのような荒芸をお見せしていただくことや、まずは見てのお楽しみ。東西、東西」

肘から手の甲にかけてまるでひぐまのように毛のはえた七尺近い大男の美女衛門、ゆっくりと舞台にあがると、主人の領田にかかる会釈したかと思うと、つぎの瞬間、ひょいと貴子を吊っている朱色の縄を持ちあげた。

「キャアッ！」

右膝にかかる朱色の縄一筋で、全身をさかに吊りあげられた貴子は、びくっぴくっつまるで釣りあげられた目の下五尺もあろう桜鯛のように、はねまわった。

骨と肉とがばらばらになってしまふような激痛！

そんな貴子を二度、三度、客たちに見せびらかせた逆剝は、つぎに、魚籠にでもいれるように黒髪から舞台の床へと降ろしていく。

見ているものには、絶妙の見世物であったが、やられる貴子にとっては、これ以上ない肉体の苦痛であろう。床におろされるや否やせわしない息づかいとともに、麻痺して感覚のなくなった右膝を両手でかばおうとした。

が――、次の瞬間、

ハツとすると、左脚を「く」の字に曲げて内腿をかくし、双つの掌で乳房を覆ったのである。

この動作は、女として当然と云えるかも知れない。しかし、骨と肉が、ばらばらになるような責苦のあとで、とっさに、このような女らしい振舞いのできる女が、はたしてどれだけいるであろう。

「どうです、領田さま。なみの女とは異なり責め甲斐のあるう、いや、つでござりましょう」

いままで黙って眺めていた元禄屋が、

「女の色気というものは、隠すところに生れてくるものでございまして、スッ裸にむきあげても、平気で乳房をさらけ出すような女には、色気も喰気もおこりませぬわ」

「フッフッフ、おのろけかな、元禄屋。この貴子は、そちの妻ではないか」

「フッフッフ妻は、ほかにおります。しいていえば側妾、わたしの拷問用女性とでも」北町奉行所の与力である工頭が、老中に酒をすすめると、

「昔よりの云いつたえでござりまするが、お白洲で、女囚を吟味する場合に、女らしいはじらいを見せる女は、だいたい白でござりするな。対して、箒尻で一打ちされると、す

ぐ膝を割っていきたくない素振りを見せる女はあばずれとでもいいですか、ともかく罪をおかした女の場合が多いようでござりまする」

「与力とは、よい役目よな。罪もないのに捕えてきて、さんざん責め罵って、そちたちが楽しむのであろうが」

「老中さまのお言葉とも思われませぬ。そのような悪事をなす与力、同心など……」

「一人もおらぬと申すのかな、工頭」

「いや、その、フッフッフ」

ニヤツと笑い返した領田は、

「与力、同心の扶持米はたかがしれておる。せめてそれくらいの楽しみがなくては、面白

うなかるうて。余が、南町奉行の鳥井耀蔵からきくところでは、皆それぞれに楽しんでおるとのことじゃったわ。ワッハッハッ」

心地よさそうに笑いとばした領田は、ぐい

っと盃をほして、貴子をみやり、

「縛った女体を賜るのもよいが、たまにはこのように、文字どおり一糸もまとわぬ女体もおつなものよな」

豊かな胸をしっかりと抱いて、貴子は、産毛の一筋一筋がさかだつような羞恥におののいていた。緊縛されておれば、あきらめの観念が、羞恥心にさきだつ。が、縄一筋かかっ

ていない素っ裸の身を、一尺高い舞台の上に晒されていると、数十人の男たちの視線が、まるで灼熱した焼火箸のように肌につきささるおもいで、いてもたってもいられないほどの羞恥に襲われ、そっと、顔を左膝のかげにかくして、ちぢかまっているほかはない。

その貴子の鼻孔を、さきほどから、自分自身の体臭が、くすぐっていた。

蘭麝の香りと男たちは云う。別れた夫の高明もそれをしきりに讃えてくれた。が、いまだようのは、蘭麝よりも、もっと官能的な肉体の奥深くからにじみでる匂いであった。

(みだらな……アア……妾とした事が)

これが、閨房ねやの匂い、夜の営みのさなかににじみでくる、媚びるような、なまめいたものであることに気付いた貴子は、顔が真赤に火照るのを覚える。

(蜂蜜と、麝香の香り……)

夫はそう云ってくれた。ひとくちに蘭麝の香りと云うが、それは白蘭の花と麝香の匂いが交じり合った微妙な香りである。ふだんはそのふたつが調和よく交じりあった匂いが、貴子の肌からただようのであるが、裸身が燃えたつにつれて、麝香のそれが白蘭の花の香りをおさえて、やるせなく、たちのぼって

イメージギャラリー

『檻の中の贅』

岡

たかし



る。その甘くねばねばした香りを夫の高明はいみじくも、蜂蜜と香麝の香りと表現したのである。

(いけないわ、貴子！ いまは責め苛まれて
いるのよ！ 駄目ですったら、駄目！)

が、押えようとすればするほど、貴子の臉

のうらには懐かしい高明の裸身が泛かんでくる。現実感をもって迫ってくる。

(麝香は、麝香猫、麝香鼠、麝香鹿からとると聞く。いずれも海の彼方の靈獸。そなたのこの香りは、やはり鹿じゃな。唐の雲南とよばれる秘境にすむと云う靈鹿の腹にある香囊……その鹿、牝鹿と見たぞ、貴子！) 高明はそう言って貴子を愛撫したものであった。いまその言葉が、うつつのように耳もとでひびき、(ア、アッ……アアウ……) 思わず貴子は、せつなそうに喘いだ。心のなかを見とおされはしないだろうかという羞恥が、いっそう、昂奮をさそい、裸身を、ふかぶかと折りまげさせていく。

その喘ぎを待っていた男がいた。

一番籤の逆剥の美女衛門である。

「女谷流三つ黒髪！」

おどりあがって叫ぶと、七尺ちかい黒髪をねもとから三つに分け、介添役の槍助に、貴子の必死で乳房を拘きしめている双腕を背後にねじあげさせると、三つに分けた黒髪のうち中央の束で、しなやかな両手首を、またたくまに縛りあげていく。

三巻きして、なお余った黒髪は、双臀のあたりまで垂れて、黒と白との強烈な対照美を

かもし出す。それを前からみると――

広い富士額の髪の毛の生えぎわが、ギョツといっそう際立って、連娟とした細く長い眉が吊り上がり、怒りを含んだ美女の風情が漂う。

「立ちなよ、いつまで上品ぶってやがる。お前のその匂いが、先刻とは違ってきていることに俺が気付かねえとも思ってるのかい」
(や、やはり……：気付かれていた!)

一瞬、耳朶から胸のあたりまでを桜いろにぼおっと染めた貴子は、美女衛門たちの淫らかな笑いのなかで、よろよるとたちあがり、ひっしで両腿を、ぴったりとあわせたのであったが……。

「なにを恥かしがってやがる!」

三つにわけた黒髪のもうひとつの束を、頭上の滑車の鉤にまきつけて、高々と吊りあげた美女衛門は、最後の束を貴子の左頬から肩にかけ、豊かな双の乳房の谷間から垂直に、へそ、下腹、そして太腿へと垂らす。

「女には、荒縄がよく似合うとは元禄屋の旦那のお言葉でござんすが、女には、ほれこの様に黒髪の縄目が一番相応しいものでして」

二歩退った美女衛門、ためつすがめつ眺めていたが、ふと、舞台下手の紐をひいた。

するするとおりてきたのは真紅の垂幕。

「フーム……：美女衛門さん。市村座の座

付になっちゃあどうです。いいねえ、こりゃあいい。この色のあんばい。よし、あっしが明日からでも鎖格子女之拷問の第五段目に取り入れさせて頂きやしよう」

種彦が思わず嘆息したほど、その色彩効果は、すばらしいものであった。

舞台前面に五百匁の裸蠟燭が七本。その光をうけて、左膝を「く」の字にすばめて佇立する月下の白蘭を偲ばせる裸身。その裸身にからまる点曜石の玉簾のような黒髪――。

真紅の垂幕を背に、あまりも鮮かな貴子の緊縛姿に、客たちは、かたずをのんで、しばし、みとれるのであった。

「これにて、美女衛門さまのいたぶりがおわかりました。工頭さまからあわせて五人の殿方によりまして、このようにスッ裸にむきあげられ縛りあげられました以上、あとは、どなたさまでも御存分に、と申し上げたくは思えども」

木拍子を打ち鳴らした種彦は、

「いっせいにとびかかられましたのでは、姫にも困惑なされましようほどに……」

と、じらすように客席をながめ、

「京の仇をこの江戸で――まずは青江さま

ち三人にこの女をひきわたし、女主人凌辱の場”を演じて頂くことにいたしまする」

すきとおった木拍子の音が酒と男たちの精気のむんむんたちこめる部屋に、さえ渡る。

高貴の女性を、その男どもに責め罵らせる――あらかじめ、元禄屋や利倉屋たちが目論んでいた筋書のとおりである。

木拍子の音が消えやらぬうちに、さっそく青江散位が舞台に足をかけた。

興奮した顔つきで善兵衛、清兵衛がこれに続く。

「奥方、おききのとおり。観念していただきまするぞ」

地獄の青鬼を思わせる陰気な青江の声。

「ひ、非道な! なんとという恥知らず!」

かすかに瞳をあげて貴子は、ひくく呟いたが、もう、こうなってしまうては、青江の言うとおりに、観念するほかはなからう。

突然、青江の手が、そんな貴子の、豊かに艶めく乳房をねじりあげると、

「クッククック……：どうじゃな、奥方!」

「アッ! な、なにを!」

「なにをもくそもあるものか。おい清兵衛。

針金、針金じゃ」

「ヘッ、ヘエイ」

さし出された針金をひったくった青江は、グイ、グイと右乳房の付根を縛りあげる。

「キャアッ！……」

けたたましい悲鳴が、ほとばしった。

おどおどしながら清兵衛と善兵衛も、二人がかりで左の乳房を同じように縛りあげた。

待っていた青江は、瓢箪のようにくびれた双つの乳房のまんまに、あまった針金で輪をつくるとその輪のなかに、濃い緑いろの花蠟燭をつつこんで、火を点す。

「奥方さま。いや、もう、呼び捨てにされても文句は云えまい。貴子！ どうだ、人間灯台にされた気持は。何とか云ってみな！」

しっかりと閉ざされた臉のまえ二寸のところで、青白く焰が燃える。まさしく、それは妖しくも美しい人間灯台と云えた。

「貴子、云ってみな、その唇でよ。青江さま許してくださいませ！ とな」

かつて朝夕、平伏して挨拶していた奥方様を女囚としてあつかう快感に、青江は、もう前後を忘れたように、さらにもう一本の花蠟燭を、貴子の顔ちかくによせていく。

一方——、清兵衛は、もっと単刀直入であった。それはまさに、色情に狂った牡犬のごとく、中腰から、はては大胡座をかいいたかと

思うと、もうこらえようもなく鼻を鳴らせて嗅ぎ廻るのであった。

「な、なにを、なにをするのです！ いったい、どうして、お前たちが、こ、このようなことを！ や、やめるのです！ や、やめてください！ お、おやめ！」

串ざしの刑と云うのがある。槍で、体を突きとおす惨刑であるが、それにも似た衝撃が貴子を襲う。むしろ見知らぬ男であれば、これほどの屈辱は感じなかったかも知れない。だが、いま、自分を罵りつづけているのは、ほかならぬ、用人や下男たち！

「清兵衛！ お、おやめ！ おやめなさい」

貴子の唇から血を吐くような絶叫が何度ほとばしったことであろう。が、その絶叫は清兵衛の嗜虐の血をより燃えあがらせ、客席の男たちをぞくぞくと喜ばせるだけであった。

「女の、やめてえ！ は、初手のうち」

種彦が盃をあげて云うと、利倉屋が、

「いやいや、それはこうじゃありませんか。女のやめては、してえの叫び。やめてやめてはしてしてよおって……ね。全く女つてやつは心にもないことを云うもので」

「利倉屋さん。心にもないじゃあ、ありますまいぞ。駄にもない。いや、違う。心はいや

いや、駄は好きよ……ってのはどうでげす」

勝手なことを、しゃべり合う男たち。

舞台では、青江散位の蠟燭が、いよいよ不気味に、貴子の鼻さきに迫っていた。

「どうでえ、貴子。云ってみなよ。俺たちの教えるとおりでいいから、その朱い唇でしゃべってみなよ。早くしねえと、ほら、ほら」

「ウ、ウウッ！」

大弓のように裸身が反り返る。と、すうつと蠟涙は柔らかい肌を流れ、なめくじの這ったあとのような灰白色の跡を、のこす。

——ポタッ、ポタッ！

容赦なく傾ける五百匁蠟燭から、次々と灼熱の滴液が、肩から首頸へかけてしたたりおち、小さな花を咲かせたかとみるまに、双つの乳房の深い谷間で揺れている濃緑の蠟燭の焰に暖められて再び、くねくねと尾をひいていく。

眉をひそめ奥歯をカチカチと鳴らし、それが男心をそそるものであることを知りながらも貴子は、むっちりと凝脂ののった腰を、左右に、はげしく振りつづけるのであった。

しかも、足元には清兵衛が居すわり、たえ

まなく蠢く十本の指が、いまはもう見物の目もものともせず、蛇のような執念深さで責めたて始めている。

「アッ、ア、アア……ウ……」

絶叫が、いつのまにか、むせびなくようなすすりなきにかわり、ときおり、

「アウ！ ア、ムウウ……」

という嗚咽とも呻きともつかないひびきがまじる。

いくつもながれおちる蠟燭のうち、ひときわおおきい、それが、すうーと左肩から左乳房にながれてくると、冷たい針金に触れて、凝結していく。

「もうひとつ！ そおれ、いくぜ！」

青江の声とともに、大蠟燭が青白く燃え、ポタッ、ポタッと大粒のしたたりが、双の乳房のまわりをとり囲むと、貴子が、見栄も外聞もなくなったように金切声をあげた。

「奥方、いやさ、貴子。早く云ってみな。青江さま、お許しになって。妾、なんでもおっしゃるとおりにいたしますから——とよ」

「な、な、なんで、お前たちに、そのようなことが！ アッ、アチッ！ ヒイイ！」

処女雪を思わせる乳房のいただきに、紅真珠の輝きを秘めてそびえる乳首めがけて、蠟

涙が集中したのである。

「云うことをきくほうが、身のためだぜ」

骨太の親指と人さし指が、いま、蠟涙につつまれたばかりの乳首をとらえる。

「ムムッ！ キャアッ！ お、おやめになつて！ ダメ、だめですったらあ！」

貴子のすさまじいほどの絶叫に、これまで後の方で、ぶるぶる震えていた清兵衛が、

「奥方さま、許してやっておくんなせえ！」

と叫ぶと、いまひとつの乳房に、ガブッと黄色い、はぐきを見せて、かぶりつく。

「善兵衛！ まだ舐めてよいとお許しはでちやあいねえ！ 律義者と云われたお前がそのざまでは奥方さまもお困りになるぜ」

口ではそう云ったものの青江は、善兵衛の醜惡な乱杭歯が、貴子のやわらかい乳房を歯型のできるほど噛みあらしていくのを、心地よさそうに眺めるのであった。

どうやら青江散位、元禄屋や利倉屋たちのように、趣味として女体を責める緊縛愛好者とはちがい、先天的な嗜虐、それも残虐性をもつサディストらしい。

「ヒイッ！」

金切声をあげて、のけぞる貴子に、
「どうでい、焼いてやろうじゃあねえか。そ

の玉の肌をよ」

青鬼のような顔で、蠟燭の青白い焰のさきを乳房にちかづけようとしたから、美男の槍助が、

「傷つけちゃあいけねえ。やがては將軍さまの御目にも入れようという女。一日や半日でなおる縄の痕ならともかく、やけどさせちゃあいけねえよ」

「フッフッフ。こいつはすまぬ。つい、本気になってしもうた」

と、ニタッと笑ったものの、すぐ、もとの陰惨な青鬼のような表情にもどり、
「清兵衛、どうせいじくるのなら、存分に哭かせてやろうじゃあないか」

と、坐りこんで、いたぶりつづけている清兵衛に、よびかける。

「ヘッヘッヘッ、合点承知のすけのすけ」
たちあがった清兵衛は、已れの手をしげしげとみて相好をくずし、

「スウーッと、しやした。これほど、男みょうりにつきることは、ござんせん」

と、その指を、一本一本、ペロペロと舐め始める。一方、善兵衛はとみると、うっとりとした顔付きで、すっぽんが喰いついたような勢いで噛みついた歯を外そうともしない。

その間に、青江の指示で、架助たちが、高さ二尺、幅一尺ほどの脚立のような小道具を舞台に運びあげてくる。色責めの道具にまぎれもなかった。裸蠟燭が、その黒びかりする木肌を妖しく照らし出す。

穴沢流谷渡り

たにわた

同じ頃――

日本橋四丁目の元禄屋の本宅。

白綾に黒紋様の高麗縁をうった真新しい備後畳のうえに、およそ、まわりの豪華な調度品とは場ちがいの荒筵が、いちまい。

その荒筵のうえに、極上の美酒にも似た琥珀色の肌をさらしているのは、久我雅子であった。

十日ほどもまえになろうか。

元禄屋をはじめとする男たちに、菊亭貴子が、和蘭渡りのタルボタイプの写真機で全裸緊縛姿態を撮影されたとき、彼女もまた一糸まともぬ姿をさらして、その上、老中領田下野に弄ばれて恍惚状態におちこみ、かたわらで見守っていた元禄屋の襟もとにしがみついたものである。

それからは、貴子と別々の座敷牢で、とき

おり、牢番たちにからかわれながら、貴子の身を案じて暮していたのだが、つい、さきほど、番頭の和吉と昭吉に、よび出されて、この部屋に連れこまれたのであった。

「雅子姫。今夜は、昭吉さんとあたしの二人だけ。旦那さまたちは利倉屋さんの別邸で貴子さまとお遊び。あたしたちは、ゆっくりと三人で。ね、よくって」

和吉、例によってねちねちした女言葉で云い、しぐさまで女を真似てみせる。

つい二刻ほど前、小梅の利倉屋の別邸へ、貴子をおくり届けたあと、好餌の匂いだけがかがされて追いちらされる野良犬のような気持で帰ってきた二人は、うっ憤を、雅子にぶちまけようと相談しあったのである。

主人の元禄屋からは「最後まではやるな。」

雅子の顔なじみのまえで、儼がやる」と云われていた。「最後まで」とは、いったいどこまでなのかと考えて相談し合った二人は、結局「一歩手前までならよろしい」という解釈に落ちついた。

「一歩手前、か。……フッフッフ。雅子、ずいぶん楽しませてもらうぜ」

昭吉は、女中頭のお松のはこんできた酒をぐいぐいとあおり、舌なめずりする。

荒筵の上――

緋縮緬の湯文字一枚。たつぷりと凝脂ののった柔肌をただ後手に縛られただけの雅子の裸身は、掛燭の灯のなかで、妖しい美しさをただよわせていた。いつもは、御所風のながい垂髪だが、数日前、髪結女をいれて、いきな深川髷にゆいなおされてからというものの、一層、艶麗さが増して、緋縮緬からこぼれる片膝や、素足のなまめかしさが、和吉たちの好き心を、いやが上にも、かきたてる。

雅子にとってこの二人は、にが手のなかのにが手であった。

羅卒の鞭兵衛たちよりも、種彦や鳥尾芳年よりも、陰微でねちねちして、女心のすみずみまで、あばき抜いて、よろこぶ。

「そのままじゃあなんだから残陰といくか」

にじりよった二人は、万一の抵抗を考えてか後手はそのまま解こうともせず、猫が白鼠をなぶるような手つきで、雅子を仰向けに倒すと、文机をもちだしてきて腰のしたに押しこむ。されるがままになっていた雅子ではあったが、冷たい夜気が、乱れた湯文字のすそから内腿へ這いあがってくるのを感じると、

「お、おやめになつてくださいませ」
せつなそうな声を出す。もう、何度となく

賜られた躰ではあったが、そのたびに味わう
羞恥心には変わりにはなかった。
いや、回を重ねるごとに羞恥心が増すよう
にさえ思われる。
それは、丁度、初夜は、不安のほうがさき

にたっていた新妻が三日目、四日目と、日が
たつにつれて艶めいた羞恥を、全身にあふれ
させてくるのにも似ていると云えよう。
女といういきものは、半年や一年くらいは
そのような振舞いを、本能的にするものであ



……イメージギャラリー……

『プレイ開始』

……志羽利也……

る。ただし、二年目からは、保証のかぎりでは
ないが……。

その羞^{はじ}らしいの姿態を楽しみながら二人は、
みようみまねでおぼえた穴沢流残陰の縄掛け
を、ほどこしていった。

残陰——これは読んで字のとおり、陰だけ
を残すもので、ほかの部分の縄は、さほど重
要視されない。いろいろな拷問に屈しない女
囚を、徹底的に羞恥せしめて責め抜こうとい
う、おぞましい拷問のひとつと云える。

文机の上に仰向けにされ、羞恥におののく
雅子のまえに、次々と奇妙なものが並べられ
る。

「これから少しあそんでさしあげようと思っ
の。たのしくって、しょうがなくなるわよ」
張子筒、大小のこけし人形、竹細工の蛇、
伸縮自在の如意棒。それに、「天下の珍味」
と銘うたれた七味・唐辛子など……。

「お許しを……ほんとにお許しになって下
さいませ！」

朱い唇を、わななかせて雅子は訴える。何
をされるのかは、一目瞭然。なかでも径一寸
あまりの如意棒には見覚えがあった。

醜悪なこびとの李田客の愛用の品で、貴子
が散々にいたぶられるのを雅子は見ていたの

である。女の羞恥心の最後の一滴までをしぼりださせる小道具……。

「お、おやめになつてえ！」

水蜜桃のようにみずみずしい双つの胸の隆起を、はげしく波打たせながら叫ぶ雅子に、
「なにをやめろっていうんだい。湯文字をむしりとることをかい。フッフッフ……」

昭吉が、湯文字の紐に手をかけた。

「イヤ！ イヤです！」

「フッフッフ、さあ、雅子さま。どちらになされます。お湯文字をとって、スッ裸にしてさしあげましょうか。それともお湯文字はそのままで、この責め具をつかつてさしあげましょうか。さあ、どちら」

なぶるようにいいながら和吉が、張子筒をポンポンたたいて雅子の鼻先にもっていく。

「許してくださいな。妾、ほんとにもう、もう、お許しを……アッ！ アレッ！」

悲鳴のなかばで昭吉は、なんのためらいもなくサァーッと湯文字をはぎとった。

ジーンと足もとの爪先から、氷のように冷たい無防備感がこみあげてきて、雅子は全身を、こわばらせる。見おろす昭吉たちの目にすべすべした腹の大きく波打っているのが、きわめて官能的に映る。

「フッフッフ。いつみても、いい景色。まったく申し分なしというところね」

昭吉は、乳房の谷から、ゆっくりと華奢な指を這わせていく。

「いい匂いだ。ほれぼれするぜ」

香道十炷香のうちの明石香だと、老中領田たちが嘆賞した体臭が、むんむんとたちこめたまらなくなったように和吉が、張子筒をとり上げると、猿ぐつわのかわりか、雅子の口を、こじあけて噛みます。

「お、お、おやめに……」

後毛を富士額から頬にかけて乱しながら、雅子が、はげしく頭を左右に振る。

「行くぜ、雅子！」

上半身の攻撃と同時に昭吉が、竹細工の蛇を手にしてニヤリとしたかと思うと、

「グエッ！ グ、グググッ！……」

喘ぎとも呻きともつかない声をたてて、雅子の裸身が、いきのよい、さくら海老の様にはね、躍る――。

「フッフッフ……これでもかい、雅子」

昭吉の手にのこっているのは蛇の尻尾のほうだけであった。

雅子は、貴子に較べて、反応が早い。

その敏感さを利用して責められては、心で

いくら抵抗しても、肉体にともされた焰が燃えあがる。こみあげてくる喘ぎを吐き出そうとしたはずみで、張子筒の猿ぐつわが、おしだされ、その瞬間、

「アッ、アッ！ お、おやめになつて。おやめになつてくださいってば！」

ほとばしるような叫びをあげたが、そのひびきには、やるせないような甘さがあった。

「フッフッフ、雅子さま。まんざらでもなさそうね。しかし、今夜はこれくらいでは許しませんことよ」

昭吉と目配せした和吉は、強靱な細系をとり出すと、二人して、大きくひろげられた太股のあいだに、どっかりと腰をおろす。

「穴沢流谷渡り、たっぷり味わって頂くわ」
和吉の白い指が、細系をつまんで雅子に見せつける。

「谷渡りの秘術とは、……フッフッフ、どうだい、こうすることだぜ」

雅子は、睨みきれんのではないかと思われほど瞳をみひらいて、四肢をはげしく痙攣させ、女に与えられるこれ以上ない屈辱に抵抗しようとしてたためるのであったが、谷渡り、と呼ばれる股間縛りで、細い系をつぎつぎとはりめぐらされはじめると、そうでなくてさ

え、敏感な雅子のこと、ものの数呼吸ののちには、抵抗とも、のたうちともわからないうごきを、狂ったような絶叫とともにあらわしてくる。

「この糸を、もすこし強く張って——と」

「この糸とこれと絡ませれば、もっと絞り上げる事ができてよ」

錦欄の布でもつづり合わせるような手つきで、ものの小半刻ちかく、ああでもないこうでもないと囁きをかわしながら、やっと谷渡りの緊縛をかけ終わった二人は、ホオッと肩で息をして立ち上がる。

「沈丁花の匂いね。こんなよい香をにじみださせるところ、やはり公家の女性は、ちがっているわ」

「鞭兵衛さんのようにはいかないだろうが、

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫があり、すので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。便略号『花』 定価五〇〇円(送共)

このくらいできれば、まあまあというところだろうな」

酒の肴——一尺も離れていないところの、縛られた沈丁花の美しさを肴に、二人は、ゆっくりと酒をくみかわす。

穴沢流谷渡り、この緊縛術の秘法で呼ぶところの「谷」が、「頂上」が、菊灯台の灯りをうけて、あますところなく、てらしだされる。

齒を、かみ鳴らして、雅子がもたえる。

そのガチガチ鳴る、まっ白い齒の音を楽しむように、昭吉が、

「お姫さま。フッフッ、さあ、いいですな。もっともっと、哭かせてさしあげますぜ」

昭吉の手にしているのは「天下の珍品」の竹筒であった。七味唐辛子——とうがらし・胡麻・陳皮・けし・菜種・麻の実・さんしょの七つの味をまぜ合わせたおなじみのもの。

その七味の入った竹筒を傾けて、掌にうつした昭吉は、右手の親指と人さし指で、すこし摘みあげると、ここぞと思う谷へ、ホイッとふりかけた。

はじめのうち、何の反応も示さなかった雅子が、三呼吸もすると、そのヒリヒリする名状しがたい疼痛は、鋭い錐の穂先のようにこ

みあげてきて、

「な、なにを、なにをなさっているの！」

太股が、おおきく、くねる。

「哭かせてやるといったじゃあないか。ここらあたりにも、もう、ひと振り」

「昭吉さん、あまり、振りかけると、今度はあたしたちが困るわよ」

「いいってことよ。困るまえに、こいつで、ひとなきしてもらうさ」

両手にこけしをにぎった昭吉は、心得顔に立ち上がった。

恥も外聞もなく——という言葉があるが、雅子は、まったく惑乱状態に、陥ってしまった。

「一歩手前までならば、いいのさ、和吉。俺からさきで、いいだろう」

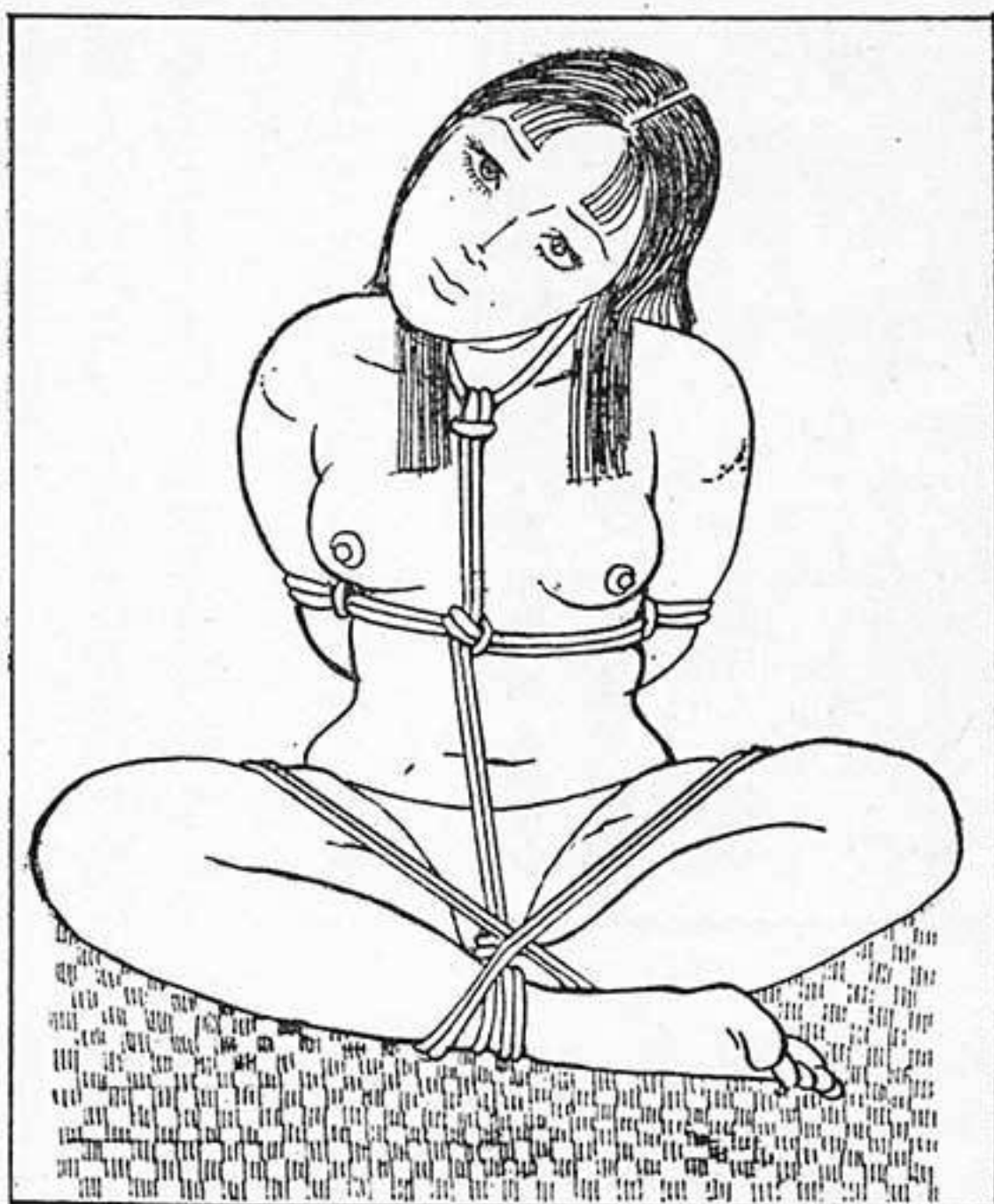
昭吉がニヤリとして、和吉の顔を振りかえり見る。

「あたしだってさ、男ですもの」

それに応じて和吉が、はねあがるようにして、雅子の上半身に回ったのである。

ふたたび声を封じられた雅子のうめきが、深夜のしじまを破り、刻を忘れて備後置を這い流れつづけたのであった。

カット・岩波大介



試論

サディストが求める美

渡部好美さまへ

杉本弘志

5月号を手にとって、『好美のお便り』と題した渡部好美さんの文章を読んでいるうちに「杉本さま……」と私の名が目に入り、思わず「うへえ。とうとう……やっぱり」と、首をすくめる思いになったものでした。

渡部さんは、拙稿12月号掲載の「性倒錯の世界をみて」の文中、私があゝ映画のおめあてサド・シーン（SMとかサドとか、この当世流行の省略語は、あまりよいことばと思われず、好きではありませんが、ほか

に適當なことばがないので使います。ほかにアブチックとか、アブニストなどという、でたらめ英語は論外として、ブルー・セックスというのが、私の比較的、好きなことばなのですが、漠然としている上に、ややキザっぽい）について「出演の女性が、体や表情が醜く失望した」と書いたことを、はたして怒り嘆き、ウラの事情を知らないでと、婉曲にはあるが、非難しておられます。

またこの道？ ひとすじに精進してきたのに、そのキャリア、真シさで、駆け出しのM

女性などに負けるものか、私たちだからできたのだと、渡部さんのさらに先輩にあたる谷山さんの分まで代弁されての、すごい氣迫が感じられました。

（あの感想を投稿した時点で、私はうかつにも、出演女性が奇クに関係のあるひとである可能性に、思いつきませんでした。投稿後に、たしか掲載の前の号だったと思いますが、辻村氏の「性倒錯の世界企画出演の弁」を読んで、演出女性が渡部さんと谷山さんであることを知って、お二人にす

まないことをしたと思いました。しかし実際にあのように感じたのですから、まあ仕方ありません)

まず私のあの感想を、もう少し詳しく説明させてもらいますと、あのシーンからパッと私は「寒々しい、貧しい、暗い」という印象を受けました。私のような心情的サディストは、空想の世界で抱くイメージが激しく豊かな？　なだけに、また現実の体験が貧しいだけに、そういう場面への期待が非常に大きいのです。

また映画は、いくらドキュメントであっても、スクリーンに映し出されるもの(光と影)は、観客にとって結局「絵空ごと」です。だから、そこに表現された女体と女体のうごきが、かりに私の感じたとおりのものだったとしても、それは、照明や装置や、撮影や監督の責任でもあります。

(逆に美しかったとして、その功も、勿論スタッフと出演者でわけ合うことになりませんが……)

私たち観客は、視覚とわずかな聴覚で、そしてあとは想像力でしか、それを鑑賞できないのですが、現実には触覚、より自由な聴覚、嗅覚、その他いろいろな感覚や雰

囲気。生活体験の場合には、さらに過去の想い出、愛情などが加わって、問題は十分、異なってくるわけです。

だから、渡部さんご夫妻が、お互いに美しいと感じ、そのセックス・プレイを楽しく思っているのは、まったくの真実であろうし、私などの口を挟むべきところではありません。

そういう前提の上で、なおかつ私は、あの映画で受けた私の不満の印象を、再び云々にはおれません。ですから、これからいうことは渡部さん、谷山さんへの個人攻撃や評価ではなくて、東映の映画館で上映された、あのシーンについての感想であることを、わかってください。

1、顔や体全体の印象と、その動きが、固く男っぽい。もっと、ふっくらとした女らしい体と、恥じらいのある動きをみせてほしかった。

2、歯医者で治療されているような、緊張して、恐怖・苦痛を耐えているような歪んだ顔の表情。

3、プレイしている男性(これは前回は触れませんでした)の、まるで行者の黙々とした勤行のような感じ。

要するに、私は「なまめかしさ」「恥じらい」をもった美しい女体が、対象になるのでなければ、SMプレイの意味がないと思います。

それと、もう一つ。

これは、書いている今の私にも、よくはわからないことなのですが、一体こういうセックス・プレイは、どうしてあのようにキマジメで、暗い雰囲気になってしまうものなのでしょう。もっと明るい(とまでは、日本で今までセックスが置かれてきた現状からは、すぐには、望めないとしても)妖しくも楽しい雰囲気は、望めないものでしょうか。「五番町夕霧楼」(という題名だったと思いますが)という映画で佐久間良子が演じて評判になった「犯されながらも嫌悪と快感がわがちがたく、ないまざってかもし出される」「美しい表情は、あれは端的にいえば「強姦のオルガニズム」の表現です。

渡部さんのいわれる何々もどきのものときの意味が、私にはよくわかりませんが、似て非なるもの、ほんものになるまでの努力苦しみを経ずに安直に結果だけをまねたものと、かりに受けとれば、たしかに現代の

ジャーナリズムには、SMもどきが多すぎます。

しかし強姦は、SMもどきではなく、プレイでもなく、まさにサディズムの抑制のない発露（それは、犯罪に行きつくでしょう）そのものです。それにさえ、あのような甘美な魅力があるのです。あるいは強姦だからこそ、ともいえるかも知れませんがともあれ、SMプレイならば、そのような楽しさというか、美しさが表われてもよいのではないかと想うのです。

結論をいえば、SMプレイには「秘密めいた妖しい快樂」の味わいと美しさがほしい、ということです。そのためには、「なまめかしい女体」が、まず存在することが必要です。そして、その美しい女体を、しいたげ、さいなんでいく過程と、そこに立ちのぼる女という性の「はじらい」。そこから通常のセックスでは、ひき出せない処まで、女体の官能、魅力を一杯にひき出すのが、SMのダイゴ味なのではないでしょうか。

サディストは女体（女ではなく）を、もっとも愛している男たちだと、いえそうない気がします。私のいいたいことは、これに

つきます。

最後に、もう一つ蛇足的感想を……。

渡部さんは、鉄門海上人の話を、ご存知でしょうか。

徳川時代の東北出身の人とかで、悟道のために、自分の片目を自ら、えぐり、さらに自分の手で男根を切りとり、最後には、生きながらミイラになったという、伝説のお坊さんだそうですが、私は、渡部さんの文を読んでいて、そのマゾ魂？「苦しみを、受けることに、どこまでも、喰い下がってこういう自負」に、何となく、鉄門海上人を想ったのです。

私のような実際のSM体験の貧しい、心情的サディストが、渡部さんにお会いすれば、その気迫に圧倒されて、へーイと懼伏してしまうのではないかと、恐怖を感じます。苦痛の究極は、快樂につながると、よくいわれますが、SM愛好も、そのような求道につながるのでしょうか。その辺は私には何ともわかりません。

そこで、渡部さんが、光栄にもお名指しで「（杉本さんが懂れている）深田さんたちと同席で、杉本さんの前で、SMプレイをやってみせてもよい」といって下さったよびかけ

に、喜んで応じさせていただきたいと思えます。

そして、深田菊子さんと、できれば前田真知子さんの参加を希望します。誌上で拝見するかぎり、私好みの若い精神と美しい体をもった女性のように思えるからです。関係者の同意と奇ク編集部への援助を得て、この試みが実現したらと夢想すると、胸が躍ります。

今まで述べてきたように、SMプレイはまったく、当事者の主観の問題なのです。比較優劣をつけるなどということは、論外です。

ただ、SMはお遊びなのか？ SMは求道なのか？ SMの美しさの客観性は？といったような疑問を解くための、貴重な経験になるだろうことは、間違いありません。

私なりの解答（までは至らないかも知れませんが、卒直な感想は少なくとも書けます）を、その時点で、また奇ク誌上に発表し、読者諸兄弟の話し合いの、叩き台にしたいと考えます。

カット・桐原紫門



二十六年の記憶

花の墓碑銘

中 康 弘 通

二十六年が平和のうちに過ぎて、今日も太陽のもと、人々は働き遊び遊ぶ。大戦で散った三百万の同胞を思い出す人も、思い出さない人も、同じ太陽のもとに生活する。その顔貌には戦争の影も射してはいない。

けれども敵弾に斃れたのでもなければ、空襲で焼死したのでもない、戦火のかげでひっそりと、みずからの手で古武士ながら腹かき切って散らねばならなかった年にも行かぬ娘たちを、肉親でも縁者でもなく、ふとその最期場に行き合わせ、今も忘れない人々がいる。その人々の口から伝わる花の散りぎわを、紙碑に刻んで録そうとする、わたしがいる。――

ここに録す大嶋純子も、その一人である。

昭和二十年八月十五日、当時のいわゆる南朝鮮には、まだ多数の日本軍がおり、その中には現地出身の兵も少なくなかった。そうした兵には現地除隊の形での復員が数日後に行なわれたのであるが一名の兵士は終戦に悲憤し兵舎を離れた足で付近の山頂に至り割腹自殺をとげた。それはS――でのことである。

部隊はほどなくC――に移動し、十月はじめいよいよ復員のため移動して乗船地に向かうことになった。その前夜のことである。

夜の点呼を終わって、出発準備に忙しい白山軍曹のところへ、部隊本部よりの伝令が頭命令を伝えた。

出頭してみると、上官から、軍属の大嶋純子の頼みだと云って、その自決に立合うことを依頼された。白山は、丸顔ながら眼鼻立ちのクッキリした純子を思いうかべた。高等女学校を卒業するとすぐ軍属になり、事務補助員として働いていた、十九才の娘である。

終戦の当夜ならともかく、復員前夜に何故自決するのか、という疑問よりも、云い辛そうな隊長の顔を見ていると白山は、彼女が納得して自決するのなら、その最期を見届けてやりたい、心しずかに最期をとげさせてやりたい、と思った。

すでに現地出身兵の割腹に立合ったこともある白山は、だから純子も自決の検分を頼み

に來たのかと思った。依頼を受けて兵舎へ帰ってくると、外には純子が待っていた。もう真夜中も近いのである。白山はすぐ彼女の宿舎へ連れ立った。宿舎は日本人家屋で、今は持主が引揚げたあとの空家を、女子軍属が使っているのであった。

みちみち純子の話で経緯が知れたのだが、あらまは白山も知っていることであつた。

もともと軍人の家族や軍属は、終戦ののち米軍の上陸までに、部隊を離れて帰国して行つた。だが、その出発後の模様が部隊の方へは全く伝わって来ない。無事に帰国出来たのだろうかという疑問と不安が起きて、女子軍属のなかには、軍と行動を共にしている方が安全ではあるまいか、という判断から、現地に残留する者があり、純子もその一人だつた。

ところが、米軍上陸後は一般人の輸送が停止され、軍の復員輸送に限られるようになったため、純子の進退が問題化して來たわけである。そしていよいよ出発日の確定した日部隊本部で純子は、自決を考えるように、と云われ、覚悟を決めた彼女は、白山軍曹を立合人に指名して、自決することを申出たのであつた。

宿舎は日本人の家屋だけに八畳の座敷がある。そこへ白山を招じ入れて待たせたまま、彼女は別室へ立った。死装束に着がえるためである。やがて懷剣を左手にした彼女は、セ

ーラー服に紺のひだスカートという、女学生時代の夏の制服姿でその場に現われた。

八畳の座敷中央で、はるか南東、故国の方に向かつて端座した純子は、懷剣を前におくと、

「あなたをお慕いしていましたので、どうか最後まで見届けて下さい、わたくし、切腹します」

とキツパリ云つた。もはや死の儀式しか残されていない彼女には、思慕の情を告げるのに、はにかみやひるみなどの虚飾的な感情は働かないようであつた。

「切腹……苦しいぞ」

「わかつています、苦しんだら介錯して下さい。わたくし、作法はよく知っていますからやはり切腹したいのです。肌がすぐあらわせるように、直かにセーラー服を身につけたのです」

しづかに云つた。いずれものの本か何かで読みでもしたのであるが、十九才の少女が作法をよく知っているから切腹したい、という覚悟のほどに、白山は、また驚かされた。

白山がうなずくのを満足そうに見ると、純子は、あらためて一礼した。

「お願いします」

おもむろにセーラー服を左手でかきあげるようにしてスカートのベルトの辺りをまさぐつたが刃先の当たるのが手の位置のせいで肋

のはずれになると気づいたようだった。思い切つたようにスカートの脇のホックをはずした。ただ一つの下着である腰のものを少し押し下げもした。懷剣を眼の高さまで上げて右逆手に柄を持ち、スツと引き抜くと左手は鞘を膝前に返していた。まるで、手馴れた演技のようには鮮かな運びであつた。

純子は、ゆっくり右手の刃先を左の脇腹へ押しあてると、グツと力をこめた。しかし、若い肌のはずみか、覚悟の上とはいへ、まだ十九の乙女の心おくれか、容易に刃は腹に突き立たない。

ああ、と白山が、われとわが腹に刃先を突き入れかねている純子の心情を思いやつたとき、思い切りよく純子は右手の刃先を、腹にあてたまま右ヘグツと引いた。瞬間、鈍い音とともに刃は、深く彼女自身の腹に刺さつていた。

はつとした白山が、思わず

「痛い」

と叫んだとき、当然すぎるほど当然な苦痛を押しこらえてであろう純子は、健気にも、「少しも痛くない。一気に、思い切り、かき切ります」

しっかり云うと、そのままキリキリと一気に右へ刃を引き回した。ちょうどセーラー服と下着のあいだから見える腹の臍のくぼみから少し下がったところで左から右へ、真一文

字に、一尺近くも腹を、かき切ってしまったのである。

「ああ、みごとだ」

思わず嘆声を発した白山の眼に、さすがに今は懐剣をとり落とし、腹を抱えるようにして苦痛にたえている少女の姿が映った。最初は見えなかった血汐が、間もなく畳にまで滴り落ちるさまに、我に返った白山は、もはや是以上この少女を苦しませてはならぬと、刀を引き抜いて、端座の姿勢を辛うじて保っている少女の背後へ回った。軍刀一閃、少女は家族の待つ故国をはるかに望みつつ異境の土と化したのである。

この話を知らされたとき、筆者は大嶋純子という、当世風に云えば昭和二年生まれの満十七か八の少女、その覚悟のたしかさに驚かされ、是ほどの女性を生かしていたら——と嘆じないではおれなかった。

軍隊に色恋沙汰があつてはなるまい。しかし人知れず娘心に芽生えた思いを、いまわのきわに告白して、その慕う人に見届けられて男まさりな切腹をとげる娘の、姿といい心情といい、全く悲愴のきわみである。

そのころの娘たちは女でも、文芸のみならず講談や浪曲、琵琶など武士道を鼓吹する芸能の影響のもとに成長していたことは否めな

たのには、そうした作法の書をも読んでいたのかと全く感嘆のほかはない。

なおその後も白山は、当時在鮮農業訓練女子青年の娘たちが、それぞれに悲痛な自決をとげた話を聞いているし、また、ある高等女学校では武道の女教師が、道場で部員に切腹の作法を教えたのち、みずから割腹して見せた、という話を聞いた。

その女教師は、死装束に着がえ、日本刀で臍下を真一文字にかき切り絶命した、と当時生徒から偶然の機会から耳にしたとのことである。

こうした外地での日本人の自決は、恐らくより数多く行われながら、文字どおり生い茂る夏草のなかに埋ずもれて、いたずらに二十六年の才月をすごしてしまったのではあるまいか。

ところで戦闘のなかった当時の南朝鮮においてさえこのような話が伝わっている。ましてや満州ではどうであつたらうか。開拓団の主婦や娘たちの切腹が伝わっているが、それは果たして伝わっているだけの人数にとどまるのであろうか。

樺太ではどちらかというと、わが国がポツダム宣言を受諾したのちの八月二十日、真岡で、連合国軍の艦砲射撃と上陸作戦で悲壮な最期をとげたものが多い。

男子ではあるが、樺太神社の神官が隻腕の傷痕軍人であつて、神前において左手で以てみごとに真一文字の割腹をとげている。

また、婦女子でも砲火の下で逃げ走りながら、かなわじとその場にあり合う刃もので割腹したものが、あるらしい。土煙のなかで女性の幾人かが、腹一文字に一刀のもとに引き回した悲愴な姿を見た人があるという。

一方、海辺の砲火で、こわれた家のなかで着衣をつけるいとまもないのに、出刃包丁にぬれ手拭いを巻いて切腹死をとげた、うら若い娘もあつたとかいう。

非常の際に、手もとのすべりを防ぐため、ぬれ手拭いを出刃包丁の柄に巻きつけて腹を切る、という沈着さは男まさりのものであつたらう。

いま海をへだてて樺太と向かい合う北海道宗谷の町に、丘の上に「氷雪の門」と刻まれた碑が立ち、当時最後まで職場を守って服毒自決をとげた、若い交換手たちの慰霊塔となつていて、というが、そのほかにもこうした悲話の数多く隠れているのではあるまいか。

小説新潮四十七年一月号に吉村昭氏が「手首の記憶」と題して樺太赤平炭鉱病院看護婦の集団自決を記録小説として発表しておられるが、こうした例は果たして是だけで、とどまるものであろうか。「二十六年の記憶」を今こそ思い起こすべき時ではないだろうか。

S M カ メ ラ ・ ハ ン ト

続・野村信子の巻

快

楽

夢

幻

辻

村

隆

稀有の名器の持主“かずのこ天井”の野村信子から、三月上旬、ひょっこり簡単な葉書が届いた。

（前文ご免下さい。暑さ寒さも彼岸までの、余寒なお、きびしき折柄、その後お変わりございませんか。いつかお話を申しあげましたように、とうとう思い切ってお勤めに出ました。京都の方にお遊びにお越しの節は、何卒



一度お立ち寄り下さいませ。お話したきことも数々ございますが、いずれ、おめもじの折にでも……おめにかかる日を楽しみにいたして居ります。先日あつ子と会って、いろいろと先生のお噂をしておりました。皆様様にもどうぞよろしくお伝え下さいませ。かしこ

末尾に、料亭名の住所と目印、電話番号、店での呼び名など、かなり細かく、几帳面な

文字で書きしるされてあった。

京の歓楽街、木屋町界隈の、指名料亭である。

封書にせず、わざと判つきり分かる葉書に書いて寄越したところに、彼女の賢明さが窺われた。

料亭だけに、秘密めいた封書より、フランクに葉書に書いた方が、反って変に疑われることもあるまいとの、配慮に違いなかった。

チラリと、石田敦子のことに触れているところに、何か言外の意味もありそうである。

懐かしい思いで、すぐにでも訪ねてみたかったが、公私共に何となく多忙で、そのうちにと考えている間に、日が経ってしまう。

三月最後の日曜日、かねてから勧誘を受けていた渡部光雄の熱心さに負けて、久し振りに彼等夫妻と京都で出会い、二人の夫婦プレイの強烈な、かずかずをカメラに納めたあと果ては混然一体となってSMプレイの深淵に耽溺し、くたくたになって京都駅前で夫妻と別れたが、その時フト、野村信子に会ってみたい衝動にかられたのである。

彼が、手土産がわりに私にくれた「天狗の面」の面白さに惹かれ、一つには、私の眼前でマザマザとみせつけた、蠟責め、針責めの

SMの極致のあとの、余りにも生々しい夫婦の性態の烈しさに、遣り場なき余奮にかられていたからかも知れない。

彼女の勤める料亭に向かって、車を走らせだが、木屋町のこの辺り一帯、歓楽の巷だけに、殆ど駐車禁止である。

グルリと迂回して、南座横の、疎水モータープールに車を入れようとしたが、日曜の黄昏時だけに、預ける車は多く、四十分近く待たされて、やっともぐり込んで車を捨てる。

プレイ道具は、すべて車に残し、身軽の体一つで、宵の四条通りへ出ると、最寄りの公衆電話から、料亭「C」へ電話をつなぐ。

野村信子は、ここでは「加代」と呼ばれていた。恰度夕食どきになってか、当の本人はなかなか電話口へ現われない。

三分で切れるのでヤキモキしていると、「お待たせしました、加代でございますが」と、聞き覚えのある声が流れてくる。

「辻村ですよ」

「ああ、そうじゃないかと思いました。今、何処ですの」

「四条の公衆……」

と、いおうとしたら、きれてしまった。改めてコインを入れて掛け直す。

「一寸、寄ろうと思うけど、どんな店なの」

「お一人ですの？」

「ウン」

「一寸、お一人向きの店じゃないんだけど、加代と指名して下さいます。しゃぶしゃぶ、てっちり、うどんすき、などの鍋物が多いけど、一品料理もありますわ。木屋町では中クラスですけど、指名で少しのんでいただいて三、四千円くらい……お金を使わしますけど来て下さいます？」

「ああ、久し振りに顔も見たいし、じゃあ、これから……」

「少しごゆっくりなさった方がいいですわ。今、かなり混雑していますし、私、十一時にならないと出られませんし……」

「それもそうだね。話の最中に、度々立たれちゃ興奮めだからね。どこかで時間を潰してゆくよ」

「きつと来て下さいね」

ダメを押して、ノンコは電話をきった。

かなり空腹を覚えていたが、フリの一人客は、さして歓迎もされないだろうと、ノンコの言う通り、時間を費やすべく、四条河原町へと足を向ける。こんなことなら、ドクター氏でも誘って来るのであった。

ノンコから消息があったと、ドクター氏に電話で伝えると、彼は、土、日曜なら、いつでもつき合うから、行く時は、誘ってくれといわれていたのであった。

私の同好の友に、よくドクター氏が登場するが、ここで、混乱を避けるため、一寸冗言さしていただくと、かつて、野村信子と一緒に映画『性倒錯の世界』を見て、酔歩散漫、ノンコに路上で手錠のオモチャを嵌めて歩かせたり、果てはホテルに転がり込んで、乱れに乱れたドクター氏は、婦人専科で、台湾へ一緒に行ったセンセイである。

Mアニマルの極致を求めて、かつて谷山久美子に、吊り責めのオンパレードを敢行したドクター氏は、小児科のセンセイで、このドクター氏、吊り縛り以外には、さっぱり関心の薄い、吊り責めオンリーの、吊りが特に好きなセンセイである。

同じドクター氏でも、小児科のセンセイの方は、今の処、野村信子を全然、御存知がないのである。

奇譚三十九夜物語当時の名称を、その俚、継いだが、わざと説明するのも私事と、精しくも書かなかったが、しばしばハントにも登場するドクター氏は、このお二人のどちらか

のセンセイであるが、そこまでは精しくも説明しなかったまでである。乞恕――。

漫然と時間を潰すのは、簡単そうにみえて案外むづかしい。最初から判っきりと計画を立てていたら、渡部夫妻と夕食でも摂って、プレイの余韻をたのしむのであった。

こんな時は、書店に立ち寄って、拾い読みするのが、一番ふさわしい時間消費法であった。書店で、新刊本を繰り広げるうち、私は思わず独り苦笑した。

以前にも、女子学生にアタックして、それがダメで、ノンコを急に呼び出した時、恰度今とそっくりに、本屋で時間を潰したことを思い出したからである。

思いつきのプレイが、思いもかけぬ徹夜の激しさとなり、名器「かずのこ天井」の旨さに酔い痴れようとは、まさか思いもよらなかったことであつた。

時間を見計らって書店を出ると、木屋町へ向かう。

歓楽地帯は今を盛りの殷賑を極めていた。目指す和風料亭「C」の、三階建てをみつ

け、そのネオンに向かって歩き出す。玄関に立って「加代」と指命すると、待つ間もなく、ノンコがイソイソと現われた。数

カ月見ないうちに、すっかり洗練されて、着物の着こなしも、水商売めいて板につき、どことなく垢抜けしてみえた。キャバレーやクラブのように、本番と指命制になっていて、数ある小部屋も、大体三、四人を目標に部屋をしつらえてあるから、一人客には一寸ゼイタクなようであつた。

三階の部屋に案内して、襖を閉めると、ヒタと彼女は縋りつき、

「本当によく来て下さったわねえ」

と、嬉しさは真実の笑みを泛かべ、はじらいもなく、自分の方から、激しく唇を求めてきた。

私の両腕は、ノンコの体を力強く抱きしめていた。脂粉の甘い香りが、鼻腔を擦る。

「時間を過ごすの大変だったでしょう。お車で、それとも電車でこられましたの？」

やっと唇を離すと、なまめかしい眼付きで私の首筋を抱えた俚、ノンコは問う。

「車できて、南座横の、モータープールに預けてあるよ」

「お一人で？」

「ああ、夕方まで、渡部夫婦と出会って、プレイしていたよ」

「相変わらずお元気なのねえ。いいの撮れま

したの？」

「まあネ。夫婦プレイの生々しさを見せつけられて、Sの血が騒いでね」

「それで、私を思い出したっていうわけ。ホホ、いつも私は当て馬ね。そうそう、この間アコ（石田敦子、前号参照）とプレイしたのでしょう」

と、なじるような口調で、私をみつめる。

「ああ、ひょっこり電話がかかって、ノンコから、私のことを聞いたといってたよ。あんたが教えたんだろ？」

「わざわざ訪ねてきて、教えてくれていうもの、仕方なかったの。私のカメラ・ハント読んだのですって……いやーね、あのコ」

仲の良い友達でも、私という、一人の男を巡っての、お互いのプレイ振りを知ったとなると、心の葛藤もあって、何となくツノ突き合わせるものらしい。

「レズの相手にされたっていったよ。ノンコに、レズのケがあるとは知らなかった」

「ウソよ。ウソ、ウソ……」

「でも、アコは判っきりいってたよ」

「まあ、アノコったら、それはネ……」

といいかけて、フト本来の使命を思い出したのか、

「とも角いろいろお話もあるけど、御注文を通してからにしましょ。うかつに頼むと、高くなりますわ。私に任せてくれはる？」

「ウン、何でもいい。スゴく腹が減った。それとビールも二、三本」

「じゃあすぐネ。それはそうと、今夜いいんですよ」

肝心のことを聞き忘れたかのように、ノンコは、艶な、ながしめで私をみる。

「まあ、そのつもりだけど早く料理を持ってこいよ。喋っていたら、又長くなるだろう」

あわてて、ノンコは出てゆく。

私という旧知に会えたことが、燃えに燃えたプレイの夜の思い出に繋がって、既に、そこはかとなく、心を疼かせているようであった。

× × ×

私はビール、ノンコは日本酒を、かなり飲み過ぎていた。机上には、ノンコの選んだ会席料理が並んでいる。一品料理を注文するより、大分トクだそうである。上品な会席料理に飽き足りず、私は別に海老のフライなど数種を、追加注文していた。

彼女の朋輩らしき女性が一人、又、時をおいて一人、顔を覗かせ、愛想をふりまいて、

十数分ばかり私の横に坐って、座をとりもつと、さりげなく消えていった。

ノンコのか、オを立って、この二人にも指名をつけてやらねばならない。それはこの社会の、相互扶助の仁義でもあるらしかった。

彼女は、この世界では、ズブの素人から入った新入りだけに、馴染客とてなく、顧客を引き寄せる手段もなく、従って、お目当ての指名は少ないらしく、仲良しになった先輩の女性達から、折り折りには、こうした方法でおコボレを頂戴しているようであった。

私に無駄な金を使わせて悪いけど、こんな機会に、自分の顔を立てさせて欲しいと、ノンコは切ない表情で懇願した。彼女達に、かなり指名の借りがあつた。

まったく無意味な散財だと思っても、ノンコの手前、男になってやるより仕方がない。勤めて日も浅い彼女にとって、この世界も、さして住みよいところではないらしい。

あっさりと心得てやると、満面に喜色を現わし、

「嬉しいわセンサー。わたし今夜はセンサーの奴隷になる……どんなことでも言うこときくわ」

と、いそいそと立ち上がり、先輩の姐さん

に告げにいったのであった。

珍しくも、ノンコ指名という客の顔をみがてら、一つには、彼女の日頃のお返しに応えて、二人の女性が現われたとしても、この社会では何の不思議でもない現象であった。私のお目当てがノンコと知っての上だから、早々に切り上げてゆくのも又、お互いの常識であったのであろう。

あとで現われた、面長の三十前後の女性は抜群の美人で、ノンコの影が途端に薄くなった。座のとりもちも際立って鮮かで、あとでノンコにきけば、この店のナンバー(2)だとかで、さこそとうなずけ、そんな先輩に可愛がって貰える自分はトクだと、ノンコは力を入れて、くだんの女性を褒めたたえるのであった。

「姐さん達に随分と借りがあつた。だから、あのセンセイ(ドクター氏を指す)にも、遊びに来て下さるよう、お伝えしてね」

「ウン、きつと話しておくよ」

「誰方か、センセイのお知り合いの方にも言つてね——」

「ウン、そいつは一寸……。ハントの野村信子が“加代”と知ったら仲間達は放つておかない。金に不自由しない連中が多いから、

口説くだろう。ノンコの“カズノコ天井”余り荒されたくないからね」

まことに痛し、痒しの心境で、折角ハントしてみつけた女性を、そうムザムザと、同好者仲間開放する気にもなれなかった。せめて、ドクター氏ぐらいで我慢してもらって、やはり、何処か心の片隅で、ノンコを独占しておきたい気持が潜んでいた。

水商売に辿りついた彼女のことである。指名を求めて、あれこれとコネを深し、いずれは、誰れ彼の手で“カズノコ天井”を荒されるところとしても、私の知らない間柄なら兎も角、仲間を紹介するには、未だ時期尚早に思えるのであった。所詮は私のエゴイズムであらうか——。

「本当いって、余りラクじゃないの。私みたいなシロウトには、矢張り無理なのね。ここへ変わるなり、すぐに、沢山のお馴染みさんを連れてくる女もあるけれど、私にそんな芸当、出来ないでしょ。今、伏見の藤の森の方に、アパートを借りて、先に来た初子さんという人と二人で暮しているのだけど、いつもお世話になりっ放しなの」

「この社会も馴れるまでは大変だよ。しかし馴れたときは、ヒモが出来ていて、それこそ

すっかり吸い上げられてしまふか、スレきつてしまふんだな。なるべくなら、他に仕事をみつけた方がいいよ。ところで、ダンナとはすっかり別れたの？」

「私がいては足手纏いになって、彼、可哀想だから、何一つ求めずに、私から身を退いたの。ドルシヨックから、少しは立ち直ったって噂だけど、もう赤の他人よ。一度ヒビの入った仲は、もう再び元に戻らないわ」

酔うと、つい愚痴になるのか、ノンコの話は、どうも、しめっぽくなる。

「勤めて一カ月近くになるから、もうかなりお馴染みが出来たのじゃないかい」

「私の指名なんて、少ないものだよ。ああして、お姐さんが時々呼んでくれるけど、お姐さんのおなじみさんですもの、私どうにもならないわ。だからセンセイ時々は来てね」

「お暇ならきてよネ——か」

「あたし淋しいのう……フフ。まるで唄の通りですわ」

「どうも、こうした場所は苦手なんだよ」

正直いって、私はこんなシステムの料亭を余り好まない。安直に飲めるのならいいが、見得と体裁や、金ばかり使って、その癖、もう一つ面白くない。馴染みになってお目当て

をつけても、ゆきつくところはセックスに過ぎない。そんな遠廻りをしなくても、もっと純情なひと、うぶな女性と、次々SMプレイプラス、セックスを楽しんでいる私にとって何を好んで、こうした場所に足を運ぶ必要があるのか——。

ましてや、ここは京という土地柄、イキを



ひけらかし、粹人ぶるやからには到底ついてゆけそうにもない。

若しも今後、ノンコとプレイしたければ、遊んでいる午前中にでも、呼び出す方が賢明なようであった。

野村信子はこの店に勤め出して、幾分は垢抜けしたといっても、すっかり水商売になじ

め切れない素人ッぽさや、どこことなく野暮ったいところが残っていた。

彼女が「カズノコ天井」の、素晴らしき名器をかきならし、感極まれば須臾にして、夢遊の悦楽の境地を逍遙する、超敏感な女体の持主であることは、彼女と交じわったものでなければ知り得ない秘中の秘であった。

彼女が、このたぐい稀なる名器を奏でて喧伝すれば、世の男共、忽ちにして随喜の涙を流し、指名倍増、売れっ子になること間違いないのであるが、無闇矢鱈に、肉体で稼がないところに、ノンコの墮落に反撥するプライドがあった。

「センサーは、余りこんなところで遊ばないのね」

「ああ、到って無粋だ。ドクター氏にしろ、金遣いはパツと気前よく綺麗でも、こんな場所で遊ぶことを好まないよ」

「どうしてかしら。面白くない？」

「なじみがないからかも知れないが、私が相手にするハント女性は、殆どといってよい程家庭の女性で、水商売の人は殆ど、いない。勿論、こんな世界の女性にも、SM気のある人はおるだろうが、何となく、SMのプレイそのものより、金銭欲、物欲の方が先に立つ

て、金次第なら、どうにでもなる女性のよう
に思われるんだネ。ショーバイ可愛さの手練
手管もあるだろうし、大半は、ヒモ的存在の
オトコがついているようにも思えるし、それ
やこれやで、つい敬遠してしまうんだね。若
しノンコも、最初から、この社会にいたら、
或は誘わなかったかも知れないよ」

「そうね。確かにお金目当ての人もいるし、
オトコのいる人も多いわ。でも身の上話をき
けば、意外と気の毒な人だって多いのよ。金
で左右されない意地みたいなものだってある
わ。欲抜きで惚れこむ人もいるわ。一概には
いえないわよ」

「そう。一を以て十を律することは、出来な
い。現にこうして、ノンコみたいな女性も、
いることだしね」

「私なんか、みかけによらず大胆で平気なん
だけど、カメラ・ハントなんか、水商売の
人の、あられもない写真をのせたりすると、
下手をしたら、或は問題になるかも知れない
わ」

「怖いお哥兄さんに、凄まじたりしてね」

「でも、ここのお店には、そんな人は少ない
わ。全然いないってわけでもないけど……」

「どれくらいの女性が働いてるの？」

「今は七、八十人ぐらいかしら。余り大きく
もない、お座敷キャバレーってとこね」

「SM気のあるお客には出くわさないかい」

「二度ばかりあったわ。私、知らん振りをし
て聞いてたけど、そのお客、東京で買ってき
たとかいって、変な革具や手錠や凸起のつい
た革の丁字帯を、これみよがしに見せるの。
ホラ、いつかの時、私が嵌めて歩いたでしょ
う。あれと同じようなもの」

そんな悪趣味は、私にもチラリあるので、
思わず苦笑して、

「それでその男、誰かをモノにしたの？」

「その人、S子さんて方を、お目当てだった
の。S子さんの手首に、深い縄の痕が残って
いたのに眼をつけて、その人とプレイ出来る
と思ったのでしょう。噂だけど、S子さんの
彼は、相当のサジストだって話だわ。だけど
センサー、その気になったらダメよ。それこ
そヒモつきだから……」

「別段、珍しくもないよ。今の世の中にSM
的夫婦、その逆のMS的夫婦は多いからね。
ところで、先日アコと出会ったんだってね。
何か私のこと、知ってた？」

「生まれて始めて、縛られて、異性とプレイ
したなんて知ってたわ。あの子、私と違って

スナリして、綺麗な躰してるでしょう。愉
しかった？」

チラリと、ジェラシーめいた眼の光だ。

「マアアアさ。五月号に、彼女とのプレイの
顛末を書いたのせたが、今頃、市中に出廻っ
ている頃さ。買って読んでみれば分かるよ。
内心Mの願望を持っていつら、私に求めさせ
ようとして一寸ズルイ娘だった。自分から口
にするのが羞かしいのだろうね。一寸はフィ
クションも混じえてあるが、ノンコなら、ハ
ンと、すぐ分かることだ」

「アコは、そんな処がある子なの。アコから
「カズノコ天井」って何なの？ ときかれて
真赤になってしまったわ。あの子、ちゃんと
読んでるのよ、私とのこと。何もかも書いて
しまつて、うっかりセンサーには打明け話も
出来やしないわ。羞かしいったら、ありゃし
ない」

ノンコは、わざとプンと膨れてみせる。実
際には、それ程、怒っていないのは、今迄の
態度で分かる。話が偶々、ハントとアコのこ
とに及んだから、少しは怒ってみせたに過ぎ
ない、女の虚勢であった。

「世にも稀なる名器の持主として、随分、褒
めたつもりだけど、正直過ぎたかな」

「知らないッ」

「思い出の、よすがの一頁だよ。先日も愛知の喜多知子とのプレイの顛末を正直に書きすぎて、彼女から怒られたり、褒められたり、好きになられたりで、悲喜交々だよ」

「露出趣味ね。二人だけの愛のいとなみは、二人だけの胸の中に、そっと秘めておくものよ。自慢たらしく公表するものではないわ」

ピシッといわれて、私は思わず頭を掻き、幾分の反省の気分に捉われていった。フツと気まずい沈黙が流れ、ノンコは自分の今、言った言葉に慌てて、

「気に触ったら御免ね。そんなつもりじゃなかったんだけど……でもセンサー正直。あれを読んで私、怒ることはないわ。唯、もし、人に知られたら羞かしいと思っただけなの。でも世間は広いわ。誰一人、野村信子は私だと言った人はいないもの」

酔った体を、ぐったり私に凭せかけて、挑発するような、媚を含んだ眼眸が私に迫る。

「今夜、縛りたくなった」

「いいわよ、縛って……うんと虐めてエ。私さっき言ったでしょ。今夜はセンサーの奴隷になるって」

「あれから、その後、誰かとプレイした？」

「そんな人、いないわ」

「本当？」

「本当よ——。センサーみたいな特殊な人、そう世間にはザラにはいないわ」

「カズノコ天井が、”サミシイ”で、夜泣きしてるんじゃないかな。セックスは適当に、はかしているんだろう」

「フフ、それはね。えーい白状しちゃおうか——。この間、初子姐さんのお客と三人で、城崎の温泉までドライブして、その夜、彼を真中に挟んで、川の字に寝たけど、姐さんと彼とのお楽しみを、傍で目撃する羽目になってやり切れなくなったら、夜明けにお株が回ってきたわ。姐さんは、私の甘い声に気付いたらしいけど、狸寝入りして、知らぬ振りをしてくれていたわ。その人ったら、かなりのマゾ性の持主なの。虐められないと興奮しないですって。私と初子姐さんと、二人掛かりでメッタメタに虐めてやったら、すぐくハッスルして、結構愉しかったわ。今の処、その人相手に、時々気分を晴らしにゆくの」

「一対一で」

「時にはね」

「カズノコ天井に、嬉し涙を流してるだろ」

「彼は“蟻地獄”だなんていったわ」

「一旦、吸い込まれると、もがいても、もがいても抜けられない——成程ね」

彼も仲々、洒落たことをぬかす奴である。

「近頃は、体中に血が滲むほど叩いてくれているのよ。私にはS性も結構あるのね」

「やはり縛ってプレイするの？」

「ホテルの有り合わせの紐などで充分よ。叩くのは、彼のバンドを使うの。時には姐さんと一緒にやってやるけど、その時は、私は応援——。女に、もみ苦茶にされて満足しているらしいの。新宮の東さん以外にも、こんな性質の人は多いのね。結局、最後はセックスに落着くけど、それが彼等の前戯に当たるわけね」

「じゃあ、結構やってるじゃないか。今の処ノンコのSM性に気づいたのは、その彼ぐらいいなんだね」

「そうね。知ったかぶりの、サド・マゾ論を一席ぶつ人もあるけど、みんなセンサーのうけ売りみたいで、面白くもないから黙っているの。猥らなことは、こんな酒の席だから、お客は殆ど口にするけど、酔っ払って騒ぐ人達は、案外単純なんだわ。お蔭でエロな唄を沢山おぼえましたわよ」

「聞かせて欲しいな、そのポルノ・ソングを」

「——」
「ポルノときましたわネ。じゃあ聞かせたげましょうか」

酔いがノンコを開放的にしていた。裾も露わに乱して、彼女は私の胸に体を投げて、酔余の小声で、口吟み始める。

へ黒く繁れるマタグラの……

と、青葉繁れる大楠公の、換え歌の一節である。女が独り唄うと、なんとも奇妙な、倒錯した、なまめかしさが漂う。カセットのテープコーダーでもあれば、録音したいところである。

猥らな歌を、二番まで歌い終わると、ノンコは続けて、ソーラン節のフシにのせて、四ツ五ツ、きわどい歌詞を程よい声でうたい、独りで手を叩いて、調子をつけていた。私は忘れぬよう、名刺のウラに歌詞を書きこむ。男たるもの、矢張り面白く感じるのは、当然の現象であった。

（入れてもらえば気持がいいが、

気兼ねしますよ、もらい風呂）

（三十女とお寺のカネは、

つけばつく程うなり出す）

（なれた手付きであの娘が握り、

サックかぶせる指の傷）

（毛深いところをあの娘が出して、

ぐっと挟んだ体温計）

唄い終わって、なまめいた眼が私を見上げ「ねえセンサー——思い切りいじめてネ。何もかも忘れるほどに……ねえ、約束して」と、にじりよる。

「ああ、やったるでエ。でもナ、疏水の駐車場は、余り遅くなると、締めてしまうのだから」

「確か、十一時頃までは、大丈夫と思いますけど……」

「プレイ道具やらカメラを、全部、車においてきてあるんだ。酔いの醒めたところで、車を出して、どこかで待っているよ」

「ええ、ええ、そうしてエ。もうおビール契めません。ああ、何だかすごく、楽しい夜になりそうだわ」

「天狗の奴が、ノンコを虐めたいってさ」

「えッ、何といったの？ 天狗がどうしたって……？」

「今日は昼頃から、例の渡部夫妻とプレイしてきたのだよ。そのことは、先程ノンコに言っただろう」

「ええ、聞いたわ。元気なのねえ、昼も夜もってわけね。どうなってるの」

「つまりさ、彼に天狗の面をプレゼントされちゃって、それをノンコに使ってみたくてねウズウズしてるんだ」

「又、センサーなにかヘンなことを考えているんでしょ」

「失神させて夢幻の境地を、さ迷わせてやるよ」

「イヤーン、いわないで……恥かしい」

なまめいてくねる女の、吐き出す酒の匂いを、じかに鼻腔で嗅ぎとって、私達は、抱き合った俛、その場に転がった。

男の好き心が蠢動して、いつしか、思わず知らず、私の片手が動き出していた。

既に悦楽の鼻息は高く、私の唇にヒタと吸いついた紅唇の奥は、かすれて喘いでいる。

「ああ、センサー、ここではダメ」

きれぎれに、最後の理性が呟き、そのくせ大きく息を引いてノドをそらす。この俛、もう一押しすれば、理性の張りつめた糸はプチンと切れて、まぎれもなくノンコは、その場で、夢幻の陶醉へ陥ってゆくに、違いなかった。

鍵のかからぬこの小部屋に、いつ誰が闖入してくるか分からぬ不安が私を冷静にさせ、早くも、うっとり、無我の恍惚の表情を泛

かべつつあるノンコを、そっと抱き起こしたのであった。

× × ×

河原町の一角で熱いコーヒーを啜り、ぶらぶらと散策を続けるうちに、春めいた夜風に煽られて、私はいつしかシャンと正体を取り戻していった。酒気運転のためらいが、こうして、当てのない時間稼ぎを続けさせていたのである。

ビール二本の酔いは、さめると早い。もう大丈夫と、ガムを噛んで、口腔の酒の匂いを消しながら、モータープールの方へと足を向ける。

料亭「C」の門口で、野村信子と暫しの別れを惜しんでから、小一時間の刻が流れていた。余り遅くなると、駐車場を閉鎖される恐れがある。それ迄に車を出して、彼女が指定した、南禅寺山門近くのホテル「B」まで走らねばならない。彼女との待ち合わせの時間は、十一時半、このホテルの駐車場で落ち合うことになっている。店を終わって、ノンコはここまで、タクシーを飛ばしてくる予定であった。

一、二度プレイに利用して、私も勝手を知っているホテルの、広い駐車場に車を入れる

と、私は薄暗いフロントに立つ。日曜日でもあるので、念のため、部屋の有無を確かめる。もう深夜に近い時間だから、勿論、泊まりで交渉したら、いい具合に、新館の方に空部屋があった。連れの来るまで、駐車場で待っているからと、予約して車に戻り、リクライニングシートを倒して目を閉じる。

昼間のプレイの疲れと、酒後の眠気に襲われ、ルーム灯を照らした儘で、私は不覚にも、うつらうつらと暫しの、まどろみに入っていた。

コンコンと、ドアの硝子を叩く音に、ハッと目を開くと暗闇の中に、ノンコの白い顔が仄かに浮かんでいる。慌てて軀を起こし、車外に出ると水温む春の夜風が、心地よく頬をなぶった。何処からともなく、沈丁花のむせかえるような甘い香りが、風に乗って



強く匂ってくる。

「のんきなセンサー。よく眠っていたわ。大分、お待ちになったんでしょ」

「さあ、どのくらいか分からない」

眠っていたのが須臾の間か、それとも三十分か一時間か。

眠りを中断された濁った頭では、見当もつかなかった。

腕時計を覗き込むと既に午前零時に近い。

プレイ用具の入った、愛用の黒革のバッグ二個を取り出し、ノンコと肩を並べて、ホテルの暗い門をくぐる。予約してあったので、ねむたげな中年の従業員がノロノロと現われて、部屋へ案内してくれる。

バスの湯を出すと、さっさと立ち去っていった。

「センサー嬉しい。やっと二人きりになれたわね。今夜は前みたい、写真とることの方にばかり力を入れないでね」

背伸びして唇を奪うと、ノンコは甘ったれた淫らな口調で囁きかけた。

緊縛フォトは二の次にして、SMのプレイに、心ゆくばかり耽溺したいというのである。いつも感じる矛盾を、ノンコは、はしなくも剔抉していた。

所詮、緊縛フォトは、カメラ・ハントを証拠だてる一つ的手段に過ぎず、更にいうなれば、その時のメモリー的なもので、あとあとの追憶のよすがとして撮っておきたくても、SMプレイが白熱して没入した時、しばしばカメラに心を走らせるのは、無粋な、プレイの中断以外のなにものでもないことは、いつの折にも沁々と感じる、プレイとフォトとの断層であった。

近頃の私は、ともすれば、SMのプレイの方へと走りたがっている。それでいて、長年の習性のカメラからも、気前よくグッドバイは出来なかった。そのくせ、SMプレイへ重点をおくせいか、緊縛フォトは、お義理のよう、に、似たポーズの羅列で、強烈な態度や、プレイの合間の、ハッと息を嚙むような、鮮烈な肢態は、案外見逃がしている事が多い。

SMプレイに徹するか、緊縛フォトを撮ることに徹するか。そのどちらかの一方に心をきめなければ、二兎を追う者、一兎をも得ずといった、どっちつかずの中途半端になり終えて、それが、近頃の私のハントの在り方にも繋がっているように思えるのであった。

そんな自分を充分に知悉していながら、尚且、そんな態度を崩せないのは、月に一度の

発表のカメラ・ハントに、私自身、思いがけない程、深い愛着を抱いているせいであるかも知れない。

世に隠れて、秘かにSMプレイを愉しむ人は数多いことであろう。緊縛フォトを撮る愉しみに耽る人も又、多い。

その両面を貪婪に狙って、私は相も変わらず、意志に反してカメラを駆使している。もはやこれは、宿命にも似た、やみがたい習性のようなものであろうか――。

ノンコは、その私の行為に対して、あらかじめ一本、釘をさしてきた。どっちつかずのプレイでは、きらびやかな悦楽の園に、没入出来ないからであろう。

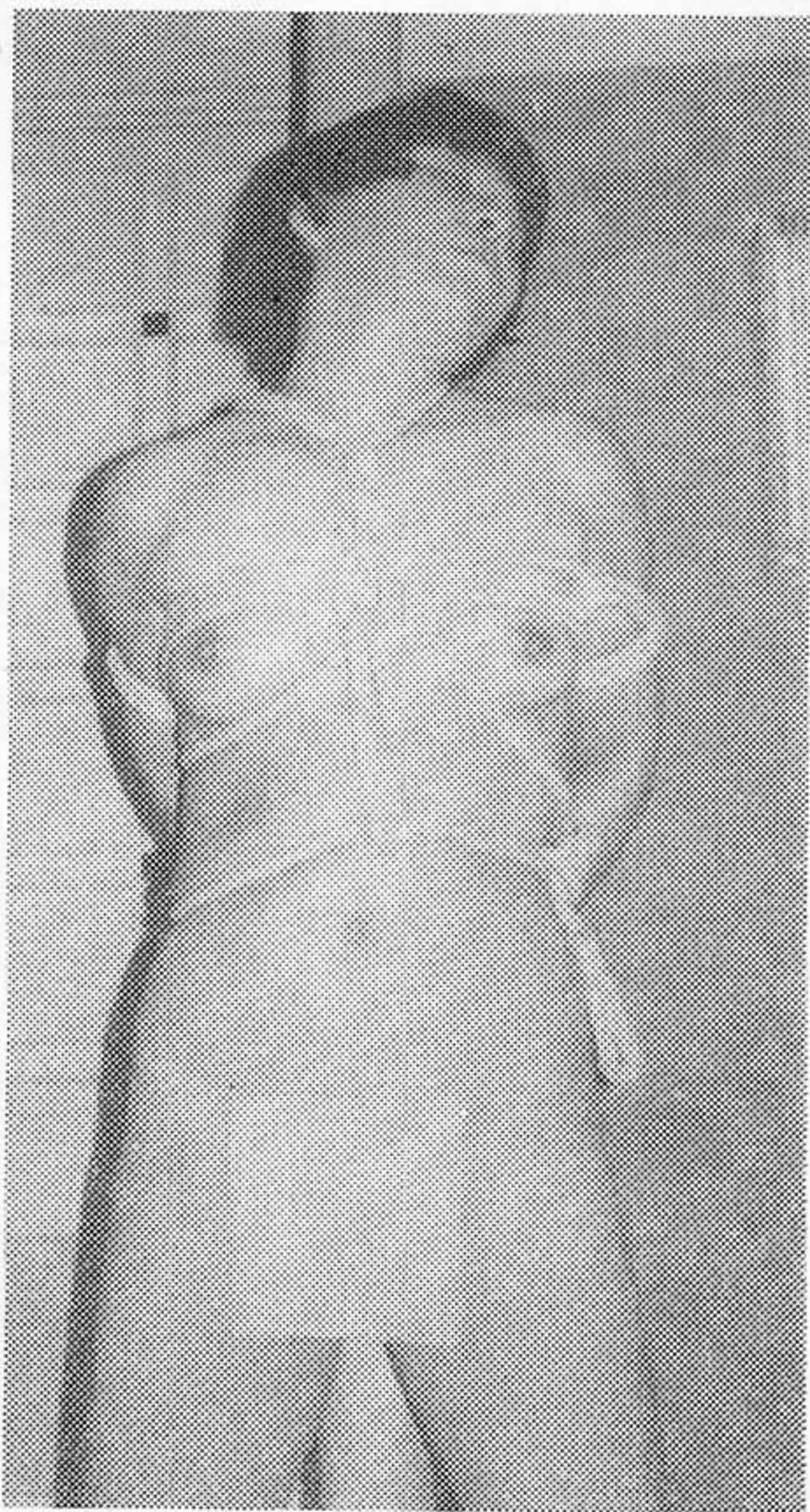
「ああ、なるべく撮らないようにするよ」撮らないといい切れず、言葉を濁して、私は抱き合った俤、その場に崩打れた。

情炎の堰を切ったように、犇と縋りつき、ノンコは早くも息を弾ませる。

「一緒に風呂へ入ろうか――」

唇すれすれに囁くと、大きく頷き、いとおしげに私の服を脱がせにかかる。

前回にも述べたように、ノンコは男性に対し、誠に献身的な一面がある。若いにかかわらず、どこかに女庭訓の、古い従順と奉仕の



思想が生きているような、古めかしさが脈づいていた。

最後の下帯一本まで外してくれと、「ハイ」と私にタオルをわたし、眩しげに私の裸身から眼をそらし、

「センサー又、おなか出てきたわよ。少し痩せなくちゃ寿命、短いつて話よ」

などいい乍ら、私の眼前で着物の帯紐を、とき始める。

快い湯のぬくもりが、昼間のプレイの疲れと、しこりを取り除いていった。

眼を閉じると、小柄の細身に限なく針の洗礼を受け、全身被虐の塊になってのたうつ、昼間の渡部好美の悦虐の表情と、夢幻の中で愉悦極まって、あらぬうわ言を口走った、あの夜の野村信子の顔がダブって、私の脳裡をめぐりくしく駆け巡った。

幻影のカーテンを破って、現実のノンコの裸身が、私の視野に突きささる。最早、羞恥の垣根を除いた彼女。半年近い空間が、忽ちに、けし飛んで、まるで昨日も出会った仲のように、私達は湯の中で戯れた。

ノンコも訊ねないし、私も半年間の空白の変化を、ききもしない。半歳の距離の距りの間に、いずれは身辺に浪風を立たせたであろうに、そうしたプレイベートについては、お互いに触れなかった。

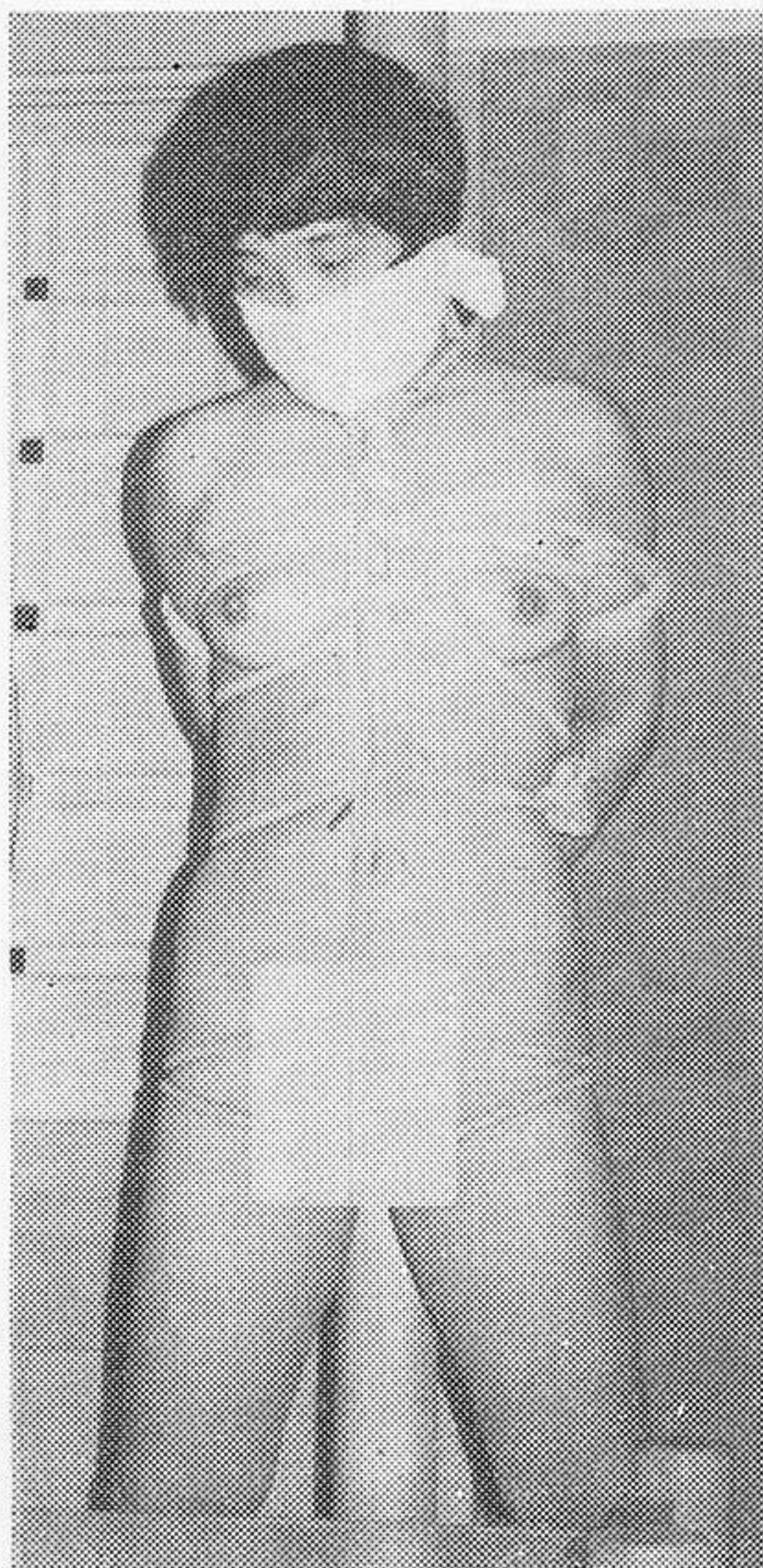
ここにある二人は、SMのプレイで結ばれた、嗜虐を好む中年の男と、M願望を秘めた欲求不満の一人の女の、ごく単純な仲の二人に還元しているのみであった。

刹那的に、女は悦楽の夢現の境地を幾度となく彷徨し、私は私で、嗜虐の甘い旨酒に、心おきなく酔い痴れたら、それで意とするに足りたのである。

湯槽から上がると、ノンコは石鹸の泡を立てて洗ってくれる。全身の泡を湯で洗い流そうとするのを押し止め、私の戯れの心が、悪戯っぽい想念を描いてノンコの女体一杯に泡を立て始めた。

湯から上がってもノンコはすっかりのぼせきった面持ちでボンヤリしていた。上気したつややかな頬を赤くほてらせ、アイシャドーや、眼隈の洗い流された眼許は、善良に小さく瞬いて、水商売めいた容貌を一変させて、あどけないまでの素顔に還元していた。

「若し写真をとるのなら、化粧しなくちゃ」



水商売の女らしさのかけらも留めぬ、ほてった頬を撫でて、呟くようにいうのを押しとどめ、

「なあに、その儘でいいよ」

「でも私、眼が細いでしょ。それに近頃、又ニキビが出ちゃって」

と羞かしがるのを、微笑ましく眺めて、

「尚更いいじゃないか。まるで人が変わったみたいだよ。すごく新鮮味があって……」

「本当にいいの？ あーあ、ブスの素顔みられちゃった。センサーだからいいようなものだけど……」

と、ケンソソする。粧いのない素顔に、女は若干のコンプレックスを、感じるものらしい。

「何がブスなもんか。少なくとも、お座敷料亭で働いている時より、五ツぐらいは若やいでみえるよ」

万更お世辞でもなくいうと、

「でも、色が黒いのよ。ホラね」

ぐるりと一回りしてみせる。

「お化粧しないと、眉毛だって細くて短いでしょ。でも、いいわ。センサーがそういうのだから、よそおーっと」

ドサリと大仰に尻餅をついて机に寄りかかり、挑発的な眼色が、しっとりとうるんで、私を、じっとみつめる。

ノンコはフツと視線を外し、

「あーあ、疲れたわ、何だか」

と、半ば私に聞かせるようにいって、スツと立ち上がると、次の間のWのマットレスに仰向けに長々と寝そべった。判っきりと、私を待つ姿である。

「ウーン、じれったい。センサー早くう……早く縛ってよ。何しているの？」

知らん顔をしていると、イライラしたような声がとんできた。

煙草を啜えた後、ニヤニヤして、私は近づく。寝そべった後、ノンコは両手を高く差し出してくる。

くどくどしいSMプレイの説明も、いらない。ツーといえばカーと応える私達の仲である。縄を握れば、黙って両手を背後に回すであろうし、どのような羞恥の態位や緊裸も、懼らく拒みはしないことであろう。

そのあとにおとずれる、肉も骨もとろけてしまいそうな、夢ともうつともなき、甘美な悦楽の園へいざなうプレイのかずかずを、彼女の肉体が、判っきり知悉していたからに

外ならない。

二本の縄を使って、手始めに、前手縛りにして股縄をかけ、フカフカしたベッドに寝そべらせてやる。快げに眼を瞑って、ノンコは裸身を締めつける縄の感触を、久し振りに愉しんでいるかのようにであった。

ベッドに転がしておいて、私は手早くカメラをとり出し、ストロボを装填して、電源をつなぐ。三脚の脚を伸長させ、長尺リリースをとりつけるその行為は、私の心の中に巣喰っている、別のカメラ狂のハイド野郎が、ニタニタしながら、命令しているかのようにであった。

プレイにつきもののよう、カメラを駆使することを、ノンコは知っていた。

今更、止めて止まらぬ私であることを知ってか、半ば諦め顔で、薄眼を開いて、黙って私の準備を眼で追っていた。

長々と寝そべった、白いシーツの上のノンコに、第一発のストロボを発光させ、三脚にカメラを据える。

ぞろぞろとプレイ用具を、とり出す。いわずとした、縄束を筆頭に、バイブ、女悦を昂める器具のかずかず。

更に加えて、今日の昼、渡部光雄が呉れた

天狗の精巧な面が真紅の顔で私をにらみつけている。

この鼻、取り外し自由に出来ている。

ノンコを抱きよせると、待ち兼ねていたように、鼻を鳴らせて喘ぎ、眼をつぶって、私の唇を待ちうけていた。

「あーん、センサー早くう……」

何を早くというのだろう。被虐欲の炎をむき出しにした蠱惑の媚に、私の心も妖しく疼き始めるのであった。

辛うじて私はハント精神をとり戻し、シャ

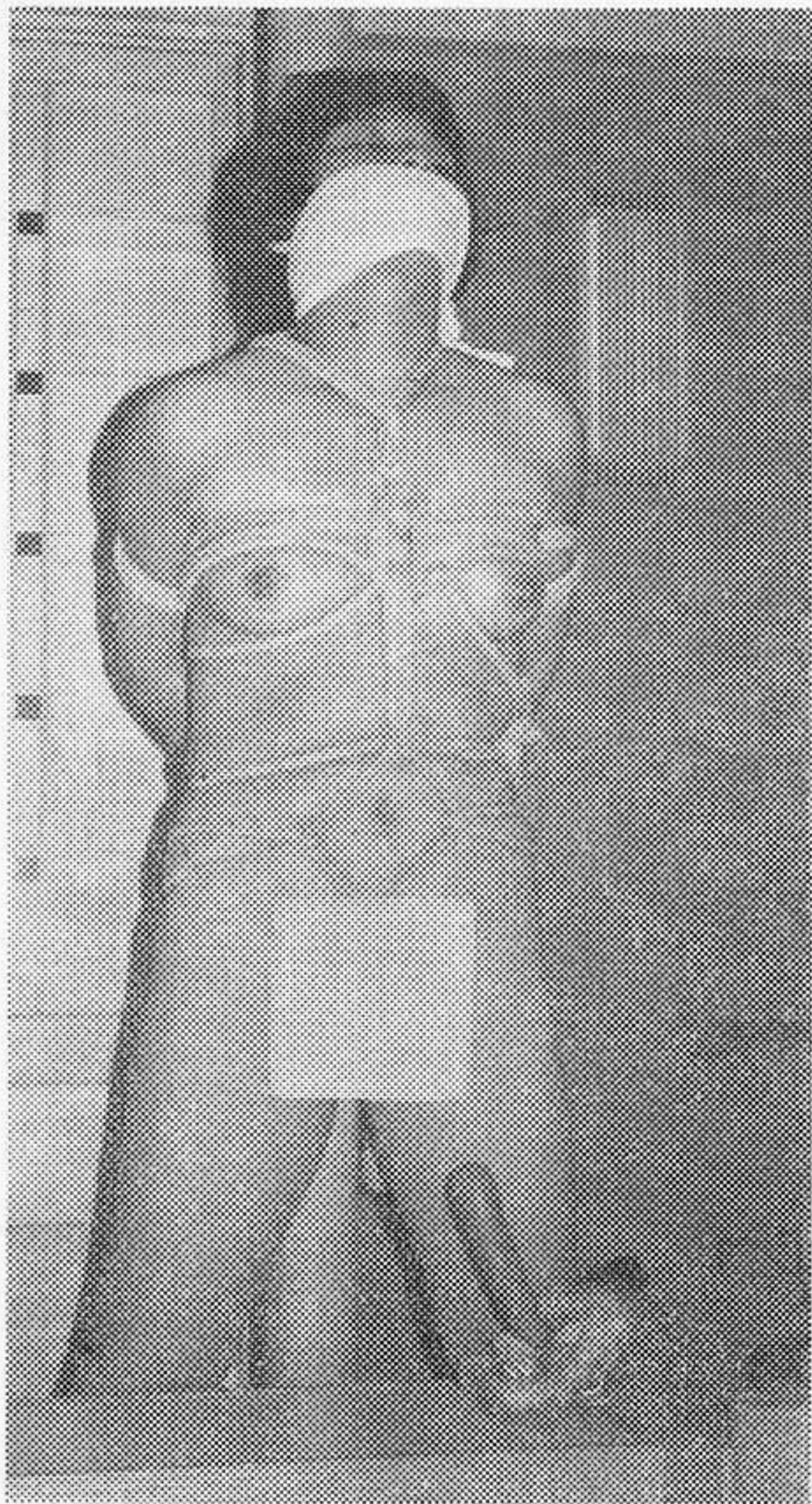
ッターを切るのであった。

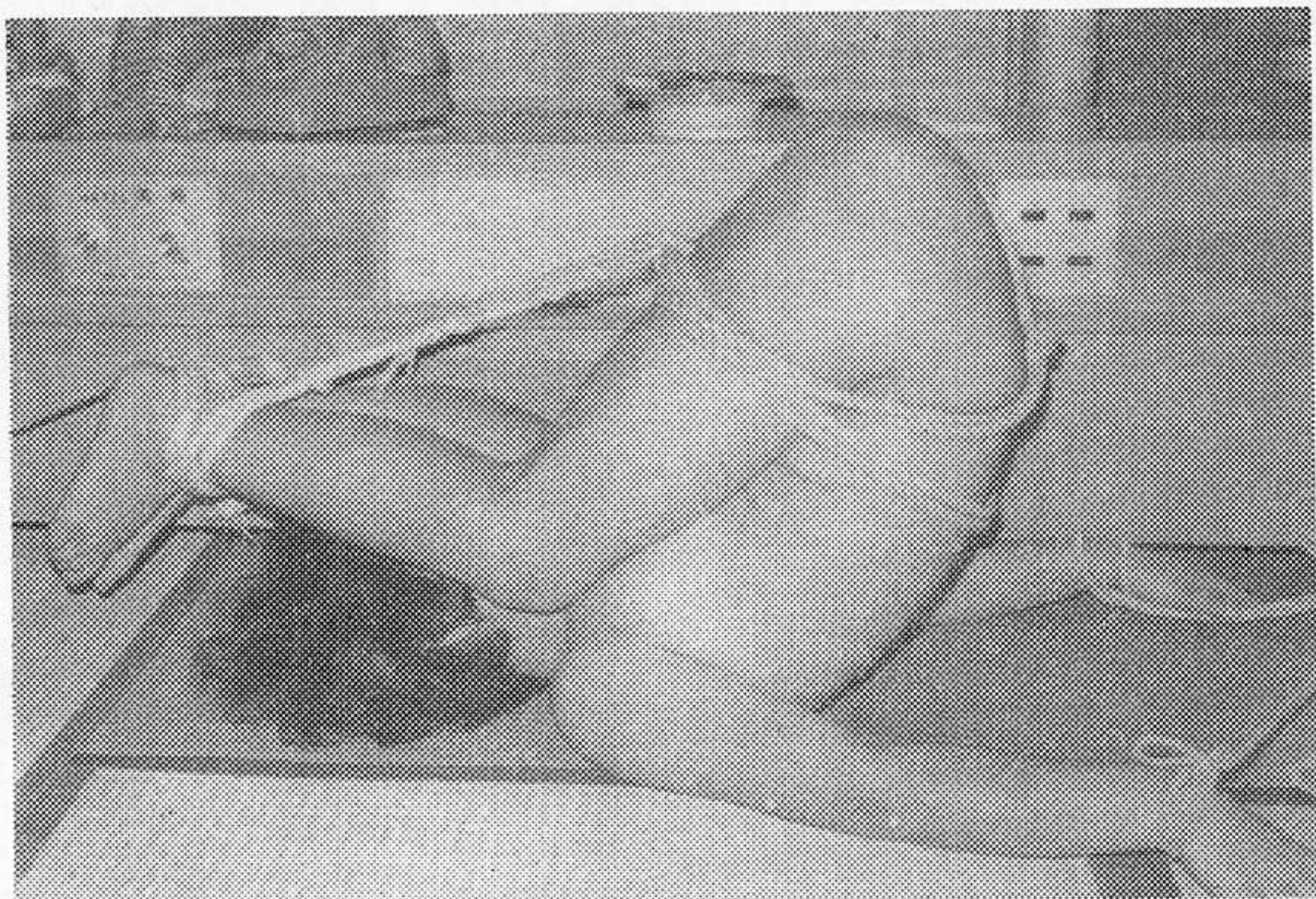
それからひととき、正に、ノンコの杞憂どおり、フォトとプレイの中途半端な行動を私は繰り返すことになってしまった。

「センサー、いや、もう写真とりにゆかないで……約束したじゃないの」

幾度か、ノンコは口惜しげに叫んだ。緊縛フォトならフォトらしく。SMのプレイならプレイに没入して欲しいという、ノンコの欲求は、当然のことであった。

前回の経験で、一旦ノンコが忘我の失神状





態に入ると、数十分は恢復しないことを知っている。カメラを措いて、女悦の器具を使えば、忽ちにして彼女は夢幻の快楽の園に没入することは眼に見えていた。SMのプレイだけならそれもよし。しかし、私はもう少し、この機会に、ノンコのアからさまな緊縛のフォトを撮っておきたかった。

両足を組ませて縛り、前手縛りの縄に繋いで、数枚とり終わると、黙って縄を解いていった。

明らかにノンコは不満気であった。きざしかけた歓喜を中断され、不機嫌そうに黙りこくって、煙草を啜え、やけに天井に向かって吹き上げていた。

挑発に乗ってこない私が、腹立たしくもあり、その気になっっているのに中断されて、燃え上がった心の持ってゆき

場も、なかったであろう。

「どうして、やめたの？」

突っかかる様な口吻りである。

「ノンコ、今夜は私の奴隷だろう。奴隷は奴隷らしく、もっと虐めてやらなくちゃネ。いきなり快楽を味わおうなんてゼイタクだ」

「フフ、センサーらしいわ。負けた……又、一からやり直しね。やれやれ」

私を攻略して、その俣、眠ってしまいたかったに違いないノンコの野望は消えて、私とプレイする限り、どの道、一筋縄ではゆかないことを悟ったようであった。

マットレスが邪魔とばかり、まくり上げると、太縄を握って、緊縛の気構えをみせてノンコを手招く。

軽い愛憎のまなざしを私に投げて、吸いさしの煙草を捨てて、ゆらりと立ち上がった彼女は、縛るに恰好の立ち柱に向かって、強い磁気に惹きつけられたように近づいてきた。

柱に体を添わせて立たせると、両手を柱の背後にて組ませ、太縄で両手首を堅く縛って首へ伝わせ、肩ごしに振って、胸から二の腕にかけて、犇と締めつけていった。一本の縄は、胴を一巻きして終わりを告げる。

彼女は、緊縛の行為で、既に陶醉を誘発さ

れるのか、うっとり眼をつむり、私の縛るが俚に裸身を任せて、時々、燃える思いを吐き出すかのように、スーッと大きく息を吸い込んで、甘い吐息を、まきちらしていた。

この時点において、私の想念は、女体緊縛の構図に専ら走らせていた。少なくともプレイの段階ではなかったのである。

しかし、プレイと緊縛は、所詮は表裏一体のものであった。一寸した感興の趣く俚に、緊縛の構成は、忽ちSMめいたプレイに早変わりしてゆく。

かたちよく突き出た双胸の盛り上がり、ぐいと絞り上げ、ちよいと尖端をひねくってやると、須臾にして、喜悦が閉じた眼尻に、ありありと泛かび上がり、頬をピクつかせて彼女は、こらえようもなく喘ぎはじめた。

それをわざと無視して、胴縄に別の一本を繋ぐと、両腿にかけ渡してゆく。

これも緊縛の一つのポーズ――。

その緊縛だけで、ノンコは早くも悦楽めいた忍び音を洩らしていた。既に被虐の雰囲気、に酔い痴れているかのである。羞恥責めめいた思いで、禪で猿轡をしてやると、ノンコの眼は一入、猥らに燃え上がっていった。

期待に応えて、縄を縛り変え、臍窩を中

心にして菱形に縛り、強く引張って絞り上げる。反応は忽ちあざやかに現われて、猿轡を洩れて、うつつなき悶え声が洩れ聞こえてくる。

ノンコは、超感度のマイクのように敏感であった。

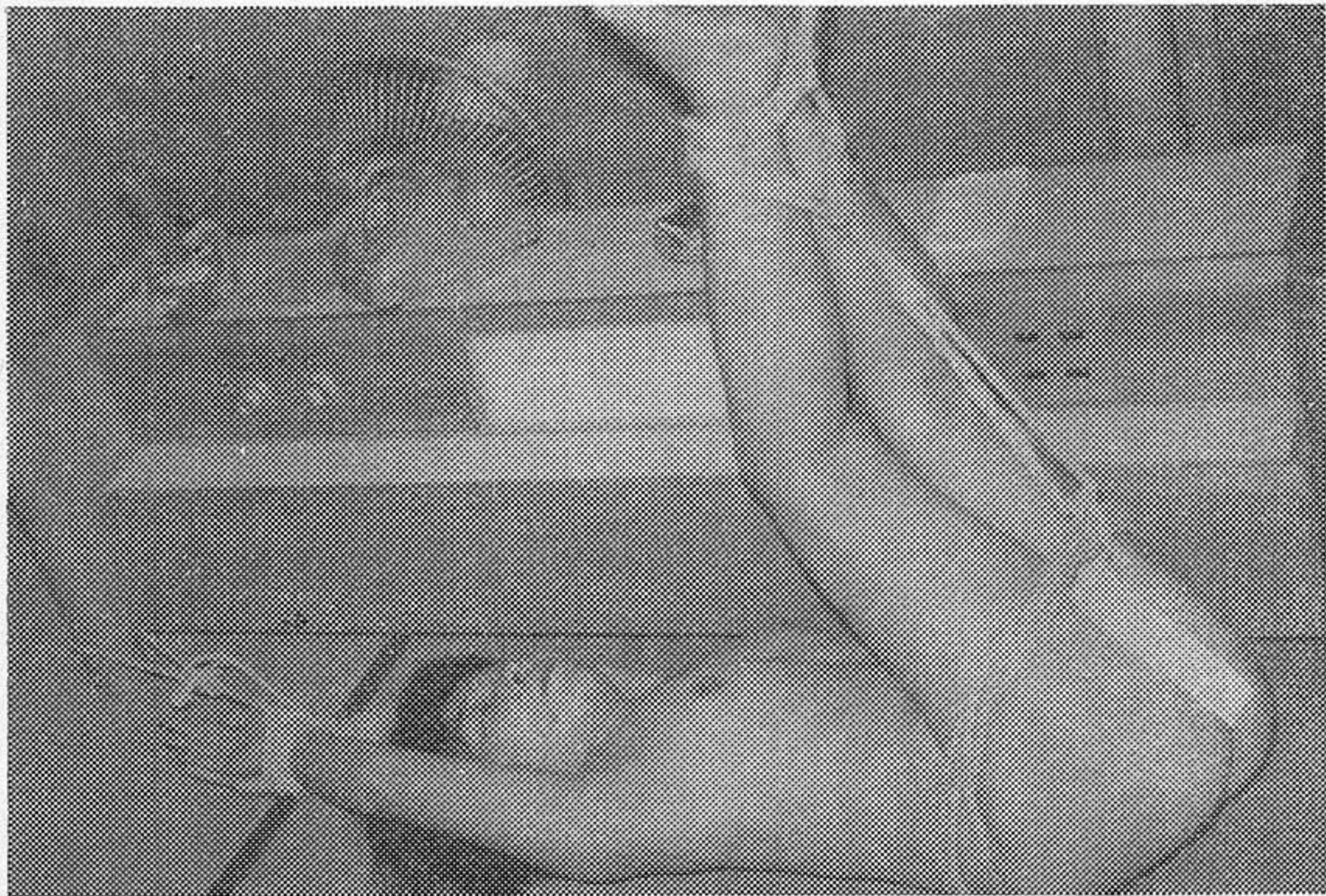
ファインダーの中に入るよう、天狗の面をあしらってみると、構図としては一寸、面白い感じである。

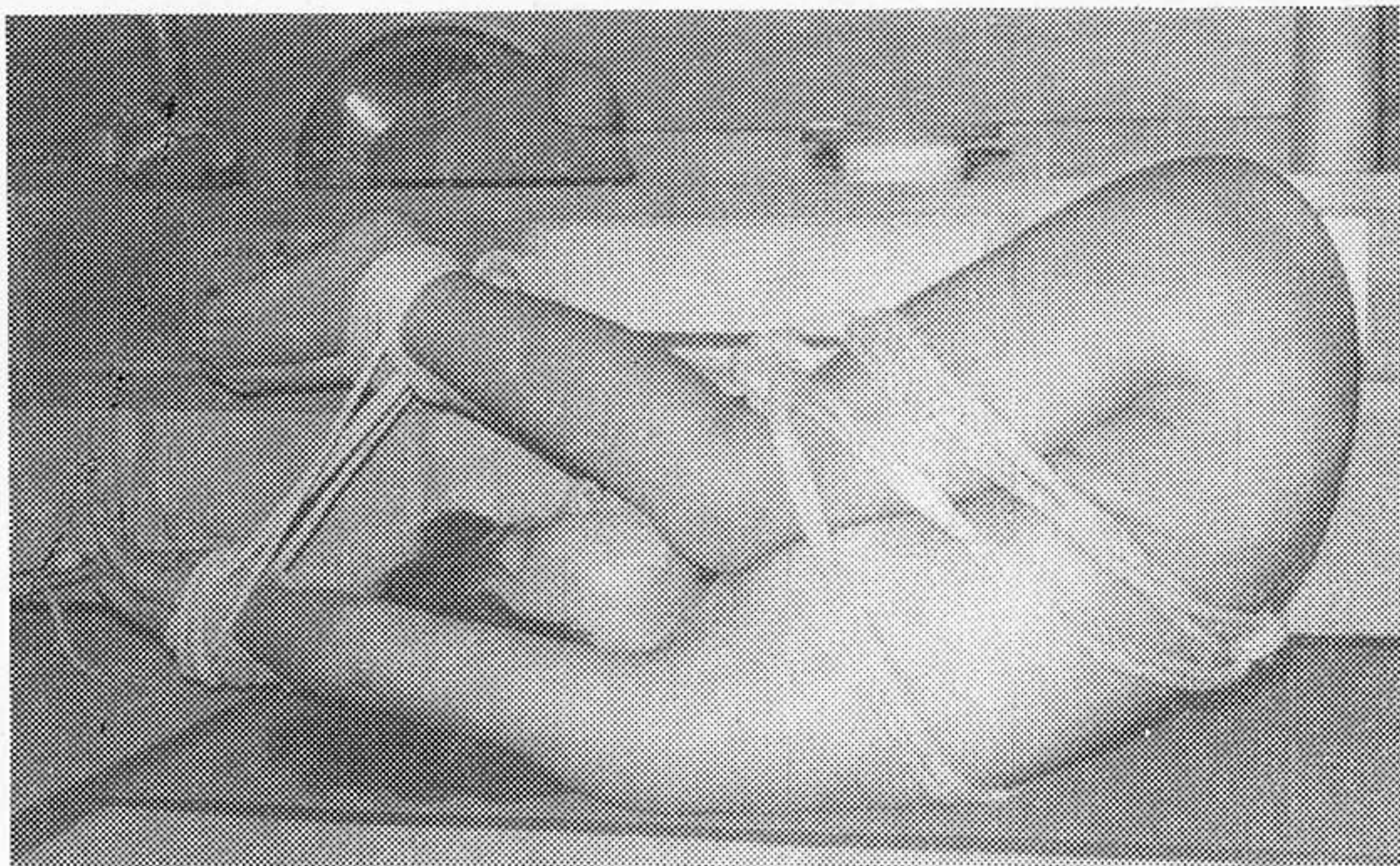
撮るだけ撮ってカメラを措くと、私は纏っていた浴衣をかなぐり捨てて。

二人きりの密室において、女一人を裸身にして、男が衣類を纏っているのはエチケツトにも反するというものだ。

あとは唯、全精力を集中して、女悦の凡ゆる手段を講じればよかった。

愛虐に酔い痴れ、しゃくり上げるような嗚咽につれて、猿轡の底辺から、絞り出すような歎歎と共に、はや失神に





近い無我の恍惚の状態が訪れつつあった。

眼をひきつらせ、魂を天外に飛ばせて、野村信子は完全に自己を喪失していった。

× × ×

沮喪した肉体の甦生までには、優に二、三十分は、かかる。

既に縄を解かれた女体が長々と、たたみに仰向けにノビている。

徐々に肌が弛緩し始め、やっと人心地つかせて蘇りつつあった。

(ノンコ殺すに刃物はいらぬ)

ものの五分も責めりゃよい)

ああコリャコリャと、俄づくりの都々逸でも唸って、浮かれたいような心境で私は、ひとり悦に入っていた。

ノンコを夢幻の境地へ沈没させるのはイトも簡単。一寸した、乳頭への攻撃、縄の擦過、皮膚へのいたぶり、それだけで、かくも早急に効果を齎すのであった。

げにも不可思議な、被虐陶醉の变化であった。世に謂う(触れなば落

ちん風情)とはノンコの様な女を指すのかも知れない。

私の知る限りの女性の中で、被虐感度の敏感さにおいて第一位、忽ちにして恍惚無我、失神の境地に陥るのがノンコであった。ついで、失神する川口有里子がつづき、さて三番目は誰かと考えたが、結局、三、四がなくて五番目あたりに喜多知子がつづき、豹変する川路むら子が、ついで、ランクされそうである。

兎も角、早い——。早過ぎて、どうにもならない手持無沙汰を感じてくくらいであった。

ノンコの場合、満員電車で押され、揺られただけでも、うっとりしそうな可能性を胎んでいた。

これほどに敏感な女性も、世に珍しいのではあるまいか——。

とあれ、無我の陶醉の境地から醒めるのを待って、私は早々に第二弾の緊縛にかかる。

ノンコはもう何をされようと、自己の意志を半ば喪失していて、放心状態で私の為すが尽であった。頃合の場所と、暇と根さえあれば、どのような強烈な逆吊りや、緊縛にも、彼女は夢幻の悦楽の園を彷徨して、易々として耐え忍ぶことであろう。

試みに、この裸身に、強烈な屈曲のポーズを求めてみよう。

投げ出した両手に、形ばかりの縄をかけてうしろに引き、両膝が顔面にピッタリ密着するまでに彎曲させてゆく。太縄で、屈曲した両腿を腰ごと縛って足首に繋ぎ、体が元に戻らぬよう、別の縄で足首を縛って、Wベッド前の電気器具、スイッチ、ラジオなどを組み込んだ台座の足に引きしぼる。

未だ判っきりと陶酔からさめ切らないノンコの、この屹立した双臀に、容赦なく平手打ちが飛びかい、小気味よい響きを辺りに、まき散らした。

一旦、正気づいた女体が、再び逆行を始め口辺をわななかせ、うつつなき囁言を吐いてノンコは、又しても陶酔の淵へと沈んでいった。

かなり苦しい彎曲のポーズも、一向にこたえないのか、吐き出される呻きは甘く、半白眼に、うつろに瞳を開いて、愛虐の欲びにドッポリと、ひたりきっていると思われた。

こうして、恍惚の無我の境地に没入してしまふと、ノンコとの間に会話は途絶えてしまう。話しかけてみたところで、女はその返答すらロクロク出来ぬ夢遊状態であった。

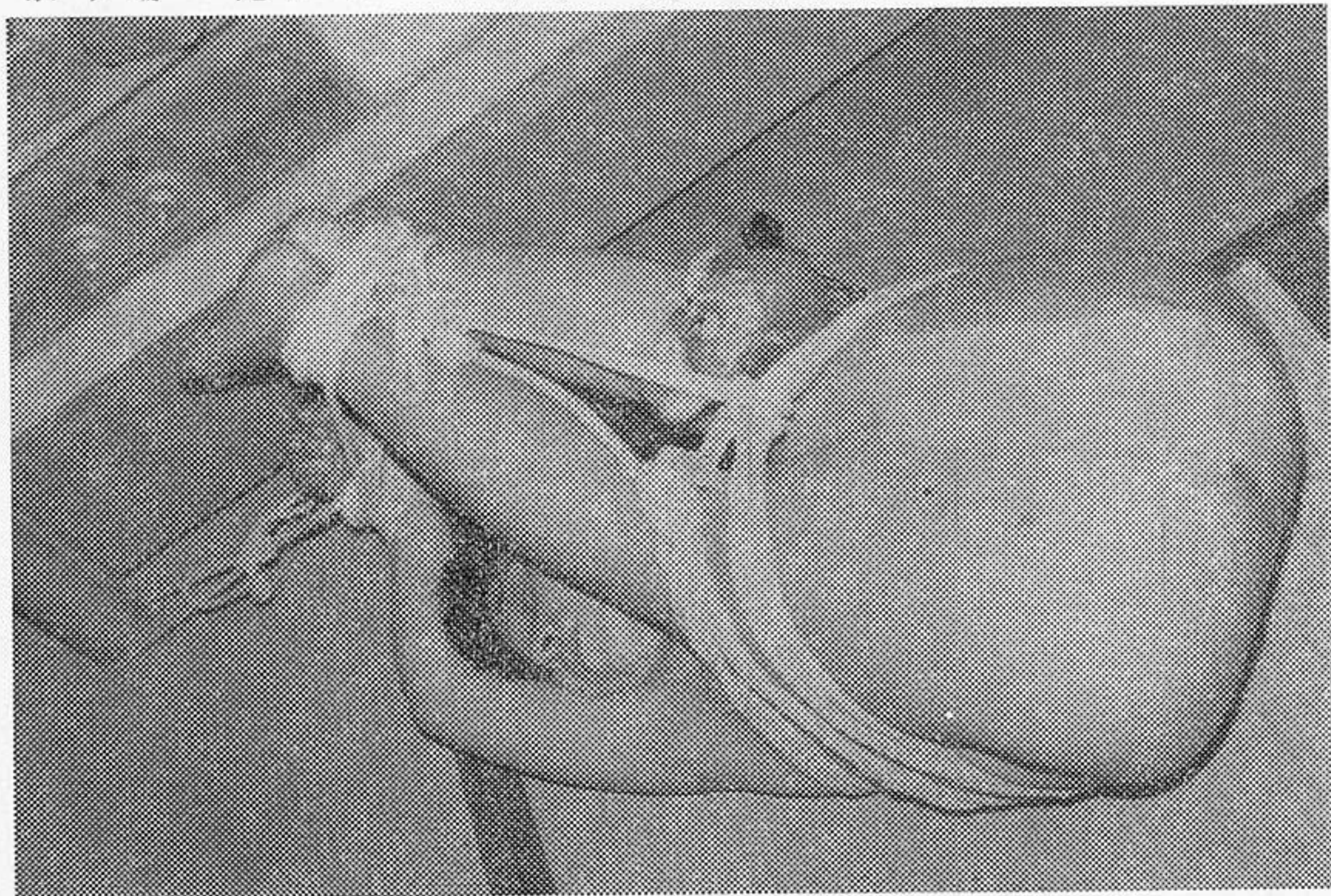
掌を縄にかえ、数度縄管で双臀を叩きのめしたが、悦楽につながるのか、ピクッ、ピクッと蠕動しながらも、切なげに吐き出す呻きは恍惚そのものであった。

打擲以外これといった取柄もない俤、ポーズを変えるべく足首の縄を台座から外すと今度は、高々と吊りあげてみる。半ば自由だった両手を前で重ねて縛って台座に繋ぐ。

敏感なポイントの、胸の窓が開かれる。

それに攻撃の指先が伸びるや否や、又もやノンコは失神へと急傾斜していったのであった。

瞳孔が散漫に開き、焦点を失って、私の顔が重なっていても、見つめる位置は一定した俤で変わらなかったが、その唇に私の唇が触れた途端まるで幼児のひきつけのように、みるみるうちに女の黒眼



は吊り上がっていった。

忽ちの変化に、フト軽い懼れを抱いて唇を離す。

私はノンコに対して、さして、何もしていないといってよかった。プレイとして、乳頭を弄び、乳房を狙うのは、謂わば、性の初歩に近い前戯の一つではなからうか――。

唯、それだけのことで、かくも失神に到るのであるならば、これから使おうとする女悦の器具のかずかずで、弥が上にもエスカレーターさせてゆけば、それこそ、氣絶してしまつて、その俚、あの世ゆきにも、なりかねない――そんな危惧にフトとらわれもするのであった。

切なげな鼻息をもらし、何か世迷言めいた言葉にならぬ言葉をブツブツ呟くノンコを見下ろして、私はしばし又、彼女が正氣を取り戻すのを待たざるを得なかったのである。

懼らく、野村信子は今、何をされても記憶の一片にだに留めていないであろう。

しかし、ぼんやりと手をつかねて、待つのは莫迦げていた。私は、吊り下げてあった彼女の両脚の縄をとくと、再度、体が二つに折れ曲るくらいに屈曲させて、両手足を一つに繋いだ。



私の悶心は、傍に転がっている天狗の面上にあった。取り上げた面の赤鼻を引っばるとスポンと音を立てて外れる。

私の胸は俄に、ときめき始めた。

× × ×

ぐったりとしたノンコが、大きく息を吹きかえして、言葉らしい言葉を呟いたのは、た

っぶり三十分後のことであつた。

既に私の思考は索漠として白けていた。盛り上がりきつた後の男は、一挙に奈落へ転落し空虚にとりつかれてしまうものである。

私の登頂と転落は、ノンコの意志とは関係なく、無我の夢幻の快樂の中で、始まり、終わった。もちろん、この不自然さは好ましい



ものではなかった。しかし、自己の意志を喪失した女を抱くのは、反応がないだけに何となく味気なく、不気味でもあったのである。

プレイに対する興味を失って、私は飽和状態の体をノンコの傍に横たえ、うつつともなき、僅かの間の仮眠を貪っていたのである。

ノンコの呟きに、ハッとして体を起こした

が、丑満刻に近い真夜中のことだけに、深く眠り込んでおれば、或はその俛、朝を迎えたかも知れなかった。

ムックリと起き上がって、ノンコに視線を向けると、薄眼を開いて、無言で私をみつめていた。

「気がついたの？」

「ああ、私、何が何だか、さっぱり分からない。今、何時かしら」

いわれて時計を覗くと、午前二時を少し廻っている。

「二時過ぎだよ。私も少し眠ったらしい」

「疲れたのでしょ」

「少しはね——。しかし、ノンコが気のつくまで待っているつもりが、手持ち無沙汰で、ついウトウトとしたのだよ」

「御免なさいね。私って、センサーに、ああされると、すぐに気が遠くなってしまうの」

「いやマイッタよ。私が何をしたか憶えているかい？」

「全然、わからないわ」

「屈曲位に縛っておいてドッキング」

「ウソ……ウソでしょう。だって私」

「いや本当だ。夢遊状態だから分からないだけだよ。しかし、憶えがないとなると、ノンコの体験には、随分と、ノンコ自身の知らない、未知の分野があるね。ノンコと交渉のあった男性なら、遅かれ早かれ、あんたのこの状態を知るから、その間、何が行なわれたのかノンコは知らなくても、想像を絶する行為をされていたかも知れない。ノンコは拒否するが、私の見た限りでは、過去の男性で誰か

が、アヌスに異常な関心を抱いたことを如実に示しているよ。今迄に疼痛を感じたことはなかったかい？」

「あります。ヘンに痛むので痔だと思っていました」

「前後を考えてごらん。誰かとデートした時とか、ある特定の男性とか……」

「憶い出しました。いやな思い出につながる人なので、センサーには告白しなかったけど先日、別れた彼と同棲する以前、ある男性と数カ月、交渉をもったことがあるのです。その人は、病的にケチな人で、ホテル代だって最初に一度、払ったきり、あとは、ずっと私が出しておりました。そんな男でも、惚れた弱味で、熱をあげたことがあるのです。私って、そんな弱いところのある女なんです」

「女の美德かも知れないが、それを利用する人間は、きらいだな」

「そうなんです。そんな性格の彼を心のどこかで嫌いながら、その男の執拗なまでの愛撫に、結局、自分が制御出来なくなって、ズルズルベツタリに交際していたのです」

「どんな男なの、S？ それともMなの？」

「縄なんて使わず、ホテルに備え付けの、浴衣の紐などで、簡単に後手に縛って、私の自

由を奪い、寸時も休まず、指

先と舌で、私をくたくたにさ

せてしまうのです。その頃、

若さからか、しきりに妊娠を

恐れていましたので、その折

は、避妊してくれといつも頼

みました。彼は、面倒くさい

から、オレはセックスはしな

いと公言し、事実、その証拠

はありませんでした。その代

り、彼と逢った時、いつもお

しりが、すぐく痛むのです。

括約筋というのでしょうか、

背筋の痛くなるような鈍痛に

襲われ、数日は痛みが続いて

トイレへ行っても、何となく

気色の悪い痛みに、なやまさ

れました。彼にそのことをい

ったら、軽い痔疾だから、医

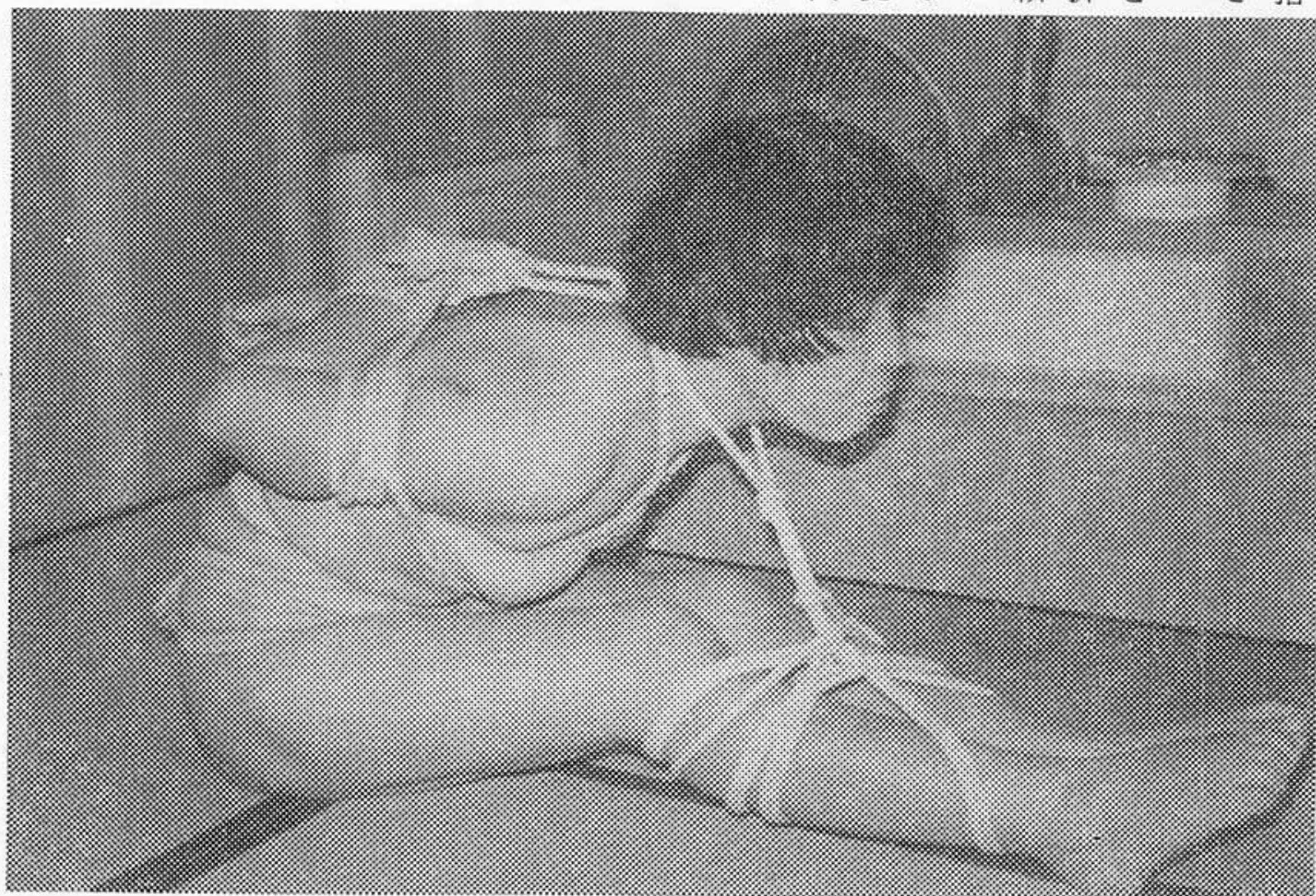
者にみせる程のこともなく、

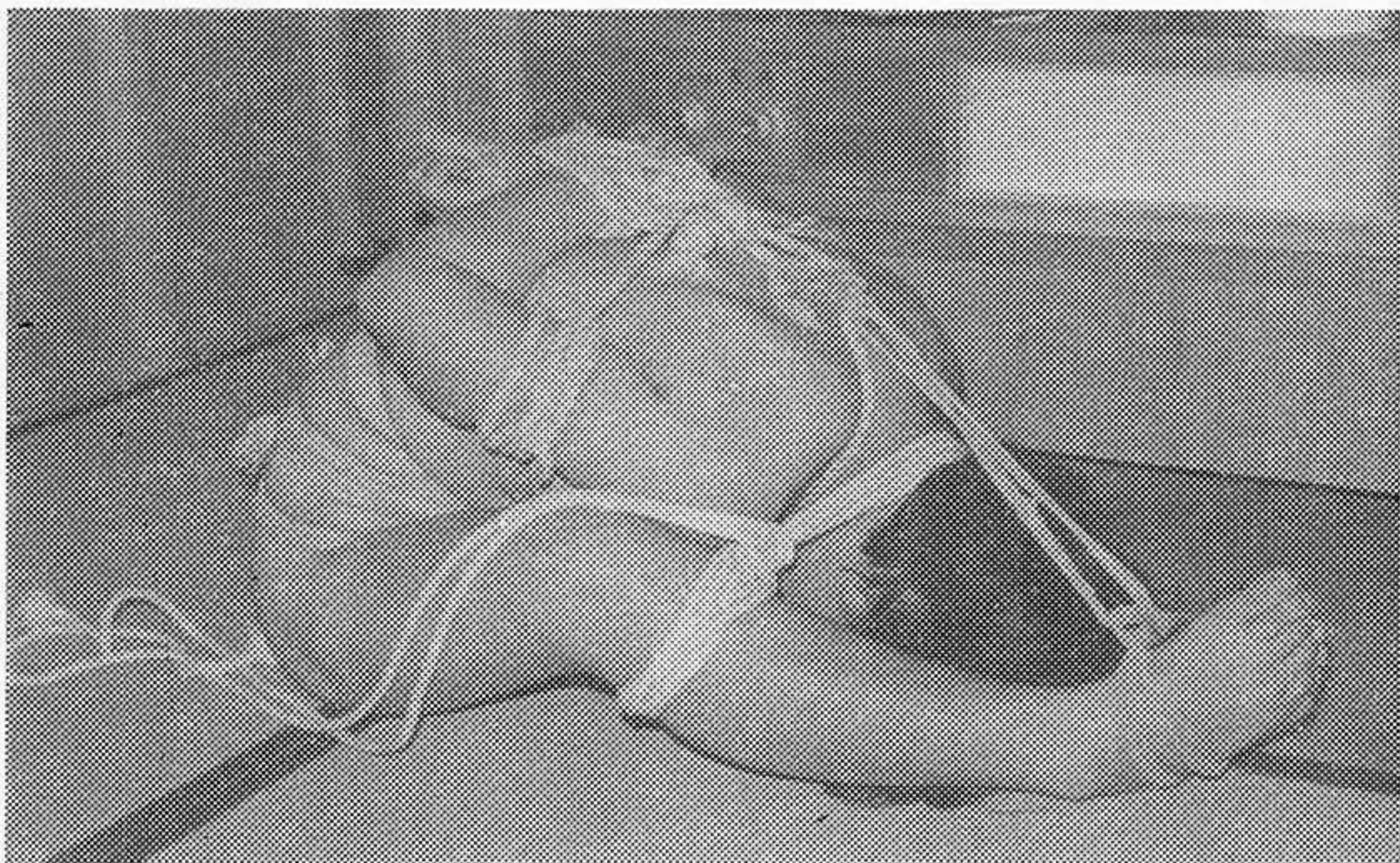
温めるようにしたら治るなど

といわれました。彼は妊娠を

恐れる私に、公約の手前、セ

ックスはしなくても、ヒョツ





「そう。ヒョッとしくなくても、その男はアヌス党だったんだよ。恐らくノンコは、いつも失神状態に陥っていた筈だ。そうだろう？」

「……」

微かに、うなづく。

「世間ではよく、正常なセックスより、それを好む人間がいるとのことだ。多分、その男も、一つは避妊、一つはオカマ主義拝戴者だろう。マルキ・ド・サドの昔より『悪徳の栄え』でも、しばしばアヌス交を描いてそれを当然のようにしている。だからノンコのは幾分、弛緩している。失神中に働く潜在意識が、自己喪失の中でも神経が、無理な苦痛だけを訴えているのだ。無意識のうちに、ノンコはアヌスを、いやがるようになった。そうなんだよ」

「どうしてそんなこと、わかりますの。センサーこわいみたい」

「蛇の道はヘビだよ——」

私は在りの俣を話さなかった。ノンコの失神を好機に、アヌス責めを試みたことなど喋ったら、私も又、

その男と何ら異なることのない行為に走ったとして、彼女の聲を、かうかも知れなかったからである。ノンコの失神状態を知った男なら、プレイのゆきつく処、倒錯の興味を覚えて、次から次へ、弛緩させていったのかも知れなかった。

「私、のどがカラカラ。何かのんでいい？」

「ああ、適当に——私もだ。ビールを出してくれないか」

ノンコは立ち上がって冷蔵庫の扉を開き、二本のビールを、とり出してくる。

密室での、汗ばむ程の気温に、冷たいビールは快かった。と、共に失われた活力が徐々に蘇ってくる。空虚な心が、いつしか充たされ始め、裸身で私の愛虐の手を待つノンコを眼前にして、私の嗜虐心の恢復は予想以上に早かった。我々らタフな精神に、内心、驚きに似た喜びを感じて、この年代になっても、その気になれば、幾らでもハッスル出来ることを改めて確認したのであった。

コップのビールを、ぐっとのみほすと、私は早くも縄を掴んで立ち上がる。女は無言で私を見上げた。ノンコの夢遊状態による休憩の長さが、さして疲れを感じない原因でもあるようである。

太縄を選んで三本の縄で犇々と緊縛する。締めつけた縄の強さが、下腹部の贅肉を、はみ出させていた。

緊縛に専念したこのポーズに向かって、かなり入念にカメラが前後左右から光り、部屋一杯に嵌めこまれた鏡を利用して、二人のノンコの前後を写し出して、ストロボを光らせた。

一つの完全な緊縛を基本にして、次々とポーズを変えてゆく。車に積み込んできたので縄はフンダンにある。

乳房に接触を試みたい衝動にかられたが、又ぞろ失神されたのでは、フォトも数撮れないと、欲望を抑えて、ノンコの両脚を前に揃えて坐らせると、首に縄をかけて、ぐいぐい屈折させ、両脚に繋いで屈曲のポーズをとらせる。易々として彼女は、私の意の尽になつて快く協力してくれるのであった。

みかけによらず、ノンコの体は柔軟で、この程度の折れかがみでは、苦渋の色もなく、平気な顔で、ポーズを保ち続けている。

首にかけた縄を解くと、のしかかるようにして、両脚の間へ頭ごと突っ込ませてゆく。両肩と両膝が、ピッタリと、くっつく。ここらが限界であろう。ウンウンいい乍ら、ノン

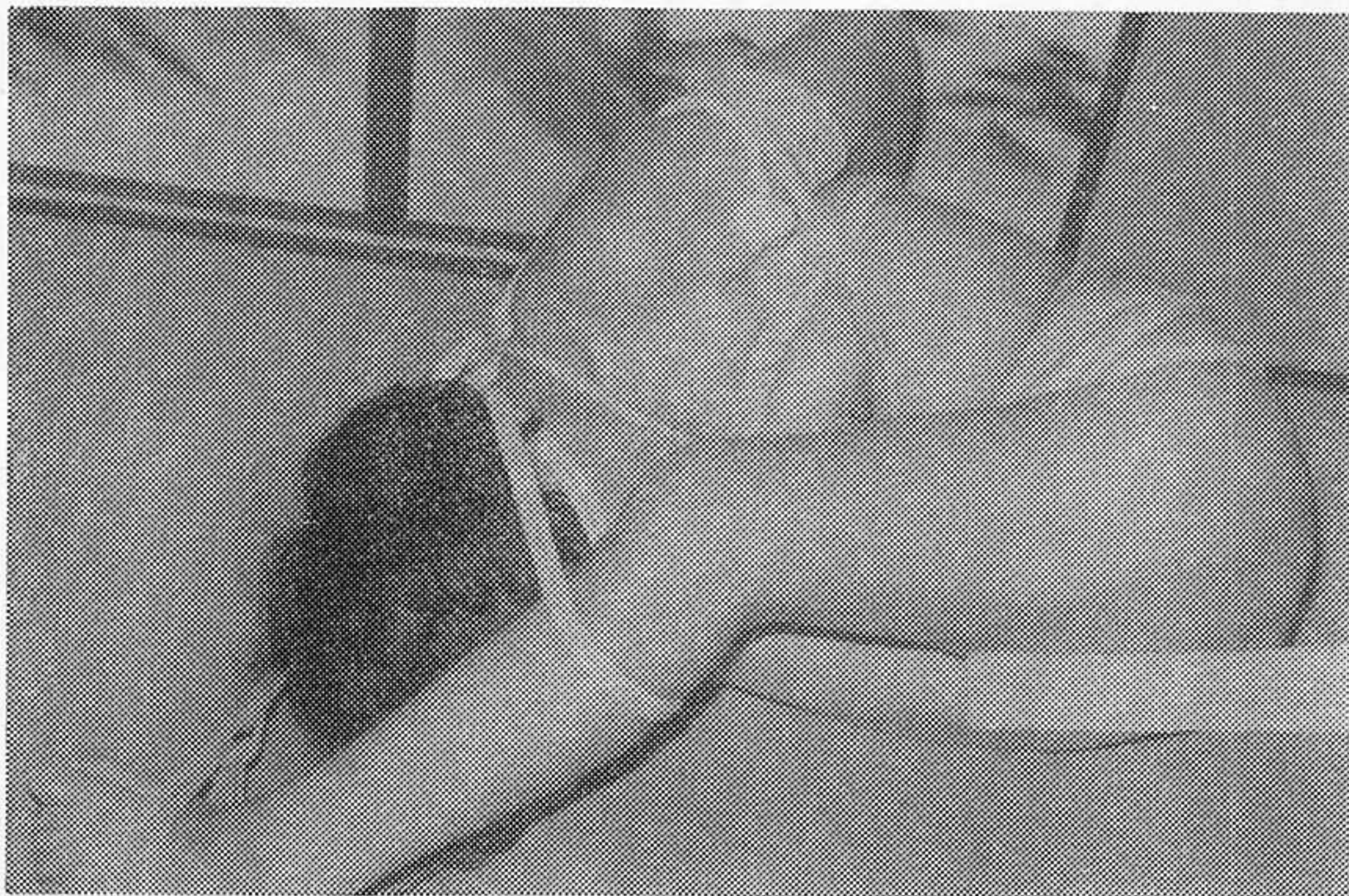
コは、この強烈な屈曲に耐えていた。

首と両脚を一つにして縛つて、上体が戻らぬようにし、更に頭部で両足先を揃えて縛り、頭上を越して背で結びつける。

かねて一度は、どの緊縛女性にも、こうした窮極のポーズを求めてみるが、骨が堅いか息苦しさに耐えかねるのかそれ迄にネを挙げてしまつてこの屈折の緊縛は、完成出来た女性数は少ない。

思い出してみても、私の妻への試みは別として、緊縛女性では、もう一昔前の愛川悦子、梨花悠紀子、近くでは谷山久美子ぐらいであろうか。

この強烈な緊縛に耐え得る野村信子は、かなりの被虐性の持主に違いなかった。ウンウン唸り乍らも、じっと耐えて我慢し、弱音を吐かなかった。そんな彼女が、反面、相



手次第では、かなりのS的女性と変貌して、M男性に随喜の涙を流させるのだから、彼女も又かつての伊吹真砂子のように、SM両面を備えた稀有の存在であった。伊吹真砂子はセックスには案外、恬淡、冷静で、燃えている男を、冷やかな面持ちで、じっと見上げていたのを思い出すが、ノンコはその面でも抜



群で、こうして書いてみると、容貌は二次として、我等アブニスト党にとっては、又と得がたい女性のように思えるのであった。私の嗜虐の想念は、昂まってゆく一方である。

この苦しいポーズで、横ざまに倒し、パシリパシリと、ついでに数度、臀部を打ちのめ

してから、やおら、台座を体の支えにして直立させたのであった。

押し殺した苦悶の呻きが股の間から洩れ、ノンコは必死で頑張りつづけていた。

屹立した脚線が、微かに痙攣し、非情に屈折した双臀が直角に尖りをみせていた。

「苦しいかい？」

「く、くるしい……」

「今夜は奴隷だからね、我慢するんだ。もう少し」

「センセ……首筋が、いたーい」

「よしよし」

両脚を高々と支えている力が、すべて頸筋にかかっていた。

窮極のポーズに眼を細めて、悦に入り乍らカメラを構いて、視野を近づける。

愛虐の手が伸びると、ノンコの苦悶の呻きに、甘さが交錯し、苦痛と快楽の綯い交じった極限の状態で、彼女は息づかいを、せわしくし始めていた。顔を近づけると、鼻腔に栗の花に似た匂いが、よぎり過ぎる。

「ああ、センセ……」

叫んだ時、もう待て暫しもなくなったのか近づいていた私の頬に、さっと生温かい液体が、ほとばしり掛かった。

「センサー、かんにん」

と、きれぎれにいう彼女。

苦悶を必死にこらえようと、力んだ余り、思わず失禁した結果であったが、それはこの強烈な屈曲緊縛の、如何に苦しいかを物語る唯一のしるしのようなものであった。

濡れタオルで顔を拭い、私は、かすかな懐かしい香りを嗅ぎとり乍ら、丁寧に拭いてやった。

「見事につけられたぞ……こいつ」

「カンニン、ゆ、ゆるしてね」

「いいんだ。時には頂戴するときもあるくらいだから」

苦悶の限界の放尿が、むしろ私の心を、なごやかにさせた。

「ああ、センサーもうダメ……ほどこいてエ」

もう精一杯の忍容なのであろう。叫んだノンコの声は苦しく上ずっていた。

「よしよし、よく辛抱したぞ」

手早く解き放してゆくと、強ばったノンコの表情に、蘇生の色が泛かび上がっていた。

「あー、苦しかったわあ。死にそうよ」

猥らな眼が、私を、なじっていた。

「奴隷だからネ、今夜は——」

「いくら奴隷でも、ヒドイ」

「そんなに苦しかった？」

「そりゃもう。息が出来ないのよ、胸がつまって……だから」

「そうだろうね」

ニヤニヤしていると、クスリと笑って、

「腰の蝶つがい、はずれそうだったわ」

ノンコは、全身、縄痕だらけの肌を撫でさすって、もう笑顔を向けていた。苦しさの余り、つい洩らしてしまったのが、羞らいとして蘇ってきただけであらう。

「もうこれで止すつもりでいたが、顔にオシッコをかけた罰に、もう一度縛ってやる」

「待って。おトイレへ行きたくなっちゃったの。行かせて——」

「よしよし、連れて行ってやる」





縄尻をとって、ノンコの背をトンと突く。

「センセー、よくよく好きなのねえ」

振り向いて、あきれた様に笑い、彼女は素直に、トイレへ歩んでいった。

ドアを開けてやる。勿論、私も一緒に入る。

激しいほとばしりに凝っと目をこらし、終わったと思った時、ノンコは愧かしげに声を落として、

「あのう、少し出そうなのよ羞かしいから出て行って……ねえったら」

と、懇願するのであった。

「いいから、やれよ」

押し強く頑張っていると、「ウン、いや。早くう。出るものも出ないわよ。いくら何でも、いやだあ……もうセンセーのいうこと、きいてあげないから——」

と、流石にノンコも愧じて

強硬である。

やっとあきらめて、水栓に縄尻を結び、ドアを閉めてやると、微かに排泄の音が鼓膜に流れてきた。

立ち上がって、足で水洗のノブを押えたらしく、激しい水音が、きこえる。

きまり悪げにノンコは突っ立っていた。

「風呂へ行こうか——洗ってやる」

縄尻をとって、私はノンコの肩を抱くと、縄れるように、浴室へ入った。

湯は既に、ぬるくなっている。湯栓を開放し細縄一本、湯浸しにして、ザブザブとノンコの臀部に湯をかけて、洗ってやる。

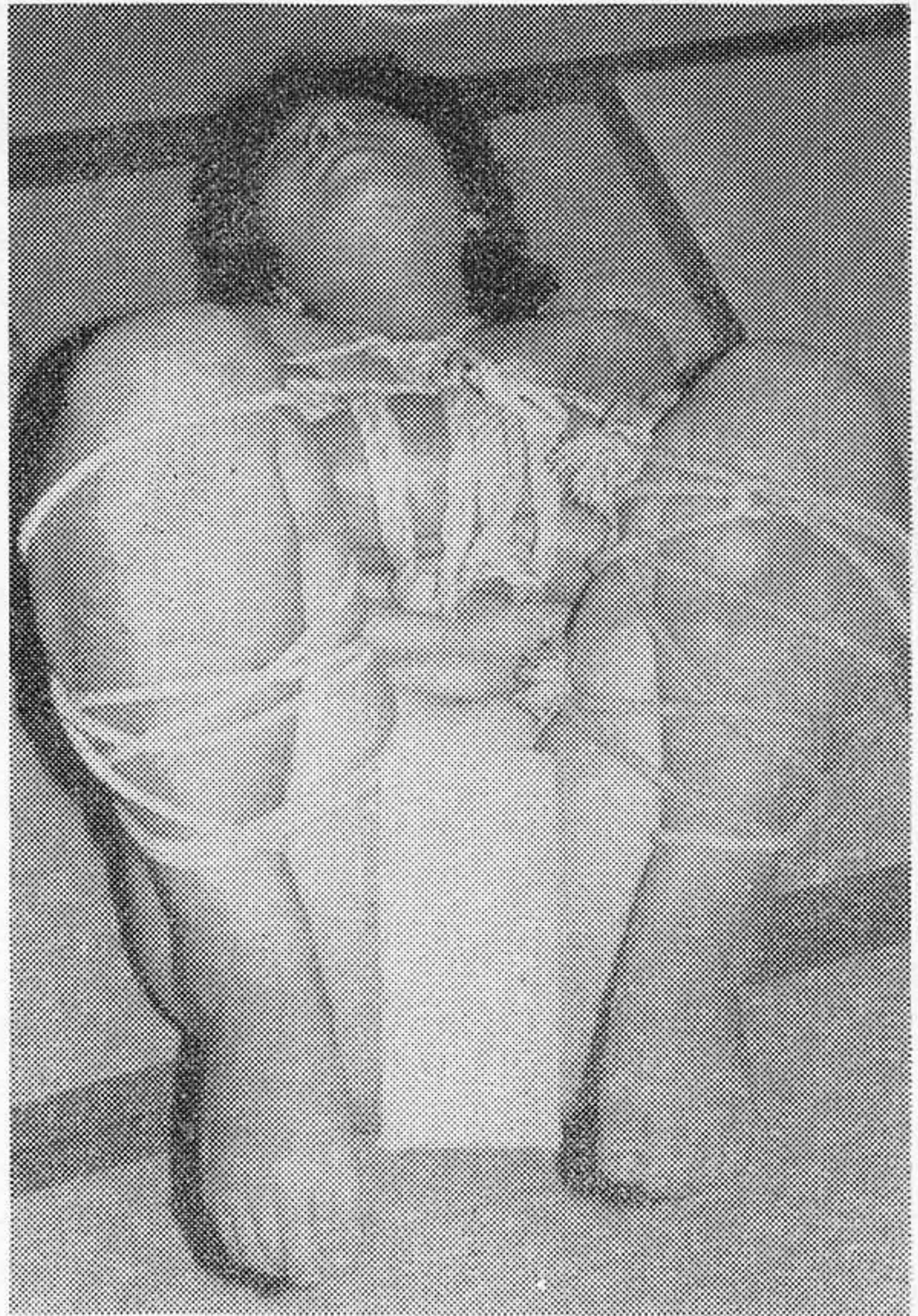
「センセー。少し、痛いわ。何もしなかった？」

ハッとしたが、隠していても気の毒と、思い切って白状してしまう気になり、A感覚を求めて、失神の無我の状態の時、ついバイブを試みたことを告白すると、ポツと頬を赤らめ、

「矢張りセンセーもなの。いやーね」

と顔を、しかめる。

「でも、最近、とくに関心を深め出したのだよ。カズノコ天井で、大いに満足のくせに、人間の欲にはキリがないとみえる。本当にイ



「ヤなのかい」

「つくから恥かしいのよ。だって、匂うでしょう。汚いもの」

と、彼女は、誰しもがそうであるように、附着物に対する汚穢を気にしているのだった。

「じゃあ、浣腸すればいい。綺麗に洗ってな

ら、どうってこともないんだろう」

「だったら、浣腸して下さればいいのに」

「構わなかったのかい」

「センサーが、そのことに、さして熱心そうでなかっただけよ。判っきり、イヤとってないもの」

「オイ、オイ、どうなったのだい。じゃあ、

今からでもやってやろうか」

「今夜は、いや。この次——だって、ヒリヒリと痛いんですもの」

「と、いうと、A 感覚に対しては、いやじゃないんだね」

あるかなきかの、うなずきで、ノンコはツト視線を外らした。私に隠してはいるが、或は、過去の男より、A 感覚を開眼させられていたのかも知れない。

湯から上がると、私はノンコを俯伏せに押さえつけて盛んな泡を立てた。擦ったげに彼女は尻を振る。私は石鹼まみれの指を近づけていった。

呀っと声を立てて、裸身がくねった。

私は息を弾ませた。倒錯のプレイに、私の嗜虐心は俄に逸り立ち始めた。

ノンコの縛られた後手が、しきりに虚空を掴み、十指が激しく躍っていた。

叫喚に甘美な音色が交錯する。

果てしもなく、私達は痴戯に耽った。

× × ×

縛り終わって、机上の腕時計を覗き込むと午前三時半——。

不眠の双眼は、おそらく血走っていたに違いない。

確かに肉体は、くたくたに綿のように疲れ切っていた。そのくせ、飽くなき嗜虐の精神力が年令以上に私をタフにして深夜の狂宴にいつ果てるともなく、かり立てていた。

どうしてだろう——。野村信子とプレイする前、いつも夜を徹してしまうのは。

前回だって、夜もすがら、プレイに終始して、不覚にもアベックホテルの一室で、午前十一時頃まで寝込んでしまっている。そんな予感が今日もする。

遅くなっても、車を飛ばして帰宅するつもりだったが、不眠不休では、運転も危い。

おそらく、この緊縛を最後に、私は又しても、前後不覚に眠りこけるに違いあるまい。

眼前に横たわる野村信子は、あられもない緊縛姿を曝していた。

胸で深々と両腕を組み合わせ、滅多矢鱈にかいなを縛り合わせてある。

膝を折り曲げて、足首と腿を密着させ、両脚の縄を引き絞ってあるから、開股の俛で、身動きもならない。雁字搦目の縄にまみれてノンコは無惨に転がっていた。

開ききった襖の中に、部屋一杯を、うつし出す鏡が装置されている。

二人のノンコが、相対して、私の嗜虐の制

裁を待っていたが、あっさりと失神してもらいたくはなかった。

快楽の極みは、両者の密接な意志の疎通がなくては叶わない。

胸許で犇と縛りつけた両腕のせいで、乳房への攻撃は出来ない。女悦の器具や、バイブの世話にもなりたくはなかった。

遠い言い廻しは、くどいのみである。

洋酒通の人なら、誰も知るバット69というのがある。その銘柄の名のゆえんは知らないが、世界周知の面白き名の、その俛を、私は自由の総てを奪い去られたノンコに求めたい衝動を覚えた。緊縛という名の、被虐、嗜虐を満喫させる状態で……。



サド・マゾ（プラス）ポルノ——。

それは、もとよりノンコの望むところでもあろう。

縄を解き放ってしまっても、死んだように彼女は身じろぎもせず、その場に長々と伸びていた。

快樂夢幻の、忘我の悦楽の園で、この愛すべきM女野村信子は、何を夢んでいるのだろうか——。

夢幻の境地は、この尽、無限に続くようであった。

捲くり上げたWベッドを伸ばし終わると、正体もない彼女を抱きかかえて、純白のシーツの上に運ぶ。

重なる不眠不休の疲労が、この瞬間、どつと吐き出されるように私を包む。私はもう、欲も得もなく、微かに酒の香の漂うノンコの寝息を顎にうけて昏々と茫漠の夢路を辿っていった。

× × ×

私はこの一篇のハントが、前回の野村信子のカメラ・ハントの場合と、全く相似通っていることに内心、猥褻たる思いにかられるのである。

時刻といい、状況といい、顛末といい、す

べては、あの時の繰り返しのように思われてならない。同一人物とプレイすると、全く意識せずして、かくも相似るプレイ経過を辿るものかと、我乍らつくづく、書き終わって感じるのであった。

強いて探し出してみても、異なっているのは、緊縛のポーズのみに過ぎないといっても過言ではなかった。

そのことは先日、名古屋で出会った喜多知子にも、いえることであった。

始めて出会ってプレイした同じホテルで、二度目にも会い、隔りはとれていて、燃えに燃え、同時刻、又の逢瀬を約して、新幹線の駅頭で別れを告げたのであったが、彼女自身すら、第一回目のプレイとの、余りの相似性に、タイム・トンネルを潜って、再び一カ月の日時を逆行したような錯覚に捉われるというのであった。

野村信子とも、半年のタイム・トンネルの時間の逆行を感じる。

泥のように眠って、目覚めたのは、やはり十一時過ぎであった。前回と違っていたところは、ノンコが既に起き出していて、身支度し、朝の粧いを済ませているということであった。

「おめざめ——、すごく疲れていらっしやったのか、かなり酩酊が大きかったわよ」

「ああ、くたくたになった。ノンコは、その割に元気じゃないか」

「私は久しぶりに、楽しい時間を過ごしたのですもの、反って気分がスッキリしたくらいよ。でも、さっきから考えてたんだけど、私って悪い女ね。又、センサーを泊めてしまったわ。奥さんに悪いわネ」

ちよっぴり、しおらしさをみせて、それがノンコの、いいところなのだろうか——。

「まだ、痛む？」

夢の中でも気になっていたことを訊ねてみたら、

「え？」

と不審顔で見返してくる。

「オイオイ、どうなってるんだい」

私は拍子抜けする思いであった。

「ヒリヒリするっていつてたのは誰だい」

「ああ、あれ」

ポツと頬を染めて、

「もう、どうってことないわ」

と、眼を伏せる。

「今度は無理にでも浣腸してやろう。きっとだぞ」

「いやねえ、朝っぱらから、そんな話。……フフフ。いいわよ。センサーの好きなようにして……」

と、猥らに笑う。

× × ×

陽光が燦々と、ふりそそいで、ただれた眼に京の春の日は眩しかった。

平安神宮近くのレストラン「アリーナ」で朝昼兼用の食事を摂る。

この場所は、嘗て、左近麻里子と待ち合わせ、近くのホテル「H」で、名残りのプレイをした、思い出のある、レストランであった。

どんな事情からか、子供まで儲け乍ら、左近麻里子は夫と別れ、子供も先方に渡して全くの独り身になり、会社勤めを始めたそうであるが、若し差支えなければ、今ひとたび、緊縛モデルとして、被虐の愉しさを味わいたいと、箕田氏宛に便りがあったとのことなのである。

どういいうわけか、私には便りが無い。或は再びカメラ・ハントに書かれることを懼れたことかも知れないが、それでいて、一旦知った被虐の味を忘れかねて、箕田氏あてに秘かなプレイ願望の便りを出したのかも知れない。

い。

奇しくも、彼女と縁のあった「アリーナ」で食事したので、ついつい、語るともなく、ノンコに、左近麻里子の、女の真情を喋っていた。

「分かるような気がするわ、その人の気持。私だって、余り書き立てられたくないもの。所詮、SMのプレイなんて、二人の秘めごとよ。その左近さんだって、センサーに会いたいと思ってるのよ。だけど、離婚の真相を書かれるのが辛いよ、きつと」

私は黙って、うなずくのであった。

箕田氏からの要請もあり、すでに八年続けてきたカメラ・ハントは、謂わば、こうした被虐願望女性のプライバシーの剔抉の繰り返しである。

書かなかった女性も、十数人は下るまいと思われるものの、多少のフィクションを混じえても、ほぼ真実に近いものをペンにして、私はなにがしかの稿料を稼いでいる。

秘かにプレイだけに徹したら、どんなに愉しかろうと思う反面、それでは今日の辻村隆はなく、これだけの女性とは到底、SMプレイをすることは不可能であったらと思うのである。

倫理の矛盾を常に感じつつ、明日も又、異なる女性とプレイしたさに、私の拙いペンが続いてゆくに違いなかった。

「一緒に乗っていい？」

「何処まで？」

「何処までも——」

「又、京都へ舞い戻るのかい」

「電車で帰ってくるわ」

「そりゃ、話相手があっといういが、気の毒だよ」

「でもセンサー、運転していて居眠りすると危いから、気をつけていてあげたいの」

「こいつ……」

柔らかな春風のように私の心は仄暖かい。夜の十一時から、夜明けの四時頃までの、愛欲秘戯が、まるで夢魔のように思われる健康な光の下で、私は早春の京の街を駆け抜けていった。

「今度来る時は、産婦人科のセンサーも誘って来てね。三人で遊びましょうよ。もっと愉しいわ」

ノンコは、悪魔めいた言葉をヌケヌケとい

× × ×

× × ×



福井桃子さんに酔う

素 晴 し い 妊 婦

高 野 原 美

カ ッ ト ・ 堀 真 彦

(一)

福井桃子さんの妊婦姿を見て驚き、一瞬それを忘れ、その後、じっと妊娠のために便々と膨れた小山の腹を確認し、再び感謝の情を禁じ得ない思いに馳られたのは、私のみではないだろう。

それというのは、妊婦のカメラハントが久しく跡断え、妊婦マニアにとって淋しい思いをさせていた——もっとも二月号では、思いもよらぬリバイバルで、妊婦ヌード第一号ともいうべき、田中美佐子のハントがあったが——ことと、前月号でのヌードでは全く妊娠の徴候も感じさせなかった桃子さんが、急に妊娠腹の威容を、私たちの前に見せてくれたことにある。

これは、桃子さんの女体の生理的変化の妙

を知り得なかった男の、うろたえであろう。きつと、桃子さんは八カ月の、便々と膨れた妊娠腹をカメラに撮らせながら「私のこの大きなお腹を見て奇ク誌の読者は驚くだろう」と内心では、それを期待し、彼女の徹底したマゾ心理を満喫しながら、誇らし気に妊娠腹を突きだしていたのではないかと思われる。

△美美代のお喋り▽の自由放奔さ、小憎いほど男の好色性とサド心理を適確につかんだ上での、羞恥と屈辱の大胆なポーズによる裸身の演技に酔わされた男性にとって、初産でない二度目の妊婦の身体の変化は、桃子さんのいうように「私じゃ、お腹の小さい方じゃなかったけど」に、だまされるのも無理はないだろう。

男性の前に、羞恥のポーズを大胆に演じ、緊縛と浣腸の艶麗、豊満な女体美を心ゆくま

で観賞させてくれた桃子さんが、妊娠した裸身を見せてくれたことに感謝のほかはない。

(二)

上腹部がグンと突き出すように丸い膨らみをみせ、腹の中央部で豊かな脂肪を暗示するように丸い深い窪みをつくっていた臍が、腹の中の胎児のために押し出されて無惨な全容をみせて飛び出している腹は、むっちりと充実した固さを想像させ、見事なものである。

女性の弾力を秘めて厚い皮下脂肪におおわれた、ぽってりとした腹の弾力が、桃子さんのいう通り「空気を、いっぱいに入れたフットボールみたいに堅い」状態になっていることを、この臍が如実に物語っている。

その、風呂につかっても「お腹を上にして足を、まっすぐ伸ばしていると、おかしいじ

やないの。お腹だけがね、島みたいに、お湯の上に浮かんでるの”というお喋りも、丸々と膨れた、あの蛙腹なら、さもあるうと、容易に頷けるのである。

桃子さんの今までの緊縛の裸身が生々しく印象的であるだけに、大きく膨れた便々たる小山の腹を突きだし、世の全ての妊婦マニアを悩殺せんばかりに、腰まで垂れた黒髪の魅力的で豊満な妊婦ヌードをみせられると、妖しい胸の高鳴りを覚えずにはおれない。

特に桃子さんは、自分でもいつているように男のサド心理を十二分に理解しつつ、女のマゾ性に身を任せて、男の心を妖しくも悩ましく馳りたてる、心憎いまでに計算された演技があり、妊娠したお腹に触るだけで感激する人もいるっていうの？ そんな人に可愛がって貰ったら本望だわ”とは、泣かせる。その上に、伊藤晴雨の吊りから、妊婦の切腹、浣腸にまで話が及び、私のように妊婦の切腹には、とび切り興味をもつ男性にとって、私もちね、この妊娠した大きなお腹を切ってみたという気がするときがあるの”といわれると、ゾクゾクと全身に興奮の痙攣が走る思いである。

その魅力的な妊婦が、大きな丸々と充実した妊娠腹を晒して、全裸の姿での開股や、立った姿を、正面から横から充分に観賞させてくれている。

とくに一一八頁、一二〇頁の横からの写真は、今は、こうして膨らみが上の方にあるでしょう。この膨らみが、だんだん下の方へ下がってきたら産み月に近いわけよ”と自らの経験に照らして妊婦の腹の変化を語ってくれているが、これなど増田みゆきさんの双胎妊娠腹の八カ月と臨月の膨らみの変化で確認したことを、直接、妊婦自身の口から証明されたマニアにとっては興味ある発言であり、八カ月の、その妊娠腹の膨らみ方を、しげしげと観賞しなおしたものである。

何度みても、丸々と膨れた妊婦の妊娠腹は女性それぞれに膨らみ方、大きさに変化があり、妖しい魅力に我れを忘れさせられる魅力がある。

○

同じ号で東京都の大原茂氏が、私が先に記した「妊娠腹観賞会」の記事を読んで以来、妊婦に憧れ、美化する性癖に浸ってしまったと読者通信欄で述べておられたことを喜び、奇クサロンで、増田さんの懐かしい双胎妊娠腹の偉大なフォートと、大原女氏のみゆき夫人を恋ゆる文に同志を見出し、手に入れたいと思いつつも入手不可能に終わった阪東夫人の美しい妊婦裸像の、緊縛によって強調された妊娠腹——この妊婦の腹の丸い膨みの線の美しさに、絶対美とでもいう魅力が感じられる——の得もいわれぬ美しさに、惚ればれと

させられたものである。

同月号に、三人の妊婦のヌードフォートが同時に掲載されたのは初めてであり、妊婦オンパレードと歓んだものである。

(三)

桃子さんは、妊婦の羞恥責めが「花と蛇」には登場しなかったけれども、現実私に私の身体で試してみないことか？”といい「私、こんな責めを受けてみたかったんで、わざわざ妊娠したのかもしれないわね……プレイのため、わざわざ妊娠するって素晴らしいじゃないの……凄く羞恥責めを受けてみたいワ。浣腸の……面白いわね」と妊娠したフットボールのような腹を突き出して、その丸々と膨れた動物的な生臭い官能を感じさせる自分の蛙腹に興味をもち、欲び、その異様な肉体を責められるのを愉しむマゾの境地に耽り、徹底した羞恥責めを求めている。

彼女は、浣腸に随分と興味を持っているようである。「お腹の中のを、すっかり出してしまいうっていいの。浣腸で強制的に出されるだけに凄く興味を持てるのよ。……浣腸液を入られるのは快感だわ」と。

先の「浣腸って、素敵ネ！」でも桃子さんは「まるでタンクみたいネ、私のお腹。どんどん入ってゆくみたい。……あーあ、大分、お腹が張ってきましたわ。お腹が破れるくら

い、入れてほしいわ……まるいお腹。まるで妊娠してるみたいでしょ”と、大量に液が注入され、腹が丸々と膨らんでくるのを結構、愉しんでおり、その上、その大きく変化して妊娠したように膨れた腹の圧迫感と変化を愉しんでいる。

この桃子さんの、一種の妊娠腹——蛙腹愛好のナルシズムが、本当に妊娠したことによって強烈な歓びを感じ、この機会を徹底的に利用して責められたという気持ちが強く感じられる。

○

桃子さんは、お茶碗を置いていたお膳の上に丸々としたお腹を突きだし、素肌の豊満な尻をデソとのせ、両足を一八〇度に開股させられている。そのお腹は坐っているため上下から圧迫されて、より大きくボールのような腹を突き出し、妊娠した牝の動物的な、しかし甘い生臭さと、豊満な成熟した女体の体臭すらも感じさせる生々しい姿態をマニアの前に展開している。

彼女は、お喋りに夢中になっているうちに食卓の上での、妊婦の料理は終わったわね。テーブルの上、濡れたタオルで、よく拭いておかないと、大分、汚してしまったかもよ”と暗示的な言葉であるが、あの姿勢ではお尻が冷えるのと、膀胱が腹部に圧迫されることによって、マニアから愛される多量の女性ホル

ルモンを含んだ神水が、細い糸庵となって食卓に流れたであろうことは想像できる。

これは桃子さんにしては、もったいないことをしたものであると思う。やはり、ここでは、跪いた男が仰向けに寝た男の顔の上に、湯気の上がる神水を注ぎ掛けてやるというのでなければ、桃子さんらしくなろう。

しかし、あれほど見事な羞恥の姿態に耐え生贄的マゾ女性として割り切ってみせる彼女のことであれば、恐らく、その細く奔流する神水も、はっきりとカメラに収めさせたことであろうと想像される。それを、どんな顔で羞恥に耐えていたのだろうか。恍惚とした歓喜の表情が、うかぶのである。

○

桃子さんは、小山のような腹を、そびえさせて食卓の上に横たえられただろう。

食卓の上の妊婦というと、マニアとして、やはり思い浮かぶのは、”妊婦の腹裂き”であり、姐の上で食べられるのを待つ、”食用に供される女”のことである。

サドの「悪徳の栄え」には、人肉しか食しない男が、後宮に数百人の女を收容しており彼女らの肉が十分、香りがかって柔らかになった時を見はからって食膳に供するという話が記されている。

また最近では、マリオ・メルシェの「タブーII ジャンヌの日記II」にも、食用となる女

を飼育して、肉が豊かに美味しくなった時、食卓に上らせる状景が描かれている。

女体を食卓に横たえるということは、それ自体が非常に異様な光景であり、豊満な弾力を秘めた裸身の官能美が、その肌を痛めつけたいという嗜虐性を起こさせる要素をもっている。白い柔肌を切り裂き、厚い皮下脂肪を切り筋肉の下にある内臓をあばきだしたいという夢は、神聖なもの、美しいものを犯したいという心理と共通する。そうして、可愛い、喰べてしまいたい位に可愛い女の肉体に対する、異常な具体化の現われであろう。

妊婦の腹切り願望は、その前段階での停止であり、神秘的肉体に対する好奇心の発現であろう。

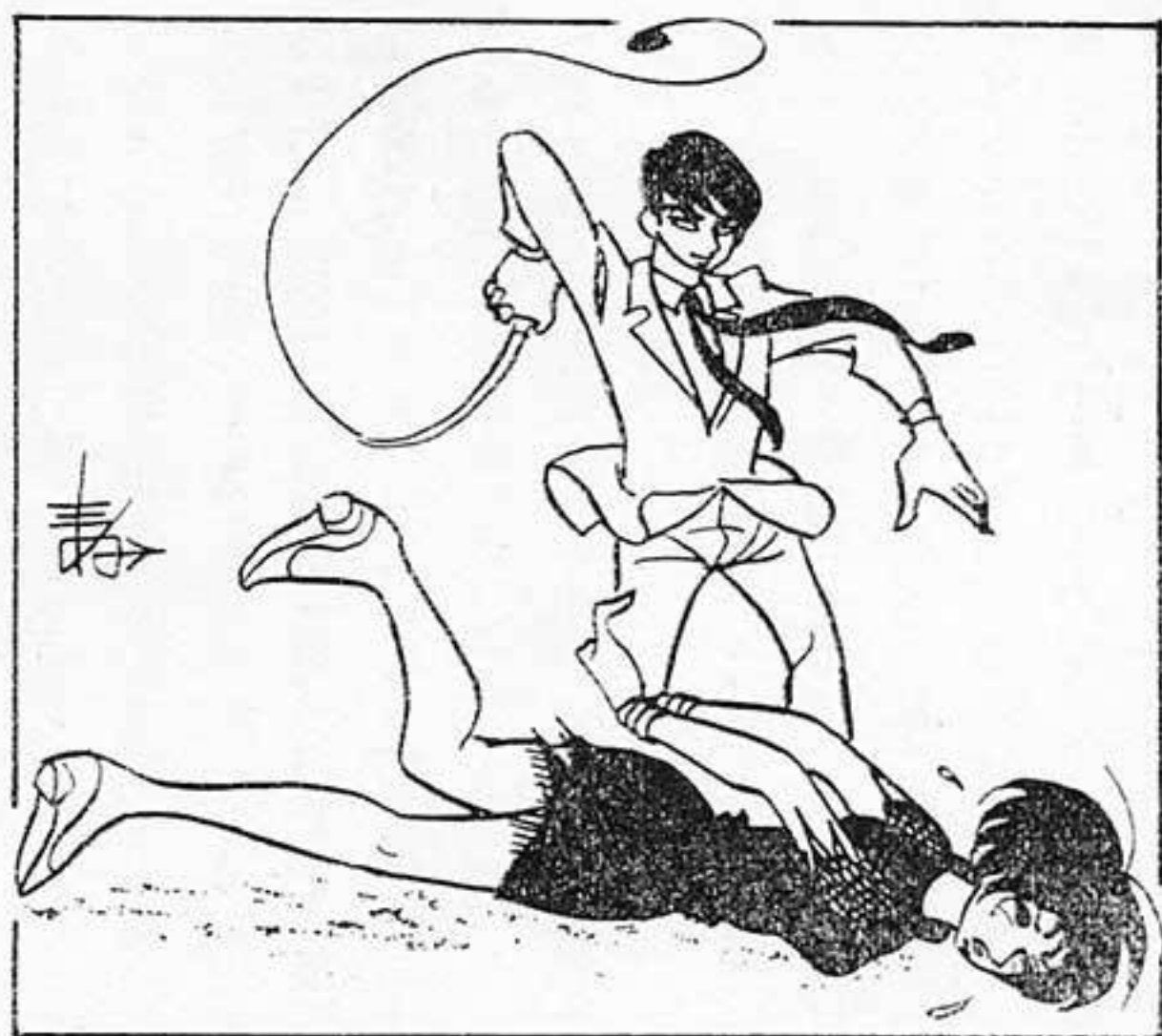
それだけに、マゾ的な女性桃子さんが、食卓の上に横臥り、縄で固定されて、妊娠した小山の腹をザックリと真二つに裂かれ、その上、柔らかい肉や内臓を銀の皿にとられることを願望し、想像しながら妖しい興奮に身を悶えるところがなかったのは、マニアとして物足りない。

姐の上で男性の手によって白い小山の腹を裂かれるのではなく、自らの手で妊娠腹を、かき切る切腹が好きだということだが、羞恥と屈辱的ポーズに耐え、男性の前に生贄的マゾ女性の本領を示した彼女には、やはり腹裂きに耐えて貰いたいものである。

孤独者の告白

恥かしき愛

責苦与之助



カット・あらいかず

私は今、孤独です。もちろん、恋人もありません。別れたのです。

私が性に（それが果たして性と呼べるものであれば）興味を抱いたのは小学一年生前後の頃だったと思います。殆どの人が経験されただろうと思う「お医者さんゴッコ」から始まった「性の遍歴」は、私の「苦しみの遍歴」といえるようです。

早熟であったことは間違いないと思います。が、小学校時代の形なき「欲望」は、六年生の時に具体化したのです。近くの公園に掛かった興行物の絵看板に若い女性が縛られて責められている図を発見し、早鐘のように打つ胸の高鳴りの中で、捜しものを見出したよう

な気になったものでした。その時のショックと感激は今でも、はっきり覚えているような気がします。が、どのように表現したらよいのか私には分かりません。そのセイかどうか、自慰を覚えたのも確か、その頃でした。

それ以後の、私の性に対する感受性と好奇心とは年と共にふくれ上がり、中学、高校、大学と進みながら、その性に関する目標は、程度の差こそあれ「縛られた女」「鞭打たれる美女」のイメージを抱いて、ドウドウ巡りを繰り返すことになったのでした。

勿論、年令に応じてその解釈に差を生じ、「愛」を基調とする考え方が優先するようにはなったのですが、私の場合、愛と苦しみとは密接な関係を持った観念として理解しておりました。「愛」とは、確かに素晴らしく、魅惑に満ちたものです。しかし、ただ単に甘いものという考えかたには賛成できないのです。私見によれば、それは、愛の一面でしかない、という気がします。

愛の苦しさ……特に内面的な……は経験した人々なら知っているはず。愛は戦いだと思えます。相手から何かを強引に奪うものなのではないでしょうか。相手を叩きながら訴える愛があってもいいのでは……。きっと

私は好きな相手ほど泣きながら責めると思いますが。自分の愛の確かさを示すために……。

むっつり助平な私ではありませんが、助平な人間ほど、ある意味で想像力がたくましいといっているのではないかと思うのです。反面私は考えています。助平になり切るためには想像力がなければ本物ではない……と。

こうして内面の性向との戦いに明け暮れたといつてよい私でしたが、二十五才の時、意を決して結婚したのです。そして、私の抱いていた夢の実現に努力したのですが、結果は失敗に終わりました。何とか私の性向を理解してもらおうと思ったのが間違いで、妻は、私がその一助とすべく、差し出した雑誌を読む事すら、泣いて拒否したのです。そして一年後には離婚にまで行ったのです。離婚すると私は、自分のからに一層、とじこもってしまったのです。

離婚してしばらくすると異性の友達が出来ました。感受性豊かですべてに多感な彼女は私について来てくれる理解者と思えました。××さんから麗子と呼び捨てにするまで、さほど時間は、かかりませんでした。

西浦温泉に二人きりで出掛けた時、私は初めて麗子のむき出しの双丘を平手でたたきま

した。最初は、おそろおそろ「パシッ！パシッ！」と。それから一段と力をこめて「ビシッ！ビシッ！」と。

「アッ！アッ！」

麗子は一生懸命、耐えておりました。私は覚え涙ぐんでいました。ついにやったという感激でした。ほの暗い明りの中に浮かぶ、むっちりとした白い肌の、なんときれいだったことでしょう。

私は彼女が泣いて許しを乞う事を期待していたのかも知れません。泣け。もっと、泣け……心の中で叫びながら、叩いていました。でも彼女は、ついに最後まで泣きませんでした。白い無垢の肌は平手によって色づいてしまったのです。私は次に、何か宝石でも扱うように、やさしくソフトに急変した事をおぼえております。何も知らなかった麗子は、この時に私の性向を読み取ったと、ずっと後で話しました。

それから三カ月以上もたった時、「貴方がお望みなら、ベルトを使ってもいいわよ」

と、彼女から言い出してくれました。

私は、内心の喜びを、隠し切れませんでした。この時ほど麗子を、いとしく思った事も

ありません。私の性向を、とことんまで理解して、愛を示してくれるその気持が、とても嬉しかったのです。

「よし！うつぶせになれ」

私は命令し、彼女は従う。彼女はその一糸まともぬ身体をベッドに横たえ、私の鞭を待っている。ズボンのベルトを抜き取ると、その、いとしい白い背中に、斜めに一撃を加える。……私の心は幸福感で、満ち溢れていた一瞬でした。

「ビシッ！」

「アッ！」

彼女は一瞬、ビクッと背をちぢめて苦痛を耐えた様子です。自分では、かなり手加減したつもりでしたが、その鞭音の大きさにヒヤリとしました。でも、もう止められません。

「ビシッ！」

白い肌がくねり、麗子はシーツの端をつかむ。

「ウッ！ウー」

「痛かったら泣いても、いいのだよ。大声で叫んでも……さあ、行くぞー！」

私は更にベルトを振り上げて、その柔肌へたたきつける。

「ビシッ！ビシッ！ビシッ！」

彼女は、その苦痛に齒をくいしばって耐えているようでした。たちまち、背中全体が赤く染まってしまいました。

「泣けばいい。思い切り泣けば痛みも薄れるのだ」そう心で叫びながら、私はなおも、ベルトを振り続けたのでした。自分の下半身にすべての血液が集まってくるのが、痛いほど分かっていました。

「ビシッ！ ビシッ！」

「アッ！ イ……アッ！ クッ！ ……」

ベルトの音と同時に彼女の双丘はキニューツと力が入り筋肉が、縮まる。

彼女は「アッ！」の他には言葉を発しなかったのですが、背中から双丘が鞭打ちのため、に赤く染まり上がった時、ついに失神状態に陥ってしまいました。吐く息さえ、おぼつかなくなつたのでした。ビクビクした私は、あわててベルトを投げると、陶醉感も、ふつとんで必死に彼女の頬を、たたいて気付かす努力をしなければなりませんでした。

私の、それこそ仰天ともいえる慌てぶりにも拘らず、気付いた彼女はケロリとした表情をしていました。失神するまでのベルト打ちに恨みごとの一言も口にしないのです。一旦は、ふきとんだ感激と陶醉が急激に戻ってき

て、私を涙ぐませました。私は思わず彼女を抱きしめていました、しっかりと……。

会うたびに……というわけではありませんでしたが、それ以後も何度か、彼女は私の鞭打ちに応えてくれました。

最高の盛り上がりがあったのは、彼女から別れ話が持ち出された一週間ほど前だったと思います。あるいは、その日のプレイが、彼女に他の伴侶者を選ばせる結果を呼んだ？とも考えられなくはないのですが、私としてはそうではないと思いたいのです。

その時には、悲鳴を封じるためのさるぐつわをし、ベルトの鞭で失神まで叩きのめした後、そのベルトと浴衣の腰紐とでT字帯をさせて絞り上げたのでした。さぞ痛いだろうと思ひながら責める私の「愛」に、彼女は悶え、のけぞりながら応じてくれたのです。

勿論、その時には私は心の底から酔い痴れ文字通り桃源境に魂を浮遊させる幸福感に溺れきっていたのですが、後で冷静に考えてみた時、彼女は決して被虐を喜んでいたのではなかったことに気付いたのです。

彼女にM性がなかったとは考えられません。鞭打ちを好んでいたとも、いい切れないのです。そのことは、別れ話が持ち出された

時に、はっきりと云われました。私が鞭打つことを喜ぶから……。ただそれだけの理由で私の鞭を耐えていた……と。

私は決して強要したつもりはありません。会えば必ず鞭打つという状態でもなかったのです。彼女が、よいという日だけに限って、意志は尊重していたつもりですのに……。

ともかく彼女とは「お互いに、うしろを振り向かないで別れよう」といって、右と左に歩かなければならなくなりました。私は、泣けて泣けて仕方のない気持を抑えて歩きまわった。結婚するという彼女には、もう再び逢ってはいけないのだと、自分にいい聞かせながら……。

あれから、早くも一年有余が経っています。私の変形した性への傾斜は一向に改まらず、願望は募るのみです。現在、三十才の春を迎えたにも拘らず、経済的にも精神的にも全くどん底に居るのですが、愛の優しさと荒々しさ、喜びと苦しみ、美しさと醜さ……という人間感情の矛盾の中に、どっぴりと漬りきってそれを直視して行きたいと思っています。ただ現実には、人恋しさに悶々としながら、貴誌をひもとく以外には、どうしようもない状態なのですが。

(おわり)

カット・春川ナミオ



店にただよう香氣

台風が去ったあとのような、静寂な空虚が狭い店の中を包んだ。

なおみは、ようやく私の方に向いて、「すみませんわね。とんだとこ、お目にかけてちゃって」

「いや、とんでもない。珍しいシヨウを見せてもらったよ」

「イヤよ、先生。からかっちゃ」

「いや、ほんとだよ。百軒店時代の腕前を見せてもらったよ」

「だって、ああでもしなきゃ、あいつは図々しくて、いつまでも動きやしないのよ。もう昔と違って、あんなことは、したくないんですけどねえ」

目をつり上げて道雄を罵り、顔へ小便を、ぶっつけた時の勢いは消えていた。

「お酒、召し上がりますか？」

「ああ、飲みたいな。だけど、まだいいのかい？」

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

— な お み の 巻 — (2) —

鬼 山 絢 策

十二時半だった。

「いいんですよ。この頃は、やかましくありません。すみません。そのスイッチ、切って下さい」

馬場氏が、店の外のあかりを消した。

「何か、くさいわねえ」

酒の香りを含んだ、場違いな臭気が立ちこめている。

バーのトイレで嗅ぐににおいで、普通は鼻もちならぬものだが、これも、なおみの身体から出たものだと思えば、好ましいににおいであ

る。

なおみは、ハンドバッグから香水のびんをとり出して、土間へ撒いた。

「ほんとに、すみません。あたし、怒っちゃうと、まわりの人が目に入らなくなっちゃうんですよ」

「イヤ、ほんととは、ぼくはこの香りが好きなんですすよ」

馬場氏が、勇気を出したような調子で発言した。

「あら、パパ。こんな、においが好きなの。エッチねえ」

なおみは爛をした酒を、私や馬場氏に、お酌した。

「このお酒は、ほんものだろうねえ」

「バカ、イヤねえ。フッフフ。ほんものの証拠に、あたしも頂くわ」

なおみも盃を出して、手酌で注いだ。

「ぼくは、さっきのようなお酒のほうを飲みたいな」

馬場氏も酒が入っているので、思ったことがズバズバ言えた。

「あら、あんなのが飲みたいの？ 飲みたけりゃ今度飲ましてあげましょうか。安上がりでいいわ」

「でも、ぼくはタダでは飲みませんよ。普通のお酒より、高く払います」

「そりゃあ、あたりまえよ。あたしの身体の中を通った、ごく上等のお酒ですもの。アッハハハ」

馬場氏は、私にチラリと目を向けた。

「やはりあの道雄って奴も、少しマゾなのですかね」

「そうじゃないでしょう」

「でも、よく我慢しましたね。ぼくは、暴れ出すんじゃないかと思って、ひやひやしましたよ」

「ママから二千元、借りたかったからでしょう」

なおみが口を挟む。

「乱暴なんか、させないわよ。そんなことしたら、今度こそ半殺しの目に、あわしてやるもん」

「すげえな。でもさ、ママに、そんな腕力あるの？」

「だって、向こうは得物は何も持ってないでしょ。あたしの方にはビールびんもあるしさこれでもって頭へ一発ぶっくらわしてやることもできるし、イザとなれば、ホラ」

スタンドの下からのぞかせるように、出刃

包丁をチラリと見せて、

「こういうものだって、ちゃんとあるんですからね」

「恐い恐い。それだけ強いママさんだけど、ちょっと抜けたところもあるね」

「うん、あたし強がってはいても、やっぱり女ですからね。根は弱いよ」

「いや、そうじゃなくて間抜けなアマイところがあるというのさ」

「どういうところ？」

「あの道雄という馬鹿野郎を、あれだけやつつけておきながら、結局二千元、取られていんじゃないか」

「だって面倒くさいもの。あんな調子で、いつまでもウジウジとねばられたんじゃ、あなたがた、お二人にも目ざわりでしょ。だから追っ払ったのよ」

「しかし四万六千元も踏み倒された上に二千元くれてやると言うのは、いわゆる盗っ人に追い銭じゃないのかい」

「うん、フッフ」

「金を払わないから、あれだけの目にあわせてやったんだろう。だのに結局は、また金をまき上げられてる。それじゃ、百軒店のお姐さんの負けじゃないのかい」

「フフフ。じゃ、ほんとのことを言いましょ
うか。あの晩、有線放送の専務をやってる鈴
木さんに来てもらって、道雄のことを打ち明
けたのよ。そしたら、あいつの給料から半分
宛、二回にわたって払わせることにハナシが
ついたのよ。明日、給料日だから、半分取っ
てきてやるわ。あの馬鹿、半分に天引きされ
た給料を見て、泣きべそをかくでしょうよ。
アハハハ」

「なるほど、そういう仕掛けに、なってたの
か。さすがに抜け目はないな」

「こっちにゃ、ちゃんと何日に、いくら飲ん
だか、ツケが、きちんとできてるんですから
ね。それを専務さんに見せたのよ。そしたら
“もう二度と店に入れないようにしてくれ。
これ以上の責任は持てないけど、今度だけは
私が責任を持つ”と、言ってくれたのよ。あ
いつ、給料は半分だわ。専務には、しこたま
油を絞られるわ。あした、あいつの泣きっ面
を見てやりたいわ。アハハハ」

なおみは得意そうに笑った。ふだんは二十
四、五にしか見えないが、そういうときの、
なおみは三十以上に見えた。だが、渥美マリ
のような、まんまるい顔に、金の話をする時
は何とも言えぬ妖艶さが、ただよう不思議な

女だった。

「明日、二万五千円、来月にまた取れるから
二千元、貸してやったのよ」

女と男の決闘

翌日、ほかに用事もあったので、また馬場
氏と会った。

「昨夜は、ほんとによかった。めったにお目
にかかれない面白いものが見られましたね。
鬼山さんは、道雄とかいう奴はマゾじゃない
って言いましたが、ぼくはやはり多少、Mの
気があると見ましたよ」

「ウーン、我々の見ている前で、あれだけ羞
かしめられて、それを堪えるということは、
常人じゃ、できないかな」

「そうですとも。いくら金を借りるためと言
っても、限度がありますよ」

「私は、かつてはママと道雄は肉体関係があ
ると見ているんですがね。そのセックスの中
で、ああいう目にママがあわしているんじゃ
ないかと、想像したんですよ。それに、あな
たのことをMだと話してあるでしょう。私は
私で、百軒店の暴力バー時代の荒っぽさが見
たいと言っている。だから、あれは私達にサ

ービスの意味でやったのかもしれないよ」

「そうですかね。あんなにケチヨンケチヨン
にやつつけて、あれで、もとは関係があった
のでしょうかね」

「それを道雄が、ぶちまけようとしたから、
今度は本当に怒ったのじゃないですか」

「なるほど。しかし、あの女は素晴らしい。
脈がありますね」

「金に関心が強いから、やりいい面もありま
すね」

なおみの、うわさをしているうちに何とな
く、またプペに行きたくなった。水を向ける
と、馬場氏は一も二もなく賛成して、渋谷の
宮益坂にある小料理屋で下地をつくってから
プペの扉を押した。

今夜は、例の神風タクシーの松ちゃんが来
ていた。

「このへん、昔は物騒だったんですよ。音
に聞こえた百軒店の暴力何とかという……」

「いや、ここは恋文横丁というんですよ。百
軒店の暴力バーがあった所は、この上を、も
う少し上がったところですよ」

「そうよ。ここは、恋文横丁ですよ。イヤね
え。来るそうそう、暴力バーの話なんか、持
ち出して」

なおみは、笑いながら酒をついだ。

「暴力バーは何も百軒店に限ったことはないですよ。あの頃は宇田川町にも凄いのがありましたよ」

「ぼくは、あの頃は百軒店や宇田川町は恐くて入れなかった。もっぱら呑んべえ横丁。ホラ東横の、まん向かいの川沿いの横丁。あすこか、宮益坂で飲んでましたよ」

馬場氏は渋谷に詳しかった。

「ああ、あのへんなら、安心ですね。でも、いまはもう、どこでも安心ですよ。高い安いはあっても、法外なことにはねえね。まあ、現代の暴力バーと言やあ、銀座だな。ちよっと飲んでも何万と、取りやがる。暴力にあらざる暴力だよ」

「渋谷の暴力バーは知らないな。新宿二丁目の暴力バーには行ったことがあるけど。まあ知ってる顔に連れられて行ったから、私自身は被害は受けませんでしたけど。常連となりゃ案外、安いですよ」

私は水尾究氏に連れられて新宿の元赤線の暴力バーへ行ったことがある。その時のことを話した。

「もう、よしてよ。松ちゃんが来ると、そんな話ばかりするんだから。もっと上品な話題

ないの」

「上品って、どんなことだい。美智子さんが屁こいた話でも、すんのかい」

松ちゃんは、しゃべるだけしゃべって、出て行った。私も今夜は馬場氏を残して、なおみと二人だけのチャンスをつくってやりたいと思っていたので、勘定をすませた。

「私はひと足、先へ帰りますけど、あなたはゆっくり飲んで行って下さい」

もうカンバン近かった。慶応ボーイの若い連れも帰って、店は二人だけだった。

「どうだった？ 今日、有線放送へ行ってお金を取って来たの」

「もちろんよ。当たり前だわ。二万五千円。半分だけだね。来月、行って残りを綺麗にとってやるわ。そりゃね、勘定を溜めたっていいわよ。払う人は、ちゃんと半年に一ぺんでも払ってくれるわ。あいつは放つといったら永久に払わないもの。それでもいいわよ。払えないくせに、大きなツラしてるから癪にさわるのよ」

その時、ボタンと扉を開けて羽島道雄が現われた。

いま、うわさをしていたところだっただけに、なおみも私達もギョツとなった。

「ママ、ひでえじゃねえか！」

昨夜の、しょぼくれた道雄と違って今夜は殺気立っていた。

一瞬、タジタジとなった、なおみだったがすぐ立ち直った。

「何が、ひどいんだよ。お前なんか、来るなと言ったの、忘れたのかい」

「俺は毎月、盗っ人でもしなけりゃ、生活できねえよ。おい、その二人。今夜はママとちよっと話があるんだ。帰ってくれ」

道雄は私を睨んで凄味をきかせた。

「馬鹿野郎。何を言やがるんだい。この店はあたしが主人だよ。主人のあたしをさしおいで、大切なお客さまに対して、なんてことを吐かしやがるんだ。てめえこそ、出て行け」

「金を払やあ、俺だって客だろう」

「冗談じゃない。まだ半分、残ってるじゃないか。専務が怒ってたよ。あたしに申し訳ないと謝ったよ。全部、払うと言うのを、それじゃ、お前が可哀想だからと、あたしが二カ月払いにしてやったんだよ」

「ようし、じゃ、いま残り全部、払ってやる払や文句はねえだろう」

「ああ、払やあ、いままでのことは水に流してやる」

……イメージギャラリー……『おいしいかえ』……岡 たかし……



「そっちに文句はなくても、こっちに文句はあるんだぜ。なんでえ。ひとを殴ったり、変なもの飲ませやがったりしやがって。承知できねえぞ」

「文句はいいから、お金をお出し。残り二万

五千元。サ、お出し」

なおみは手を出した。道雄はポケットに手を入れてモゾモゾやっていたが、煙草を出して火をつけながら、

「なんでえ、ふたことめには金、金って。マ

マも汚くなったな。俺が、この三月の間、いくら使ったと思う。借金は四万だが、使ったなあ、十万以上、使ってるんだぜ。ママは、あの頃、何て言った。勘定なんか、いつでもいいわよ、って言ったじゃねえか。それを真に受けた俺を深味におとしこみやがって」

「いいから、いいから。サア、お金を、お出しなよ」

「俺とホテルへ泊まった時、何て言った。お金なんて、いいわよ。お金のない時は、いつでも飲みにいっちゃいって言ったじゃねえか」

「うるせえな。てめえ、金を出すと言ったんなら、早くお出しよ。えらそうな口きいても持ってねえんだろう」

「持ってるさ。だがママが、そんな態度じゃ払えねえな」

「何だい、何だい。結局は払わないんじゃないか。道雄。てめえという男は、そういう嘘つき野郎なんだ」

「払ったら、どうする」

「大きな口、きくない。払うのが当たり前なんだよ。うちへ来て下さるお客さんは、こちらさんだって、みんな即金で払って行って下さるんだよ。てめえだけだよ、乞食野郎は。」

口惜しかったら、金を出してみろ」

「なあ、ママ。あのホテルで言ったことは嘘なのかよ。俺が可愛いと、言ったじゃねえか。あの頃のやさしさは、みんな金のためだったのかい」

「話を、そらすんじゃないのよ。サア、払いなよ。払って当然の、お金なんだよ。サ、お出し。男なら、言ったことをチャンと実行してごらんよ」

なおみは、また、手を出した。道雄は、その手をパシッと払いのけると、

「畜生ッ、人をうまくたらしこみやがって。何もかも、みんな金のために、やってたんだな。この、ど淫売！」

傍にあったビールを逆手にとると、パシッとスタンドに叩きつけた。びんの底が割れてビールがスタンドに流れ、道雄のズボンを濡らした。

「何しやがる、この野郎！」

なおみも棚のビールをとって、パキーンと割った。双方で割れたビールびんを握って構えた。

怒れるなおみ

「何だ、この野郎ッ！」

手を出したのは、なおみの方だった。割れてギザギザになったガラスで道雄の胸を突き手を返して頭をポカリと殴った。

ここまで来ては傍観しているわけには行かない。馬場氏が立って、

「まあまあ、二人とも、そんなもの持ちっちゃ危いですよ」

羽島道雄の方から、ビールびんを持つ手をおさえようとした。道雄は野獣のように歯を剥き出してビールびんを振り上げた。嫉妬に狂った兇暴な目だった。だが、馬場氏は立ち上がると、かなり大男である。道雄より七センチ位、大きい。

「まあ、暴力は、よしなさい」

馬場氏は柔らかく、振り上げた道雄の手をおさえた。

「この野郎、お客さんに向かって何をするんだい」

なおみも、びんを捨てて、道雄の横っ面をパンパンパンと続けざまに殴った。

「まあまあ、ママも気を静めて——」

殴られて道雄は、びんを持つ手に力が入ったが、腕力では馬場氏の方が上だった。ピクピクと動いただけだった。そこをまた、なお

みが殴った。

「この野郎、この野郎ッ！」

道雄の額の横が少し切れて血がにじんでいた。さっき、なおみの、びんの破片で切ったのであろう。

「パパ、危いから構わないでいいわよ。やい道雄。このあたしに、指一本でも触れて見ろ脇田組の連中が飛んで来て、てめえは片輪にされちまうぞ。腕の一本位、へし折られてもいいのかい。もっとも、てめえみてえなヘナチョコ野郎、組の人を頼むまでもないやね。あたしが片輪にしてやるよ。このうす馬鹿野郎ッ」

ピシッピシッと又、殴った。

「パパ。手を放していいわよ。大丈夫だから退いててよ」

「ほんとに大丈夫ですか。でも、ママも静かにして下さいよ」

馬場氏の本心は、もっと、なおみが荒れる事を期待していたに違いないが、やはりそうは言えなかったのだろう。馬場氏は道雄の手から、びんをもぎ取り、スタンドの中へ投げ込んでから、席に戻った。

なおみは、又、かなり激しく道雄を殴りつけた。

「サ、道雄。やれるもんなら、手を出してみなよ。どうした、いくじなし野郎。これでもかッ！」

また、ピシピシ殴る。

「どうした、蛆虫野郎。この間抜け野郎ッ」道雄は殴られた顔をおさえて泣き出しそうに顔を歪めているが、手は出さなかった。なおみの見幕に圧されて手が出せなかったのだらう。

私は、この羽島道雄という男に興味をもった。

「一体この男は、マゾなのだろうか」

彼の心理状態についてである。なおみに殴られれば口惜しように睨み返すところは、M派ではない。ビールびんを叩き割って構えた時は、ほんとうに怒ったのである。

だが、結局は手も出ず、いまは、なおみの殴るのに委せている。

昨夜にしても、そうである。なおみに小便を飲まされた時、そのあと、又「飲め」と小便入りのコップをつきつけられた時、常人なら店を、とび出している筈である。

今夜だって手は出したいが、多勢に無勢とあきらめたのかもしれない。それなら出て行きそうなものだが、頬をおさえて殴られなが

らも出て行かない。その心理が私には解しかねるのである。

なおみの方も、目がすわっていた。

「どしたい。ええ、おい、やりなよ。てめえもやる気だったんだろ」

なおみはスタンドの上に、とび上がった。低い天井からブラ下がっている電燈の間に、天井に頭がつきそうに立ちはだかった、なおみは、凄い大女に見えた。

「サ、やるんなら相手になってやる。表へ出ろい」

いきなり足をあげて、道雄の頭を蹴った。した。長く、そして太い足だった。その拍子に白いパンティが見えた。

道雄は、すっかり戦意を失っていた。蹴られた頭をガクンとさせて、うわ目使いに、なおみの太股の、すれ合ったところをチラリと見上げただけだった。なおみはスカートを片手で捲くり上げ、足をあげて道雄の脳天を踏みつけた。

「どうした、この野郎、向かって来ないのかい」

「悪かったよ、ママ。もうおとなしくするか静かに飲もうじゃねえか」

「なんだと？ この野郎、一丁前のようなこ

と吐かすな」

頭へ乗せた足をグイと前へつき出すと、道雄の後頭部が、ドスンと音をたてて後の壁へぶつかった。

なおみは足を縮めたり伸ばしたりしてドスンドスンと二、三回、頭を壁へぶつけた。

「おい、ママ、だめだよ。埃が落ちるよ」

ライトの中を白い埃がパラパラと落ちてきて盃の中に入った。

「あら、ごめんなさい」

なおみは頭を足で、たぐり寄せて、両手でスタンドの上に捻じ伏せると、パツとその上に跨がり、大きな尻でドシンと、おさえつけてしまった。

「毎度、荒れちゃって、すみません。この野郎の面を見ると、ついムカムカして来ちゃって荒れちゃうのよ。ちょっと、すみません。手が、ふさがってるから、パパ、あんたお酒のお燗してくれない？ 中へ入って」

馬場氏は気軽に立ってスタンドの中へくぐって、一升ビンから酒を、やかんに入れ、ガスへかけた。

「お客さん使って悪いわね。手がふさがってるからね。イヤお尻がふさがってるのかな。フフフ」

「痛てえよ、ママ」

「馬鹿野郎、おとなしくケツの下に敷かれてろ、ゲジゲジ野郎。やい、てめえ、さっき何て言った。あたしのこと、ど淫売と吐かしたな。はばかりながら、あたしは金をもらって男と寝たことは一度もないんだよ。てめえと寝た時でも金を取ったか。そりゃ昔は、百軒店で暴れてた時にゃ男を裸にしたこともあるけど金で身体を売ったことは一度もないよ。それをよくも、ど淫売だなどと吐かしやがったな。この野郎ッ！」

「ウッ。痛てえ。首の骨が折れそうだ。どいてくれ、勘弁してくれ」

「フッフ、何を寝言、いってやがんだい。さっきの勢いは、どうしたんだい。有線のアンチャンといやあ、バーやスナックでチャホヤされるのに、つけ上がりやがって。てめえは方々で飲み倒して借金つくってていうじやないか。はばかりながら、このなおみお姐さんばかりは、そうは行かないんだよ。舐めんな、この野郎」

「ママ、もう勘忍してやれよ。ママの身体でモロに圧しつけられちゃ、ほんとに首が折れちまうぜ」

「フッフ、こんな細首のひとつや二つ、へし

折ってやらあ。あたしのケツで潰してやる」

「道雄君。ママに、ど淫売などと言った君の方が悪い。謝って許してもらいなさい」

どうも私は気が弱い。いつも体裁ぶって、世の中の常識に負けて、肚の中と違ったことを言ってしまうのである。

なおみはスツと立ち上がると頭へ足をかけて蹴とばした。道雄はズルズルと土間へ、くずおれるように転がった。なおみはスタンドの上で、あぐらをかいた。太い腿を丸出しのエロティックなポーズだった。

スタンドの中にいた馬場氏が、お燗のついた徳利を、やかんから抜き出して、コップに注ぐと、なおみに差し出した。そして私にも注ぎ、自分も飲んだ。

「やい、道雄。クソ虫野郎。足を拭け」

なおみは足のうらに少し血がついているのを見て、あぐらをほどいて、足をスタンドからヌーッと、つき出した。

血染めのパンティ

椅子につかまってヨロヨロと起き上がった

道雄は、

「水、水をくれ」

と苦しそうに言った。馬場氏がコップに水を注いでやると、ひと口、飲んだが、いきなりプーッと吐き出した。それが馬場氏の洋服にかかった。

「汚いな、君」

「何でえ、この水は！」

道雄は馬場氏に喰ってかかった。

「何だいて、水だよ。いま水道から出したばかりの水じゃないか」

道雄は口の中の味を確かめるようにしていたが、どうやら口の中が切れていて、自分の血と一緒に飲みこんだので変な味がしたのであろう。昨夜、変なものを飲まされてるから変に気を廻したのだ。残りの水を、うまそうに飲みほした。

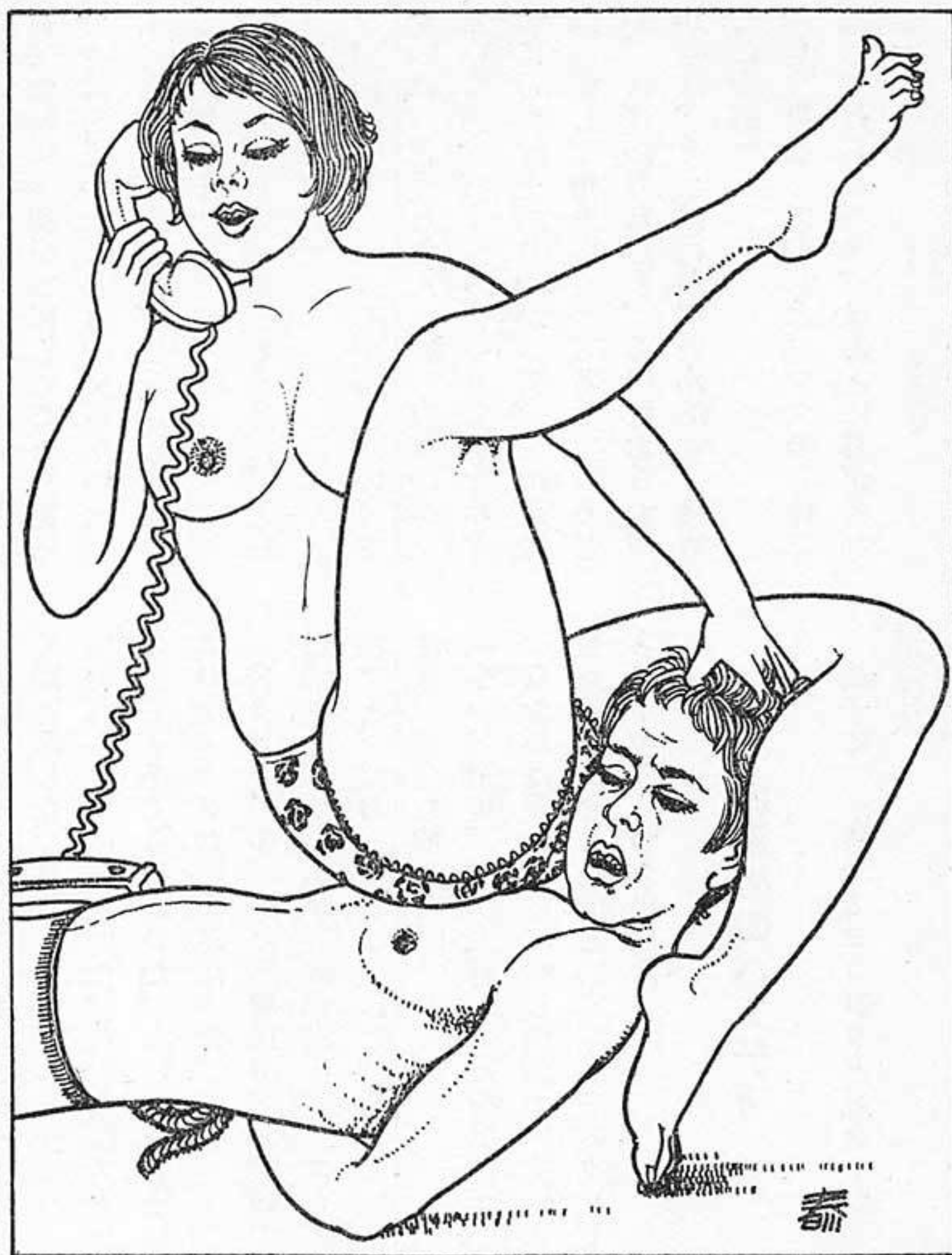
「もう一ぱい！」

とコップを、つき出す。

「おい、君。君は大体、礼儀を知らなすぎるぞ。人に水を吐きかけておきながら謝りもしないのか。昨夜だって、そうだぞ。君が吐き出したビール、あれが、ぼくの洋服に引っかけたんだぜ。人の迷惑を何とも思っていないのか、君は」

温厚な馬場氏だが、道雄の無礼には、さすがに腹を立てた。

ナミオ M 画 廊 『また後程にネ』 春 川 ナミオ



「あら、あのビールが、かかっちゃったの。ごめんなさいね。あら、あたし謝ること、ないんだね。この野郎が悪いんだ。やい。パパに謝れ。足を拭けって言ったのに、何ぐずぐずしてやがんだい」

なおみは道雄の着ている水色のポロシャツ

に足の裏を、こすりつけた。血は乾いてしま
って、とれなかった。
「見ろ。ぐずぐずしてるから乾いちゃったじ
やないか。おい、舐めろ！」
なおみは足の裏を道雄の口もとに、つき出
した。

何を言われても、道雄は下を向いて眠そう
な顔をしていた。戦意を全然、そう失してし
まった様子だった。

「てめえの汚ねえ血など、くっつけやがって
気持が悪くてしようがないよ。ホラ舐めろ」
口へ足の裏を押しつける。道雄は口を開け
て、ペロペロ舐めた。

「ああ、くすぐったい」

なおみは、すぐ足を離して、クルリと尻を
半回転すると馬場氏の方へ足を出して、

「そこにダスターがあるでしょ」

馬場氏は雑巾で、なおみの足を拭いて、血
を拭い去ると、今度は自分のハンケチを出し
て更に拭いた。

「洋服、汚れて悪かったわね」

「イヤ、いいんですよ。ママのあれだから、
かえって光栄です」

馬場氏はポツと顔をあかくしていた。いま
になって酔いが出てきたのかもしれない。

「おい、道雄。パパさんに謝れって言ったの
に、どうして謝らないんだい」

なおみは、また道雄を、いびり出した。な
おみの顔にはビールびんを逆手に握って身構
えた時のような激しい怒りは消えていたが、
その代り陰に竦った女性特有のサジスティッ

クな光が、ただよい、唇のあたりに微笑さえ浮かべるほど、ゆとりが出て来ていた。

「すまなかった——」

「バカヤロ、そんな謝り方があるかい。ちゃんと両手について謝れ。土下座して謝れ」

私は馬場氏と顔を見合わせて笑った。

「これから面白くなりそうですね」

という会話だった。馬場氏は冷蔵庫を開けて中を覗いた。なおみはチラと見て、

「う、なんか、どう？ 何でもいいわ、勝手に出して、食べて頂戴。あたし、そのひものが食べたいわ。焼いてくれない。こうなったら、あたしは、お客だよ。パパがマスター」

なおみはスタンドの上で両膝を立てて、その上に手をのせて頬杖をついていた。私の方から白いパンティが丸見えだが、さっきから気になっていることがある。白いパンティにしみが、にじんでいる。

「ママ、そのパンティにも血がついてるぜ。それは、どっちの血かな。ママの血か、道雄の血か、さっきから考えてるんだがね」

「あら、いやだ。もちろん、あたしの血じゃないわよ。此奴を、さっき、おさえつけた時ついたんだわ。いやねえ。この野郎のためにパンティまで汚されちゃった。ほんとに皆に

迷惑をかける野郎だよ。あたし、脱ぐわ」

なおみは、私を見てニッと笑った。

「ああ、パパ。そこに鍵があるから扉に鍵かけて表のあかり消してよ。そのスイッチよ」

道雄に帰れ帰れと言っておきながら、いまは帰さないつもりである。雲行きは、だいぶ変わってきた。

「いよいよ、百軒店時代の再現の様相を呈してきたね」

「フフフ、だっておのぞみだったんでしょ。」

まあ今夜は、ゆっくり飲みましょうよ。マスター、じゃんじゃん酒を、お燗しな」

スタンドの中に下りた、なおみは、

「ほら、マスター。パンティ、脱がして」

サツと両手でスカートを、まくる。馬場氏は突然の命令にハッと緊張した。大きな身体を狭いスタンドの中で折り曲げて、なおみの前に跪いて、パンティに手をかけた。

「いいんですか」

「なに言ってるのよ。早くしなさいよ」

馬場氏は勇気を出してパンティを引き下げた。「あたし、毛深いのよ」と言っていたがなるほど、それは男を威圧するに十分なファクターを備えていた。

豊かな腰！ 逞しい太股が匂うばかりに輝

いている。しろい肌目の、こまかい肌色だった。

なおみは自分の肉体に絶対の自信を抱いているようだった。

この巨大にしてゴージャスな女体が前面におし出された時、馬場氏は完全に圧倒され、彼女の軍門にくだった。戦わずして既に勝利を知った女王は、貫録の微笑を口辺にただよわせて、ゆるやかに膝を交互にあげてパンティを足から抜き去った。

吸い寄せられるように、馬場氏は恐る恐るなおみの豊かな腰を抱き、唇をすれ合った太股に埋めた。

なおみは、それを待ち受けていたように、片足をあげて太腿を馬場氏の肩に、のせた。二本並んで立っていた巨大な二つの円柱が離れた時、それはラマ教の、神秘的奥の院へ参殿を許された信徒が、敬けんな心境で、おずおずと押進する心境で、馬場氏は周囲の目などは、すでに忘れていた。

泡ふき蟹

スタンドの中は外側より一寸、低くなっていた。だから、普通に腰かけていたのでは、

馬場氏の頭の上の方が、ちょっとだけしか見えない。

私も道雄も椅子から乗り出してスタンドの中を覗きこんでいた。殊に道雄はスタンドに手をかけて、中へ首を差しのべるようにして覗きこんだ。

「馬鹿野郎。見るんじゃないよッ」

なおみにどなられて、私は思わず首を、すくめた。だが、なおみは道雄に対して言っているのだった。

「助平野郎。てめえなんかに拝ませてやるもんか。ホラ、これでも、かぶってな」

手に持ったパンティを道雄の顔に、ぶっつけた。

「かぶれよ。てめえの血なんか、くっつけたパンティなんか、汚くて用はねえや。くれてやるから頭から、かぶれ。かぶるんだよ。かぶらないと承知しないよう」

なおみは、出刃庖丁をギラツと光らせて見せた。道雄は、あわててパンティを払って頭から、かぶった。

「フッフ、何だか映画に出てくる覆面ギャングみたいね」

なおみは私の方に話しかけてきた。私は再び身体を乗り出して覗きこんだ。

馬場氏と、なおみとは、どうやら齒車がピッタリ合ったようである。なおみは、ゆるやかに腰を動かしていた。その余裕のある動きは、キャリアの豊富さを語っていた。

スカートが上から、かぶせられているので中の様子を如実に見ることは出来なかったが腰を抱える馬場氏の片腕は力が入って、柔らかな、なおみの腿に喰いこんでいるし、片方の腕は、持ち上げられた太腿の下から手を回して肩にかつぐようにして抱えていた。

「好きね、このひと——」

なおみは笑いながら、あごで、うずくまる馬場氏を指した。

「うまいだろう」

「フッフ」

なおみは身をよじってスタンドに、ひじをつき、コップの酒を飲んだ。

「扉に鍵をかけて、こういうことをすると、昔を思い出すだろう」

「きゅうくつよ。この店は、ちっちゃいからね。あたしは、こんなこと、あまりやらなかったのよ。なおみって子が好きでね。その子は、よくやったわ。あら、こんがらかったわね。その頃は、あたしは、かつ子って言うてたのよ。お店をやめてから名前を、と

りかえっこしたのよ。そのこと知ってるの、松ちゃんだけよ」

なおみは、時々目を細めて、しびれるような顔をした。きわめて事務的にやっтерようだが、やはり、そこは女性で、ピリッと、くるのであろう。

私は、すぐカメラのことを考えた。だが、ここでは、たとえカメラがあっても狭すぎて画にならない。

なおみは「チョット」と、手まねきした。

私はスタンドへ、グーツと乗り出して顔を近づけると、なおみは私の耳に口をつけて、

「今晚、どこかへ連れてって」

と、ささやいた。私は困った。誘ってくれたのは嬉しいが、それには今夜は酒を飲みすぎている。何と言って断ろうかと考えたがなまじ体裁をつくろうより、ザックバランにほんとのことを言った方がいいと思った。

「ダメなんだよ。私は飲みすぎると、うまく行かねえんだよ」

「フッフ、年ね。いやんなっちゃうね」

なおみは、私の首に腕を巻いてキスしてきた。

「今日はキスの大サービスだね」

「フッフ、バカね」

左腕で私の首を抱え、右手でスカートを、ちよつと捲くって見せた。

あたりが明るくなったので、馬場氏は身体を起こした。

「フッフ、くたびれた？」

私は馬場氏を見まいとして首を、すくめようとしたが、なおみが抱えこんだ腕を離さなかった。イヤでも上と下で馬場氏と目が合ってしまった。

「あんた方、よそでも、こんなことして遊んでるの？」

なおみも片足で立っていたので、くたびれたのだろう。足を下ろした。

「イヤ、とんでもない。はじめてだよ。おどろいてるんだ」

「ふん、うまいこと言って」

馬場氏の口のまわりは、ビールを飲んだ時のように、泡だらけになっていた。

「ふふふ、蟹みたい。アハハハ」

馬場がスタンドの中から立って、なおみと並ぶと道雄は、かぶっていたパンティをサツと、とった。

「用心した方が、いいぜ。その女と深みに入ると、あおやぎにされちまうぜ」

と馬場氏に向かって言った。

「馬鹿野郎、何言ってやがんだい。三下のてめえなんかの知ることかよ」

なおみは、いきなり道雄の横っ面をひっぱたいた。

「あたしって、すぐ手が出るのよ」

私に向かって言う。

「手も足も、よく出るよ」

「道雄！ てめえって野郎は、ほんとにイヤな野郎だね。まったく、ツラ見るだけで虫ずが走るよ」

「金を持ってこねえからだろ」

「バカやろ。金ばかりじゃないよ。てめえのすること、なすこと、何から何までバカでキ

ザで、ずるくて小悪党で、意気地なしで、カ

ンにさわるのさ。だから、てめえのツラを見ると、つい張り倒してやりたくなっちゃうんだよ」

「ひでえもんだな。かつては可愛いと抱いてくれたこともあったのによ」

「あの頃、あたしは気が狂ってたのさ」

「もしも俺が十万円、持ってたなら、どうする？」

「フン、タラとシヤケは北海道だよ。花のお

江戸じゃ通用しないんだよ。てめえの話はいつも嘘っぱばかりなんだから」

「ねえ、旦那。どうやら、この四人で気が合

ったようだから、これから、ちょいちょい、こうして四人で遊びませんか」

全くこの男は、変な男だ。いままでも私に敵

意を抱いていたと思ったら、今度は急に妥協してきた。だが、すぐ肚の内が見えるようなことを言う点が、確かに、りこうではない。

私は黙っていたが、なおみが承知しない。

「馬鹿野郎ッ。てめえ、あたしにたかるばかりか、お客さんにも、たかろうってのか」

「何も、たかろうってんじゃねえよ。五分の

つきあいで行こうってんだ」

「きいた風なこと言うな。文無し野郎。そう

天星社刊 〆限定版グラビア写真集〰 在庫案内

M写真集『女王様に飼育される日々』 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生感のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。

いうこと言うからぶん殴りたくなるんだよ」

なおみはスタンドからサッと手をのばすと道雄の髪を引っ掴んで、テーブルへ顔を押しつけた。

「痛てッ。おい、やめてくれ」

おさえつけておいて、なおみはサッとテーブルの上に、とび上がった。道雄は猫が、お仕置きをうけるように今度は、おとなしくしていた。

髪の毛をつかんでおいて、なおみは道雄の顔へ跨がった。

「いいか、迷惑かけるなら、あたしだけにしておおき。お客さんにまで持ちかけたら承知しないよ。いいか、この野郎」

横顔がベツタリとテーブルに押しつけられて、その上から六十キロの尻の肉圧を加えられるのだから、これは痛い。

「痛てえ、痛てえ。分かったよ、ママ」

馬場氏の顔が見る見る緊張した。この人は緊張すると怒ったような恐い顔になる。

彼はスタンドの中におり、なおみと真正面から向かいあっているのだからモロに見られる。私の方は、なおみの斜め後ろから見ているので、なおみの白い太股が膝と重なり合っていて、相撲の仕切りを見ているようなとこだけ

しか見えない。

「この野郎。分かった、分かったと言うそばから、あたしに向かって反抗しやがる。こん畜生ッ。ほんとにイヤな野郎だよッ」

「痛てえ、痛てえ。もう勘弁してくれ」

だが、私は面白いことを発見した。

道雄である。道雄の左手はテーブルの上でなおみの膝におさえつけられているが、右手は自由になっている。その右手が、己が股間へはしっているのを見たからだだった。

「やはり、この男もMだったのか」

苦痛と屈辱を受けながら、秘かにそれをエソジョイしている秘密の面を覗き見たのである。

「痛てえ。おい、ほんとに痛てえよ。首が折れちゃう。痛てーッ！」

道雄の声がワンオクターブ上がって泣き声になった。

「ギャアギャア、吠えやがって、うるせえ犬だ。もう、あたしに対して反抗しないか」

「しない、しない」

「じゃ、なおみさま。お許し下さいと言え」

「なおみさま、お許し下さい」

「これから何でも言うこと、ききますから勘弁して下さい、と言え」

「何でも言うこと、ききます」

「なおみさま、と言うんだよ。続けて三べん言え！」

「なおみさま、なおみさま、なおみ……ああ痛てえ。なおみさまあ。やめて下さい」

「フフフ。よし、そいじゃ痛い目に合うすのは、これ位で勘弁してやる」

なおみはサッと腰を浮かし、クルリと、こちら向きになった。

「おお、痛てえ。ひでえな、ママ」

道雄は起き上がって首を、さすった。

「ふふふ。ちっとは、こたえたかい。二万五千円も借金が残ってるんだぞ」

「えッ？ 違う。あと二万一千円だろ」

「バカ。昨夜二千元、貸してやったの、忘れたか」

「じゃ、二万三千元じゃねえか」

「今夜の分が二千元、あるよ」

「今夜は、そんなに飲んじゃ、いねえぜ」

「うるせえ、つべこべ言うな。これから、その分だけ、いいものを飲ましてやるよ。フフ」

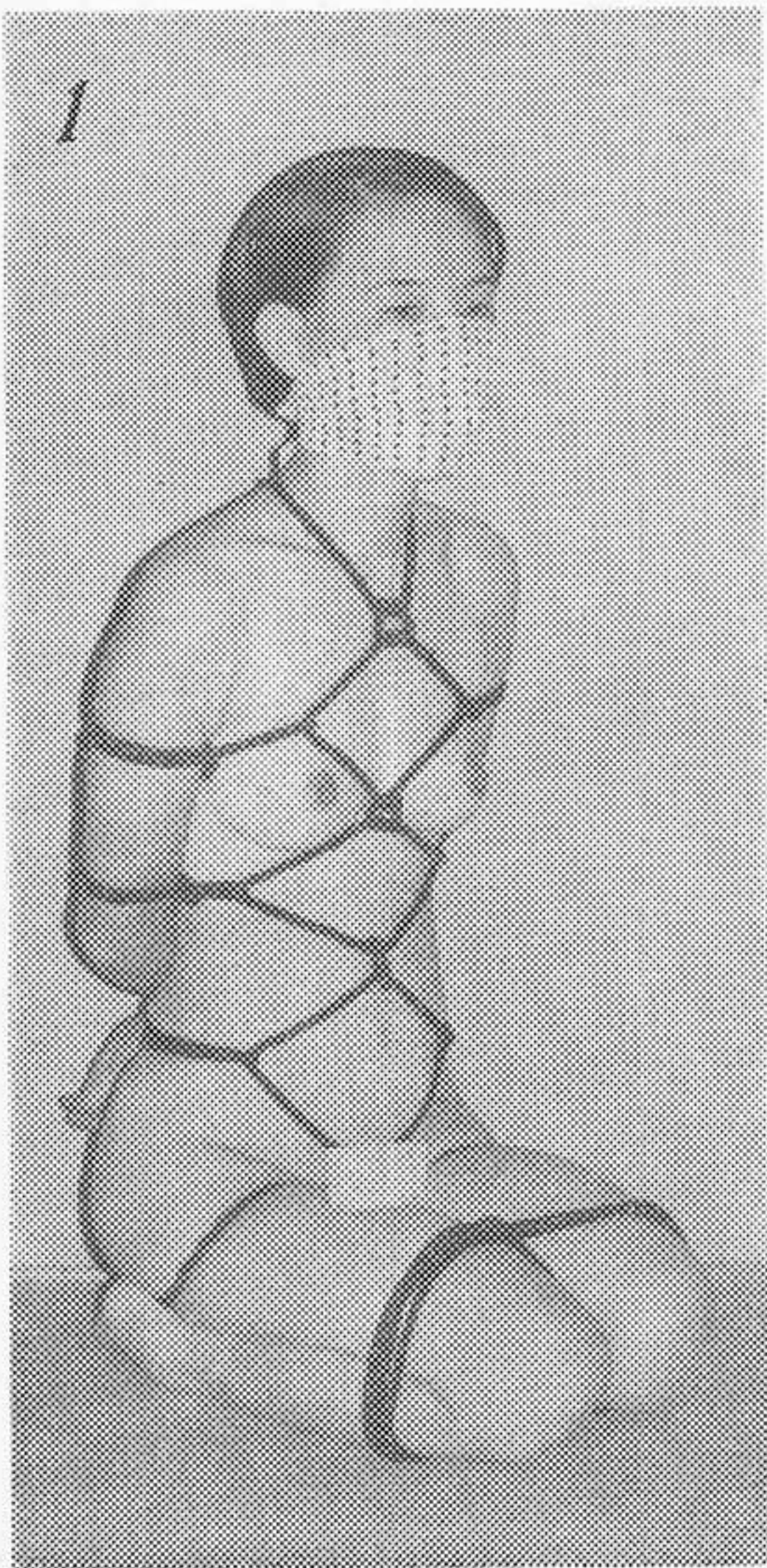
なおみはサジスチックに道雄を見すえて、白い太股が、ゆっくりと道雄の首を挟んだ。

——(続く)——

わが緊縛美感

四つのポイント

城 章 夫



女のからだでいちばん美しいのは、どこだろう。人さまさまの意見があろうけれども、まず『乳房』と『尻』を挙げる人が圧倒的に多いのではなからうか。

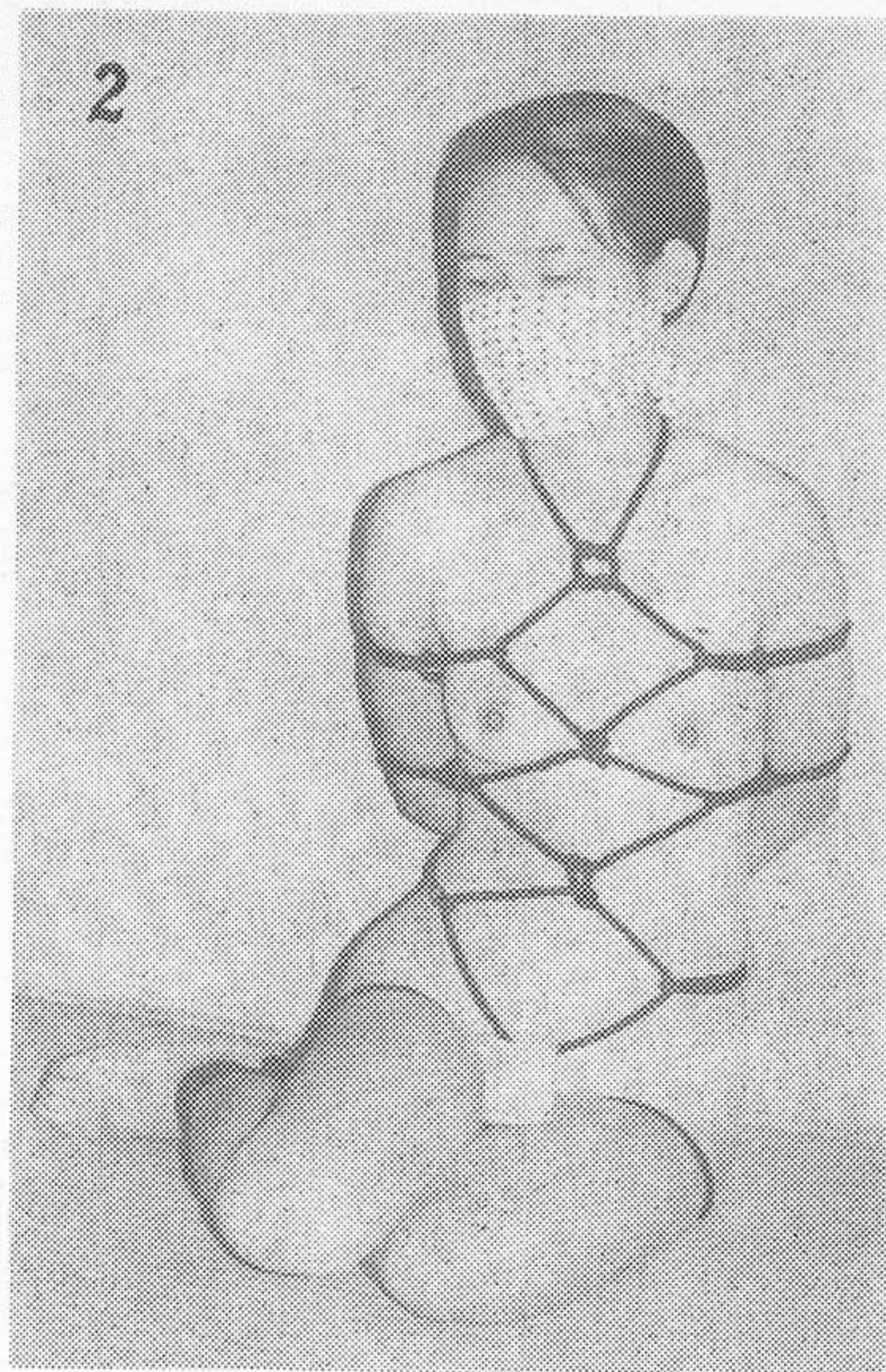
それでは、その女のからだを縛る縄の掛け方で、いちばん美しいのは、どんな縄掛けだろう。

女のからだを讚美し鑑賞するのは、すべての男にとって、共通の欲びであり、楽しみだろう。したがって、鑑賞のポイントに最大公約数を求めることは容易であり、それが『乳房』と『尻』だと思うのだが、さて、女のからだを縛るといふことになると、これは本誌の読者のように、ごく少数の異端の徒のみであり、そうした特異な嗜好は甚だ個人的なものだから、その縛り方のポイントに最大公約数を求めることは、前者の場合とちがって難しいといわざるを得ない。

よく個人の好みを敢ていわせて貰うなら、もっとも美しい縛り方は『菱縄』と『股間縛り』ということにならうか。そして『乳房』と『菱縄』、『尻』と『股間縛り』が互いに照応し、対応するものであることは、いうまでもない。

『菱縄』によって盛りあげられ、突き出され

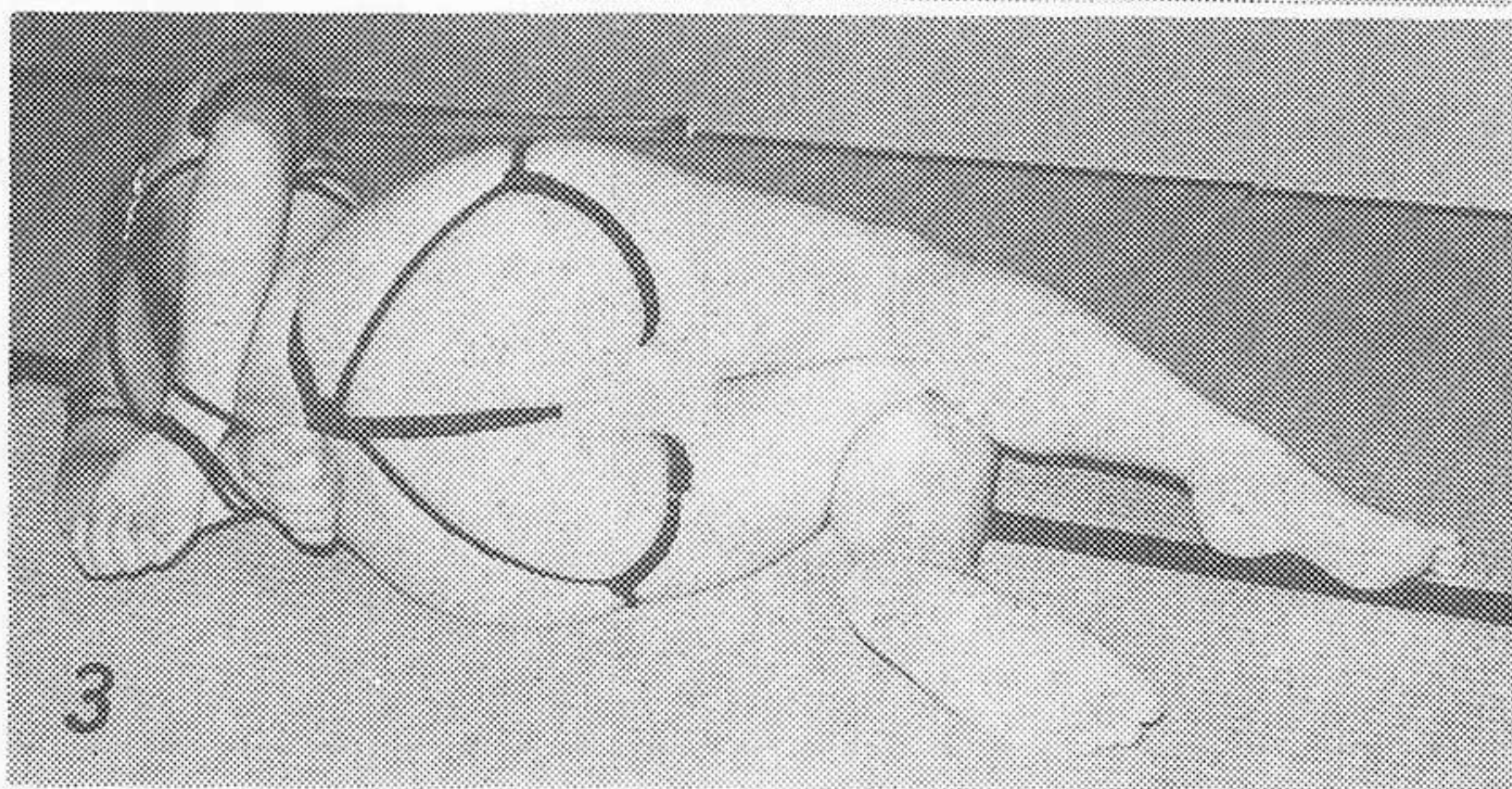
2

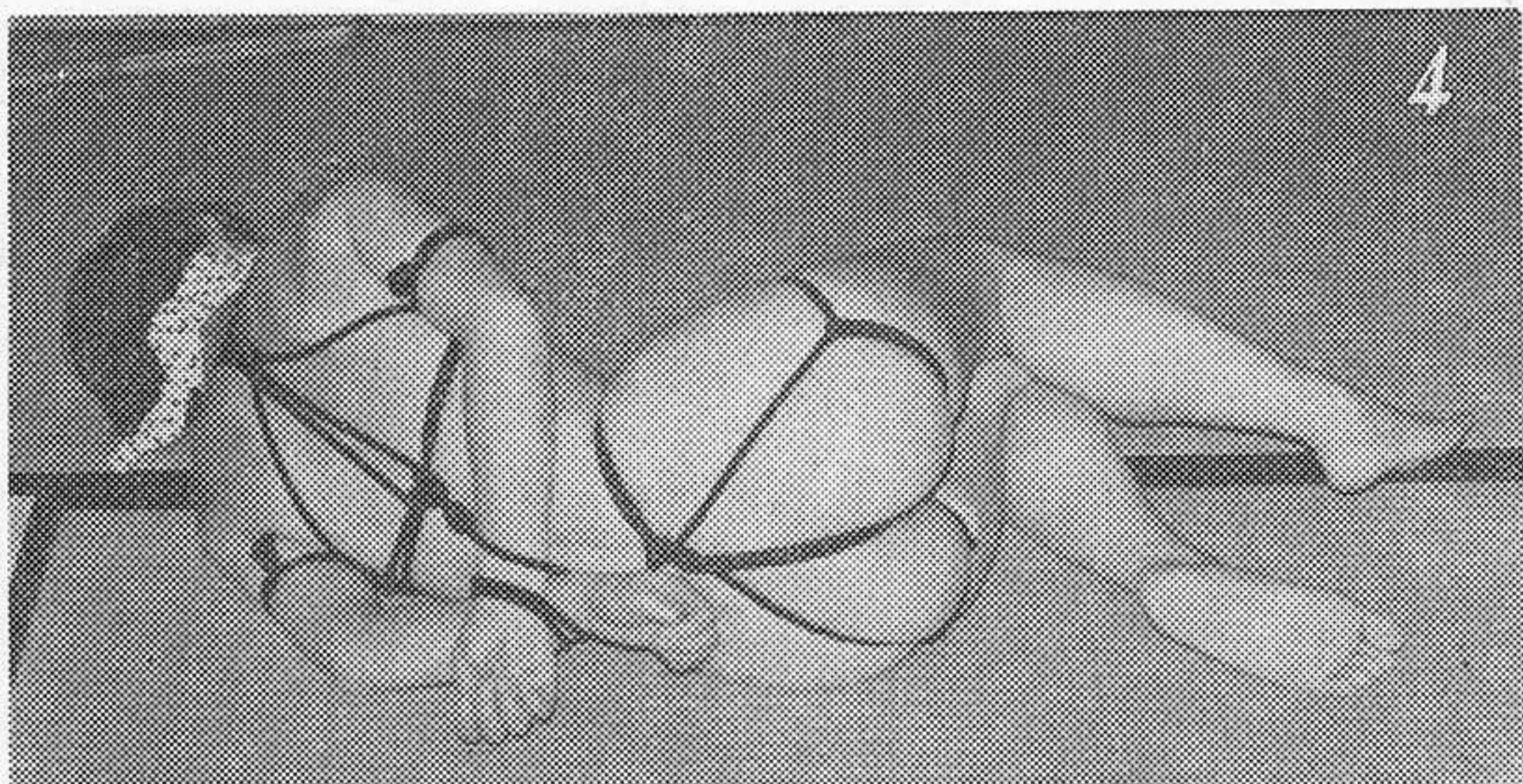


た『乳房』の美しさ。そして『股間縛り』によってそのまろやかなふくらみを一層強調された『尻』の美しさ——それは緊縛の趣きを解さぬ健全で常識的な人々には、到底、味としあたわざる異常の美ではなからうか。

その四つのポイントを中心に、最近ものした拙作を読者諸賢のご鑑賞に供したい。いっように変わればえがしなくて申し訳ないがモ

デルは例によって那津子である。（残念ながら現在のところ、ぼくモデルとしては那津子だけしかないのだから仕方がない。本誌にたよりを寄せられた、ぼくと同じ東京におすまいの佐野朱美さん、近藤恵美子さん。となりの神奈川県在住の砂川圭子さん。そして少し遠いけれども深田菊子さん——こういった方々が、ぼくのカメラの前でポーズをとっ





て下さったら、ぼくは、どんなに嬉しいだろう。朱美さん、恵美子さん、圭子さん。そして菊子さん。どうか、ぼくの切なる願いをかえて下さい——いや、これはとんだ方に筆がすべってしまった。話をもとにもどそう。

本誌四七年二月号に掲載された拙稿『途方にくれる那津子』でも書いたことだが、左右均斉、整った形の菱形を縄で描きだすのは、極めて難しい。しかし、ここにお目にかける菱縄（第一回および第二回）は、完全に満足できるというには程遠いが、どうやら格好のつく出来栄えにはなったと思う。少なくとも前記『途方にくれる那津子』のときよりは、綺麗な形に縛りあがったような気がする。もちろん欠点をいいたてれば、乳房の上と下、そして腹部と三力所に描かれた三つの菱形が形状も大きさも夫々違っているし、それらの位置にしても完全に所を得ているとはいえないかもしれない。諸者諸賢のご批判、ご意見を、ぜひ聞かせて頂きたい所以である。

つぎに『尻』と『股間縛り』だが、後者に即していうと、その『必要条件』は縄が股間を締めあげていることであり、したがって縄が下腹部から股間を通りぬけ、尻の割れ目をさかのぼっていさえすれば、それで一応は、

『股間縛り』ということができよう。

しかし、『股間縛り』と『尻』とを結びつけていうならば、さらに縄が尻の双丘を横切って、その豊かな肉に喰いこみ、盛りあがる尻のまるみ、やわらかな尻のふくらみを、いやが上にも強調することが『十分なる条件』となってくる。

そういう意味で、いささか口はばったいようだが、本誌をはじめこの種の雑誌や写真集などのなかで、本当に感心できるような股間縛りには滅多にお目にかかったことがない。

ぼくにとって、必要にして十分なる条件を満たした『股間縛り』は、単に縄が股間をくぐり抜けているのみならず、尻の双丘を横切り太腿のつけ根を締めあげている縄がなければならぬのだ。

写真第三回および第四回は、そういうぼくの主張にのっとった『股間縛り』の縄掛けを示している。この縄の描きだす軌跡がなかったなら、『尻』の美しさは恐らく半減するのではないだろうか。

幸いなるかな、緊縛趣味を解するの徒よ。縄にくびられ縄にいろどられた女体の美を識るのは、ただに君らのみである。（そして、ぼくも！）

カット・小川茂正



正氣に戻った真理子を待っていたものは、苦痛教育の残酷な日程であった。

さすがに、その日は責められなかったが、翌日からは、真理子の絶叫が、再び地下室に響き渡った。

苦痛教育の二日目は、針責めである。

全裸でベッドに固定された、真理子の白い

☆ 小説「拷問クラブ」シリーズ(6) ☆

復讐の序幕

鶴 見 浩 一

肌に、無数の針が襲い、跳ね回った。その度に、真理子の感覚は悲鳴をあげ、肉体は苦痛の脂汗を噴き出させた。小さく可愛い乳首に、細く長い針が突き通された時、真理子は鋭いケイレンと呻きを残して、その日、第一回目の失神状態に陥った。

二回目の失神は、両手の指を責められた時であった。

十本の指の爪の下に、細く長い針を刺し込まれた真理子は、人とは思えない異様な絶叫

をあげ、心臓がしびれる激痛に、地獄の底へと意識を失っていった。

その日の最後の責めは、小さな木の椅子で行なわれた。

木の椅子——それには、無数の押ピンが上を向いて植えられていた。

「ギャッ」

全裸で、抑えつけられるように坐らせられた真理子は、悲鳴をあげた。

彼女の柔らかい肌一面に、何十個という押

ピンが同時に突き刺さったのである。たちまちの内に、真理子の白い肌には無数の血潮の流れができて責苦の激しさに、美しい顔が大きく歪んだ。

精神安定剤と強心剤が、責めの間に何度も打たれたが、第二日目の教育が終わった時には、真理子の神経と精神はズタズタに切り裂かれていた。

第三日目の苦痛教育は、水責めである。

恐ろしい教育の場に巨大なポリバケツが用意され、一方には氷水、一方には熱湯が満たされていた。

全裸で天井から吊られた真理子は、交互にポリバケツへ投げ込まれた。

氷水と、火傷する程、熱い湯の責めは、真理子の肌のみならず、内臓の全てを鋭く責め侵していった。

氷水に震える度に、真理子の可憐な顔は紫色に変化し、熱湯に悲鳴をあげる度に、白い肌は赤黒く焼けた。

容赦なく繰り返される、強烈な地獄の責苦に、つぶらな真理子の眼が白眼となり、異様な呻きが洩れ始めた頃、やっとその日の拷問は終了した。

そして第四日目——火責めである。

憔悴し、疲れ果てた真理子の肉体は、彼女にとって地獄としか言いようのない、例のベツドに、大の字に固定された。

「ウ……ウウ……」

すでに、哀願する気力も失せた真理子ではあったが、この特殊ベツドに固定されると、本能的な恐怖が、裸身を突き抜け、必死の呻き声が口枷から洩れる。

ああッ、一思いに殺して！

真理子は、そう叫んだ。もちろん、声とはならないが、長いマツゲの奥の瞳が、精一杯語りかけていた。

連日、数時間に亘って休みなく続く、想像を絶した拷問に、真理子の身心は、破壊寸前の状態にあった。

「さて、お嬢さん。ぼちぼち始めますが、覚悟はいいですか」

ゾツとするような松山老人の囁きが、真理子の神経を逆撫でした。

「今日は、火責めです。まず、軽い拷問からやってみましょう……」

言葉と同時に、責めは開始された。

ああッ、やめてえ！

真理子は、口枷の中で絶叫した。

豊かな乳房の頂点に、小さなローソクが立てられたのである。クリスマスケーキに使用する様な、小さく細いロウソクが、双の胸に接着剤で固定され、さらに、もう一本のローソクが、真理子の一番、恥かしい場所に埋められた。

「ウウッ……アアッ」

真理子の裸体に、いいようのない恐怖の塊りが走り抜けた。

僅かに顔を出しているローソク。

それに火を！

真理子の顔は蒼白になり、白い全身がガタガタと震え始めた。

「ふふ……恐ろしいですか。でも、ごらんの通り、小さなロウソクです。なに、そんな長い時間ではない。苦しいのは、せめて五分間ですか……」

三本のローソクに、ゆっくりした手付きで火がつけられた。

「ウアッ……」

熱いロウのしたたりに、真理子は鋭く呻き四肢を突張った。

ああッ、助けて！

そう叫びながら、真理子は、カッと瞳を開いた。

現時点の責苦が恐いのではない。ロウソクが燃えつきる五分後の苦痛が、発狂してしまいうちに恐いのだ……。

「アッ……ギアッ」

細いローソクは、すぐに燃えつきる。敏感な肌に、青白い炎が触れた。

鋭い絶叫とともに、真理子の裸体が、ガクンガクンと波立つ。

肉を焼く、異様な臭いが、地下室に充満し始めた。

「ヒューッ」

猫が潰されるような悲鳴が、カッと開かれた真理子の口から洩れ、白眼が飛び出しそうになった。白い身体は、絶え間なく、ピクピクと苦痛の表情を示し、驚く程の脂汗が噴き出している。

細いローソクが、白い固まりとなって完全に燃えつきた時、真理子の瞳が、異様に拡がり、裸体に鋭いケイレンが走った。口からは泡が流れ、眼の焦点が定かでない。

真理子は、狂った――。

しまったッ。責め過ぎた……。

松山老人は、頭をかかえた。

完全な狂乱状態を示している真理子を眺め

て、胸の中に後悔の気持が湧き上がるのを禁じ得ない。

もちろん、再び電撃ショックを与えて、正常に戻す事は不可能ではないが、二度も発狂したという事実は、これまで以上に残酷な拷問を加えて、悶え抜く女体を見せるショウの途中で、三度^{みたひ}狂う恐れが充分に考えられる。そうなれば、拷問ショウは、完全に失敗だ。その点に対する認識は、精神病院院長としての、プロの確信があった。

弱った……。

松山老人は、泣きたくなった。

拷問ショウの開催日は明日に迫っている。今更、別の処女を見つけ出し、連れてくる訳にはいかない。

全裸の真理子は、焦点の定まらない美しい瞳を左右に向けて、虚脱症状を示している。そのきれいな顔と身体に、松山老人は宝物を失った様な失望感を憶えた。

二

信次が一週間ぶりに地下室へ帰ってきた時松山老人は、水がきれた野菜の様な表情でソファに腰を下ろしていた。

美しき獲物である真理子の姿は、何処にも見られない。

「遅くなりました」

「ああ……」

ぽつんと、うなづく松山老人の顔は、生気がなく、あらぬ方を見つめている。

「どうしたんですか。おや、真理子は？」

「……発狂した」

「発狂？」

「ああ、二度も……。先刻、病棟へ閉じ込めてきた」

「二度も……。調子にのって、責め過ぎたのでしょう」

松山老人は、力なく顎を引き、弱々しい声で言った。

「まことに残念だが、明日の拷問ショウは取りやめだ」

「しかし、客には、もう通知してしまってるんでしょう？」

「仕方がない。今更、新しい娘を探す訳にもいかんし……」

信次は、松山老人の生気がない表情に納得した。拷問ショウは、会員のためでなく、松山老人の回春作用の役目も持っている。

「信次。何処かにいないか、娘が……」

未練氣に、松山老人は、信次に最後の望みをかけてきた。

「この際だ。美しくさえあれば、処女でなくともいい」

「さあ、私には……」

そこまで言って、信次は口を閉じた。その目が、異様に光った。

一人いる！ 美しい娘が……。

信次は突然、湧き起こった、自分の冷酷な考えに、思わず慄然となった。サツと顔に緊張が走る。

美佐——この老人の一人娘を、正体が分かぬように拷問ショウに出演させたら……。娘を実の父親が、発狂し悶絶するまで責めいたぶるのだ——。

これ程の復讐はない！

信次は、予想以上に早くやってきた復讐のチャンスに、ぶるんと身振いした。二年間、我慢を重ね、待ちに待った時である。冷酷で無惨な復讐の開始である。

信次は、松山老人の目を刺すように見つめて、口を開いた。

「……一人います」

「えッ。いるのか、きれいな娘が」

松山老人の表情に喜色が現われ、パツと血

の気がさした。

「ええ、処女ではありませんが、きれいな女性です。確か、二十才とか……」

美佐の年を、信次は二つ、多く読んだ。万が一という事もある。

「二十才……。ふむ、どういう娘なんだ。名前は何？」

「名は知りませんが、少々、マゾ的傾向があります」

「マゾ……。いいだろう。時間がない。さっそく、連れてきてくれ」

子供のように、松山老人の表情が喜々としてくる。それに比例して、信次の背筋には冷汗が流れた。

絶対に、美佐と分からぬようにしなければならぬ。絶対に……。

もし、正体がバレれば、その時は信次の悲劇が待っている。恐らく、一寸刻み、五分試して虐殺されるだろう。

「老人、連れてはきますが、一つ、お願いがあります」

「何だ。連れてきてくれさえすれば、どんな事でも聞く」

「実は、その娘の顔立ちは非常にきれいなんですが、惜しいことに、両頬に醜いアザがあ

るんです」

「ふむ、それで？」

「覆面をして、ショウに出演させたいのです」

「覆面？」

信次は、ここぞと強調した。

「全裸の白い肌に黒い覆面。つぶらな瞳と口だけが出ている……。責めの絵としては面白

いと思いますが」

「はほう……」

いいアイデアだと呟くようにいって、松山

老人は、うなずいた。「よろしい、信次の意見を採ろう。すぐに連れてきてくれ。教育するとなると、今日一日しか、空いてない」

松山老人の瞳は、再び碧く澄み、喜々とした表情で信次を促した。

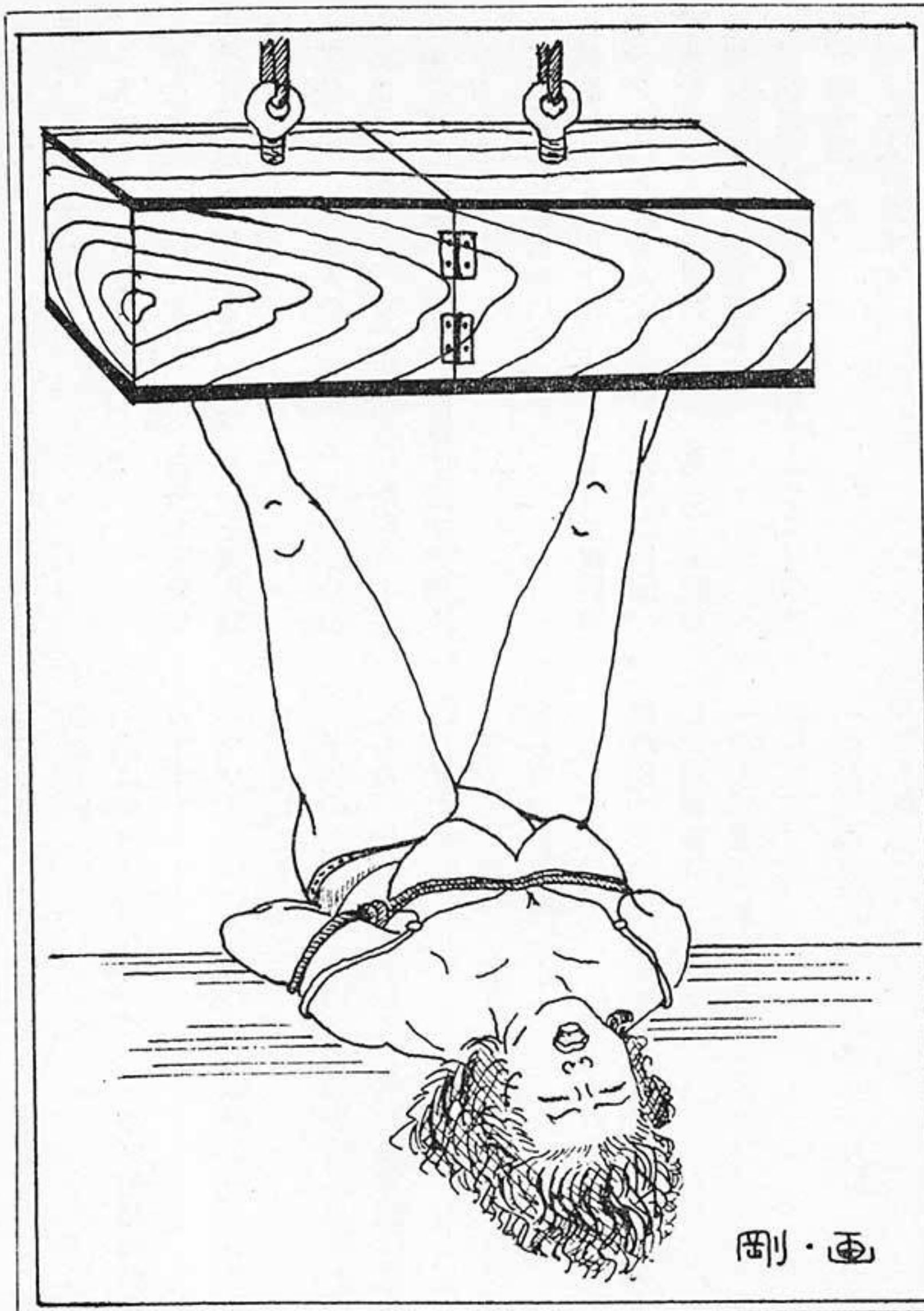
信次は、忙しくなった。

三

何時ものホテルのベッドで、美佐は小さく悲鳴をあげた。

顔一杯に、黒いゴムの覆面がかけられたのだ。覗いている双の黒眼が、不安そうに信次

……イメージギャラリー……『クレーン枷』……三浦 剛……



剛・画

を見つめている。
「信次。こんなマスクなんか被せてどうするの？」
「心配しなくていい。新しいプレイのためなんだ」

「だってえ……」
「それよりも、家の方は大丈夫だったか」
信次には、それが何よりの不安だ。拷問シヨウの主演の女性が、美佐と同一人物であるということとは、絶対に秘密にしなければなら

ない。

「大丈夫よ。また旅行に出るからと言ってきたのよ」

これからの自分の運命を知るよしもない美佐は、媚を含んだ口調で笑った。

「よかった。では、行こう」

立ち上がった信次に、美佐は不満そうな声を出した。

「もう、このホテルを出るの？」

プレイをしてくれる、と言って、まだ何も楽しませてくれないではないか……。期待に震えている女体が、裏切られた様に甘えてくる。

信次は、美佐の心中を察して、ニヤリと顔を覗き込んだ。

「責められたいのか？」

「バカ……」

胸に、しなだれてきた美佐の耳に、信次は口をつけて囁いた。

「あとでイヤになる程、責めてあげる。我慢できず、死にたくなるまで……」

「……」

美佐は、唇を寄せてきた。

それに応えながら、信次はポケットを探った。ゴム製の小さな口枷が、冷たく指先に触

れる。

長い接吻が終わったあとで、信次は甘い口調で囁いた。

「目を閉じて、大きく口を開いてごらん」

「……？」

言われた通りにした美佐に不幸が襲った。

冷たいゴムの固まりが、素早く口中に挿入されたのである。

口内に入れば、ネズミ取りのバネの様に開き、一さいの声を抹殺するこの特殊口枷は、発狂するか絶命せぬ限り、はずされる事はないのだ。

「ウッ……ウウ……？」

驚いた美佐は、マスクから覗いている目を大きく見開いた。

「ふふ……」

と信次は、満足そうに口を歪めた。

信次、何をする気なの！ これを取って頂戴、信次！

美佐は力一杯、叫んだ。が、声とはならず低い呻きが洩れるのみである。

美佐の身体に、何時ものプレイの前とは違う不安が突き抜けた。

信次の目は、異様に冷たい。

「美佐、お前は一言も話せない。誰と会って

も声が出ない……」

「ウウ……」

「例え、お前の親兄弟が目の前にあらわれても、お前は何も話せない」

信次は、楽しそうに裸体の美佐を指で、つついた。

親兄弟？ この人は何を、いつてるのかしら。一体、私に何を？

美佐の背筋に、スーッと恐怖が走った。

四

二時間後――。

美佐にとって、天地が逆になる程のショックが襲った。

おどされるようにして連れてこられた場所

が、実は自分の家だったのである。裏口を回って、父から出入を厳重に禁止されている地下室の入口を通らされた時は、美佐には自分の運命が、よく分からなかった。

どうして私を、地下の研究室に？

地下室は、父の研究室と、美佐は信じ込まされている。

鉄製のドアが開けられ、美佐は突き飛ばされるようにして、中へ入れられた。

「……？」

美佐は、室内を見回した。

天井から何本もの鎖とロープが不気味に下がり、見た事もない道具が、部屋一杯に設置されている。暗く生理的嫌悪感を引き起こさせる部屋だ。

あッ、お父さん！

父が――ソファに坐っていた。が、始めてみる、不気味な父の表情だった。

「御苦労だった。この娘か……」

美佐の目の前に、陰気な父の顔が近づいてきた。家では見せた事がない、水のようにキラ光る碧い瞳に、美佐は戸惑った。

これが、あの優しい父の目か？

別人のような父が、さらに驚くべき言葉を吐いた。

「成程、覆面もいいな、信次。さっそくだが裸にしてくれ」

ヒッ！ と美佐は悲鳴をあげた。

裸にッ。お父さん、気でも狂ったのッ。美

佐よ、娘の美佐よ！

もちろん、美佐の言葉は外へ出ない。

驚愕となった美佐の表情に、信次は薄く口を歪めた。松山老人は、どうやら自分の娘とは気づかぬようだ。

「ウウッ……」

信次が服に手をかけると、美佐は狂ったように抵抗した。

信次さんッ、何するのッ、父の前で！

美佐の頭の中は混乱してきた。口が開けないのが、それに拍車をかける。

激しい美佐の抵抗に、信次は天井から下がった鎖で美佐の両手首を縛り、吊り下げた。

ああッ、お父さんッ。助けてえ！

美佐は、口枷の中で絶叫した。次の瞬間、信じられぬ表情で、愕然と目を見張った。

あの優しい父が、助けるどころか、長いハサミを手にして、自分の服を切り刻み始めているではないか！

お、お父さん！

キラキラ輝く瞳に薄笑いを溜めて、父のハサミが、自分のスリップもブラジャーも、最後のパンティすら、切り落とす。

「ウッ……ウウ」

美佐は愕然となったまま、血の出るような悲鳴をあげた。

実の父が、自分の裸身を満足そうに見つめて、ニタツと笑っている。娘の裸を薄笑いを浮かべて眺める父が、何処にいるものか……美佐には、父が狂ったとしか考えられなかつた。

「ふむ、素晴らしい肉体だ。時間が無い。さっそく、責めよう」

「どういう拷問を……」

「そうだな」

松山老人は、形よく盛りあがった美佐の乳房を、ピンと弾いた。目の前の美しい獲物が自分の可愛い娘とは、夢々気づかない。

「乳房圧迫責めは、もうあきた。たまには、優しい責め方をしてみよう」

「優しい？」

松山老人は、ニヤリと笑った。

「せっかくきてくれた、大事なお客様だ。女の喜びを味わしてやろう。筆とアルコールと針を持ってきてくれ」

「……？」

「分からぬか。筆で全身を、愛撫してやるのだ。ゆっくりと長い時間をかけてな……。そのあとで針——」

「ほう……。感覚責めですか」

信次は満足そうに、うなずくと、道具を揃えるために、美佐から離れた。

「アア……」

美佐は二人の会話を聞いて、発狂しそうな恐怖に駆られた。

お父さんッ、一体どうしたのッ。私よ、美佐よッ。馬鹿な真似は、やめて！

松山老人は、身悶えする全裸の美佐を、嬉しそうに見上げた。

「お嬢さん、暴れるのは、まだ早いですぞ。これから歓迎の責めをやってあげます。そのあとで、本格的な拷問を受ける事になる」

「ウウッ……ウアア……」

美佐は必死になって、自分である事を訴え続けた。しかし、もちろん松山老人には分からない。

松山老人は、身悶えする美佐の乳房を、ゆっくりと揉み始めた。特に、乳首の周辺を、丹念に揉みほぐしていく。

ああッ、お父さん……。

ドス黒い不信と恐怖に、苛まれる神経とは別に、美佐の肉体は反応を示していく。可愛い乳首が、固く、小さくとがり、サクラ色に震えてきた。

信次が持ってきたアルコールを、松山老人は布に浸して、美佐の乳房に撫でつける。

「アッ……」

スーッと感覚が鋭く研ぎすまされ、乳首に神経が集中してくるのが美佐自身、分かる。

その、ピリピリした乳首を、松山老人は筆

で愛撫し始めた。真険な表情で、撫でるが如く、こねるが如く、微妙に筆先を動かしていく。

「アアッ……アッ……」

意志に反して、美佐の裸身は、ピクン、ピクンと反応を示した。快感はあるのだが、美佐の神経はショックの混乱で、それに没するどころではない。

父が、父が何故！

くすぐるような、微妙な快感と斗いながらも、やっと、この地獄のような状況が、美佐にも理解できてきた。

父は騙されているのだ……。

自分に覆面をし、口枷をはめた信次の行為が、分かってきた。

——実の娘と知れないように、信次が計画して、私を父にあてがっている……。

でも、何故、信次は……。

何故、父がこのような、ひどい事を？

そこまで考えて、ふと気付いた美佐は顔色を変えた。

父は異常性格者か！

間違いない、と美佐は思った。研究室と偽って、この地下室には、責め道具らしき物が無数に取り揃えてある。その上、目の前の父

の、想像を絶する行為——。

父はサディストなのだ……。

美佐の頬に、暗然とした涙が流れた。

「グァーッ」

しっかりと目を閉じ、父の顔をみないようにして考えていた美佐は、突然、手足を激しく突っ張った。

筆の先で、優しく愛撫されていた乳首に、鋭い針が刺し込まれたのである。

「ギャッ……」

焼けつくような激痛の波が、乳首から全身に鋭く走った。

「グウッ！」

やっと細い針が抜かれた時、美佐の裸身には、苦痛の脂汗がタラタラと流れ出した。

「どうじゃ」

松山老人は、信次に笑いかけた。

「女体が性的興奮に燃えあがる時、この針が現実の激痛を送る。愛撫と責苦を交互に繰り返す女体責めだ」

松山老人は、自分の知識を信次に語った。

「安土桃山の頃、甲賀の忍びが、くの一拷問として使用したのが始めじゃ。何でも、捕えたくの、一を七人の男が愛撫し、女が法悦の呻きをあげた時、甲賀針という太い針で、乳房

を刺す」

「ほう……」

と、信次は感心したように聞き入った。松山老人のサドに関する資料集めは非凡と言える熱心さだ。

「そのあと、再び七人の男の愛撫。そして針の苦痛……。女は燃えあがりたい欲求と、激痛から逃げたい気持とで半狂乱になる。半日に亘ってそれは続けられ、ついには悶死するか、発狂すると記録されている」

松山老人は、子供が秘密を教えるような表情で、得意気に説明した。

「一度、本格的にやってみたかったのだ」

「成程、強烈な拷問ですねえ」

肩で息をしている美佐を見て、信次は感心した。そして、薄く口を歪めた。

拷問の効果、すさまじさよりも、父が娘を責める異常な地獄絵に、復讐の満足を憶えたからである。

うまく、いきそうだ……。

喘いでいる美佐の目と、冷たい信次の目がふと合った。美佐のつぶらな目は、怒りと恐怖と背信に、黒く鋭く燃えている。

ふふ、もっと苦しめ……。

自分の唯一の宝物であった、可憐な明子は

発狂し悶絶するまで、松山老人に罵られたのだ。清らかな処女の胎内を機械で無理矢理に捻じられ、熱湯を注入し、猫の仔を埋め込まれて発狂した――。

信次は、その事を知った時の、自分の感情を、今でも克明に想い出す事ができる。

三年前――。

突然、行方不明になったフィアンセの明子を探していた信次は、半年も経って、彼女が松山精神病院の病棟にいる事をつきとめた。

偶然の悪戯か、松山院長は信次の大学の講師であった。肩書は精神科医でありながら、
△宗教裁判・刑罰史△という教科の教鞭をとっていた。

苦勞して、人伝てに聞いた明子の状態は、全身無数に針の傷があるという。松山院長を訪ねようとしていた信次は、病院の玄関前でハッと立ち止まった。

全身、無数の針――それは、松山院長が、
△魔女狩り△の項で説明した拷問記録と、そっくり一致しているではないか。

そう言えば……。

と、信次は考えた。教壇で魔女拷問の記録を口述する松山院長の瞳は、ノーマルの限界を超えている異様な熱を持っていた。

もしかしたら……。

信次の危惧は拡大するのみであった。

決意した信次は、大学の廊下で、松山院長に話しかけた。自分は魔女狩りの拷問について異常と思えるほど興味を持っている。一度くわしい話を、お聞かせ願えないか……。

そのあとは、簡単であった。二カ月後には松山院長の忠実な部下として、サド快楽追求のための助手を勤める事になったのである。

そして数カ月後、信次は、血も凍るような明子の被虐を聞いた――。

激怒、憎悪、戦慄、殺意……そして復讐の決意――。

そのあとは、チャンスがくるまで、ミイラ取りがミイラにならぬよう、自己との闘いであった。

明子、もうすぐだ……。

「何を、ぼんやりしている」

ポンと肩を叩かれて信次は現実に戻った。

「い、いや、何でもありません」

哀愁を帯びていた顔が、何時もの、老人の忠実な部下の表情に変わった。胸の中に、黒い憎悪の感情が渦巻いている。

信次は、松山老人に頼んだ。

「老人、私にもやらせて下さい」

「ほう、珍しいな。信次が自発的に責めるなんて……。やってみろ」

信次は、松山老人から細い針を借りた。

「ウウ……」

美佐は、カッと双の目を見開いた。自分に向かう信次の表情に、すさまじい恐怖を感じたのである。プレイを楽しむ時の、あの恋人の顔ではない。

信次は、肉体の隅々まで知りつくしている美佐の裸身に、静かに針を這わせた。痛くないように撫でるように急所をつついていく。

乳首の周辺、太腿の柔肉には、時間をかけて執拗に針を刺す。

「アッ……アア……」

美佐は、思わず裸身を躍らせた。憎悪の意志に反して、教育された針の愛撫が、せつなく感覚を溶かしていく。

負けちゃ駄目……。

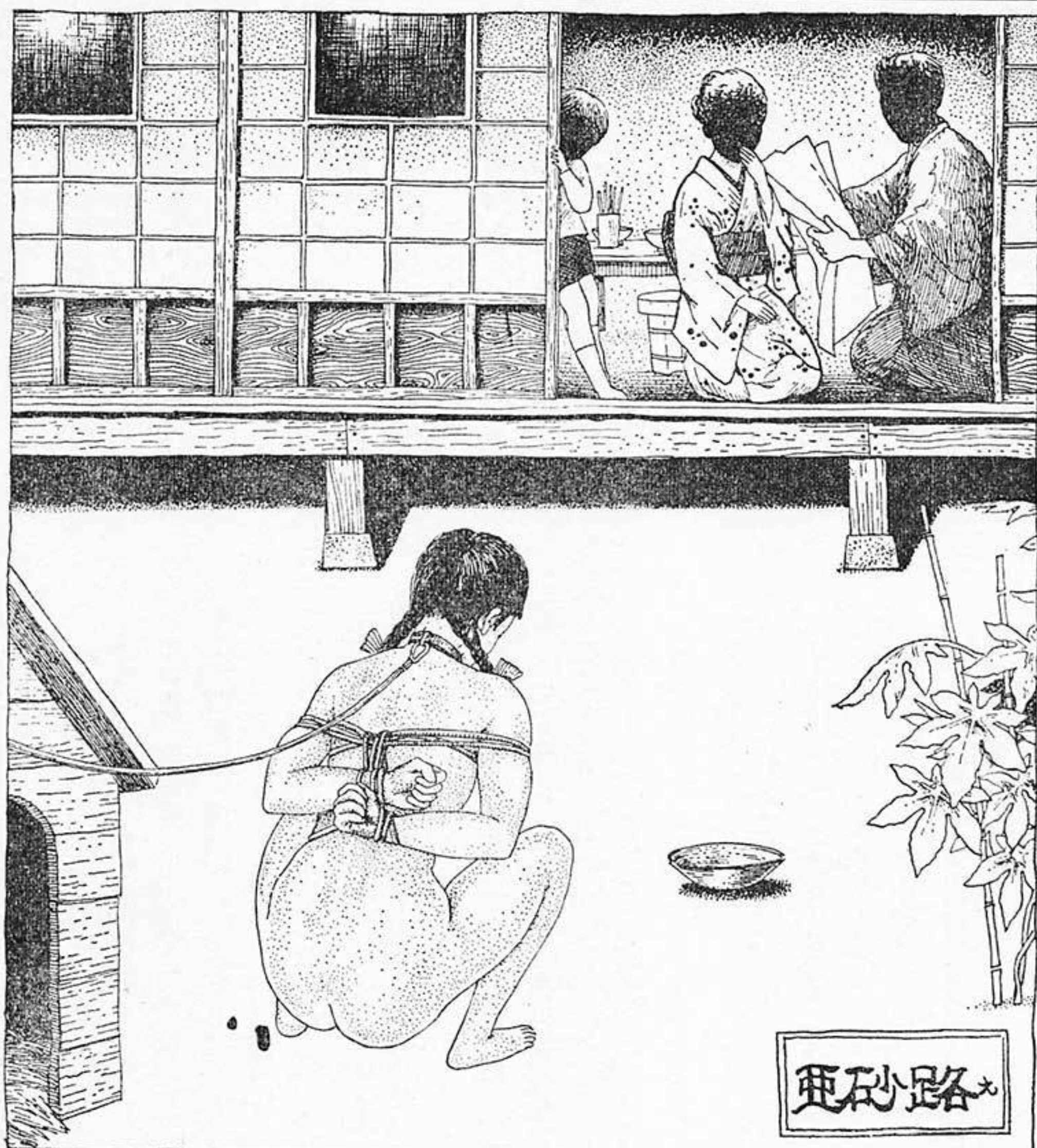
そう我慢しても、たぐみな信次の針さばきに、何時ものように肉体の奥から、ズーンと快感が湧き上がってくる。

目が潤み、熱い吐息が口枷から洩れた。

ああッ、やめてえ……。

美佐は、意志に反して燃え上がる自分の肉

……僕のイメージ画集……『高村浩子に想う』……室井 亜砂路……



体に、発狂する程の憎悪感を憶えた。自分の悶える痴態を、あの父がジッと注視しているのである。

「ウウ……アッ」

美佐は鎖に吊られたまま、快楽の波に翻弄され続けた。ピク、ピクと裸体は歓喜に震えている。

信次は、美佐の悶えにニヤリとすると、針を持ちかえた。その針を白い腹部にそって這わせ、美佐の肉体の中で、一番微妙な場所へあてがった。

信次は、グイと針を突き刺した。

「グァー！」

地下室を覆うような絶叫が、美佐の口唇から吐き出され、脂汗に濡れた裸体が、ガクンガクンと突っ張った。

快楽の天国から激痛の地獄への一転——美佐の神経は、全身で悲鳴をあげた。

細い針は、悶え抜き、感覚の固まりとなっている美佐の肌に、二センチ以上も埋没していた。

信次は、その突き刺さった針の頭を、力一杯、指で弾いた。

「グッ！」

美佐の目が、赤く拡がり、衝撃のひどさを

示すように、鎖が音を立てて鳴った。

信次は、グイグイと針を回した。

「……」

あまりの責苦の強烈さに、美佐は鋭いケイレンを引き起こすと、失神してしまった。

ふう、と松山老人は溜息を吐いた。

「責め方が、うまくなったな」

「老人、もう少し責めていいですか？」

「それは構わないが、どうしたのだ。何時もの信次と違うが……」

信次は、失神した美佐の腕に強心剤を打ちながら、意味あり気に笑ってみせた。

「この女に怨みがあるんです」

「ほう……。どういう怨みだ」

「くわしくは聞かないで下さい。どうせ、拷問ショウで発狂してしまう運命ですから」

信次は、再び針を手にした。

「アア……」

現実の地獄に引き戻された美佐は、信次の手の針を見て、恐怖の脂汗を噴き出させた。

お父さんッ、助けてえ！

美佐は、真珠の様な涙を流して絶叫したが、もちろん松山老人には聞こえない。

薄笑いを頬に浮かべ、信次とともに長い針を手にした父を見て、美佐は発狂した如く、

裸身を躍らせ、震え、泣き喚いた。

五

美佐の不幸は、まだ序の口であった。

その日一日、美佐の肉体と神経は発狂寸前まで、間断なく責め、いたぶられた。

松山老人にしてみれば、心中、非常に焦っている。拷問ショウまでの教育期間は、今日一日しか、残っていない。あと二十数時間の内に、ある程度の苦痛を肉体に憶え込ませねばならないのだ。

当然、強心剤と精神安定剤の使用量が、正常の二倍を超える程、残酷な拷問は続けられることになる。

針責めの次は全身の引き伸ばしであった。

美佐の四肢は『人』字形に天井と床から引っ張られた。

「ウウッ……ウァー！」

可能な限りに三方から引っ張られるために美佐は異様な呻きをあげた。

全ての内臓と骨が肌を突き破り、体外へ露出するかと思う苦痛が裸体を責める。胃から黄色い泡が吐き出された。

限界ぎりぎりの線で、松山老人は引張って

いる鎖を止め、固定した。

「グ……ググッ」

蛙のような悲鳴が、美佐の形良い唇から洩れ始めている。

「苦しいですか、お嬢さん……」

松山老人は、美佐に微笑みかけると、壁の鞭を手にした。

普通の鞭ではなく、細い針金を束にして、ゴムで覆ったものである。表面が柔らかいため肌には傷をつけないが、皮膚の下の内臓に鋭い衝撃を与える強烈な鞭だ。

「老人！」

信次が、その鞭を見て、声を出した。

「それで責めるのですか？」

「そうだ」

「それは酷いではありませんか。あんなに内臓まで引き伸ばされているので、内臓破壊を起こすのでは……」

「ふふ、心配はいらぬ。手加減する」

しかし、と信次は不安になった。痛めつけるのは、復讐の意図から、おおいに結構だが殺害するのは困る。蛇を生殺しにするようにじっくりと時間をかけて、いたぶり、悶死させる方が復讐の快感が増大するものだ……。

信次が、そう心配する程、針金の鞭は強力

であった。一年程前の娘は、それで乱打されたために胃腸がグチャグチャになり、悶絶している。

松山老人は、美佐の拗げられた胃のあたりを目指して、針金の鞭を振り廻した。

ズン、と不気味な音を残して、鞭は美佐の腹に巻きついた。

「ゲェ！」

美佐のつぶらな瞳が飛び出し、裸体が弓なりに屈曲した。

鞭が身体から離れても、美佐の四肢は大きなケイレンを繰り返して、見る見る内に口から真赤な血が流れ始めた。

可能な限りに筋肉が伸ばされているので、内臓に受ける責苦の衝撃は、想像を絶する強さである。

二度目の鞭が、振り廻された。

今度は、美佐の豊かな乳房と背中に巻きついた。

「……」

美佐には、声もなかった。

キーン、と形容するような鋭い衝撃が乳房の肉を突き抜け、心臓を強打したのである。

それは地獄の衝撃であった。美佐の裸身から、苦痛の汗が驚く程、流出し、唇から噴き

出す血潮が、真黒な色へと変化した。

美佐は、失神というよりも、仮死状態となつて意識を失つていった。

次に待っていた拷問は、火責めであった。

これは酷かった。

長く太い鉄の棒を抱くようにして、美佐の裸身は一直線に縛られた。歯車がついた両側の台に鉄棒の端がいき、美佐は荷物のようにその空間に置かれている。

その下に、あるだけの火気が、集め置かれた。三つの石油ストーブ、二つのガス・ストーブ、それに炭火等である。

「ウアアッ」

美佐は恐怖と苦痛のために絶叫をあげた。想像を絶する熱気が、すさまじい勢いで下から襲ってくる。

汗が——水のような脂汗が、したたり落ち石油ストーブに当たって蒸気を出した。頭がぼんやりとなる程の苦痛が、間断なく美佐の肉体を責める。

「どうですか、娘さん」

松山老人が遠くから声をかけた。すさまじい熱気のために美佐の側には寄れないのだ。

「ウウッ……ウアッ……」

「これから、人間バーベキューという拷問を始めます」

松山老人は童顔になり、楽しそうに話しかけてきた。

「ヒイツ……」

美佐は、鋭い悲鳴を洩らした。

ふっと、気が遠くなる。

焼かれて死ぬんだわ……私は……。

死にたい、と美佐は思った。ジリジリと責められるよりも、一思いに絶命して、この地獄から逃げたい……。

が、熱さを我慢して美佐に近寄った信次のために、その、はかない願望も、打ち砕かれた。何本目かの強心剤が非情に注射される。

意識と痛感が戻ると、カアツと恐るべき熱気が肌を焼き、内臓まで熱くなる。

ああッ、お父さん！

美佐は、底知れぬ絶望を全身で感じた。

お父さんッ、助けてえ！

もちろん、松山老人には、地獄の責苦に悶えているこの獲物が自分の娘とは知らない。知るよしも、想像することすら、考えない。「お嬢さん、まだまだですぞ。この程度で、そんなに苦しい顔をしないで下さい」

例によって、言語的責めを楽しんでいる。

「私は、こうみえても、フェミニストではない。若い女性の美しい肌に、火傷の跡を残したくない。ですから、一カ所だけを集中的に焼くという事はしません」

松山老人は、ゆっくりと言葉を切った。

「という事はすな、この棒をグルグル廻して、肌を焼かずに、内部を焼こうと考えておるんです。いわゆるバーベキューです」

美佐は、よく聞いていなかった。

皮膚が焼け、弾じける激痛に、ただただ意識が失われ、楽になる事のみを待っていた。それでも、サタンの使者のような父の言葉がとぎれとぎれに耳に入ってくる。

内臓を焼く！

美佐の神経は、発狂し破壊されそうになった。激痛が脳を侵し始めている。

「では、始めましょう……」

松山老人は、信次に合図した。

信次は、うなずくと壁のボタンを押した。ギイギイと音がして、美佐の裸体は鉄棒とともに、ゆっくりと回転する。

助かった！

と美佐は、一瞬、思った。地獄の熱気か、一時的にしろ、背中から去ったのである。

しかし、それは虚構の平和であった。集中

的な熱気は去っても、平均的に全身が火気にさらされているのだ。

ゆっくりと美佐の肉体は回転した。くし刺しにされた小鳥のように、執拗といえる程、丹念にあぶられ続ける。

二分――。

美佐は、獣の咆哮に似た唸り声をあげた。体内の水分が、全て排出されるのではないかと思う程、おびただしい脂汗が、白い肌から、噴き出た。

三分――。

「ギエッ！」

美佐の全ての神経が、破壊寸前の悲鳴をあげた。すさまじい熱気が、柔肌を突き抜け、内臓器管を直接に、あぶり出したのである。すでに激苦のために失神する肉体であるが数分前の強心剤はそれを冷静に抑えていた。五分近くの時が流れた。

美佐の口から、泡状の粘液と、どす黒い血が入り交って流れ落ちた。つぶらな目は、黒い瞳が上部に隠れ、不気味な白目が異様に露出している。

松山老人は、慌てて信次に合図した。

「いかんッ、止める。火を離せ」

美佐は、おこりのようなケイレンを、果て

しなく繰り返していた。

やっと火責めの拷問から解放されても、美佐の肉体と神経は、責苦の衝撃から抜け切れなかった。

小刻みに震える美佐の姿態を見て、松山老人は不興そうに言った。

「駄目だ。苦痛教育は一日で、できない」

「まだ、責められるでしょう？」

信次は、死骸のような美佐を横目に、非道い事を言った。

「いや、無理だろう。今の拷問から回復するには、今夜一晩は、かかる」

「……」

信次は、不満そうに黙った。今日は復讐の序幕だ。これだけの責めで解放するには、何か物足りない。自分の恋人、明子が虐待されたように、一週間、休みなく地獄の苦痛を味あわせたい……。

信次の目は、キラキラと光っていた。

信次は、自分の思考の移動に気付いていない。復讐という、大義名分を前面にした女体責めであるものが、実は、自分の奥底に隠れているサドへの欲求に他ならない、という心理の動きに……。

望む望まないにかかわらず、信次の性モラ

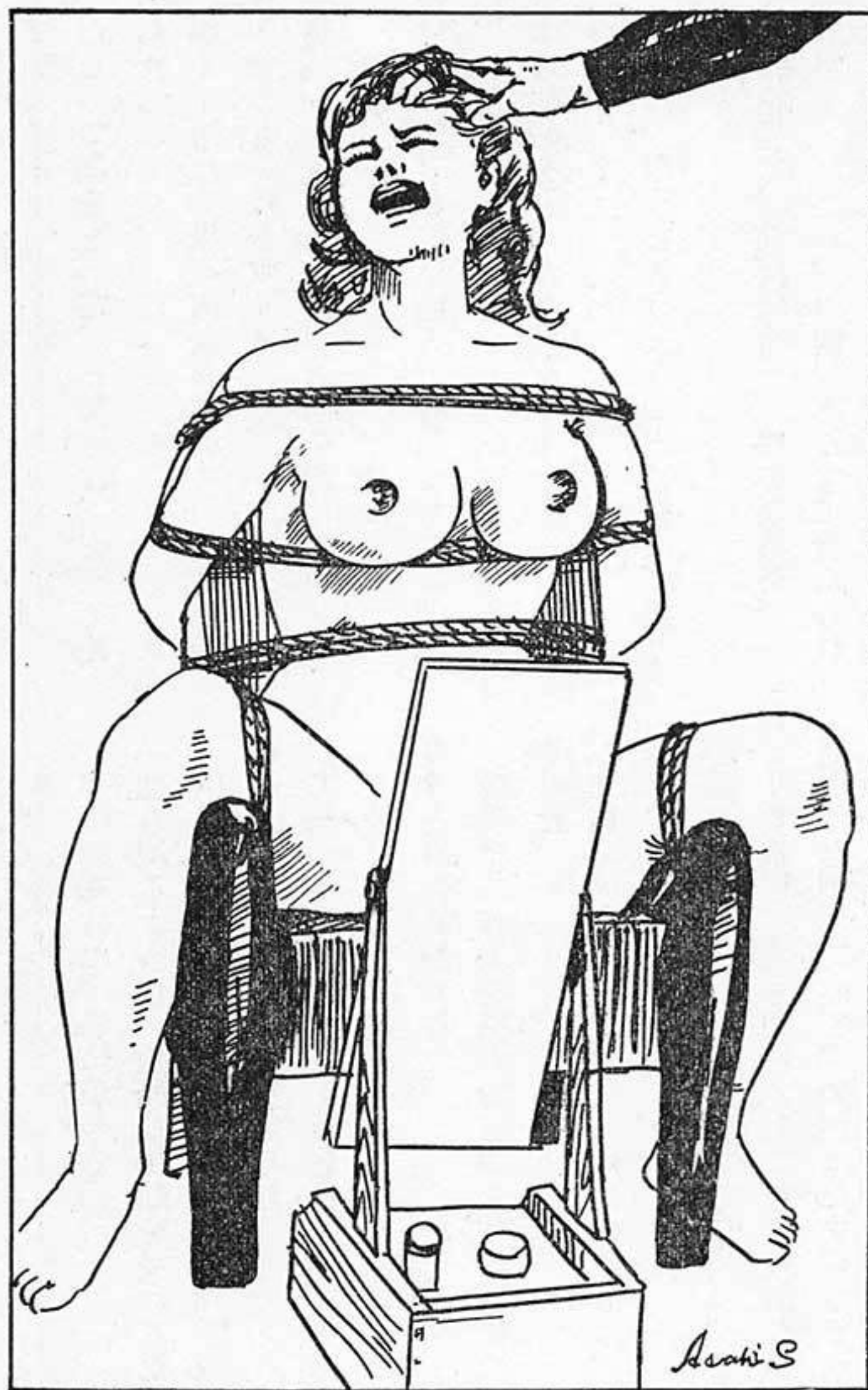
ルは、すでにサディズムの魔力に魅入られていたのである。

性モラルだけではなく、人格、思考すらもサドの世界に浸没していた。それも、単なるプレイとしてのサディズムではなく、犯罪といえるサド快楽にである。二年間に亘る、松山老人の助手としての女体拷問作業故かも知

れず、また、人間の意識の深層に横たわる加虐本能の開花かも知れない。

いずれにせよ、幸か不幸か、信次は自己のサディズムの欲求に気づいていなかった。あくまで、復讐のための、手段・方法として拷問を定義づけているのであった。

松山老人は、異様に目を輝かせている信次



……イメージギャラリー……『視覚責め』……須坂 旭……

の表情を、意にも止めず立ち上がった。
「信次、今晚はこの娘を、休ましてやってくれ。明日は、ぶっつけの拷問ショウだ」
「……はい」
「私も疲れた。上へあがって寝るので、あとは、よろしく頼む」
松山老人は、そう言って地下室から、去った。

陰気な拷問部屋に、痛めつけられ、自由を奪われた美佐の裸体と、目を光らせている信次の二人が残った。

「ウ……ウウ……」

意識が戻った美佐は信次の目に哀願した。

信次！ どうして、こんな非道い事をするのッ。口枷をとって自由にして！

美佐は、吐気と悪寒に苦しみながらも、わずかに這ってきた。

信次！

そう語りかける美佐の目は、このようになっても、信次を恋人と想う甘い気持が残っていた。

これは、何かの間違いなのだ……。

きっと、そうだ。と美佐は思っている。それでなければ、実の父と恋人から、発狂してしまいそんな残酷な拷問を受ける理由が分か

らないではないか……。

誤解よッ、信次！ あなた方は何かを誤解しているのよ！

だから口枷をとって、と美佐は、必死で絶叫した。

が——冷たく囁く信次の言葉に、美佐の最後の望みも、はかなく破れた。

「美佐……俺は永い間、お前を騙していた。今、お前が見た通りの事実が、俺の真実だ。俺にとって、お前は恋人でも何でもない。ただ、お前の父親に復讐するために、近づき、愛する格好をとっただけだ……」

「ウウッ……」

美佐は、違うと言うように、首を横に振った。

それを見て、信次は冷たく口を歪めた。

「本当さ。だから、お前があんなに責められても、何も感じない。いや、感じているよ、快感をな……」

充血した美佐の目に、涙が溜まった。

「俺は、もっと、お前を虐めたい……。虐めるだけの理由があるんだ」

信次は、不気味に双の目を光らせた。

「俺の清らかな恋人は、お前の父親のために発狂した……」

信次は、部屋の両隅まで歩いて、固定してある鎖を引っ張ってきた。

「アウッ……」

美佐の裸体に、恐怖が走る。

「血も凍るような、残酷な拷問を受けてな」

信次は、抵抗一つできない美佐の両手両足を、大きく拡げて鎖に固定した。

ああッ、許して！ もう虐めないで！

美佐は、新たな拷問を受ける恐怖に、ガタガタと身体を震わした。

信次は、作業を終わると、美佐の耳に口を寄せた。

「先程の火責めで、お前の体中の水分は、だいぶ、噴き出している……」

確かに、そうだった。美佐の口内は、ヒリヒリする程、渴き、白い肌にも水分がない。

信次に言われてみて、美佐はたまらなく水が飲みたくなった。

口唇が白くなっている美佐を見て、信次は薄く笑った。

「だがな、女には、もう一つの水分がある」と信次は、美佐のむき出しの肌に手を触れた。

「この皮膚の奥からはもっと水分が出る筈」

「……？」

「今から、お前を愛撫してあげる。責めはしないので、心いくまで楽しめ。そして、胎内の水分を吐き出してしまうのだ」

信次は、美佐の腰の下に、小さな台を敷いた。そのため、美佐の下腹部は突き上げられ床との間に空間を作った。その真下に、信次は皿を置いたのである。その中に、絞り出したものが溜まるように……。

信次は四ツ這いになると、美佐の裸体に舌を這わし始めた。執拗に丹念に……。

「アア……アッ……」

美佐は、小さな声をあげた。

負けまい、と我慢するのだが、微妙な信次の舌戯は、ほのかな快感を呼び起こす。

信次は、あらゆる技術を駆使した。鳥の羽毛——筆——針——柔らかな鞭——ブラシ、そしてバイブレーター……。

「ウウッ……アッ……」

美佐は、先刻の拷問の苦痛を忘れて、突きあげる歓喜に、のたうち回った。

信次の愛撫は巧妙で、そして執拗に時間をかけた。柔らかな舌戯があるかと思うと、鋭い鞭打ちが襲い、一転して鳥の羽毛……。

美佐の乳房は固くなり、乳首は大きく突起し、全身の肌が充血した。

— 倂 った 針 釣 —

娘 毒 気



カッ ト ・ 志 野 春 秋

騎 一 島 広

流れは相当に早い。じつとウキを追う目に川底の小石が美しく見える。サッとウキの鮮やかな紅色が水中に潜る。竿を握る手にビリビリとくる快い手応え。水面を波立たせて跳ねる獲物が陽に光る。

「こんな浅い所で、よく釣れるもんだ」

私はそう思いながら、握った掌の中のヒクヒクする魚の感触を楽しむ。ハスと聞き覚えしているこの小魚の、鮎に似たスナリと形よい姿は、どこか、女性を思わせる可憐さである。

「フッフフ……」

再び、溪流に糸を投げ入れたとたん、背後で突然に起こった含み笑いの声にギョッとなった。振り返った眼に、丸い籠を小脇にした女の顔がとびこんできた。無造作に束ねた髪に化粧気なしだが、二十二か三ぐらいに見える若い女だ。私は思わずペコンと会釈していた。

女は、確かに含み笑いたった筈だが、その色っぽい笑い声ほど美人ではないが、割合に可愛い目鼻立ちの顔はケロリとして、笑ってはいなかったばかりでなく、私の会釈も無視したように、ジーツと見詰めているだけ。私は少々鼻白んで、竿を上げると、ジロジロと見

返してやった。

おかしい女だ。この附近の村の女には違ひなからうが、着ているものがヘンだ。どう見ても男用の、それも継ぎハギだらけの野良着である。しかも腰まであるかなしのもので、黒っぽい紐帯をしたすぐ下に裾があり、辛うじて太腿の半ばぐらいまでを覆っているだけなのだ。超ミニ以上の露出度だが、そのムキ出しの太腿が奇妙な生々しさで極めて肉感的なのは若さのセイであろうが、目の毒だ。しかも素足である。ハダシなら河原の小石を踏む音がしなかったのも肯ける。

肉感的なのは太腿だけではなく、ダラシなく広がっている野良着の衿元から覗くフックラした肌が目の毒加減に於いて優っていた。半分近く顔をのぞかせている両の乳房が、思ひもかけなかっただけに余計、私の好きにくすぐるのであった。

まるでチャンバラ映画に出てくる、山小屋に住む野生娘といった感じに、私は一瞬ボカンとなって見詰めていたが、ふと気付いて、この魅惑を秘めた無礼女を無視することにし横目で眺めながら竿を握りなおした。

いくら時代劇調の肉感的女といえど、私までチョンマゲ雲助になるわけには行かない。

心のどこかでは、のどかな川筋には他に人気はないのだから、そうなって襲いかかってやりたいような気持は多分にあったのだけれども……。だいいち、折角とりにくいのを無理して、三年振りにようやくとった貴重な休暇を、ヘンな欲を出して留置場で過ごすなんてことになったら、目もあてられない。

私は、頭をもたげ放しの好き心のヤツを叱りつけて、溪流に俗念を流す雅人となるべく竿を振り、糸を投じた。

と……。又もや「フッフフ……」と来た。

正体は判った後でも、ゾクツとする色っぽい笑い声だ。チラッと振り向いたが、私はすぐに氣をとり直し、風流な雅人を粧った。

ウキが沈んだ。しなやかな獲物が又一尾、私の腰のビク箆に増えた。

私が更に糸を投じた時、今まで斜め後ろから動かなかった女が、ゆっくりした足どりで流れに近づいた。かと思うと、どうだろう、そのまま歩調を変えずに川の中へ踏み込んだのであった。ザブザブと……。

呆氣にとられている私など眼中にないように、女は川の中程まで進むと、小脇に抱えていた箆をザブリと水中に置き、中から布の塊を取り出して、水洗いを始めたのである。

流れに拡がったそれは、浴衣でもあるのか、色華やかな花模様がついていた。

私は驚いた。いくらこの村の者とはいえ、釣りを楽しんでいる先住者が居るのに、その釣り場で洗濯を始めるとは……。しかも、私の釣り糸の投げこんである辺りに踏みこんでなのだ。なるほど、川の深さは、女の膝の下あたりまでしかないから、洗い場には丁度、良いのかも知れないが……。

私は肚がたった。竿を上げるなり、「キミ、無茶すんな！」

と、それでも紳士的に抗議を始めた。すると、どうだ。女はゆっくりと私を見てニヤツとすると、クルリと私に背を向けた。

とたんに私は息をのんだ。ちょうど田植えでもする恰好で、かがみこんで洗っているのは当然の姿勢だろうが、ミニスタイルの野良着でこちらに尻を向ければどうなるかは分かりきったこと。しかも彼女は、そのミニ野良着の下には何も穿いていなかったのである。

私はドギマギした。そして一瞬後には、雅人の心境はふつとび、紳士の粧いが霧消し、ただひたすらに好き心の奴の跳ね上がり許し、そいつと同調していた。

忽然と現われた川中の美花。

それは正に、美花と呼ぶにふさわしい見事にして妖しく、華麗にして魅惑的な情景という以外になかった。

私が気がついたのは、取り落とした竿を踏み折った手応え、いや足応えのためだった。さすがに、一度、忘我から酔めると、さんと降り注ぐ晩夏の太陽に気はずかしく、依然としてこちら向きにうごめいている豊臀を横目して、そそくさと場所を変えた。惜しかった。だが、いたたまれない気持に追い立てられたのも事実であった。

とつおいつ、好き心の奴と渡り合った末、思いきって土手に駆け上がったとたん、反対側から上がってきたオバさんと出会った。

正に危機一髪であった。もうちょっと忘我の時間が長びいておれば、きっと、ぽかんと涎をたらしそうな醜態を見られていたに違いなかったのだ。

オバさんも、ハチ合わせしそうな私の出現に驚いたらしいが、一目で見通せる川中の彼女を認めた様子で、急に、いんぎんに声を掛けてきたのである。

「あのコ、ご迷惑かけましたかいのう」
何かわけがありそうだとはすぐ分かった。

「釣り場を占領されちゃいましたねえ」

私は頭を掻いてみせた。

「又、やりおりましたかい。チッ、ほんにもう、しようのない。謝ります、この通り」

オバさんは深々と頭を下げてくれた。私はシリがコソバイ思いがした。

だが、私の驚きの連続は、まだ終わりではなかったのである。

「あれ、連れて帰りますんで、迷惑ついでに手え貸して貰えませんかいのう」

オバさんは、彼女を遠く睨みながら、着物の懷に手を入れて何かを探りながら、片手で私の腕を掴んだのだ。

「おねげえします」

私は、女と思えない程の力で引っぱられ、再び河原の石を踏んだ。

川の中の彼女は、オバさんに呼ばれるとギョッとしたように立ち上がったが、洗っていた浴衣を絞りもせずに籠に戻すと抱えあげ、いきなり川下に向かって走り出した。

「コレッ。またんか！」

声と共に彼女の前面一メートルばかりのところの水がハジケ上がった。オバさんが、小石を投げこんだのである。続いて一ツ、また一ツ。彼女は立ちすくんだ。そして急にまわれ右をして反対に走り出した。流れに逆らっ

てのことだから速くはなかったが……。

「前に石を投げてッ！」

命令調のオバさんの声が、私に小石を拾わせた。当てないように投げるのだから、さして難しくはなかった。

「やめては、いかん！」

立ち止まって、こちらを睨む様にした彼女を中にして、両側一メートルぐらいのところ、ボンバンボンバンと小石が投げ続けられると、しばらくして諦めた態で彼女が、そろそろと河原に上がろうとした。

「掴まえてえ！」

オバさんはジリジリ間隔を縮めていたのだが、彼女が川から上がるや否や、すごい勢いで跳び掛かったのである。

驚きながらも、手を貸そうとした私は、弾力のある肉体感触を感じたとたんにはね飛ばされて、よろよろとした。ハッとなった目の前を、露わな見ではならないものがよぎって、太腿が躍動したかと思うと、女二人が、もつれ合ったまま、倒れこんだ。

呆氣にとられるとは、この事だったが、凄まじい勢いの格闘ぶりをみせながら、「抑えて！ 掴まえて！」というオバさんの声に、私はともかく振り廻されている彼女の、ムッ

チリと肉づいた左腕を握った。とっさのこと、同じく跳ね廻っている太腿にとりつきたいのを耐えたのだ。いや、余りの生々しさに気がとがめたのかも知れなかった。

オバさんは乱暴だった。二人がかりで抑えつけられて抵抗を封じられた彼女にのしかかるようにすると、懷から取り出した荒縄で、縛り出したのだった。

握りしめた彼女の腕の肉感と、躍動する太腿。さらにチラリズムを通り越した露出過多現象に加え、それ一枚のみらしい乱れに乱れた野良着からとび出した肩、胸、乳房、等に見まいすら覚えかけていたところへ、さらにこともあろうに荒縄が掛からんとしているのだから、私はどうしようもなく慄え出した。

オバさんは、そんな私の動揺を知ってか知らずか、自分の捉えた彼女の右手首に縄を巻きつけると、私の掴まえている左手を添えさせて、一つに縛り終えた。

両手首を縛り合わされると、彼女の動きは極端に静まった。だがオバさんは、彼女の首の下に手を挿し入れて引き起こすと、ぐるぐると上半身に、手首縛りの縄尻を巻きつけ、締めたのであった。

大きくハダケた胸元は、それでも掻き合わ

す様にしてやっていたが、プツクリと盛り上がった乳房の辺り、野良着を通してその喰い込み方がよく分かる巻き縛りの荒縄である。

「同じ縛るなら、後ろ手にしなきゃあ」

とは胸の内だけだが、私は、その若々しい肉体の前手縛りを惜しみながらも、喰い入るように眺めていた。

○

彼女は狂っているそうであった。何が原因での不幸かということは、言い難そうなので強いては聞かなかったが、月に一、二度は発作が起こり、私にしたような、釣り人の妨害をしたり、県道に坐りこんで、バスやトラックを立ち往生させたりするというのだ。しか

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

も、掴まえに行くと、暴れ廻って容易なことでは引き戻せないそうで、いつの頃からか縛るようになったということだったが、縄がかかる観念するのか、おとなしくなるので助かる、というオバさんの顔付きは情けなそうであった。

「気立ての、ええ娘なんじゃが……」

今にも涙をこぼしそうにして、縛られたまま、ベツタリと畳に坐って、ケロリとしている彼女を、ふびん気に見やるオバさんの心中を思いやり、私は、多少汚れてはいるが、魅力のある肉体の被縛体に惜念を覚えるのとは別に、大いに同情したものであった。

○

「ええコでしょうが、ポチャツとして……」

宿で、夕食の給仕についでくれた女中さんは、意味あり気な目付をした。やはり彼女はこの近在では有名人であるらしい。

「気の毒に、あんな調子じゃもん、わるさする男もおるらっしゃうてなあ」

「そりゃそうだろう」という思いで私は、それはケンカランという態度を粧う。

「したが、あのコ、えろう暴れて、わるさしかけた男のほうにケガしたこともあったそうでしたなあ……」

「そうだなア」という思いが、又もする。「ありゃあ、もう一年近くも前ですか、流れもんの三人組に掴まったそうで可哀想に手足をくくられてなあ……。山仕事帰りの村のものが通り合わせたんで、その三人は駐在さんがひっつかまえたちゅうこってしたが……」

私は危うく箸をとり落としそうになった。じーんと五体に走ったしびれるような衝動。眼の前に、彼女のあの被縛体が、生々しさを増し、全裸となり、後手縛りと変わってアリアリと浮かび上がっていた。

……：昨年晩夏、T県の山中に休暇を楽しみに行った時のことだった。

彼女がなぜ、あの若さで狂ったのか。なぜあんなに暴れるのか。なぜ、縄が掛かると急におとなしくなるのか。……？

私はそれを追及したいとは思わない。私の都合よい解し方だけで充分である。彼女には済まないが、自己解釈のほうに、私の夢をふくらませてくれるからだ。

今年も、なんとかして行くつもりである。幸い？ にして又、安からぬ筈だが、ペアにする状況に行き会えたら、と、願っている。

——（おわり）——



「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

しゅんしょう いっ ごく あたい せん きん

春宵一刻值千金

— 笠井奈保子の巻 —

塚^{つか} 本^{もと} 鉄^{てつ} 三^{ぞう}

私はハترون紙の袋から緊縛フォトを出してチラと見せたときの笠井奈保子のあの激しい動揺を、今でも忘れることは出来ない。

ドライブインの奥まった壁を背にした席

なく指先で、す早く数枚を、めくっていた。

白い頬が忽ち赤く染まり、それが額から耳たぶに至るまでひろがっていったとき、彼女は両手で、膝の上の写真を驚攔みにして、心

ではあったが、私が三十枚ばかりの緊縛フォトを彼女の膝で拡げて見せたとき、笠井奈保子は「あッ」と小さな叫び声を洩らし、わな

の激しい動揺をこらえるように、じっと息を殺していた。眼がぎらぎらと輝き、ふっくらとした指が、わなないていいるのが、横に坐っている私には、よくわかった。

やがて笠井奈保子は、くずれるように自分の膝の上に、顔を埋めてしまった。真赤になった自分の顔を見られるのが恥かしかったのであろうか。うつ伏した肩先が、わななくように揺れているのは、懸命に何かをこらえて

いる風でもあった。

緊縛フォトを是非、見せてほしいということだったので、この日、初めて逢った笠井奈保子に手持ちの若干の写真を見せたのだが、その結果が、このような有様だったから、私の方が、いささか面くらってしまった。

緊縛フォトを見て興奮するというのは、私は男性では何人も経験していた。

嘗て関谷富佐子が吊り責めにしてムチ打ってほしいということだったので、その助手を募ってもらったことがあった。三十人ばかりの志願者の中から、今でも数人の方と交際しているが、その中の一人に中学校の教師をしているという三十代の男性があった。

私の撮った緊縛フォトを見せてほしいというたつての願いだだったので、ある日の午後、



私の部屋へ彼を呼んで十数冊のアルバムをテーブルの上に並べて自由に見せた。

その一冊を手にした時の彼の手のわななきは、向かい合っている私にもよくわかった。一枚一枚めぐりながら、じっと喰い入るように見つめている目は妖しく輝き、一冊のアルバムを見終わらないうち、口がやたらに乾くらしく出してある紅茶に手を伸ばすのだが、茶碗がお皿にふれる音がカチカチと小刻みにするばかりで中々口へ運ばれなかった。

そのときは、それでも私達二人だけの私の部屋であったが、ここは人気のあるドライブインである。私は早やまって笠井奈保子に、写真を見せてしまったのを後悔した。

本当は車の中でも走りながら、ゆっくり見せてやるつもりだったのだが、一寸お茶でも飲んでゆこうかと立ち寄ったドライブインで、注文の品を待っているひととき、軽い気持でチラと見せたのが、この始末であった。

初対面の私に、こんなところを見せてしまつて、笠井奈保子も大層恥かしかつたのだらう。中々顔を上げようもしない。紅生姜のように真赤だった耳たぶの色が次第に失せてきた頃、やっと顔を上げた。

「ごめんなさい。取り乱してしまつて」

そう言って謝った彼女の頬は血の気がなくなつたように逆に白かった。

写真を胸に抱きかかえたまま、うつろな目で、じっと先の方を見つめている笠井奈保子の下ぶくれのした横顔は美しかった。

○

私が笠井奈保子から手紙をもらったのは、一月の初めであった。滋賀県の彦根市から出されているその手紙は奇ク編集部気付塚本鉄三様として投函されていたので、私が手にする大分以前に到着していたのかもしれない。

私が久々に書いた一月号の『全日空機で来た女』と二月号の『縄に恋した女』に発表した松本たえの写真を見て感心したということ、くどくどと青のボールペンで書いてあった。その範囲では読者の単なるファンレターとして読み過ぎるべきであったが、そのあとに奇クの一月号を始めて手にしたこと、それに自分で奇ク二月号を探し求めて買ったことなどを自分の境遇にからませて、たどたどしい筆ながら、かなり詳しく書いてあったのでその点は私の関心を強くひいた。

笠井奈保子が、私の撮った松本たえの緊縛フォトについて書いてあるだけだったら、或は私は折角転送されてきた書状ではあるが、



軽く一読して肩籠へ放り込んでいただろうが彼女が自分の身の上について、詳しく書いていたので、一応返信してみる気になった。

笠井奈保子からの手紙は、文章が前後したり unnecessary 部分も多いので、私が要約してみると次のようになる。

今はお正月の休みで彦根市に住む父のところへ来ているが、一月の十日頃には姉の嫁ぎ

先である東大阪市の方へ帰るから、若し十日が過ぎる頃に返事がもらえるようだったら、東大阪市の方へ宛先を変えてほしいと書いているところを見ると、彼女の本当の住所は東大阪市であるらしい。

父は滋賀県の彦根市で一人住居。彼女を生んだ母親は三年前に病死。その後、若い母親が後妻として来たが、去年の夏に父と別居し



て、現在は今里で小料理屋をしている。

笠井奈保子は三人姉妹で、一番上の姉は主人が東京に転勤になって、現在は東京に移り住んでおり、次の姉は東大阪市に住む町工場の工場主に嫁いでいるので、そこがまあ今の彼女の住所というわけである。いわば現在は姉の家の家事手伝い、兼子供のお守りをして小遣いを貰っている居候であるとのことだ。

小料理屋をしている後妻の母のところへも時々は手伝いに行っては、お小遣いを貰っているそうであるが、奇クの一月号は、その小料理屋寿亭でお客さんが持ってきて忘れたのを見て手に入れたということである。

だから、笠井奈保子にすれば、父と義母と姉との三人からお小遣いを貰えるという結構な身分であるが、また一面

自分の定住する家がどこにもないという淋しい境遇でもあるのだ。両親が揃っているときは、三人姉妹の末娘として何不自由なく可愛いがられていた笠井奈保子ではあったが、生母が病死してからは、多感な思春期を家族関係の激動の中で、過ごしたことになるわけである。

二人の姉はすでに嫁いでいたが、高校を出たばかりの彼女は、父と新しい母との三人暮らしの新生活から一転して、父の事業の失敗、両親の別居と、あわただしい境遇の変化がどのように、笠井奈保子をとまどいさせたことか。しかし素直で純真な彼女は誰からも愛され、そして、引っ張りダコに珍重されたい。

負債を払えきれなくて故郷へ逼塞した父の身の回りを世話するために、彦根市の田舎にある父の家へ行ったり、工場の仕事や住込み従業員の面倒を見るため忙殺されている姉の家の子守りと食事の仕度、掃除などに献身的に働く笠井奈保子。そして、父の事業の失敗で別居を余儀なくされた新しい母の経営する小料理屋寿亭でも、臨時のお手伝いとして結構大事にされているのである。

というぐあいに、私が笠井奈保子の手紙を

読んだ範囲でまとめ上げた彼女のラインアップは以上の通りである。私は一月の十五日頃に着くように見はからって、私の撮影した緊縛フォトでよければ見せてあげましょう——と返事を書いて出した。勿論モデルになってほしいという気持もあったが、わざとそのことについては触れなかった。

緊縛フォトといえば、今まで私の撮影したものは何千枚になるか、数えたことはないが印画紙に焼付けたものをコクヨのスクラップブックにびっしりと貼りつけたものが、何十冊とある。その他、これはという氣にいったものを四ツ切、六ツ切、八ツ切に引き伸ばしたのをダンボール箱に、これも三箱や四箱ではきかないだろう。大型カメラを三脚に据えて撮ったのなんかは、ウブ毛の一本一本、毛穴の一つ一つまで鮮明に、これは、八ツ切より六ツ切、六ツ切より四ツ切、四ツ切より全紙と大きくすればする程、鮮明度も増し迫力も抜群になるのだから、小型印画で見るとは隔段の開きがあるものである。

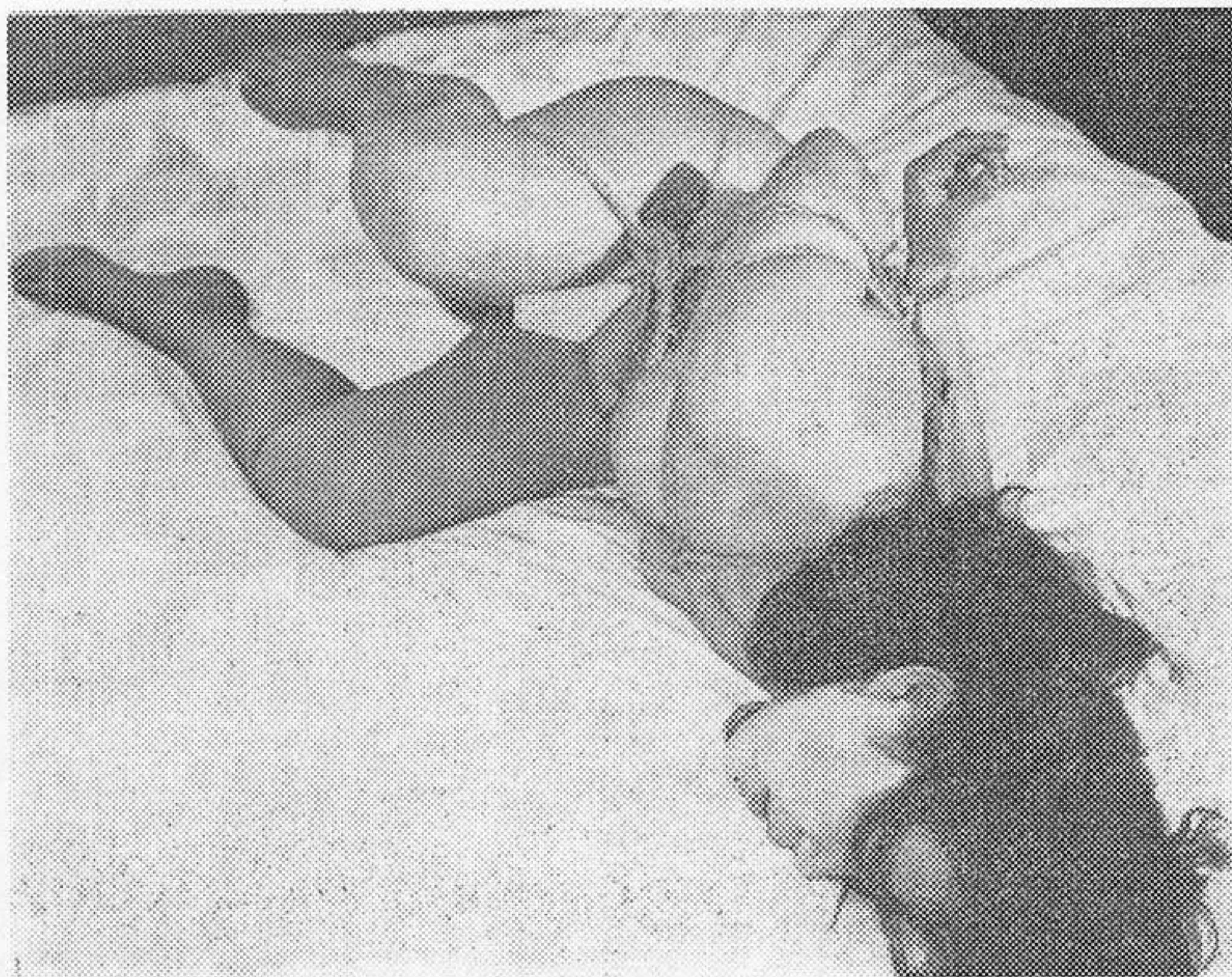
だが、このアルバムをゆっくり見てられると、こちらもかなわない。一冊のアルバムを一頁一頁ゆっくり見終わってから、再び逆に見返してゆく。そして又、始めから、めくっ

てゆく——という繰り返しをしているファンがあったが、これで数十冊、見るのだったら何日かかるだろうかと、そう思っただけで、私の方が思わず、ぞっとしてしまう。

そんなわけで、私は笠井奈保子に見せてやろうという緊縛フォトといっても、そう沢山持って行ったわけではなかった。最近撮影した分の中から松本たえのものを中心にして、深田菊子、前田真知子、高村浩子、福井桃子、荒尾慶子のものなどを二、三枚宛、袋に入れて、持って行ったのである。

それがドライブインでチラリと見せたときの笠井奈保子の反応が余りにも大仰だったので私の方が逆に驚いてしまったのだ。

色白でふっくらとした下ぶくれの顔に程よくカールした栗色の髪がふりかかっているの





が如何にも可愛い。背が高くですらりと伸びた脚。私は洋服の上からではあるが、笠井奈保子の裸身を想像して、もし彼女が緊縛モデルを志願してくれるのだったら一も二もなく——とあらぬことを考えていた。

深田菊子と同じ二十才。背も丁度、同じくらい一六〇センチ以上は、たしかにある。頬の静脈がすけて見えるほど色白なのが特に

気にいった。

ドライブイン〇を出てから高速道路を飛ばしながら笠井奈保子に、その緊縛フォトを袋ごと渡して鑑賞するにまかせた。

その日は義母の家で泊まるというので近鉄の今里駅の近くまで送って行って別れた。

○

その次に笠井奈保子から来た手紙には、緊

縛フォトを見せてもらったときの感激を書いてあり、見せてもらうだけでなく、本当は欲しかったのだが、口に出しては、よう言わなかった——と書いてあった。

そして、私は一年程前から自由日記を書いているのだけれど、この日の日記は、今までで一番長く書けた。それだけ書くことが多かったのです。と、その日記の一部を書きうつして来た。女の子の日記は、もうそれだけで一つの告白、或は手記になっているものであるが、殊に笠井奈保子の様に純真な心で物事を眺め、それをありのままに書く女性の文章は、かくしだてがないだけに、これは貴重な体験記のように思えた。

私は早速、若干の新しい緊縛フォトを同封し、実は私も貴女にモデルになってほしいと思っていたのだが、口に出しては、よう言わなかった——と書いて返事を出した。

笠井奈保子の反応はどうかと、私は半ば期待していたが、写真の礼状と共に届いた彼女の返信はモデルに関してはNOであった。

理由の第一は、自分は決して美しくないこと。こんなブスがモデルになったってフィルムの無駄であるとさえ書いてあった。第二には三カ月ほど前に初めて奇クを見て、このよ

うな世界のあることを知ったばかりで少しも経験がなく、とてもモデルなんか勤まりそうにないこと。只、自分はこういうわけか知らないけれど、同性が縛られた写真を見るのが好きなので、これから是非、見せてほしいと書いて結んであった。

私は更に数枚のフォトを同封して、貴女は

決して思っておられるような不美人ではなくこの間お逢いして拝見したところでは素晴らしい美人で、私は一目見て大好きになったと賞め上げておいた。経験のないのは誰でも最初はそのうなので、緊縛モデルとしては却ってその方が貴重な存在であるということも書いておいた。



一月から二月にかけて、笠井奈保子と私の交信が続いたが、一月末は松本たえから上阪出来るという通知を貰ったのをキャンセルして、東京の踊り子こと鈴木千鶴子の緊縛フォトを撮影し、とにかくにも、これをルポ記事にした。二月と三月に入って、私は福井桃子の、あの大きなお腹をフィルムに残しておくため出勤しなければならなかった。この方は放っておくとパンクしてしまうので、待ってくれというわけにはいかない。

以前に、鹿児島島の読者の方で臨月間際に撮ってほしいというので、わざわざ重いカメラや資材を提げて行ったのに、急に前日の夜産気づいて入院したという苦い経験があるが、九カ月から臨月というとき、いつ何時、突然お腹が痛くなったと言いかねないから物騒である。しかし、福井桃子に関しては、彼女の献身的な協力のお蔭で、臨月の出産ぎりぎり間際まで撮影出来て幸運とってよかった。

私は撒き餌のつもりで、返信のたびに、いつも数枚の美しい緊縛フォトを笠井奈保子に贈呈した。そして、もし緊縛モデルになる気持が起ったら、いつでも便りを下さい——ということを書き添えておいた。そして彼女が緊縛フォトを生まれて始めて手にした

時の動揺を思い浮かべて、私の送る数々のフォトを、どのような感情で眺めているだろうかと、あらぬ妄想を馳せたりした。

奇ク編集部へは、ひょっとしたら笠井奈保子という芳紀二十才の女性のルポを記事に出るかもしれないと、早々と一報をいれておいたが、この調子だったら、とても6月号には間に合うまいと諦めムードであった。それが三月に入って半ば近くになって、控え目ながら、都合によってはモデルになってもよいという嬉しい便りがきた。

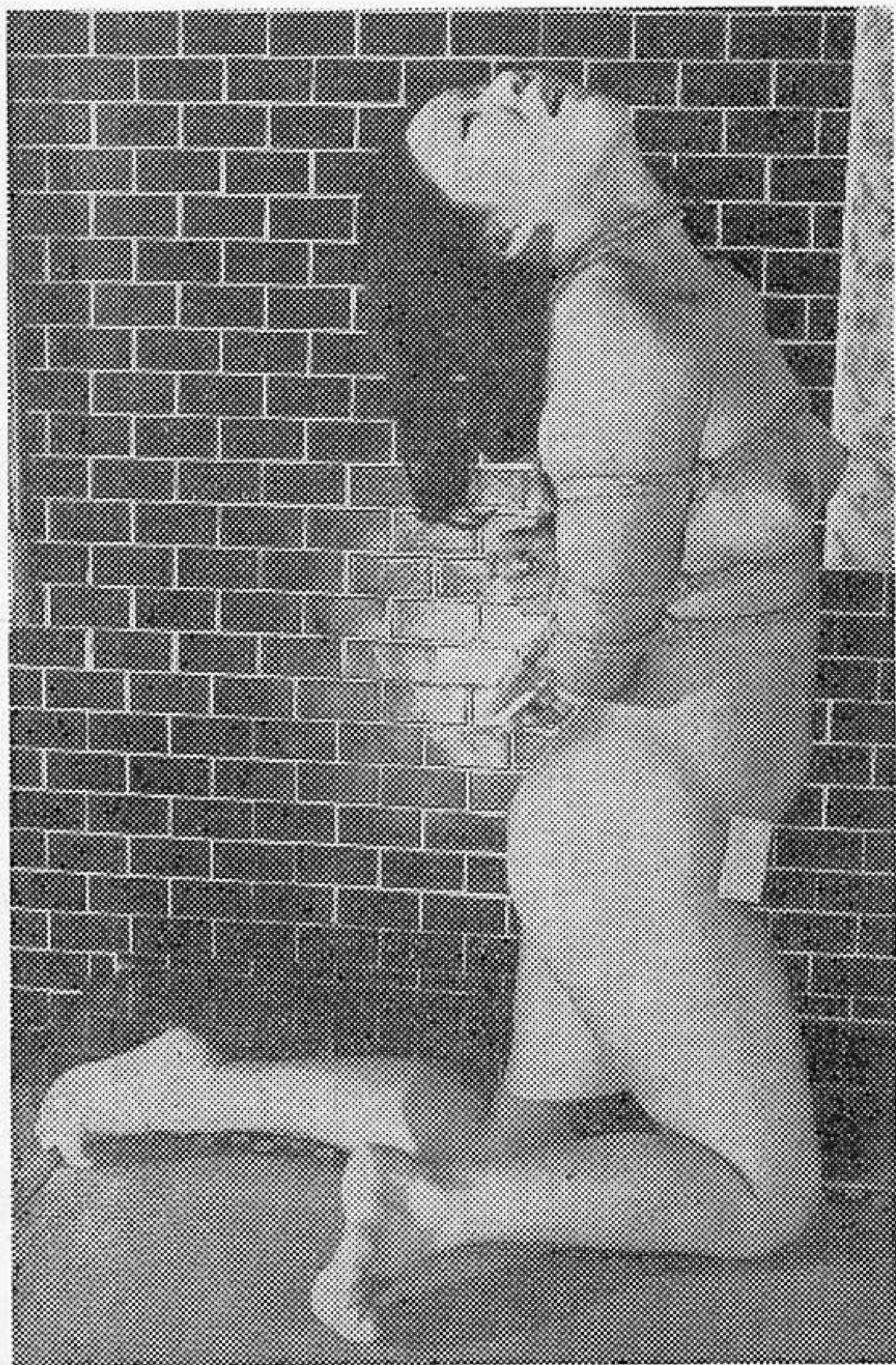
といっても、それはまことに齒切れの悪いものであった。相変わらず自分の美人でないことを理由に、カメラの前に立つのは気が進まないのだが、余り熱心にすすめられるのでほんの一、二枚撮って頂こうかしら——というのであった。笠井奈保子が緊縛フォトを眺めてどのように心を動かし、モデルの勧誘を受けて、どのように迷ったか、手紙には書いてなかったが、なりたくもあり、なりたくもないという心理的な動揺が、その短い文面の中にも、よく窺えた。

それともう一つ。今までは書いていなかったことだが、いよいよ、モデルになろうと決心して起こってきたのか、裸になって縛られ

るのが、とても恥かしくって——と、逡巡の気持を書いていた。送って頂いたお写真は、皆、素裸で縛られていますけれど、もし私がモデルになる際も全部脱がなければいけないのでしょうか——と書いているのも、いかにも純で初心な^{うぶ}気持を、よくあらわしている。私は早速返事を書いて、落ち合う日時と場所を知らせた。

とにかく、一度縛られてカメラの前に立ってみなさい。どうしても嫌で辛抱出来ないようだったら、その時は遠慮なく言って下さったら、撮影の途中であっても直ぐ中止しますから——と付け足した。そして、悪趣味かしらないけれど、もしお差支えなければ、貴女の自由日記を見せてほしいと書いた。

○



その日は、昨夜降った春一番の激しい雨風が、まるで嘘のように思われる春めいた陽ざしの暖かい日和であった。

私は笠井奈保子を助手席に乗せて郊外へ向けて車を走らせていた。窓をびったりと閉じていると、外界の騒音が一切シャットアウトされて、この動く密室の中は、ゆったりとしたクッションの応接室であった。

「今日は、いいお天気ですね」

私は当たりさわりのない話題から話を核心へ持ってゆこうと思っていたのだが、笠井奈

保子は膝の上の包みを、しっかりと両手で押さえて固くなっている。お喋りの女性だったら、私がそう言葉をかけただけで、昨夜の雨風の話とか、連休に遊びに行ったこと、或は富士山の遭難事件のことなどを、べらべらと喋るのだが、笠井奈保子は、ただ「はい」と答えただけで、私の傍に坐っているのが、いかにも恥かしげなのである。

先日、僅かな時間だったが顔を合わせているので初対面ではないし、それに、何度となく手紙の交換をしているので、私にとっては

何となく笠井奈保子は身近かな存在に思えて親し味を感じるのだが、満二十才になったばかりの彼女にとっては、自分の秘密を知られた唯一人の相手として、面映ゆく思っているのかもしれない。

「この間、手紙でも、ちょっとお願いしておいたんだけど、貴女の自由日記帳は、持ってきて下さいました?」

「あら、あんなの恥かしくって、とてもお見せできませんわ」

笠井奈保子の耳たぶから頬にかけて、ぽっと赤く紅に染まった。私はチラとその気配を見ただけで、顔は殊更、正面に向けていた。

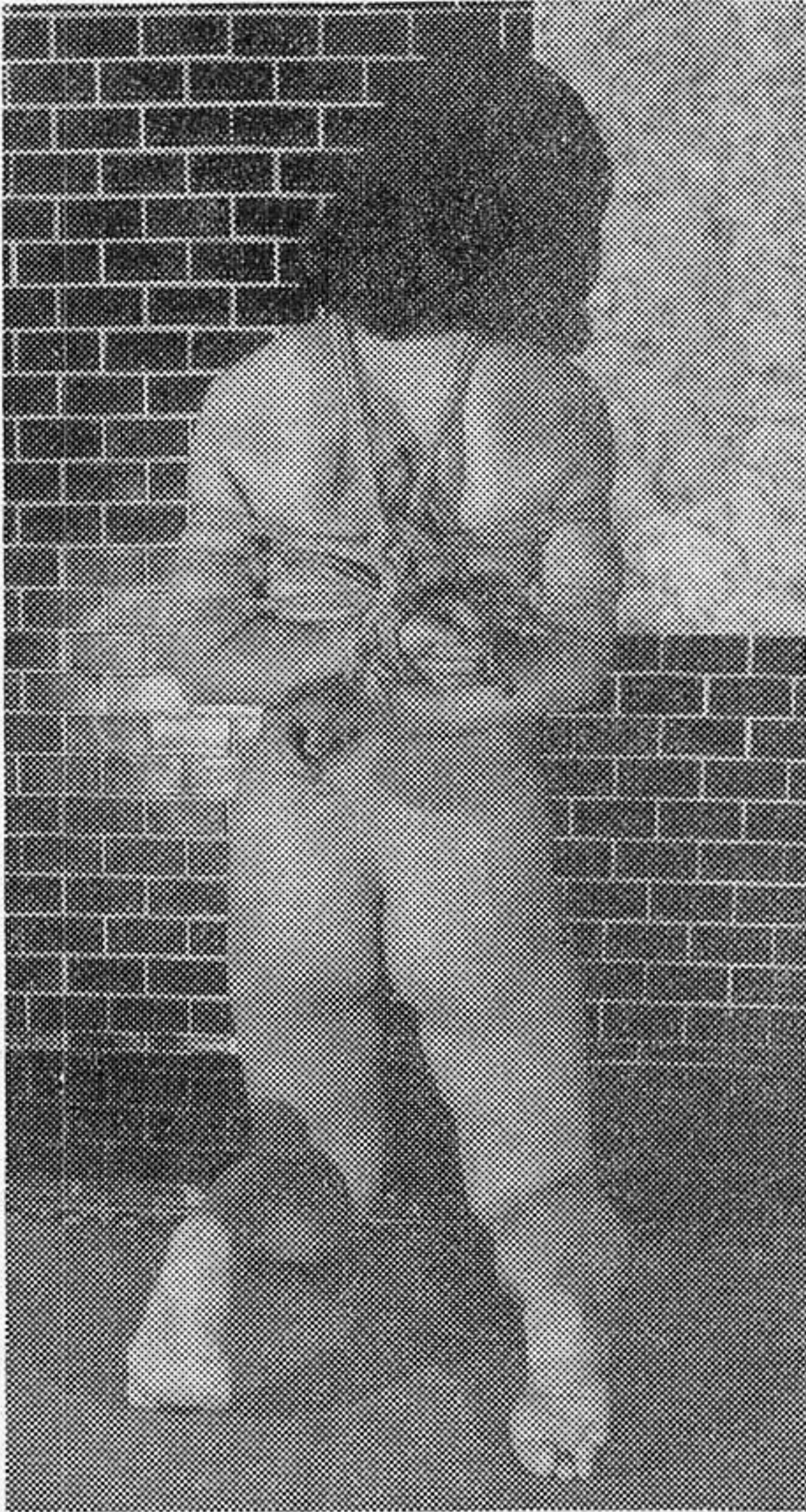
「その膝の上の包みは、そうじゃないんですか? 日記帳とは——」

「これですの。これは今までに頂いたお写真をアルバムに貼ったものですわ」

「そうですか。私は、てっきり自由日記帳を持ってきた下だったのかと思っていました。是非一度、見せて頂きたいものですね」

「私の日記なんて、つまりませんわ。それに字も下手だし……」

車は大きく右へカーブして、坂道に差しかった。目ざすガレージ付きのモータルは、すぐそこである。



私は笠井奈保子のような、SMプレイの何たるかも知らないような純な娘を徐々に飼育して緊縛フォトを撮ってみたいと常々思っていた。勿論、完全飼育済みのM女性も貴重な存在であって、女性のM心理探究には欠かせないのだが、いつもいつも、そういう女性ばかりを対象にしていると、たまには新鮮な瑞々しい果実をもぎとりたくなるものである。

笠井奈保子は、同性の緊縛フォトを見るのが好きだとは言っているが、奇クにしても、一月号と二月号の、たった二冊を読んだのに過ぎない。ましてや、SMプレイというものが、どんなものであるかは、知らない筈である。一般的な知識は、見事にすくすくと成長した身体並みに、ある程度仕入れているかもしれないが、SMの知識といえば皆無に等しいのと違うだろうか。ただ、自分が始めて見た緊縛フォトに余りにも心が動いたので、その感情にとまどいを覚えてるに違いない。車を車庫へ入れて部屋に上がる。すべてがセルフサービスで案内人は入って来ない。魔法瓶の湯がなくなればポットで沸かすように冷蔵庫の上に置いてある。恥かしがり屋の笠井奈保子にとっては、こうした無人サービスの方が、顔がささなくて好都合だろう。

お茶を飲みながら、彼女は自分の持ってきたアルバムを私の方へ黙って差し出した。

私が手紙を出すたびに同封してやった写真が、もうこんなにも溜まったのか、と驚くほど四十枚ばかり綺麗に整理して、きちんと台紙に貼りつけてある。バラバラの写真も、こうして順を追って改めて貼ってあると、直接

印画紙に焼付けた鮮明な画面であるだけに中々見てたえがある。このように大切にしてくれるのだったら、私としても贈呈した甲斐があったというものである。私は今日持ってきた荒尾慶子と高村浩子の緊縛写真十枚を、アルバムの最後の頁に挟んで返した。

「あの、私、お願いがあるんですけど」



笠井奈保子は、うつむいたままアルバムを包みの中にしまい込んで控え目に言った。私は彼女を裸にして縛る口実、いや、そのきっかけを、どのようにしたらよいかと考えあぐねていたところなので、その言葉を渡りに舟と受けとっていた。

「どんなこと？ 言ってごらん」

「私、あの、くくりはる前に、あの……恥かしくて、よう言わないわ」

「そんなにじらさないで言っごらん。なんだったら、僕はあっちを向いていてもいい」

「写真とらはるんでしょ？」

「そりゃそうだよ。この前の手紙では縛って写真を撮ってもかまわないけどって、書いてあったから、僕も今日は、そのつもりで来たんだけどね。いけないのですか？」

「裸にならなきゃ、いけないんですの？」

「そりゃ、裸になってくれりゃ、それに越したことはないんですけど、そこは貴女の気持ちにまかせますよ」

「だったら、私をくくりはる前に、裸の写真を撮って。お願い。私、くくられるの、始めてだから、怖いの」

「それだったら、今から、お風呂へ入っていらっしやい。そうしたら、こちらで撮影の準備



備をしておいてから浴室へ写しに行きます」

やっと撮影のきっかけが出来たので、私はカメラと小道具を取りにガレージへ行った。

カメラのシューに充電を完了したストロボを装置してから浴室へ向かった。ACコードをつながなくても三十発は充分、撮れる筈である。窓を開放して湯気を追い出しておいてから、私は笠井奈保子の裸身を主としてバッ

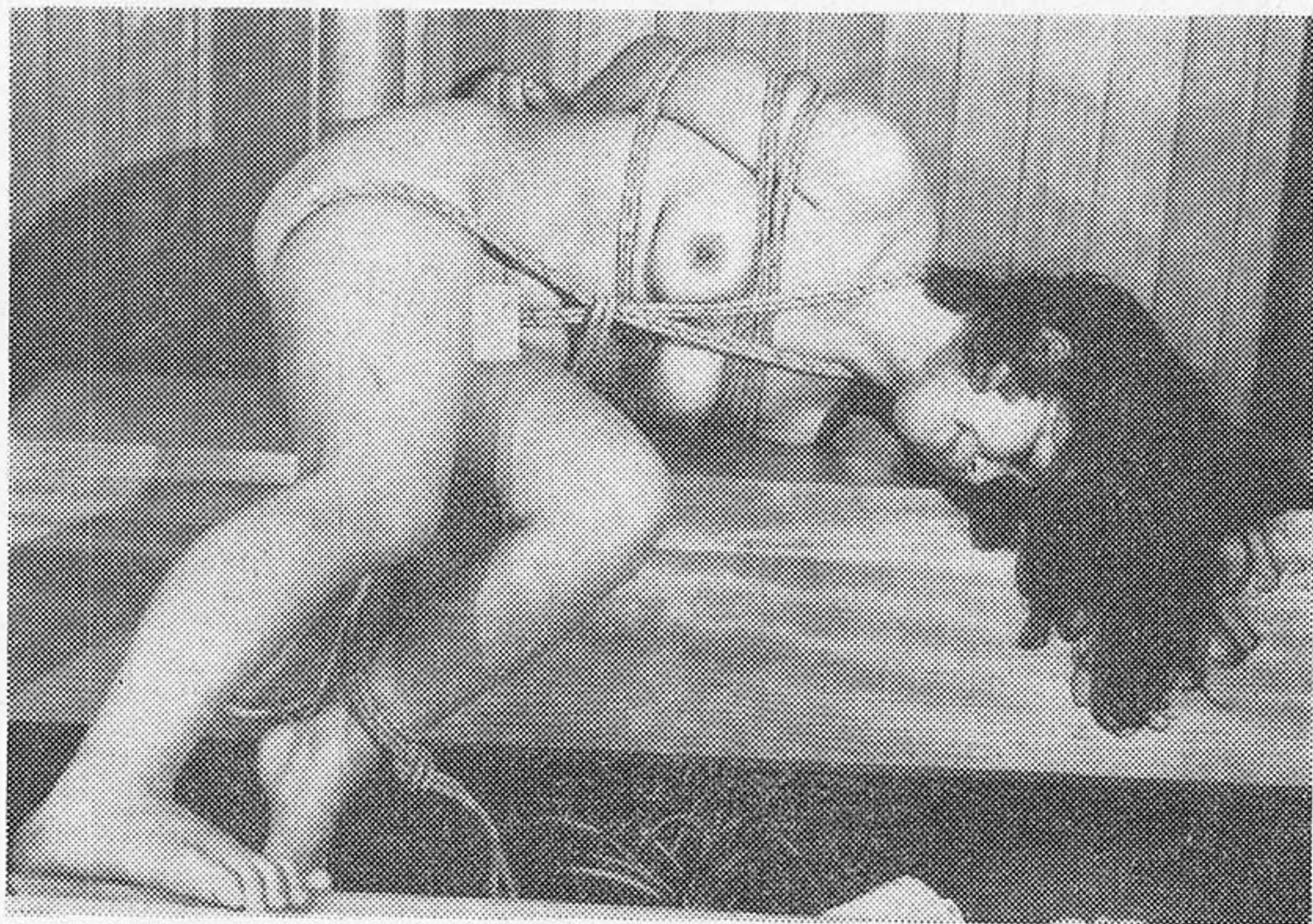
クを狙って矢つぎ早やに十枚ばかりシャッターを切った。彼女の羞恥心を幾らかでもやわらげ、そしてカメラとストロボの閃光に慣れさせるのに役立つと思った。

シャッターを切り終わると、私はそうそうに退散して別室へ戻り、フィルムを入れ替えた上で撮影の準備にとりかかった。



私は肩に羽織った浴衣をぱつとめくって、バスタオルだけにしておいて、彼女の両腕を背後に回して手首に縄を掛

そうしておいてから私は、縄尻を胸の方へ回していった。ピンク色の肌にむごたらしい縄が掛かって、一瞬その部分を白く変色させそして、やわやわとした餅肌にぐっと窪みを



つくる。一卷き二巻き、乳房の中央の、グミのような乳首を避けて縄は妖蛇のように、ひしひしと二の腕と胸を締めつけてゆく。

後手首、胸——と十分に縄を掛けておいてから、私は手早く、笠井奈保子の腰に巻いたバスタオルを引き剥いで部屋の片隅に投げ捨てた。それは、呼吸をはかった一瞬の早業であった。

「あッ」という低いつぶやきにも似た声が彼女の口から洩れたが、そのときは頼みのバスタオルは丸められたようになってテレビの傍に落ちていた。うずくまるように笠井奈保子の肢体が畳の上にくずれるところは、まことに格好の被写体になった。私はカメラを手にするや否や、ピントを合わせるのも、もどかしく、あわててシャッターを切っていた。

一枚、また一枚——。

今や、笠井奈保子の心情なんか考えている暇はなかった。如何に美しい緊縛フォトを物にするか——、そのことだけが、私の念頭にあった。カメラアングルを変えてファインダーグラスの上で彼女の緊縛姿態を執拗に追っていた。無我夢中のひとときが過ぎると、私の心に幾許かの反省が湧いてきた。

泣き出しそうな顔をじっとこらえて、うずくまっていた笠井奈保子は、私が近づくと、うるんだ瞳で、じっと私を見上げた。

「どうだい、痛くないかい。辛抱できなかったら、解いてもいいんだよ」

「いいえ、解かなくってもいいの。辛抱するわ。だけど……私」

「だけど、なんだね。言ってごらん」

「いやッ、そんなこと聞くの。恥かしいわ、そんなこと言うの——」

そう言ったかと思うと、笠井奈保子は私の腕の中に体重をもたせかけてきた。私はその肢体を軽く受けとめておいてから畳の上に、ころりと転がした。

豊かな肉づきの臀部であった。芳紀まさに二十才の汚れない白い肌は、若さのみが持つ瑞々しいふくらみであった。丸味を帯びた臀

部から流れた美しい線は、太股から脛へかけてなだらかな起伏を見せている。洋服の上から見たときに想像したよりも素晴らしい肉の盛り上がりようである。

私は配置したストロボの位置と方向を訂正しておいて、ファインダーを覗いた。笠井奈保子の白い肌の上に、稲光のような閃光が降り注いで、この第一回目の撮影が終わった。

彼女は自分から不美人だと謙遜しているがなかなかどうして、十人並み以上の美人であるし、それにプロポーションだって万更でもない。第一、はち切れそうな若さが何といっても魅力である。私はもっともっと、いろいろ変わったポーズを撮影したかった。しかしそれは今後の彼女の反応を見てから考えることとして、今日は一先ず、これで終わることにした。今日の経験で彼女が嫌だといえ、それも仕方がないと思った。若し笠井奈保子の方から、積極的に撮ってほしいということになれば、これは最上なのだが――。

○

笠井奈保子からの反応は、すぐあった。別れしなに、ヌードフォトを含めて今日写した写真は送ってあげる――と約束してあったのだが、その写真が焼き上がらない間に彼

女からの手紙がきた。

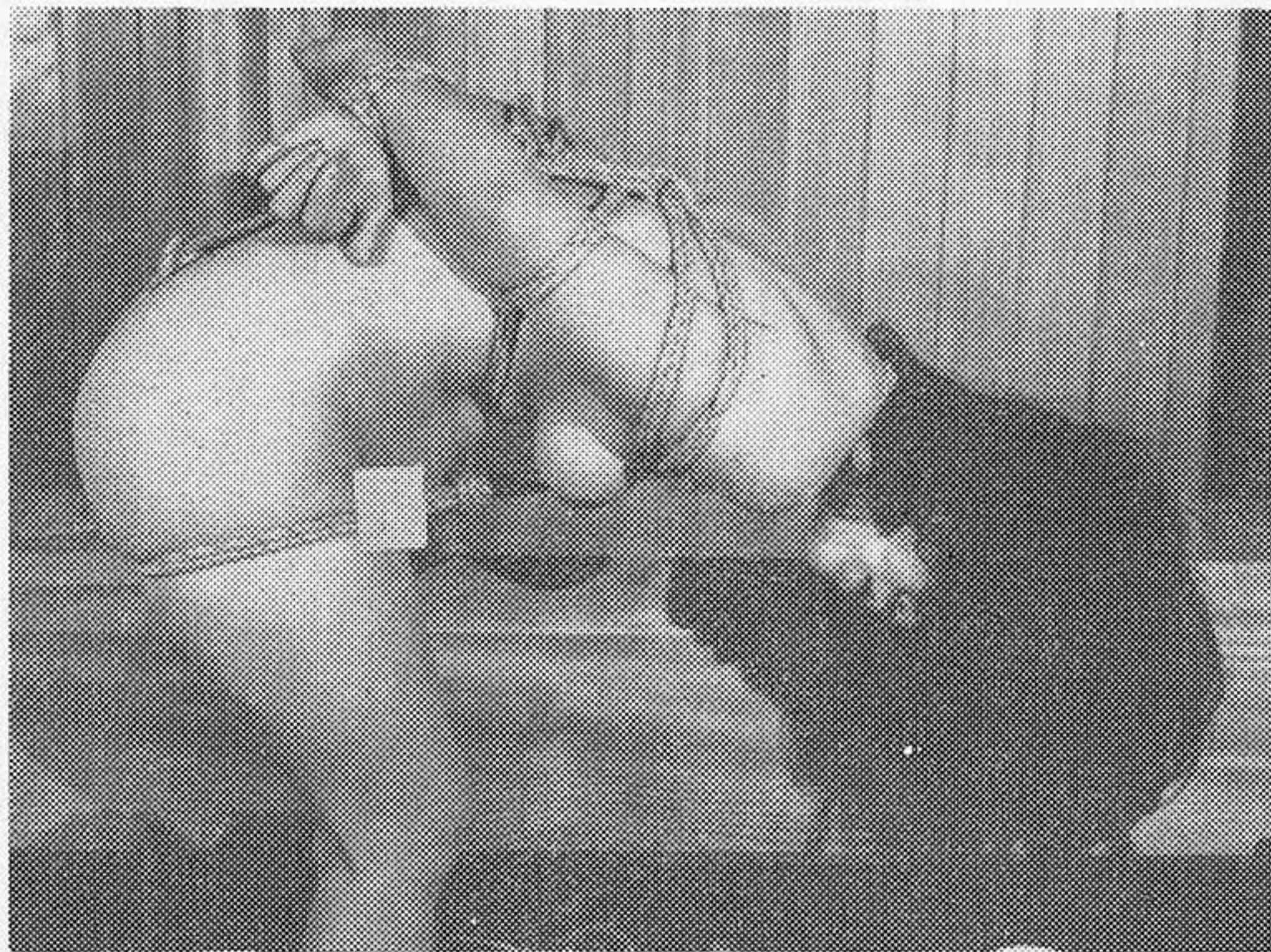
死ぬほど、とても恥かしかったが、大変楽しかったと、あの日のことをこまごまと書いているのを読むと、じつとうずくまっていた女が、こんなことを考えていたのかと私の方が考えさせられたくらいである。やはり日記を書いているというだけあって、笠井奈保子は一寸した文章家かもしれない。

△あの日は私、はじめてなので恥かしがってばかりいて、ごめんなさい。次の機会にはもっと大人になって埋め合わせします▽

と、書いているところを見ると、大分、脈がありそうなのである。私は出来た写真を同封した手紙で逢う日を約束した。

だが、ここで私個人にとって、一つのハプニングが起った。というのは、一月の末東京から鈴木千鶴子が来阪す

るといので、折角、予定していた松山の福竜こと松本たえとのSMプレイをキャンセル





したのだが、その松本たえが突然、前ぶれもなく来阪したのである。従って、笠井奈保子

一步も二歩も前進ということが出来る。部屋に落ち着いてからも、今日は緊縛フォ

の第一回と第二回目の撮影の間に、松本たえとのSMプレイが入ることになるのだが、それはいずれ、後の機会に改めて書くことにしよう。

さて、笠井奈保子との第二回目の撮影行であるが、第一回目で、或程度のトレーニングというかウォーミングアップをしていたので、お互いにリラックスしてやれた。緊

縛モデルとして志願してきたのでもなく、また縛られてみたい——と積極的に言い出してきたのでもない笠井奈保子が、第一回の縛られの経験によって、曲がりなりにも、縛られた上でカメラの前に立ってもよい、という意志表示をしたことは、

トを撮影するという、はっきりした目的を持っていたので、次々と、撮影の準備を進める一方、笠井奈保子に対しても、入浴を済ませたら、いつでも緊縛プレイに入れるよう心づもりしていてもらうよう、伝える。

「私、恥かしいワ。どうしよう」

と、盛んに恥かしがって尻込みしている風情だったが、とり合わずに浴室へ追い込んでしまふ。第一回目のときと違って、笠井奈保子の身体つきや特徴もよく掴んでいるし、その際、撮影した写真によって事前に研究しておいたので、縛り方、ポーズのきめ方などについては、一応の腹案を立てていた。

緊縛ずれのしていない純真で年若い娘を徐々に飼育してみたい——という念願は予ねてから抱いていたが、さて、となると、そういった条件に合致した対象が、そうおいそれと見つかる筈はない。幸い、笠井奈保子は、二十才という若さで、たった二冊ではあるが奇クを読んでいて、SMに理解がありながら、（同性の緊縛フォトを見るのが大好きだという点が強心）しかも、ただ一回も緊縛の洗礼を受けていないという処女地である。

今年の一月から、三カ月近くかけて、やっと納得させてモデルになって貰うことに成功

した女性であるから、彼女のSM度から見た生長ぶり、ひいては私の飼育ぶりを記録に残しておきたいものだった。

笠井奈保子は恥かしがり屋である。

白い頬をすぐ赤く染めるのも一つの証左であるが、洋服を着ているときは赤面するのは顔だけと考えていたのに、この前、裸にして

みて、赤くなるのが顔面だ

けでなく、裸全体の肌がみるみる赤くなってゆくのを

じかにこの目で見て、私はびっくりした。恥かしさの

ために、裸の肌全体が紅く染まってゆくのを私に見ら

れてしまったということが彼女に一層羞かしい気持ちを

させたのだろう。しかしその羞恥心は、必ずしも不快

感と直結しているものでないことだけは想像された。

今日再び、私の目の前で全裸の肌を晒し、その上、麻縄で縛られた姿をカメラの目で追究されるということを知り、こうして出

かけて来たのであるから――。

縛られた女性の写真を見るのが好きだという彼女の心情は、果たしてどのように推量しているものだろうか、今のところ私にも雲を掴むようで、はっきりわからない。

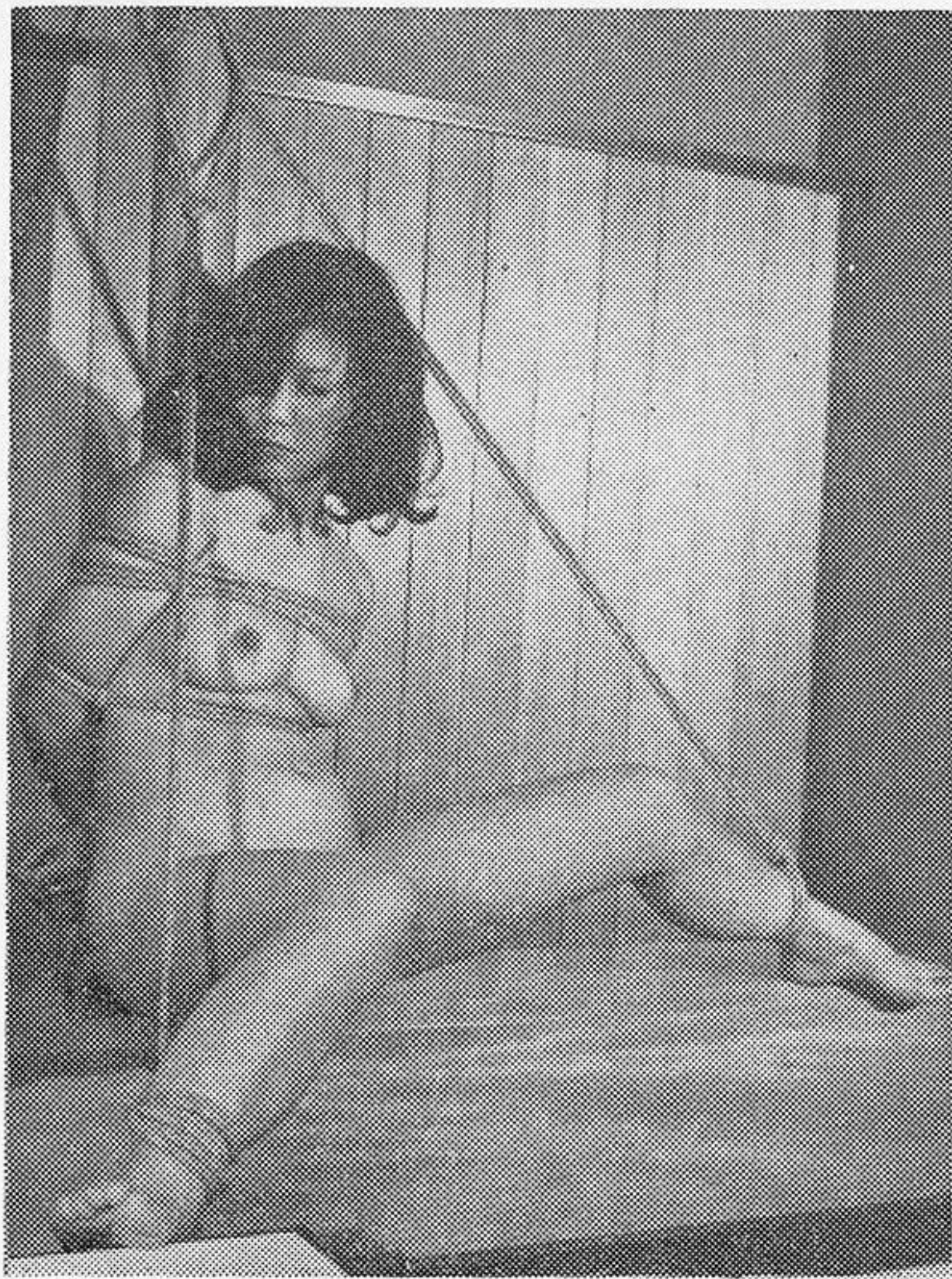
私の方の撮影の準備が終わっても笠井奈保子は、なかなか部屋へ戻ってこない。私は脱

衣室まで迎えに行つて「いや、いや」と尻込みする彼女の手首を引っばつて連れてくる。

この間取りは、玄関の向こうが脱衣室兼洗面所。隣にトイレと浴室が続いている。玄関の片方は、テレビ、ジュークボックス、冷蔵庫などの置いてある部屋。そして襖を隔ててそこが寝室というわけで、ダブルベッドが

デンと据えてある。襖は勿論とりはらったが、広い割に緊縛フォト撮影には、まことに使いにくい間取りである。なんの予備知識もなく飛び込んだホテルであるだけに、贅沢は言っておれない。とにかく、与えられたスペースを最大限に活用する外はない。ベッドの上の掛蒲団はとりはらって、カメラを据えた三脚やストロボを、配置しよくしておく。

部屋の中央で浴衣を脱がせバスタオルを剥ぎ捨てて。全裸の肌を真赤に





染めた笠井奈保子は、両手で胸を押さえて身のおきどころのないように前かがみになり、両肢をすり合わせている。いつ何時^{なんどき}両腕をうしろへ回されるかもしれないという恐怖心におどおどとして私の方を横目でチラチラと見ているが、或はそれは私の思い過ごしで、縛られるのを持っている、風情であるかもしれ

ない。

「最初は、余り痛くない軽い縛りでゆくからね、そう堅くならなくてもいいよ」

そう言葉をかけておいて、掛蒲団をめくり白い敷布だけになったベッドの上へ連れてきて、古びて色の変わった綿ロープで素早く高手小手に縛り上げた。このロープは古道具屋

で求めたもので、もうくたくたに使用いたびれて柔らかな手ざわりのものである。乳房の上下を二巻きしておいて後手首を括った縄尻を頸の両側から回し、胸で一つ、二つの括りコブを作って前から尻へ縦縄を掛けて女体を真ッ二つに割ってしまう。

思わず顔を染めて、へなへなとくずれるように蒲団の上に坐るところを、ポーズをとらせる。二十才の、若々しい匂うような肉づきがロープにくびられて、ふっくらとした肌を一層ふくよかにさせている。若さというものは、いいものである。謙遜して笠井奈保子は自分を不美人だといっているが、なかなかどうして、こうして全裸で縛られてポーズをとった姿は、惚々とするほど美しい。

身体に自信がないと言っていたが、ファインダーから覗いたプロポジションは素晴らしく見事といってよい。私は坐らせたままで三ポーズ、ころがせて二ポーズ、シャッターを切ったが、背景がもう一つよくないのが気になる。しかし、今はそんなことをいっておれない。一〇五ミリの標準レンズを用いて、出来るだけ自然に近い笠井奈保子の全裸の全身像をキャッチして縄を解いた。

最初から余り急に事を進めて失敗してもい

けないので徐々に飼育してゆくため、手間や面倒は、この際、目をつぶることにする。

「どうです？ 痛くありませんでしたか」

「ええ、それほど……」

笠井奈保子は羞かしげに、少しロープの跡のついた手首をさすりながら答える。大分裸にも馴れたようである。次はもうちょっと、長く縛っておいても、よさそうである。

次に取りだしたのはビニールの紐、といっても、これは市販しているものではない。電気のコードの電線を抜いたもので、肌にぴったりと密着するほど伸縮性があって、それでいて肌に傷つけることがない。しかも、縛ったままで放置しておくと、じわじわと肌を締めつけてくるという幾分ゴムに似た性質を持っていて、SMプレイには、もってこいの緊縛用具である。

今日、笠井奈保子に用いるのは、肌ざわりがよいという点を買ったので長時間放置しておいて、じわじわと肌を責めるといったり、或は湯や水に浸して濡れてもよいという責めに利用するでもない。ましてや、ベッドの上でのSMプレイの濡れ場に利用しようというわけでもないのは勿論である。

ベッドの頭の方の背後は板張りになってい



て人間の乗れる位の幅に板が敷いてある。ストロボを保持する場所がないので、思うように配光の変化を与えることが出来なかったが三脚の上の雲台の首が振れる範囲で二灯ほど活用して、とにかくシャッターを切る。

ともすれば顔面に垂れかかろうとする髪の毛を透して、白い額や頬が見えかくれする表情は、二十才という若さばかりでなく、笠井奈保子が十人並み以上の美貌の持主であるということカメラは正直に立証していてくれ

る。白い肌と伸びやかで豊かな肢体は、緊縛モデルとしても上玉である。ただ、ずぶの素人でポーズのとり方は、まことにぎこちないものがある。私の言葉でするアドバイスに対しては素直に反応するのであるが、なにしろ人前で裸になるということすら、生まれて初めての経験であるのだから、こうしたら自分の美しい面が出るという計算など、とても考えられないのも当然である。

僅か幅五十センチばかりの狭い板敷きの上

で後手に縛られたままで言われた通り、ポーズをとるのであるから、羞かしがり屋の笠井奈保子にとっては、自分の前をかくすのが、やっつのことであつたろう。私もまた、これを一つの踏石と思って、フィルム一本分も撮らずに縄を解いた。

次は、まんだらの柔らかくて肌ざわりのよいロープをとり出す。これは何かの芯に用いるもので強靱さはないが、いくら強く締めつけても肌に痛さを感じさせないので、専ら初歩的な女性によく用いた。それとベテランのM女性に対しても、三時間も五時間も連続で縛っておいてSMプレイに耽るというときは肌を傷めないので重宝でもあった。

そんなわけで、今度は大分縛りに慣れたところで、いささか強い緊縛を、このまだらのロープで試みてみようと考えた。

太股あたりの肉づきがよすぎるが脚が長くプロポーションがよいので、ポーズによっては緊縛の肢体が非常に美しく見える。黒タイルの前に立たせて、側面、背面とシャッターを切り、正面に向かせようとしたが、どうしても羞かしがってポーズをとらない。顔から首すじにかけて、みるみる真紅になってゆくのが私の目にも、はっきりとわかる。余り

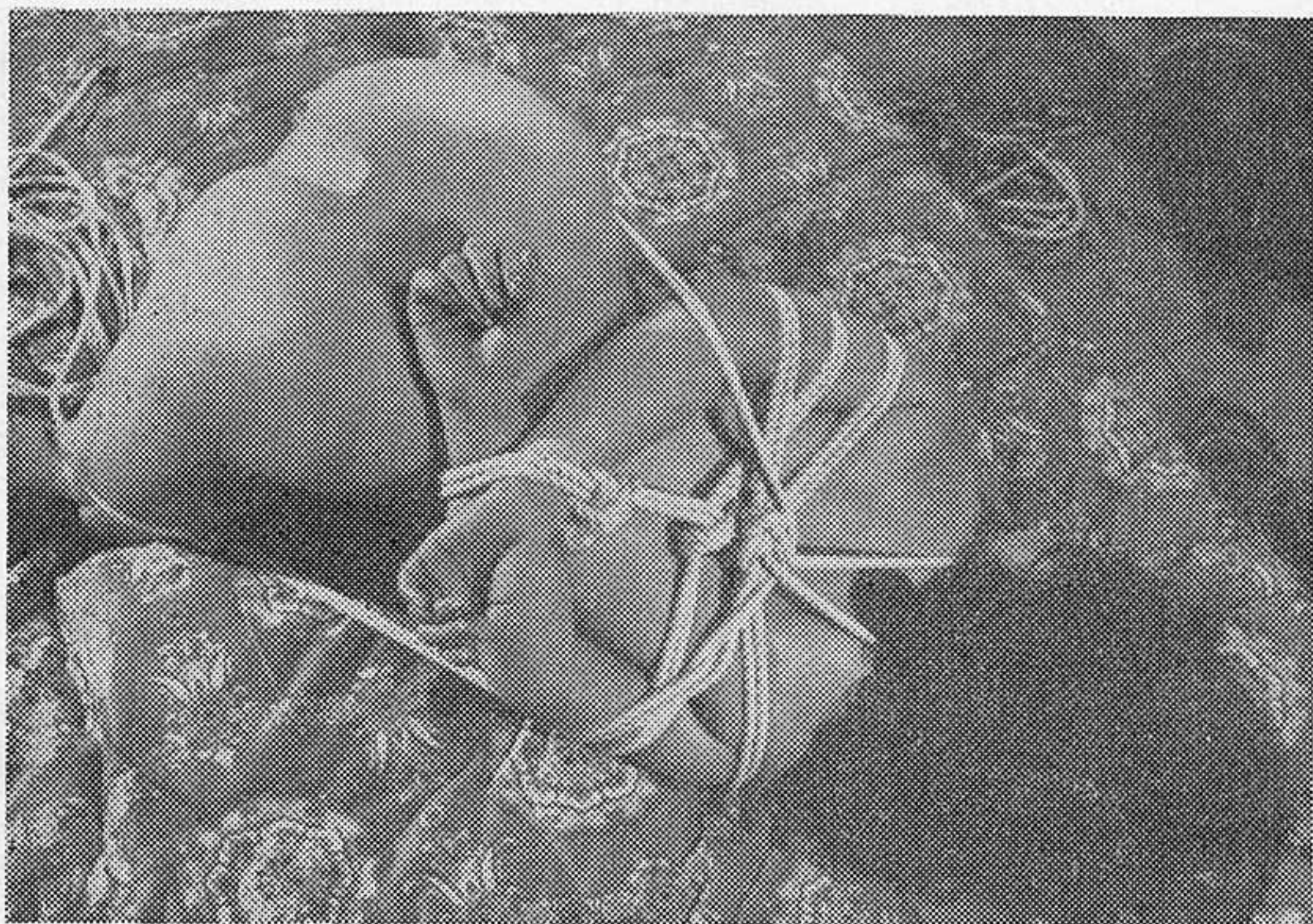


のことに気の毒になって、正面に向いたポーズだけは許してやる。両手をうしろに縛られていて、前をかくすことも出来ないのだから無理もない。

「それじゃ膝をついて坐りなさい」というと喜んでポーズをとる。愁いを帯びた顔の表情も羞らいを含んだ肢体も、俳優と

か踊子とかいう演技的なものが皆無なだけに素人じみた初々しさが、にじみ出ている。

腰を浮かして中腰にさせる。ふっくらと肉づきのよいお尻である。若々しさの溢れる水蜜桃のような瑞々しいヒップである。二の腕に喰い込む縄目も、遠慮会釈なく、ぐっと思いきり縄を締めつけたので、くぼんだように



いくつもの起伏を、見せている。

部屋のヒケがないため黒いタイル張りの壁の前でポーズをとらせたが、白い女体だけがぼうと浮かんだように明るい。ストロボの陰をつけないため、左右から挟むようにガイドナンバー32を二灯用い、上部から24を一灯、それにカメラの背後からメインライト一灯、計ストロボ四灯を配置し、更に五〇〇Wフラッドランプ一灯を45度の角度から照射する。

私はシャッターを切り終わるたびに次のポーズを口頭で指示する。笠井奈保子はなんといっても初めて緊縛されたズブの素人であるから、顔面の表情についてまでは指図するところまでは来ていない。只単に肢体の変化を伝えるだけである。後手首の位置が下がると、それに連繫した首縄

が締まるので、思わず咽喉をのけぞらして苦痛の表情が顔面に出る。

巧まずして思わず表面に出てきた絶妙のポーズである。私は寸秒の綾を狙ってピントグラスを覗きながらシャッターボタンを押す。

笠井奈保子は果して、心中どのような思いでいるのだろうか。口からは一言も言葉を出さず、私の指示通りに易々諾々として身体を動かしている。その動作を眺めていると、何だか楽しげにさえ見える。緊縛フォトを見るのが好きな笠井奈保子は、縛られることもまた好きなのだろうか。

ここで縄を解いて休憩に入る。トイレへ行ってきた笠井奈保子は浴衣をまとって、部屋の隅で、うずくまって小さくなっている。

次に縄は、やはりまだら紐。そして場所はベッドの背後の板張りの上。中央に丸い柱が立っているのを利用し両足首に縄をかけて柱に引き揚げ開脚縛りにしてやろうと考えた。

松本たえのときは、角柱に宙で縛って両足首を頭上高く引き揚げたのであるが、体重のある笠井奈保子、しかも大の羞かしがり屋ときているから、宙に浮かすということは、とても無理だと思ったので、徐々に飼育することとして、先ず板張りの上で緊縛ポーズをい

ろいろとらす。やがて足首に縄を結び、柱の縄に連繋させて引き揚げる。彼女は必死になって足を挙げさせまいと抵抗するが、縛られた両手首は柱に固定されているので、その努力も、やがては空しい結果となる。

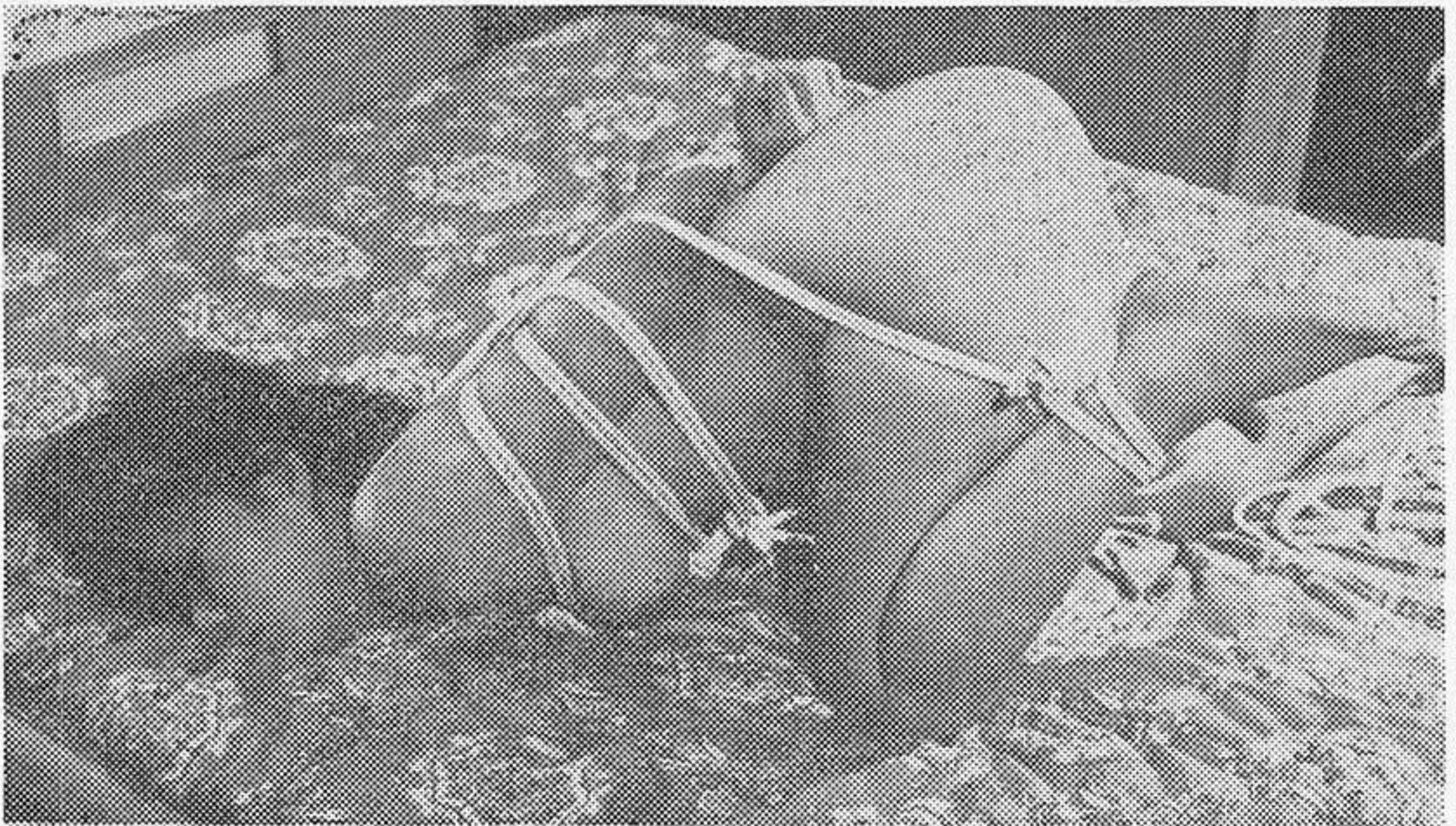
左の足首を高々と挙げさせておいて、更に右の足首の引き揚げにかかる。力を入れたので膝を伸ばして肢全体が一本の棒のようになり、まるで起重機の支柱が上がるように、じりじりと徐に上方に向かい、水平になったあたりからは、すいと一気に上がってしまう。

「イ、イイー、イヤッ」

という押し殺したような悲鳴にも似た忍びやかな発声が笠井奈保子の口から洩れた。今までのパントマイムが、ここに於いて初めて破られたのである。脚を閉じようとする努力が内股の筋肉をぶるぶるとふるわし、吊り下がった脚が、ゆらゆらと、ゆらめいた。

私はそこに笠井奈保子が、縛られた同性の写真を見ることが好きなばかりでなく、自身自身が縛られることも大好きであるという証拠を、はっきりと目にする事が出来た。

初夏の朝の露に濡れそぼつ野草にも似た爽々しい風情であった。私は心を落ち着けて全身にピントを合わせてから、握りしめるよう



に慎重にシャッターを切り、その上グッとカメラを近づけて蛇腹をくり出しておいて目の置きどころのないような羞らいを含んだ笠井奈保子の表情に目をやった。「そこを、写すのだけは、いや。羞かしいから」

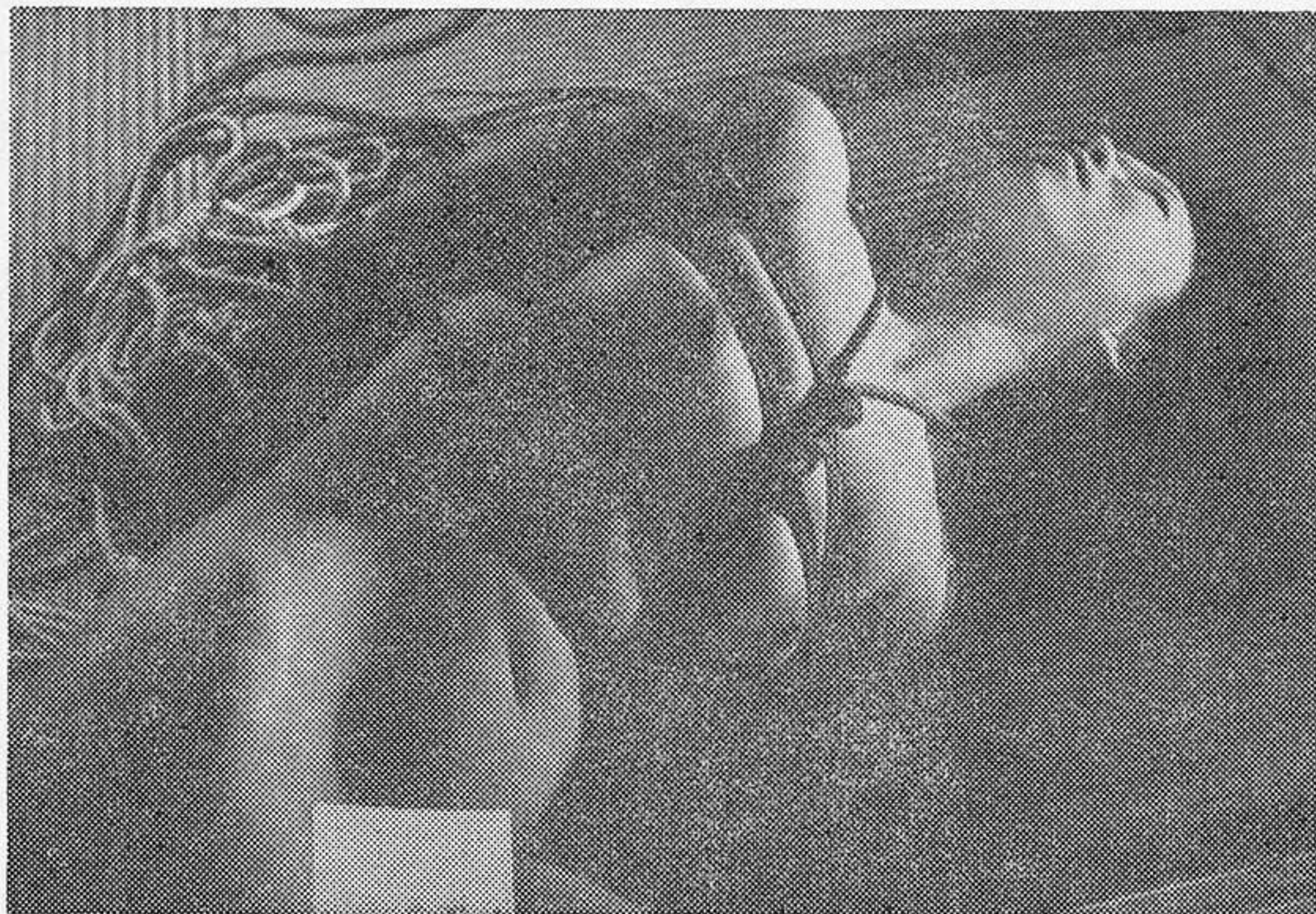
それは笠井奈保子にとって、最後のレジスタンスであったのだろう。私が彼女の意に反してアップで狙うべく蛇腹をくり出し終わったとき、観念したように、ぐったりと全身の力を抜いていた。

窓をびったりと閉めきったこの部屋に、外部の光も音も一切、届かない。今、何時だろうかと、ふと私は思った。腕時計はテレビの上に置いてきてしまっていた。

静寂、物音一つしない密室の中は、暑くもなく寒くもない。ねむたくなる倦怠的な春の花園のようなムードの中で、一体、私は何を夢見ていたというのだろうか。

はっと気がついてみると、若い女のむせかえるような体臭のむんむんする中で、私はカメラを提げたまま、ぼんやりと佇んでいた。

目の前には開脚縛りのままの笠井奈保子が羞らいの瞳で私の方を見つめている。そ



の目は親しみをこめた優しいまなざしであった。

「ごめん、ごめん。おそくなってしまうて」

私は、あわてて縄を解いていた。

もうこれで、二時間あまりの連続撮影である。普通だったら、この辺で一呼吸いれるところであるが、私は今日、今までの撮影で、笠井奈保子の美しい緊縛ヌードに魅せられてしまっていた。引き続いて、彼女の女体美を緊縛によって、もっともっと深く探究してみたいという念にかられた。

「どうだい。もっとやってもいいかい。実は君の身体が余りにも美しいので、よければもう少し変わった縛り方をやりたいんだが……」

「ええ、私だったら、かまいませんのよ。姉の家を出るとき、今日は義母のところで泊

まるって言って出てきましたから」

笠井奈保子は、いそいそとした素振りであてくれた。次の変わった緊縛を期待している風にさえ見えた。いや、この場の雰囲気にもっと浸っていたいという積極的な態度さえ見えるのだ。

私は彼女の返事に力を得て新しい綿のロープを手にした。この縄は固くて肌に馴染まず締めつけると、とても痛いので使用を後回しにしていたのだが、もうこのあたりで、ぼつぼつ手加減なしで本格的に責めてもいいだろうと白ロープを用いることにした。

ベッドの上の白い敷布をめくって模様のある敷蒲団を露出させたところへ、白ロープで厳しく縛った笠井奈保子を追いあげた。

最初は縛られることに、あれほど羞らを見せていた笠井奈保子であったのに、今私が白ロープを手にして背後に立つと、何も言わないのに、両腕をうしろに回して、手首を交叉して縛り易いようにしてくれている。彼女の心の中の変化は、どのようなものか私には推量できないが外面的に見た範囲では急速に縛りの方へ傾斜してきているようである。

膝頭、或は足首に縄を掛けて、後手首の縄と連結しておいて蒲団の上どころがした。下

が蒲団なので比較的痛さが少なく、いろいろと変わったポーズがとれた。足首に縄が掛かっていて引きつけられ、お尻を盛り上がったように突き出したポーズなんかは、浣腸するのには、もってこいの恰好である。遅いくらいに肉のついた、お尻と太股。若さとはいいものだと思わず嘆声を洩らしたくなる肌の艶、そして張りのある肉の膨らみである。

うつ伏せにしたり、横臥させたり、さまざまに縛り上げた女体を弄び、ポーズの変化によって起こる全身の表情の妙なる動きを、つぶさに鑑賞した。

笠井奈保子の身体の特徴や美しさを、その隅々に至るまで、私の目は猟犬のような鋭い嗅覚で狙い続けていった。生まれて二十年何カ月かの女体は、白い綿ロープの苛酷な縛しめによって極端なまでに歪曲されながらも、その美しさを、いささかも失わずに馥郁とした花の香りを発散させていた。そしてむしろその美しさを誇らかに示すかのように五〇〇Wの写真電球の煌々と照らし出す中に、惜しげもなくすべてを開陳しているのであった。

縛っては解き、解いては縛り、これで縄の種類をとり替えて、何度縛り直したことだろう。私はここで更に、とっておきの麻縄をと

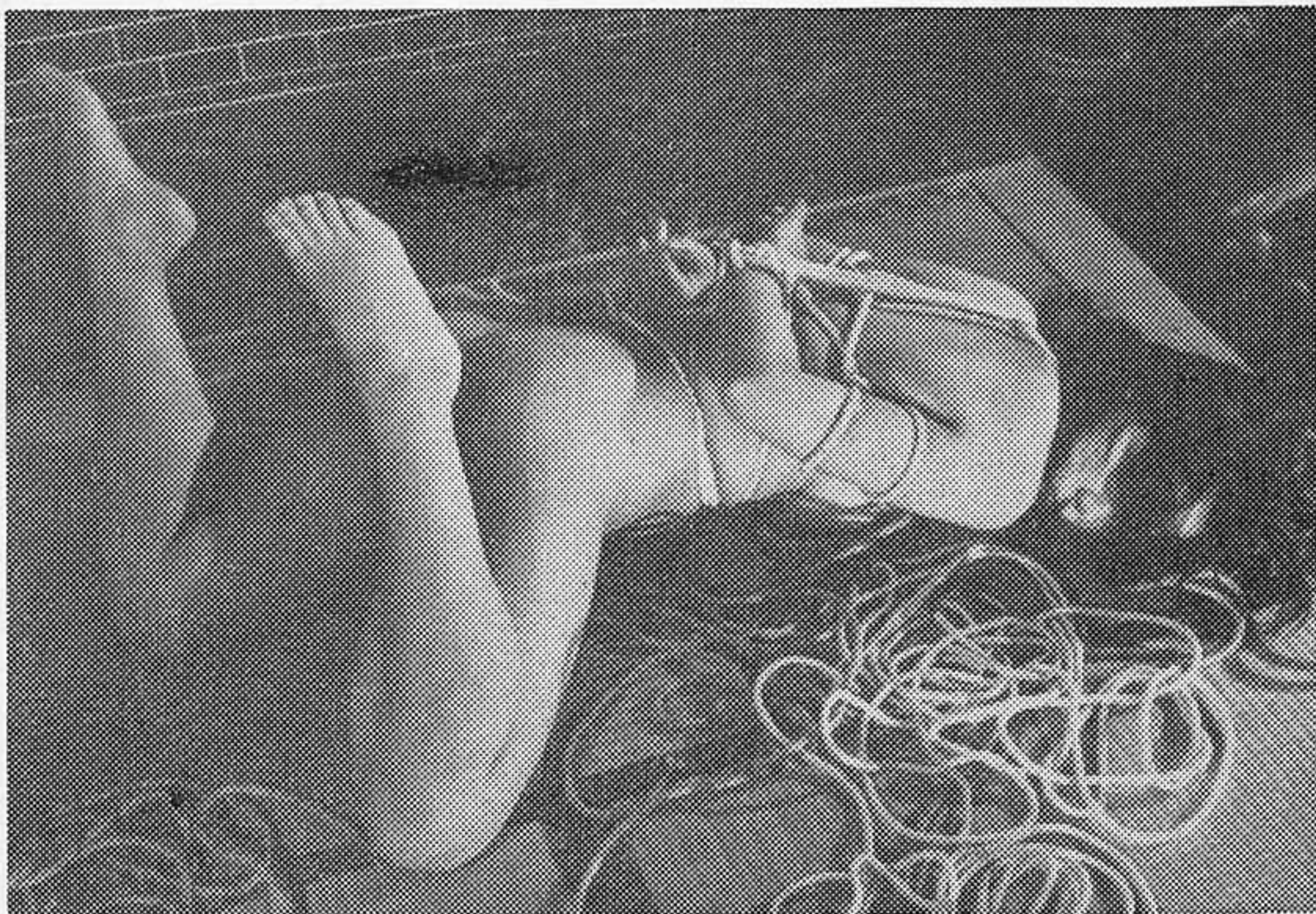
り出した。この縄はケバ立っていて柔肌をシクシクと痛めつけるので余程のベテランでないと、力いっぱい縛られて放っておかれると悲鳴を挙げたものである。

笠井奈保子も、ここまで十分、縄に馴れてきたら、このトゲトゲの麻縄で、きっちり上半身を緊縛し股間縛りにしても、も早や耐えられないという事はないだろう。むしろ、全身をこの黒ずんだ荒縄で拘束される事に女としての喜悦を覚えるかもしれない。

私は麻縄を用いて、ふくやかな笠井奈保子の上半身を四つに、くびるように縄を掛け太股のつけ根に股縄一つ、それに首縄と股間縛りを施す。これだけの縄掛けを一本の長い縄を二つ折りにしたもので一気に果たす。

笠井奈保子は自分の右肩越しに私の方を願って次の指示





を待つような態度である。

以心伝心というのか、ここに至って、私のしたいということ为先回りして、次々と私を使っている彼女の心配りが私には痛いように、よくわかってくる。何とかして、私の気にいられたいとする、いじらしいばかりの態度が彼女の全身に如実に現われている。

私は目で合図して蒲団の上に坐るように命じた。

笠井奈保子は私の意図を体して、なるべく優美なように坐り直し、そして愁いを帯びた顔を羞らうようにカメラの方に向けた。

私に、緊縛フォトを見せてほしいという手紙を出したばかりに、このようにして、自分自身が縛られる破目になってしまったのか。或はまた、本当は自分が縛られたいという強い願望を持っていたのを方便として写真を見たいなど

と言ってきたのだろうか。

彼女の持っているアルバムの中に、自分自身の美しい緊縛フォトが綺麗に貼られるのもそう遠くはないであろう。私はファインダーの上に映像を結ぶ笠井奈保子の緊縛姿態を眺めながら、呆然として物思いに耽っていた。たしかに美しい。均斉のとれた伸びやかな肢体は、やはり二十才の娘そのものである。

黒髪に掩われた白い顔も愁いを帯びてはいるが、被虐の女性を表徴するイメージとしては、ぴったりマッチしている。まさに得難い緊縛モデルではないか。これからは愛用のカメラを縦横に駆使して、凄い緊縛写真、いや責め写真を撮りたい——と、これは私の側の一方的な期待である。

だが、笠井奈保子の方で、果たして今後縛られて、カメラの前に立つという希望を持っているであろうか。今日、ここまでの時点では万更でもないような風でもあるが、乙女心は複雑であり極めて流動性を帯びている。一体、どのようなものやら、極めて心もとない。といって口下手な私のことだから、一旦、彼女がいやだと言い出したら、それを翻意させる自信はない。

可愛い顔の笠井奈保子は、何を考えてい

るのか至って無表情である。せめて、彼女の心のたけを書き綴った自由日記を見せてほしいものだ。だが、これだけは、なんといって頼んでも見せることを拒否するだろう。よし女体の隅々までは見せても、心の隅々までは決して見せることはしないだろう。

私は先年奇ク臨時増刊号として発刊された「緊縛写真集」の第一集に於いて「緊縛写真を撮影して二十年——女体緊縛の醍醐味を語る」と題して一文を草した。

そのとき私の取り上げた緊縛女性には、絹川文代、梨花悠紀子、関谷富佐子、大塚啓子、山原清子、渡部好美、三浦純子、座間明子、長井葉津子、中河恵子、一宮百合子、左近麻里子、シーラー・ケニー、川路叢子、東浦ひかる、春丘リル、若原明子、それに、その当時、新しく撮影した前田真知子であった。

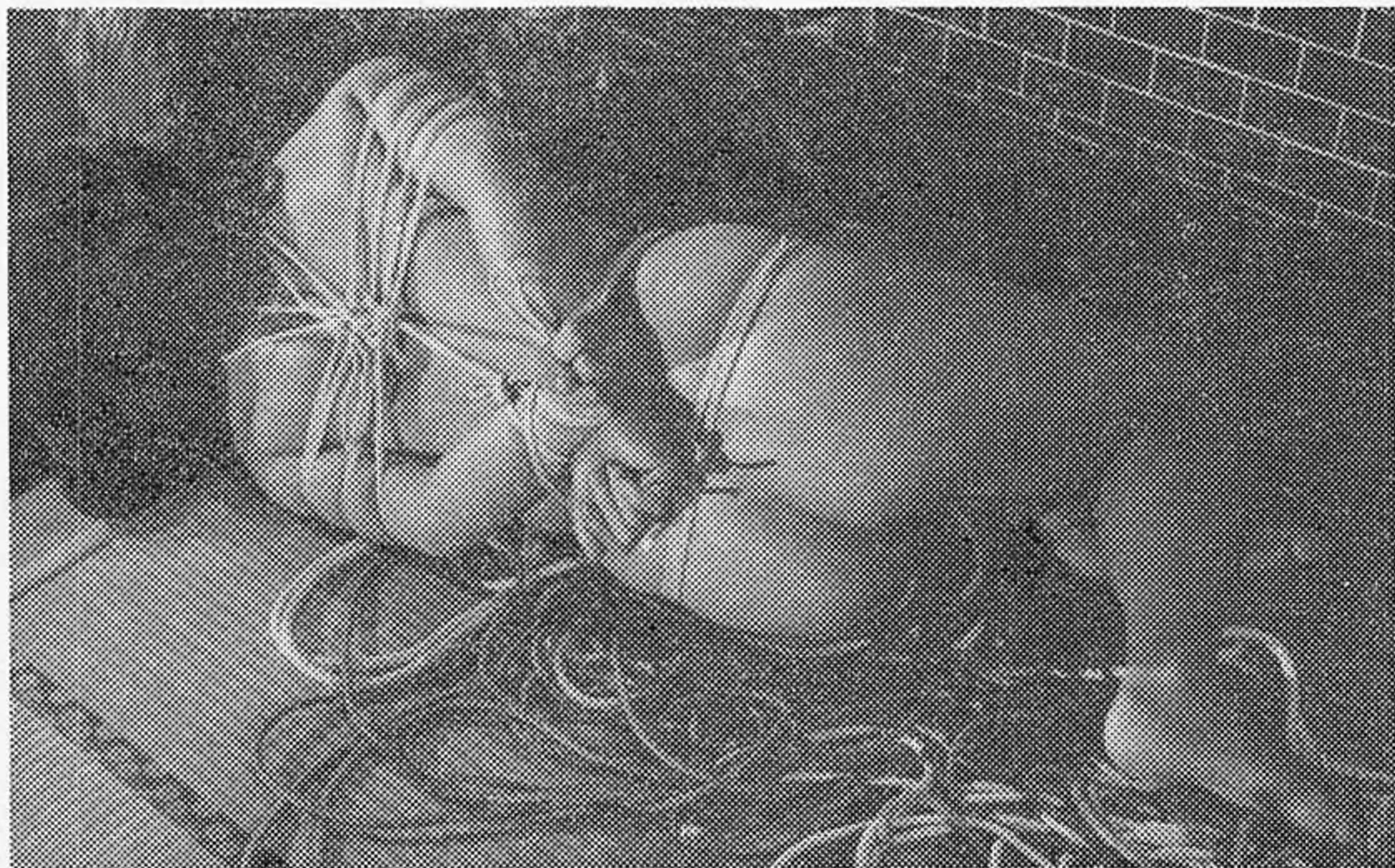
その後、私は奇クの誌面から暫くは遠ざかっていた。といっても、私がカメラルポを発表しなかっただけで、その当時でも、高村浩子、荒尾慶子、深田菊子、福井桃子などの緊縛フォトの撮影は続けてやっていた。

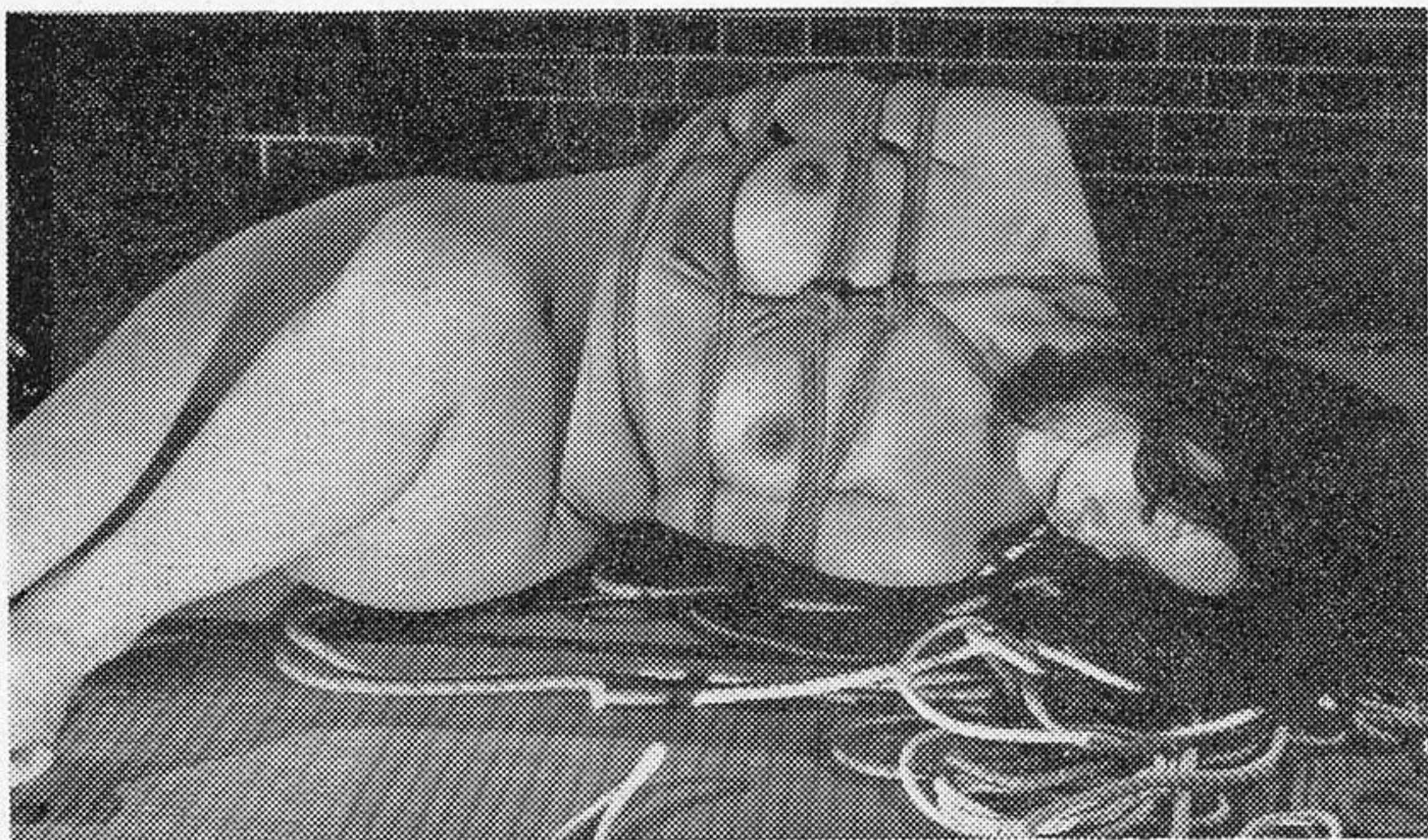
どう見ても娘さんとしか見えない荒尾慶子の洋装姿を空港のロビーにて撮影したときは余りの清楚さにうっとりとしたものである。

この人が剃毛を望んでいるとは、よもや考えられなかった。緊縛フォトを撮影してみても、私は益々荒尾慶子が好きになった。若し妻にするのなら、このような麗人を持ちたいものだと思わずにはいられない程であった。それから、松本たえを知り、久々にカメラルポを書く機会を持ち、次に鈴木千鶴子のルポも書く、めぐり合わせとなった。

そして、今ここに、笠井奈保子の若々しい肢体にひしひしと縄を掛けて、それをネオパンSSのフィルム上に印するという作業が続いているのであるが、これから果たして、どのような進展を見せるものやら私にも一切わからない。もし、このまま笠井奈保子の飼育を続けていくとしたら、どのような過程を辿ってゆくものだろうか。私は読者の方々と共に非常な興味を持っている。

フィルムにして8本、枚数にして一〇〇枚近い写真を撮影して笠井奈保子とのプレイをやっと終わった。部屋が思った程広くなかったので気





にいった配光も出来なかったし、105ミリの鮮鋭なレンズで笠井奈保子の柔肌の質感を出したいと考えていたが、これもヒケの関係で75ミリ80ミリのレンズを時に応じて併用しなければならなかった。65ミリの広角は準備してきていたが極力、使用を避けた。

入浴を終えた笠井奈保子は、ほっとした表情でワンピースに着替え、お茶を容れて私にすすめてくれる。暖房とライトの熱気で室温が最高に上がっていて洋服を着てしまうと、いやに部屋の中が暑く、じっとりと額に汗が、にじんでくる。窓を開け放って冷たい外気を迎え入れながら熱い茶をすすする。

「私、高校を出てすぐ、半年ばかり会社に勤めていたことがありますの。そのときは寮にいましたんですけど、今は姉のとも母のとも父のとも、どこことといって、はっきりした住居はありませんのよ」

笠井奈保子は、問わず語りに自分の身の上について話しはじめる。なんとなく帰りを急がない、去り難いといった態度である。

撮影が終わってしまうと俄然、笠井奈保子は陽気になってきた。エレベーターで一気に地下まで降り、車庫の出口で、すでにエンジンをかけてくれていた車に乗り込んだ。

街は、すでにとっぷりと陽は暮れていて、赤や青、いろとりどりのイルミネーションがフロントガラスに五彩の光の束を、あわただしく交錯させる。数時間の緊縛と撮影で心身に疲れ果てている筈なのに、なんとはなしに身体の奥底からエネルギーが溢れてくるような春の宵であった。

夜の町の表情は、どことなく浮々とした、なまめかしさを粧っていて、それでいて妖しくも淫靡な一面を、その裏面にかくしているように見受けられた。私は新御堂筋線の高架道路を梅新めざして時速六十軒の制限速度で南進していた。

「今日は何時まで帰ればいいのか？」

「ええ？ 今、何か言ってる？」

笠井奈保子は快い振動に居眠っていたらしい。光の渦が目の前に迫ってきて、御堂筋の公孫樹並木の中へ突入していった。目的のミナミは、もうすぐそこである。まさに『春宵一刻值千金』という詩にふさわしい春の宵の朧月夜ではあった。

(終り)



絹ロープにまつわる感傷

半年ぶりの縛り

久留木 栄

カット・堀 真彦

(一)

会うのは三カ月ぶりかなと思った。それほ

ど疎遠になっていた。酒はひとところ、あびるほど飲んだが、今は殆ど飲まない。そのせいかバー通いは、めっきり減り、昔なじみのバーを、くぐるのも珍しい。友人の画家が飲んだくれて強引に連れ出さなければ、きょうもこのバー「ユフ」の門を、くぐることはなかったろう。ともかく、良平は扉を開けた。

中は暗く、赤や橙や黄や緑の小さな電球がともっていて、なんとなく、なまめかしいムードがあった。さそった友人重松は、さっさとカウンターの前に坐り、マダムの紀代子と

しゃべりだした。ホームスパンの背広が、ふん囲気にとけ込んで、重松のご機嫌のよさが両肩に溢れていた。

良平は遅れてはいり、ぼたんの花の大柄なお召をスキなく着こなしたマダムの前に腰かけた。重松が良平をふりかえり、マダムに連れてきたよと言った。

「珍しいわネエ。どんな風の吹き回し？」

「オレにも、わからん」

おしぼりをとってくれながら紀代子は相変わらずのガラガラ声だ。でっぴり太って気持がよさそうに見える。

「も、ちょっと、あいさつのしようないの。」

これでも待ちこがれていたのよ」

「ごあいさつだネ。どだい、酒も飲まない男に、どんなサービスがあるんだ……」

「説教にダンス。鼻くそ掘りに耳子かき……」

それに大好きな……と」

そういいながら紀代子は声をあげて笑う。

良平は紀代子の、そういう姿を見ながら、

古い昔が、よみがえってくる気がした。

× × ×

紀代子と良平との関係は、もう二十年余りになる。一般の男と女の関係ではない。もっと深い関係といったら、一体どんな関係を人は想像するだろうか。

まず金の関係。マダムとパトロンと思うだろうが、それは違っている。二人の間に、そ

んな関係はない。

では、夫婦。夫婦でもない。

それなら愛人同士の清い関係。そんな事はない。二人の関係は、きれいごとではない。

しかも今は平気で心の許せる枯れた交友関係をもっている。そういったら、そんなバカなという人もいるだろう。だが、現実小説よりも、おかしなものなのだ。

どうして、そうなったのだろうか……それに「大好きなこと」か……と良平は、思わず苦笑した。

× × ×

「お茶といたいところだが、いつもの奴。ウイスキーのホット。お湯割りだな。例のとおり、砂糖もレモンも不要」

と良平は三カ月前と全く同じ注文をした。それから思い出をたち切るように、つと立って、そばにいた女の子の手をとり、狭いフロアを巧みに回り、さりげなく踊り出した。

踊っているうちに女の体が、ひどく軽いのに驚いた。ダンスは上手な者ほど、体が軽く感ぜられる。だから相当の腕かなと思い、時には速く、時には大きくリードしてみると巧みに乗ってはきたが、流れるようなリズム感にはなかった。すると、さほど上手ではない。

軽く感じるのは身体が軽いからなのだろう。

良平は、ふと、いたずらしてみたくなくて、ぐいと女を近づけ、かかえあげてステップをふんでみた。それでも女の体は軽かった。良平はニヤツと笑って、女を下ろした。

「いい体をしているネ」

「それ、皮肉？」

「いや、本気さ。オレは太っちゃだから、軽い人がうらやましいんだ。おれの半分かな」

「まさか」

「四十二キロ？」

「四十キロよ」

「それじゃ半分より軽いじゃないか。オレは重い人より軽い人の方が好きだ。第一、軽い人は抱くときに一番、楽だし、それに体が柔らかければ申し分ない。昔から軽い女を尻軽といっただけにしているが、オレは尻軽女が大好き。助平野郎なんだ」

「まあ、いやーだ」

「助平大好き、だろう？」

「しょってるワネ」

「いいじゃないか。ともかく女と遊ぶ時、女を自由にしたいと思わぬ男は、ないだろう。太った女、たとえばマダムのような女は、金や力だけでは自由にならない。押え込もうと

しても逆に押えられてしまう。これじゃシャクだ。ポケットに入れてみたいと思うような

小女だったらポケットから好きなとき、とり出して可愛がられる。好きなときに逢える女は、すばらしいと思う」

「あら、ロマンティック！ でも、そんな女がいたら、どうする？」

「毎日、持って歩くネ。飼って、ペットにしたいなあ」

「ペットになっても、いいのよ」

「ペットは、いじめられるぜ」

「かわいがられるワ」

「それも真実だな」

良平は踊りながら、その女の右手を、女の背中に回してみた。女は素直に、そんな形でも、ついてきた。

二、三曲、終わったとき、重松はとみるとスタンドからボックスに移り、紀代子を相手に酔態、無残だった。良平は要領よく背中あわせのボックスに腰かけた。

「何ていうの」

「弓子」

「いたずらしたいな。こうしたらどうする」
「どうもしないわ」

良平は弓子の両手をその背中でひとにぎり

にし、弓子の体をひざに抱いた。バーテンが
気をきかせ、ホットウイスキーを運んでくれ
たので、別の手でそれを一口、二口のんだ。

「君は何をのむ」

「ジンフィーズよ」

良平はそれを注文してやりながら、細い弓
子のからだを、支えるようにしていた。

「案外おとなしく優しいのネ」

「二人だけになったら優しくないかもしれな
いよ。ここでは優しくしておかないと、皆に
さらわれる」

「さらわれたら、困る？」

「別に困りはしないが、あまり、ほめられた
図ではない」

「そうね、店で乱暴な人は私、だいきらい」
「オレも、さらわれないようにしよう」

良平は弓子の手を離し、バーテンの持って
きたジンフィーズを弓子の口まで持って行って
やった。弓子はそれを、うまそうにのんだ。

良平が手を離しても弓子は背中にも手をく
だまま、おとなしく良平のヒザにのっていた
のだ。良平が何か言おうとした、そのとき、
——友人のところで何かガチャンという音が
した。見ると紀代子が重松を支えるようにし
て立ちあがっていた。重松が立つときコップ

が落ちて割れたのだった。その傍を二人が、
もつれるように歩きかかる。

「あら！ 危い！」

とっさに叫んで、弓子が良平の膝から飛び
降りるなり、ガラスの破片を拾った。そのあ
とに、くずれるように重松が倒れこんだ。だ
が、弓子は何事もなかったようにその破片を
バーテンに渡し、手を洗って良平のところに
戻ってきた。弓子は「ごめんなさいネ」と小
声でいった。

良平は胸の中をスーッと気持ちのよい風が吹
き抜けるのを感じた。

(二)

「ユフ」は町はずれの、ひっそりとした路地
にあった。昼間なら、つい見過ごしてしまう
場末のバーであるが、夜はネオンがきらめい
て、全く昼と夜と異なる環境を現出する。店
が小さくボロな割に客筋がよいのは、ひとえ
にマダム紀代子が文化人であるからである。
俳人とも歌人とも、あるいは画家ともいわれ
そういうえば、どこことなくそんなムードを持
った雰囲気、調度が店の中に、ただよっては
いたが、良平はマダムをよく知っているだけに
それは人生でいえばワビ、いや寂しさの表現

なのだと思っていた。その寂しさが、良平と
紀代子を結びつけた、きずなかもしれない。
ひょっとしたら弓子も、そういう人生の空し
さを体験した数少ない人かもしれない。良平
は、ふと、そう思った。酔った重松をかかえ
あげ、車で一緒に送って行った紀代子が、や
がて帰ってきた。店の奥にひっ込み、ちょっ
と顔かたちを改めていたが、すぐ良平の席に
やってきた。マダムが来ると弓子は気を利か
して席をはずした。

「珍しい子だね」

「そう。変わり者よ。だけど手はかからない
の、しっかりしてるんだから」

「なるほど、ボクは初めてなので」

「そうネ。この世界も新陳代謝が早いのよ」
「いずこも同じだね。ポット出の新人が、も
てはやされる時代だもの……」

と良平は自嘲気味にいった。

「それより、体、いいの？」

紀代子は話題を変えた。

「あまり、よくないんだ」

「じゃ、好きな事もできないんでしょ」

「ああ、このところ半年あまり、その気にな
らないな。そんなボクじゃ興味ないか」

「興味どころか、一片の関心もないわよ」

「えらく見限られたものネ」

「そう。三カ月も放ったらかしにする薄情な人にはネ」

「ハハハハ、なる程。人間、落ち目にはなりたくないものだ。マダムはおろか、今のボクには、若い新人を発掘する勇氣すら、わいてこないよ」

「仕方がない人。ともかく、元気になってちようだい。貴方が元気になるためなら何でもするといってるでしょう。そのため、じっと我慢しているのだから」

「ありがとう。ところで、あの弓子といった子、いくつぐらいかな」

「二十四、五でしょ。もっと若いかしら。子持ちよ。その割に体の線は、くずれていないワ。だから姉の子かしら」

「なるほど」

「氣になるの？」

「ああ、ちょっとね」

「あなたにそう思われるだけ、あの子も光栄だワ」

「それ皮肉か」

「ねえ、きょうは好きな事してもいいのよ」「好きなことか———そういえば、久しぶりにやってみたい。つきあうか」

「まあ、うれしい」

「じゃ、スタンバーのあとで、いつもの場所で待ってるよ。といっても三カ月ぶりだ、変わっていないかなあ」

「大丈夫よ。ちゃんと、昔のままにしてあるワ」

「そう」

「じゃ、タクシーを呼ぶわよ」

「ああ、そうしてくれ」

× × ×

良平は、一たん家に帰った。

家の中は、ひっそりとして、冷たかった。

妻は、もう五年前に亡くなっていた。子供はない。だから仕事一筋に生きてきたのだが、体をこわしてからこの半年、その仕事にも力を入れていなかった。

ともかく、一度落ちついて見たいと、何もせず遊んでみた。交遊関係も、殆ど絶てていた。そのせいか空しい生活にもなれていた。ちゃんと背広を着、シャツにアイロンをかける生活も悪くないと思うようになった。

世の中のブライツサイドとダークサイドをゆきつもどりつして生活をたててきた良平にとって、ブライツサイドだけの生活は味がなかった。だが、病氣をして氣力が落ちたせい

か、ダークサイドに移るのは氣がすすまなかった。そんな消極的な氣持が、紀代子との関係も疎遠にさせていたのであろうか。

紀代子とあうまで、あとたっぷり二時間はあるので、良平はベッドに横になって体をやすませ、カギのかかる手箱から一枚の写真をとり出した。紀代子の全身をうつし出した写真であった。

若くて、ふっくらした顔には、うれしいがあった。いまの紀代子の様な落ちつきはなかったが、なぜか必死の面持ちがあった。それには、きびしくロープがかけられ、菱縄の型どおりに縛られている。それは良平がとった紀代子の最初の写真であった。

良平がこの町に職を持ったのは二十年前、ある暴力団のイキのかかっている土建屋の企画課に席を置いたが、変なことから別の暴力団とケンカする破目になった。毎日毎日無謀な争いがつづき、あげくのはては全身を傷つけられて道にのびたこともあった。そののびた良平を介抱した娘が紀代子である。喫茶店のレジをしていた紀代子は、良平を喫茶店の二階に運び込み、親切に介抱してくれた。このことが発端になって二人の関係は生まれた

……イメージギャラリー……『カラス』……岡 たかし……



が、紀代子はそのとき暴力団の代貸をしている兄がおり、その弟分と結婚していた。一方良平は、同じ企画課の女と結婚したばかりだった。それで問題はさらにややこしくなり、ついにはこの土地一番の暴力団同士の抗争までに発展した。そして壮烈な果たし合いのす

え、紀代子の夫は死に、良平の主人も傷ついて一線をしりぞき、土建屋の経営は良平の肩にかかってきた。良平は土建屋の跡をついだことから、やむなく紀代子の兄と対立抗争することになったが、その兄は警察の暴力排除作戦にかかり勢力をものがれ、ただひとり良平

だけが逆に勢力をつけ栄える破目となった。暴力追放をモットーに戦いぬいた若い歳月が良平をいつしか押しも押されぬ一人者にしていった。それに良平は深慮遠謀をもっていたので、ちゃんと紀代子の兄たちの生きる道も考えていた。それで、こうした抗争が終末をつげたとき、良平は、不本意ながら親分と呼ばれる身にもなっていたのである。

この一枚の縛り写真は、紀代子の夫が死ぬ直前、良平がまだそれほど実力を持たないころの写真である。何度も死線をこえ不死身に生きつづける良平に、愛を覚えた紀代子が死を覚悟し人目をしのんであいにくきた。その決心を形に残そうと撮影したものである。

二人の関係は出合そのものが異常だっただけに始めからノーマルではなかった。傷がなおったとき強引に良平がキスしたのも一方的だったし、兄の家に捕われた良平をヤミに乗じて逃がした紀代子と、農家の牛小屋の中で結ばれたときも心の平静を欠いていた。だから、いつしか良平は女を愛するときは縛るくせがついていた。紀代子もそれに合わせるようになっていた。お互いに捨て鉢だった人生がそこから芽ぶこうとしていたのだろうか。「好きなこととしてもいいのよ」

というのはそういう二人の合言葉だった。
あうのが三カ月目で縛るのが半年目か——
と良平は目を閉じた。

目を閉じると、さまざまな紀代子の姿態が
浮かんで迫ってきた。

縛るということは実に面白いものだ、いまになって良平は思う。縛りには、いろいろあるが、手首にナワがかかった瞬間から、女は変化する。

まっ白な手首に赤いしごきをからめる。浮世絵を見るようなシーンは、目にいたいほど男心をくるわせる。だがそんなシーンは、それでいて絵空事のような空しさを男の中に植えつける。やわらかい肌にやわらかい布ではとらえどころのない、もどかしさが男の心をさいなむ。やはり縛りは柔らかい肌に強い布でなければならぬ。ヒモは、固くなくてもきびしさを代表するものでなければならぬと良平は思う。

紀代子はそういう意味でも変化の激しい女だった。親分の血をひいているのだろうか。最初、紀代子から助けられたお礼にとウムを言わず良平がキスしたとき、紀代子は良平を突きとばし、強烈な唐手チョップを見舞っ

た。その一撃で弱っていた良平は再び昏睡し回復が二週間も、のびたくらいだった。

だが、本当に二人が好きになって、人目をしのぶようになったとき、目茶苦茶にしてとせがみ、縛ってくれと最初求めたのも紀代子だった。良平は最初わざと突っぱね、ある日突然に縛ったが、ナワが手くびにまきついたトタン、悍馬は従順な名馬になった。

「これで、もうどうにもならないのネ。紀代子は死んじゃった」とか「縛られて女になるなんて妙な暴力娘ネ」とか、いろんな言葉が紀代子の口をついた。ともかく、逢い引きの現場を見つかったら最後、敵味方のどちらにもよくないロメオとジュリエットだったので縛られなければ、心が落ち着かず、心身ともに恋人に身をまかせる開放感がなかったのだろうか。考えて見れば、紀代子も不幸な星の下に生まれた女だった。

一枚の写真は、そういう激動の日々を良平に告げていた。良平はそれを眺め、しばらく考え、そして元に戻しながら、半年ぶりの縛りを、どう楽しむかを考えていた。

× × ×
白いふくよかな紀代子の手首に、わざとこ
つい綿ロープをまきつける。指先が、しなう

様にケイレンして、やがて力がぬけ、力がぬけたところから徐々に新しい女が生まれる。

その一瞬の魅力のために良平は縛り屋になったのかもしれない。今夜もその魅力が再現するだろう。だが縛りあげた女を、どう開放したらよいものか。良平は、それを考えると、いささか、うんざりする。紀代子なら安心して自由になる。自由になるからといって、満足なのだろうか。激動の日々は、もはや去った。残された日々は満たされない日々ではなかったろうか。良平の建築会社にせよ、いまはスタッフが動かす時代になり、会長に引退した良平の個人の力は、足りない。

白くてふくよかだった腕も、いまは必ずしも、つややかではない。綿ロープの似合っていた腕は絹紐に変わり、いまでは絹の布、ピンのしごきが似合うように変わってきている。荒々しい縛りは似合わない。むしろ、平凡な縛りが似合う女に変化していた。
良平はそう思うと、やはり感無量なのである。

(三)

良平は車を走らせた。あい引きの場所は料亭白梅の離れである。夜も十二時を過ぎると

人影は少なかった。イキをこらした玄関の横のくぐりをあけると女将の「静」が

「お珍しいこと」

と、あいさつした。この静は、良平と紀代子のイキのかかった女だった。

「本当に、三カ月ぶりだな」

「でも、お部屋はちゃんと昔のままですワ」

「ありがと、紀代子は来ているか」

「まだですの。ちょっとおくれますからって電話がございました」

「そう、退屈だな……」

「何なら私が……」

「バカ、それよりお茶を……」

と良平は、ごま化した。はなれは灯りがついており、ござっぱりした雰囲気にしつらえられていた。床には、まがいものだが鉄斎の絵がさがり、花がいてあった。花は未生流である。池坊はきらいという良平の好みに合わせ、静がいてくれたのだろう。

「この頃は繁昌していると聞いたが」

「社長さんのごひいきで、どうにか……」

「で、田中の思いをかなえてやったのか」

「冗談じゃございません、そんなことをしたら、バチが当たります」

「どうだか。もっともあいつ、いつもお前に

は頭があがらぬと、いいおる。だが、あれはあれなりに純情なんだぜ」

「わかっております。でも旦那さま、そう静をいじめるものではございません」

「おやおや。まだここでも亡霊が生きて宙を歩いているのかな」

静に入れてもらったお茶をすすりながら、良平はそれでも満足げだった。静にすすめられるまま、英国製の背広をぬいで、浴衣に着替えると、ここが本当の自分の家のような錯覚におちいる。そのころになって、やっと紀代子が現われた。

酒が、かなりはいっているらしく幾分、上気していた。顔をゆるめながら、笑うともなく笑う、いつもの仕草だった。

「どうもお待たせ。お静さん、造作をかけました」

折目正しく紀代子は、あいさつした。

「どうも。お姐さんもあいかわらずで」

と静は会釈をかえす。そして、しばらくいっしょにいてという二人のすすめをふり切るようにして、静は本家に、もどった。

静が遠ざかると、二人はテーブルを前にして向きあった。用意されたビールにも目もくれず、良平は紀代子の両手をつつみ込むよう

にして、にぎった。

「久しぶりだな」

「本当に、泣きたいくらい」

と紀代子の声は、かぼそい。

「泣かせてもいいのかな」

と良平は、わざと、やばに聞く。昔なら、そのまま、すぐに胸にひきよせたものだが、良平はそれをせず、心が通いだすまで、じつとポーズをくずさずに紀代子を待った。

「だいぶ、お元気そうネ」

「そう。医者も、もう安心といってくれてくれるよ。きっかけがあったら、いつでも顔を出そうと思っていたが、三カ月も、ご無沙汰続きだったとは驚きだネ」

「あなたは、もともと、そんな風な方でしたワ。激しくもえるか、とりあわないか——割りの悪いのは女の方ですよ」

「そうかもしれないな。ま、そうオレを責めるなよ。こうして来る気になったのだから」

良平は何気なくかわす会話の中にしみじみと歳月の重みを感じないわけにはいかなかった。『好きなことをしてもいいのよ』『そうそれはそれは』と、紀代子のバーの中の華やかな雰囲気の中では、すらすらと言えた言葉も、二人だけになってみると容易に口をつい

て出ない。それより、逢ったことだけで、満足感が、ひたひたと押しよせてくる様であったのだ。

「だいぶ、酔ってるな」

「酔わなきゃあ、これませんワ」

「紀代子らしくもない」

そう言っただけ、話はなかなか進まないのだった。

それでも結局は男と女。良平は好きな事をした。始め紀代子の着てきた和服のしごきをぬいて、その場で縛ってみた。白い肌に紅い絹帯の柔らかさが、しみるようだった。手首は昔より、いくらか肥えていた。それだけにしまり具合がよく、良平の気持を少し若返らせた。ひたひたするように隣室に行くと、ちゃんと寝床が用意してある。上ぶとんを足でけり、白いシーツの敷布団の上にたおすと、絵のように、あでやかである。ゆっくりとスローモーション映画を見るように紀代子はくずれる。その動作一つにも年期がしみていた。

良平は勝手知った戸袋から縛り用のロープをとり出してきた。使い古した絹のロープがしなやかに手の中で、いきづくようだった。上半身を裸にし、一度ほどいた、しごきのかわりに絹のロープで締めあげる。手首から首

胸と方向流でいえば女五方の型である。うっうっと言いながら耐える紀代子の胸は豊かで左肩から左乳房にかけて刀傷の跡が、すさまじかった。

でいりのとき、日本刀で切られた古傷である。男まさりの紀代子は、その深傷にもめげず兄を守りとおしたという。良平には、おなじみの傷跡である。良平の体にしても、それと同じ傷が大小さまざまのシマ模様を形づくっていて、いまでも時たま、うずく。その傷跡にキスしながら、しだいに良平は昔のペースをとり戻していた。

「久しぶりだから、あまりひどいことはやめようか」

「骨一本、折れるくらいのは、我慢するワ。だから、好きなようにして」

と紀代子は、あいかわらず気強いことをいう。とにかく、逆エビに足と手をひとまとめにし、あおむけにしてみると、骨のきしむ音がした。昔ならそんな音はしなかった。やはり年老いた証拠だろうと、ふと良平の心に感傷がおきた。そういえば紀代子の体は年の割には、ぐっと若々しかった。子供を生まなかっただけに乳房も形よくふっくらしていたし下腹部にシワもなかった。しかも程よくつい

た脂肪は女の成熟した美しさを誇示しているようだったが、それでもなお、良平には年が感ぜられるのだ。

「そんなに、じろじろ見るのはイヤ」

「オレの勝手だ。つべこべ言うな」

と言っただけ、何か女の悲しさが身にしみるようで、良平はすぐ毛布をかけ、女の裸身を覆ってしまった。すると妙に女の顔に安堵のかけりが流れるのを知り、心に空しさが湧いてきた。それを忘れるかのように毛布の下に手をつき入れて紀代子をくすぐった。

紀代子が、くすつと笑った。

また、くすぐる。また、笑う。昔の紀代子は笑いじょうごではなく、むしろ笑わない女だった。それが、いつしか、笑いじょうごになつていった。良平の指のリズムにつれて、紀代子は笑い続ける。はじめは何となく、てれくさい笑いだったのが、本当の笑いになり、女くさい笑いになり、やがて、あえぎ笑いはじめる。その頃になって、かすかに良平の心にも灯が、ともってきた。

半年ぶりの縛りは、この程度が限界なのではないか——と、自らの心に言いかけながら、その笑い声の中に、良平は男心を、にじませて行った。

カット・春川ナミオ



青春の陥穽(最終回)

乱交パーティー

芳野眉美

— A —

妻の絵里子を、外国商社の取引の道具に使ったのはいいが、ドルショックで契約が破棄されて、大崎は、不良外人に妻の白い肉体を意味もなく玩弄され、最大の侮辱を甘んじて受けなければならなかった。

そして、その日から、妻の絵里子は、夫の大崎のところにもどらなかったのである。

貞操帯に似た、アクセサリベルトをしめられて、夫に飼育されていた日本人妻がめず

らしかったのか、大崎から絵里子夫人を提供された不良外人は、そのまま絵里子夫人を拉致してしまったのである。

しかし、その不良外人は、数日して離日し本国に帰っていたが、絵里子夫人を同行した様子はなく、消息は、ぷつりと切れていた。

こともあろうに、夫から取引の道具に使われた腹癪せか、外人の男がなくなったのか、それとも不良外人仲間であらいまわしされ、どこかに監禁されているのか、暴力団にでも売り飛ばされたのか、まったくわからなかつ

た。

絵里子が帰らない二、三日は、大崎は、妻に内緒の女を、すぐさま家に引き入れて、かなり残酷な遊びにふけていた。

妻が帰らない、いらいらも手伝ってか、その新しい女に、それほど愛情を持っていなかったのか、絵里子を飼育しているような、優しさや丁寧さは、どこにも見られなかった。

隣家の三田が、大崎に呼ばれて、晩酌の相手になったときも、大崎は、すぐさま、女を裸にしている。

「着物を脱げ、好子。接待に着物は、じゃまなだけだ」

「――」

「早く脱がないか」

大崎にどなられて、好子と呼ばれた大崎の新しい女は、悲しそうな目で三田を見た。

三田は、うつむいて、盃をもくもくと口に運んでいるだけであった。

好子が大崎から見せられたのは、商取引の相手に、大崎が絵里子をホテルに残してきた夜であった。

奴隷用のマスコットを深くつめられ、股間縛りにされた全裸の好子が、口にがっちりとセロテープをはられて、大崎の鞭に追われて三田の家の庭によろめいてきたのである。

大崎は、好子をダンボールに詰めると、首だけをだして、すっぽりと梱包した。

そして、大崎と三田は、かわるがわる、ダンボールから首だけだしている好子の顔にまたがり、口のセロテープをはがして、愛撫させたのであった。

そればかりではない。

好子は、そのあと完全にダンボールに梱包され三田の家の庭に放置されたのであった。着物を脱いで、恥ずかしそうに抱えこんで

いる好子から、

「ぐずぐずするな」

と大崎は着物を、ひったくった。

「あっ」

膝を閉じ、乳房をかくして好子は、うずくまった。

「立て」

と大崎は、コップのビールを好子の顔にひっつけた。

どきっとして三田は大崎を見た。

絵里子が帰らなくなってから、気がつかないうちに、大崎の気持が、かなりすすんでいのように思えたからであった。

そういえば、大崎はいくぶん、やせたように見えた。

顔にかかったビールを、手の甲でおさえただけで、好子は大崎の命じるままに、三田の眼前に立った。

三田は、ごくりと音をたてて唾液を飲みこんだ。

ダンボールに梱包した夜に見せられた奴隷用のマスコットより、更に大きく太いマスコットであることが、わかったからであった。

大崎が絵里子夫人に強制していたのはアヌス拡張器だったが、大崎が好子に強いている

のは、さらに残酷なものであった。

その奴隷用のマスコットは、絵里子夫人の場合と同じようなアクセサリベルトでしっかりと固定されるようになっていたが、はるかに苦しうであった。

「この女は、一度に二人を相手にすることができますよ」

と大崎は、愉快そうに三田にいった。

「まさか」

「いや、本当です」

「そんな器用なことは私にはできません」

「できますよ」

と大崎は笑った。

「まあ、とにかく、もう少し飲んでからのことにしましょう」

大崎は、面白そうに三田の顔をみながら、ビールを注ぎ、好子の裸を肴に、急ピッチでコップを空にしていた。

自信にみちた口ぶりに似あわず、何かあわてているような大崎の飲み方であった。

好子の身体には、いたるところ、大崎に鞭打たれたあとが残っていて、三田に嘆息をつかせた。

消えなかった鞭のあとがあれば、無残にもまだ血の滲んでいるのが消えないような新し

い鞭のあともあった。

普通のプレイなら、女のもっともやわらかい、ふっくらとした乳房はさけるだろうが、好子の乳房は、こまかく鞭のあとが交錯し、タバコの火をこすりつけたような、やけどのあとまでが、血の筋にまじって、黒々とひきつっているのである。

小さい乳房ではなかったが、乳房のわりに黒ずんだ乳首が大きく、太く突起しているのが、何人も子供を生んでいるのならともかく若い身体からして奇妙であった。

「坐れ」

と大崎が好子にいい、好子が坐るやいなやすっと手をのばして大きな乳首をひねりあげたのである。

「痛い」

と好子が悲鳴をあげた。

大崎は好子の乳首に爪をたて、思い切り引っ張ったのであった。

かなりの激痛らしく、好子の目に、涙が光った。

「甘えるな！」

と大崎がいった。

大崎は、手元に用意してあった道具箱からペンチを取り出すと、こともあろうに、その

ペンチで、いきなり好子の乳首をつまんだのである。

「げえ」

とか、

「ぎゃあ」

とかいう悲鳴の、中間的な絶叫が好子の口からはねあがり、三田は大崎のサディスティックな行為に目を見張った。

大崎は、好子の乳首をペンチでつまむと、ひねったり、おしつぶしたり、ひっぱったりして、三田に見せるのである。

好子は、別に縛られているわけではなかった。

が、じっと坐ったまま大崎の責めに、たえている。

縛られていないだけに、この責めは、かえって残酷にみえた。

好子の乳首は、きつと小さくてピンク色の綺麗な乳首だったことだろう。

それが、大崎に飼育され、ペンチで捌かれているうちに黒ずんで、太く、大きくなり、みにくく、ひんまがってしまったのかもしれない。なかった。

しかし、鞭のあとを肌に無数に、きざみこんだ好子の、その太く突き出た乳首を見てい

ると、三田は知らず知らず、ぞくぞくしてきたから不思議であった。

「寝て、足をひらけ」

と大崎は、好子に露骨なことを平然とした顔付でいった。

「お客様のお望みだ」

三田は、そんなことを望んだおぼえはなかったが、だまっていた。

大崎の命じるままに、好子は畳に寝ると、自分で足首をつかんで、大きく両足をひらいたのである。

「こいつ、やったな！」

と大崎が、わざとらしい大声を出して、ニヤニヤしながら、いった。

ペンチで乳首をはさまれ、ひねくられては激痛で失禁するのも当然であった。

「三田さん、少し可愛いがってあげて下さいよ」

と大崎が三田にいった。

三田は、おずおずと奴隷用のマスコットの頭をつかんだ。

「あっ」

と好子が呻いた。

「あっ、あっ」

三田は、二人を同時に相手にすることがで

きる、といった大崎の言葉を、あるいは本当かもしれないと思った。

息をはくたびに、苦しそうに好子は顔をしかめ、息を吸うごとに、鼻にぬける音が、悩ましく聞こえた。

「ちょっと、小便」

と大崎が好子にいった。

飛び起きた好子が、坐っている大崎に近づいた。

大崎の着物は、はだけていた。

「こいつは便利なやつで、便器がわりにもなるんですよ」

と大崎が三田にいった。

大崎は気持良さそうに目を細め、好子の、のどが鳴った。

好子は顔をしかめ、眉をひそめて、必死の様子だった。

「どうです。三田さんもビール腹でしょう。

してみませんか」

「け、けっこうです」

と三田は吃った。

「そうか。三田さんは、好子のビールを飲まされたほうが、いいのかな」

大崎はニヤリとして、好子の肩を叩いた。

終わりの合図らしかった。好子は肩で大き

く息をした。呼吸が止まるほど、困難なことに違いない。

「好子。マスコットを、はずせ」

と大崎が、さっぱりした顔でいった。

大崎は、どうしても、二人同時の件を実証したい様子であった。

三田は困ったような顔付になり、おどおどした様子で大崎を見た。

好子が、アクセサリーベルトを締めている鍵を大崎から受け取った。

マスコットを見ただけでも、好子の異常性が、活火山のように、どろどろに燃えているのが、よくわかった。

「三田さん、横になって下さい」

と大崎が三田にいった。

三田はちょっとためらったが、結局は大崎のいうままに、畳に横たわった。

好子が、三田に背を向けてまたがった。

「三田さんの顔に坐ってもいいよ、好子。サービスだ。オシッコをしてやれ」

と面白そうに大崎は好子にいった。

好子は、大崎の命令に実に忠実であった。

三田は、なまあたたかい液体に、むせた。

三田がほっと息をつくのを待っていたように、大崎が三田の胸をまたいで、好子に抱き

ついた。

「ああ」

と好子が呻いた。

いよいよ大崎は、二人同時の件の実証にかり始めたようだった。

○

翌日、好子の夫だという暴力団の男数人にふみこまれて、大崎は便壺の中にたたきこまれた。

大崎は、絵里子夫人と好子と、自分の排泄物の中に、どっぷりと首までつかって、恐怖におびえた顔で、ふみこんだ男たちを見上げていた。

「よくも俺の女を、めっちゃめっちゃに可愛いがってくれたな」

と覚せい剤の注射のあとも生々しい腕をむきだしにした男が、便壺を覗き込みながらいった。

好子より年下の若い男だが、暴力団の幹部らしく、背広に金バッジが輝いていた。

「俺の女を可愛いがってくれたお礼に、この家と土地をもらっておくぜ」

恐怖で口がきけないのか、どろどろの中に埋まって声が出ないのか、黙ったままの大崎の顔からは、すでに血の気が失せていた。

「いいな。もらっておくぜ」
男の手に、家屋土地の権利書がにぎられていた。

好子が男にわたしたものだろ。

これでは、美人局であった。

「おい、好子」

と男が好子を呼んだ。

「お前、この男の便器にされたっていうじゃないか」

「ええ」

「ちようどいい。この男の顔にお返しをしてやれ」

「フフ」

と好子の笑う声がしたと思うと、好子は大崎をのぞいた。

「フフ」

と、また好子が笑った。

軽い小気味良い音が湧きあがり、見物している男たちから、どっと笑い声があがった。

「うん」

と好子が息ばった。

「このあたりが、新幹線の予定地か」

と、好子のヒモの幹部の男がいつている声が、大崎にも聞こえてきた。

新幹線の予定地になれば、わずかな土地で

も、かなり莫大な金が、ころがりこむ。
大崎は、暴力団の罠にかかったようであった。

「まだなのか」

と男が好子にいった。

「うん」

と好子は強く、いきばった。

「よくもまあ、ここまで好子を飼育してくれるものだ」

と男が、感心したようにいった。見物している男たちを知らながら平気そうな好子の様子に、びっくりしたようだった。

「これなら好子を、変態ショーにだせる」

「女の小便ショーをやらせたら客が集まりますぜ」

と一人の男がいった。

「女の大便ショーは、どうだ」

「くさくていけねえ」

どっと男たちは笑った。

太いかたまりが、ゆっくりと大崎の顔に落ちたようだった。

「大崎さんよ」

と金バッジの男がいった。

「好子をSMショーのスターにしてくれたお礼に、今日一日だけは待ってやる。しかし、

明日この家にいたら、あんたの命はどうなるか、俺は知らないよ」

好子の返礼第二弾が、すっと大崎の顔に落ちた。

「いくぞ、好子」

と男がいった。

好子が、便器から大崎を見下ろし

「あげるわ」

と丸めた紙を投げた。

— B —

静夫の女友達が集まるパーティに居候の勇がついていったのは、勇がすっかり静夫といっしょに、サディスティンの看護婦の奴隷になりさがって、奇妙な友情というものが、二人の間をすっかり結びつけたからかもしれないかった。

静夫の看護婦は、病人を看護しているのか静夫と勇をまとめて責めて楽しんでるのか本当のところ、よくわからない。

勇は若いサディスティンに魅せられて、とんと葉子の家に寄りつかなくなっていた。

パーティ会場は、かなり有名な、ホテルの一室で、静夫と勇が正装してボーイに案内された時まで、せいぜいおとなしいパーティ

だとばかり思っていた。

部屋のドアの前でボーイは下にもどり、勇がドアをノックすると、わずかにドアがあいて、金髪の若い女が顔をのぞかせた。

「あらっ、静夫」

と髪をブロンドに染めた女が、なつかしそうにいった。

「病人の静夫が来るとは思わなかったわ」

ドアがあけられて勇は、はっとして立ち止まった。

金髪の女は、ストッキングのような、肌の一部としかみえない、黒のロングブーツのほかに、何も着ていなかったのである。

ブロンドに染めているのは、頭だけではなかった。

「麻利は、いつも美しい」

と静夫が金髪の女にいった。

「静夫。今日こそ、麻利のことを聞くのよ。いいわね」

と麻利は近寄った静夫の唇にキスしながらいった。

勇は、どこを見ていいのかわからず、まごまごして、うつむいた。

ドアをあけたのは金髪の麻利一人かと思っていたが、もう一人いたのに気がついて、勇

は、すっかり、あわててしまった。

生ゴムの全頭式マスクを顔に、すっぽりとかぶされた男が、四つ這いになって、背中に麻利を乗せていたのである。

生ゴムの全頭式マスクは、鼻のあたりに小さな穴があるだけのものであった。

男が動くたびに、手錠と足枷の鎖が、じゃらじゃらと鳴っていた。

麻利は、人間馬に乗って、ドアを開けにきたのである。

「入ったら、服を脱いで」

と麻利は、静夫と勇にいった。

「パーティの正装は裸。服はいらないわ」

服を脱ぐと同時に、いきなり顔に、生ゴムの全頭式マスクがかぶされて、勇は視力を失った。

手錠と足枷が冷たく勇の両手首と足首にからみついてきた。

静夫は、ただ裸になっただけらしいことは四つ這いになった勇の背中に静夫が、またがったことで知れた。

「ちえっ」

と勇は腹の中で舌打ちした。

金髪の麻利が背中にまたがったのなら、最高にハッスル出来るのに、と勇は思った。

「歩け」

「びしっ」

と尻を鞭で打たれて、勇は床に這いつくばりそうになった。

本気であることがわかる打たれかたであったのである。

打ったのは、どうやら、静夫ではなさそうであった。

「麻利だ」

と思ったとき、背中に麻利を乗せていなくても、一瞬、勇は幸福になった。

「よたよたするな」

麻利の怒声がとび、

「びし、びしっ」

と続けて勇は尻を打たれて、呻いた。

奥の部屋に入ったらしく、

「まあ、静夫」

とか、

「病気は、いいの」

とかいう女たちの声がきこえ、

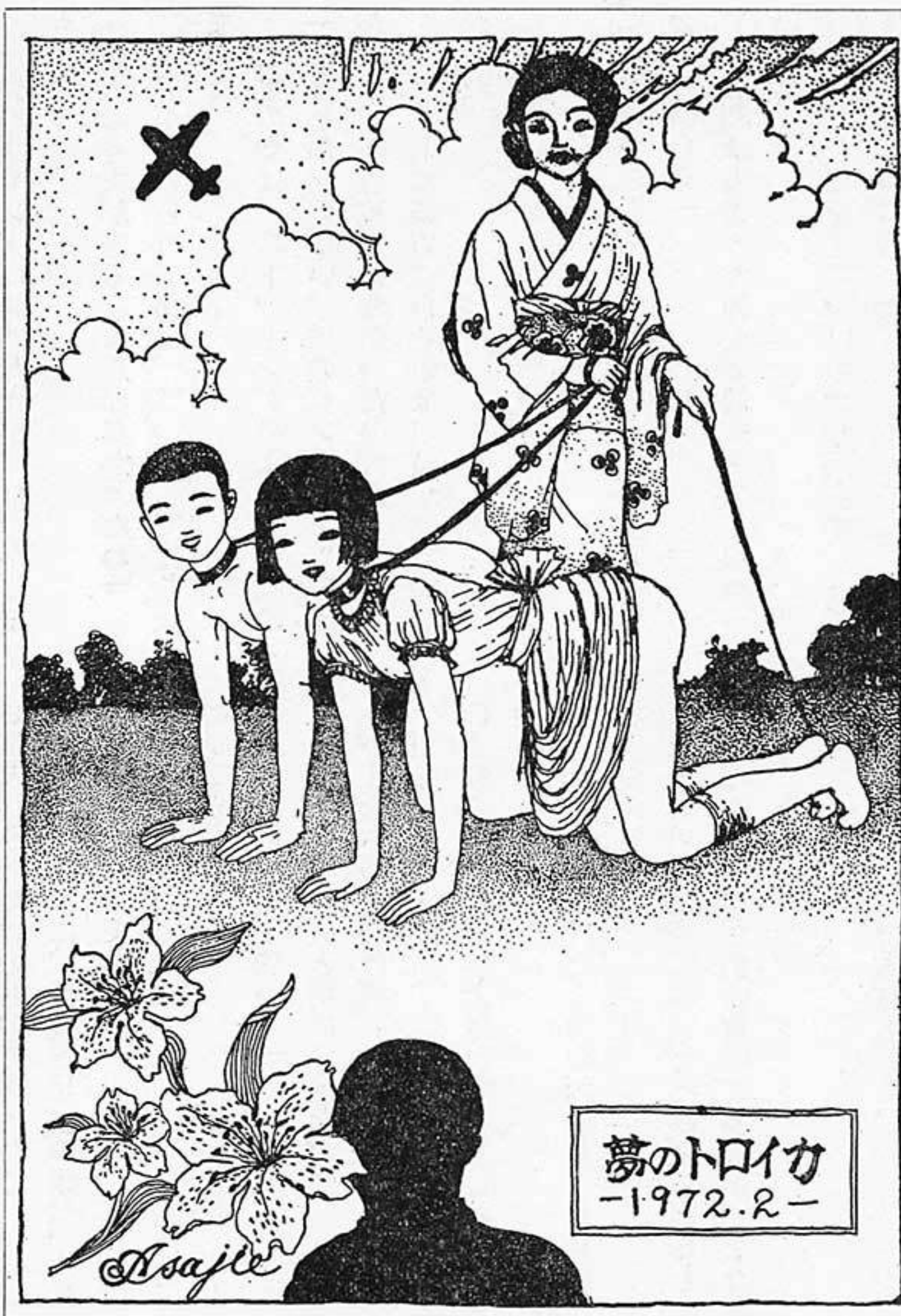
「この男は、だれなのよ」

と勇は頭をブーツの底で踏みつけられたり尻を、けとばされたりした。

「勇。ぼくの親友だ」

と静夫が紹介すると、いきなり勇は、ひど

……僕のイメージ画集……『夢のトロイカ』……室井 亜砂路……



という女たちの声がしたと思うと、勇はマスクをとられて、きよとんとなった。

勇の目には、ハイロングのストレッチブーツばかりが、うつり、おずおずと顔をあげる、金髪の麻利をはじめ、童女のような女や炎のように燃えているような感じの女が、勇を囲んで見下ろしていた。

「あら、いいじゃない」

といったのは、炎の女で、

「もらった」

というなり、勇に乗りかかってきた。

「ずるいぞ、信子」

といったのは、童女のような女で、信子にからみつくようにして、勇の頭をまたいできた。その瞬間、

「あぶないったら、美代」

勇の背中の上で、信子という女と、美代という女が抱き合っていた。

「うっ」

と勇は呻いた。すべすべした白い肌が、征服した勇を、しきりに呻かせていた。

信子と美代の二人分の重さに、勇はついに耐えかねて、ひっくり返った。信子と美代はよろけながらも抱き合ったまま、互いに支え合い、倒れるのを防ぐという、ややこしさで

い痛みに襲われて、

「ぎゃっ」

と絶叫を、あげた。パーティ用の検査をされたらしいことは、

「合格」

という麻利の声でわかった。若い女らしく

もなく、初対面の男を検査したのが麻利だと言って、生ゴムの全頭式マスクの下で、勇はいい気持になって、床に這った。

「顔を見せてよ」

あった。

いきなり、美代が、勇の顔にペタンと坐った。

信子が美代の舌をからませたまま、いつまでもはなそうとしないので、苦しくて、美代は勇の顔にへたりこんでしまったようであった。

勇の、苦しまぎれの舌が動いた。

美代が、すこし尻をずらしてくれたので、勇は上目使いに、室内を見廻すことが、できた。

生ゴムの全頭式マスクをかぶされ、手錠足枷をされた男たちが、麻雀をしている薄いシースルーのネグリジェを、まとった女たちの椅子にされている光景が目についた。

麻雀台は普通だが、椅子は男の奴隷たちであった。

ときおり、普通の男が女たちに近寄り、注射をしているのが見えた。いったい、なんの注射を打っているのだろうか。

負けると、くやしいのか、人間椅子の裸の尻でタバコの火を消したりしていた。

人間椅子が声を立てないのは、生ゴムの全頭式マスクの下に、更に、口の中に何かを詰め込まれて猿ぐつわがされているからかもし

れなかった。

突然、勇は、口のあたりが急に、あたたかくなったのに、あわてた。

美代が、勇の顔に坐ったまま、もらしてしまったものであった。

「いやになっちゃうなあ」

と信子がいった。

「すぐに、しくじっちゃうんだから、美代ったら」

「だから、美代のお尻の下には、いつも便器が必要なんだよ」

と静夫をベッドに大の字にくくりつけながら、麻利がいった。

「あら、あら。勇ったら、飲んじゃったわ」

信子が、あきれたようにいった。

「気持ち悪いから、ふいて」

と美代が、心持ちお尻を上げながら、勇にいった。

男が部屋に入ってきた。麻雀をしている女たちに注射をしていた男だ。

「信子にも打ってよ」

と信子が腕を、さしだした。

注射針が、信子の腕をさし、注射器に血が逆流して、液体が赤くなった。

「ヒロポンだな」

と勇は思った。

ベッドに大の字に縛られた静夫に、ハイロングのストレッチブーツだけの、金髪の麻利が、まるで洋式の便器に腰掛けるように、静夫の顔に背を向けて、またがった。

静夫の顔にも、生ゴムの全頭式マスクが、すっぽりと、かぶられてあった。

麻雀をしていた四人のネグリジェの女たちが静夫と勇に襲いかかってきた。

女たちの行為は、残酷であった。

めっちゃめっちゃに責められて、勇は体重が急に減ったような錯覚にさえ、とらわれたのである。

いきなり、勇は腕に注射を打たれ、呻き声をたてた。

やせた女が、ふらふらと部屋に入り、勇につまずいて転んだのは、勇が麻雀の女四人になぶりぬかれ、悪戦苦闘の結果、ようやく解放されたときであった。

女は、二つの乳首に金の輪をはめられ、乳房の谷間に、金の鎖の吊り橋をかけていた。うすれていく記憶の中で、勇は、どこかで会ったことのある女だと思った。

女は、勇にけつまずいて倒れたまま、起きて来なかった。勇は、顔をよじって、その女

の顔を、よくみようとした。

「あっ」

勇は思わず声を立てた。

パリのボアティ博物館にある、十五世紀の鉄製の貞操帯によく似た、シンプルで美しいアクセサリーベルトが、女のやせ細った腰にややゆるんで、しめられていたのである。

「あ、あ」

と勇は、うわごとのように叫んだ。
なかなか名前が、でてこなかった。

「絵里子さん」

と、ようやく勇は呼んだ。

女の反応はない。

が、たしかに絵里子夫人だと勇は思った。
夫の大崎のアイデアでつくったアクセサリベルトは、キーがなければはずすことはできず、絵里子夫人の貞操は保護されるだろうが夫の大崎は、御丁寧にも、相手の外国商社の不良外人にそのキーを、わたしている。

華奢なからだつきだが、腰から太腿が意外に、むっちり肉づいていたのを、勇は悩ましく見たものであった。それが、今日の絵里子夫人の腰は、肉がとれて、貧弱であった。身体をずらして、勇は絵里子夫人の手を、にぎった。

「絵里子さん」

と勇は、もう一度、呼んだ。

その手が、部屋に入って来た男たちの靴で踏みにじられた。

「この女、どうします」

と一人の男が、いていた。

「不良外人が売っていった女か」

「これでは、もう使えませんよ」

「貞操帯に人気が集まって、よくかせいでくれた」
おぼろげながら、勇は会話の内容を聞くことができた。

「そろそろ、体がまいるのは当然だ」

男たちは、勇の頭の上で何やら、ひそひそいていたが、一人の男が、絵里子を抱きあげると部屋から出て行った。

C

昭和四十七年×月×日朝刊

「ホテルにヒロポン窟」

「暴力団ら七人、逮捕——三カ月も乱交パーティー」

という見出しで、暴力団に悪用された、有名なホテルの写真、逮捕された暴力団の顔写真が、のっていた。

「有名ホテルの部屋を借り切り、ホステスや女子学生、バンドマンらに覚せい剤をうち、乱交パーティーを開いていた暴力団員ら七人が×日、警視庁組織暴力犯罪取締本部の防犯部取締班と××署に覚せい剤取締法違反容疑で逮捕された。

覚せい剤は、ことしになって流行を、ぶり返し、警視庁では六月末までに、昨年同期の二十倍にも、のぼる九十五グラムの粉末を押し収めているが、同庁は、さらに一流ホテルが暴力団によってヒロポン窟になっていたことを重視、関係者に嚴重注意する一方、覚せい剤が暴力団の有力な資金源になっているとして、逮捕した暴力団員をきびしく追及する」
「調べによると、×月中旬から×月下旬まで×区××のホテル××の五階の一、二室を借り切り、バーホステス、女子学生、トルコ嬢バンドマンらを客として、六、七人をグループに、深夜から翌朝十時ごろまで、仕入れた覚せい剤の注射を打ち、花札、マージャンとばかり、乱交パーティーをさせていた。
キャバレーのボーイに口枷をかけ生ゴムのマスクで顔をおおい、手錠足枷をさせたうえ鎖でつないで、女客に奉仕させ、変態パーティーも、しくんでいた」

「暴力団員らは、逮捕されるまでに、客三十数人に、一回五〜八千円で注射し、約千二百万円の荒かせぎをしていた。」

このほか、同庁では、組織を利用、約一キロ、一億円相当の覚せい剤を動かしていたものとみて追及している」

「客のホステスやトルコ嬢は、月収八十万円前後で、ヒロポンの魔力に犯され、暴力団のエジキになっていたが、たび重なる乱交パーティーの末、一カ月で十キロも体重がへり、やせ細っていたものもあり、捜査員をあきれさせていた」

朝刊を読みながら、三田は、このホテルなら、深夜の午前二時すぎに、ホステスたちを送り込んだことがあると思った。

まさか、有名な一流ホテルで、ヒロポンを打ちながら、乱交パーティーが毎夜のように行なわれていたとは気がつかなかった。

しかし、そのホテルに、不良外人から売り飛ばされた大崎の妻、絵里子が、ヒロポンを打たれ、変態客の相手をさせられていたとは三田の知らないことであった。

三田は、大崎が追い出された隣家を、縁側に坐って眺めた。

若い大崎が、てつて的に女を飼育し、商

売の道具にも使い、また、日々のSMプレイを充実させ、満喫しているのに、三田は、自分のM的生活と、みくらべて、感心し、うらやましく思ったこともある。

それが、妙なことになって、大崎は最大のシッペ返しをくったことになった。

大崎のいない家は、好子がそのまま住み、

好子のヒモが、たまに姿を見せていた。

男は、好子を変態秘密ショーのスターとして、売りまくっている様子であった。

長襦袢をだらしなくはだけで、妻の葉子が布団から起き上がった。

居候の勇が、静夫の看護婦に魅せられて、葉子のところに帰って来なくなってから、葉子の機嫌は、かなり悪かった。

葉子は、起きても、長襦袢のはだけたのを直そうともせず、縁側に坐って新聞を読んでいる夫の三田の前にしゃがむと、ぼんやりと庭の三田の車を見つめていた。

汲み取りのじいさんが、葉子のことを、露出癖のある女だと勇にいったことがあるが、毎日が露出症の生活だから、三田もあまり感じなくなっていた。

しゃがみこんだ葉子が、またいつもの悪いくせを始めだしたのを、三田は横眼でにらん

で、知らん顔をしていた。

性的感受性が鋭く、性的エネルギーも抜群に強く、全身が性感帯のかたまりのような女だから、勇という三田の代役が逃げ出してしまったのなら、また新しいM男を葉子にあてがっておいたほうがよさそうだと、三田は思った。

葉子は、縁側に置かれたままになっている卵を一つ、手にとった。朝早く売りにくる近所の卵売りから、三田が買っておいताものであった。

卵のからを割って飲むのかと思ったら、葉子は、奇妙な使いかたをし始めたのである。が、卵は、ころりと庭に落ちて、われた。葉子は無表情で、たいくつそうであった。

また卵を一つ、持った葉子は、夫の三田が横にいることなど、てんで無視しているようであった。

呻くような葉子の声がした瞬間、卵がわれたらしく、黄味が、さーっと、たれてきた。葉子は、ちらっと三田を見て、あごをしゃくった。

「舐めろ」

ということなのだが、無言であった。

三田は、庭に飛びおりて、葉子の前に跪い

た。

いつもなら、

「どう、おいしいでしょう」

と葉子は三田にいい、鼻にかかった甘い声で笑うのだが、今日の葉子は何もいわず、三田の顔を見下ろしていた。

しゃべるのも、おっくうだ、という風情であつた。

晴天で、三田の庭は明かるく、仲の良い夫婦が縁側で、ひなたぼっこをしているとみられないこともないが、少々葉子の行為は、どぎついようであつた。

いきなり、三田は葉子に小便をかけられて庭に尻持ちをついた。

葉子は、くすぐったくて、つい夫の顔に放尿してしまつたようであつた。

葉子の小便は、勢いよく音をたてて、三田の顔にはねかえり、縁側をぬらして、庭の土を黒くしめらせた。

「フフ」

と、はじめて葉子が笑つた。

庭に尻持ちをつき、浴びた水滴をひからせながら三田は、葉子の笑いにさそわれて、にやりとした。

「フフフ……」

と葉子は、庭の三田を見下ろして笑いつづけた。

三田と葉子の奇妙な生活が、おかしかったのかもしれない。

「大崎さんは、便壺の中に落とされて、好子さんに、頭からウンコをひっかけられたのですってね」

と葉子は三田にいった。

三田は不安そうに葉子を見上げていた。

葉子は何を考えているのか三田には、ぼんやりとわかるからである。

今、葉子は、三田に対して、大変なことを思いついたのに違いなかった。

「そろそろ汲み取りのじいさんが来る頃じゃない？」

「そうだな」

と三田は、うなずいた。

郊外の、廃墟のような倒産した工場のわきに、ぽつんとある二軒の古ぼけた平家は、いまでも昔の汲み取りのまま、近くのじいさんが、片手間の仕事に、たまと汲み取りに来てくれるのである。

葉子は立ち上がると、便所の戸をあけた。だまつて三田を、まねいた。

不安そうな三田の顔が、さっと青ざめた。

葉子は、便器のそばに立ったまま、便壺を見下ろしていた。

三田も葉子のうしろに、近寄つた。

葉子が下を指さした。

水分が多いのは、家の便所はほとんど葉子の専用といていいからであろう。

三田は、昔式の便壺より、車で外に出れば洋式の、綺麗なトイレをいくらでも知っていた。そのつもりになれば、たいていは外ですませる立場にいるのである。

指さされて三田がのぞくと、昼の明かりの中に、それはなんともいえない色を、たたえていた。

便所特有の臭いもあまり気にならないのは葉子の体臭に三田が慣れてしまつたせいかもしれない。

「サディストだった大崎さんでも、この中に落とされたのよ」

と葉子は三田を振り返っていった。

「マゾヒストであるお前が、入れないわけはないわ」

「かんにんしてくれ」

と三田は真っ青になって、葉子にいった。「それだけは……」

と三田は首を横に振つた。

「できないの？」

「できない」

「そう」

じつと葉子は三田を見つめた。

「葉子を愛してはいないのね」

「それは」

三田は絶句した。

「葉子を愛してはいないのね」

と葉子は、また、いった。

「愛している」

と三田は、くぐもった声でいった。

「愛しているなら、すなおに葉子のいう通りできるはずだわ」

三田の顔は今にも泣きだしそうであった。

「愛していなければ、いいのよ」

と、かわいた声で葉子は、いった。

葉子が急に自分から、はなれていくような気がして、三田はぶるぶると身慄いした。

今の三田には、誰も待っている女はいなかった。

葉子から、はなれられそうにないと、その時、三田は思った。

三田は、だまって服を脱ぎ始めた。

裸になると、観念したかのように、便器から下を見た。無色無臭のように三田には思え

た。

そろそろと三田は、すべりこんだ。足を沈めたとたん、ぞくっとする冷たさが、三田の全身を硬直させた。

壺は意外に小さく、深くは、なかった。

三田の腰より、やや上の部分で、汲取り口から、あふれた程度であった。

三田の首は、白い便器から突き出ていた。

葉子が、長襦袢の裾をからげた。

少し前、庭に放尿したばかりだから、と思ったが、三田の顔を濡らすものが降った。

ある程度、自在に、葉子は調整がきくようであった。

「首まで、つかってごらん」

と残酷なことを、葉子はいった。

「汲取り口から、あふれてしまうよ」

と三田は、顔を便器の上に、だしたまままでいった。

「掃除すればいい」

というなり、葉子が三田の頭を、足の裏で踏みつけた。

「首まで、どっぷりと、つかるんだよ」

三田は眼をつむり、両手をあげたまま、首をすくめて、そろそろと身体をちぢめていった。

新しい恐怖が、三田を襲っていた。胸までつかって、

「むりだ」

と三田は、いった。

葉子は三田を見下ろしていた。

「そのまま、じっとしておいで」
と葉子は夫にいった。

「寒い」

と三田は、つぶやいた。

このまま、三田の全身が、足のほうから凍ってしまいそうな錯覚にとらわれていた。

「つめたい」

「すぐ、あたたかいものを、かけてやるよ」

わずかばかりの水流が拡がって、三田の頭に、ひっかけられた。

それは、たしかに生まあたたかかった。

とたんに三田は、不思議なことに、いいよ
うのない幸福感があることに気がついた。

「うん」

便器の上で、葉子が可愛く息ばっていた。

三田が顔をあげたと同時に、音もなく、ま
つわりつくものがあった。



夫婦プレイの活路

家内のフォトを誌上に見て

早坂信治

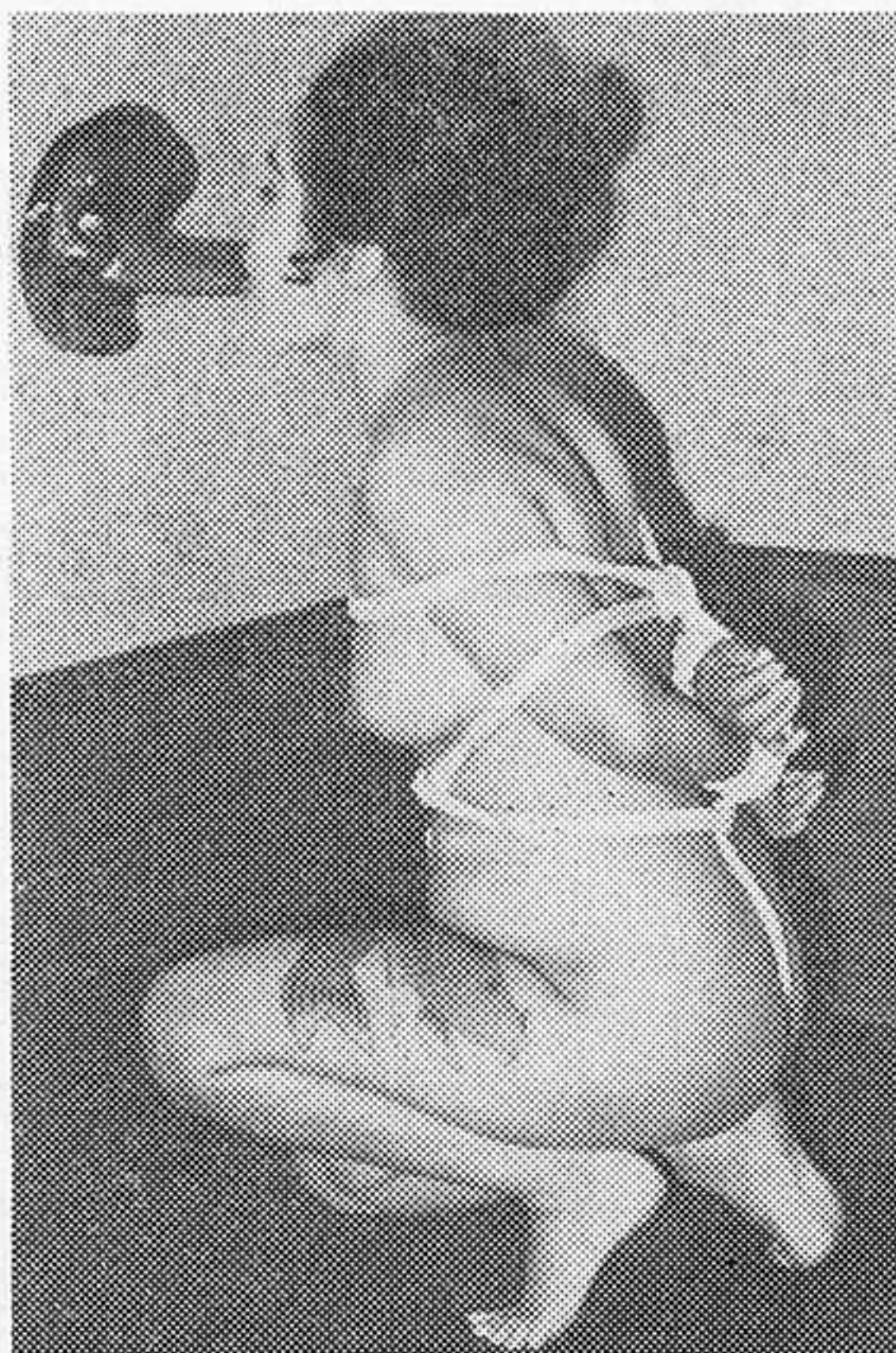
先日、思い切って送った家内のフォトと雑文が、三月号「奇クサロン」に掲載され、始めて同好ファンの前にあかした私達夫婦の秘かなるプレイが、私の気持の中に何とも言えない痺れる様な衝動を覚えさせ、久しぶりの感興を感じると共に、そこに新しく生まれ変わったプレイに対する情熱が燃え上がり、私達の夫婦プレイについて、あらたな活路を見い出すことが出来たようです。

結婚以来、家内と二人でプレイを楽しんできましたが、いつしか回数も減り、昨今では心のすみに言い知れぬ空洞が出来た感じを持ちながら、唯一「もやもや」として、やるせない「そんな気持を燃やして果たされ、そして過去のプレイが甘い想い出となって浮かび上がって来ました。」

言ってよい程人間の奥底に潜んでいるのではないのでしょうか。たまにそれが社会規範によって抑圧され、一般社会の中には持ち込めませんが、お互い信頼し、愛し合った、夫婦生活の中にあつてのSMプレイは、より豊かな愛情や性生活を営む源泉として、活用されて良いと思われれます。

その現われが、最近「奇クサロン」に寄せられる同好ファンの投稿なのでしよう。又、このことは「奇ク」が唯一つの充実性をそなえた雑誌であり、又掲載されるフォトが良き資料となる重視性、そのように私達ファンの意向を充分に汲みとって頂いていることに外ならないと思います。

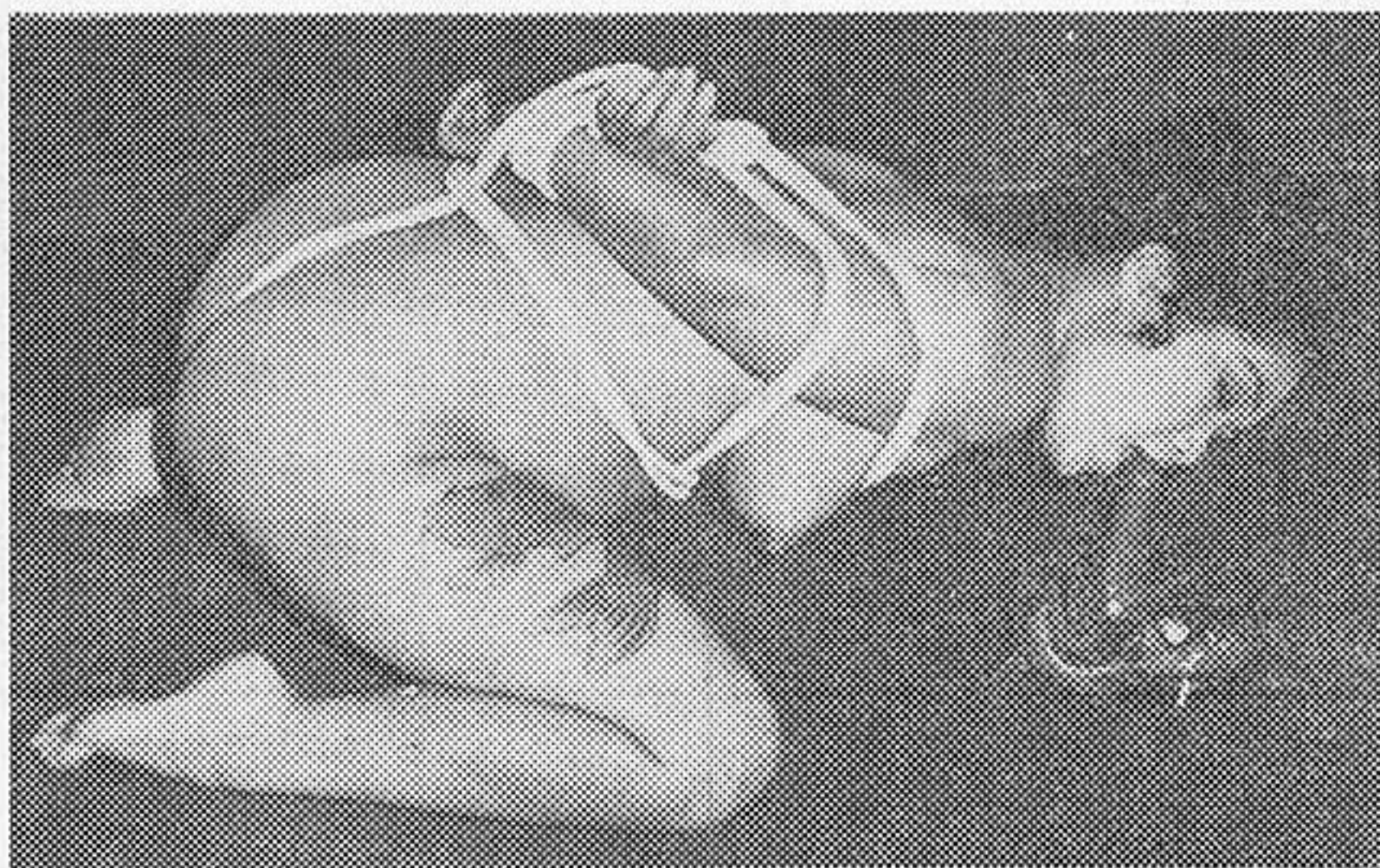
私も家内も、苦痛を伴う「むち打ち」とか「逆吊り」は好みません。私達のプレイとしては、やはり羞恥に満ちた責めが最高で、いささか変質的な仰向を自認してい



る私にとっては、嗜虐的な羞恥責めの中にあつて耽美を求め続けたのです。

私の要求さえあれば素裸になつて、童女のような裸身をさらし、私にたっぷり見られていただけでも平静を欠く家内を縛り上げ、折りまげ、死ぬ程恥かしい姿勢の中で、不自由な身をよじらせしめてやることは、女にとって最高の悦びを与えてやることと思っております。加うるにアクセサリーの刺青が、家内の悶えに従って躍動しより以上にプレイの楽しさを演出してくれるのです。

今回、私自身すら異常と思える程のたかぶりに、早速プレイ写真撮影してみました。私は勿論、家内とて久しくプレイから遠ざかつていただけに始めから乱れに乱れ、撮影するのにもわずらわしいくらいプレイの中に没入し、まるで歓喜の波が堰を切ったかの様に流れ出し、前後不覚、我を忘れて羞恥責めの中に浸り入りました。家内も羞恥の悦びを全身にただよわせ、縛られた身を悶えさせながら眉に八の字を作り、目をとじたり開いたりして、ともすれば、カメラを向ける私になじるような熱い



視線を投げてよこすのでしたが、次第に吐く声が言葉にならず、喜悅の呻きと交わり、狂いそうな状態となって、撮影も、しばしば中断する始末でした。

しばらくぶりのプレイというばかりでなく、今まで、狭い二人切

りの中で味わっていた快樂の範囲が、誌面を通じて同好ファンの前にさらけだしたことに、ずつと幅広く感じられ、その燃え上がりは格段の違いでした。

いずれ家内を提供して、ベテラン同好ファンの方達と交歓プレイ

でも楽しみながら、羞恥責めの奥義でも、家内に経験させたいものと考えております。

誌上でも、よく夫婦プレイのマンネリ化を歎いて、新しい刺激を求める上での問いかけや、アイデアを求めていられるのを見掛けますが、私も今回、覚えた衝動によってプレイにも、行動ばかりではなく精神的なものが大きく作用するということを実感出来、なるほどと思った次第です。

同封致しましたフォトは、今回撮影したものです。作品は良くありませんが、若し掲載して頂ければ幸かと存じます。なお今回のプレイアクセサリ―の刺青は、鯉を画いてみました。

前田真知子さん、僕のお嫁において

飛鳥 二郎

五月号を読んでいると、真知子さんも年頃で相手を奇クの愛読者からと考えておられる様子。M女性だからSの相手を求めるのが当然だろう。と言う事は、僕もSの傾向があり、今、24才、そろそろ適当なM女性でも見つけて考えていた矢先なので立候補しよう。

しかし彼女が僕のところに来てくれるかな。安サラーし……でも彼女を責める事で喜ばしてやろう。

家に来た時から、おまえは僕の忠実な奴隷である。したがって家の中では、素裸でおり奴隷としての飼育を受けなければならない。外出する時は下着をつける事を許す。下着と言ってもロープの事であり、ブラジャーは自分でやるに、くいから僕がやってやるが、パンティは自分でやり、締め具合の点検を受けなければならない。そして冬でもセーターとミニのスカートを、夏は何を着せようか。とにかく最少限しかダメである。命令に反抗した時などは、きつい御仕置（例えばテープ責めやチン

チン電車など）を受けなければならない。また時には色々な恥かしい姿に縛られ、サルグツワと目かくしで、犬みたいにクサリにつなばれたまま、一日を過ごさなければならぬ日もあるだろう。

真知子の為に木馬も作ってやろう。休みの日はドライブに行く日もある。しかし奴隷の身である真知子は助手席には坐らせてもらえず、素裸で縛られサルグツワをかまされて、車のトランクの中につめ込まれる。そして人のいない所で引っぱり出され、野外での責めが始まるのである。

こんな生活は、いかがですか。もしよければお嫁に来て下さい。これは一例ですが、他にも色々なアイデアを考えています。とにかく貴女は絶対にロープから離れられないのです。

一度お会いしたいですね。でも東京と関西では少し遠すぎ、思うようにデートも出来ませんね。今度、京都に来られた時に、ちよっと寄って下さい。待っておりますから。

「田原坂」の替歌

『まるはだか』

北 川 まりこ

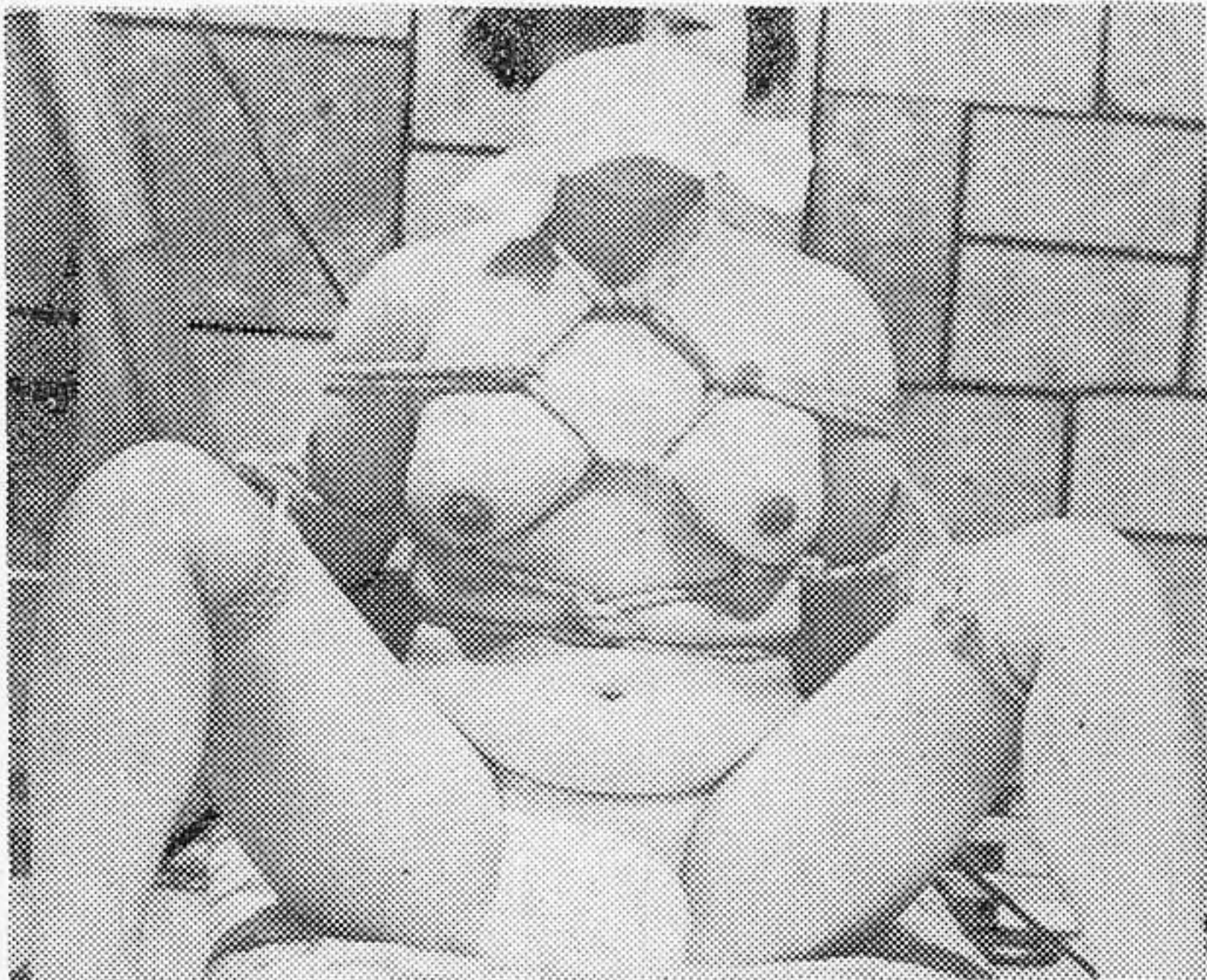
縄はぐるぐる 素肌に絡む
立つに立たれぬ まるはだか
鎖じゃらじゃら 手首に鳴らし
のたうちまわる まるはだか
右手に革ムチ 左手に手綱
乗りまわされる まるはだか
肌に噛み入る 荒縄きびし
うしろ手縛りの まるはだか
草をしとねの ムチ待つ肌に
朝陽が映える まるはだか
わらって下さい 貴方の縄を
ねだって悶える まるはだか
どうせこの肌 ささげるからは
踏み躪られたい まるはだか
お望みならば 這いずりまわり
ワンと啼きます まるはだか
足をぎりぎり 引きのばされて
はずかしうれし まるはだか
野外のプレイに 曳かれ行き
野草に埋まりし まるはだか
手足くぐられ 青田のなかに
カカシがわりの まるはだか
服も着物も いりませぬ
縄だけください まるはだか
お気の済むまで お好きにどうぞ
責めを受けます まるはだか

快樂の世界

佐野みさ子

奇クファンのみなさま、ごぶさた、いたしております。ロマン派生様とのプレイで、つるつるに剃毛されたみさ子のビーナスの丘も今では、もとどおりに若草がしげっております。出来れば、みな様の前で披露したいと思っております。

いずれ又、どなたかとプレイした時に剃っていたいただきたいと思っております。みさ子はロマン派生様に、新宿のホテルの一室で、たつぷりと、満足するまで責めて頂きました。なかでもすばらしかったのは、なんといつても首ふりの人形バイブでした。スイッチを入れた時は、天国にも勝る快樂の世界にいたようでした。その他、後手にしばられたまま背後からキスを受け、更に乳房、下腹部はもとより、みさ子の体の



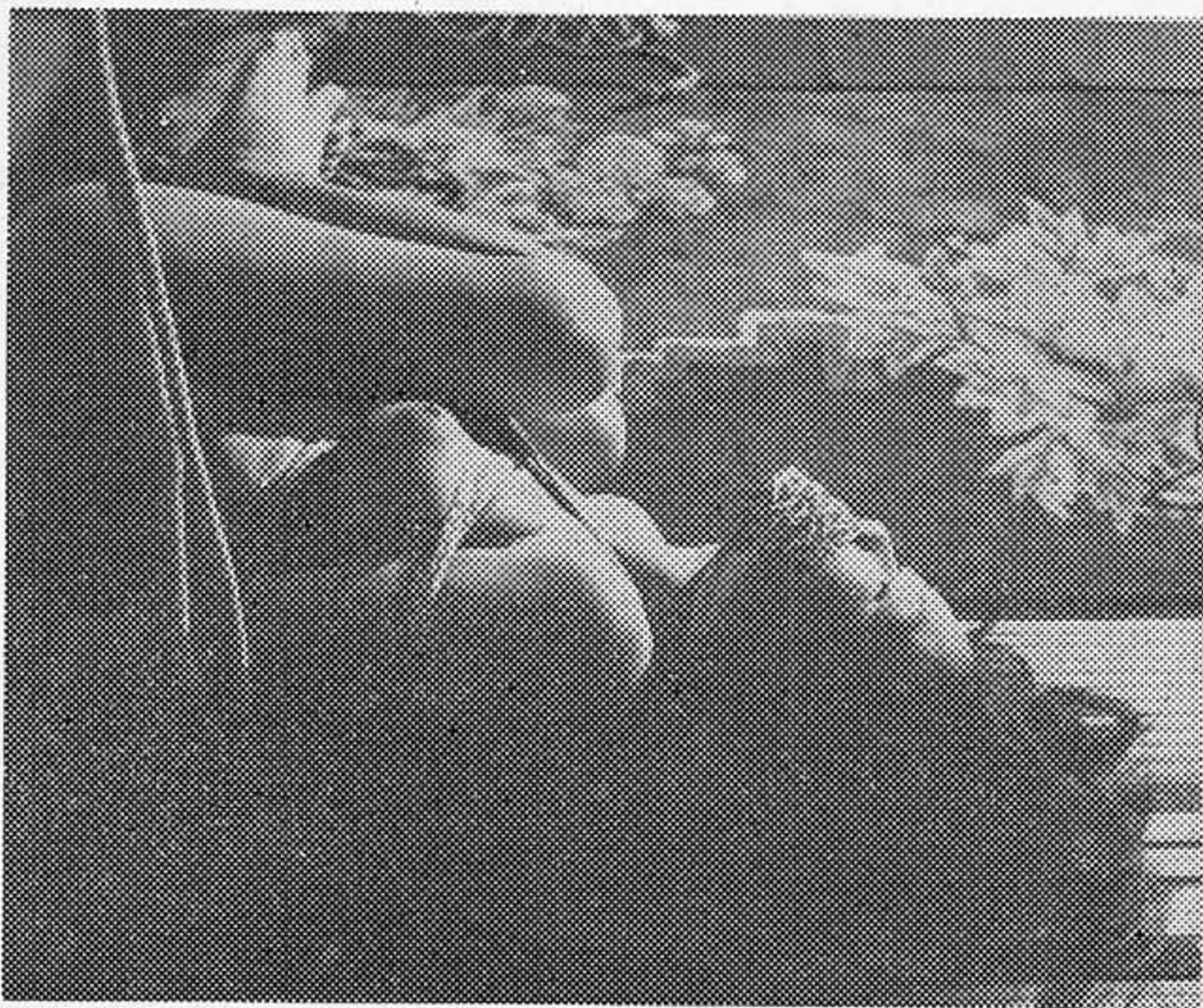
礼と申してはなんですが、みさ子も、たつぷりと。ロマン派生様にオシャブリのご奉仕をさせていたできました。

本当にロマン派生様はすばらしいS男性です。この次には辻村先生か塚本様と、ぜひプレイをしたいと思っておりますが今では子供も大きくなり私の後を追うようになりましたので自分で自分の身体が自由がままになります。家庭生活とSMプレイを両立させるのは非常にむづかしい事だといくづく感じている、しだいです。

でも、いつの日にか、みなさま方の、お相手が出来る日が、くる事を、信じております。同封の写真は、ロマン派生様とのプレイ写真ですが、四月号では発表されていないと思いますのでお送りしたしだいです。みなさまのM女です。今後ともよろしくお願い致します。ロマン派生様にかぎらず、奇クファンの方で紳士的な方ならプレイをしたいと思えます。

M女通信の高村浩子様へ

＝ 僕のラブレター ＝ 久保省一



五月号の貴女の通信を読み、感じたことを書いてみます。まず貴女の文章を読んで一番に感ずることは、なるほど自分で言うだけあって、文はうまい。読む者をひきつける様に書いているということです。しかし、私には納

得できないことがあります。それは字がヘタな者、間違った文字を使った者等は、つまらない人間が多いという貴女の言葉です。文は人なり、それは貴女という通りです。しかし、それをそのままに受け取り、きめこんでしまう

のは、おかしいと思います。きれいな字を書く人は、すべて善人でしょうか。文のうまい人は、すべて良い人間でしょうか？ 私は違うと思います。今の貴女は片寄った考え、せまい考えしか持ち合わせていない様に思えます。

貴女の通信を読むたびに、私は「こんな生意気な女は、とことん責めてみたい」と、いつも思っています。私は地方に住む者ですが奇クを読むたび都会に住んでいる人がうらやましく思えます。以前四年ほど東京にいましたが父の死によって郷里に帰り現在は安定した職業にもつき定時制にも通っています。東京にいた頃に貴女の通信文を見たかった。でも、その頃は貴女は、まだ奇クには登場してませんでしたね。

あの頃は定職もなく、工員、店員、バーテン等いくつかの仕事を転々としました。あれから七年、人間的にも生長したつもりですが一つだけ悩み苦しんでいる事があります。それは未だにSMに關した雑誌を愛読していることです。何か一種のひけめを感じます。恋人がいたのですが、秘密を持っていてはすまぬと思い、奇クを思いきって見せた所「変ってるのね」

と言われ、それっきり会ってくれません。その人も先月結婚してしまいました。もし奇クを見せなかったらと当時は大分反省もし、口惜しい思いもしました。しかし、良い経験をしたと、今では思っています。

一寸、私事を書きすぎましたがこの手紙を書く気になったのは、「ラブレターが、ほしい。身体が燃え上がる様な……」という文が気になったからです。ラブレターというには、ほど遠い私の手紙ですが、私にとってみれば、こんな手紙でもラブレターの一種ではないだろうか？ と思っています。貴女も、そういう気持で読んでいただけたら幸いです。

私は三交代という特殊な勤務ですし、その上、定時制高校の三年に在学中です。それで文通という方法しか貴女と話し合える機会がありません。私は空手をやっているスポーツマンで、学校では空手部のキャプテンをやっています。（といっても部員四人の空手部ですけどね）

貴女の便りを待っています。

久保省一

M女高村浩子様



Ⅱ／第九十六回Ⅱ

辻 村

隆

野川浩のペンネームで、観光新聞などにポルノ小説を書いていた益子某が「孤愁の影」「未完成恋愛論」「若い樹液」の三作品をワイセツとみなされて罰金三十万円を言い渡された。寡聞にして私はこの作品を読んでいないのでどの程度のワイセツさなのか、精しくは知る由もないが、力作と認められながらワイセツと見做されたところに、問題があるようである。

中年になると、どうしても好色根性が旺盛になって、私の拾い読みするものも、それに類するものが多い、中にはワイセツじゃなからうかと思われる様なものまで、堂々と罷り通っている世の中である。

ポルノ解禁などの言葉が、真実めいて語られる世の中だが、法が

生きている限り、取り締まるのは当然としても、まるでザル法のようで、一旦、陽の目をうけると、おそれもなく大手をふって売られている。

スピード違反は悪いと知っていても、取り締まりがなければ、誰もが罪悪感もなく、平気でスピードを出しているようなもので、偶々、取り締まりに引っ掛かった時は、運が悪いように感じる。こうした小説も、その偶々の網の目に引っ掛かったように思えてならない。

ワイセツと、きめつけられたればこそ、私は野川浩という作家の名を知り、そのポルノ的ワイセツ作品の名を知り得たが、網の目をくぐっていれば、たまたま眼に止まった好事者の一部の者は読んだ

としても、案外その俚、世の流れの中に押し流されてしまうのではなからうか。

かつて、ワイセツと見做された作品も、今の眼で読んでみれば、極くおとなしく、何の変哲もないもののようにすら感じられるのである。既に、それだけ世の中自体が溜々たるポルノ調に麻痺している証拠である。

私の書く雑文のカメラ・ハントも、まかり間違えば、かくいうワイセツと、きめつけられるような要素を大いに含んでいる。

世俗の雑誌や小説を読んで、この程度なら、彼も書き、人も書いていて、心を許して安心して書かれる基準が奈辺にあるか、確としていない現在、或は、いづこかで大きい罟が待ちうけているかも知れない。

やはり、用心するに、こうした事はないだろう。

× × ×

吉川英治氏の「新平家物語」がNHKで放映されるようになって今年は大いに平家ブームになりそうである。いやもう、ブームは既に、始まっている。柳生を描いた「春の坂道」がテレビで放映され

ていた間は、日頃、静かな柳生の里が、時ならぬ賑わいをみせて、変哲もない田舎の山里が、押すな押すなの大盛況ぶりであったというが、それも最近は閑古鳥がいない。

マスコミが騒ぎ立てるのか、レジャーを求めて大衆が右往左往するのか、商魂たくましい輩に躍らされるのか、いずれにしても可笑しい現象である。

そのくせ、家族中が、日曜日の夜「新平家物語」をみるものだから、つい私も釣られて、既に一度読破した、この大河小説を一から再び読み出したものである。三十才代で読んだ過去と、五十才になって読みかえす今とは、同じ小説を読んでも、受け取り方、考え方の違いの大きさに我乍ら驚くのであった。

歴史の流れの面白さと思って読んだ新平家が、この年で改めてよむと、人生の苦楽・哀歓・諸行無常を切実に感じられて手離せず、子供達が未だ、一、二巻あたりをウロウロしている間に、連日、夜を徹して読破し、早くも読み上げってしまった。

新平家と、我が愛すべき奇クを比較するのもおかしいが、活字を

追う以上は、二十才代の読み方、三十代の考え方、四十才のうけとり方、五十才の観念は、すべて違う筈で、奇ク一冊をとり上げててもその読む人のプレイ歴、年齢、知識層によって、千差万別の開きがあることであろう。

拙筆のカメラ・ハントが、毀譽褒貶、いろいろに受け取られるのも、又ムベなる哉で、その人々によって、受け取り方の違いがあつてこそ、世の中は面白いのかも知れない。

批判、酷評に耳傾けるとしても近頃は、往年のようにムキになれず、独り苦笑しているのは、私の年輪が、もう大分古くなって、幾分は枯れつつあるゆえんでもあらうか――。

× × ×

連合赤軍の、まるでケダモノ同志の共喰いにも似た惨殺事件を読んだ時、私は直感的にパセドウ女史の、美に対する激しいコンプレックスの介在を感じた。事件が解明するにつけて、その直感が嚆矢

を射ていたことを知り、平凡な言葉であるが、*「犯罪のかげに女あり」*は、それが革命とか、征服、陰謀など、すべての場合に、つき纏っていることに、慄然とするのであった。

男にとって女ほど可愛いものはない。が、反面、女ほど厄介な存在で、手に負えぬものもない。世の享主族で恐妻家と呼ばれる輩も、恐妻のゆえんは、外での浮気が、ばれることを恐れて汲々としているのが、その原因の大多数であらう。

女房も女なら浮気の相手も女。一方で女を可愛がり、一方で女を恐れる。その恐れおののいている女房も、新婚当時の頃は、誰にもまして可愛い女であつた筈――となれば、男は生まれて以来、死ぬまで女に、振り廻されていくのかも知れない。

洋の東西を問わず、女の嫉妬、劣等感、物欲、権勢欲等によって歴史は、大きく塗りかえられている事例は多

い。

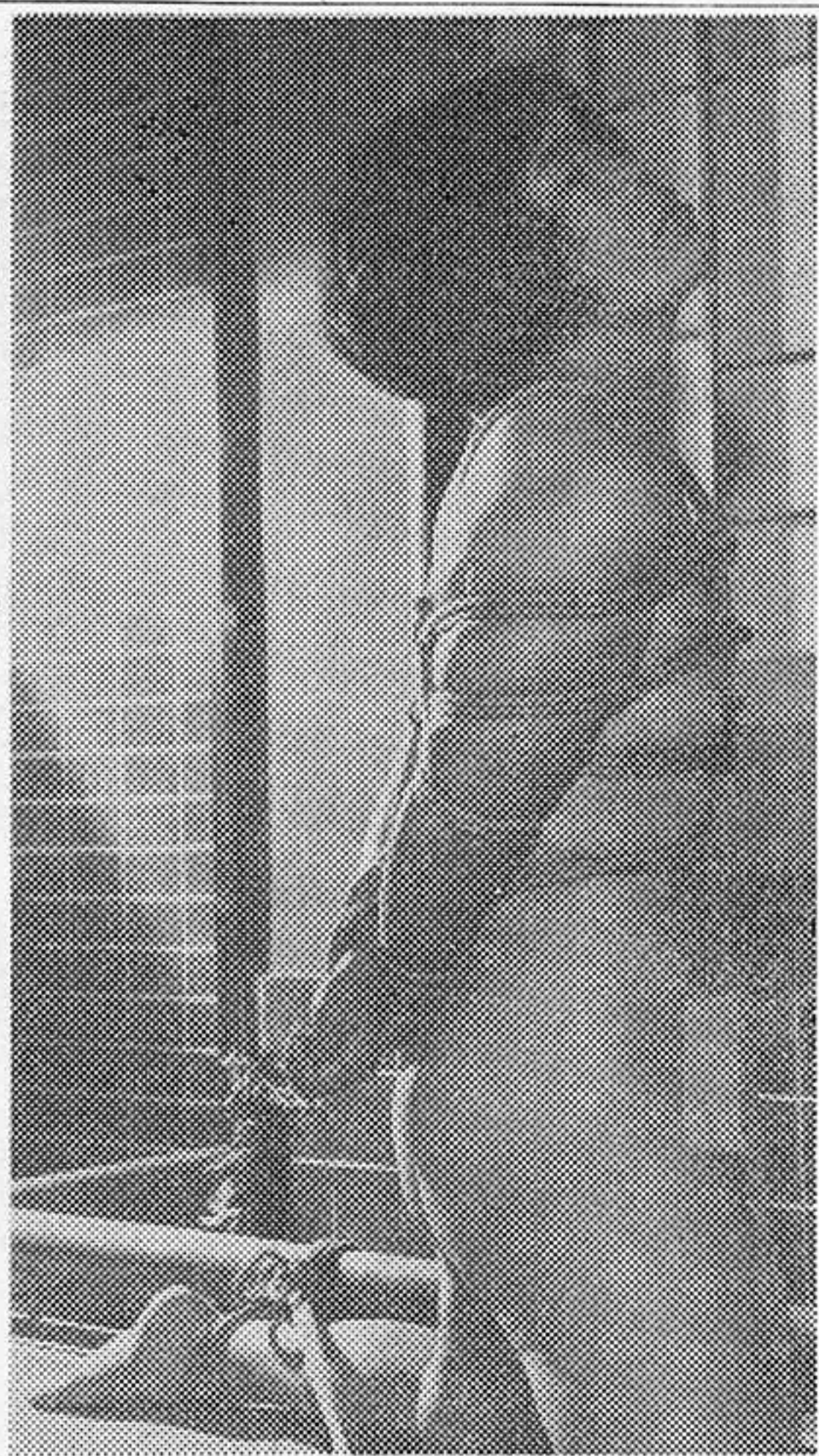
そうした女の、むき出しにされたサジスチックな感情は強烈そのものである。

パセドウ女史の、おそろべきリソンの本心は、死に追いやらすにはおかぬ、嗜虐の心理が左右していたことは否めない事実である。全裸にして緊縛し、鞭り殺しにしてゆく彼女の血に狂った異常心理に、私は真正のサジストをみる思いがして慄然とする。

S Mプレイを愛好する、我等奇クの同好者は、日常性は、いたって至極、円満。平和を謳歌する人士である。倦怠を避けようとして時にS Mプレイを交じえて、刺激を求める、私のいう、プレイ族である。

殺戮、拷問、その様な血なまぐさいことは、大嫌いな平和愛好者である我々が、たとえ自称、サジストを名乗ったところで、こうした輩と同一視されることは好ましくない。

少なくとも、奇クを愛読し、投稿する人々と、わけのわからぬ革命熱にうなされて走り廻る輩とは住む世界が別であることを、この際、はっきり、いわせてもらいたい。



『やるせなき喘ぎ』 江口淑子

× × ×
 去年の三月、台湾へ遊びに出掛け、茫小姐の魅力に惹かれて、その折には、是非、来年も思っていたのに、一年の間に、台湾の国際事情は、すっかり変わってしまった。

少なくとも去年の今頃は、日本人旅行者大歓迎であった彼地に、今、何となく冷たい空気が漂い流れていると、最近、台湾を訪れた人は、いう。

大商社の引き揚げ。米中、日中の歩みより。台湾は中国の一部であるとの見解ETC……。

四面楚歌めいた孤立した台湾を私は気の毒に思う。大同同志の迷惑の渦中に巻き込まれて、台湾自体、これといった陽動的行為もないのに、いつしか追いつめられた恰好になって、自然、日本も長いものには巻かれる式に、一年前とは風当たりも変わってゆく。

いつの世にも、弱者は損をみる立場に、おかれてゆく。

あの時は、物足りぬ緊縛プレイで終わったが、この次こそは、呀ッというような強烈なフォトをものする気でいた私も、事情も変わり、去る者は日々に疎しの例えで或は再度の望みも、少し縁遠いも

のになりつつある。

「何も一人の台湾娘に恋々とする事、ないじゃないか。世界は広いんだ。次は香港娘かタイ娘、ハワイ娘とでもプレイしたら、いいんだよ」

と、その節、同行のドクター氏は意気軒昂である。いつの日か海外に遊んで、違った味の娘とプレイすることも、あながち夢ではない。人間すべからず、それぐらいの希望はもっていても、よさそうである。

× × ×
 社長の箕田氏も、四囲の情勢に圧されたのか、五月号より値上げを契機に、グラビア復活の萌しをみせてきた。

独り奇クのみ、莫迦がつくぐらい正直に、グラビア廃止の約束を固く守って、内容充実の方に力を入れてきたが、近頃いよいよ視覚に訴える事の多い世の中である。俄出版の、SM週刊誌や月刊誌が

ケバケバしいばかりにカラーフォトを挿入して視覚に訴え、その内容に到って乏しいのであるが、やはり大衆は、美女の緊縛のカラーグラビアの多いのに惹かれてゆくのは無理からぬ次第である。

時勢に抗して、値上げもせず頑

張ってきたが、郵送料、印刷代、すべて値上げの時代とあれば、奇クも又、己むを得なかったのである。

箕田氏は、ここ数カ月、売れても売れても赤字の続くのを慨嘆していた。

定価は据置でも、編集部の給料又、私達への稿料は、時代と共に上げてゆかねばならず、経費は膨張を重ね、赤字は月々累積してゆく一方であつたらしい。奇クと雖ども商業誌である。同好の願望を満たす目的は達しているとはいえずやはり幾許かの利潤がなくては継続してはゆけない。

文中の挿入フォトを大きくし、掲載をふやし、懸命に泡沫のSM誌と対抗したが、やはりグラビアの派手なものには勝てない。

世はポルノ時代の夜明けと、いわれている。時代の趨勢なれば、グラビアの復活も、又、いいではないか。

一旦、復活する気になると、過去の蓄積と実績が大いにものをいい、私も又、ハント女性の数あるフォトを欣然と提供する気であるし、塚本氏の撮りだめたフォトも数知れない。

隠忍自重、満を持していた矢が

一旦、放たれると、もうおそろしく群小誌は、色をなくして狼狽するに違いない。

終戦直後に発刊した、唯一の生き残り雑誌として、大いなる誇りを持つ奇クは、風俗誌中でも、今は元祖的な存在である。

戦後より二十五年、一貫してSMの世界で果たしてきた奇クの役割は余りにも大きい。

偉大なるM作家沼正三を生み、プロSM作家第一号、団鬼六を育て、かくいう私自身も又、奇クと共に育てられ、若干の名を世間に知られるようになった。

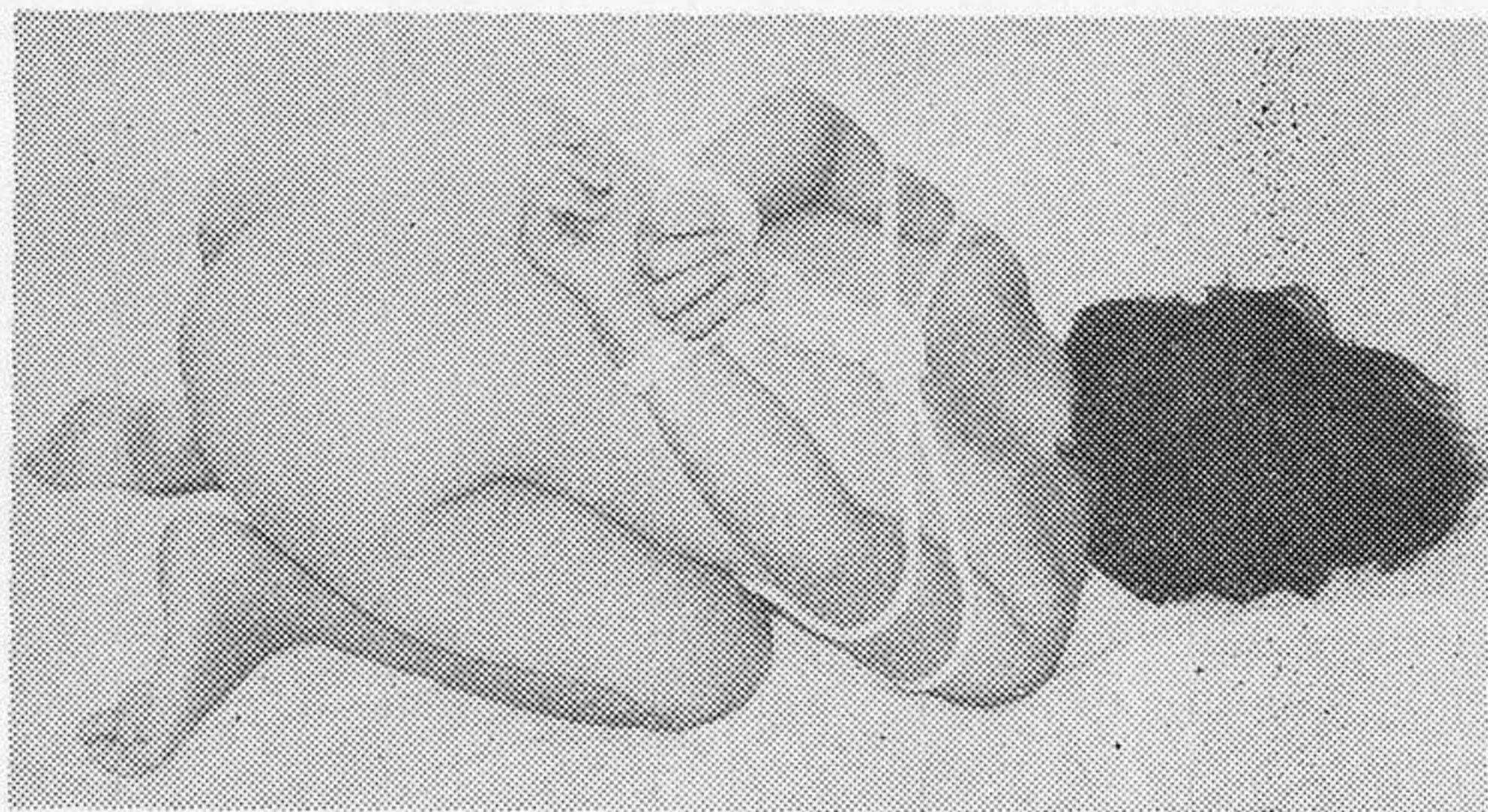
思えば奇クのSM界に対する貢献度は、はかり知れない。

SMなる新造語——緊縛という言葉。ア—ヌスしかり、ネクタイルまた、しかり。

奇クによってSMの世界は夜明けを迎え、今や各誌は、そうした奇クの、つくり上げた言葉を、当然のように使って憚らない。

他誌からの要請、誘惑を受けつつも、私も又、奇ク一本槍で今日に到った。本職を持つ私は、プロ作家ではない。それだけに、肝胆相照らす箕田氏の主宰する奇クが私にとつては最もふさわしい場合の発表誌でもあるわけである。

読者投稿
私は誰でしょう E・A子



割とお尻は大きいでしょう。でも、まだ年は若いヨ。

抱擁力はあるほうだけど、お乳のほうは、まだまだ、大きいとは言えないの。

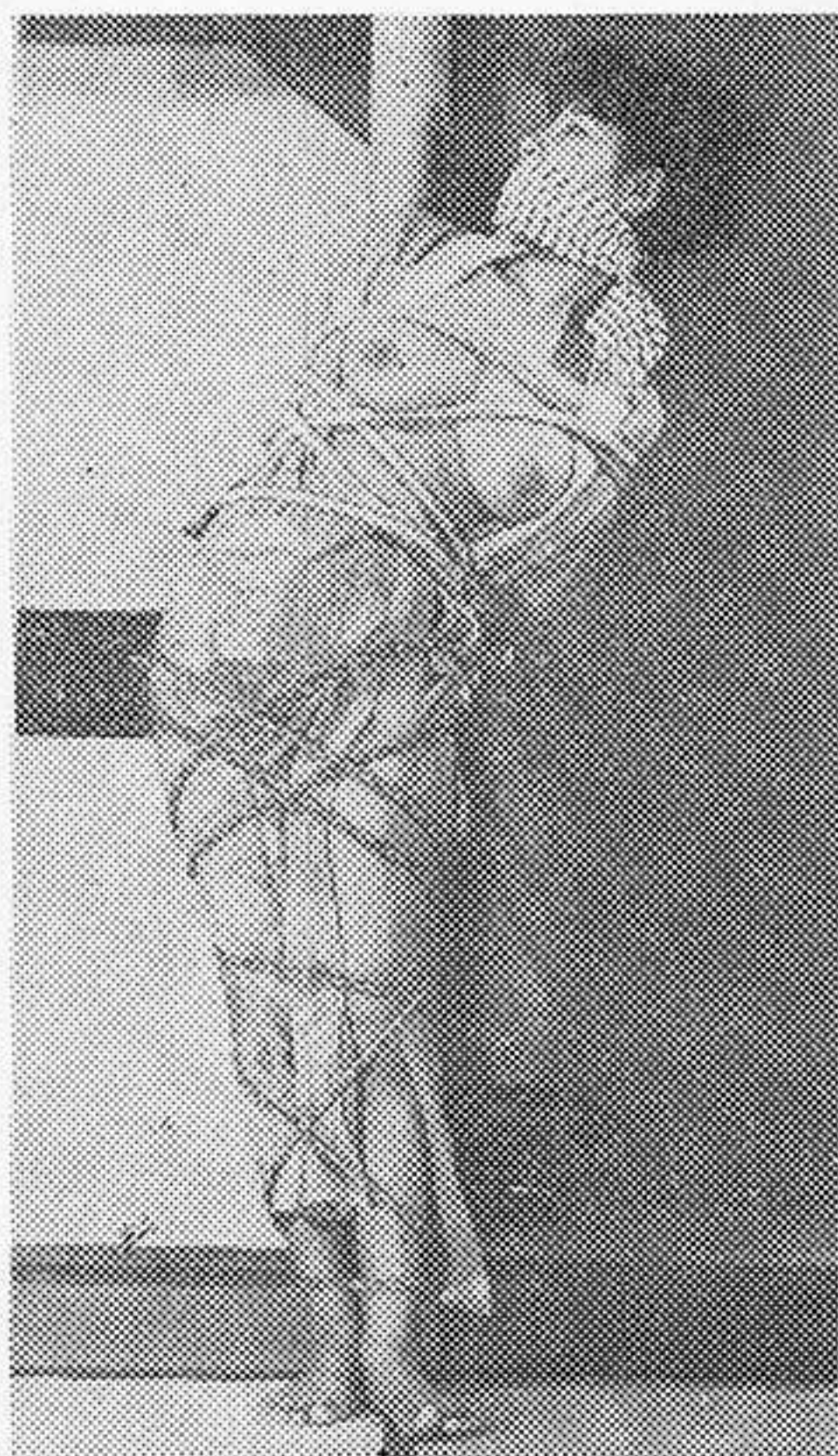
肌は、すべすべとしていて、傷一つないんだけど、ごらんの通り、縄でくくられるのが大好きという娘です。

カメラマンにヌードをとってもらったとき、持っていた縄でくくって、と言ったら、びっくりしたような顔しながら、こんな縛り方をしてしまいました。

たった一枚の写真なので、送るのは、ちょっと惜しいんだけど、たくさんの方に私の縛られたハダカを見てほしいので、涙をのんで送ります。

果たして、私は誰でしょう。

(東京都・E・A子)



福井桃子さんの『鼻責め』写真に期待

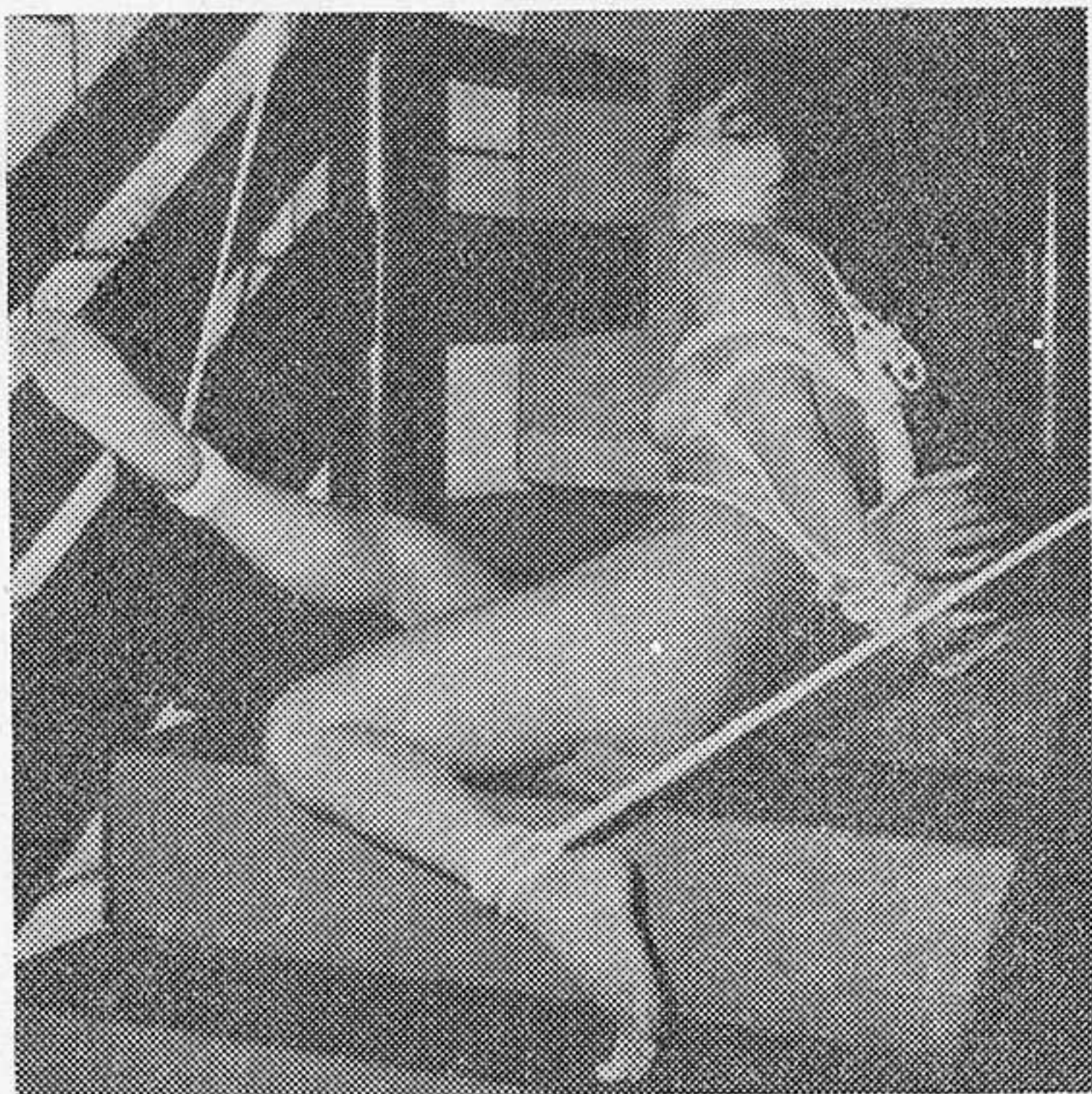
齊藤 香根雄

四月号の「芙美代のお喋り」の中で、早速「鼻責め」のモデルをOKして下さって有難うございます。でも、目下妊娠中の貴女のこと、ちと先のことになりそうです。ね。その間、出来るだけ腕を磨いておきましょう。でも、いざ貴女の鼻の味を十分楽しめるのかと思うと「鼻マニア」である私の血が、たぎります。きっと実現させたいものです。その時はきっと、カメラとテープが活躍してくれることでしょう。

それにしても、四月号の写真は素晴らしいですね。殊に一二四頁に載った写真の鼻はたまりません。私もこのポーズで撮り、鼻を苛め抜きたいものです。本当に福井桃子さん、貴女のツンと上向いた鼻は素晴らしいですよ。私が腕によりをかけて鼻を責めている時の桃子さんの表情と声が楽しみです。お便りお待ちします。終わりに立派な赤ちゃんを出産されますように祈っています。

(写真は愛川悦子の柱縛り)

千鶴子よ跳べ 長田二郎



二十才の東京の踊子、鈴木千鶴子さんとのSMプレイを塚本氏が、奇ク五月号に発表された。踊りできたえたピチピチとした若鮎のような彼女を思うさま責める事のできる塚本氏を羨ましく思うと共に、こういうSMプレイ始末記を豊富なフォトと共に読み且、鑑賞できるのは、まことにありがたいご時勢だと感慨無量である。十

代から二十代の後半まで、戦争また戦争、そして空襲と、休む間もなかった私の青春時代をかえりみると、あの当時、この奇クのような雑誌に恵まれる幸福が掴めたとしたら、現在の私は、もっと変わった人生を送る事ができたと思う。ともあれ、塚本氏の文章に堪能して、読み返し乍らの感想を書き綴ってみたい。

若い女性を緊縛してSMプレイに浸る文章は、塚本氏はもちろん辻村氏、山本氏、城氏等と数多くの記事に恵まれてきた。しかし正直いって、そのフォトを眺めて鑑賞に値する女体は数少ないのではないか。或は私個人の好みにあう女体が数少ないと言ひ換えるべきかも知れない。そういった意味で鈴木千鶴子嬢のヌード緊縛記は充分鑑賞に値すると思うがどうであらうか。フォトからも推定できるが、いわゆるランジスタ・グラマーというのか、小柄の割りにつくべきところには、肉が充分に乗っており眺めていても気持が良い。一九四・一九五・二〇二頁のフォトは、彼女の肉体美を見事に表現しているのではなからうか。彼女が誇るだけあって、そのプロポーションの均斉美も素晴らしい。二〇六・二〇七・二一〇・二一三頁のフォトはその意味で鑑賞に値する。彼女の職業からくるフォト表現の上での美しさは、二〇六・二〇九・二一〇頁のフォトにあらわである。踊りできたえた肢体ならではの姿勢であり、眺める私の心にS的な身ぶるいさえ感じさせるものである。まさに「千鶴子よ跳べ」である。

二〇〇・二〇一頁のフォトはこの踊子緊縛フォトの中では、もっとも夢幻的なものである。逆光の中に浮かび上がる様に緊縛されている千鶴子のヌードは、バックとソファの黒と反映して、あたかも天使の緊縛ヌードを思わせる。塚本氏の撮影技術の素晴らしさを見せつけられるフォトである。特に二〇〇頁のものは、フォトとしても鑑賞できるものである。

私は勿論SMファンである。しかしこうして緊縛プレイのフォトを鑑賞する場合には、モデル美、緊縛美、フォト美といった美的鑑賞に堪えるフォトであって欲しいと思う。そういう意味では、白紙で覆われたフォトには言いようのない嫌悪感をかんずるのである。辻村氏のルポルタージュ的緊縛記に比較して塚本氏の緊縛フォトには、芸術的美を追求するものがあり、それが私を魅せてくれるのだが「東京の踊子緊縛記」には、白紙つきがいつもに比べて多すぎるようだ。あえて芸術美云々と気どるつもりもないが、白紙のつかない夢幻の境に誘い込まれる様な緊縛フォトを望んでいるファンもいることを、蛇足ながら書き加えたいのである。

鈴木千鶴子さんのこと e t c

提 崎 昭 人

よくもまあ、次から次へとモデル志願者が出てくるものだ、おきれるやら嬉しいやら新しい号が発行されるたびに思う。とにかくSMファンにとってはありがたいことである。辻村隆氏のカメラハントも、すでに向こう三月分ぐらいの材料はあるとか。SMブームなるものの影響も、こういうところに現われていると見るべきか。

五月号のニューフェイスは鈴木千鶴子さんであった。前号の読者通信で自己紹介を読んだときは、半信半疑だった。フリーのダンサーでCMや映画に出たことがあるといわれても、なかなか信じる気にはなれない。こうやって奇ク誌上に登場しても、ほんとうにフリーのダンサーなのかと疑ってしま

う。だいたい、こんなふうに緊縛モデルになったら、これからの仕事に、さしつかえがあるのではなにかと思うのが、芸能界の事情にうとい私の感想である。

ところが——である。五月号を読んだ翌日の二十六日、TVを見ていると、ボウリング番組のコマーシャルで、どこかで見た顔が出てきたので驚いた。奇ク誌上の写真は不鮮明であるし、顔を、さほど、はっきりさせていないので、断言はできないけれども、あの顔は確かに鈴木千鶴子さんであるような気がする。

たいへんに騒々しいCMで一番最後には、小川ローザなみにスカートがめくられてパンティをちらつかせる。商品名をはっきりさせる

のはさしつかえがあると思うのでさしひかえるが、鈴木千鶴子さんのいうことには嘘はなかったわけである。とにかくTVのCMに出ているタレントが緊縛モデルで登場してこようとは、奇クを愛読していた十年近くにもなるが、夢にも考えられなかったことである。

○

ポルノ取締りで辻村隆氏などもかなり気を使っているようだ。しかし実際ポルノを取締るつもりがあるのかどうか、かなり疑問で発端になった日活のロマン・ポルノは、あれ以後かえって盛大になったし、映画館も、よく客が入っている。取締りの目的とは逆に、警視庁は日活ロマン・ポルノの宣伝をやったようなものだという皮肉な見方もできる。

国会でもポルノ論争があり、討論の内容を読んでいると警視庁側の方が分が悪い。刑法があるから取締るのだという答弁にいたっては、逃げ口上にしか聞こえない。

もっとも、こういう取締り強化とは逆の現象も、なきにしもあらずで、そういう曖昧な状態が、いったいどっちが本当なのかという

詮索がましい心を起す事になるのである。陰毛五月解禁説というものもあるが、去年の十一月に解禁になるという噂もあったくらいでどうもこういうことは半年ごとに繰り返されるのかもしれない。

それはそれとしても、一般的に陰毛の扱いが以前にくらべると、かなりルーズになってきているのは事実だろう。ずっと前のように陰毛なんか絶対に見せていけないというのとは違って、ライトの陰になつてまぎらわしい状態ならば一流の週刊誌にも堂々と見えるのが載っている。それにくらべると、ポーズから想像して、そんなに見えない筈だと思ふ様な写真まで、ていねいに白ヌキにしてしまう奇ク編集部というのは余程用心深いのだと、なかば同情してしまう。ブラックリストに載っている以上、いやが上にも慎重にならざるを得ないのは分かる。それを責める気にはならないし、何よりも奇クを続けられるように運営すべきなのだ。

とにかくにも、乳房や尻ならいくら見せてもかまわないが、セックスだけは駄目という、この中途半端な倫理が早く撤廃されることを祈ろう。



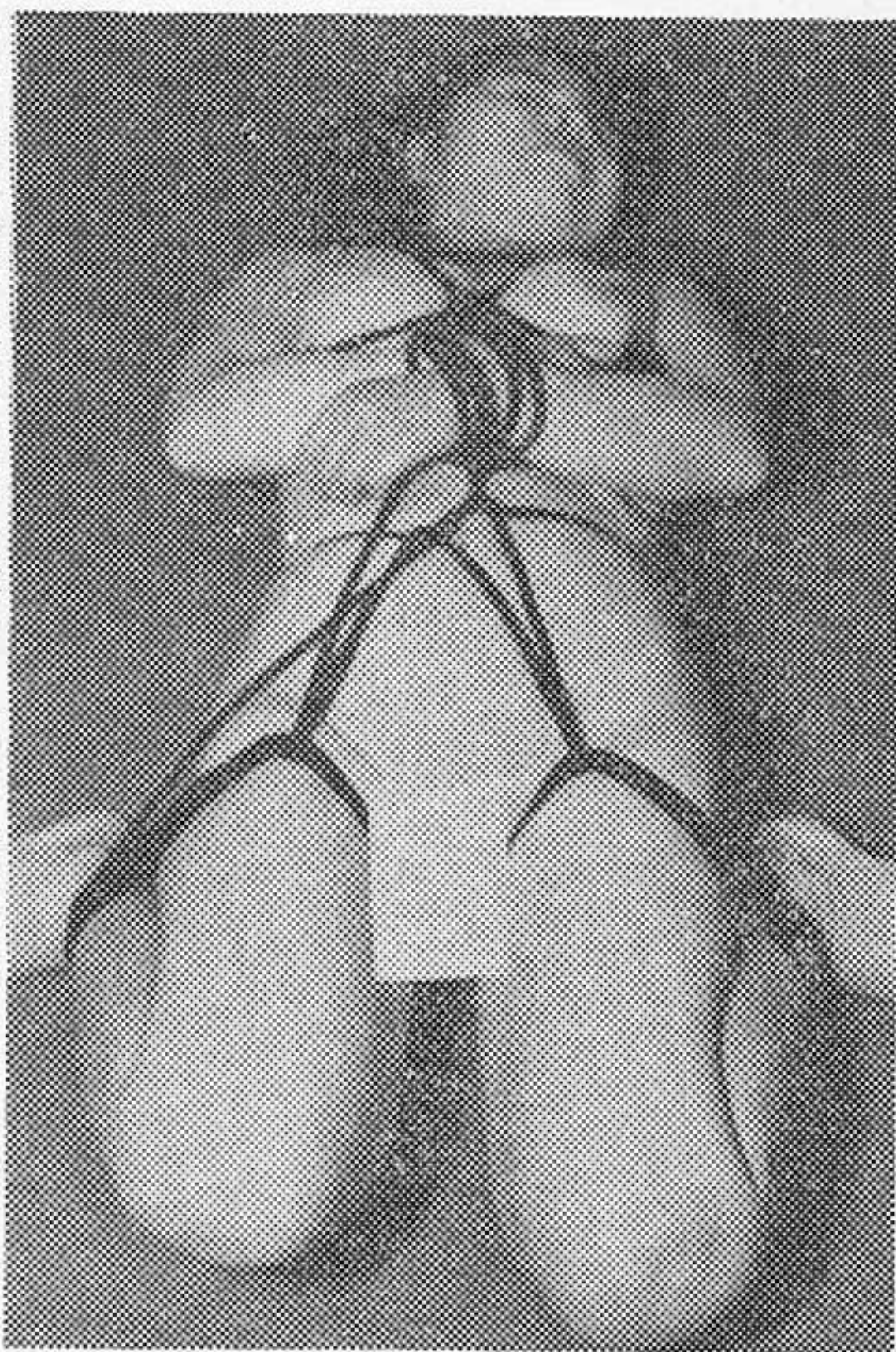
短信往来

柴利好さまへ

紀川正信より

四月号の柴利好氏の随想の中に私たちのことが採りあげられていたのを見て、大変ありがたく思いました。その中の「小手縛り」については、縛りかた（正式であるかないかは別として）を知りませんので、私なりに考えて、形にこだわらずに縛っておりますので、その度に違うと思います。もし許

されるならば、柴氏に色々な縛り



方を御指導願いたいと思います。胴鎖についての柴氏の観察の確かさには敬意を表します。十月号に発表したフォト撮影の時に、何か物足りない気がしてしまいましたので、次には鎖を切ったり増したりし、私なりに色々工夫して改良したものが一月号発表のフォトとなったわけです。

今後とも、柴氏の御批評を戴きたいものですが、文中にありました①②につきましては、妻も「奴隷妻」第四号の女として調教されたいと申しておりますので、早い時期に実行したく思っています。

編集部より

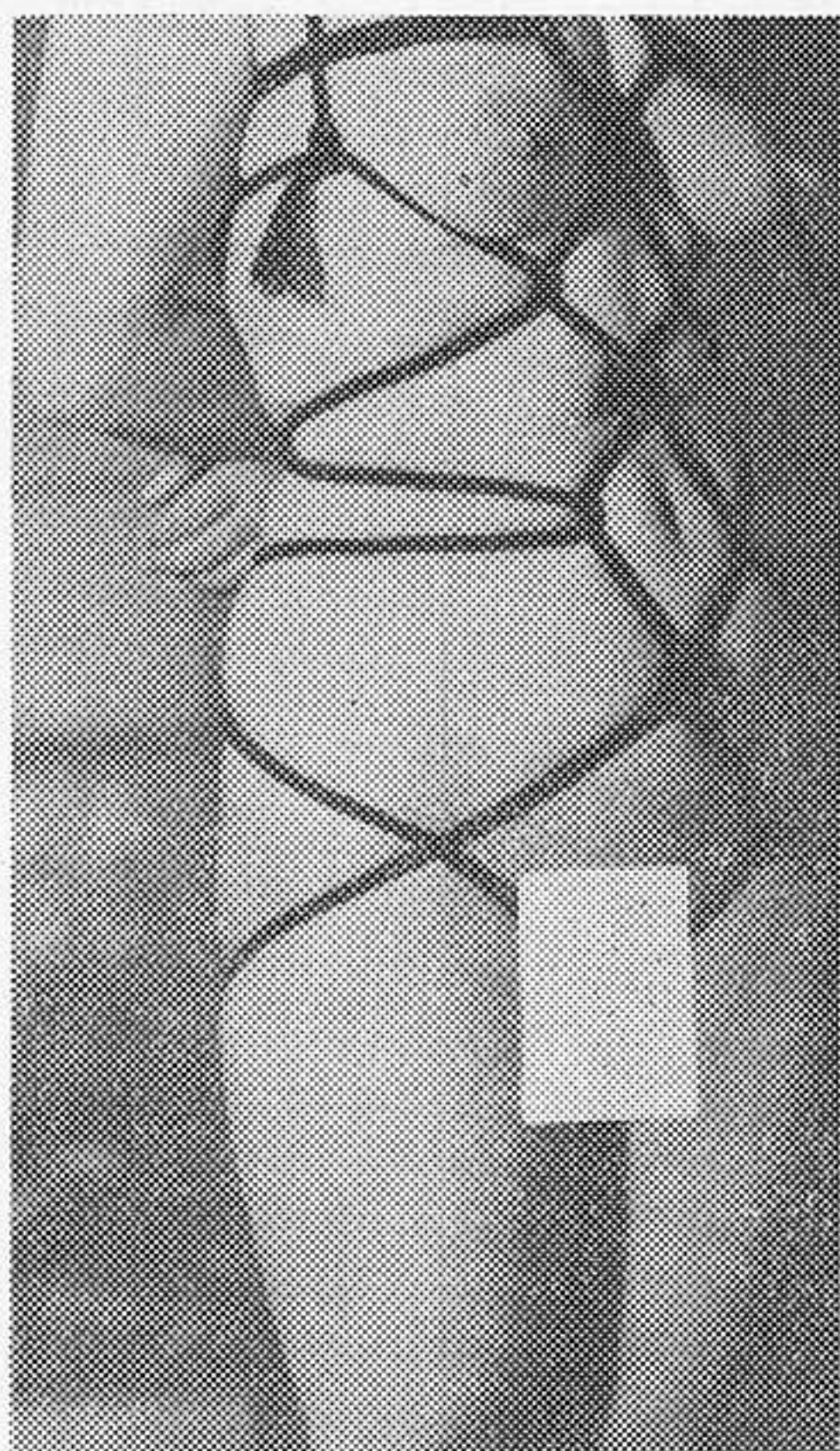
○ハダム英美代の告白Vで活躍された福井桃子さんは三月二十三日に無事出産されたという電話を受けました。いずれ待望のM男とのSMプレイをやりたいというところでしたので、御希望の方は今のうち、予約しておいて下さい。

○五月号のこの欄で紹介しておきました笠井奈保子さんの件、果たして誌上に姿を見せてもらえるかどうか案じていたのですが塚本鉄三氏の努力によって誌上に登場して下さったことを愛読者の方々と共に喜び合いたいと思います。

○佐野みさ子さんからカメラハントに登場したいと親しく辻村隆氏に要請があり日時まで指定されたのですが氏の東京の日とずれた為残念ながら果し得ませんでした。

○芸者福竜こと松本たえさんが三カ月ぶりに突如として全日空機にて来阪、予告なしでしたが徹夜で取材、吊り責めなどの写真を撮影した由、次号のカメラルポで詳細報告されることと思います。

○五月号「東京の踊り子緊縛記」で抜群のプロポーションの肢体で



四月号の

二人の女性へ

一角正人より

安部文子嬢、貴女は日本の落ち着いた感じの美人であると思われる。じっくりと女の羞恥心を、くすぐる様な責めがあっている様である。裸にする場合でも、一切無抵抗な貴女の官能を刺激しながら、徐々に衣服を剥いで、辱かしてゆく。更にその後で、淑か度高貴な女性とは似ても似つかない様な恥かしめを加えれば加える程、女の業と被虐の喜びをかみしめる事であろう。つまり人間性をなくした奴隷としてのマゾ的快感ではなく、より人間性を与えた高貴な女性が、それとは、かけ離れた恥態を演ずるところに、女の被虐と羞恥心における快感を感じるのである。人間性をなくした場合には羞恥心等は、あり得ない。

○

武蔵野市の鈴木千鶴子嬢、貴女は柔軟で均斉のとれた肢体を持つ

活発でモダンな感じの美人であると思われる。痛さに対する耐久力には自信があるとのこと。試してみたいが、苦痛に耐えることも大事だが、それを快感に結びつけようとするのがM女性にとっては大切である。貴女には様々な羞恥責めを加えてゆくと共に、時々強烈でショック的な刺激（これは多少苦痛を伴うもの）を与えてやれば、より一層快感の度合いが増すであろうと思われる。聞けば車が好きで特に高速で飛ばすスリルがたまらないとのこと。私も車が好きで東京・京都間を四時間で行ったり来たりしている程である。ドライブがてら、屋外での羞恥責め等もまた味が違うものであろう。鈴木千鶴子嬢をいじめる会があったら入会したい。

北摂の石田様へ

小杉千恵より

お便り有難うございました。私という女を素材として書いていただいた浣腸責めの案。もうそれだけでも千恵は落着きを失くしてしまいました。

生まれたままの姿で四つん這いを強いられ、百ccの硝子ポンプに

呻かせられる……その情景を想像すると、じっとしていられないような焦りを覚えます。石田様のお示し下さった浣腸責めを、実際に千恵の体にお受けすることが出来ましたら、きっと千恵は、おぞましい快感に悶え、狂うような喜びを味わいながら、声を挙げて泣き出してしまおうと思います。恋にも似た気持で憧れていますのが「被縛」と「羞恥責め」なのですが、これは体験のない千恵ですが、余計に想いがれるのかも知れません。でも、石田様のお便りで、尚更に甘美なものと思う気持がつのってしまいました。お願いします。責めて下さい。鞭でも、浣腸でも……。

石田様の、お縄を夢見ながら、ご報告しますが、千恵は妊娠したらしいのです。なんとかして一人でも、お腹の写真は撮るつもりですが、もしお逢い出来たら「妊婦責め」して頂けますかしら？

まだまだ小さくて、見ただけでは分からないほどのお腹ですが、きつと連絡がつく頃には大きくなっていることでしょう。千恵の妊娠したヌードが奇ク誌上に見られたら、どんなに素敵かと心をおどらせています。

目を楽しませてくれた鈴木千鶴子さんに、もう一度来阪しないかと連絡したところ、目下仕事で忙しいので春が終わった頃には可能とのことでした。前田真知子さんは嘗てのボーイフレンド氏が枚方市のS電機研究所に転勤になっていて、四月号の告白「京都慕情」を読んで便りを呉れたと言っていました。京都を訪ねる機会があれば写真を撮ってほしいとのことですので、これも楽しみです。

○高村浩子さんは毎月M女通信を寄せて下さっていますが、女性愛読者の方々の中で告白の文章をお書き願える方は是非遠慮なくお便り頂きたいと思っています。尚、写真撮影を希望される向きは、その旨お申出下されば幸いです。個人のプライバシーは厳守いたしますから、その点は御安心願います。

○3月号の奇クサロンに「夫婦プレイの経歴」として美しい夫人の緊縛フォトを投じられた早坂信治氏が再び見事な作品を寄せられました。美しい緊縛女体に惚々するばかりですが他にも全国のファンから送られてくる夫婦プレイのレポートは華麗な花のように咲き匂っています。更に数多くお便り下さるようお待ちしております。

慶子の好きな拷問

早木夢二

慶子が一番、好きな拷問は、縛り責めである。

例によって一糸まとわない全裸にピッタリ菱縄、股間縛りをかけた彼女を、鏡の前に敷いた席の上に坐らせて縛り責めを行なうのだが、責めの間に段々と変化してゆく裸身を鏡の中に眺めるのが大きな楽しみだ。

現在、私たちが行なっている縛り責めは大体、つぎのようなものである。

一、慶子の二の腕に両手をかけて思い切り、後ろへ縛る。これは、手っとり早く責めの手を調節するのに便利だが、拷問としては単純なので、いわば拷問の序曲といったような意味で用いている。

二、かけ縄の間に棒を通し縛る。

これも一と同じような感じ。

三、別の縄を乳房の上に、かけ回して後ろで束ね、縛る。これは、すでに、かけてある菱縄のイメージをくずしてしまうのと、よほどうまくかけないと、余り効果が無い。

四、開いた両股のつけ根を、がっしり縛り、その縄を後ろに回して

両手首を縛った縄に結びつけて縛る。

それから、これは厳密に言えば縛り責めといえるかどうかかわからないが、

五、短い縄を、のどに三巻きほどまきつけて強く、また、ゆるく縛る。

六、これも短い縄を額から後頭部にかけて、二巻きほど縛る。これは見た目にも恰好がよくないし、その内に吐き気を催してきて、プレイに水を差したりする。

私がよく用いるのは四と五だ。

ただし、五の場合は、効果は満点だが、よく注意しないと危険性もあるのだ、安心して？ 打ち込めるのは四ということになる。

むっちりした太股に、ちぎれんばかりに縄が喰い込み、後ろに回した縄を絞るにつれて、開いた股は、いやが上にも裂かれ、全身のかけ縄が、ぐいぐい肌に喰い込んで、その縄の辺りが、ぼーっと赤らんで、くびれている。

慶子は顔を、のけぞらせ、胸をはって、ハッハッと太い息を、ぽかんとあけた口から荒々しく吐い



福井桃子讃

浜松次郎

美しいヒト福井さん。麗しい女性、桃子さん。縄にくびれた柔肌は、ボクを悩ます豊満さ。後ろ手縛りの、そのポーズ。ドキドキす

ている。尻を、ちょっと浮かしてゆらゆらとすると「ああ……」と呻く。

縛りをゆるめると、慶子は席の上に、じかに尻を落とし、ぐったりと首を垂れる。

肉に喰い込んでいた縄が徐々にゆるみ始め、くびれた肉が盛り上がってくる。

るような妖艶さ。あなたはホントに人間か？ Mの甘美に酔う為に舞い降りてくる天女では？ ボクの目には、そう映る。いっそ天女であればよい。脱いだ羽衣とりあげて帰れぬように出来るから。誌上のペットで、いつまでも……。

後ろから、激しく波打っている乳房を、そっと觸りながら、

「女囚、拷問の味は、どうだ」と耳許で、ささやくと、

「ハイ、とてもいいお味でござりました。お役人さま」

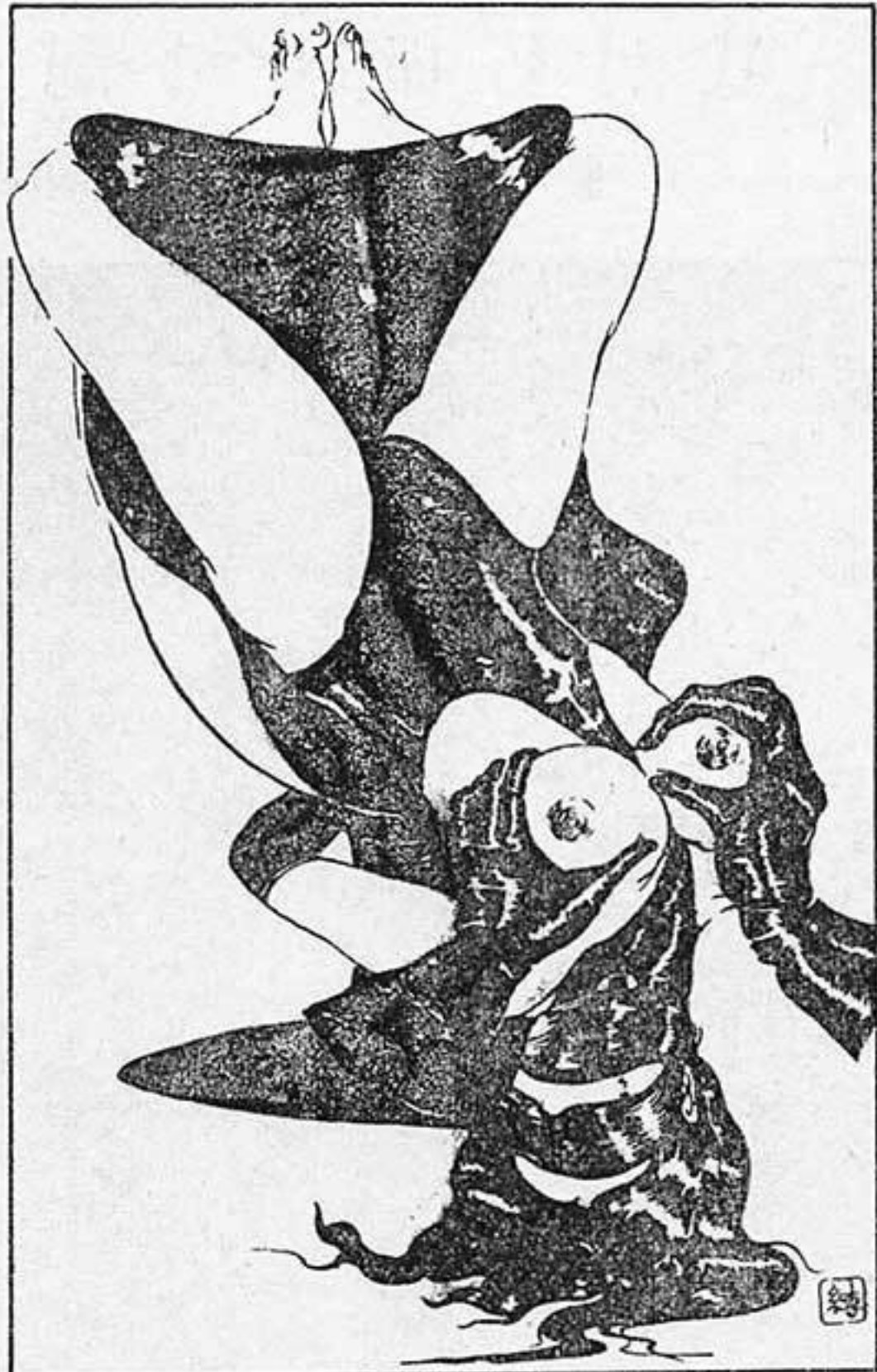
と言って慶子は、そっと緊縛の裸身を私に、もたせかけてくるのである。

S Mの世界に想う

責 苦 与之助

長年奇クを読んでいます、特筆すべきものに、ハント記事及び各M女性による告白記事が挙げられると思います。これらM女性の方々は、勿論すべてがそうではないにしても、何かしら強制的にされたという欲望の強さが迸り出ていると思われまゝ。それは単に性的抑圧による不満だけではなく、強者への服従と忍耐という、女性的本能に基づくものであるような

気がしてなりません。世の文明、文化の発達、めざましく、驚異に値する爛熟ぶりと言えてみる時、その感情面、人間性は、どれほど進歩したと言えるでしょう。同じ過ちを繰り返して同じ喜怒哀楽に悩み、同じ我欲の斗争に明け暮れているのではないのでしょうか。こう考えてみると所詮「人間」そのものの進歩など



『白と黒と艶のバラード』

黒田 縛

は、何もないような気がします。ただ言えることは、巨大な情報化時代のおかげで、精神的離乳期、肉体的成熟そのもののみ、早くなったことは間違いないでしょう。このアンバランスの結果が、性的な偏向に走る原因の一つともなっているのでしょうが、現代人が求めるものは、弱肉強食的精神による原始的帰心のように感じるのは、私一人だけでしょうか？ 脱……とかいう風潮も、ヒッピー的生活願望も、その現われとみれば理解出来るような気がします。

その意味からも、S Mの世界は感受性の豊かな人達が求める世界だと思えます。逆に言えば、感受性が豊かすぎてS Mへと入るのだと言えそうです。

自分勝手な独断や偏見を持っている人々には、恐らく理解出来ない世界ではないかと思うのがS Mの世界ですが、奇クには、他の同類誌には見られない真実味があるようです。真実であるだけに平易に流れるところもありますが、それがかえって迫真力、説得力のあるものになっている気がします。

文化等が発展すればするほど夢想が生まれ、夢を現実にする希望を持つようになるのと同様に、S

Mの世界に於いても屈服させ傷つけることが目的ではなく、自己の精神的不安をまぎらす欲求に駆られた末の夢を形で現わしてみたくなるのでしょう。性の究極を求める道程の手段として……。

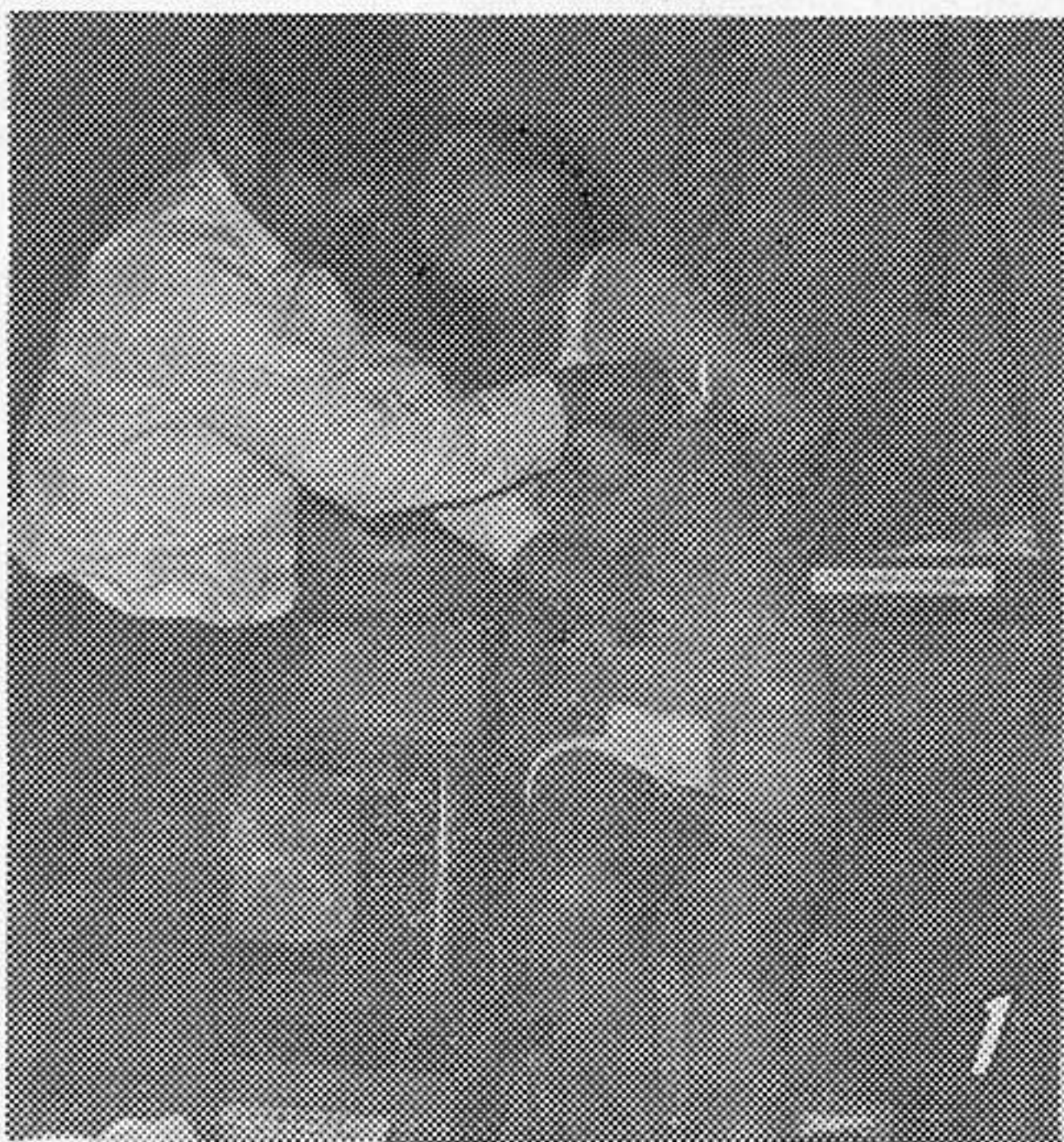
ハント記事を読んでいる、つくづくそう思います。快楽を追求する方法としての責めは苦痛のための責めであってはならないのは当然ですが、その責めの程度には人それぞれの差があるのでしょう。いずれにしても、快楽の目的を見失った行為は、もはやS Mプレイとはいえず、S Mの世界と残酷とは似て非なるものと思えます。私は、その点に於いて奇ク編集部の方針は適切であるし、奇クが永続している理由だろうと考えています。

ハント記事は続けて欲しい企画の一つです。一カ月に一人、一年で十二人、十年で百二十人……そんなに沢山のM女性が、居るのだろうか？ などと余計な心配までしてしましますが、ただ、出来る限り続けて貰えることを祈るだけです。

淡い現実の夢と、果てしない幻想へのエネルギーを与えてくれる奇クの発展を期待します。

我が初撮影の記

最上卓也



この度、我々のささやかなSMプレイを、自分の手で写真にする事が出来て本当によろこんでいる今日この頃です。

つい先日までは、知り合って三年を経過した裕子とのプレイに何か変化を求めたくて、相手の良し悪しを、よく確かめずに写真を依頼してだまされたり、裕子への責めを他人に依頼したりして、何か地に足のつかない毎日でした。しかし、この度、安物ですがDPEの器具一式をそろえ、自分達のプ

レイの状況を写真に残して楽しむ事が、やっと出来ました。

ここにお送りしたのは文字通り初撮影のもので、お羞かしい出来ですが、ぜひ先輩諸氏の御批判をお願い致します。

(1)は風呂へ入ってからという裕子を無理矢理、縛り上げ、衣服を一枚宛、脱がして露出してくる肌に、軽い責めを加えながら、撮影したものです。

(2)は、やや柔らかいが巨大な乳房のローソク責めを行なっている

ものですが、裕子は身体中で乳房が一番熱いと言って呻いておりました。赤味を帯びて硬くつき出てくる乳首に、つい興奮し至近距離から舐めをたらしてしまいました。

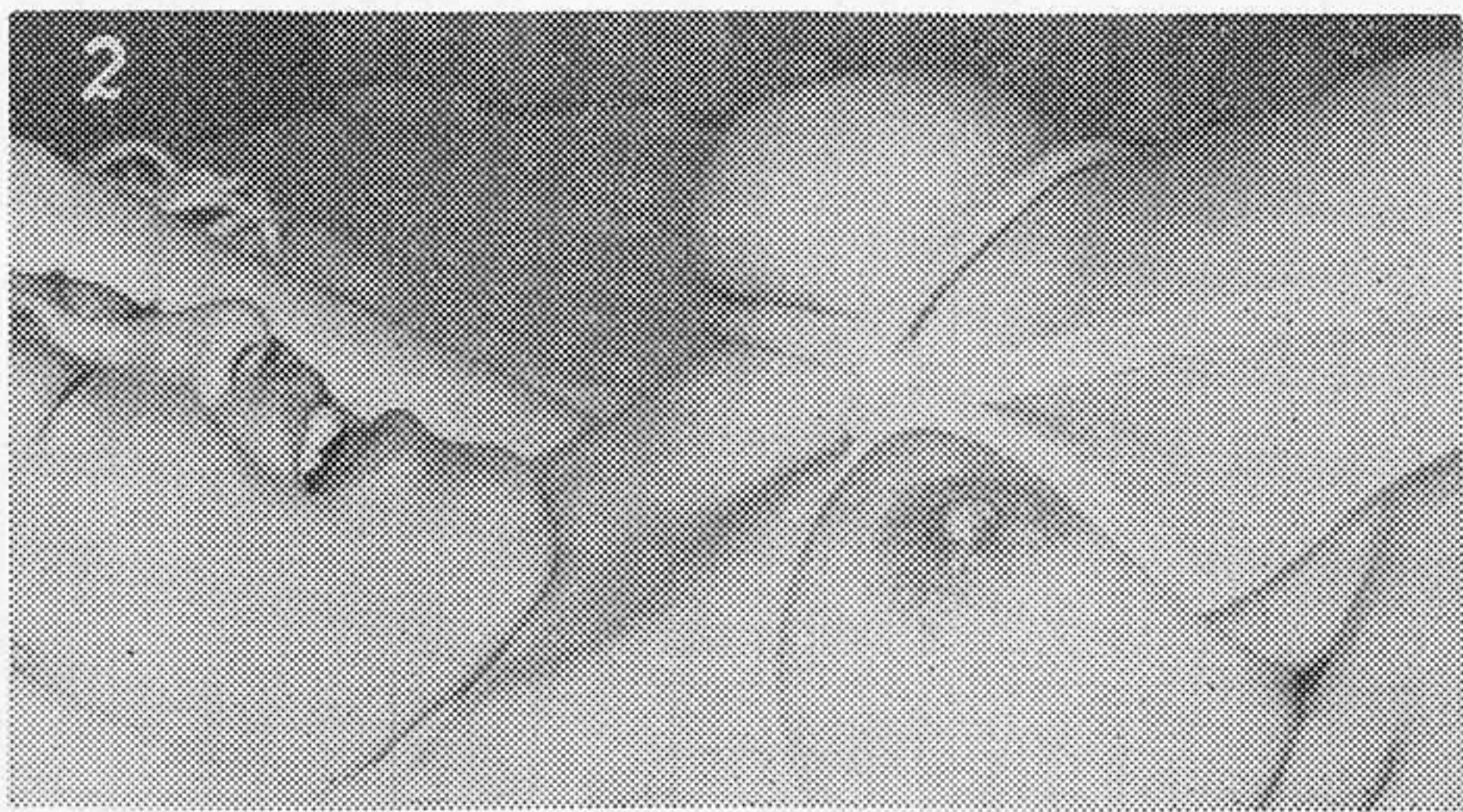
(3)は、まだまだ強烈に縄……込ませたかったのですが、つい我儘を許した、股間しぼりの中の一枚です。

(4)は豊かな乳房と臀部を強調したつもりですがまだまだ未熟だと自覚しております。

(5)(6)はテントの支柱を使い(軽くて長短が自由に出来るので、至って便利)手をいっぱいに広げ左右の足首をそれぞれの手首に引き寄せたものです。そして更にタバコとローソクに火をつけて、それを……込んでいるものです。タバコの方はまあ形だけとしても、ローソクは肌が焼ける寸前地上2、3糎ぐらいのもので、ヒイヒイ悲鳴を上げていました。

(7)は足首と首を一つにしぼり、むき出しになっ

ているところを更に手でいっぱいに広げ、集中的に至近距離から舐めをたらしている時のものです。以上が第一回撮影のときの作品のうちの一部ですが、私は30才、



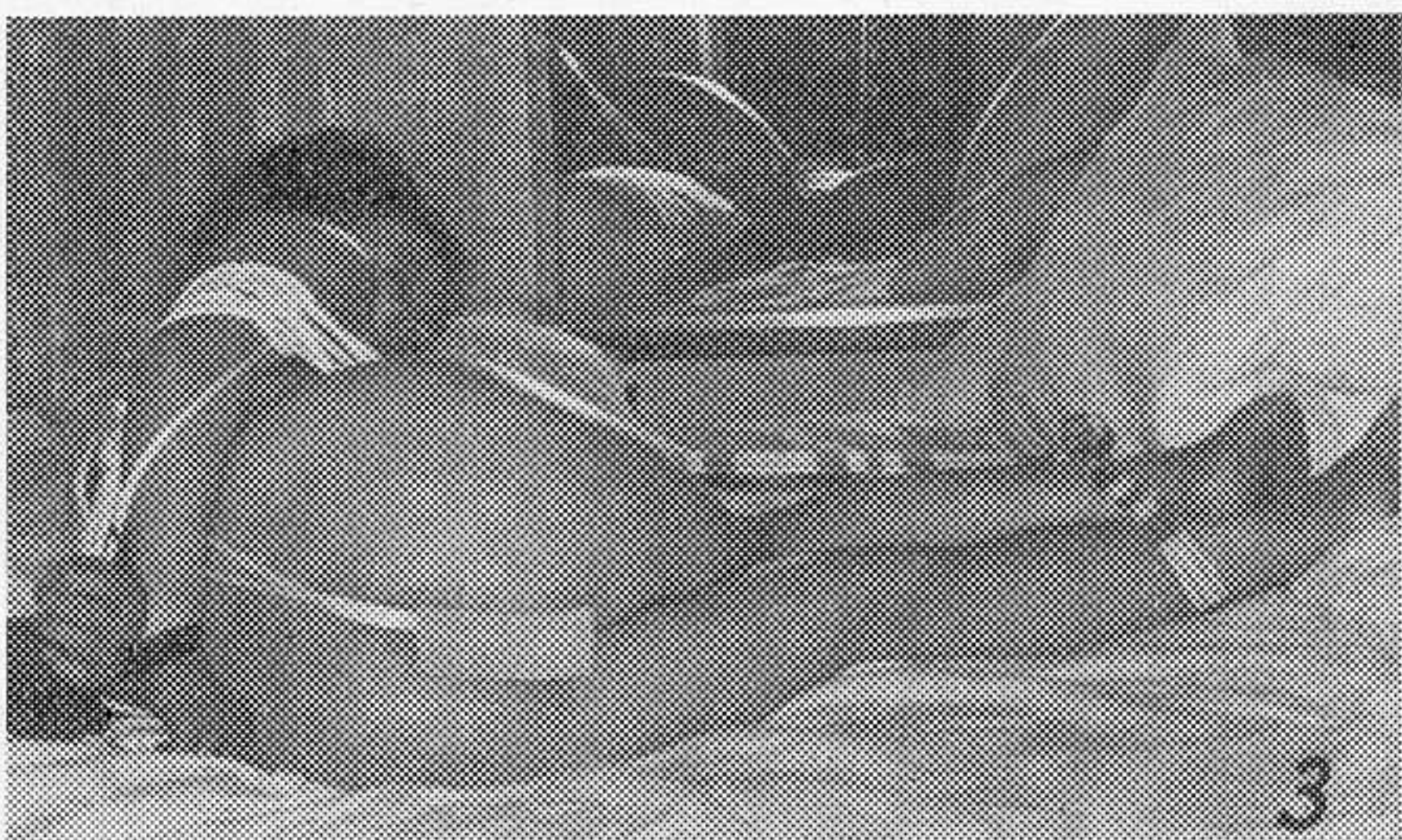
私の読後感

霜月 一

インクの香も新しい五月号を手にして買ってよかったと思った。グラビアの写真十一葉は奇譚クラブの冒頭を飾るものとしては、それだけの見応えがあった。特に梨花悠紀子、前田真知子の二人はよかった。香川絃一郎氏の「女体吊り責め考」は吊り責めの激痛に耐えてモデルがよく辛抱できたものだと思う。その労を大いに買う。

渡部好美様、貴女は現在強烈な蠟燭責めをしてくれる男性を求めておられるそうだが、私は23才の弱年ながら、蠟燭責めには知識もあり個人的にも興味がある。百奴蠟燭を何十本と貴女の周囲に並べ立て、熱さに苦しむ体内に束にした百奴蠟燭の滴りを注ぎたいと思うが如何。お便りを待っている。

福井桃子様、よくぞ妊娠した写真を発表してくれましたね。この種の写真は大変貴重だと思う。S Mカメラハントも楽しく読ませてもらった。辻村氏の独特の文体と内容には酔わせられたが、写真はもう一つ、盛り上がりを欠いたの



3

裕子はOLで24才の独身です。我々は井の中の蛙でいたくないので山形近辺に住むS M愛好者で我々に責められた女性、又は私と一緒に裕子を責めたい出来れば男女



5

コンビの方などありましたら、関西に負けずに一緒にS Mプレイを楽しみませんか。
(山形県米沢市・最上卓也)

は残念。その点、塚本氏のカメラルポは鈴木千鶴子の写真の技巧がよくて堪能させてもらった。欲を言えば修整してある個所が気になるが早くポルノ解禁の日が来ない

ものかと嘆息することしばし。小説陣では「パロディ花と蛇」と「紫蘭の門」が思わず全身をぞくぞくさせてくれた。号を追うて益々快調というところ。次号が大

いに期待される二篇である。毎月可愛い文章を書いておられる高村浩子さん。これから告白写真とで私達S Fアン目の楽しませてほしいものだと思う。

〔秘蔵版SM資料一覧表〕

従前一時的に分譲中止しており
ましたSM資料の中で特に好評だ
った左記の写真は特に御希望の方
に限り焼増し致します故、前金に
て天星社宛お申込み願います。

レインコートの拘束

大手札四枚一組 略号△いろ▽
大塚 啓子

猪吊りの美女

大手札三枚一組 略号△いの▽
梨花悠紀子

色褌の開股縛り

大手札三枚一組 略号△いふ▽
長野 良子

椅子責めの果て

大手札三枚一組 略号△いす▽
大塚 啓子

マニヤの全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 略号△いな▽
栗本 ミチ

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号△いら▽
山原 清子

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号△いこ▽
山原 清子

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号△いさ▽
山原 清子

可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 略号△いみ▽
山原 清子

メンスバンド責め

大手札五枚一組 略号△はん▽
東浦ひかる

ハリツケ

大手札三枚一組 略号△はみ▽
新宮 夫人

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号△はす▽
大塚 啓子

メンスバンド足挙げ

大手札三枚一組 略号△はそ▽
東浦ひかる

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 略号△はた▽
鈴木 晃子

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号△はね▽
山原 清子

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽
中河 恵子

投げだす緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽
中河 恵子

待望の脚挙げ姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽
中河 恵子

二ツ折女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽
中河 恵子

開股縛りにて喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわ▽
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふ▽
中河 恵子

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号△にし▽
田中美佐子

臨月腹開陳(座位)

大手札四枚一組 略号△にり▽
田中美佐子

臨月腹開陳(立位)

大手札三枚一組 略号△にす▽
田中美佐子

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号△にい▽
田中美佐子

臨月の裸身像(座位)

大手札三枚一組 略号△にぬ▽
田中美佐子

柱縛りの妊産婦

大手札二枚一組 略号△にや▽
田中美佐子

臨月の妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号△にち▽
田中美佐子

臨月の妊婦裸身像(立位)

大手札三枚一組 略号△にお▽
田中美佐子

縛られた妊婦の裸身

大手札二枚一組 略号△にる▽
田中美佐子

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号△にん▽
安原さゆり

八カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号△にへ▽
安原さゆり

乳房強調妊婦菱縄縛り

大手札四枚一組 略号△にめ▽
増田みゆき

双胎八カ月腹大写し

大手札四枚一組 略号△ほり▽
増田みゆき

双胎妊娠線の出た蛙腹

大手札四枚一組 略号△ほぬ▽
増田みゆき

後手縛りの双胎妊婦

大手札四枚一組 略号△ほか▽
増田みゆき

八カ月の双胎の襷帯と緊縛

大手札四枚一組 略号△ほよ▽
増田みゆき

股間縛りに喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 略号△ほつ▽
増田みゆき

初産双胎妊婦開股縛り

大手札四枚一組 略号△ほえ▽
増田みゆき

双胎妊婦腹の凄惨切腹

大手札四枚一組 略号△ほら▽
増田みゆき

八カ月の双胎革具責め

大手札四枚一組 略号△へね▽
増田みゆき

九カ月の双胎首枷責め

大手札四枚一組 略号△への▽
増田みゆき

逆さ吊りの正面と背面

大手札二枚一組 略号△つる▽
増田みゆき

手と足の宙吊り

大手札三枚一組 略号△つた▽
梨花悠紀子

弓吊り責め

大手札二枚一組 略号△つき▽
梨花悠紀子

東京の踊子緊縛美

四月号に読者通信を出して、
がら、わざわざ東京から大阪まで
出張してきて、その素晴しいプロ
ポーションの肢体を開陳していく姿
を、その肢体の縛られた美しさを
態を、紙に焼けた鮮明な写真で
男性に、その縛られた姿を、多
情を、この踊子の真の姿と顔の表
情を是非、御観賞願います。

後手高手小手三態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
鈴木千鶴子
伸びやかな肢体に縄が喰い込む
ほど力をこめて典型的な高手小
縛りにした踊子の可憐な表情。

卓上の緊縛悦虐態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
鈴木千鶴子
テーブルの上にて演じた千
鶴子のあからさまな縛りと肉体
かもし出す悦虐味あふれる饗宴。

全裸浴室股間縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
鈴木千鶴子
銀色に輝くタイルの浴室で全裸
の踊子が股間縛りになって、さま
ざまな姿態をとらされてゆく。

悶える踊子の欲情

大手札三枚一組 略号五〇〇円
鈴木千鶴子
羞恥責めの果て、次第にエスカ

のレイトでは頂上に登りつめる。

美しき全裸の縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
鈴木千鶴子
鈴木千鶴子ではある。後手に全
裸のままだ美しいポーズをとる。

前田真知子の悦虐

四月号に掲載した『京都慕情』
と題した手記で美しい緊縛姿を
誌上に現わした前田真知子は、再
びその抒情的な文章で、彼女とし
ての片鱗を見せました。彼女が素
と美しい肢体を、鮮鋭なレンズで
うばちりと捉えた緊縛写真を、ど
うかお手元にて愛玩して下さい。

豆絞りの猿轡哀情

大手札三枚一組 略号五〇〇円
前田真知子
美貌を彩る豆絞りの猿轡と白肌
にめり込む麻縄のむごたらしさ。

逆エビ地獄の美女

大手札三枚一組 略号五〇〇円
前田真知子
縄と棒と竹の中に埋もれて逆エ
ビ縛りの美女は肢体をくねらす。

麻縄亀甲菱縄縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
真田真知子
高々と挙がる後手首、肌に埋ま
った菱縄縛りの縄目が痛々しい。

☆福井桃子妊娠九カ月目の緊縛フォト

益々順調に胎児が生育して愈々
待望の九カ月の妊娠を迎えまし
た。この全くなばりです。八カ
月の目と妊娠と残すためにも正
に月を計算して残すためにも正
に初めに協力的な福井桃子さん
が、出来の責めこのように採録
て、出来の責めこのように採録
ンて、出来の責めこのように採録

柱縛りの九カ月腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
便々たる九カ月の大きな腹を突
き出して黒髪を長く垂らした桃
子の後手に麻縄がぐくと喰い込む。

引き回された妊婦

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
巨大な腹をかかえた牝獣の後手
縛りの縄尻を持つて引き回す。こ
の出産直前のポリウムを見よ。

膨隆腹の股間縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
まんまるく膨らんだ九カ月腹に
縦の縄が掛った後手縛りの桃子が三
種の変わった姿態を開陳してゆく。

鏡に映る太鼓腹縛

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
後手に縛られた結果、思いきり
突き出した太鼓腹を鏡に映し堂々
とこれ見よがしに鑑賞させる女。

蛙腹誇張の緊縛美

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
前後左右に拡がりきった蛙腹を
より一層誇張するようにつめつけ
る縄目が妊婦を美しくしてゆく。

足挙げ縛りの蛙腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
お腹がこんなに大きくなつてし
まいた。脚が思うように動かさな
いという桃子に無理に強制した。

卓の脚に縛る蛙腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
逆さにした食卓の脚に妊婦の手
足を縛って大きな蛙腹を満点。
にして観賞する。

九カ月腹の緊縛美

大手札三枚一組 略号五〇〇円
福井桃子
乳汁の太鼓腹、母乳も黒い乳房
豊かな太鼓腹、母乳も黒い乳房
美しさが鮮明に捉えられてる。
て分譲写真の送付は、必ず明記

上金にいたしてお申し込み願います。

本誌の毎月号に「マダム・ファム」の告白として異色あるSM身上の調書を発表し多くのファンを獲得して人気上昇中の福井桃子さんが

[illegible]

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号へえすV
白いロープによって括れるように
に縛られた美しい太鼓腹の哀感。

福井 桃子 大手札三枚一組 五〇〇円
柱に後手を縛られ正面に立たされた妊婦は見事な蛙腹をさらす。

力月の妊婦だけに一層痛々しい。

.....

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えさ▽
大きな腹をして縛られた妊婦の
片足を吊れば果してどうなるか。

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号へえあV
妊娠線を中心に丸々と膨らんだ
お腹の美しさを強調する縄目。

限に誇張した縄と縛りの魔術師。

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号へえせV
縛りなしの妊婦の全裸像をマニ
アの手に特異資料として提供す。

お局込極の
申私み鮮ニ
込書は明レ
み箱前なク
下14金粒シ
さ号に選ン
れ(五大の月
ば四阪もと
即四五市のし
刻、)阿でテ
第天倍す分
一星野郵。請
種社郵お
に宛便申

開股縛りの強烈な肢体
大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号ハちおV

福井 桃子 略号ハちと
 一直線の開脚羞恥縛り
 大手札三枚一組 五〇〇円
 福井 桃子 略号ハちうV

福井 桃子 略号△ちま▽
縛って抜きとられるスロース
大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちま▽

後手縛りの全裸を見せる

大手札三枚一組 五〇〇円
 福井 桃子 略号△ちろ▽
 悦 虐涕泣のMポーズ
 大手札三枚一組 五〇〇円

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちほ▽
高小手縛り女の哀感

~~~~~

大手札三枚一組 五〇〇円  
 江口 淑子 略号△ちん▽  
 翻弄されるマダムの法悦境  
 大手札三枚一組 五〇〇円

大手札三枚一組 五〇〇円  
江口 淑子 略号△ちゅ▽  
悦 虐天国への階段  
大手札三枚一組 五〇〇円

江口 淑子 五〇〇円  
 大手札三枚一組  
 略号△ちわ▽  
 紅閨へのいさなに濡れる

後手高 小手縛り三態  
大手札三枚一組 五〇〇円  
江口 淑子 略号△ちい▽  
開股縛りの醍醐味披露

強烈股間縛りの点描  
大手札三枚一組 五〇〇円  
江口 淑子 略号△ちへ▽

江口 淑子 略号/ちせ  
 T字型生理帯着用フオート  
 大手札十二枚一組 二〇〇〇円  
 深田 菊子 略号/ちあ

深田 菊子 略号△ちか▽



〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V 組 百態 大手札印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇〇円

十組十枚 一五〇〇〇円

二十組二十枚 二八〇〇〇円

五十組五十枚 五〇〇〇〇円

百組百枚 八〇〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社  
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が  
出回っているようですが、これは  
全部特殊マニアの蒐集用として一  
粒選りのネガから直接印画紙に焼  
付した極めて鮮明な逸品揃いばか  
りです。きつとファンのアルバム  
を最高に充実させると信じます。  
大阪市阿倍野局私書箱14号天星社  
へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め(深田 菊子)  
2 トイレ排泄強要(三浦 純子)  
3 完全二つ折締め(三浦 純子)  
4 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)  
5 超強烈エビ責め(三浦 純子)  
6 荒縄柔肌いじめ(前田真知子)  
7 全裸縛玄閑晒し(三浦 純子)  
8 ネどうでもして(高村 浩子)  
9 蠟燭責後手縛り(富田由美子)

10 羞恥の源を抉る(江口 淑子)  
11 妊婦縛りの庄巻(富田由美子)  
12 菱縄縛正面開放(江口 淑子)  
13 正面の妊婦縛り(富田由美子)  
14 麗しのマドンナ(荒尾 慶子)  
15 両手挙前面晒し(福井 浩子)  
16 強烈流腸ポーズ(高村 浩子)  
17 後手吊上げ猿轡(高村 浩子)  
18 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)  
19 ゴム人形の恐怖(江口 淑子)  
20 菱縄股間縛前面(深田 菊子)  
21 柱縛り開股強要(福井 桃子)  
22 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)  
23 本格的な麻縄責(前田真知子)  
24 強烈麻縄の緊縛(前田真知子)  
25 正面股間縛晒し(高村 浩子)  
26 両足吊りの苦悶(江口 淑子)  
27 店での全裸縛り(福井 桃子)  
28 豊満な女体開陳(福井 桃子)  
29 恍惚バイブ責め(江口 淑子)  
30 マダム責の哀愁(江口 淑子)  
31 開股強制棒責め(前田真知子)  
32 大の字片足挙げ(高村 浩子)  
33 雁字搦目の女体(江口 淑子)  
34 足挙げ責の羞恥(江口 淑子)  
35 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)  
36 海老開脚強制責(深田 菊子)

37 全裸立像後手縛(富田由美子)  
38 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)  
39 美女の全裸縛り(荒尾 慶子)  
40 マダム全裸開陳(江口 淑子)  
41 後手錠吊上げ責(江口 淑子)  
42 女体美を晒して(深田 菊子)  
43 高々と後手緊縛(福井 桃子)  
44 猿轡に悶える女(高村 浩子)  
45 太鼓腹全裸正面(富田由美子)  
46 菱縄股間縛猿轡(前田真知子)  
47 苛酷の宴果てて(高村 浩子)  
48 美しき緊縛女体(荒尾 慶子)  
49 エビ責めの序曲(江口 淑子)  
50 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)  
51 料理される女体(高村 浩子)  
52 美肌に映える縄(荒尾 慶子)  
53 両手両足開責め(三浦 純子)  
54 剃毛責めの結果(荒尾 慶子)  
55 人の字型羞恥縛(江口 淑子)  
56 浴室での流腸責(江口 淑子)  
57 股間に喰込む麻(深田 菊子)  
58 流腸責めのあと(福井 桃子)  
59 黒髪前に垂れる(福井 桃子)  
60 スナックで縛る(福井 桃子)  
61 喰込む股間縄責(江口 淑子)  
62 責めに呻くM女(高村 浩子)  
63 片足挙げ開股縛(江口 淑子)  
64 菱縄悲し泣く(江口 淑子)  
65 M女を責め尽す(前田真知子)  
66 引回される全裸(江口 淑子)  
67 尻立蠟燭悦虐貨(福井 桃子)  
68 羞恥責を待つ女(深田 菊子)

69 凌辱に捧げる体(高村 浩子)  
70 剃毛の女体展開(荒尾 慶子)  
71 被縛者のマダム(江口 淑子)  
72 縄の山と流腸器(福井 桃子)  
73 強制足挙臀部晒(高村 浩子)  
74 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)  
75 両手両足吊り責(江口 淑子)  
76 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)  
77 全裸一直線開股(福井 桃子)  
78 裏門を開放する(深田 菊子)  
79 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)  
80 後手胸締股間縛(深田 菊子)  
81 強烈海老責地獄(江口 淑子)  
82 大の字縛り正面(高村 浩子)  
83 足挙げ強制開陳(高村 浩子)  
84 海老責の耐久度(荒尾 慶子)  
85 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)  
86 後手吊上げ責め(三浦 純子)  
87 羞恥責臀部露出(三浦 純子)  
88 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)  
89 淫虐に晒す女体(高村 浩子)  
90 マダム開股の図(福井 桃子)  
91 がっちり後手縛(深田 菊子)  
92 無惨白肌の縄痕(前田真知子)  
93 妊婦大の字縛り(富田由美子)  
94 開脚を強要せよ(富田由美子)  
95 引回される妊婦(富田由美子)  
96 強烈麻菱縄掛け(前田真知子)  
97 股間縛の引回し(江口 淑子)  
98 正座する股間縛(荒尾 慶子)  
99 荒縄後手二つ折(前田真知子)  
100 椅子開股羞恥責(前田真知子)



乙女の羞かしさをいやという程  
笠井奈保子 略号△ぬあ▽  
大手村三枝 五〇〇円



# 女子大生前田真知子天然色緊縛フォト

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常に人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢のカラーフォトは、広くファンの方々から要望されていまして、こので新しく特写の機会を持ちました。たので好事家のお目にかけます。

## 柱縛りと脚挙縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあばく。

## 麻縄高手小手首縄

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
黒ずんだ麻縄が真白い柔肌に喰い込んでピンク色に染まっていた。美しいカラーでまた格別である。

## 荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
トゲトゲとした荒縄で情容赦なく強烈なエビ縛りに責められて、流石のM女も白肌を赤く彩る。

## 荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
赤い絨氈の上に荒縄でぎゅうぎゅう縛られた全裸の女体が芋虫のよう浅間しくうごめいている。

## 悶える強烈海老責

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
高小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

## 柔肌をくびる縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
正面と側面と横臥と、その姿態は変れども全裸の美しい女体に重に掛った縄目はむごたらしい。

## 緊縛女体をいびる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
身動きも出来ない縛られた裸身を目の下にして、思うがままにいたぶるのはS男子の本望である。

## 羞恥を晒す女体柱

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
前田真知子 略号一〇〇〇円  
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となつて哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラープリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一系まとわぬ緊縛フォトばかりです。必ずや女体緊縛ファンと信じます。

# ☆ 深田菊子浣腸悦虐責めフェチフォト

## 「悦虐浣腸写真」

### 溶液を圧入される

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
深田菊子 略号四〇〇円  
エネマと硝子シリンドラーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

### 全裸で受ける浣腸

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
深田菊子 略号四〇〇円  
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で施す浣腸。

### イルリの嘴管挿入

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
深田菊子 略号四〇〇円  
二千CCのイルリガイトルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

### 刺す浣腸器の恐怖

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
深田菊子 略号四〇〇円  
百CCの硝子製ポンプの先端がブズリと突き刺さる浣腸の恐怖。

### 自ら施す浣腸悦楽

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
深田菊子 略号四〇〇円  
強制されて自分自ら浣腸器を握って施す浣腸の羞恥と被虐悦楽。

### 体内に奔流する液

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
深田菊子 略号四〇〇円

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

## 浣腸を楽しむ美女

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
深田菊子 略号四〇〇円  
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ愉悦の小道具となる。

## 「オシメ着用写真」

大手札十二枚一組 略号二〇〇〇円  
深田菊子 略号二〇〇〇円  
浣腸のあとオシメを装着する。

## おムツに排便する

大手札十二枚一組 略号二〇〇〇円  
深田菊子 略号二〇〇〇円  
おムツを当てカバを着けるまでの段階を順序を追って見せる。

## 生ゴムのオムツへ

大手札十枚一組 略号一八〇〇円  
深田菊子 略号一八〇〇円  
ヌメヌメとした生ゴムのカバとオシメとの奇妙な組合せ。

◎以上発表しました「浣腸写真」の要望によりまして、特にこの種のS嬢に興味をもち、深田菊子嬢を煩悩して作成しました。郵便局私書箱第十四号「天竺宛」へ、略号記載の上、どうぞ。



〔秘蔵版写真一掃分讓品〕

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天竺社に於て分讓して、おりに止つて再開を強く要望され、最近になって特にお望みに限らず、増をいたします。御注文の方には、五日間の予定で作成の上、早速御送付申し上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わふ▽

両足の首絞め責め  
大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わむ▽

肩車の臀部に喘ぐ  
大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わら▽

女王様の臀臭をかかす  
大手札二枚一組 略号△六〇〇円  
花田沙登子 略号△わけ▽

足舐めの強制  
大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わな▽

女王様の牡犬調教  
大手札八枚一組 略号△一五〇〇円  
花田沙登子 略号△わね▽

△入墨女賊拷問刑罰集▽  
女賊仰向け木馬責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よひ▽

全裸の入墨女賊折檻  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よせ▽

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よゆ▽

ハリツケ女賊拷問  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よめ▽

凄絶エビ責め拷問  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よす▽

全裸の四つ這い木馬責  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よも▽

逆さ吊りのお仕置  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よき▽

大の字磔女賊処刑  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よさ▽

△日本女性拷問刑罰集▽  
三角木馬責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もと▽

石抱き算盤責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もへ▽

凄惨女囚海老責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もに▽

女囚竹棒羞恥責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もち▽

白洲答打ち折檻  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ▽

非情の囚女開股責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ▽

美木乃々子 略号△もぬ▽  
土壇で胸斬りの仕置  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もり▽

白洲調べに悶える囚女  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もは▽

△M写真M場面決定版▽  
裸女二人の尻の下にうごめく  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まふ▽

二女にいじめられるM男  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まも▽

美女二人から縛られる男  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まね▽

男馬を乗り潰す裸女二人  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まめ▽

痛烈、ムチ打ちのご馳走  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まれ▽

首絞めてM男に止どめを刺す  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まむ▽

汚臭と足舐めの強要  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まり▽

二女の臀臭にむせび泣く男  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まみ▽

パンプスの下に喘ぐM男  
大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△わそ▽

豊満な太股で首を股責め  
大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△わそ▽

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△わよ▽  
男奴隷緊縛虐待への過程  
大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△わた▽

顔面騎乗の女王様  
大手札五枚一組 略号△一〇〇〇円  
大塚 略号△らも▽

△女体切腹フォト▽  
腸露出無念腹切腹  
大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 略号△せ10▽

全裸の切腹悦楽  
大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 略号△ひた▽

全裸の切腹悦楽  
大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 略号△ひた▽

マニヤの切腹  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
甘木 春子 略号△まに▽

血紅切腹決出版  
大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 略号△れは▽

血紅切腹凄惨姿態  
大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 略号△れみ▽

血紅切腹連続写真  
大手札十二枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 略号△のせ▽

血紅美女の切腹  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
絹川 文代 略号△ちた▽

豊満腹を切り裂く女  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
長野 良子 略号△ほふ▽



明瞭な臨月腹の妊娠線 大手札四枚一組 略号△りき 増田みゆき 六〇〇円	膨満の妊娠腹の緊縛 大手札四枚一組 略号△おみ 中河 恵子 六〇〇円	産み月の膨大な腹 大手札三枚一組 略号△よま 安原さゆり 五〇〇円	膨満腹も露わな両手挙げ縛り 大手札三枚一組 略号△のろ 木戸 悦子 五〇〇円
双胎の臨月腹を鑑賞する 大手札四枚一組 略号△りけ 増田みゆき 六〇〇円	妊婦開股縛り哀歓 大手札四枚一組 略号△わう 中河 恵子 六〇〇円	麻縄でくびつた妊婦腹 大手札四枚一組 略号△よは 中河 恵子 六〇〇円	竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦 大手札三枚一組 略号△のは 木戸 悦子 五〇〇円
妊婦の乳房を縛り弄そぶ 大手札四枚一組 略号△りさ 増田みゆき 六〇〇円	八力月の妊婦開股責め 大手札四枚一組 略号△わの 中河 恵子 六〇〇円	ころがされた緊縛の妊婦 大手札四枚一組 略号△よほ 中河 恵子 六〇〇円	十文字縛りの妊婦腹 大手札三枚一組 略号△のに 木戸 悦子 五〇〇円
妊婦後手縛り引き回し 大手札四枚一組 略号△りし 増田みゆき 六〇〇円	妊婦腹誇張の開股縛り 大手札四枚一組 略号△わえ 中河 恵子 六〇〇円	臨月妊婦の革紐縛り 大手札四枚一組 略号△よに 中河 恵子 六〇〇円	柱縛りに苦しむ九力月の妊婦 大手札三枚一組 略号△のほ 木戸 悦子 五〇〇円
亀甲縛りの臨月妊孕美 大手札四枚一組 略号△りた 増田みゆき 六〇〇円	妊孕美人の媚態立像 大手札四枚一組 略号△わお 中河 恵子 六〇〇円	見事に美しい臨月腹妊婦 大手札四枚一組 略号△よら 中河 恵子 六〇〇円	開股責めと椅子縛りの妊婦 大手札三枚一組 略号△のへ 木戸 悦子 五〇〇円
乳房緊縛の双胎臨月腹 大手札四枚一組 略号△りち 増田みゆき 六〇〇円	妊孕美人の媚態坐像 大手札四枚一組 略号△わく 中河 恵子 六〇〇円	臨月の妊婦麻縄縛り 大手札四枚一組 略号△よへ 中河 恵子 六〇〇円	脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ 中河 恵子 五〇〇円
臨月双胎蛙腹の股間縛り 大手札四枚一組 略号△りぬ 増田みゆき 六〇〇円	両手吊り片足挙げの妊婦 大手札四枚一組 略号△わす 中河 恵子 六〇〇円	臨月の妊婦全裸鑑賞 大手札四枚一組 略号△のま 中河 恵子 六〇〇円	猿轡にうめく臨月妊婦腹 大手札三枚一組 略号△この 中河 恵子 五〇〇円
浣腸される妊産婦 大手札三枚一組 略号△りひ 増田みゆき 五〇〇円	縛られた妊婦の艶姿 大手札四枚一組 略号△わち 中河 恵子 六〇〇円	羞らう妊婦の裸身前向立像 大手札三枚一組 略号△のめ 木戸 悦子 五〇〇円	革紐による臨月腹股間縛り 大手札三枚一組 略号△こや 中河 恵子 五〇〇円
臨月妊婦の全身像 大手札三枚一組 略号△りせ 安原さゆり 五〇〇円	両手一本吊りの妊婦 大手札四枚一組 略号△わむ 中河 恵子 六〇〇円	九力月の妊婦腹を晒す 大手札三枚一組 略号△のこ 木戸 悦子 五〇〇円	逆さ吊りの臨月妊婦 大手札三枚一組 略号△さめ 金原奈加子 五〇〇円
臨月妊婦腹の側面 大手札三枚一組 略号△りそ 安原さゆり 五〇〇円	臨月の妊婦三態 大手札三枚一組 略号△よみ 安原さゆり 五〇〇円	九力月の妊娠腹を縛る 大手札三枚一組 略号△のし 木戸 悦子 五〇〇円	両手吊りの臨月妊婦 大手札三枚一組 略号△さる 金原奈加子 五〇〇円
妊婦臨月腹のアップ 大手札二枚一組 略号△りと 安原さゆり 四〇〇円	動物的な臨月妊婦の腹 大手札三枚一組 略号△よみ 安原さゆり 五〇〇円	便々たる太鼓腹に縄掛け 大手札三枚一組 略号△のし 木戸 悦子 五〇〇円	強烈縛り妊婦責め 大手札三枚一組 略号△さる 金原奈加子 五〇〇円
恵子の妊孕美緊縛 大手札四枚一組 略号△おに 中河 恵子 六〇〇円			妊婦全裸縛りの全身 大手札三枚一組 略号△さに 金原奈加子 五〇〇円





○ 五月号の大山俊江さん。小生も同じ新宿に住んでおります。恐らく貴女とは新宿の空の下で数回、会っているかも知れません。同じ空の下に住み、同じく浣腸をエソジョイしている貴女と小生が、浣腸で結ばれないはずはありません。浣腸をされ、トイレをまたがって後向きの姿勢で貴女のふっくらした双臀をあらわにしビビビッ、ビリビリビリと排泄中の貴女をスローシャッターで写真をとります。勿論、小生は学生時代カメラ研究会にはいっていたので、写

真に関してはセミプロ程度と自負しております。なにしろ俊江さんの排泄写真はスローシャッターなので貴女のアヌスから排泄中の浣腸液と混じった柔らかい便が、はつきりと写ります。貴女への浣腸責めは公平を期すため、お互いに全裸で行ない、貴女が浣腸責めで身をよじり、苦悩にもだえる姿態をみながら、お互いにセクシー的な昇華をしつつ浣腸プレイをするのが、小生の方法です。貴女は後手に或は拳手に縛られ、柱と背に足を頭の上の方にあげ、臀部をあらわにした体位で、鏡の腰掛けを腹にのせた四ツ這いスタイルで、足は左右に限度まで広げ縛ると、アヌスがまともに見え、息づいています。浣腸は二〇〇CC硝子製の浣腸器（トップ製）を主体にイルリ、エネマ、水道等々、およそ可能なものを動員して矢つきばやに行ないます。貴女の腸内は相次ぐ浣腸で、出るものもなく空排泄音と浣腸液のみがでてきます。フィナーレとして貴女のアヌスは、かなり柔らかくなり指二本ぐらい没入できる状態です。そこで小生は舌を丸く細くします。舌のザラザラした感触が貴女のアヌスを心地よく愛撫します。このような小生

独特の浣腸プロセスと自動シャッターを使って次々と写真をとらせて下さい。恐らく不世出の想い出深い青春時代の足跡として永遠に残るでしょう。浣腸も写真も共に上手なのは小生をおいて他にいないと思います。（東京都新宿区下落合・竹迫誠也）

○ 最近になって奇譚クラブを見るようになりました。小生は禪に興味があり、さらに女の禪そして女相撲へと発展して来ました。今後共、この方面のものを願います。また旧号を見ますと、女のふんどしや女角力のシャシンの分譲の事が出ていますが、最近はないのですか。週刊誌などに出ている締め方はダメで、キリリとしないようですが、奇クあたりが、ただ一つの専門家として、正確な（黒系統の）角力禪を締めた女性のシャシンと取り組み、投げわざなどモデルを使って作成してもらえませんか。もし以前に、そういうネガがあるのなら、貴重な資料として眠らせておくのは、惜しいと思います。どうか焼付けて下さい。

（東京都目黒区・田丸雅信）

○ 四月号の利根川五郎様。貴方様

のお便り拝見致しました。私は二十七才になる平凡な主婦ですが、貴女様の理想とするSMだけに、こだわらない、その時その場に応じたあらゆる男女の結び合い（特に複数の結び合い）に対する考え方に共感いたしました。今、現在は夫以外の男の方と結び合うチャンスも相手もなく、貴方様同様、熱い情念だけを心に持ちつづけているだけで、誠に残念で、しかたございません。夫も私の考え方と同じで、貴方様のようなお友達を欲しがっております。もしよろしかったら、夫もまじえて三人で楽しく語り合いませんか。

（川崎市・高石富江）

○ 私は、神戸に居住している者です。最近はお手伝いさんになる人も少ないようですが、代りにM男を使ってみませんか。私は当年四十代で小柄な奴隷です。四十才までのS御夫婦の方、何卒、私を試して下さい。私は御主人様、奥様方の御命令には絶対、服従をお誓い申し上げます。心から御奉仕申し上げます。始めは掃除、洗濯、使い走りから仕込んで下さって結構です。動作の鈍い時は叱責、ビンタ鞭打ち、足蹴等を下されば、喜ん



でお仕え申し上げます。そして私の温厚な性質を十分、判っていたから玩具、性奴として弄んで下さい。どんなにやらしい事、汚らしいことでも、喜んで御奉仕申し上げます。御夫婦で私を馬にしたり犬にしたりして楽しんで下さい。お腹立ちの時は私を責めて溜飲を下げて下さい。不具にならぬ程度の責めなら、喜んでお受けいたします。私も永年、奇クを愛読していますので、奴隷としての心得は十分、判っているつもりです。(神戸市東灘区・妹尾孝一)

○ 全国の奇ク愛読の諸君、コンニチワ。といっても、私は奇クを愛読しはじめて、まだ、三年にしかならない新米です。どうかヨロシク。この欄のなごやかなフインキ

### 〓 御送金についてのお願ひ 〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もありますのでご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

に誘われて、思わず顔を出してみたくなりました。私は奇クをはじめて手にしたとき、ドキッとした。それが何故だか自分にもよくわからなかったのですが、とにかく求めていたものはコレだという気持ちが強くて、それから次第に好きになり、今では絶対に手ばなせなくなりました。他にも自分の専門方面や趣味娯楽の月刊誌を十数種、毎月求めておりますが、奇クが一番気に入っています。私は人からはインテリと呼ばれる職業についていますが、一年生のつもりでハジメテこの欄に顔を出させてもらいました。これからどうかヨロシク。

(大阪・長井アキラ)

○ 私は三十四才になる家庭の主婦です。子供が小学校に通っている頃はPTAの役員として外出することが多かったのですが、卒業してから昼間からテレビを見たりボーリングへ行ったりして暇をつぶしています。奇クは二年程前から時々見るようになり、このようなムードに大変、興味を持っています。主人は大手の建設会社の重要なポストにいて毎晩、帰りが晚くなり、外泊することも多いので

生活には余裕がありながら、その方面では、いささか不満を感じています。一度も経験はないのですが、なんとなく縛られた同性の姿がうらやましく、一度、自分も責められてみたいと考えるときがあります。でも、そう思ったあとで空恐ろしく自分のそんな考えを反省しますが、それがまた、私をくすぐるように責めへと、さそいます。身体へ傷がつかない程度に、うまく責めて下さるベテランの方

って、いらっしゃらないでしょうか。私は娘のときは地方都市ですがミス〇〇に選ばれたこともあり勤めていました百貨店のナンバーワンに選ばれ、洋服のモデルになったこともあり、今の主人に見染められて身分違いの結婚をしました。年齢が二十いくつも違いますが、ここ二、三年はその方も、すっかり御無沙汰しております。子供は一人ありますがもう中学生です。いつでも母の所へ預けることが出来ます。歩いて五分ぐらの所です。私はどちらかと申せば、きつく縛られたり痛くされたりするよりは、誌上によく出ています羞恥責めが好きです。最近では山光純さまの「パロディ花と蛇」を特に愛読させていた

いております。もしこうしたことに趣味をお持ちの方がいらっしゃったら、御一緒にボーリングでもしながらお話しあえたら楽しいと思います。(大阪市・山添清子)

○ 私は昨年から貴誌を愛読しはじめ今では、すっかりその虜になってしまっている24才になる青年です。私のような独身者には羨ましい記事や楽しい写真ばかりで、胸をわくわくさせて読んでいます。最近では文中に写真が多くなったので、殊に素晴らしい。五月号はトップの「女体吊り責め考」から写真の蛙腹を責めて見て」の福井桃子の妊婦の縛り写真は見事の一語につきる。今まで雑誌の本文に、こんな見事な写真のつたのは初めてのことだろう。私は、まだ独身なので、女性の妊娠ということに神秘的な憧れをいだいていただけだったが、妊娠という異常美には心をうたれた。塚本氏の「東京の踊子緊縛記」も、よかった。第一頁の、題字の脇の写真は気に入った。写真のとり方もよかったが、彼女の言うようにプロポーションもよい。このような若い女性が、まだ胸のふくらみも十分でないの



の門」と「パロディ花と蛇」は私の愛読する小説、本当に楽しく読ませてもらった。欲をいえば二作共、この辺で新しい展開がほしいところだ。「好美のお便り」に見せたM女の告白は貴重な資料である。どうかこれからも、こういったM女の真の心の叫びを、どんどん誌上に発表してほしい。奇くならではの特ダネだもんね。じゃ、さようなら。

(東京都北区・浅野鶴一)

貴誌、毎月楽しく読ませていただいております。私は、まだ二十六才の独身男性ですが、もう奇クを知り十年近くなります。その間M女性と、めぐり逢いたい、文通してみたいと思いつながら、まだ自分から積極的に出たことはありませんでしたが、5月号の編集部よりで前田真知子さんのことを読ませていただき、私も二十六才と、そろそろ結婚を考える頃、どうしても相手はSMに興味のある人と、その思いが頭を離れなく、同じ職場にも女性は、たくさん働いていますが、その気になれません。私が前田真知子様の希望にそえるかどうか、わかりませんがSM指数は、かなり高い方です。

最新版分譲フォト		白ロープの亀甲縛り	
うら若き美女を緊縛する		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
印画紙直接焼付極鮮明写真		深田 菊子 略号 八ろへ	
逆エビ縛り吊り上げ		逆エビ縛りで晒す美形	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろて		深田 菊子 略号 八ろす	
縄付きで愛してネ		開股開陳羞恥責め	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろせ		深田 菊子 略号 八ろは	
棒責め開股縛り		白縄の強烈縛り地獄	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろひ		深田 菊子 略号 八ろそ	
可愛い牝犬の珍芸披露		牢舎へ引き回す囚女	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろり		深田 菊子 略号 八ろい	
開股責めの種々相		菱縄縛りで責める	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろみ		深田 菊子 略号 八ろふ	
柔肌に喰い込む麻縄		M女荒尾慶子のすべて	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろし		荒尾 慶子 略号 八ろに	
海老責めで虐める女		浣腸溶液受入態勢充分	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろめ		荒尾 慶子 略号 八ろし	
責め抜かれた結末		剃毛の美女を縛る	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろに		荒尾 慶子 略号 八ろん	
股間縛りにあえぐ女		私をよく観賞してね	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろち		荒尾 慶子 略号 八ろな	
高手小手縛り首縄悦楽		ベッド上での狂態を縛る	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろと		荒尾 慶子 略号 八ろは	
脚吊り柱強烈縛り		強烈菱縄股間縛り	
大手札三枚一組 略号 四〇〇円		大手札三枚一組 略号 四〇〇円	
深田 菊子 略号 八ろも		荒尾 慶子 略号 八ろい	



といって余り残酷なことは好みません。やはり羞恥責めの方に興味があります。前田真知子様は東京の方ですね。東京と大阪、少し遠いかも知れませんが、大阪の一男性として、おつき合い出来れば誠に男らしい交際を、約束致します。  
(神戸市・本山庄三)

前田真知子様。突然、お手紙を差し上げる無礼をお許し下さい。私はあなたと同じ年令の学生ですが、昨年の一月号で初めて、あなたを拝見して以来、素晴らしいあなたの文章、及び美しい姿は私の心の中に深く灼きつけられました。本当に、あなたの文章は素敵ですね。私は、よく旅に出るのですが京都は修学旅行で訪れ、あまりに人が多いので、うんざりしていました。そのため、北海道や東北といった大自然を求めて出かけることが多かったのですが、昨年の十一月、京都を訪れ、嵯峨野の方面を回り、京都にもこんな良い所があったのかと、再認識しました。あなたの文章を読んでみると、京都には、まだまだ余り知られていない、良い所が沢山あるようです。今度、行ったときは、ぜひ、それらの場所を訪れたいと思って

います。その後、増刊号での、あなたの美しく澄んだ瞳を見て、思いは一層、深まりました。そのとき、私は決心しました。同じ東京にいる、あなたに何としてもお会いしたいと……。手がかりは学生運動の盛んな大学の国文科四年生ということだけ。それ以来、私は都内の各大学のキャンパスを歩き廻りました。しかし、あなたに会うことは出来ませんでした。やがて四月になり、あなたが東京で就職されたということを知りながら、今度は繁華街を歩き回る毎日が始まりました。新宿、渋谷、池袋、銀座と、あなたの面影を求めて、さまざま歩きました。そしてついに一年、たってしまったのです。私は、疲れはててしまいました。このたび、四月号で再び、あなたを拝見して、このお手紙を書く気になったのです。この苦勞を買って下さい。この手紙が私の心とあなたの心とを結んでくれることを願いながらペンを置きます。

(東京・中田 博)

奇クの巻頭にグラビアが掲載されていた頃から愛読しておりますが、未だ一度も読者通信に投稿したことがありませんでした。しか

## ☆芸者福竜の悦虐表情の神秘を探ぐる

本誌一月号でへ全日空機で来た女として登場した芸者福竜は、ポライタ1号本鉄三の開拓した類稀なM女性であるが、二月号でもへ縄に恋した女として誌上を賑わし、紙に焼付けた極鮮明な写真に提供し謎の女性松本たえのM性を神秘を抜抉して頂きたい。

### バイブ責めに呻く

大手札三枚一組 略号八きわV  
松本 たえ

### 両足挙げ柱宙縛り

大手札三枚一組 略号八きろV  
松本 たえ

### 強烈黒縄縛り地獄

大手札三枚一組 略号八きろV  
松本 たえ

### 責めに陶醉する女

喰いの防ぎ黒縄が無惨にも白肌に喰い込めば縄に恋した女福竜は喘ぎ泣きながら虫のように這う。

松本 大手札三枚一組 略号八きろV  
たえ  
全身をくびる位締めつける縄がこの女を、これ程までに恍惚境へ誘い込むのであらうか。見よ、この悶え悶えた末の陶醉の表情を。

### 猿轡と涕泣の瞬間

松本 大手札三枚一組 略号八きろV  
たえ

かすかに悶えていた福竜の口から、猿轡を解いた途端、激情は福竜の肢体をエビのように曲げさせた。

### 柱宙縛りと逆さ責め

松本 大手札三枚一組 略号八きろV  
たえ

完全な宙に浮かして柱に縛られた福竜の華奢な身体からは被虐のムドが溢れ頭を下にした逆立縛りの肢体からは無惨さがにじむ。

### 足を吊られた悦虐

松本 大手札三枚一組 略号八きろV  
たえ

とめどもなく慈液を流しながら縛りにもたえ抜く福竜の蠢めきを止めるために脚を吊り固定すれば上半身が更に激しい蠕動を起す。

◎以上はいずれも直接ネガから印刷紙に焼付けた極鮮明な一粒選り金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱14号天星社へお申込み下さい。



し、今回、思いきってペンをとりました。私は、ご夫婦で日頃、S Mプレイをなさっておられる方で私を仲間に加えてやろうと思われろご夫婦がおられないものかと考えております。そして、プレイの時の筋書きを考えました。それは三人で打ち合わせをして、各人の好みを加えた、お芝居をするのです。お芝居といっても、一言一句セリフを暗記して……などという固苦しいものではありません。また、その必要もないのです。大体の筋書きに従って適当にプレイすればよく、途中で気が変わればそのまま変えてしまってもよいのです。筋書きは、プレイの都度、新しいものを考え、三人の好みを満足させるように、考えております。しかし、始めから三人の好みは噛み合わないといひますので、私の好みを記しますと、私はS派ご夫婦は奥様がM派、ご主人がS派が、よろしいと考えます。ぬきさしならぬ事情で、夫の目の前で第三者にいたぶられる場合。ご夫婦で父と娘の役をやり、第三者の目前で我が娘に縄をかける父の場合など、色々の案を考えております。私は三十八才のサラリーマンで、妻はSM気にもありません。

ん。お便りがありますよう、願っております。  
(倉敷市・土井純二)  
貴誌の読者になって数か月。めくるめくような妖美に満ちた恍惚の世界が現実にあるのを知った。いても立ってもいられない気持ちというのは、こんなことをいうのであろう。日本女性の典型ともいふべき、たおやかな滑川那津子さんの白い肉体に、これまた芸術としか、いいようのない縄さばきを見せて、緊縛構図を描き出す城章夫さんなどは、Sのしあわせを一人で満喫しているようなものである。現代的な肢体に無惨な縄目を受けて、高々と両足を吊り上げられて、浅ましい開股の姿勢で、高らかに性の歓喜をうたう深田菊子さんに、本当のMの姿がうかがわれ、また、おのれのMの願いと望みを赤裸々に綴る高村浩子さんの心の叫びは、絵空事でないだけに読む者の胸を抉らずにはおかないのである。これら諸嬢に対する私の心理のそれは、人気歌手に心酔し熱狂するファンの心理に通ずるものがあるのではなからうか。四月号にロマン派生氏の手で強烈なMの肢体を晒された佐野みさ子さ

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (かみ) 四〇〇円  
東浦ひかる

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (かく) 四〇〇円  
東浦ひかる

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (かな) 四〇〇円  
東浦ひかる

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号 (かむ) 四〇〇円  
東浦ひかる

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (れち) 一五〇〇円  
梨花悠紀子

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (きか) 四〇〇円  
絹川 文代

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (いるり) 一五〇〇円  
梨花悠紀子

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (かふ) 四〇〇円  
東浦ひかる

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (ゆか) 四〇〇円  
遠藤百合子

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (ほの) 四〇〇円  
絹川 文代

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (るい) 五〇〇円  
大塚 啓子

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (るは) 六〇〇円  
大塚 啓子

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (ほは) 四〇〇円  
大塚 啓子

迸ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (ほい) 四〇〇円  
大塚 啓子

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (へき) 六〇〇円  
大塚 啓子

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (へか) 六〇〇円  
大塚 啓子

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (かる) 四〇〇円  
山原 清子

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (かへ) 一三〇〇円  
山原 清子

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (かに) 一二〇〇円  
山原 清子

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (かも) 一五〇〇円  
山原・東浦

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (かて) 一〇〇〇円  
山原・東浦



んの写真から、しばらくの間、目を離すことができなかった。今後誌上に、その姿を飾っていただきたいものである。身辺の事情が許せば、あるいは三月号で志願した砂川圭子嬢あたりには、アタックする機会もあったのではないかと残念に思っても心遣いに甘んずるしかない現状では、誌上でお目にかかるモデル諸嬢の姿で満足せざるを得ないのであるが、それだけに心情派としては、浣腸責めに苦悶し、コケシやバイブ責めの羞恥に悦虐の愛液をしたたらせるその部分が誌上では、お目にかれないのが、残念である。身辺の整理がすみ、計画中の仕事が軌道に乗ったら、実践派に早速、転向して、ぜがひでも、わが手で白い女体を組み伏せ、いたぶり、ほんろうして、気の向くままのプレイを行なってみたいものである。これが単なる夢で終わらないために三年越しの計画を推し進め、実践派転向を目指して、精々努力するつもりで、張りきっている、この頃である。(小田原市・相 洋)

○ 東京の鈴木千鶴子様。私は東京に住む三十才の男性で、SMプレイを愛好する一人です。プレイに

つきましては、若干ですが一通りの経験は持っています。貴女の、踊りで鍛えた素晴らしいプロポーションを羞恥責めにより、充分に生かしてみたいと思い、ペンをとりました。おっしゃるような複数の男性によるプレイでもSMの世界を通じまして気心の知れた仲間を何人か知っております。私個人として考えるプレイの内容は、先ず貴女を全裸にしてショーで使用する小さなバタフライ一つをつけさせ、上からマキシシーのコートを着て新宿あたりを歩かせたり、また剃毛のあとノーパンティで超ミニにノーブラジャーでデパートの買物をさせます。その他、後手に縛って犬の首輪をつけ、ミカン箱に砂をいれた中へ用便をさせます。まだまだ色々プレイを考えています。新しい責めを考えてペンの上だけでも貴女を責めてみたいですね。(東京都・Y Y生)

○ 日に日に暖かさを増す今日この頃。阿部文子様には、お変わりなく、お過ごしのことと存じ上げます。四月号で、あなたの手紙、拝見いたしました。私も以前から、異性の自由を奪い、思う存分に羞恥責め、あるいはアヌスに浣腸器

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円

遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円

遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円

山原・東浦 略号(かね)

を差し込み浣腸したいと思っておりましたが、しかし積極的に行動しなかったため、一度も私の望ん

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円

山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円

山原・東浦 略号(かち)

アヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円

山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円

山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円

山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇円

美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円

美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(ると)

だような機会に巡り合うことができませんでした。でも、あなたの呼びかけが私の目に入ってからは



違います。あなたの望んでいる差恥責め、あるいはアヌ責めなどあなたの御満足のいくまで責め苛んであげましょう。申しおくれましたが、私は今年三十才になる会社員です。昨年二月に結婚いたしました。出来れば妻も加えて花と蛇等を、真似てみたいと思っております。妻は、やや、強いMで、今年二十四になります。

（東京・川野恭介）

初めてお便り致します。奇クフアンのお姉様へ申し上げます。私は縛られ責められ、また、お姉様を縛り責めたりすることを好む二十七才の愛読者です。しかし、断わっておきますが、あまり強烈なことは好みません。私は以前より素敵なお姉様が現れないかと思っております。私は早く母に死に別れたためか、少々甘い子のです。それに、お姉様達が身につける下着など大好きです。お姉さんの匂いの残っている下着をいただいたら、どんなに幸せでしょうか。また私はA感覚が好きです。そしてお姉さんのお尻の大きなのが好きなんです。こんな私ですが楽しい一時を二人きりで過ごそう

ではございせんか。東京の近藤さん「白粉花の誘惑」私も女性でしたら、あなたのようにするでしょう。また、奇クフアンは一、二頁でもカラーグラビアを待っているのではないのでしょうか。値打ちが倍増するのでは……。

（福島・年下の男）

私は大阪といっても和歌山寄りに住んでいる二十二才の男です。私のSの強烈な欲望は日々につるばかりです。私は責めの経験はありませんが、趣向をこらし、あなたの体を心ゆくまで、いじめ恥かしめ、責めつくしたいと思っております。手首を高手小手にくくり上げ、胸に回った縄は乳房をきゅっと締めつけ、あらわになったところには流腸が、責めの手が……そして、エビ責めや吊り責めにした柔肌を撻ると、必死の拒否も、むなしく徐々に、あなたは嬉し泣きを始めます。そして、一層の責めを期待するのです。こんなことを空想しながら、色々な責具を考慮中です。ぜひ一度、プレイをしたいと思っています。

（大阪・佐野昇一）

鈴木千鶴子さま。あなたの勇敢

本誌愛読者美女緊縛姿態

膨満なる乳房責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
高村 浩子 略号 八ひらV

片足吊りにもだえる裸女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
高村 浩子 略号 八ひむV

初縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
高村 浩子 略号 八ひなV

縛りは大好きなのよ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
高村 浩子 略号 八ひれV

芳紀二十才の羞恥縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
高村 浩子 略号 八ひつV

恥かしき緊縛ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
高村 浩子 略号 八ひよV

ローソク責めの妊娠腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
富田由美子 略号 八へえV

これが妊婦縛りだ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
富田由美子 略号 八へふV

前手縛りの妊娠太鼓腹

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
富田由美子 略号 八へらV

臨月腹を縄で縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
富田由美子 略号 八へれV

稚妻の妊娠太鼓腹観賞

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
富田由美子 略号 八へあV

若妻妊婦全裸の羞らい

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
富田由美子 略号 八へうV

メロンのような腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
富田由美子 略号 八へよV

一糸まとわぬ妊婦像

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
富田由美子 略号 八へやV

強烈エビ縛り地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
谷山久美子 略号 八ひあV

麻縄開股責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
谷山久美子 略号 八ひてV

開股縛りの強烈さ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
前田真知子 略号 八ひえV

白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
前田真知子 略号 八ひまV

後手縛り吊り上げに呻く

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
前田真知子 略号 八ひのV

開股責めの醍醐味

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
前田真知子 略号 八ひこV

縄で汚す清纯乙女の肌

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
前田真知子 略号 八ひふV

エビ責めに映える柔肌

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
前田真知子 略号 八ひうV

捕われの美女は泣く

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
前田真知子 略号 八ひやV



な呼びかけを拝見し、早速お便りします。私も長年の愛読者で、あなたのような方と羞恥責めのプレイをしたいと念願しております。しかし実際には、なかなか機会もなく夢物語であります。もし、あなた一人で不安でしたら、あなたの言われるように複数でも結構です。楽しいプレイができれば、どんなに嬉しいことでしょう。想像するに、あなたの肉体は、すばらしい魅力に、富んでいるようですね。それを思い切り、いじめて上げたい、恥かしい形にさせて……考えただけで、わくわくして来ます。私は三十九才で、百人ばかりの中小企業を経営している、子供二人を持つ、まじめで平凡な父親です。

(東京・大久保克彦)

石橋君子さん、お便り拝見しました。過去に忌わしい体験をされた由。言ってみれば交通事故に遭ったようなもので、そのために人生を暗い方に考える必要はないと考えます。むしろ、SMという新しい世界を知ることが出来た貴重な経験と、割り切ってください。もし許されるなら、今すぐ大阪へ参上して、お慰めしたいと思っています。一面識もない異性に呼び

かけられて、躊躇しない女性はないと思いますが、それを乗り越えない限り、他人をプレイメイトにすることは不可能です。立場は当然として同じことです。また、プレイメイトといえども、人には好き嫌いがあるものです。私は東京の一流会社に十五年勤続するサラリーマンで三十九才、勿論、家庭持ちです。日常は温和なS性を強く秘めた紳士であると自負しています。君子さんを慈愛をこめて強烈に捻じふせてみたいと考えています。

(神奈川・山田S男生)

石橋君子様。四月号の記事、拝見しました。卒直に自分の過去を書いておられました。ずい分、勇気がいったと思います。私は三十才の男子です。プレイの経験は同性では四、五回あります。ただ相手をつ縛り命令して、ドレイとして、あつかいます。女性の方とのプレイは機会がなく、未だ果たしておりませんので、ぜひおねがいします。

(大阪・坂田三郎)

四月号M女通信の高村浩子様。地元出身である貴女の緊縛フォト通信を見て、大変意を強くし、非常な喜びを感じた次第です。小生

惨酷海老責め胡坐縛り

大手札三枚一組 略号△ひす▽ 四〇〇円

亀甲縛りと後手柱縛り

三浦 純子 略号△ひせ▽ 四〇〇円

足挙げ開股責めを拒む

三浦 純子 略号△ひん▽ 四〇〇円

臀部責めの悦楽境

大手札三枚一組 略号△ひゆ▽ 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひも▽

髪を掴んでいじめる

大手札三枚一組 略号△ひさ▽ 四〇〇円

三浦 純子

化粧室とトイレ責め

大手札三枚一組 略号△ひん▽ 四〇〇円

三浦 純子

股間縛りと臀部責め

大手札三枚一組 略号△ひゆ▽ 四〇〇円

三浦 純子

は貴女の故郷と目と鼻の先にある市に生れ在住しているが、都会地はともかくとして、当地では貴女のような被虐願望のM女を発見することは至難でした。中年の小生は若年時代、体力は有り余り、男性共通の女性遍歴はありましたがM女の経験はなく、体力の衰えを感じかけた昨今、毎号「奇ク」でM女加虐の妄想をたくましくしていた折、S傾向の小生は好奇心でなく、終生中に一度は貴女のような身近なM女に、めぐり逢いたい思いで頭が一ぱいです。小生は商業を営み、服装、容貌ともに決してよくありませんし、辻村氏や、その他の諸兄のように、SMの根源をきわめることは、むづかしいと思います。貴女の許すかぎり本誌の諸兄のように加虐のすべてをつくすつもりです。なお、本県

機会を作ってください。

(香川県・上野S生)

私は三十二才の設計士です。かねがね「奇ク」を読ませていただいておりますが、ファン諸兄諸嬢にはSまたはMの一方に徹しておられる方が大変、多いように思えます。私もSMには非常に興味を持つ者ですが、自分自身、Sなのか、Mなのか分からないのです。実は今、十才年上の女性とプレイしていますが、猛烈に責めたいときと、逆に猛烈に責められたい時があります。真剣に深くS、またはMを探究する女性、夫婦プレイ



## 次号(七月号)は五月二十五日に発売いたします

にてSM道を求めておられる方、ぜひ一度、小生を試して下さい。

(大阪市・三笠秀一)

S性M性の女性の方、心の通ったプレイをしてみましよう。

(千葉県・山田文男)

私はM性が強いと思います。だからS女性とお近づきになりたいのですが、SMプレイは、あくまでも遊戯だと割り切ってもらいたいと思います。女王様と思い、奴隷男と卑下しても、それはあくまでもプレイのこと。やはり心の底には相手に対する深い思いやりがないのでは、何の意味もありません。だから、M男といっても時にはSになり、女王様も奴隷妻の奉仕を甘受できる、心のつながりがなくてはなりません。Sだ、Mだといっても、要するにストレス解消をするのですから、悲劇的SMに偏執しては「奇ク」の存在意義がなくなります。私はM性と申しましたが、M女性にも多分に興味があります。羞恥責めに泣く、弱い女性は、世の男性の永遠の理想だと思います。また、しかしたくましく男を突きはねて生きる女性も、男の新鮮なカンフルなのです。私は今、二十七才ですが、

奇譚クラブの皆様。御清栄のこと、お喜び申し上げます。さて先般「古書通信」を見ておりますと女角力研究家として御存知の平井蒼太氏が四十六年七月二日なくなられたとの記事が、出ておりました。磯部鎮雄氏、斎藤夜居氏、等の記述によれば、氏は、滋賀県甲賀の御出身で、江戸川乱歩氏の実弟、京都市電(映画会社?)につとめていたところ、「見世物女角力誌」を自刊、昭和五年の「風俗資料」にも同名の記事があり「デカメロン」(昭和六年)に「女角力の話」、「変態黄表紙」(昭和三年)に「女角力誌考」などを発表されたもので、本名は平井通。東京で古書店「壺中庵」を営まれ、戦後の「あまとりあ」に薔薇蒼太郎の名で執筆されたのが最後のこと。享年七十一才。法名釈通願信士。以上、各本は今日、入手困難ですが「歴史公論」第五巻第五号の「見世物女角力のかんがへ」

は市中に散見します。女斗美愛好の皆様とともに、つつしんで冥福を、祈りたいと存じます。「色里三所世帯」の、浮世外エ門のように、天女たちの女角力を毎日楽しんでおられるかどうか……

(京都・雄松比良彦)

最近、ポルノ熱と共にSMを扱った週刊誌や月刊誌が溢れていますが、いずれも満足させてくれるものがなく、ただ奇クだけが楽しませてくれます。三月号で大西弘明さまが「随想と私見」の中で、私の女装フォトについて「被虐願望の女性として、責めたくなる」と述べて下さったことは、本当に嬉しく思いました。女装ものの少ない奇クの中で、私は異端者とみられていただけに、女装したときは心から女になりきって、責めも恥かしめも受ける覚悟で、恥かしい責具で責められながら、猿ぐつわの中で、声にならぬ、うめきや悲鳴をあげ羞恥と屈辱に悶えたいと願っています。SMや大の字縛り、ハリツケ、木馬責めなどの羞恥責め(女として)の言葉とフォトには思わず心がときめきます。四月号での大橋美代子さまのハリツケ、逆ハリツケのフォトには、

いちばん、ひかれました。以前にも大橋さまのハリツケ・フォトが掲載されましたが、本当にうらやましいかぎりです。私も大橋さまのような、プレイをしたいと夢みています。大橋さまのハリツケ姿に魅せられてしまいました。うらやましさを、つたない短歌に託して捧げましたが、奇クサロンで、とり上げていただきました。私としても参考にしたく、ナマでみたのですが、無理でしょうか。編集部におねがいしたいのですが、大橋さまのハリツケ、逆ハリツケのフォトを、ぜひ入手したいのです。

(大阪・中村 純)

今まで手紙を書くことに恐れを感じておりましたが、三月号の砂川圭子さんのモデル志願の記事を見て、思いきって書きました。私は二十二才のSの男です。やってみたいという願望だけは人一倍持っているのですが、プレイの経験は一度もないのです。でも、写真ハントに関しては、かなり自信を持っているつもりです。私は血を見るような激しいプレイは好みません。私が興味を示すのは、女囚です。現代、時代ものをとわず、国家権力に捕われ、捕縛も処刑も公



表される設定の女囚に、たまらない魅力を感じています。現代の手錠に腰縄、素足に草履ばきで、検察庁へ送られて行く女囚。また、時代ものの、あの拷問や、白洲での吟味は、いっそう私を昔の役人に、あこがれさせます。そんなわけでもデルさんには、完全に女囚の心境になってもらい、その罪人としての羞恥美を余すところなく写真に表現したいと、思っています。これが私の一方的な望みですが、もちろん、モデルさんの望み

(横浜市・六ッ川生)

「懷劍の妻」へ呼びかけします。井上則子さん、御結婚おめでとうございます。誌上で二回にわたり貴女の美しい文章を拝見して以来貴女の熱烈なファンに、なりました。私は少年期より女性の切腹にあこがれと強い関心とを持ち続けているものです。幸せな若奥様になられた貴女、最高の御主人をも

たれてほんとに良かったですね。貴女の美しい下腹にクッキリと浮き出た十文字のミミズ腫れ、なんとすばらしい眺めでしょう。直接見せて頂くことの不可能な私は、せめてフォトで貴女の切腹プレイそれも正座に始まり、衣服をくつろげ下腹をいとおしみ、なでさすり苦痛とよろこびにふるえ乍ら十文字腹を見事に果す迄を拝見したいものと熱願しています。どうぞ御二人いつ迄もお幸せに、貴女の記事の出来ますのを楽しみにまって

います。(神戸市灘区・丘楠二)

○

福井桃子様、M男を責めてみた  
いとこの事、小生でよかったらドレ  
イとして使用して下さい。まだ一  
度もプレイの経験がありませんの  
で、お気に召すかどうか分かりませ  
んが、お気に召すよう努力しますの  
で、ぜひお願いします。どうか、  
桃子様の意のままにドレイとして  
ご使用下さい。お声のかかるのを  
楽しみに待っています。

(名古屋・服部生)

○本誌既刊雑誌は左記、一覽表の通り  
 行の在庫にておりましたは、在庫の僅少にな  
 ものもあります。から、お早い目にな  
 御注文願います。○七月一日より郵送料共値上  
 い、全面に改訂の必要が生じ、既に刊  
 たので、御承願います。○尚、既に刊  
 号以外で、三ヵ月以上御予約の致し  
 合は送料、全額を当社にて既刊号御  
 し、ます。節は、人数小包括しての發送致し  
 注す。○

昭和40年8月号（送共三三二円）

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭  
 和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和  
 4343434242414141414141414141404040  
 年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年  
 4 3 2 1 6 1 1 0 8 7 6 5 4 2 1 12 1 1 1 0  
 月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月  
 号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号  
 送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送  
 共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共  
 三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三  
 八八八八八八八三三三三三三三三三三三三  
 二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二  
 円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円

[illegible]

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭  
和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和  
474747474746464646464646464646464545454545  
年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年  
5 4 3 2 1 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 12 11 10 8 7  
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月  
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送  
共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共  
四三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三  
三八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八  
一一一一一一一六六六二二二二二二二二二二  
円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円



AL  
V

○写真増加については大方の賛同を得られることは間違いないのですが、さなきだに狭い限定誌面ですので自然に活字面が圧迫される結果になりました。『読物不要』という極論派の人でも『意に叶うもの以外は』との条件

〔懸賞原稿募集〕

読者の皆さまが自分で親し  
本験されたことや、かくさ

れた性癖や性向について語つてみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられ、た事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお

待ちします。すべて自作の未

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二十円以上の賞金を贈呈します。

映画、雑誌、演劇、新聞、  
単行本或はその他見聞などで

特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

二千元以上の賞金贈呈。  
◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じ

ないことになっております故  
悪しからず御諒承願います。  
◎本文記事中に各種の「懸賞  
原稿募集」を致しております  
故、御応募の方は項目を御明  
記の上御送稿下さい。

巻末の通信欄は読者の皆さまのための公共の広場とし

て開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書  
 店にて一斉に発売いたしますが、入手難  
 の方は直接代金御送付の上、御予約下され  
 ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に  
 重包装して確実に発送申し上げます。局  
 の方は二十五日頃受領して下さい。

(第二十六卷第六号)  
(通刊第二百九十二号)

昭和四十七年五月二十日  
昭和四十七年六月一日  
印刷  
發行

編纂人 杉原 弘  
発行人 村田 俊  
印刷人 北原 稔夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

番便郵  
（昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可）  
（昭和四十二年四月二一日）

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として發行を企図しており、ます、關係上、十八才未満の方には、絶対販売さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。